熊本県文化財調査報告第２８５集

塔 平 遺 跡 1

－国土交通省九州横断自動車道延岡線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－

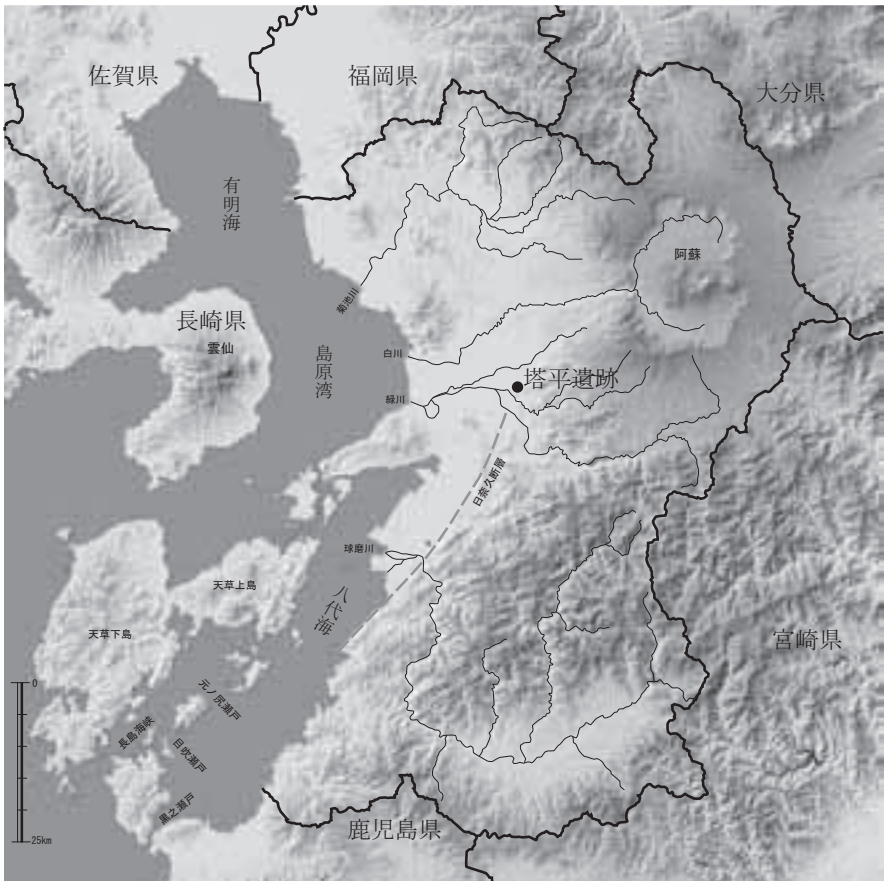
熊本県教育委員会

２０１３．３

熊本県文化財調査報告第２８５集

塔平遺跡 1

－国土交通省九州横断自動車道延岡線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－



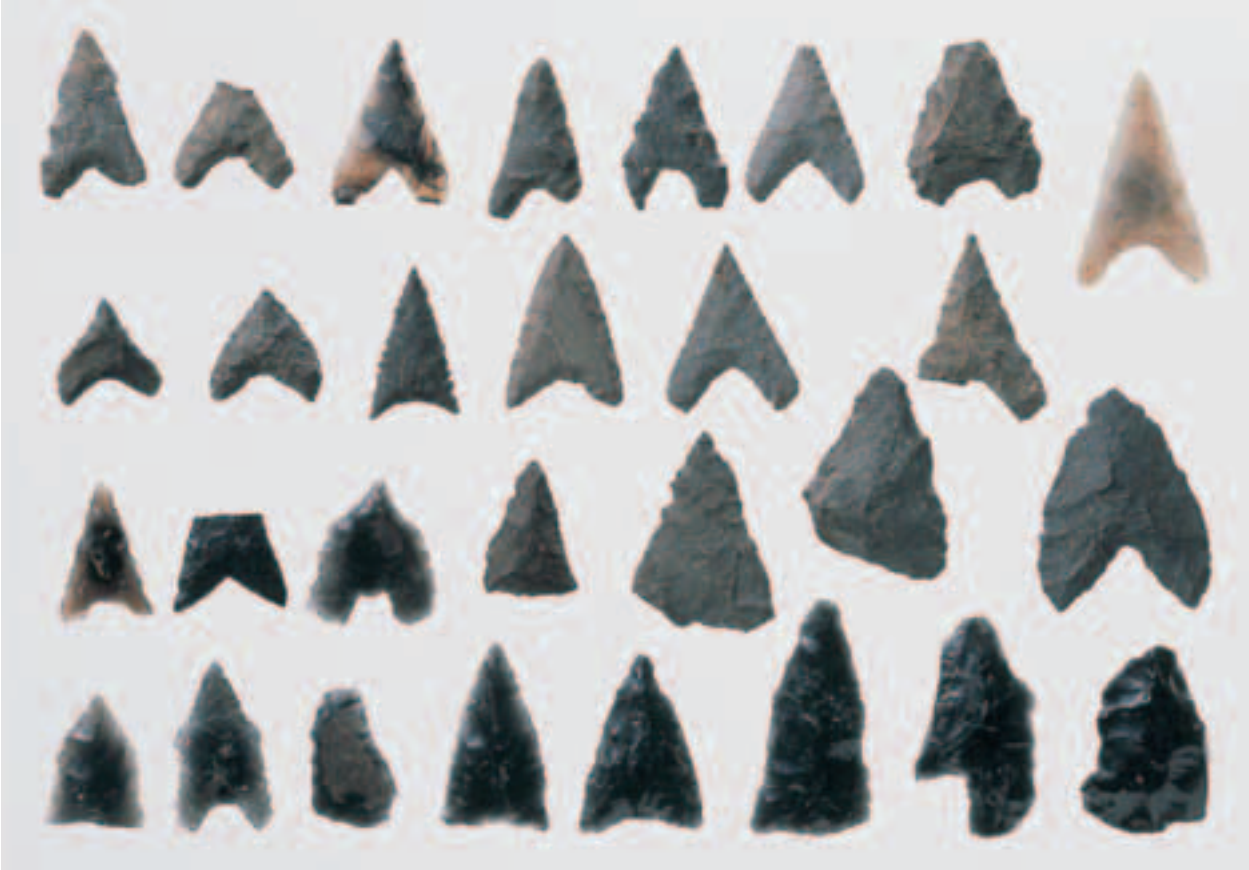
熊本県教育委員会

２０１３.３

塔平遺跡鳥瞰写真（飯田山を望む）

ＳＩ６３　出土遺物

ＳＩ７６　出土遺物



石鏃（遺構内出土）

石匙

打製石斧

磨製石斧

序　　文

熊本県教育委員会では、平成２１年度に九州横断自動車道延岡線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、上益城郡益城町小池字塔平所在の塔平遺跡の発掘調査を実施しました。

発掘調査の結果、旧石器時代の石器、縄文時代から奈良・平安時代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡、墓跡などが見つかりました。特に土器は当時の生活の様子を詳しく知ることのできる良好な資料となりました。

今回まとめました本報告書が県民の皆様を始め、多くの方々に活用され、文化財保護、ひいては地域の歴史に対する関心と理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の円滑な実施に御理解と御協力をいただいた地元の方々、並びに関係機関、そして調査に対する指導・助言をいただいた諸先生方に厚く御礼申し上げます。

平成２５年３月３１日

熊本県教育長　田崎　龍一

例　　言

1　本書は、熊本県上益城郡益城町大字小池字塔平に所在する塔平遺跡の発掘調査報告書である。

2　この調査は、国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所の依頼を受け、九州横断自動車道延岡線建設工事に伴う記録保存のための発掘調査として、平成２１年度に熊本県教育委員会が実施した。

3　現地での発掘調査は、第１章第２節に記す調査担当者が担当し、現地での遺構実測及び写真撮影も各調査担当者が行った。

4　現地での４級基準点及びメッシュ杭設置業務は株式会社十八測量設計、航空写真撮影は九州航空株式会社熊本営業所にそれぞれ委託した。

5　遺物の実測及び製図は坂井田亜耶、中村公光子、金川希が行い、一部を株式会社九州文化財研究所、株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店、株式会社有明測量開発社が行った。

6　遺物の自然科学分析は、 パリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施した。

7　鉄製品の処理は、今田里枝、大塚トシ子、小野美香、花田美佳が行った。

8　遺物の写真撮影は、村田百合子、上田佳奈子、蓮池千恵が行った。

9　本文の執筆は、水上公誠、佐藤哲朗が行った。

10　本書は、章、節、項で構成しており、各節の直接的な引用・参考文献については、各節末尾に記載した。本書全体に係る主要参考文献については、本文（第６章）末尾に一括記載した。

11　発掘資料の整理は、第１章第２節に記す整理担当者が熊本県文化財資料室（熊本市南区城南町沈目１６６７）において行い、記録及び遺物の保管も同所で行っている。

12　本書の編集は、熊本県教育庁教育総務局文化課で行い、水上公誠、佐藤哲朗、坂井田亜耶が行った。

凡　　例

1　調査区座標は、世界測地系である。

2　本書に記した方位は、方眼北を示す。

3　遺物実測図は、現地において遺構配置図１／１００、個別遺構図１／１０、１／２０で作成しているが、本書に掲載した地図、遺構実測図の縮尺は不統一であり、各頁に明記した。

4　遺物の実測は、原寸で行っているが、本書に掲載した遺物実測図の縮尺は不統一であり、各頁に明記した。

5　土色は「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所　色標監修）による。

6　発掘遺構は、遺構の種別を示す以下の記号と、一連の番号の組み合わせにより表記した。
ＳＩ（竪穴建物）、ＳＢ（掘立柱建物）、ＳＫ（土坑）、ＳＹ（集石）、ＳＤ（溝）、ＳＸ（不明遺構）、Ｐｉｔ・ＳＰ（小穴）

7　出土遺物の実測図において、須恵器については断面を黒で塗色した。土師器甕等の内面の調整で、ヘラケズリは矢印で方向を示した。

8　調査の過程において、番号を１から付していない遺構もある。また、遺構と認められないと判断した番号については空き番としている。そのため各遺構番号の最後の番号が、本報告書における遺構の検出数とは限らない。

本文目次

巻頭図版
序文
例言・凡例
目次

第１章　序章
　第１節　調査に至る経緯 ･･･　１
　第２節　発掘調査と整理作業等の体制 ･････････････････････････････････　１
　第３節　発掘調査の経過 ･･･　３

第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境 ･･･　１１
　第２節　歴史的環境 ･･･　１１

第３章　調査の方法
　第１節　調査方法 ･･･　１７
　第２節　層序 ･･･　２０

第４章　調査の成果
　第１節　調査１区 ･･･　２１
　第２節　調査３区 ･･･　３９
　第３節　遺物観察表 ･･･　１６７

第５章　自然科学分析（パリノ・サーヴェイ株式会社）･･････････････････　１９１

第６章　総括 ･･･　１９４

写真図版
あとがき
報告書抄録

挿図目次

第１図　塔平遺跡と周辺の遺跡
（１／５００００）・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３
第２図　塔平遺跡試掘・確認調査位置図及び
トレンチ土層断面図（１／３０００）１８
第３図　調査区グリッド設定図（１／７００）１９
第４図　塔平遺跡基本土層柱状図・・・・・・・・・・・・２０
（調査１区）
第５図　ＳＫ・ＳＤ遺構実測図（第２面）１・・２２
第６図　ＳＫ・ＳＤ遺構・出土遺物実測図
（第２面）２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２３
第７図　ＳＫ・ＳＰ出土遺物実測図（第２面）２５
第８図　ＳＩ１・２遺構・出土遺物実測図・・・・２７
第９図　ＳＢ１・２遺構実測図・・・・・・・・・・・・・・２９
第１０図　ＳＫ・ＳＤ遺構実測図（第１面）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３２～３３
第１１図　ＳＫ・ＳＸ・ＳＰ出土遺物実測図（第１面）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３５
第１２図　遺構外出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・３６
（調査３区）
第１３図　遺構配置図（縄文時代）・・・・・・・・・・・３８
第１４図　ＳＫ６１遺構実測図・・・・・・・・・・・・・・３９
第１５図　ＳＹ５・６遺構・出土遺物実測図・・４１
第１６図　ＳＹ７・８遺構実測図・・・・・・・・・・・・４２
第１７図　ＳＩ９４・９９遺構実測図・・・・・・・・４４
第１８図　ＳＩ９４出土遺物実測図・・・・・・・・・・４５
第１９図　ＳＩ９４・９９出土遺物実測図・・・・４６
第２０図　ＳＩ９９出土遺物実測図・・・・・・・・・・４７
第２１図　ＳＩ１０６遺構・出土遺物実測図・・４８
第２２図　ＳＩ１０７遺構・出土遺物実測図・・４９
第２３図　ＳＩ１１０遺構・出土遺物実測図・・５０
第２４図　ＳＩ１１３遺構・出土遺物実測図・・５１
第２５図　ＳＩ１１５・１１６遺構・出土遺物
実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５２
第２６図　ＳＩ１１８遺構・出土遺物
実測図１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５３
第２７図　ＳＩ１１８出土遺物実測図２・・・・・・５４
第２８図　ＳＩ１１９遺構・出土遺物
実測図１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５５
第２９図　ＳＩ１１９出土遺物実測図２・・・・・・５６
第３０図　ＳＩ１２０遺構・出土遺物実測図・・５７
第３１図　ＳＩ１２１遺構・出土遺物実測図・・５８
第３２図　ＳＩ１２２遺構実測図・・・・・・・・・・・・５９
第３３図　埋設土器（ＳＫ５２）出土状況・遺物
実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６０
第３４図　埋設土器（ＳＫ５４）出土状況・遺物
実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６１
第３５図　埋設土器（ＳＫ５８）出土状況・遺物
実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６２
第３６図　埋設土器（ＳＫ５９）出土状況・遺物
実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６３
第３７図　ＳＫ６８遺構・出土遺物実測図１・・６５
第３８図　ＳＫ６８出土遺物実測図２・・・・・・・・６６
第３９図　遺構配置図（弥生時代）・・・・・・・・・・・６７
第４０図　ＳＩ６３遺構・出土遺物実測図１・・６８
第４１図　ＳＩ６３出土遺物実測図２・・・・・・・・６９
第４２図　ＳＩ６３出土遺物実測図３・・・・・・・・７０
第４３図　ＳＩ７６・１１４遺構実測図・・・・・・７１
第４４図　ＳＩ７６出土遺物実測図１・・・・・・・・７２
第４５図　ＳＩ７６出土遺物実測図２・・・・・・・・７３
第４６図　ＳＩ７６出土遺物実測図３・・・・・・・・７４
第４７図　ＳＩ７６出土遺物実測図４・・・・・・・・７５
第４８図　ＳＩ７６出土遺物実測図５・・・・・・・・７６
第４９図　ＳＩ７７（内ＳＫ７２）・１１２
遺構・出土遺物実測図１・・・・・・・・・・・７８
第５０図　ＳＩ７７（内ＳＫ７２）・１１２
出土遺物実測図２・・・・・・・・・・・・・・・・・７９
第５１図　ＳＩ７７（内ＳＫ７２）・１１２
出土遺物実測図３・・・・・・・・・・・・・・・・・８０
第５２図　ＳＩ７８遺構・出土遺物実測図１・・８１
第５３図　ＳＩ７８出土遺物実測図２・・・・・・・・８２
第５４図　ＳＩ７８出土遺物実測図３・・・・・・・・８３
第５５図　ＳＩ８５遺構・出土遺物実測図１・・８５
第５６図　ＳＩ８５出土遺物実測図２・・・・・・・・８６
第５７図　ＳＩ８０遺構・出土遺物実測図１・・８７
第５８図　ＳＩ８０出土遺物実測図２・・・・・・・・８８
第５９図　ＳＩ８１・８６遺構・出土遺物
実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９１
第６０図　ＳＩ９３遺構実測図・・・・・・・・・・・・・９２

第６１図　ＳＩ８２・８７・８８遺構・出土遺物
実測図１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９３
第６２図　ＳＩ８２・８７・８８出土遺物
実測図２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９４
第６３図　ＳＩ８２・８７・８８出土遺物
実測図３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９５
第６４図　ＳＩ８３遺構・出土遺物実測図１・・９６
第６５図　ＳＩ８３出土遺物実測図２・・・・・・・・９７
第６６図　ＳＩ８３出土遺物実測図３・・・・・・・・９８
第６７図　ＳＩ８３出土遺物実測図４・・・・・・・・９９
第６８図　ＳＩ８４遺構・出土遺物
実測図１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１００
第６９図　ＳＩ８４出土遺物実測図２・・・・・・１０１
第７０図　ＳＩ８４出土遺物実測図３・・・・・・１０２
第７１図　ＳＩ９０遺構・出土遺物実測図・・１０３
第７２図　ＳＩ９５遺構実測図・・・・・・・・・・・・１０４
第７３図　ＳＩ９８遺構・出土遺物
実測図１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０５
第７４図　ＳＩ９８出土遺物実測図２・・・・・・１０６
第７５図　ＳＩ９１遺構・出土遺物実測図・・１０７
第７６図　ＳＩ９２・１０２遺構・出土遺物
実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０８
第７７図　ＳＩ１０３・１０９遺構・出土遺物
実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０９
第７８図　ＳＩ１０８遺構・出土遺物
実測図１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１０
第７９図　ＳＩ１０８出土遺物実測図２・・・・１１１
第８０図　遺構配置図（古代以降）・・・・・・・・・１１２
第８１図　ＳＩ７５遺構実測図・・・・・・・・・・・・１１３
第８２図　ＳＩ７５出土遺物実測図・・・・・・・・１１４
第８３図　ＳＩ７９遺構・出土遺物実測図・・１１５
第８４図　ＳＩ８９遺構実測図・・・・・・・・・・・・１１６
第８５図　ＳＢ４遺構・出土遺物実測図・・・・１１７
第８６図　ＳＢ５遺構・出土遺物実測図・・・・１１８
第８７図　ＳＢ６遺構・出土遺物実測図・・・・１１９
第８８図　ＳＢ７遺構実測図・・・・・・・・・・・・・１２０
第８９図　ＳＫ４０・４１・４２遺構・出土遺物
実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２１
第９０図　ＳＫ４３遺構・出土遺物実測図・・１２２
第９１図　ＳＫ４５・４８・４９遺構・出土遺物
実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２３
第９２図　ＳＫ５６遺構・出土遺物実測図・・１２４
第９３図　ＳＤ・ＳＸ実測図・・・・・・１２６～１２７
第９４図　ＳＤ・ＳＸ断面図・・・・・・・・・・・・・１２８
第９５図　ＳＤ出土遺物実測図１・・・・・・・・・・１２９
第９６図　ＳＤ・ＳＸ出土遺物実測図２・・・・１３０
第９７図　ＳＤ・ＳＸ出土遺物実測図３・・・・１３１
第９８図　ＳＫ３６・３７・３８・３９
遺構・出土遺物実測図・・・・・・・・・・１３４
第９９図　ＳＫ４４・４６・５１
遺構・出土遺物実測図・・・・・・・・・・１３５
第１００図　ＳＫ５０・５３・６０・６２・６３
遺構・出土遺物実測図・・・・・・・・１３６
第１０１図　ＳＫ６４・７０・７１・７３・７５・
７６遺構・出土遺物実測図・・・・１３８
第１０２図　ＳＫ７７遺構・出土遺物
実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３９
第１０３図　Ｐｉｔ配置図・・・・・・・・・・・・・・・１４０
第１０４図　Ｐｉｔ出土遺物実測図・・・・・・・・１４１
第１０５図　遺構外出土遺物実測図１・・・・・・１４３
第１０６図　遺構外出土遺物実測図２・・・・・・１４４
第１０７図　遺構外出土遺物実測図３・・・・・・１４５
第１０８図　遺構外出土遺物実測図４・・・・・・１４６
第１０９図　遺構外出土遺物実測図５・・・・・・１４７
第１１０図　遺構外出土遺物実測図６・・・・・・１４８
第１１１図　遺構外出土遺物実測図７・・・・・・１４９
第１１２図　遺構外出土遺物実測図８・・・・・・１５０
第１１３図　遺構外出土遺物実測図９・・・・・・１５３
第１１４図　遺構外出土遺物実測図１０・・・・１５４
第１１５図　遺構外出土遺物実測図１１・・・・１５５
第１１６図　遺構外出土遺物実測図１２・・・・１５６
第１１７図　遺構外出土遺物実測図１３・・・・１５７
第１１８図　遺構外出土遺物実測図１４・・・・１５８
第１１９図　遺構外出土遺物実測図１５・・・・１５９
第１２０図　遺構外出土遺物実測図１６・・・・１６０
第１２１図　遺構外出土遺物実測図１７・・・・１６１
第１２２図　遺構外出土遺物実測図１８・・・・１６２
第１２３図　遺構外出土遺物実測図１９・・・・１６３
第１２４図　遺構外出土遺物実測図２０・・・・１６４

表目次

第１表　塔平遺跡周辺遺跡一覧 …………………………………… １４～１６
第２表　遺物観察表 …………………………………………… １６７～１９０

巻頭目次

1　塔平遺跡鳥瞰写真（飯田山を望む）
2　ＳＩ６３出土遺物
3　ＳＩ７６出土遺物
4　石鏃（遺構内出土）
5　石匙
6　打製石斧
7　磨製石斧

写真目次

図版１　１区ＳＫ３４遺物出土状況
１区ＳＩ１完掘状況
１区ＳＩ２完掘状況
１区ＳＢ１完掘状況
１区ＳＢ２完掘状況
１区完掘状況
３区ＳＫ６１燃焼部検出状況
３区ＳＫ６１完掘状況
図版２　３区ＳＹ５検出状況
３区ＳＹ６検出状況
３区ＳＹ７検出状況
３区ＳＹ８検出状況
３区ＳＩ９４完掘状況
３区ＳＩ９９完掘状況
３区ＳＩ１０６完掘状況
３区ＳＩ１０７完掘状況
図版３　３区ＳＩ１１０完掘状況
３区ＳＩ１１３完掘状況
３区ＳＩ１１５完掘状況
３区ＳＩ１１６完掘状況
３区ＳＩ１１８完掘状況
３区ＳＩ１１９完掘状況
３区ＳＩ１２０完掘状況
３区ＳＩ１２１完掘状況
図版４　３区ＳＩ１２２完掘状況
３区ＳＫ５２検出状況
３区ＳＫ５２完掘状況
３区ＳＫ５４検出状況
３区ＳＫ５４完掘状況
３区ＳＫ５８検出状況
３区ＳＫ５８完掘状況
３区ＳＫ５９埋設土器内埋土半裁状況
図版５　３区ＳＫ５９完掘状況
３区ＳＫ６８遺物出土状況
３区ＳＫ６８完掘状況
３区ＳＩ６３完掘状況
３区ＳＩ７６遺物出土状況
３区ＳＩ７７白色粘土検出状況
３区ＳＩ７７完掘状況
３区ＳＩ７７掘方完掘状況
図版６　３区ＳＩ７７内ＳＫ７２遺物出土状況
３区ＳＩ７７内ＳＫ７２完掘状況

３区ＳＩ７８完掘状況
３区ＳＩ８０完掘状況
３区ＳＩ８１完掘状況
３区ＳＩ８２遺物出土状況
３区ＳＩ８３完掘状況
３区ＳＩ８４完掘状況
図版７　３区ＳＩ８５完掘状況
３区ＳＩ８６完掘状況
３区ＳＩ８７完掘状況
３区ＳＩ８８完掘状況
３区ＳＩ９０完掘状況
３区ＳＩ９１完掘状況
３区ＳＩ９２完掘状況
３区ＳＩ９３完掘状況
図版８　３区ＳＩ９５遺物出土状況
３区ＳＩ９８完掘状況
３区ＳＩ１０２完掘状況
３区ＳＩ１０３完掘状況
３区ＳＩ１０８完掘状況
３区ＳＩ１０９完掘状況
３区ＳＢ４完掘状況
３区ＳＢ５完掘状況
図版９　３区ＳＢ６完掘状況
３区ＳＢ７完掘状況
３区ＳＩ７５床面検出状況
３区ＳＩ７５完掘状況
３区ＳＩ７９完掘状況
３区ＳＩ８９かまど粘土検出状況
３区ＳＩ８９完掘状況
３区ＳＫ４３遺物出土状況
図版１０　３区ＳＫ４３完掘状況
３区ＳＫ４５完掘状況
３区ＳＫ４８完掘状況
３区ＳＫ４９遺物出土状況
３区ＳＫ４９完掘状況
３区ＳＫ５６遺物出土状況
３区ＳＫ５６完掘状況
３区ＳＤ３１完掘状況
図版１１　３区ＳＤ３２完掘状況
３区ＳＤ３３完掘状況
３区ＳＤ４０完掘状況
３区ＳＸ１完掘状況
３区ＳＫ３６完掘状況
３区ＳＫ３７完掘状況
３区ＳＫ３８完掘状況
３区ＳＫ３９完掘状況
図版１２　３区ＳＫ５０完掘状況
３区ＳＫ５３完掘状況
３区ＳＫ６２完掘状況
３区ＳＫ６４完掘状況
３区ＳＫ７０完掘状況
３区ＳＫ７５完掘状況
３区ＳＫ７６完掘状況
３区ＳＫ７７完掘状況
図版１３　縄文土器（早期）１
縄文土器（早期）２
図版１４　縄文土器（轟式）１
縄文土器（轟式）２
縄文土器（轟式）３
縄文土器（轟式）４
縄文土器（轟式）５
図版１５　縄文土器（船元式）
縄文土器（北久根山式）
縄文土器（晩期）
ＳＫ５２　埋設土器
ＳＫ５４　埋設土器
図版１６　ＳＫ５８　埋設土器
ＳＫ５９　埋設土器
ＳＫ６８出土遺物
縄文土器（晩期）
縄文土器（組織痕）１
縄文土器（組織痕）２
縄文土器（組織痕）３
打ち欠き土器・円盤形土製品
図版１７　ＳＩ７６出土　壷
ＳＩ７７出土遺物
ＳＩ７６・７７出土　焼成粘土塊
ＳＩ７７内ＳＫ７２出土　高坏
ＳＩ７７内ＳＫ７２出土遺物
図版１８　ＳＩ７８出土遺物

ＳＩ８５出土遺物
ＳＩ８２・８７・８８出土遺物
ＳＩ８２・８７出土　高坏
ＳＩ８３出土遺物
図版１９　ＳＩ８４出土遺物１
ＳＩ８４出土遺物２
ＳＩ８４出土遺物３
ＳＩ８５出土遺物
ＳＩ８６出土遺物
ＳＩ９０出土遺物
ＳＩ９１出土遺物
ＳＩ９８出土遺物
図版２０　ＳＩ１０８出土遺物
ＳＩ１１２出土遺物
免田式土器
紡錘車（土製）
土錘
土製品
ＳＩ７５出土遺物
ＳＫ４１出土遺物
図版２１　ＳＫ４３出土遺物
ＳＫ４５出土遺物
ＳＫ４９出土遺物
ＳＫ５６出土遺物
須恵器（坏・椀）
図版２２　土師器（坏・椀）
黒色土器（坏・椀）
図版２３　須恵器（蓋）
土師器（甕）
墨書土器（須恵器坏高台内）
墨書土器（黒色土器坏高台内）
須恵器（鉢）
須恵器（甕）
円盤形土製品（打ち欠き土器）
瓦（九曜紋）
図版２４　布目瓦凸面（縄目）
布目瓦凹面（布目）
旧石器（ナイフ形石器・三稜尖頭器）
石錐
石銛
二次加工剥片
石核１
石核２
図版２５　石核３
石核４
磨石（表）
磨石（右側面）
磨石（裏）
磨石（左側面）
石製品
勾玉
図版２６　玉類
石鏃１
石鏃２
石鏃３
石鏃４
図版２７　石鏃５
石鏃６
石鏃７
石鏃８
石鏃９
石鏃１０
石鏃１１
異形石器
図版２８　石庖丁
打製石斧（横刃）
片刃石斧
磨製石斧（遺構内出土）
打製石斧（遺構内出土）
ＳＫ６８出土　打製石斧
円盤形石斧
十字形石器・分銅形石器
図版２９　ＳＩ８６・８１出土　鉄鏃
鉄鏃
手斧
ＳＩ９０出土　摘鎌
ＳＩ９０出土　素環頭刀子

第１章　序章

第１節　調査に至る経緯

熊本県教育委員会は、国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所から九州横断自動車道延岡線建設工事に伴う「埋蔵文化財の予備調査について（依頼）」の提出を受け、平成１９年１１月５日～９日、２９日、１２月１２日～１７日、及び平成２０年１１月２８日に塔平遺跡とその周辺で埋蔵文化財の試掘・確認調査を実施した。

試掘・確認調査の結果、埋蔵文化財の存在を確認したため、国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所長に対して、調査成果と発掘調査の必要性を通知した。

その後、九州横断自動車道延岡線建設予定地について、１区分は平成２１年２月９日付け国九整熊工事第８６号、３区分は平成２１年６月１８日付け国九整工事第３５号で文化財保護法第９４条第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の通知について」が国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所長から益城町教育委員会を経由して熊本県教育委員会に通知された。

その後、１区分は平成２１年２月２３日付け国九整熊工事第１０６号、３区分は平成２１年６月１８日付け国九整熊工事第３６号で「埋蔵文化財発掘調査について（依頼）」が国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所から発掘調査の依頼と承諾書の提出を受け、それぞれ平成２１年４月１３日付け教文第１２８号、平成２１年７月６日付け教文第９６６号で文化財保護法第９９条第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を提出し、発掘調査を開始することとした。

なお、３区は九州横断自動車道延岡線事業（１，６３４㎡）を国土交通省、九州縦貫自動車道嘉島ＪＣＴ（仮称）事業（３２９㎡）を西日本高速道路株式会社が管轄する部分であったが、文化課では同一の遺跡であることから同時に発掘調査を実施した。そのため、本報告書は国土交通省管轄区の整理報告に加え、西日本高速道路株式会社が管轄する部分も参照記録として掲載することとした。

記録保存のための発掘調査は、１区は平成２１年５月１２日～平成２１年８月２７日、３区は平成２１年７月１５日～平成２２年３月２０日の期間で行った。

整理・報告書作成業務は、平成２２年４月１日から開始し、平成２５年３月３１日に終了した。

第２節　発掘調査と整理作業等の体制

１　発掘調査及び整理作業等の体制

本工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、熊本県教育委員会が主体となって実施している。また、調査に伴い関係機関の方々より各種の助言、指導も得ている。（役職は当時）

（１）予備調査（平成１９年度）

調査主体　　熊本県教育委員会
調査責任者　梶野　英二（文化課長）
調査総括　　江本　直　（課長補佐）
　　髙木　正文（課長補佐・文化財調査第一係担当）
調査事務局　宗村　士郎（教育審議員兼課長補佐）
　　高宮　優美（主幹兼総務係長）、梶原　健一（参事）、高松　克行（主任主事）
調査担当　　坂口　圭太郎（参事）
　　水上　正孝（文化財保護主事）
　　坂井田　端志郎（主任学芸員）

遠山　宏　（非常勤職員）
横田　光智（非常勤職員）

（２）本調査（平成２１年度）
調査主体　熊本県教育委員会
調査責任者　米岡　正治（文化課長）
調査総括　木﨑　康弘（課長補佐）
村﨑　孝宏（文化財調査第一係長）
調査事務局　宗村　士郎（教育審議員兼課長補佐）
辛川　雅弘（主幹兼総務係長）、山田　京子（参事）
調査担当　坂井田　端志郎（主任学芸員）
水上　公誠（文化財保護主事）
木下　勇　（非常勤職員）
島浦　健生（非常勤職員）
吉留　広　（非常勤職員）

（３）整理作業（平成２２年度）
整理主体　熊本県教育委員会
整理責任者　小田　信也（文化課長）
整理総括　木﨑　康弘（課長補佐）
村﨑　孝宏（文化財調査第一係長）
坂田　和弘（参事・文化財資料室長）
整理事務局　宗村　士郎（教育審議員兼課長補佐）
元嶋　茂　（課長補佐・総務係担当）、山田　京子（参事）、松島　英治（主任主事）
整理担当　水上　公誠（文化財保護主事）
梅田　亜耶（非常勤職員）

（４）整理作業（平成２３年度）
整理主体　熊本県教育委員会
整理責任者　小田　信也（文化課長）
整理総括　村﨑　孝宏（文化財調査第一係長）
坂田　和弘（参事・文化財資料室長）
整理事務局　川上　勝美（課長補佐）
水元　敬浩（高校教育課主幹兼総務係長）、山田　京子（参事）、松島　英治（主任主事）
整理担当　水上　公誠（文化財保護主事）
梅田　亜耶（非常勤職員）

（５）整理作業（平成２４年度）
整理主体　熊本県教育委員会
整理責任者　小田　信也（文化課長）

整理総括　　西住　欣一郎（課長補佐）
　　村﨑　孝宏（文化財調査第一係長）
　　後藤　克博（文化財資料室長）
整理事務局　川上　勝美（課長補佐）
　　中津　幸三（課長補佐・総務・助成担当）、稲本　尚子（参事）、天草　英子（主任主事）
整理担当　　水上　公誠（文化財保護主事）
　　佐藤　哲朗（文化財保護主事）
　　坂井田　亜耶（非常勤職員）

２　謝辞

現地での発掘調査及び整理作業においては、下記の機関及び多くの方々から御指導御協力をいただきました。ここにその御芳名を記して深く感謝の意を表します。（順不同、敬称略）

地元の方々、七滝中央小学校児童と先生方、木﨑康弘（装飾古墳館長）、坂口圭太郎（装飾古墳館学芸課長）、池田朋生（装飾古墳館参事）、国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所、西日本高速道路株式会社熊本高速道路事務所、益城町教育委員会、御船町教育委員会、嘉島町教育委員会、阿蘇市教育委員会、御船警察署

第３節　発掘調査の経過

１　調査１区

発掘調査はまず、調査区南東部側から北西側に向かって重機により表土を除去した。調査事務所から調査区までの足場が無かったことから、除去した表土を用いて足場を成形した。その後、株式会社十八測量設計に委託し、４級基準点とメッシュ杭を設置した。メッシュの設定区画は５ｍ×５ｍとした。グリッドは東西方向（西から東へ）をアルファベット、南北方向（北から南へ）を数字で示した。北西に位置する調査３区の調査を踏まえ、グリッドは調査３区からの通しグリッドとした。東西方向のアルファベッドは、Ｙ→Ｚ→ａ→ｂと大文字表記のＺ以降は、小文字表記とした。

造成を受けたことにより遺物包含層は残っておらず、表土除去後、直ちに遺構検出作業を行った。検出作業後、順次遺構掘削を行い、平面図及び断面図、遺構配置図の実測作業、遺物取り上げ、写真撮影を行った。なお、平面直角座標は、世界測地系を使用している。

２　調査３区

調査区南側から北側に向かって重機により表土を除去した。その後、株式会社十八測量設計に委託し、４級基準点とメッシュ杭を設置した。メッシュの設定区画は５ｍ×５ｍとした。グリッドは１区と同様、東西方向（西から東へ）をアルファベット、南北方向（北から南へ）を数字で示した。

遺物包含層が良好に残っており、人力による遺物包含層の掘削後、古代、弥生時代、縄文時代の遺構検出作業を行った。検出作業後、簡易な遺構配置図を作成し、順次遺構掘削を行い、平面図及び断面図の実測作業、遺物取り上げ、写真撮影を行った。また、縄文時代早期の遺構の検出ができる下層まで掘削し、調査を行った。なお、平面直角座標は、世界測地系を使用している。

調査１区、及び調査３区の経過は次のとおりである（調査日誌より抜粋）。

調査日誌抄

塔平遺跡１区　２００９年（平成２１年度）

５月１２日　重機で表土掘削を行う。調査区の北側と、南側の表土を掘削。

５月１３日　表土掘削２日目。調査区の中央、南側を掘削。南側は耕作土（表土）、畝場整備土、ローム層の層序である。西側にピットを多数確認し、２間×３間の掘立柱建物跡も検出できそうである。遺物量は非常に少ないが、調査区東側に土器が固まって埋まっている箇所があった。

５月１４日　表土掘削３日目。削平が激しく、中央残りの箇所を掘削するも、表土下はローム層であった。遺物は１点も確認できず、遺構の確認もできなかった。表土剥ぎは終了。遺構が残っている可能性がある箇所は調査区北側のみとなった。

５月１８日　作業員さん方に集合してもらい、作業を開始する。土のう作りをしてもらい、調査区を囲った。また、スロープとなっている足場にも土砂流出を防ぐために土のうで押さえた。

５月１９日　表土除去状況写真を撮影した。

５月２０日　北側、遺構の残りがよさそうな箇所を確認し、撮影した。トレンチを３箇所あけ、堆積状態を確認後、客土を掘削する。

５月２２日　北東側の客土の掘削を行う。トレンチをさらに深く掘り下げ、土層の確認を行った。

５月２５日　東、南東側の客土の掘削を行う。

５月２６日　東、南東側の客土の掘削を行う。坂井田主任学芸員（隣接区調査担当者）に土層を見てもらい、アカホヤ（２次）であることを確認。また、南東へと伸びる黒い土も溝の埋土ではないかとのこと。トレンチ１を南西へ約５メートル伸ばし、堆積状況を確認する。

５月２８日　南東側の撹乱を掘削する。いくつか遺構の可能性がある箇所があった。東側の黒褐色土が溝かどうかを確認するためトレンチをあける。トレンチでは、礫混じりのロームの堆積を確認。１m掘り込んでも、土質は変わらない。遺構の検出はローム層で行う必要がある。

５月２９日　調査区外周の実測を行う。北側撹乱（イモ穴）の掘削を行う。西側の撹乱（大小の穴が交互に並ぶ穴）は、地元の方への聞き取りでイモ穴ではなく苗穴（植穴）であるとのこと。東側の溝と思われる箇所にトレンチをあける。

６月１日　西側の撹乱を掘削。２か所、イモ穴下より遺構（ピット）を確認できた。ＳＸ１の実測と撮影を行う。

６月２日　西側の撹乱を掘削。トレンチの土層面の実測、撮影を行った。ＳＸ１の掘削に入る。場所によっては、アカホヤ（２次）の層も見えており、ここから遺構の検出が必要となる。遺物もかなりの量が上がってきたが時代にはバラつきが見られた。

６月４日　ＳＸ１の掘削を行う。下には、大きな樹痕とみられる痕跡が見つかった。ＳＸ１内には、時代にバラつきのある遺物が出土した。近世以降の圃場整備土で間違いないと思われる。遺構検出のための掃除を行った。遺構（ピット）は多く見られたが竪穴建物跡とみられるものは検出できなかった。北部の溝状の撹乱にトレンチを入れた。２０㎝程下からは、ローム土が見えていた。この箇所のローム土が、圃場整備時の東端としていたのではないかと推測する。

６月９日　調査区東側の掃除と遺構検出を行った。ピット（弥生～古代）も多数検出でき、撮影も行った。中央部の溝（ＳＸ１）の掘削を行う。溝自体は、新しいものなので除去した後、遺構の検出が必要となる。北西側の溝状の撹乱も掘削した。遺物は、ほとんど上がらなかった。１５～２０㎝のローム面から遺構の検出が必要となる。

６月１１日　溝状撹乱とＳＤ１の掘削を行った。ＳＸ１は溝幅が、まだ広いことが確認され、明日以降拡幅しなければならない。ＳＤ１は掘削が終了した。予想通り、掘立柱建設跡の柱穴（ピット）が確認された。ほかにもピットが１基検出された。遺物も少なく、作業員さん方の、掘削作業もスムーズに進んでいる。

６月１５日　ＳＤ１の埋土掘削、溝幅の拡幅を行う。砂利が溝の端に多く埋まっていたが、溝自体は新しく、すべて取り上げた。瓦や近世の陶器類が出土した。宮崎参事によると、東側から西側に伸び

る、耕作地内の道であるとのこと。北側にも広範囲に撹乱を再確認した。（イモ穴等の断面）東側端の整備の為の土を除去した。

６月１６日　ＳＤ１の実測（断面、平面）と撮影（土層断面、完掘状況）を行った。北側と北東側に、再精査をかけたところＳＤ１のすぐ北側に、重なるように、もう１つの溝があることが分かった。ＳＤ２とする。

６月１７日　ＳＤ２の掘削を行う。ＳＤ１と同様、近世のものと思われる。ＳＢ１（掘立柱建物跡）の検出状況を写真におさめた。ＳＢ２（掘立柱建物跡）の検出状況を写真におさめた。ＳＢ１、ＳＢ２共に、２間×３間であった。ＳＢ２は北向きであった。柱穴の掘削も行った。ここ数日の乾燥で、土が硬くなっている。水を大量にまく必要がある。

６月１８日　ＳＢ１とＳＢ２の掘削（半）と土層断面の撮影を行った。ＳＢ１では、（Ｐ６とＰ１２）の切り合いが当初と逆であることが判った。ＳＢ２では、（Ｐ１１とＰ１４）のうちＰ１４を欠番とした。ＳＰ（東側）の掘削を開始した。端に近い箇所は樹痕も多い。遺物はほとんど上がらなかった。礫混じりのローム層であり、礫がたくさん入っており、遺構かどうかの判別も難しい。

６月１９日　東側のピット（ＳＰ、ＳＫ）を掘削した。樹痕跡がみられるものが多い。ベルト左、南東側の掃除をしたところ、ピットが約２０、住居跡と見られる箇所が確認できた。溝（ＳＤ）のようなものも検出できた。切り合いも見られた。このピット、住居跡を「遺構検出状況」として撮影した。

６月２４日　前回、南東側の掃除をした箇所の北西側も掃除をしたところ、４つの遺構（ピット３、土坑１）を検出した。これを、「遺構検出状況」として撮影した。東側のピット（ＳＰ）の配列を確認したが、並ぶ箇所は、確認できなかったため掘削を開始。表面に土器が見えているところも確認できたため、明日再度精査をする必要がある。（縄文の住居らしきものも確認）ＳＢ２の断面の実測が終了したために、柱穴を掘削。ＳＢ１の平面の実測が終了したために、明日は、（完掘→完掘写真）を行う。

６月２５日　ＳＢ１の平面の実測が終了しておらず、これを終わらせてからＳＢ２の平面へと移った。ＳＢ１は完掘したので、次回は「完掘状況写真」として収める予定。ＳＰの半裁、完掘を進めた。住居等との関連も見られないものを掘削した。遺物はほとんど上がってこなかった。寒冷紗を立てた。ＳＫを実測、写真を撮る前に、誤って完掘してしまった。

７月２日　午前中の時間を使って、調査区囲み付近、事務所から調査区までの足場の草刈りを行った。東側、角のところの壁が、昨日までの雨で崩れてしまっていた。落ちた土を使って土のうを作り、上からビニールシートをかけてかためた。ＳＢ１、ＳＢ２の完掘状況写真を撮影した。両遺構とも①南→②東→で撮影した。

７月３日　午前中、雨のために１時間ほど中断する時間帯があった。ほかの現場と連絡を取り合い、態度決定をすることができた。ＳＤ２の土層断面の記録と掘削を忘れていた。急きょ「ＳＤ２土層断面」→「ＳＤ２断面図」→「ＳＤ２ベルト掘削」→「ＳＤ２完掘状況写真」を行った。今後このようなことがないよう、次回の作業内容等、密な確認が必要であると感じた。調査区中央部付近を再度、遺構検出を試みたが柵列等は確認できなかった。

７月７日　ＳＰ、ＳＫ、ＳＩの掘削を行った。ＳＩに関しては、３軒の切り合いと考えていたが精査してみたところ、２軒であった。ベルトを設定し、トレンチをあけて調査を開始した。ＳＰの中に柱穴と見られるものもあった。ＳＰ等の掘削と実測の進歩に差がある。寒冷紗を２張立てた。日差しが午前中強かったが、涼しい中での作業であった。今後とも活用したい。

７月９日　ＳＫ５の土層断面の実測と撮影を行った。４層に分かれていることが確認できた。北東側のＳＰから石鏃が出土した。ＳＩ１は竪穴住居であるかどうか、疑わしいためＳＸとして調査していくことにした。検出状況の写真を撮り終えたため、

ベルトを残して掘削を開始。日差しが強く、寒冷紗を立てようとしたが、風が強くて倒れてしまった。

７月１３日　ＳＸ２の掘削→遺物出土状況を行ったが撮影を午後にしようと、アミコン、土のう、ブルーシートで遺物を守ったが、午後、ブルーシートをコンテナごと引きずり、遺物（土器片）が散乱。今後このようなことがないように作業員さん方への周知、確認を徹底していく。ＳＫ７周辺には、土器片が多数出土している。

７月１４日　トレンチの土層断面写真を撮るための掃除を行った際、東端に土器が多数、断面に見えていた。しかし、整備を受けたと思われる層に入っているため、まぎれて入り込んだ可能性が高い。北側のＳＰに柱穴と見られる箇所が３つ程あった。列をなしそうなところもあるため、慎重に掘り進めたい。（なお、縄文の遺構に達する箇所もある）

７月１６日　トレンチの土層断面の実測を行った。明日以降、土色確認と掘削を行う。調査区北側端までＳＰの掘削が迫った。掘削と実測の進歩のバランスがとれていない。トレンチのベルトの掘削を行った。撹乱（圃場整備の際の土）であるため、出土した遺物（土器片、石器等）の時代にばらつきがあった。一括して取り上げた。ＳＫ８は、土層断面→完掘まで行ったが、遺物等は出土しなかった。西側の掃除を行ったところ、赤色化した部分が、ローム面から確認できたためＳＫ９とした。（中にＳＰも確認でき、遺物も土器片だが見えていた。）トレンチの色付けも完了。先日の雨のため、ベルトが崩れかけている。

７月２８日　足場の土砂崩れを補修、ビニールシートをかけた。北側ＳＰ掘削を行い、うち２つが柱穴の可能性がある。明日、断面写真の撮影を行う。ＳＩ１の土層断面の写真、実測を行った。ほとんど削平されており、埋土も２層しか確認できない状態であった。

７月２９日　北側のＳＰの検出、掘削を行う。この箇所では計４か所の柱穴（ＳＰ２２７、２３８、２４７、２５３を確認している。ＳＤ１付近でＳＫ１０を検出した。

７月３０日　ＳＩ１の完掘を行った。ＳＩ２はベルト設定後、トレンチの掘削。ＳＩ１と同様、大きく削平を受けているが、遺構ほぼ中央部に炉跡と思われる箇所も確認できた。調査区北東部にＳＤ３を検出。ＳＫ１２、１３を検出し調査する。

７月３１日　ＳＫ１２、１３の完掘。ＳＰ２９５は柱穴であることを確認した。ＳＩ２の調査では北東部に弥生後期の土器（甕か）が出土している箇所を確認した。炭化材が多く確認できるため、焼失住居の可能性もある。

８月３日　ＳＰの調査がほぼ完了した。ＳＩ２の床面検出状況の撮影を行った。炭化物が柱穴と考えられる付近に多く散っていた。焼失住居の可能性が高くなった。

８月４日　ＳＩ２の遺物出土状況を撮影。ベッド状遺構は確認できなかった。

８月５日　古代、弥生期の調査もほぼ終了し、完掘写真撮影に向けた清掃を開始。ＳＩ２の北西側のＳＰは柱穴と考えられる。

８月６日　前日に引き続き清掃を行った後、完掘写真を撮影した。

８月７日　ＳＩ２の完掘写真を撮影した。調査区北東側の精査を開始し、縄文時代の遺構の検出を開始した。土坑が６基検出された。

８月１０日　縄文時代の遺構検出状況の撮影を行う。ＳＤ４も検出した。

８月１１日　検出した土坑、ＳＰの調査を開始。ＳＫ２１、２５からは縄文（晩期）の土器が出土する。

８月１３日　土坑の断面状況の実測と撮影を行う。

８月１７日　ＳＰ、土坑の掘削、断面状況の実測と撮影を進める。ＳＫ３４は土器片が顔を出している。ＳＤ４は完掘状況の撮影を行った。

８月１８日　ＳＫ３４の土器は組織痕が鮮明に残っており、口縁部から胴部の残存であろう。おもしろい資料である。

８月１９日　ＳＰ、土坑の遺物出土状況の実測と撮影を中心に進めた。ＳＫ３５は土師器、須恵器片が多く確認できる。古代のものと判断した。

８月２６日　ＳＰ、土坑の遺物出土状況の実測と撮

影を行う。

８月２７日　ＳＰ、土坑の遺物出土状況の実測と撮影を行う。空撮に向けた掃除を行う。

８月２８日　翌日の空撮に向けて、調査区全体の掃除を進める。作業員との作業は本日で終了。

８月２９日　九州航空株式会社による空撮を行う。昼過ぎに完了した。

塔平遺跡３区　２００９年（平成２１年度）

７月１５日　表土剥ぎ１日目

７月１６日　表土剥ぎ２日目

７月１７日　表土剥ぎ３日目。調査区東側の壁切り。西側に田んぼとの境に１ｍの犬走りを設定する。

７月２３日　表土剥ぎ４日目

７月２７日　交通くらし安全課発掘体験。100 人以上が参加。

７月２８日　表土剥ぎ５日目。表土剥ぎは終了した。表土剥ぎが終了した範囲を東側から西側へ清掃。併せて、東側トレンチ掘削。西側の壁切り、段差切りを行った。

７月２９日　北側 60㎝幅トレンチ掘削。

７月３１日　壁側トレンチは７層まで掘削する。

８月４日　表土剥ぎ取り残し範囲を掘削する。表土剥ぎの取り残しを明確にするために全体を上段、下段に分けて清掃を行った。重機による破壊坑を２つ清掃。残土を取り除く。

８月５日　清掃し表土の取り残し範囲を確定。暑いので水分補給をいつも通り呼びかけた。

８月６日　清掃後、表土の取り残し範囲を確定させて掘り下げを行った。南側上段部は、南から北に向かって精査を行い、グリッド別、層位別に遺物の取り上げを行った。

８月７日　ＳＸ１周辺掘削。下段の一部を精査。４区（西日本高速道路側）から続くＳＸ１の周辺を掘り下げる。プランを明確にする。下段（北側）の一部を精査し、グリッド別、層位別に遺物を取り下げる。日差がきついので、３時以降は精査から掘削への体制をとる。

８月１１日　ＳＸ１埋土①層掘削。南側精査。ＳＤ２０の石の取り上げ、ベルトの両脇のトレンチから掘削を行う。①層は圃場整備で埋められたと考えられるため、昭和の遺物が出土する。

８月１７日　ＳＸ１の掘削を行う。ＳＸ１のトレンチを優先的に実施した。略測図（１／100）を実測。

８月１８日　ＳＸ１はサブトレンチ壁面で分層。分層終了後に南側から北側に移動して掘削を継続する。

８月１９日　引き続きＳＸ１①層の掘削を行った。状況は変わらず。

８月２４日　ＳＸ１の掘削を継続して行う。

８月２５日　引き続きＳＸ１の掘削を継続して行う。

８月２６日　ＳＸ１、ＳＤ３０、３１の掘削を行う。切り合いは、ＳＤ３１→ＳＤ３０→ＳＸ１の順と思われる。

８月２７日　ＳＸ１は③④層の掘削を行い、溝の壁出しを行う。ＳＤ３０、３１の掘削。

８月２８日　ＳＸ１、ＳＤ３０、３１の掘削を行う。ＳＤ３２の掘削を開始。イモ穴（撹乱）の掘削を開始した。

８月３１日　ＳＸ１①②層掘削。ＳＤ３１①層掘削。併せてイモ穴も掘削する。ＳＤ３１土層断面図と３区の略測図（１／１００）の実測

９月１日　ＳＤ３０、３１、ＳＸ１の掘削を行う。ＳＸ１は西側の③④層を掘削後、壁出し。

９月２日　ＳＤ３０、３１、ＳＸ１の掘削を行う。ＳＸ１は分層後、土層断面図（１／２０）の実測。

９月７日　ＳＤ３１、３２、ＳＸ１の掘削を行う。ＳＸ１完掘平面図（１／２０）、ＳＤ３１とＳＸ１土層断面図（１／２０）、ＳＤ３１とＳＤ３２土層断面図（１／２０）の実測を行う。

９月８日　ＳＤ３１、３２、ＳＸ１の掘削を行う。いずれも残り少しで完掘。

９月９日　草刈りを実施。

９月１０日　ＳＤ３１、３２の掘削を行う。ほぼ完掘。

９月１１日　ＳＤ３２④層掘削、ＳＤ３１掘削。ＳＤ３２完掘平面図（１／２０）、ＳＤ３１完掘平面図（１／２０）、ＳＸ１北側ベルト土層断面、ＳＤ３１、３２の土層断面図の実測を行う。

９月１５日　ＳＤ３１、３２掘削。

９月１６日　ＳＤ３１④⑤層掘削。ＳＸ１①～④層掘削。Ｔ２４・２３、Ｕ２３・２４グリッドの３層を掘削。ＳＤ３１の完掘平面図の実測。ＳＤ３１、３２の完掘状況撮影を行う。グリッド掘削では、南側を中心に、高台付の土師器坏、須恵器甕片が多く出土。須恵器は赤焼けが多い。

９月１７日　ＳＸ１の完掘状況の撮影。ＳＤ３２の集石部を実測。

９月１８日　ＳＤ３０の掘り残しの掘削。３層掘削を行う。併せて、ＳＤ３２の集石部、ＳＤ３０、ＳＸ１の測量を実施。

９月２４日　３層の掘削。併せて、ＳＤ３０、ＳＸ１の実測を行う。

９月２５日　ＳＸ１、ＳＤ３０、３１の溝状遺構の残りを掘り切る。併せて、ＳＸ１の測量を行う。調査区南側３層の掘削。

１０月２０日　ＳＸ１完掘平面図が終了。南側は４層の掘削に入る。遺物は多い。弥生の石庖丁、紡錘車（土製）が出土。調査区南壁際にかまどらしき、焼土粘土混じりの土を確認する。

１０月２１日　南側４層の掘削。南東側は５層暗褐色土（アカホヤ２次堆積）上面までの掘削を終了。精査前だが住居プランの確認が可能となる。包含層出土の土器はバラエティに富む。縄文晩期、弥生後期、古代。ただし、弥生後期は少量。早期押型文土器（山型文）のほか、石庖丁１点、玉（丸玉）１点が出土。

１０月２２日　４層の掘削。

１０月２３日　調査区南側の精査を行う。古代住居跡、大型ピット、弥生住居跡が複数確認できた。古代の大型ピットは直径１m以上の円形。掘立柱建物になる可能性を含む。

１０月２７日　調査区西側の掘削を行う。２ヵ所でかまど粘土らしきものを検出。周辺からは須恵器の蓋の破片が数点出土した。北側に向かって厚く３層が堆積している。埋甕らしき土器集中部も２ヵ所確認。

１０月２８日　Ｐ２０～Ｓ２０グリッド周辺を精査。溝状遺構、住居跡、ピットを検出。住居跡は古代と縄文か。溝状遺構は古代以降と思われる。また、Ｑ１９グリッド周辺で２間×３間の掘立柱建物跡を確認。柱穴間は２mの等間隔である。

１０月２９日　３層、４層の掘削と５層上面での精査を併行して行う。昨日確認した掘立柱建物で間違いない。２間×３間で、柱間寸法はおよそ２mである。やや西に振れる。

１０月３０日　本日も包含層掘削と遺構検出を併行して行う。北東中央にも掘立柱建物を確認。２間×３間で間違いない。

１１月２日　南側で遺構にかからない出土遺物の取り上げを行う。グリッド別、層位別。北側では、３層、４層の掘削を行う。出土土器は、縄文晩期、弥生後期、古代が中心である。

１１月４日　北東部は３層の掘削を行い、北西部の一部で精査を行う。住居跡が３軒切り合う。弥生後期の住居跡を古代の住居跡が切っているのか、判然としない。一部はかまどの可能性がある。

１１月５日　精査と掘削を併行して行う。出土遺物の量が多く、遺物整理も時間をかけて行った。竪穴建物跡は思っていたよりも少ない。２～３軒切り合う形で検出できる。

１１月６日　５層上面で検出した住居跡の掘削調査を開始。ＳＩ７５、７６とする。ＳＩ７５では明瞭な硬化面を検出。貼り床になるかは不明。住居跡中央のかまど粘土は埋没過程のものと判明する。

１１月８日　現場公開を行う。２７名の参加があった。午後から通常の調査。調査は順調。掘立柱建物跡は真北ではなく少し西側に振れる。

１１月１２日　ＳＩ７５、７６、７７の掘削を行う。ＳＩ７５はかまど付き古代の住居跡で間違いない。規模は小さいが床面、かまどとも残存状況は良好。住居跡、掘立柱建物跡、溝等の遺構掘削に備えて、図面の割り付けを行った。

１１月１３日　略測図の作成と、検出ピットの分類を行う。

１１月１６日　ＳＩ７５は、ベルトを残し床面検出。かまど無し住居跡は、出土土器から弥生後期と考えてよさそう。ＳＩ７７のかまどのみ住居軸が判然としない。

１１月１８日　坂田文化財資料室長が来跡される。ＳＩ７７のかまどについて指導を受ける。かまどの可能性があるが、未使用の可能性、もしくは何かを覆っている可能性があるとのこと。ＳＩ７６の出土土器は弥生後期とのこと。ＳＢ４の柱痕は半裁により要確認することとした。ＳＩ７５によって切られているＳＩ８２は弥生後期と思われる。

１１月１９日　ＳＢ４はピットの半裁を開始。断面ではＰ２以外は柱痕確認できず。ＳＩ８３は③層中で弥生後期の土器が多量に出土。甕形土器のまとまりか。周囲に炭化材も散乱している。ＳＤ３３は東側（ＳＤ３１）に向かって傾斜している。埋土が明らかに異なり、遺物の時期も違う。ＳＩ７５は硬化面（貼床）が明瞭。東側へ通路状に伸びる。

１１月２６日　御船町立七滝中央小の児童が来跡する。（国土交通省熊本河川国道事務所主催「九州横断自動車道見学会」）

１１月２７日　ＳＤ３３の写真撮影を行う。２ヵ所に小判形の落ち込みが明確である。

１１月３０日　ＳＤ３３のエレベーション図を作成した。２段で東側に向かって落ちていることが明確になった。一度東側を埋めた後に、再度利用している可能性がある。３層での検出時にＳＤ３２等に切られていること、埋土の土色が全く違うことから、時期は異なるものと思われる。

１２月１日　土層断面図、平面図、遺物出土状況の実測作業を中心に行う

１２月２日　ＳＢ４の土層断面図作成。Ｐ８とＰ２で柱痕と考えられる黒色土がある。黒色土下には、硬く締まった土があり、柱当たりと想定される。ＳＩ８３の遺物取り上げは終了。

１２月３日　ＳＢ４は完掘状況を撮影。写真前清掃中に南東隅に、縄文時代晩期の円形住居跡と思われる箇所を確認した。大きさは４～５ｍ前後。遺物も少量ではあるが顔を出している。

１２月４日　ＳＩ９０はＳＩ８４との間でトレンチ掘削。西側に明確に立ち上がりあり。ＳＢ４は調査を終了。

１２月７日　ＳＩ８４は遺物取り上げを行う。弥生後期の甕である。ＳＢ６、７はピットの半裁を行う。

１２月８日　ＳＩ８４の柱穴の半裁。いずれも非常に浅い。Ｐ１～Ｐ４のみほぼ同じ深さとなる。立ち上がりも確認できるので柱穴とした。住居跡内で並ぶことはなかった。ＳＩ８３もピットは１ヵ所。こちらは深い。西側土層断面で見ると床面を掘り抜き掘方までいっている可能性がある。

１２月９日　ＳＩ８４、ＳＢ７の写真撮影を行う。

１２月１１日　ＳＩ９０はベルトを残しての掘削を終了した。ＳＢ６、７は隅ピットで柱痕を確認した。

１２月１４日　古代、弥生の住居跡調査がいきづまる。縄文の調査に本格的にかかる必要あり。トレンチ調査を開始する。縄文住居跡の調査は１軒のみ行い埋土は１層のみで断面に明確な床面はない。

１２月１５日　ＳＩ９４の縄文住居を調査開始。１０～２０㎝程で床面となるが硬化面は確認できない。遺物の出土量も少ない。縄文土器の多い所、地山と埋土の色調、混入物の違いなどを頼りとする。

１２月１６日　ＳＢ６、７の調査は完掘平面図のみとなった。３間×２間で並ぶ。隅の柱穴に柱当たりあり。縄文住居は埋土１５㎝程度である。硬化面、炉跡も確認できない。昨年度の４区と同じ状況である。

１２月１７日　弥生の竪穴住居跡の調査を進める。ＳＩ７６の出土状況図も平行して進行させる。

１２月２２日　弥生の竪穴住居跡の調査を進める。ＳＩ８１、７８の東側を再度精査を行う。ＳＫ３６、３９の完掘を行う。

１２月２４日　土坑を中心に調査を進める。併せて、縄文住居検出のための精査を行う。

１２月２５日　遺構の実測、及び遺物の取り上げ、写真撮影を中心に行う。

１月５日　遺構の実測、及び遺物の取り上げ、写真撮影を中心に行う。

１月６日　埋甕の調査を行う。ＳＩ９０の西側にＳＩ９８の炉跡と思われる遺構が残っている。

１月７日　縄文住居跡、埋甕の調査を進める。ＳＩ

１０８の①層下で硬化面を確認する。サブトレンチで見える埋土２層は掘方埋土かも知れない。

1月１２日　少人数で作業を行う。南側上段の再精査を行い、遺構の見落としがないか探る。

1月１４日　住居跡の撮影、埋甕の調査を行う。

1月１５日　住居跡の撮影、埋甕の調査を行う。ＳＩ７９はかまど燃焼部の再確認を行う。

1月１９日　住居跡の撮影、埋甕の調査を行う。イモ穴（撹乱）の掘削も行った。

1月２１日　ＳＩ９８は土層ベルトの掘削を層位別に行い、遺物を取り上げる。取り上げ終了後、床面の精査を行い、ピットの確認を行う。

1月２６日　写真前清掃を行う。

1月２７日　写真前清掃を完了するも、業者の到着時刻が遅れ、写真撮影は中止した。

1月２８日　調査区北東側から遺構周辺を残して、５層暗褐色土の掘削を開始。

1月２９日　昨日に引き続き北東部の掘削を行う。溝の陸橋部の掘削も行う。

2月2日　写真前清掃を行う。

2月3日　空中写真撮影を実施。撮影後は北東側、南側の５層（アカホヤ２次堆積）の掘削を本格的に行う。

2月4日　北東側と南側の５層掘削を中心に行う。埋甕の実測も行う。

2月5日　５層の掘削を行う。

2月8日　南側の５層掘削終了後、精査を行う。炉穴の確認を行うが、確認はできなかった。ＳＩ１０８の掘方掘削も継続して行った。

2月１０日　北東側、北西側で５層の掘削を行い、完掘した土坑、竪穴住居跡の実測も引き続き行った。

2月１２日　北西側、北東側の５層掘削を中心に行う。併せて、溝陸橋部を６層上面レベルまで下げる。

2月１６日　５層掘削を終了した箇所で６層掘削に突入する。現状では、炉穴が確認できていない。６層掘削を行い、炉穴の検出を目指すこととした。

2月１８日　南側で一部精査を行い、住居跡の見落としを確認。縄文後晩期の条痕土器片が出土している。ＳＩ１２１とし、調査を開始する。

2月１９日　５層と６層の掘削を引き続き行い、精査をするも炉穴は検出できない。ＳＩ１２１はＳＸ１に半分近くを壊されている。ＳＸ1寄りの箇所で、硬化面と思われる範囲を検出する。かなり硬化しており、硬化面なのかどうか疑わしい。ＳＸ1の影響なのかは分からないが、ＳＸ1の他の箇所には、このような硬化した箇所は確認できない。

2月２２日　５層と６層の掘削を中心に行う。６層は遺物がほとんど出土していない。ＳＩ１２１は、柱穴及び炉と考えられる遺構を検出。残存状況と推定プランを考慮しても、ＳＩ１２１に伴う柱穴と炉であることは間違いない。

2月２５日　５層と６層の掘削を中心に行う。

2月２６日　雨天で現場を中止する。１０時より西日本高速道路株式会社と現地協議を行う。

3月2日　南側は精査を一部で行うが遺構は検出されなかった。

3月3日　引き続き５層と６層の掘削を行う。新たな遺構、遺物はほとんどない。ＳＫ７０の埋土は１層のみである。層中央にやや焼土が強い箇所があるのが特徴的である。

3月8日　現場終了が近づいてくる。本日も引き続き５層と６層の掘削を継続して実施した。

3月１１日　５層と６層の掘削を継続して実施した。

3月１２日　本日も引き続き５層と６層の掘削を実施するも、遺構、遺物は確認できない。

3月１６日　引き続き５層と６層の掘り下げを進める。炉穴は無さそうである。半裁確認中であったＳＫ７４は遺構ではないと判断した。

3月１７日　ＳＩ９８の実測を終える。縄文時代早期の遺構は確認できなかった。

3月１８日　明日の写真前清掃に備えて、周辺の片付けを実施。

3月１９日　最後の完掘写真前清掃を行う。

3月２０日　空中写真撮影を行い、無事に終了する。

3月２９日　熊本県文化財資料室へ機材、遺物の運搬を行う。一部埋戻し。

3月３０日　プレハブ内備品等撤去。

3月３１日　プレハブ、倉庫等の撤去。調査終了。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

塔平遺跡が所在する熊本県益城町は、北緯３２度４７分、東経１３０度５０分に位置する。東西約１１ｋｍ、南北約１３ｋｍ、面積は６５．６４ｋ㎡を測り、熊本県のほぼ中央に位置する。行政域としては上益城郡に属し、その北部に位置する。西は上益城郡嘉島町、西から北西に熊本市、東は阿蘇郡西原村、南は上益城郡御船町と接している。東部・南部は九州山地から続く、城山（４８０．４ｍ）、朝来山（４６９．５ｍ）、船野山（３０７．８ｍ）、飯田山（４８１．２ｍ）などが山塊を形作る。北部は広大な益城台地が広がり、西部は熊本平野に連なり、その東域をなす。

本遺跡の東側には、益城町から八代郡氷川町へと至る国道４４３号線が継走しており、交通の要衝となっている。熊本県庁にも程近く、熊本県の玄関口である阿蘇くまもと空港、九州縦貫自動車道、益城熊本空港インターチェンジ等を有し、交通網や立地条件の良さから、近年は著しく人口が増加するとともに、開発工事も進んでいる。

益城町には、益城町津森の金山川沿い及び木山川沿いに巨礫層「下陣礫層」、金山川沿いに泥層「津森層」が分布する。益城台地の標準的な土層は、表土以下、黒色土（クロボク）、暗褐色土（アカホヤ）、ブロック状の土（ニガ土）、黄褐色土（ローム層）が堆積している。

第２節　歴史的環境

（１）旧石器時代

益城町では、旧石器を調査目的とした発掘調査による遺跡は確認されていない。しかし、本遺跡では、かつて細石器・スクレーパー・剥片・礫器が表面採集されている。益城町東部に位置する阿蘇郡西原村の西原Ａ遺跡・西原Ｆ遺跡においては、細石器から姶良丹沢火山灰を包含する層の下位まで石器が確認されている。また、同郡山都町の北中島西原遺跡では、本調査において三稜尖頭器・ナイフ形石器が出土している。今後益城町においても、新たな遺跡発見の可能性があると考えられる。

（２）縄文時代

縄文時代の遺跡は、早期から晩期まで数多く存在している。櫛島遺跡は、昭和４７～４８年に九州縦貫自動車道建設に伴い発掘調査され、早期押型文土器や塞ノ神式土器のほか、石槍・石斧なども出土している。石蒸し料理をした跡と考えられる集石遺構や長楕円形の炉跡がヒトデの様な形で重なって検出されている。また、古閑遺跡･古閑北遺跡では、晩期終末期段階の黒色磨研土器が多量に出土しており、「古閑式土器」として標識土器となっている。

（３）弥生時代

弥生時代の遺跡は、当遺跡が所在する小池に集中している。特に、八反田遺跡（大字砥川）から出土した甕棺は、弥生前期の板付式土器と縄文的採色の強い夜臼式土器が使用されており、当時の縄文時代から弥生時代への移行期の時代相を反映したものとみられる。

秋永遺跡（大字小池）では弥生時代の竪穴住居跡と思われるものが検出され、免田式土器を含む弥生時代後期の土器が多量に出土している。また、弥生時代中期と思われる甕棺墓も検出されている。その他にも、環濠の一部と思われるＶ字形の溝や、弥生時代後期の水田遺構も検出されている。

平田遺跡（大字平田）では、弥生時代後期の甕形土器がほぼ完全な形で出土している。宮園遺跡（大字木山）では、大型甕棺（須玖式）や小型の甕棺（黒髪式）なども出土している。また、東無田遺跡（大字島田）や下原遺跡（大字島田）では、弥生時代中期の甕棺が出土している。

当遺跡に近い二子塚遺跡（嘉島町）は、弥生時代後期の環濠集落として知られており、竪穴住居跡が多数調査されている。

（４）古墳時代

益城町には畿内政権と深く関わりのある人物の墳墓と考えられるものは存在しない。しかし、木山川沿いの湿地帯の開田による水稲耕作と、台地上の畑作物を生産基盤とした在地の大小の支配者階層の人々の墳墓が見られる。

前期から中期にかけての墳墓は、大字小池の台地上、大字広崎から大字寺迫に至る台地の縁辺部、大字福原、大字上棟台地上などに分布している。このうち発掘調査されたものは少ないが、昭和４７年に養豚場堆肥置場の造成の際に発見された塔の平石棺がある。調査されていないため詳細は不明だが、前期の石棺と考えられている。他にも、鏡を副葬していた寺迫の城の本古墳をはじめとする円墳、大字小池の秋永遺跡にみられる方形周溝墓などがある。

中期の後半には、装飾壁画のある井寺古墳（円墳・横穴式石室）が、隣接する嘉島町に造られている。大字宮園にある小柳遺跡では、古墳時代前期から中期頃を中心とした集落跡が検出されている。

後期になると熊本平野東部の勢力の中心は、隣接する御船町の台地上へ移行したとみられ、そこには装飾壁画をもつ今城大塚古墳（前方後円墳・横穴式石室）が造られている。益城町大字小池の鬼塚古墳、大字井寺の遠見塚古墳、大字福原の鬼ノ窟古墳（いずれも円墳で横穴式石室）は、その勢力下にある各地域豪族の墳墓と考えられる。また、県道熊本・高森線に沿った大字寺迫から大字田原にかけての崖面と、大字福原地区には、後期の横穴墓群もみられる。

（５）歴史時代

奈良時代・平安時代になると、律令制度の導入に伴い、益城町の多くは益城郡に属し、条里は大きな河川を中心とした自然条件に作用されている。御船川・緑川・木山川（赤井川）の３流域にみられ、益城町の条里遺構は木山川を中心にして、北は益城台地縁辺部から、南は船野・飯田両山麓まで、流れに沿って東西に展開している。嘉島町の二子塚遺跡からは、１８棟の掘立柱建物跡と３条の柵列が検出されている。

当遺跡の東側に位置する飯田山上には、飯田山常楽寺がある。天台宗の末寺で、益城・御船地域の名刹である。諸説あるが、『元享釈書』には「飯田の真俊」の名があり、平安時代末期、真俊により開基されたと一般的に言われている。常楽寺は天台宗・真言宗・浄土宗に禅宗を加えた四宗の学問と修行道場としての性格をもつ寺院であったと考えられ、後に天皇家の菩提寺となる京都泉涌寺を開基した僧である月輪大師・俊芿（がちりんだいし・しゅんじょう）を輩出している。

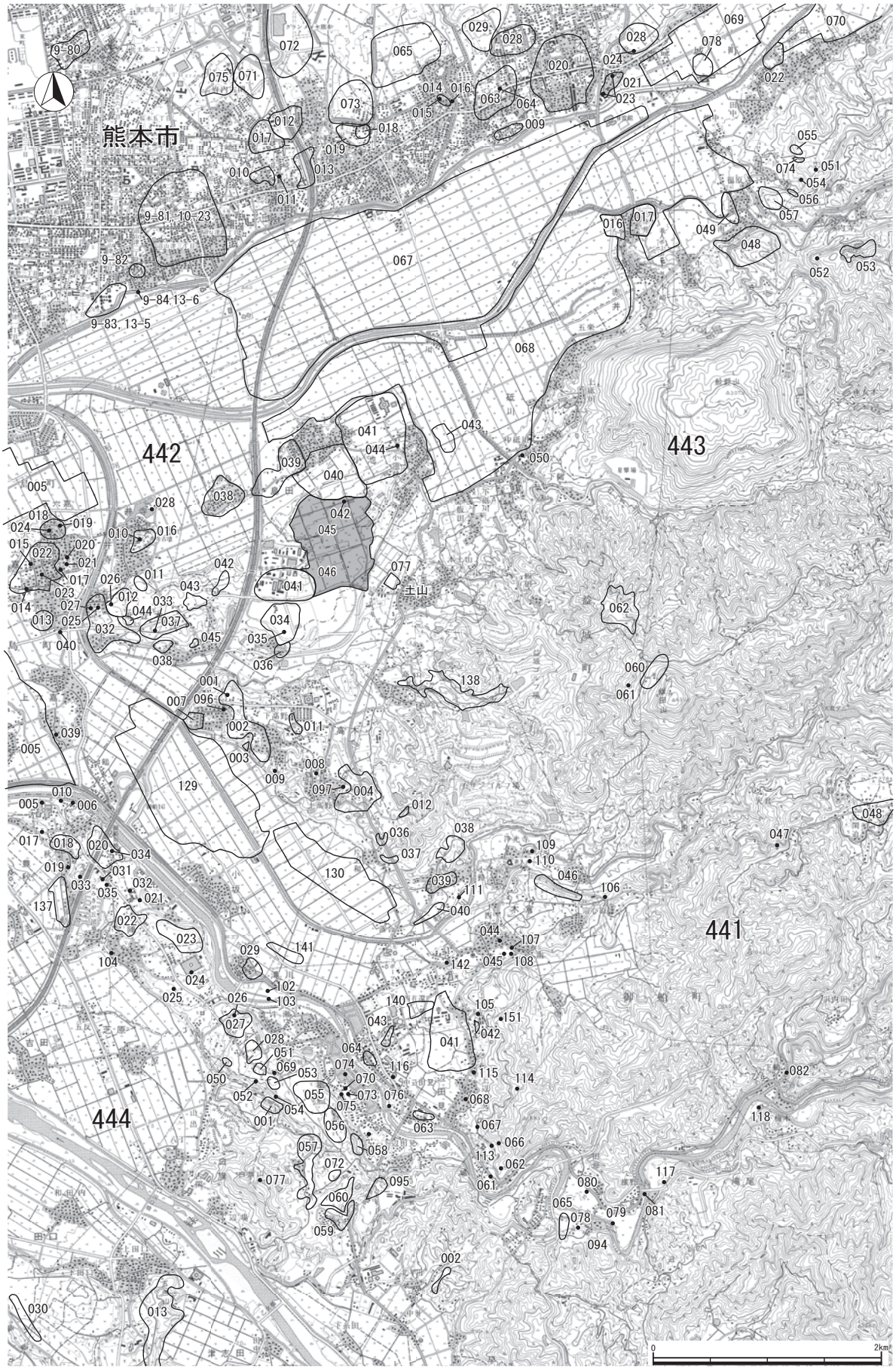
益城町では中世の集落跡等が検出された調査はあまり行われていないが、御船町高木にある山下遺跡では、掘立柱建物、柵列などの遺構、土師器・須恵器・龍泉窯系青磁碗の破片等が出土している。

戦国時代には肥後進出を図る勢力にとっては政局を左右する要衝として、多くの城が築城された。赤井城・砥川城・飯田城（田口平城）・津森城・木山城などがそれにあたる。

近世では、益城町は加藤氏、細川氏の支配に属し、両家の御用瓦を造った土山地区の土山瓦がある。

【引用・参考文献】

益城町　１９９０『益城町史　通史編』
熊本県教育委員会編　１９９９『古閑北遺跡』
熊本県教育委員会編　１９９９『古閑北・梨木遺跡』
益城町教育委員会編　２０１０『小柳遺跡』



第１図　塔平遺跡と周辺の遺跡（1/50000）

第１表　塔平遺跡周辺遺跡一覧

上益城郡益城町（443）

遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地	時　代	種別	指定	備　　考
443-001	小久保遺跡	上小久保　下小久保	縄文～中世	包蔵地		
443-009	古川遺跡	安永　古川	弥生・古墳	集落		
443-010	葉山遺跡	広崎　葉山・西原	弥生～古代	包蔵地		
443-011	葉山古墳	広崎　葉山	古墳	古墳		稲荷さん
443-012	古閑遺跡	古閑　宅地	縄文・弥生	包蔵地		縄文・弥生・土師器外の遺物包含
443-013	福富遺跡	古閑　石井川 ほか	縄文・弥生	包蔵地		縄文・弥生・土師器外の遺物包含、瓦片
443-014	駿河原遺跡	馬水　駿河原	縄文・弥生	包蔵地		
443-015	狐塚古墳	馬水　駿河原	古墳	古墳		埴輪片・須恵器
443-016	馬水製鉄所跡	馬水　駿河原	古代・中世	生産		ふいご羽口・鉱滓・青磁・土師器
443-017	広崎六本木遺跡	広崎　六本木	古墳	包蔵地		
443-018	惣領遺跡	惣領　高木	縄文～古代	包蔵地		
443-019	高木箱式石棺群	惣領　高木	古墳	埋葬		石棺多数
443-020	宮園Ａ遺跡	木山　遠見塚 ほか	弥生	包蔵地		弥生中期土器
443-021	木山城跡	寺迫　城ノ本	弥生	城		下部に弥生後期住居址群
443-022	平田遺跡	平田　境	弥生	包蔵地		弥生甕棺
443-023	城ノ本古墳群	寺迫　城本	古墳	埋葬	町	円墳・箱式石棺（移転）、町有形文化財（考古資料）指定：城ノ本古墳出土品 「城の本２号墳」『益城町文化財調査報告』第２０集（2006）
443-024	上ノ原箱式石棺	寺迫　上ノ原	古墳	埋葬		
443-025	上ノ原遺跡	寺迫　上ノ原	弥生	埋葬		弥生甕棺群
443-028	辻遺跡	宮原　辻	縄文～中世	包蔵地		
443-029	宗曽利遺跡	安永　宗曽利	縄文～中世	包蔵地		
443-038	櫛島遺跡	島田　南島	縄文	包蔵地		縄文土器
443-039	立石遺跡	島田　立石	弥生	包蔵地		弥生土器
443-040	東無田遺跡	島田　東無田居敷	弥生	包蔵地		弥生中期土器・甕棺
443-041	秋永遺跡	小池　秋永 ほか	弥生	集落		弥生中・後期・土師器
443-042	鬼塚古墳	小池　鬼塚	古墳	古墳		
443-043	八反田遺跡	砥川　八反田	弥生	埋葬		弥生中期甕棺
443-044	秋永石棺群	小池　秋永・麻生原	古墳	埋葬		
443-045	塔平遺跡	小池　塔平・鳥越・小迫原・牛井川・鬼塚・西原～嘉島町井寺　上大迫・小豆坂	縄文・弥生・奈良～平安	包蔵地・散布地		
443-046	赤井遺跡	赤井　登町	古代	包蔵地		土師器
443-047	赤井城跡	赤井　本丸	中世	城		「本丸」の地名あり
443-048	福原横穴群	福原　西烏山	古墳	古墳		平瓶
443-049	福田遺跡	福原　福田寺	古墳・古代	包蔵地		大小土師器壷２個出土
443-050	砥川城跡	砥川　城尾	中世	城		（城の尾城跡）
443-051	安養寺跡	福原　杉ノ久保	中世	寺社		
443-052	鬼の窟古墳	福原　南市川	古墳	古墳		行者窟の様相強
443-053	福田寺跡	福原　福田寺	古代・中世	寺社		須恵蔵骨器・青磁
443-054	うどばば横穴	福原　杉久保	古墳	古墳		
443-055	五千塚箱式石棺	福原　五千塚	古墳	埋葬		
443-056	源志山遺跡	福原　源志山	縄文～古代	包蔵地		弥生土器・曽畑式土器
443-057	上ノ原箱式石棺群	福原　上ノ原	古墳	埋葬		
443-060	飯田山常楽寺跡	砥川　飯田・常楽寺	古代・中世	寺社		古塔碑散乱
443-061	飯田古墳	砥川　飯田・常楽寺	古墳	古墳		
443-062	田口平城跡（飯田城跡）	砥川　樋口・大人足	中世	城		
443-063	安永遺跡	安永	弥生～古代	包蔵地		
443-064	火迫石棺群	安永	古墳	埋葬		
443-065	大辻遺跡	馬水　大辻	縄文～平安	包蔵地		
443-067	条里跡		古代・中世	生産		
443-068	条里跡		古代・中世	生産		
443-069	条里跡		古代・中世	生産		
443-070	条里跡		古代・中世	生産		
443-071	梨木遺跡	広崎　梨木	縄文～弥生	包蔵地		
443-072	古閑北遺跡	古閑　崎久保・横道	縄文～弥生	包蔵地		
443-073	野稲迫遺跡	福富　野稲迫	縄文～中世	包蔵地		
443-074	杉の久保遺跡	福原　杉の久保	弥生	包蔵地		
443-075	松山峠遺跡	広崎　松山峠	縄文	散布地		縄文後期～晩期の土器
443-077	中原遺跡	小池　中原	縄文～古墳	包蔵地		
443-078	小柳遺跡	寺迫　小柳	古墳	集落		古墳時代住居跡 「小柳遺跡」『益城町文化財調査報告』第２１集（2010）

上益城郡嘉島町（442）

遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地	時　代	種別	指定	備　　考
442-005	矢形川流域条里跡	下六嘉　上島・鯰ほか	古代・中世	生産		
442-010	井寺古墳	井寺　富屋敷	古墳	古墳	国	横穴式石室墳、幾何文様あり、直刀大正 10 年 3 月 3 日指定
442-011	上官塚古墳群 上官塚１号古墳・２号古墳	井寺　上官塚	古墳	古墳		
442-012	上官塚遺跡	井寺　上官塚	弥生	埋葬		弥生甕棺
442-013	カキワラ遺跡	下六嘉　カキワラ	弥生	埋葬		弥生甕棺
442-014	カキワラ貝塚	下六嘉　カキワラ	縄文	貝塚		縄文前後期の土器
442-015	宮の本甕棺群	下六嘉　宮の本ほか	弥生	埋葬		弥生甕棺・石庖丁・箱式石棺
442-016	井寺遺跡	井寺　富屋敷	縄文～中世	包蔵地		
442-017	道上城跡	下六嘉　泉上	中世	城		

遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地	時　代	種別	指定	備　　考
442-018	西光寺遺跡	下六嘉　西光寺	縄文～中世	包蔵地		
442-019	西光寺甕棺群	下六嘉　西光寺	弥生	埋葬		
442-020	内屋敷遺跡	下六嘉　西光寺	弥生	埋葬		
442-021	護宿神の墓（菊地武光）	下六嘉　西光寺	中世	墓		
442-022	下六嘉遺跡群	下六嘉	弥生～古代	包蔵地		
442-023	六嘉神社の五重塔	下六嘉　宮の本	中世	石造物		
442-024	下六嘉の五輪塔	下六嘉	中世	石造物		
442-025	遠見塚の塔	井寺　遠見塚	中世	石造物		
442-026	剣原古墳	北甘木　剣原	古墳	古墳		
442-027	剣原甕棺群	北甘木　剣原	弥生	埋葬		
442-028	手水鉢	特　浮島	中世	石造物		
442-032	石塚遺跡	北甘木　石塚ほか	縄文・弥生	埋葬		縄文後・晩期土器・弥生甕棺
442-033	御前塚古墳	北甘木　塔の木	古墳	古墳		
442-034	二子塚遺跡	北甘木　二子塚ほか	弥生・古代	包蔵地		環濠集落
442-035	二子塚古墳	北甘木　二子塚ほか	古墳	古墳		
442-036	下古閑遺跡	下古閑	縄文	包蔵地		縄文土器・土師器
442-037	塔ノ木遺跡	北甘木　塔ノ木　豆板	縄文～古代	包蔵地		
442-038	小迫遺跡	井寺　小迫	縄文	包蔵地		縄文前期土器
442-039	竜福寺跡	上六嘉　竜福寺	中世	寺社		
442-040	西林寺跡	上六嘉　中郡	中世	寺社		
442-041	大羅遺跡	上六嘉	弥生	包蔵地		
442-042	内野遺跡	井寺　内野	縄文・弥生	包蔵地		
442-043	町頭遺跡	井寺　弥四郎	縄文・弥生	包蔵地		
442-044	遠見塚遺跡	井寺　上官塚	縄文・弥生	包蔵地		縄文土器・弥生土器・甕棺
442-045	紫原遺跡	北甘木　柴原	縄文・弥生	包蔵地		縄文土器・弥生土器
442-046	塔平遺跡	井寺　上大迫・小豆板	縄文・弥生・奈良～平安	包蔵地		

上益城郡御船町（441）

遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地	時　代	種別	指定	備　　考
441-001	甘木貝塚	高木　甘木	縄文	貝塚		縄文遺物包含
441-002	甘木遺跡	高木　甘木	縄文	包蔵地		縄文中後期土器・土師器・須恵器
441-003	天神原遺跡	高木　南屋敷・西原	弥生	包蔵地		弥生・土師器・須恵器
441-004	高野原遺跡	高木　吹上	弥生	包蔵地		弥生・土師器・須恵器
441-005	御所塚古墳	豊秋　東原	古墳	古墳		
441-006	城塚古墳	豊秋　吹上	古墳	古墳		別名栗瓜塚
441-007	甘木城跡	高木　北屋敷	中世	城		中世城跡
441-008	菅原神社板碑	高木　東菅原	中世	石造物		線刻阿弥陀三尊、永正１７年大永追刻あり
441-009	安養寺跡	高木　阿弥陀	中世	寺社	県	
441-010	城塚	豊秋　吹上	中世	城		中世城跡
441-011	つづの山	高木　上古閑原	中世	経塚		
441-012	善助山窯跡	高木　善助上	古代・中世	生産		
441-017	二子塚古墳	豊秋　吹上	古墳	古墳		
441-018	久保（秋只）遺跡	豊秋　久保	縄文～古墳	包蔵地		
441-019	秋只古墳	豊秋　山後	古墳	古墳		土師器・須恵器
441-020	秋只古墳群	豊秋　久保	古墳	埋葬		箱式石棺主体
441-021	小坂大塚古墳	小坂　下原	古墳	埋葬	町	玉類出土
441-022	植木原遺跡	陣　植木原	古墳	埋葬		土師器・須恵器
441-023	小坂中原遺跡	小坂　中原	弥生	包蔵地		弥生中期土器・土師器・蔵骨器
441-024	魂塚古墳	小坂　上原	古墳	古墳		
441-025	京塚古墳	陣　京徳	古墳	古墳		
441-026	今城大塚古墳	滝川　大塚	古墳	古墳	町	須恵器
441-027	大塚遺跡	滝川　大塚	弥生	包蔵地		弥生後期土器
441-028	滝川中原遺跡	滝川　中原	弥生	包蔵地		弥生中期土器
441-029	平瀬城跡（今城跡）	滝川　塘添	中世	城		
441-031	秋只の四方仏塔	豊秋　山後	中世	石造物		
441-032	豊秋西原石棺	小坂　下原	古墳	埋葬		
441-033	帰帆山古墳	豊秋　山後	古墳	古墳		
441-034	長塚古墳	小坂　西八龍	古墳	古墳		
441-035	山後石棺群	豊秋　山後	古墳	埋葬		
441-036	片志和横穴群Ａ	高木　吹上	古墳	古墳		
441-037	片志和横穴群Ｂ	高木　吹上	古墳	古墳		
441-038	上の原遺跡	高木　鷲崎	古墳	包蔵地		土師器・須恵器
441-039	鶴亀遺跡	高木　鷲崎	弥生	包蔵地		弥生土器
441-040	落合横穴群	高木　辺田	古墳	古墳		
441-041	御船高校遺跡	辺田見　村下・山下	古代・中世	包蔵地		瓦器
441-042	木倉観音院遺跡	辺田見　山神	古代・中世	包蔵地		瓦器
441-043	御船古城跡	御船　下囲	中世	城	町	
441-044	西木倉六地蔵	木倉　井出下	中世	石造物		
441-045	甲斐宗運の墓	木倉　毘沙門	中世	墓	町	永寿寺内にあり　町有形文化財（建造物）指定：甲斐宗運夫婦の墓
441-046	木倉・西原の箱式石棺群	木倉　原	古墳	埋葬		
441-047	郡見坂古墳	上野　郡見坂	古墳	古墳		
441-048	古閑の原遺跡	上野　古閑原	縄文	包蔵地		鉄鏃・縄文
441-050	滝川岩屋堂横穴	滝川　岩屋堂	古墳	古墳		
441-051	南原遺跡	滝川　南原	縄文・弥生	包蔵地		縄文早期土器・弥生土器

遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地	時　代	種別	指定	備　　考
441-052	岩屋堂Ｂ横穴群	御船　下岩屋堂	古墳	古墳		
441-053	岩屋堂Ｂ遺跡	御船　下岩屋堂	縄文	包蔵地		縄文後期土器
441-054	岩屋堂Ａ横穴群	御船　下・上岩谷堂	古墳	古墳		人骨
441-055	下山神遺跡	御船　下山神	弥生	包蔵地		弥生後期土器
441-056	岩屋堂Ａ遺跡	御船　上岩屋堂	縄文・弥生	包蔵地		縄文晩期土器・弥生後期土器
441-057	下瓜山遺跡	御船　下瓜山	弥生～古代	包蔵地		
441-058	中山神遺跡	御船　中山神	縄文	包蔵地		縄文晩期土器・石斧
441-059	上瓜山遺跡	御船　上瓜山	縄文	包蔵地		縄文晩期土器・土師器・須恵器
441-060	上山神遺跡	御船　上山神	弥生	包蔵地		弥生後期土器
441-061	東禅寺第２号古墳	辺田見　東禅寺	古墳	古墳		
441-062	東禅寺第１号古墳	辺田見　東禅寺	古墳	古墳		須恵器・金冠
441-063	辺田見貝塚	辺田見　下鶴	縄文	貝塚		縄文中後期土器
441-064	六丁目遺跡	御船　町園（６丁目）	弥生	包蔵地		弥生土器
441-065	玉虫経塚群	滝尾　玉虫	中世	経塚		
441-066	阿部家の墓	辺田見	近世	墓地		
441-067	光永平蔵の墓	辺田見　甲斐山	近代	墓		
441-068	木倉手永会所跡	辺田見　山下	近世	包蔵地		移転（佐久間氏宅）
441-069	相良塚	滝川　東原	中世	墳墓		
441-070	熊本隊士の墓	御船　町園	近代	墓	町	（十五戦士の墓）
441-071	熊本諸隊奮戦の地碑	辺田見　大坂	近代	石造物		
441-072	盗人塚山遺跡	辺田見	縄文～中世	包蔵地		
441-073	眺世庵跡	御船　町園（３丁目）	近世	包蔵地		片山
441-074	御船県庁跡	御船　５丁目	近代	包蔵地		保育園
441-075	肥後藩大砲鋳造所跡	御船（通称 法光寺）	近世	生産		
441-076	御船川目鑑橋跡	御船　町園（３丁目）	近世	包蔵地	県	嘉永元年（1848）種山石工の卯助、卯市、丈八によって築造された長さ60.8 mの二連眼鏡橋である。昭和 63 年 5 月 3 日流失、基礎部分残存、石材保管。昭和 58 年 10 月 18 日指定
441-077	白旗山墓地群	御船　上瓜山	近代	墓地		
441-078	玉虫の如法塚経塔	滝尾　玉虫	中世	石造物	町	永保元年辛酉十二月二十三日町有形文化財（建造物）指定：玉虫の経塔
441-079	玉虫寺跡	滝尾	中世	寺社		
441-080	玉虫六地蔵	滝尾	中世	石造物		
441-081	横野光明真言塔	滝尾　横野	中世	石造物	町	光明真言（延文４年）
441-082	下鶴眼鏡橋	滝尾　下鶴	近世	建造物	町	
441-094	玉虫遺跡	玉虫	古墳～古代	包蔵地		
441-095	妙見坂遺跡	辺田見　下辺田見	弥生～古代	包蔵地		
441-096	甘木地蔵堂の板碑	高木　甘木	中世	石造物		阿弥陀来迎像
441-097	年尾神社の板碑	高木　吹上	中世	石造物		阿弥陀三尊像
441-102	水神社の板碑	滝川　新地	近世	石造物		享保１２年
441-103	聖寿院の板碑	滝川　新地	中世	石造物		種子字「ウーン」
441-104	金光寺の六地蔵塔	陣　居屋敷	中世	石造物		残欠２基
441-105	観音院の板碑群	木倉　観音院	中世	石造物		天正８年他、数十基有り
441-106	宗心原の板碑	木倉　宗心原	中世	石造物		絵図面石
441-107	永寿寺の板碑・石塔	木倉　屋敷	中世	石造物	町	無銘・永禄１３年、町有形文化財（建造物）指定：永寿寺の石塔
441-108	永寿寺門前の板碑	木倉　屋敷	中世	石造物		阿弥陀三尊
441-109	浄光寺の板碑	木倉　浄光寺	中世	石造物		享禄３年・永禄７年（追刻１１年）
441-110	浄光寺跡	木倉　浄光寺	中世	寺社		
441-111	北木倉の板碑	木倉　辺田	中世	石造物		阿弥陀三尊、天文 18 年建
441-113	東禅寺木造釈迦三尊像	辺田見　東禅寺	中世	石造物	県	県重要文化財（彫刻）指定、甲斐宗運夫婦の墓町指定、六地蔵町指定
441-114	上辺田見の板碑	辺田見　山神	中世	石造物		永禄２年・天文１７年
441-115	中道橋	辺田見　山下	近世	建造物		安政２年建
441-116	大井手川橋	辺田見　町園	近世	建造物		橋上はコンクリート
441-117	明王堂の板碑	滝尾　明王堂	中世	石造物		天文８年建
441-118	下梅木の板碑	滝尾　広瀬	中世	石造物		永禄９年
441-129	条里跡	小坂・高木	古代・中世	生産		
441-130	条里跡	木倉	古代・中世	生産		
441-137	秋只山下遺跡	豊秋　秋只	弥生～中世	集落		
441-138	山下遺跡	高木　下前田・山下・高山	縄文・中世	包蔵地		
441-140	辺田見中道遺跡	木倉～辺田見　辻	縄文	包蔵地		縄文土器・石器
441-141	滝川石田遺跡	滝川	縄文・古墳	包蔵地		縄文土器・須恵器・土師器
441-142	門前川橋	木倉	近世	建造物	町	文化５年建

上益城郡甲佐町（444）

遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地	時　代	種別	指定	備　　考
444-001	中尾原遺跡	白旗　中尾	弥生	包蔵地		弥生中後期土器・石庖丁・石斧
444-002	北早川横穴群	白旗　北早川	古墳	古墳		
444-013	田口東原遺跡	田口　東原	縄文	包蔵地		縄文（晩）・須恵器・黒曜石
444-030	中山錦川遺跡	中山　錦川	弥生・古代	集落跡		土師器・須恵器・弥生土器

熊本市遺跡地図

遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地	時　代	種別	指定	備　　考
9-80	佐土原遺跡	熊本市東区健軍町佐土原	縄文～平安	包蔵地		
9-81,10-23	沼山津遺跡	熊本市東区秋津町	弥生～平安	包蔵地		
9-82	下津代里遺跡	熊本市東区秋津町	縄文～平安	包蔵地		
9-83,13-5	沼山津貝塚	熊本市東区秋津町３丁目沼山津	縄文	貝塚		縄文中期・後期
9-84,13-6	四時軒及び四時軒跡	熊本市東区秋津町沼山津	江戸	建造物	市	市指定建造物及び史跡

第３章　調査の方法

第１節　調査方法

発掘調査区は、試掘・確認調査で遺構、遺物が確認された敷地内に設定し、１区、３区とした。調査面積は１,７６４㎡（１区）、１,９６３㎡（３区）である。

（１）調査１区

平成２１年４月、発掘調査のための資料収集、調査事務所の準備、国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所と協議を重ね、事前準備作業を行った。

調査対象地周辺の除草作業、調査区内の農業用ビニールシートの撤去後、表土層を除去し、調査区内に５ｍ×５ｍのグリッドを設定した。グリッドは東西方向（西から東へ）をアルファベット、南北方向（北から南へ）を数字で示した。北西に位置する調査３区の調査を踏まえ、グリッドは調査３区からの通しグリッドとした。東西方向のアルファベッドは、Ｙ→Ｚ→ａ→ｂと大文字表記のＺ以降は、小文字表記を用いることとした。

埋蔵文化財が含まれる遺物包含層が圃場整備の際、大半が削平されており、イモ穴やみかんの木の植樹痕が多数あり、埋蔵文化財の残りをさらに悪くしていた。

その後、残された遺物包含層の掘削、及び当時の生活痕跡である遺構の検出作業を行った。第１面では、弥生、古代期の遺構、第２面では縄文期の遺構検出を行った。検出した各遺構について、その性格を把握するため観察作業、断面図・平面図等の遺構実測図作成作業、写真撮影作業等の各記録作業を実施した。平成２１年９月に現地調査を終了した。

なお、表土除去は重機を用いて行い、４級基準点設置及びグリッド杭設置作業については外部委託を行うことで、作業の効率化・迅速化を図った。

（２）調査３区

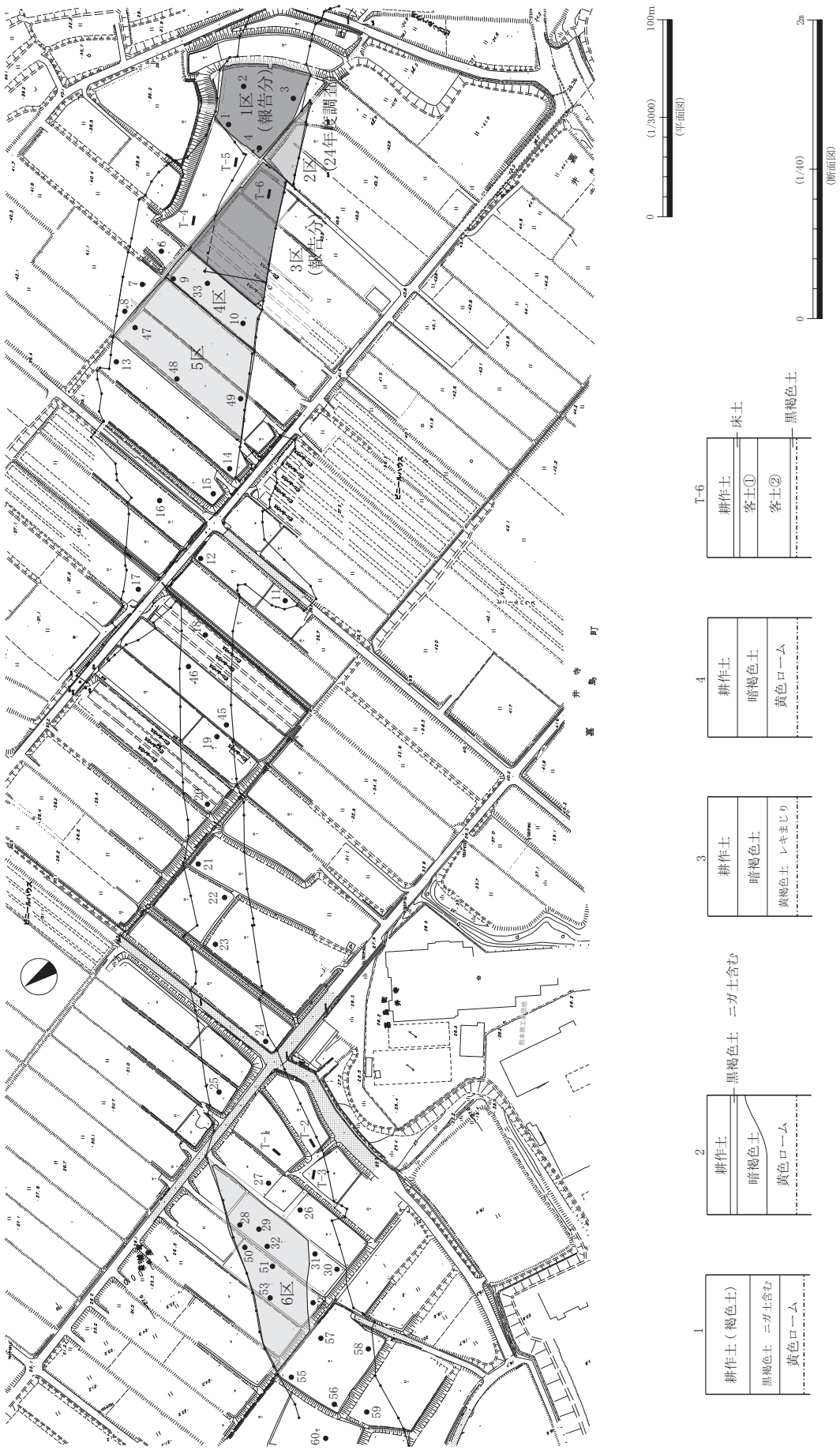
平成２１年６月から西日本高速道路株式会社及び国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所と協議を重ね、調査４区（西日本高速道路管轄区）の発掘調査と併行して事前準備作業を行った。

調査３区の発掘調査は、表土層（１層～２層）を除去し、調査区内に５ｍ×５ｍのグリッドを設定した。その後、人力により３層（黒褐色土層）以下、最も深いところで７層（褐色土層）まで順次掘り下げた。

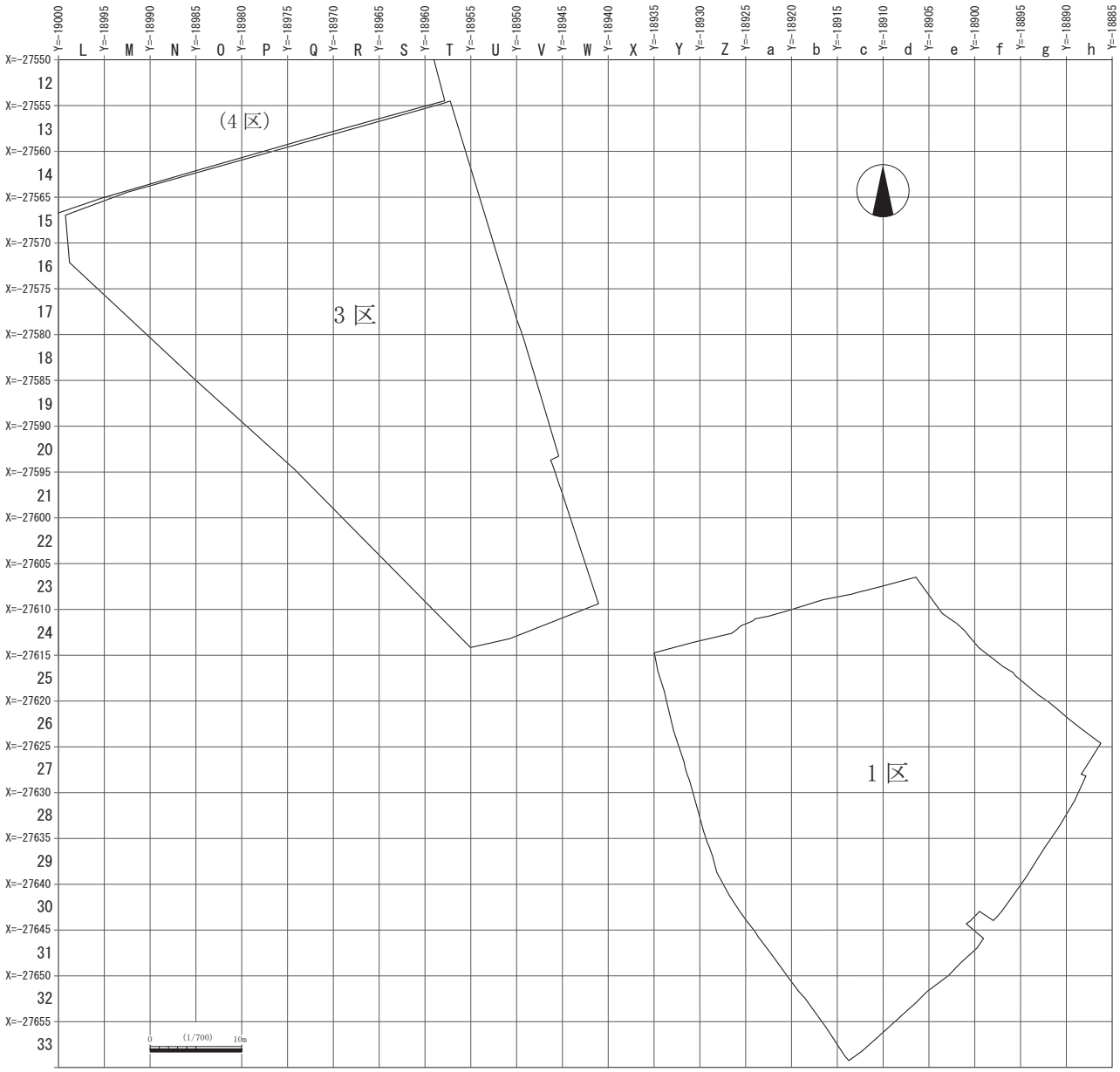
遺物包含層の残りが良く、調査区のほぼ全面で塔平遺跡基本層３層（黒褐色土層）を確認することができた。５層（暗褐色土層）、７層（褐色土層）上面で、当時の生活痕跡である各種遺構の検出作業を行った。次に、検出した各遺構について、その性格を把握するため観察作業、平面図・断面図等の遺構実測図作成作業、写真撮影作業等の各記録作業を実施した。平成２２年３月末に現地調査を終了した。

なお、表土除去は重機を用いて行い、４級基準点設置及びグリッド杭設置作業については外部委託を行うことで、作業の効率化・迅速化を図った。

両調査区とも、写真撮影は中判の白黒フィルムとカラーリバーサル、３５ｍｍの白黒フィルムとカラーリバーサルを用いて行った。また、遺跡周辺の航空写真撮影は、九州航空株式会社熊本営業所に委託し実施した。



第2図　塔平遺跡試掘・確認調査位置図及びトレンチ土層断面図（1/3000）



第３図　　調査区グリッド設定図（1/700）

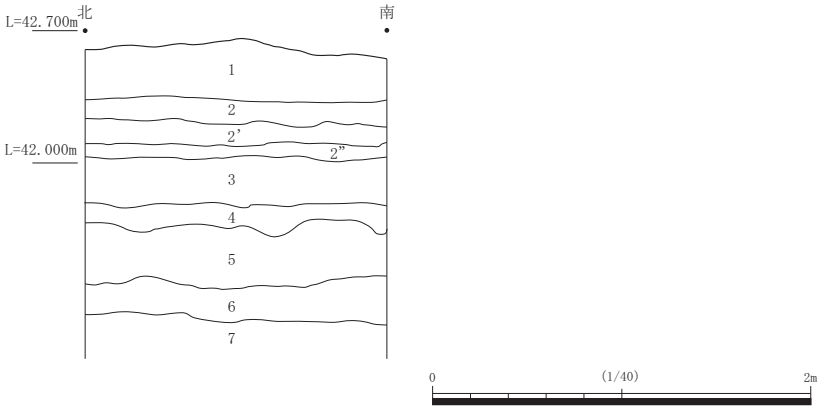
第２節　層序

本遺跡の基本層序は以下のとおりである。

1層：表土（耕作土）
2層：圃場整備の整地層
2’層：同上
2”層：同上　2”層は3層と混じり焼土ブロックを多く含む
3層：黒褐色土　黒ボク　古代の遺物を多く含む
4層：暗褐色土　いわゆる漸移層　層は薄い　3層と5層が混じった土
5層：暗褐色土（略アカホヤ）　現地で「褐色土」と呼称していたもの アカホヤの2次推積層と思われる

※4・5層は、古代・弥生・縄文の検出層　5層を2～3cm下げた面で検出

6層：黒褐色土（略クロニガ）　現地で「暗褐色土」と呼称していたもの　7層と比べ黒味の強い土層
7層：褐色土(略シロニガ・ニガニロ）　無遺物層　縄文早期の炉穴はこの上面で検出が可能となる。



第４図　　塔平遺跡基本土層柱状図

第４章　調査の成果

第１節　調査１区

（１）旧石器時代の遺物（第１１図－１８）

旧石器時代のものと推定されるものが弥生時代以降の土坑（ＳＫ１６）から１点出土している。ｆ２６グリッドからの出土で周辺に石器が広がっていた可能性があるが、層的に確認する調査を実施できていない。土坑は弥生時代以降のものと推定しているため、下層の遺物がこの土坑の掘削時、もしくは後世の流れ込みで混入した可能性がある。

（２）縄文時代の遺構・遺物（第５図～第７図）

１区では、包含層、撹乱内から縄文土器の破片が多く出土した。検出できた遺構は土坑、溝状遺構、ピットであるが、調査区が後世の削平で大きく削られていたため、遺構の性格を詳細に捉えることができないものが多かった。

①土坑

ＳＫ１９

ｄ２４グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面は深い台形状を呈する。長軸約７８㎝、短軸約６４㎝、検出面からの深さは約３９㎝を測る。埋土は５層に分けられる。

ＳＫ２０

ｄ２４グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面は緩やかな皿状を呈する。長軸約８３㎝、短軸約６５㎝、検出面からの深さは約２４㎝を測る。埋土は２層に分けられる。晩期の深鉢形土器の胴部片、２の底部片、３の磨・敲石が出土している。

ＳＫ２１

ｄ２４グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面は皿状を呈する。長軸約１２０㎝、短軸約１００㎝、検出面からの深さは約１４㎝を測る。埋土は４層に分けられる。後～晩期の土器片、４の磨石が出土している。

ＳＫ２２

ｄ２５グリッドに位置する。平面形は方形に近い楕円形で、断面は深い台形状を呈する。長軸約１１０㎝、短軸約９６㎝、検出面からの深さは約３４㎝を測る。埋土は３層に分けられる。上層は炭化物を少し含んでいる。晩期の深鉢形条痕文土器片、５の内外器面にミガキ調整を施した浅鉢形土器の口縁部片、黒曜石の剥片、チャートの剥片が出土している。底面の形状が平坦であることから墓等の可能性もある。

ＳＫ２３

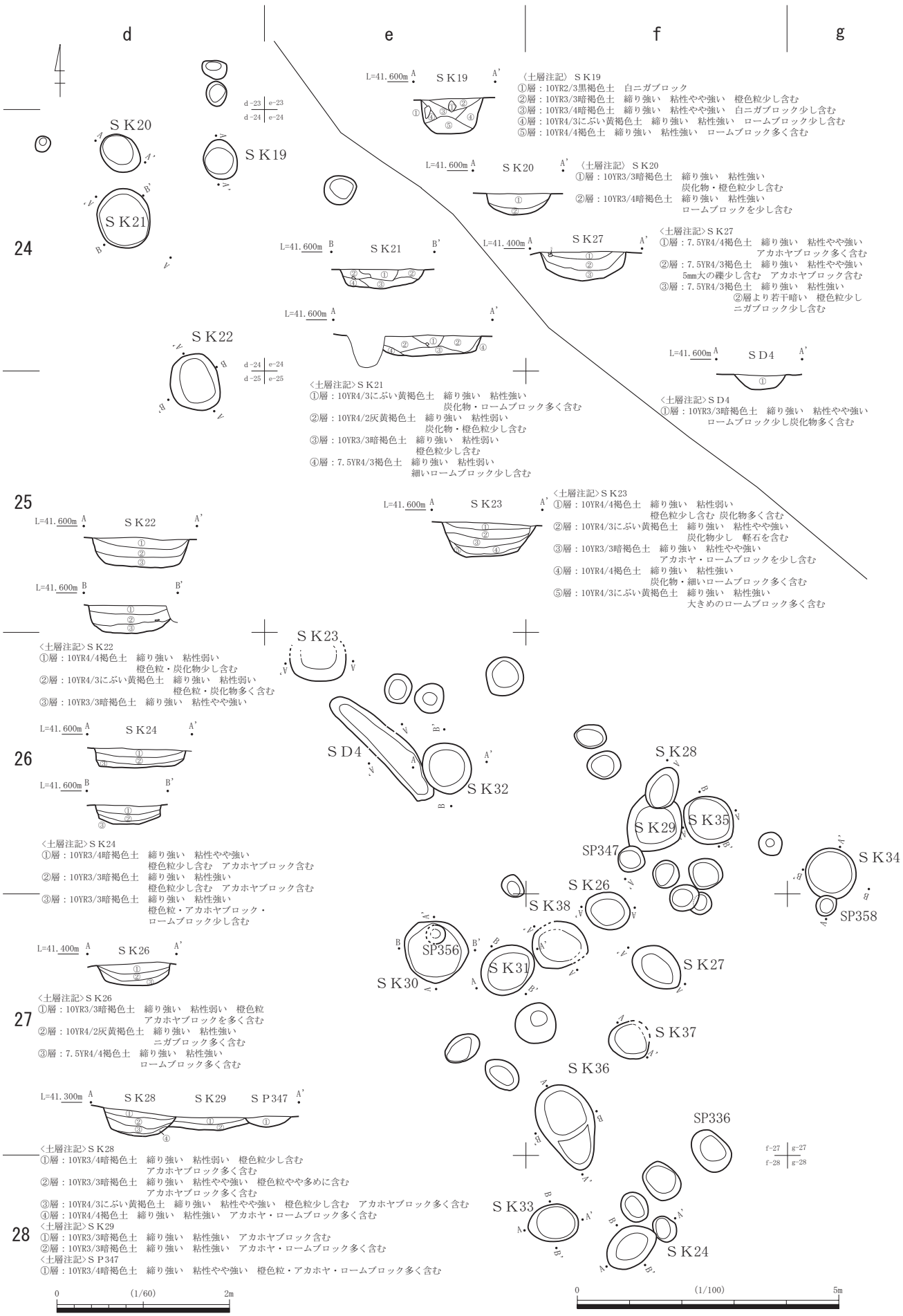
ｅ２６グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面は緩やかな皿状を呈する。長軸約１０７㎝、検出面からの深さは約３９㎝を測る。埋土は５層に分けられる。晩期の深鉢形土器片、チャートの剥片が出土している。

ＳＫ２４

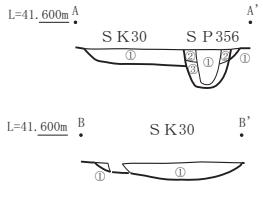
ｆ２８グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、断面は皿状を呈する。長軸約１０５㎝、短軸約７４㎝、検出面からの深さは約２１㎝を測る。埋土は３層に分けられる。

ＳＫ２６

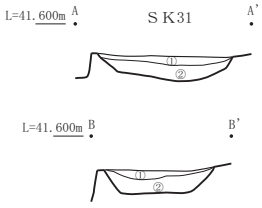
ｆ２７グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面は皿状を呈する。長軸約８７㎝、短軸約７０㎝、検出面からの深さは約２５㎝を測る。埋土は３層に分けられる。後～晩期と思われる浅鉢形土器片のほか、軽



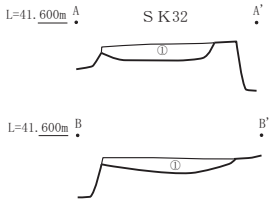
第５図　　ＳＫ・ＳＤ遺構実測図（第２面）１



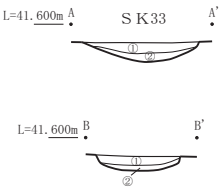
<土層注記>ＳＫ30
①層：10YR4/3にぶい黄褐色土　締り強い　粘性強い
　　橙色粒・アカホヤ・ロームブロックを多く含む
ＳＰ356
①層：10YR3/3暗褐色土　締り強い　粘性強い
　　ローム・アカホヤブロック少し含む
②層：10YR4/3にぶい黄褐色土　締り強い　粘性強い
　　アカホヤブロック含む
③層：10YR4/4褐色土　締り強い　粘性強い
　　アカホヤ・ロームブロック多く含む



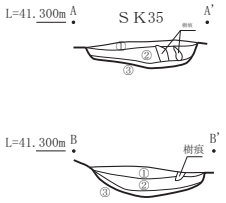
<土層注記>ＳＫ31
①層：10YR3/3暗褐色土　締り強い
　　粘性やや強い　細い橙色粒・アカホヤ
　　ブロック含む
②層：10YR3/4暗褐色土　締り強い　粘性強い
　　大きめの橙色粒・アカホヤブロック含む



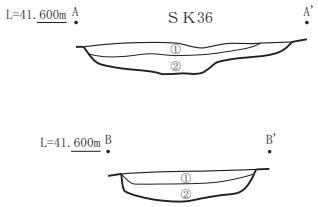
<土層注記>ＳＫ32
①層：10YR 3/4 暗褐色土　締り強い　粘性やや強い
　　橙色粒・炭化物少し含む　アカホヤブロック含む



<土層注記>ＳＫ33
①層：10YR3/4暗褐色土　締り強い　粘性強い
　　橙色粒少し含む　アカホヤブロック多く含む
②層：10YR4/3にぶい黄褐色土　締り強い　粘性強い
　　アカホヤロームブロック含む

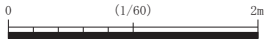


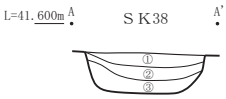
<土層注記>ＳＫ35
①層：10YR4/3にぶい黄褐色土　締り強い　粘性やや強い
　橙色粒少し　φ3mm大の礫を少し　アカホヤブロック含む
②層：10YR4/4褐色土　締り強い　粘性強い
　　黒色のニガブロック少し含む　アカホヤブロック含む
③層：10YR4/6褐色土　締り強い　粘性強い　大きめ橙色粒
　　アカホヤブロック多く含む



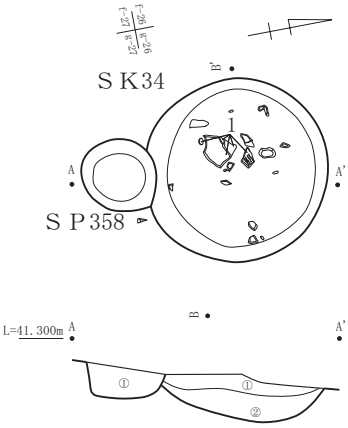
<土層注記>ＳＫ36
①層：10YR4/4褐色土　締り強い　粘性弱い
　　橙色粒・炭化物少し含む　アカホヤブロック含む
②層：10YR3/4暗褐色土　締り強い　粘性強い
　　上層にロームブロックを含む

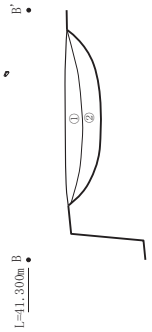
<土層注記>ＳＫ37
①層：10YR4/4褐色土　締り強い　粘性やや強い
橙色粒・炭化物を少し含む　アカホヤブロック含む

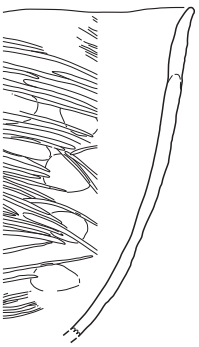




<土層注記>ＳＫ38
①層：10YR4/4褐色土　締り強い　粘性やや強い
　　橙色粒・炭化物やや多めに含む　アカホヤブロック含む
②層：10YR4/3にぶい黄褐色土　締り強い　粘性やや強い
　　上層に白色粒少し含む
③層：10YR4/3にぶい黄褐色土　締り強い　粘性強い
　　上層にロームブロックまじる



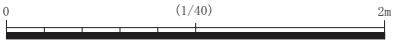


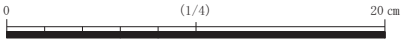


1

<土層注記>ＳＫ34
①層：10YR4/3にぶい黄褐色土　締り強い　粘性やや強い　アカホヤブロック含む
②層：10YR4/4褐色土　締り強い　粘性強い　橙色粒少し含む　アカホヤブロック多く含む

<土層注記>ＳＰ358
①層：10YR4/4褐色土　締り強い　粘性強い
　　φ3～5cm大の礫を少し含む　アカホヤブロック含む





(1)

第６図　　ＳＫ・ＳＤ遺構・出土遺物実測図（第２面）２

石の磨石と思われるものが出土しているが、自然に磨滅した可能性もある。

ＳＫ２７

ｆ２７グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、断面は深い皿状を呈する。長軸約１０４㎝、短軸約７４㎝、検出面からの深さは約３８㎝を測る。埋土は３層に分けられる。

ＳＫ２８

ｆ２６グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面は台形状を呈する。長軸約８３㎝、短軸約６０㎝、検出面からの深さは約２８㎝を測る。埋土は４層に分けられる。ＳＫ２９を切る形で検出された。後～晩期と思われる土器片のほか、黒曜石の剥片が出土している。

ＳＫ２９

ｆ２６グリッドに位置する。ＳＫ２８に一部壊される形で検出された。平面形は楕円形で、断面は浅い皿状を呈する。長軸約１２０㎝、短軸約１０７㎝、検出面からの深さは約１５㎝を測る。埋土は２層に分けられる。７の内外器面ともに横方向のミガキ調整が施された、晩期の浅鉢形土器片が出土している。

ＳＫ３０

ｅ２７グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面は浅い皿状を呈する。長軸約１１８㎝で、検出面からの深さは約１３㎝を測る。

ＳＫ３１

ｅ２７グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面は皿状を呈する。長軸約１０８㎝、短軸約９０㎝で、検出面からの深さは約１８㎝を測る。埋土は２層に分けられる。

ＳＫ３２

ｅ２６グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、断面は皿状を呈する。長軸約９８㎝、短軸約９３㎝で、検出面からの深さは約１３㎝を測る。埋土は単層で、炭化物を少し含んでいる。

ＳＫ３３

ｆ２８グリッドに位置する。平面形は長楕円形を呈し、断面は皿状を呈する。長軸約９３㎝、短軸約７２㎝で、検出面からの深さは約１５㎝を測る。埋土は２層に分けられる。８の内外器面に横方向に条痕を施した晩期の深鉢形土器片が出土している。

ＳＫ３４（第６図）

ｇ２６グリッドに位置する。平面形は円形で、断面は皿状を呈する。長軸、短軸ともに約９７㎝、検出面からの深さは約２５㎝を測る。埋土は２層に分けられる。埋土上層からは、１の晩期の深鉢形土器が出土している。内器面は型押時の指頭圧痕が残り、ミガキ調整を施している。外器面は苧麻の網代圧痕と考えられる組織痕が施されており、上部に黒斑がある。他にも黒曜石の剥片、磨石が出土している。

ＳＫ３５

ｆ２６グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面は皿状を呈する。長軸約１０５㎝、短軸約９３㎝、検出面からの深さは約２１㎝を測る。埋土は３層に分けられる。

ＳＫ３６

ｆ２７グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、断面は皿状を呈する。長軸約１６９㎝、短軸約１０５㎝、検出面からの深さは約２５㎝を測る。埋土は２層に分けられる。９、１０のような晩期の深鉢形条痕文土器の破片が出土している。

ＳＫ３７

ｆ２７グリッドに位置する。平面形は不整な円形で、断面は皿状を呈する。長軸、短軸ともに約７７㎝を測り、検出面からの深さは約１２㎝を測る。埋土は単層で、炭化物を少し含んでいる。１１の早期の深鉢形

土器の口縁部のほか、磨石が出土している。また、１２の早期胴部片が出土しているが流れ込みと思われる。

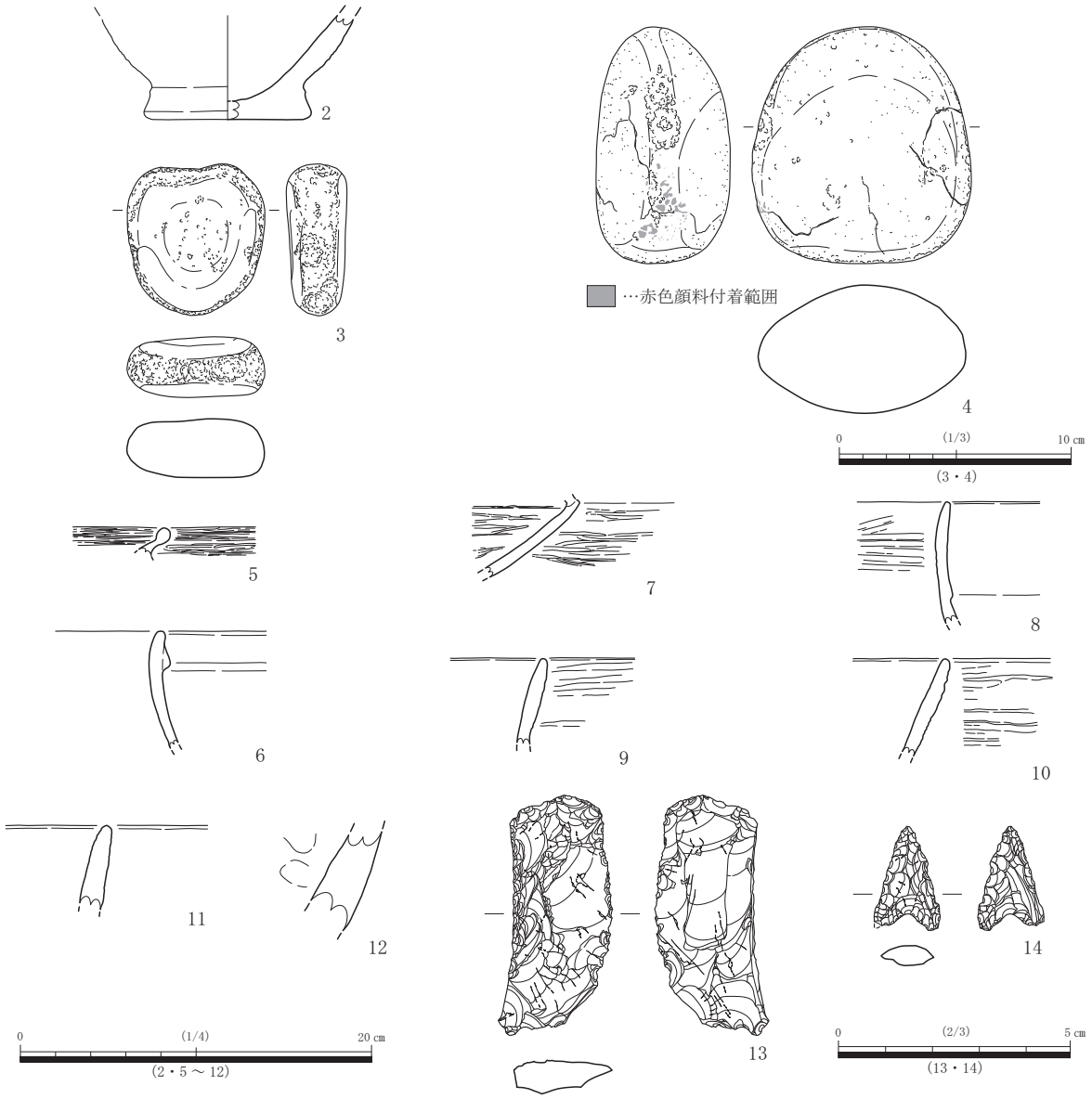
ＳＫ３８

ｆ２７グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面は深い台形状を呈する。長軸約１１０㎝、短軸約９１㎝、検出面からの深さは約３１㎝を測る。埋土は３層に分けられる。後～晩期土器の破片のほか磨石が出土している。

②溝状遺構

ＳＤ４

ｅ２６グリッドに位置する。最大幅約５９㎝、長さ約２６５㎝、深さ約１５㎝を測る。断面は浅い台形状を呈する。南東方向から北西方向へと伸びる。ＳＫ３２に、溝の南東部を一部壊されている形で検出された。埋土は単層で、炭化物を多く含んでいる。遺物は後～晩期と思われる土器片のほか、黒曜石の剥片が出土している。



第７図　　ＳＫ・ＳＰ出土遺物実測図（第２面）

（３）弥生時代後期、古代の遺構・遺物（第８図～第１１図）

１区では、包含層、撹乱内から弥生土器、土師器、須恵器等の破片が出土した。検出できた遺構は竪穴建物、掘立柱建物、土坑、溝状遺構、ピットである。検出は、古代の遺物包含層（３層）及び漸移層（４層）のほとんどが削平を受けていたため、かろうじて残るアカホヤ２次堆積層（５層）中において検出を試みた。それでも遺構の上層がほとんど削られている状況であるのは明らかであったので、検出時の土色、出土遺物、堆積状況などから時期を推察していくことを試みたが、詳細に捉えることができないものがほとんどである。

竪穴建物や掘立柱建物に関しては検出できた遺構の削平の状況から考えて、削平の激しい調査区西側にも何軒か広がっていた可能性がある。

①竪穴建物

ＳＩ１（第８図）

ｅ２９、ｆ２９グリッドに位置する。ＳＩ２の南東部を壊している。ＳＩ２との新旧関係は、ＳＩ１（古）→ＳＩ２（新）である。後世の削平が著しい箇所に位置していたため、検出時は不明遺構としていたが、遺構の北西部が隅丸方形のプランを呈していたこと、調査過程で遺物の集中部が確認されたことから、竪穴建物として調査した。遺構の南東部、約半分は削平を受けている。

現況で長軸約３．７５ｍ、短軸約２．０ｍ、検出面からの深さは約７㎝を測る。長軸はＮ－５０°－Ｅである。埋土は単層で、炭化物を多く含んでいる。竪穴建物に付する土坑Ｋ１を埋土下面で検出できているため、生活面の一部が残存している状況と考えられる。主柱穴は検出ができたＰ１、Ｐ２と考えられる。柱穴間は、約３．１ｍである。Ｋ１は東端部で検出できており、橙色粒、及び炭化物を多く含んでいたため炉とも考えられるが、東端部であることから、貯蔵穴とも考えられる。

１５の遺物は弥生後期の甕の胴部と思われる。内器面は横、ないし斜め方向のハケメが施されている。外器面は縦方向のハケメが施されており、中位に黒斑がある。他にも１６の磨石が出土している。

弥生時代後期の竪穴建物と考えられる。

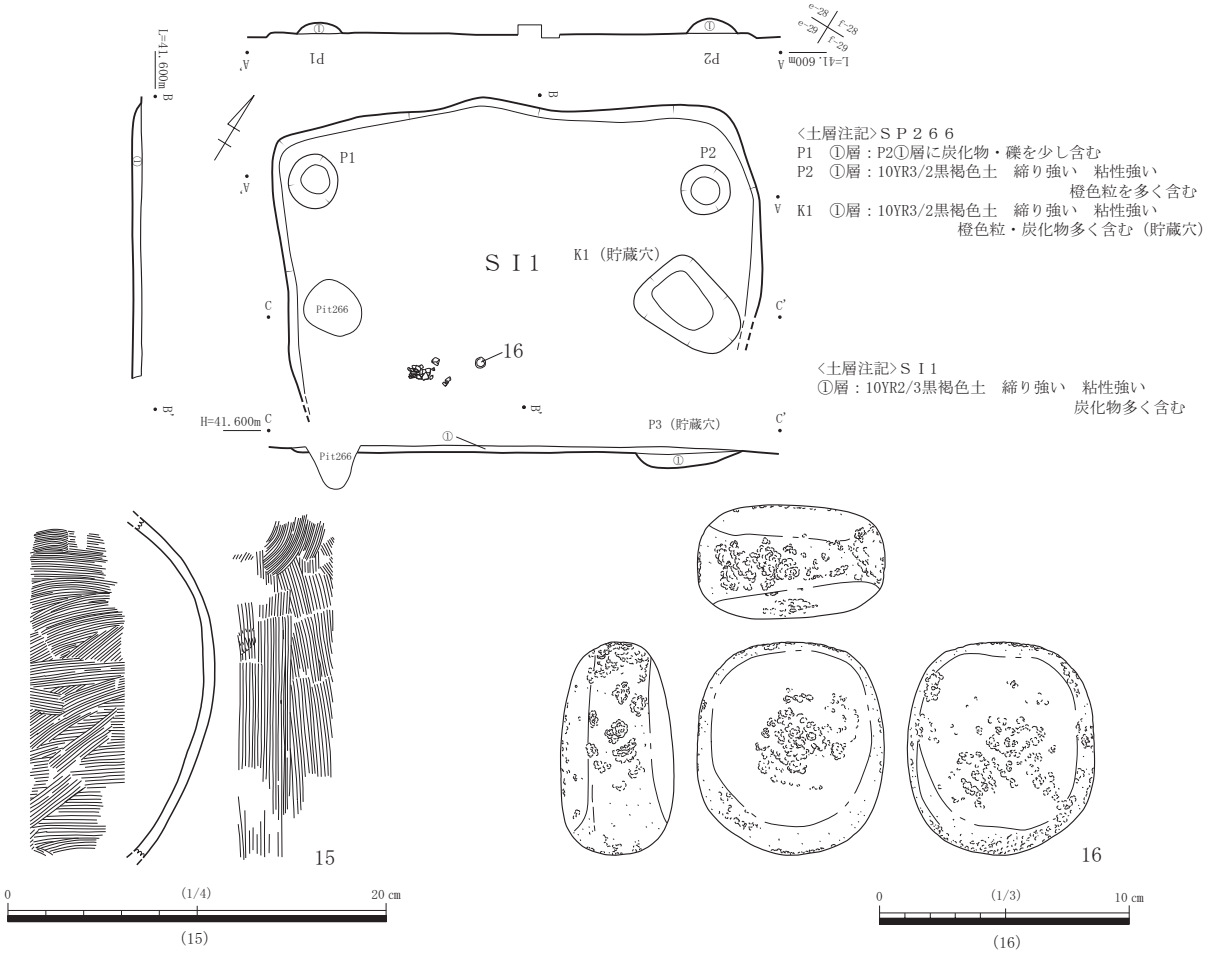
ＳＩ２（第８図）(第５章　自然科学分析)

ｅ２９グリッドに位置する。ＳＩ１のほとんどを壊している。平面形は隅丸方形で、長軸約３．８５ｍ、短軸約３．６ｍ、検出面からの深さは約９㎝を測る。長軸はＮ－９°－Ｗである。埋土は単層で橙色粒、炭化物を多く、礫を少量含んでいる。整地層と考えられる。Ｐ１～Ｐ４を検出し、それぞれが主柱穴と考えられ、下端のレベルはほぼ一定であった。Ｐ１では断面から柱痕を確認できた。柱穴間はＰ１～Ｐ２が約２．５５ｍ、Ｐ１～Ｐ４、Ｐ２～Ｐ３が約２ｍ、Ｐ３～Ｐ４が約２．８ｍである。ほぼ中央部に炉と考えられるＫ１を検出した。平面形はほぼ円形で、長軸約８０㎝、短軸約７７㎝、検出面からの深さは約１０㎝を測る。２層に分けることができ、上層に多くの橙色粒、炭化物を確認した。

遺物は少量ながらも北西部に集中している。１７は弥生後期の甕の胴部と思われる。内器面は横方向のハケメが施されている。摩耗が著しいが、ハケメ調整後、ナデ消したような痕も残る。外器面は縦方向のハケメが施されており、中位に黒斑がある。他にも外器面に波状文が施された壷の破片と思われるものが出土している。

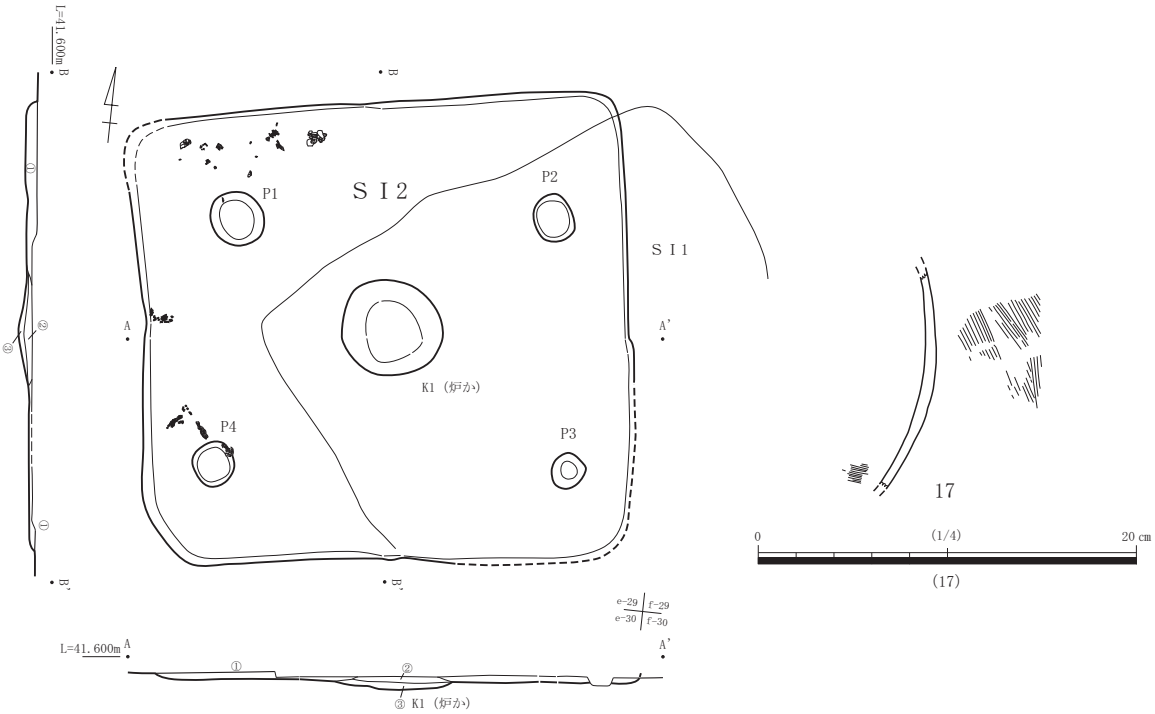
Ｐ１の北側、Ｐ４の北側に炭化材が検出できており、分析の結果、アワブキ属の樹林（常緑性のヤマビワか）の可能性があることが分かった。これらの比較的強度の高い種類の樹木を建築部材として選択、利用したことが推定できる。

ＳＩ２も弥生時代後期の竪穴建物であると考えるが、これらの検出状況から推察して、焼失した可能性がある。なお、両遺構の周辺に重孤文を施した、所謂「免田式土器」の破片が出土していることからも時期が



〈土層注記〉ＳＰ２６６
P1　①層：P2①層に炭化物・礫を少し含む
P2　①層：10YR3/2黒褐色土　締り強い　粘性強い
橙色粒を多く含む
K1　①層：10YR3/2黒褐色土　締り強い　粘性強い
橙色粒・炭化物多く含む（貯蔵穴）

〈土層注記〉ＳＩ１
①層：10YR2/3黒褐色土　締り強い　粘性強い
炭化物多く含む



〈土層注記〉ＳＩ２
①層：7.5YR3/2黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ1～2mm橙色粒含む　炭化物多く含む　φ5～50mmの礫を少し含む
②層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性やや強い　φ2～10mm橙色粒含む　炭化物多く含む
③層：7.5YR3/2黒褐色土　締り強い　粘性やや強い　φ2～10mm橙色粒含む　炭化物少し含む

0　(1/60)　2m

第８図　　ＳＩ１・２遺構・出土遺物実測図

推定できる。

②掘立柱建物

ＳＢ１（第９図）

ｂ２４・２５、ｃ２４・２５グリッドに位置する。桁行は３間で、北側柱列（Ｐ６－Ｐ７－Ｐ８－Ｐ９）約５．８ｍ、南側柱列（Ｐ１－Ｐ２－Ｐ３－Ｐ４）約５．６ｍ。梁行は２間で、西側柱列（Ｐ４－Ｐ５－Ｐ６）約３．７ｍ、東側柱列（Ｐ１－Ｐ１０－Ｐ９）約３．５ｍを測る側柱建物である。桁行方向はＮ－７１°－Ｅである。柱間はほぼ均一で、桁行約１．９～２．０ｍ、梁行約１．６５～１．８ｍを測る。柱掘方は平面円形であり、径は約３０～５０㎝、深さは検出面より１２～３０㎝を測る。柱穴の下端レベルは不均一である。

Ｐ１１、Ｐ１４は総柱建物を意識した位置とは考えにくいが、断面で鮮明な柱痕を確認できたことから、支柱などの可能性がある。Ｐ１２、Ｐ１３は断面で柱痕を確認しており、Ｐ１５を含め建て替えによる柱の位置替えが生じたものと考えられる。柱痕は上記のＰ１５以外のピットで確認できている。

遺物は土師器片が確認できたピットもあるが、実測、及び時期特定ができる状態ではなかった。

ＳＢ２（第９図）

ｃ２３・２４、ｄ２３・２４グリッドに位置する。桁行は３間で東側柱列（Ｐ６－Ｐ７－Ｐ８－Ｐ９）約４．６５㎝、西側の桁行は一部壊されているため残存は２間だが、柱列（Ｐ１－Ｐ２－Ｐ１３）の現況は約３．５７ｍ。梁行は北側の一部が壊されているため１間だが柱列（Ｐ４－Ｐ６）の現況は約１．４５ｍ、南側柱列（Ｐ１－Ｐ１０－Ｐ９）は約３．６ｍを測る。北西隅のピットが壊されているが、梁行は南側柱列から推察して２間であり、Ｐ１１、Ｐ１２の位置から推察して総柱建物である。桁行方向はＮ－１６°－Ｗである。柱間は不均一で、桁行約１．２５～１．８５ｍ、梁行約１．４５～１．９５ｍを測る。柱掘方は平面ほぼ円形であり、径は約２９～５０㎝、深さは約１３～４４㎝を測る。柱穴の下端レベルは不均一である。

Ｐ３、Ｐ５、Ｐ１５は建て替えによる柱の位置替えが生じた可能性も考えられる。柱痕はＰ３、Ｐ１２以外のピットで確認できた。遺物は土師器片が確認できたピットもあるが、実測、及び時期特定ができる状態ではなかった。

ＳＢ１、ＳＢ２は近い場所に位置し、桁行方向もほぼ９０°違うことから推察して、同時期に建てられていた可能性が高い。また、ピット内や遺構周辺で土師器、須恵器等が出土している調査３区の掘立柱建物と比較してみると桁行３間、梁行２間という規格、掘方の径が類似していることから調査３区と同時期の掘立柱建物の可能性が高い。調査３区の遺物の観察から、９世紀後半から１０世紀中頃の遺構と考えられる。

③土坑

ＳＫ１

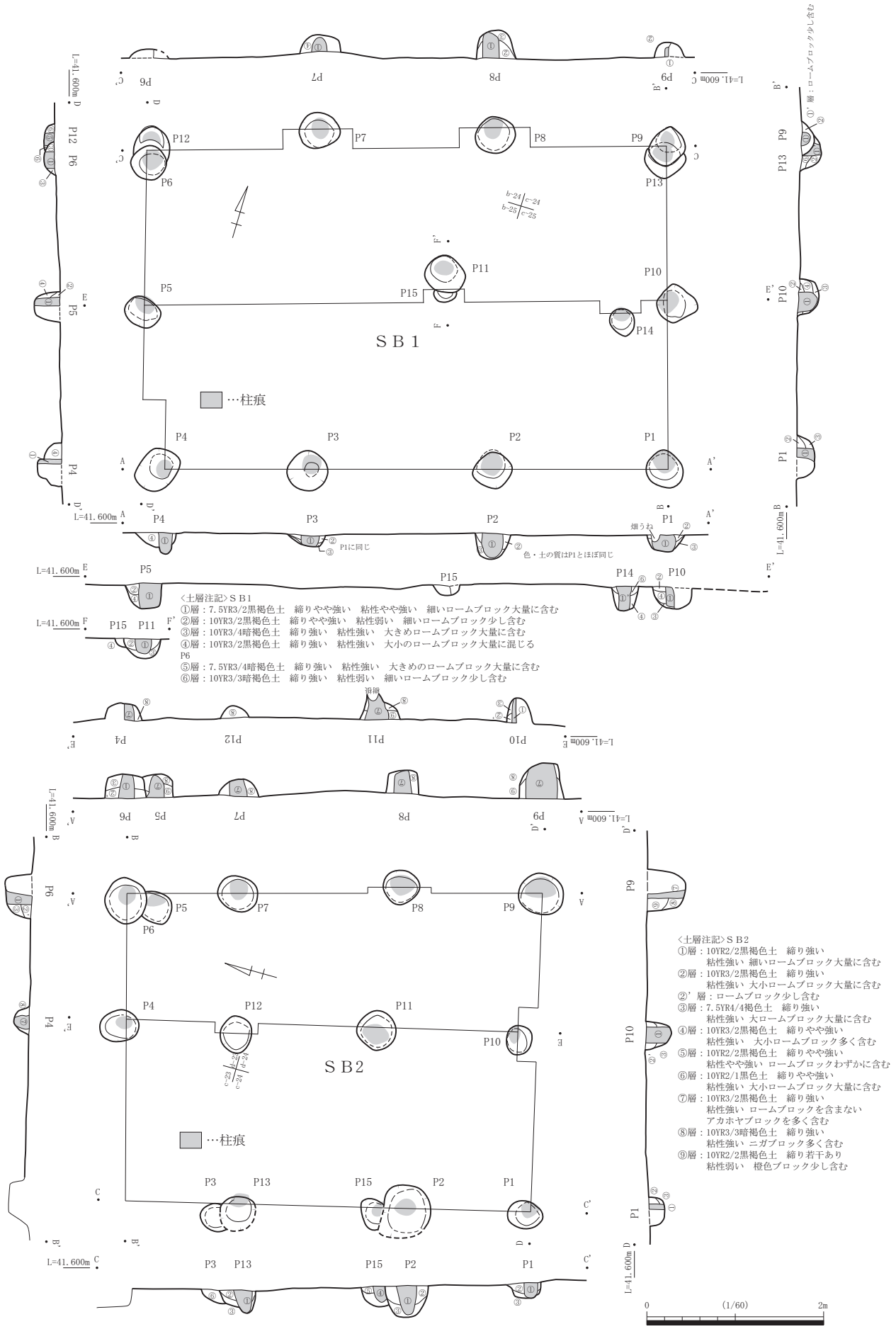
ｆ２７グリッドに位置する。平面形は楕円形で卵形に近く、断面は浅い皿状を呈する。長軸は約８３㎝、短軸は約６８㎝、検出面からの深さは約１５㎝を測る。埋土は単層である。黒褐色土で締りは強く、橙色粒、炭化物、細かい礫を少し含んでいる。

ＳＫ２

ｆ２８グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面は浅い皿状を呈する。長軸は約８５㎝、短軸は約８０㎝、検出面からの深さは約１４㎝を測る。埋土は単層である。黒褐色土で締りは強く、橙色粒、炭化物、細かい礫を少し含んでいる。

ＳＫ３

ｅ２７グリッドに位置する。平面形は楕円形で卵形に近く、断面は深い皿状を呈する。長軸は約８２㎝、短軸は約６２㎝、検出面からの深さは約２０㎝を測る。埋土は２層に分けられる。埋土２層は上層下層とも



第９図　　SB1・２遺構実測図

黒褐色で締りは強い。下層はロームブロックを多く含んでいる。

ＳＫ５

ｅ２９グリッドに位置する。弥生後期竪穴建物ＳＩ２の北西部の一部を壊している。平面形は歪な楕円形で、断面は南東側が深く掘りこまれた深い皿状を呈する。長軸は約１２３㎝、短軸は約１０６㎝、検出面からの深さは約２８㎝を測る。埋土は４層に分けられる。埋土１、３、４層は暗褐色土で締りは強い。埋土２層は黒褐色土で締りは強い。埋土１、２、４層は細かい橙色粒含んでいる。

ＳＫ６

ｃ２７グリッドに位置する。平面形は楕円形で卵形に近く、断面は浅い皿状を呈する。長軸は約１２７㎝、短軸は約９０㎝、検出面からの深さは約１３㎝を測る。埋土は３層に分けられる。埋土１層はにぶい黄褐色土で締りは強く、埋土２層に割り込むように混入している感じである。埋土２層は黒褐色で締りは強く、ロームブロックを少し含んでいる。埋土３層は暗褐色で締りは強く、ロームブロックを多く含んでいる。

ＳＫ８

ｂ２５グリッドに位置する。ピットに半分近く壊されていた。平面形は長楕円形で、断面は浅い皿状を呈する。長軸は推定約１００㎝、短軸は約７２㎝、検出面からの深さは約１２㎝を測る。埋土は２層に分けられる。上層は暗褐色土で締りはやや強く、ロームブロックを多く含む。下層は褐色土で締りは強く、上層と同じくロームブロックを多く含んでいる。

ＳＫ９

ｃ３０、ｄ３０グリッドにまたがって位置する。平面形は長楕円形で、断面は浅い皿状を呈する。長軸は約１６７㎝、短軸は約７７㎝、検出面からの深さは約１０㎝を測る。埋土は３層に分けられる。上層はにぶい褐色土で締りは強い。焼土と思われる褐色土を大量に含み、炭化物も少し含んでいる。下層は褐色土で締りは強く、炭化物を多く含んでいる。火を用いた何かの用途を考えるが、現況としては判断のしようがない。

ＳＫ１０

ｄ２５グリッドに位置する。ＳＤ１完掘後に検出した。ピット２基に壊されていた。平面形は楕円形で、断面は浅い皿状を呈する。長軸約９０㎝、短軸は推定約８０㎝、検出面からの深さは約１０㎝を測る。埋土は２層に分けられる。上層は暗褐色土で締りは強い。下層も暗褐色土で締りは強いが、ロームブロックを多く含んでいる。

ＳＫ１１

ｅ２５グリッドに位置する。ＳＤ１、２とピットにほとんど壊されており、ＳＤの掘削後に検出可能となった遺構である。平面形は楕円形で、中央部付近がやや窪んだ皿状を呈する。長軸約１２８㎝、短軸約９６㎝、検出面からの深さは約３４㎝を測る。埋土は３層に分けられる。埋土１層は灰黄褐色土で締りは強く、橙色粒、炭化物を多く含む。埋土２層は黒褐色土で締りは強く、１～４㎝大の橙色ブロックを多く含む。埋土３層は暗褐色土層で締りが強く、ロームブロックを多く含む。

ＳＫ１２

ｄ２５グリッドに位置する。ピットに一部壊された形で検出した。平面形は楕円形で、断面は皿状を呈する。長軸約１５５㎝、短軸約１４０㎝、検出面からの深さは約１５㎝を測る。埋土は２層に分けられる。上層は暗褐色土で締りは強い。下層はにぶい黄褐色土で締りは強く、ロームブロックを多く含んでいる。

ＳＫ１３

ｅ２５グリッドに位置する。ＳＤ１、２に半分近く壊された状態で検出した。平面形は楕円形で、断面は皿状を呈する。長軸約９６㎝、短軸約８６㎝、検出面からの深さは約２０㎝を測る。埋土は３層に分けられる。埋土１層は黒褐色土で締りは強い。埋土２層は暗褐色土で締りは強く、ニガブロックを多く含む。埋土

３層はにぶい黄褐色土で締りは強く、ロームブロックを多く含んでいる。

ＳＫ１４

ｅ２５グリッドに位置する。ピット２基に一部壊された形で検出した。平面形はほぼ楕円形で、断面は皿状を呈する。長軸約１１０㎝、短軸は推定約１１０㎝、検出面からの深さは約２５㎝を測る。埋土は２層に分けられる。上層は黒褐色土で締りは強く、褐色土のブロックを多く含む。下層は黒褐色土で締りは強く、ロームブロックを多く含んでいる。

ＳＫ１５

ｅ２４グリッドに位置する。平面形は楕円形でやや方形。断面は台形状を呈する。長軸約７４㎝、短軸約６０㎝、検出面からの深さは約３９㎝を測る。埋土は６層に分けられる。埋土１～３層は黒褐色土で締りは強い。２層は炭化物を少し含む。埋土４、５層は暗褐色土で締りは強い。６層は灰黄褐色土で締りはやや強く、アカホヤブロックを多く含む。底面の形状が平坦であることから墓等の可能性もある。外器面にハケメ調整を施した甕の土器片が出土しており、弥生後期のものと考えられる。

ＳＫ１６（第１１図－１８）

ｆ２６グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面は擂鉢状を呈する。長軸約１２２㎝、短軸約７８㎝、検出面からの深さは約２８㎝を測る。埋土は３層に分けられる。埋土１層は黒褐色土で締りはやや強い。埋土２、３層は暗褐色土で締りはやや強い。埋土３層はロームブロックを少し含む。１８の旧石器時代の三稜尖頭器が出土したが、ＳＫ１６が弥生時代以降のものと推定しているため、下層の遺物がこの土坑の掘削時、もしくは後世の流れ込みで混入した可能性がある。

１８は黒曜石の三稜尖頭器である。長さ３.７４㎝、幅１.６㎝、厚さ１.４㎝、重さ６.６ｇを測る。横長の肉厚な剥片を素材とし、稜上からの調整痕が認められる。石器全体の断面がほぼ三角形を呈する。基部の一部は欠損している。

ＳＫ１７

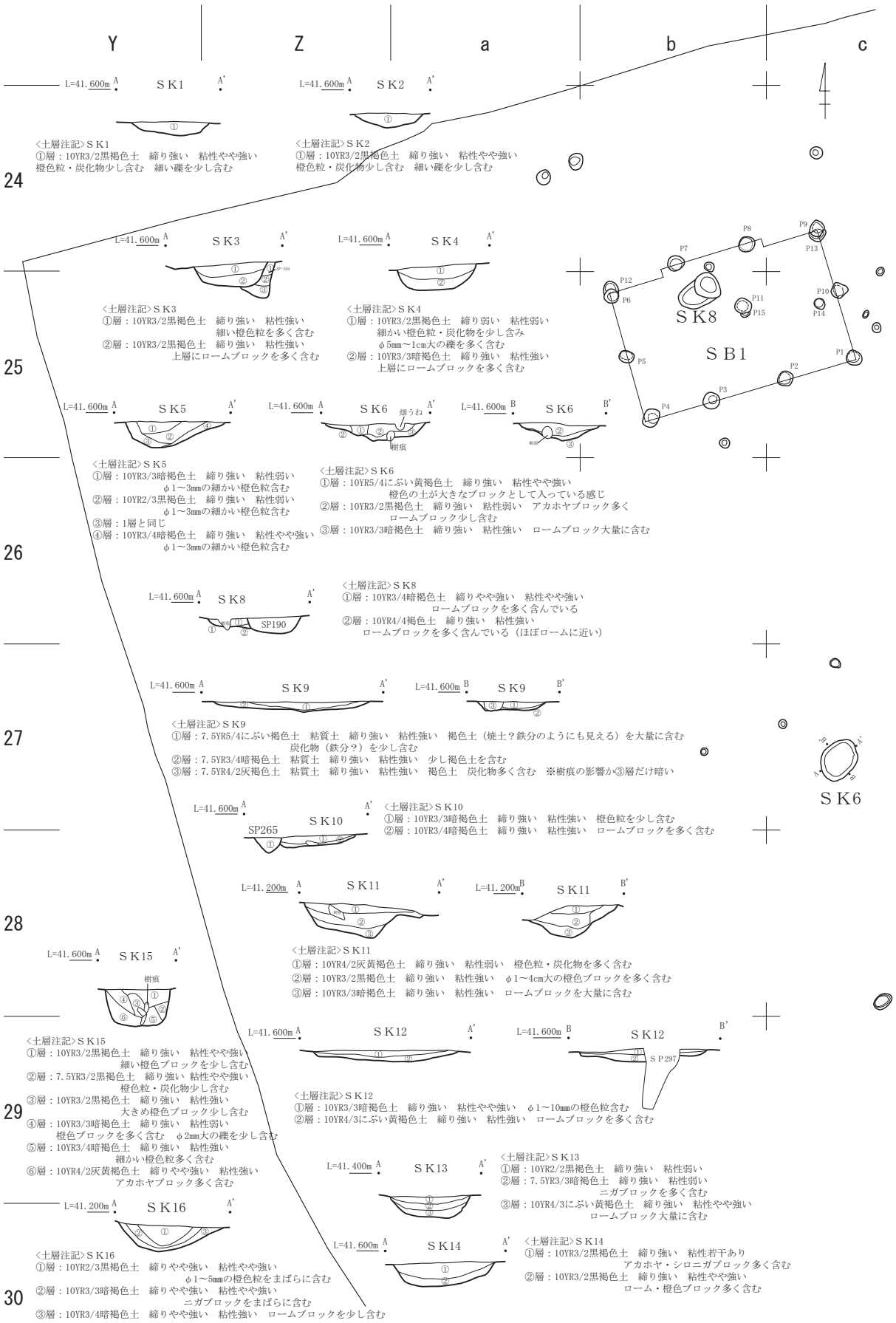
ｅ２４グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面は西側にかけて深く掘りこまれた皿状を呈する。長軸約７９㎝、短軸約６７㎝、検出面からの深さは約２８㎝を測る。埋土は３層に分けられる。埋土１層は黒褐色土で締りは強く、橙色粒、炭化物を少し含む。埋土２層は暗褐色土で締りは強く、アカホヤブロックを多く含む。埋土３層も暗褐色土で締りは強いが、２層と比較してアカホヤブロックを多量に含む。小片ではあるが弥生期の土器片のほか、調整痕のある黒曜石の剥片が出土している。

ＳＫ１８

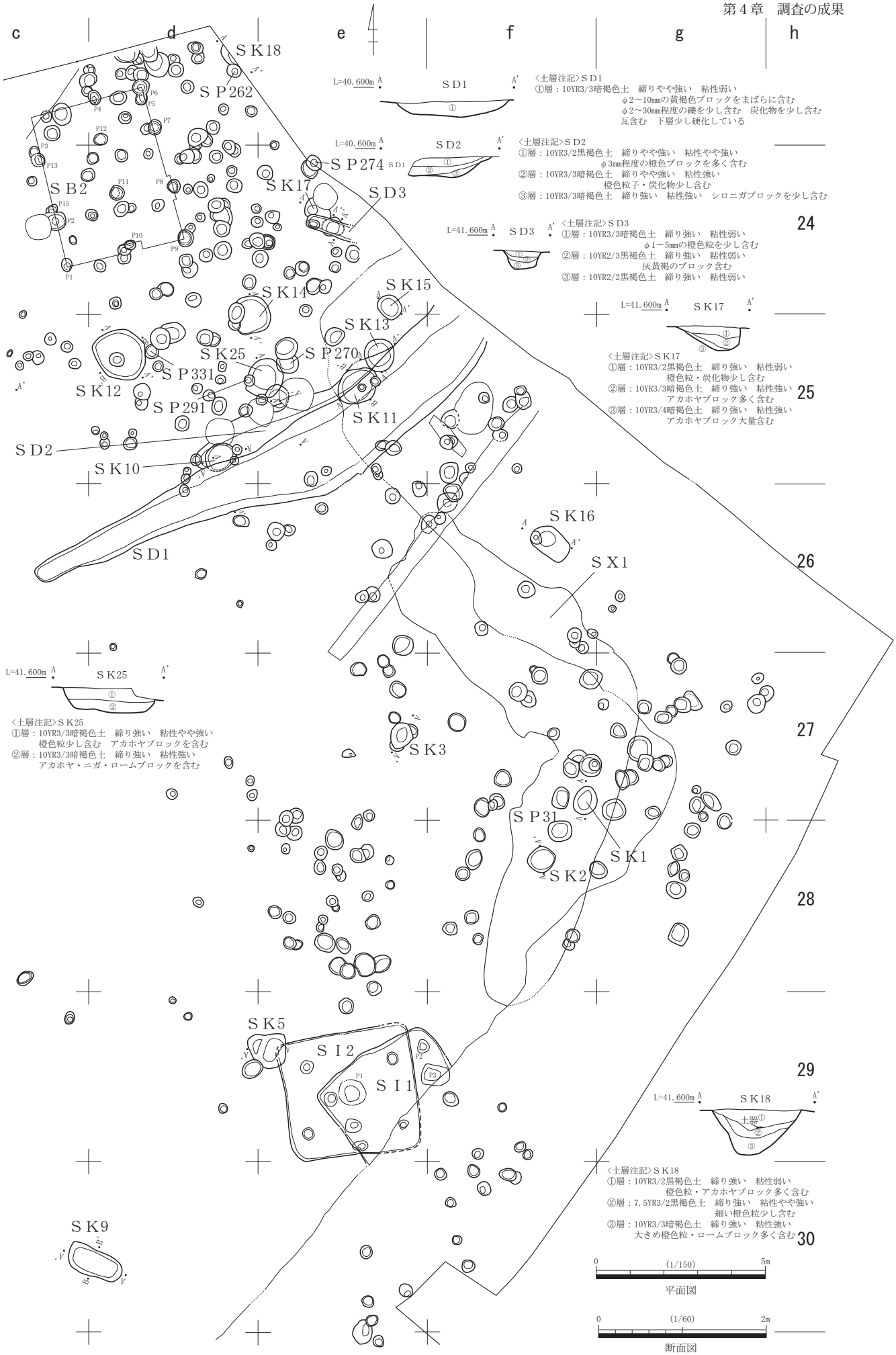
ｄ２３グリッドに位置する。ピットに一部壊されており、北東側約半分は調査区外に伸びる。平面形はおそらく楕円形を呈し、断面は擂鉢状を呈する。断面は検出できたプランの長軸は約１０６㎝、検出面からの深さは約５４㎝を測る。埋土は３層に分けられる。埋土１層は黒褐色土で締りは強く、褐色土のブロックを多く含む。埋土２層は黒褐色土で締りは強い。埋土３層は暗褐色土で締りは強く、ロームブロックを多く含む。

ＳＫ２５

ｄ２５、ｅ２５グリッドにまたがって位置する。ピットに一部壊されている。平面形はほぼ円形を呈し、断面は擂鉢状を呈する。長軸約１１５㎝、短軸約１１０㎝、検出面からの深さは約２８㎝を測る。埋土は２層に分けることができる。埋土１層は暗褐色で締りは強く、アカホヤブロック、橙色粒を少し含む。埋土２層も暗褐色だが、アカホヤブロックのほか、シロニガブロック、ロームブロックを含んでいる。小片ではあるが、弥生期の土器片が出土している。



第10図　　ＳＫ・ＳＤ遺構実測図（第１面）


c
d
e
f
g
h
24
25
26
27
28
29
30
SK18
SP262
SB2
SP274
SK17
SD3
SK14
SK15
SK13
SK25
SP270
SP331
SK12
SP291
SK11
SD2
SK10
SD1
SK16
SX1
SK3
SP31
SK1
SK2
SK5
SI2
SI1
SK9
L=40.600m
SD1
〈土層注記〉SD1
①層：10YR3/3暗褐色土　締りやや強い　粘性弱い
φ2～10mmの黄褐色ブロックをまばらに含む
φ2～30mm程度の礫を少し含む　炭化物を少し含む
瓦含む　下層少し硬化している
L=40.600m
SD2
〈土層注記〉SD2
①層：10YR3/2黒褐色土　締りやや強い　粘性やや強い
φ3mm程度の橙色ブロックを多く含む
②層：10YR3/3暗褐色土　締りやや強い　粘性強い
橙色粒子・炭化物少し含む
③層：10YR3/3暗褐色土　締り強い　粘性強い　シロニガブロックを少し含む
L=41.600m
SD3
〈土層注記〉SD3
①層：10YR3/3暗褐色土　締り強い　粘性弱い
φ1～5mmの橙色粒を少し含む
②層：10YR2/3黒褐色土　締り強い　粘性弱い
灰黄褐のブロック含む
③層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性弱い
L=41.600m
SK17
〈土層注記〉SK17
①層：10YR3/2黒褐色土　締り強い　粘性弱い
橙色粒・炭化物少し含む
②層：10YR3/3暗褐色土　締り強い　粘性強い
アカホヤブロック多く含む
③層：10YR3/4暗褐色土　締り強い　粘性強い
アカホヤブロック大量含む
L=41.600m
SK25
〈土層注記〉SK25
①層：10YR3/3暗褐色土　締り強い　粘性やや強い
橙色粒少し含む　アカホヤブロックを含む
②層：10YR3/3暗褐色土　締り強い　粘性強い
アカホヤ・ニガ・ロームブロックを含む
L=41.600m
SK18
土器
〈土層注記〉SK18
①層：10YR3/2黒褐色土　締り強い　粘性弱い
橙色粒・アカホヤブロック多く含む
②層：7.5YR3/2黒褐色土　締り強い　粘性やや強い
細い橙色粒少し含む
③層：10YR3/3暗褐色土　締り強い　粘性強い
大きめ橙色粒・ロームブロック多く含む
0
(1/150)
5m
平面図
0
(1/60)
2m
断面図

④溝状遺構

ＳＤ３

ｅ２４グリッドに位置する。調査区西端に位置し、大きく削平を受けていることから、遺構の西側が途切れた状況で検出した。最大幅約４７㎝、長さ約１４５㎝、深さ約２０㎝を測る。断面は浅い台形状を呈する。北西方向から南東方向へと伸びる。埋土は３層に分けることができる。埋土１層は暗褐色で締りは強く、細かい橙色粒を含む。埋土２層は黒褐色で締りは強く、シロニガと思われるブロックを含んでいる。埋土３層も黒褐色で締りは強い。遺物は縄文晩期の土器片が出土しているが、後世に流入している可能性が高い。

⑤小穴（ピット）

第１面で検出した弥生、古代期の遺構であるが時期外遺物も多い。しかしながら、調査区における時代、性格を考察する上で特徴的なものも出土している。

ＳＰ３１

ｆ２８グリッドに位置する小穴で、径約５８㎝、深さ約１８㎝を測る。２２は簡易な調整を施した石匙である。基部の一部に自然面を残す。石材は安山岩と思われる。

ＳＰ５９

ｇ２７グリッドに位置する。径、深さともに約３０㎝を測る。２３は砂岩製の砥石である。上面部に使用された痕跡を残している。

ＳＰ２７０

ｅ２５グリッドに位置する。２４の石鏃は安山岩製のもので、先端部を欠損する。

ＳＰ２６２

ｄ２３グリッドに位置し、径約４０㎝、深さ約３７㎝を測る。２６は土師器の甕の口縁部である。内器面にケズリ、外器面にナデを施している。

ＳＰ３３１

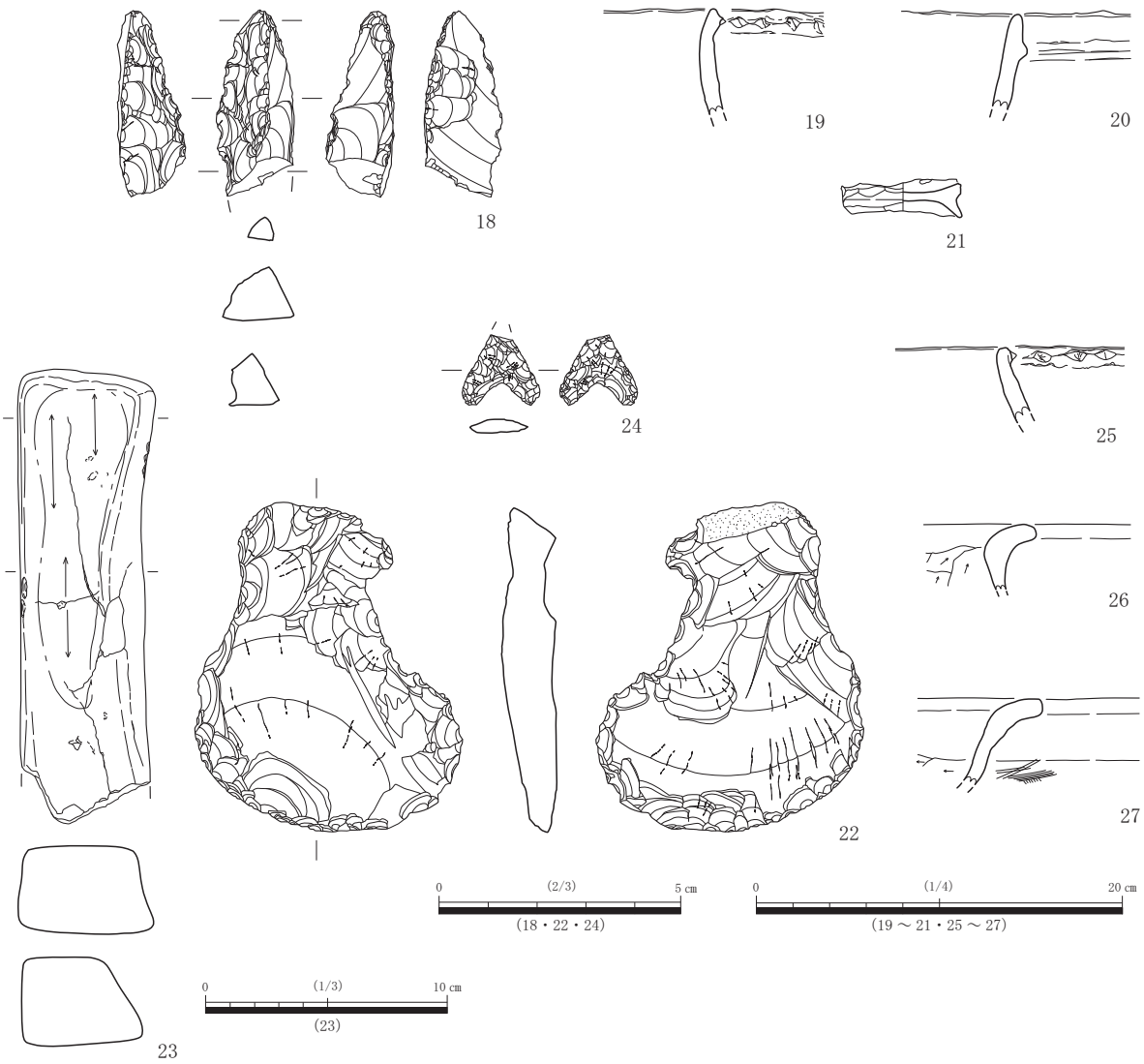
ｄ２５グリッドに位置し、径約４０㎝、深さ約２１㎝を測る。２７は土師器の鉢と考えられる。内器面に横方向のケズリ、外器面に斜め方向のハケメを施している。口縁下に煤が付着する。

（４）近世の遺構（第１０図）

検出したのは溝状遺構であるが、全て調査区北東側に集中する。ＳＤ１及びＳＤ２について記載する。

ＳＤ１

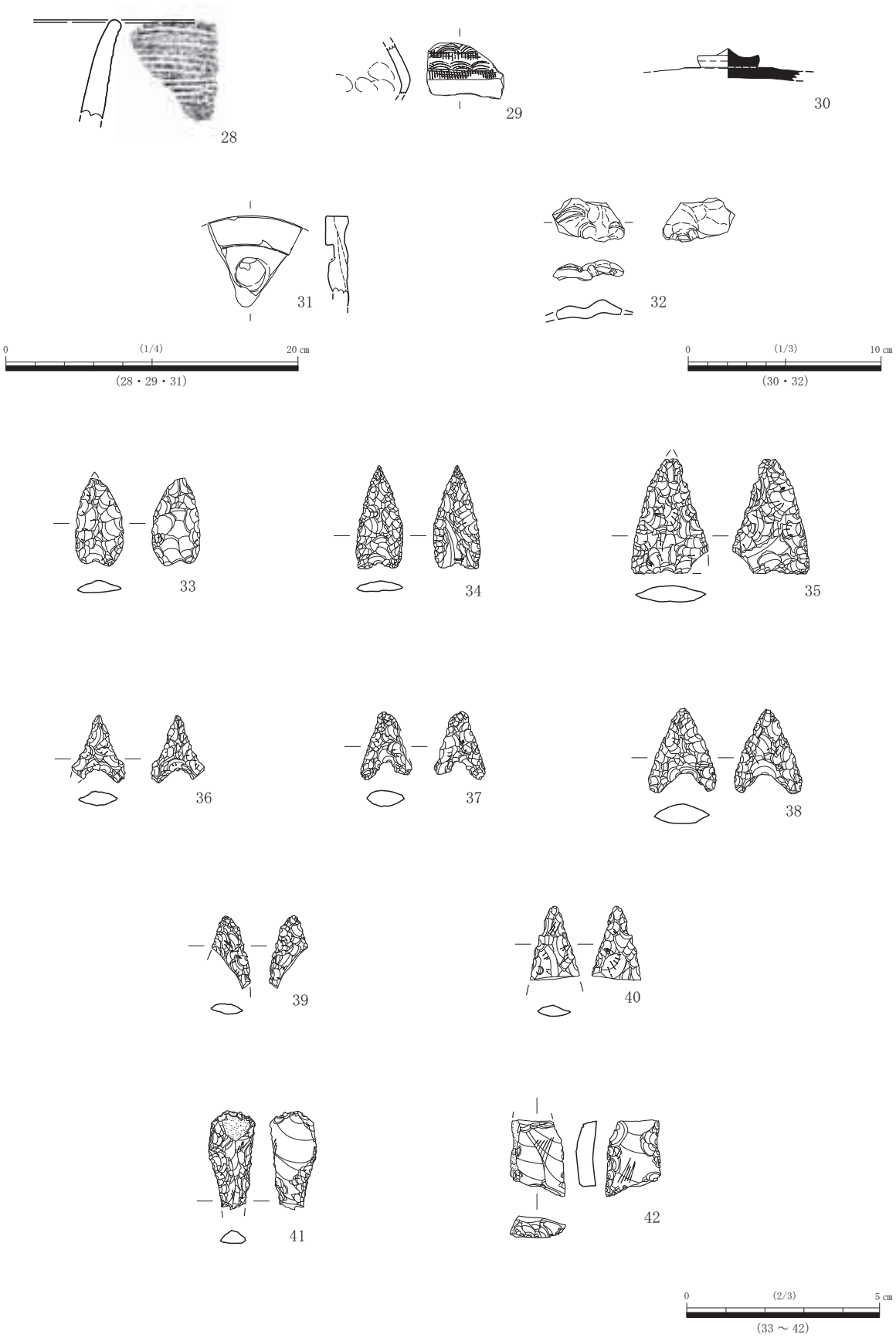
ｄ２５・２６及びｅ２５・２６グリッドに位置する。最大幅約２２０㎝、長さ約１５．５ｍ以上、深さ約１８㎝を測る。断面は浅い皿状を呈する。北東から南西方向へと伸びる。北東側は調査区外へと続く。埋土は単層である。暗褐色で締りはやや強く、２～１０ｍｍの黄褐色のブロックを少し含んでおり、小さい礫も少し含んでいる。龍泉窯青磁片、近世陶磁器、瓦、古代須恵器の坏片など時期にばらつきのある遺物が出土している。区画溝としては歪であるため、近世以降の耕作地時代に使われた、進入路、もしくは排水として使用されていた可能性が高いと考えられる。



第 11 図　　ＳＫ・ＳＸ・ＳＰ出土遺物実測図（第１面）

ＳＤ２

ｄ２５、ｅ２５グリッドに位置する。ＳＤ１によりほとんどが切られているため、遺構形状の詳細は不明だが、幅は約１００㎝以上、長さ約７ｍ以上、深さ約２３㎝を測る。断面は浅い皿状を呈する。北東から南西方向へと伸びる。埋土は３層に分けることができる。埋土１層は黒褐色で締りはやや強く、細かい橙色粒を含んでいる。埋土２層は暗褐色で締りはやや強く、橙色粒のほか炭化物を少し含んでいる。埋土３層は暗褐色だが締りは強く、シロニガブロックを少し含んでいる。土師器、須恵器の甕、坏片のほか近世の陶磁器などＳＤ１と同じく、時期にばらつきのある遺物が出土している。ＳＤ１と方向軸はほぼ同じで、半分以上が同遺構に壊されている。ＳＤ２も近世以降の耕作地時代に使われた、進入路、もしくは排水として使用されていた可能性が高いと考えられる。ＳＤ１はＳＤ２の埋戻し、あるいは何らかの土砂堆積後に掘り直されたものと考えられる。



第 12 図　　遺構外出土遺物実測図

（５）遺構外出土遺物（第１２図）

基本土層掘削、確認トレンチ以外にも撹乱・客土掘削時に出土した遺物である。

２８は縄文時代早期の深鉢形土器で、口縁から胴部にかけ一部残存するのみである。口縁下に５条くらいの貝殻による条痕を残す。胎土粒子は粗い。２９はトレンチ内で出土した「免田式土器」の胴部片である。肩部の重弧文、平行文、縦位の線刻を認める。施文時は櫛状の工具を用いている。内面はナデ調整を施す。

３０は撹乱内において取り上げた須恵器の坏蓋である。つまみを残し、天井部は約１／６残存する状態で出土している。

３１は北東部の客土内において取り上げた軒丸瓦片である。瓦当径は推定約１６㎝、残存厚約１．６㎝を測る。塔平遺跡から南西に少し離れたところに「土山」地区があり、『肥後國誌』の上益城郡鯰手永小池村の頃には「瓦師土山村ニテ屋瓦等ツクル」の記事がある。水田下に広がる良質の粘土と、土山地区の裏山に位置する飯田山から採集できる燃料の松などの条件に恵まれていた背景がある。当時から瓦造りが営まれて加藤・細川時代においては御用瓦である「土山瓦」を造っていた。３１の瓦の紋は細川期の九曜紋で、土山地区所産のものと考えられる。

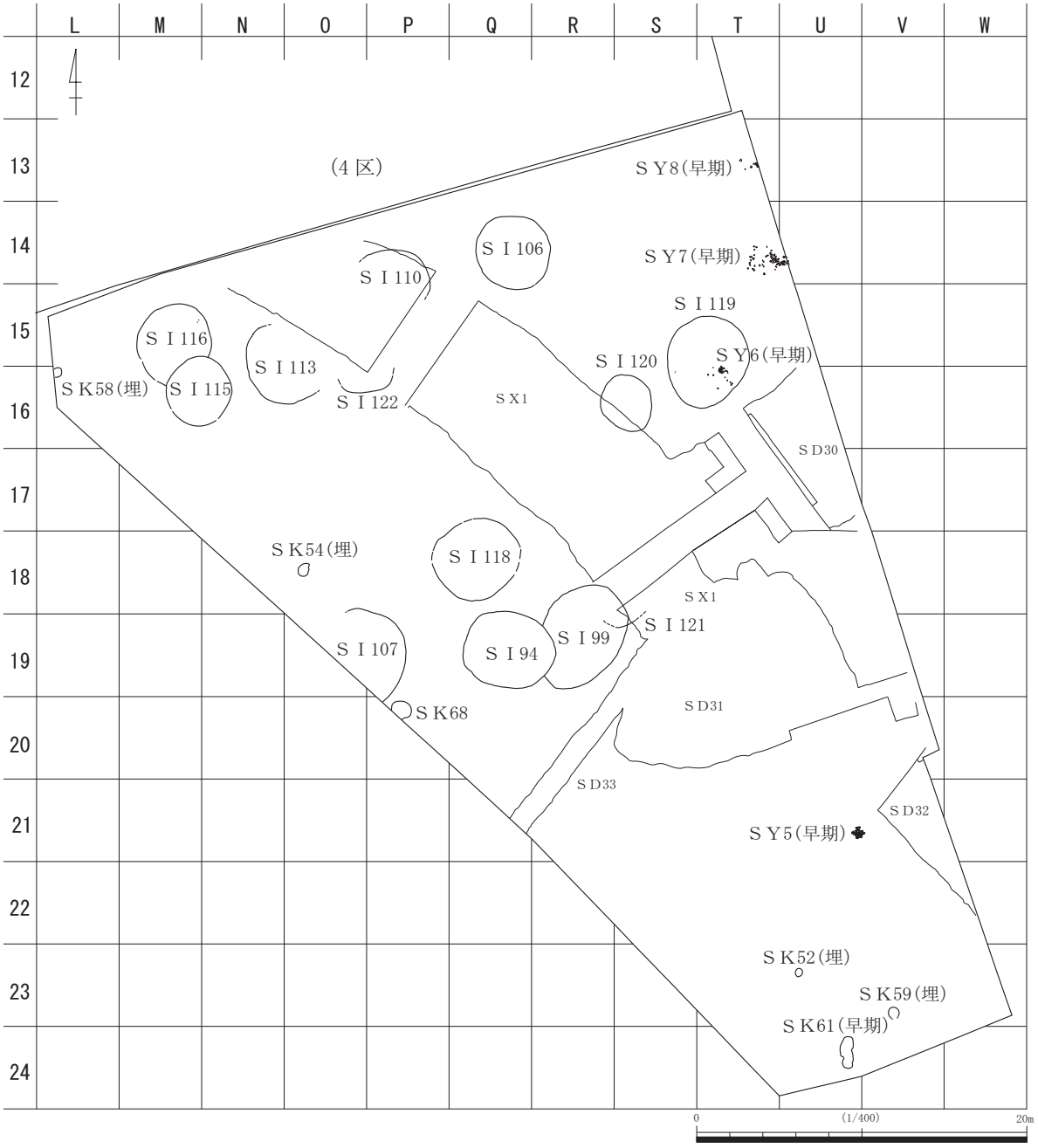
３２は土師質の土人形である。恵比寿と思われる顔の一部が残存している。型押し成型されており、内面に型に押し付ける際の押圧痕が残る。鼻は外から内に穿孔されている。

石器は１０点を図示する。３３～４０は石鏃である。３３～３５は基部の抉りが浅い種類である。３３は安山岩、３４、３５は黒曜石製である。３６～３８は前述したものより基部の抉りがやや深くなっている種類である。３６は安山岩製で、両側が基部から先端部にかけてやや内側に反るものである。３７、３８は黒曜石製である。３９は黒曜石製、４０は安山岩製のものであるが、基部において欠損があるため形状は不明である。

４１は黒曜石製の石錐である。先端部は欠損している。４２は二次加工痕のある黒曜石製の剥片である。裏面において両側からの加工が顕著に認められる。

【引用・参考文献】

小林達夫　小川忠博　１９８９　「縄文土器大観　１　草創期　早期　前期」
小林達夫　小川忠博　１９８９　「縄文土器大観　２　中期Ⅰ」
小林達夫　小川忠博　１９８９　「縄文土器大観　３　中期Ⅱ」
小林達夫　小川忠博　１９８９　「縄文土器大観　４　後期　晩期　続縄文」
渡辺誠　１９９１　「組織痕土器研究の諸問題」『交流の考古学』三島格会長古稀記念号
熊本県教育委員会編　１９８０　『古保山・古閑・天城』
熊本県教育委員会編　１９９９　『古閑北遺跡』
熊本県教育委員会編　１９９９　『古閑北・梨木遺跡』
益城町　１９９０　『益城町史　通史編』
益城町教育委員会編　２０１０　『小柳遺跡』



第 13 図　　遺構配置図（縄文時代）

第２節　調査３区

（１）旧石器時代の遺物（第１１５図－６３３、６３４）

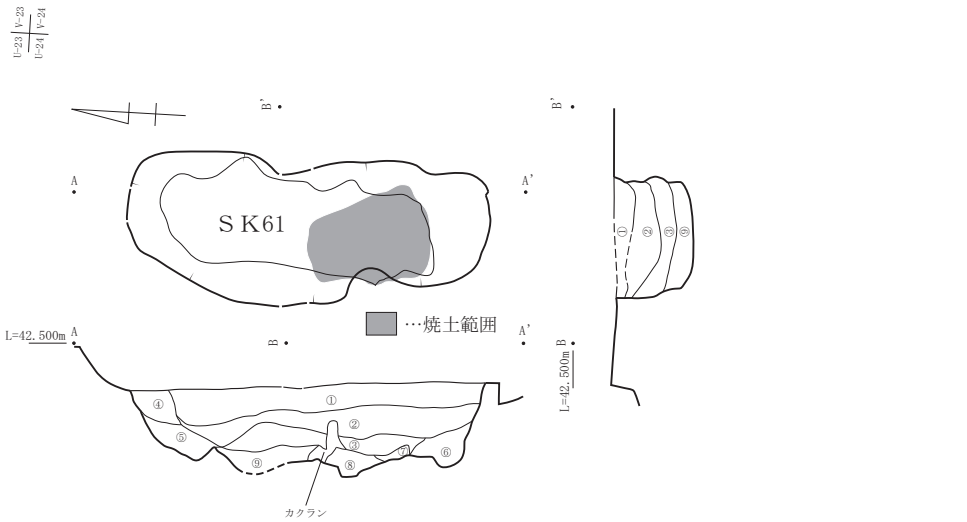
縄文時代早期遺構の検出のための５層（アカホヤ２次堆積層）、及び６層（黒褐色土層）掘削時に旧石器時代のものと推定される遺物がそれぞれ１点ずつ出土している。土層の細分と、それを基準とした調査などができなかったことから、旧石器文化層の特定、全容を捉えることはできなかった。しかし、調査１区でも遺物が出土していることは、本遺跡にも人が行き来、もしくは滞在したことの痕跡として認めることができるものである。遺物は、遺構外出土遺物において図示している。

（２）縄文時代早期の遺構・遺物

３区では縄文時代早期の炉穴が１基と集石遺構４基が検出された。炉穴に関しては調査区全体を検出可能な層位である７層上面までの掘り下げを試みたがこの１基にとどまった。また、遺物はグリッドや時期外遺構内からの出土がほとんどである。特徴のあるものを概説する。

ＳＫ６１（第１４図）

Ｕ２４グリッドに位置する。弥生期の竪穴建物ＳＩ１０８床面検出時に検出されたものである。当初、竪穴建物の炉とも思われたが、掘り込みの深度、堆積土の状況から早期の炉穴とした。後世の遺構により、ＳＫ６１の上部は壊されているものと考えられる。平面形は長楕円形で、断面は深い台形状を呈する。長軸約１９０㎝、短軸約７０㎝、検出面からの深さは約５０㎝を測る。長軸方向はＮ－３°－Ｗとほぼ南北に伸びる。埋土は９層に分けられる。埋土１～３層は黒褐色で、締りは弱く、下層になるにつれ焼土の混入が多くなる。埋土４層は暗褐色で締りが弱い。埋土５層は黒褐色だが締りはやや弱いが、両層とも混入物は無く、埋没過程で壁面から土が流入した痕跡が見られる。埋土６層は暗褐色で焼土が多量に混入している。埋土７層と８層には多量の焼土が混入し、下層は少量の炭化物も含む。この２層が燃焼部の痕跡と考えられる。埋土９層は黒褐色で締りはやや強く、小さな焼土粒を微量に含んでいる。遺物は出土しなかった。



〈土層注記〉ＳＫ61
①層：10YR2/2黒褐色土　締り弱い　粘性強い　ニガ（1cm未満）微量含む
②層：10YR色2/3黒褐色土　締り弱い　粘性強い　ニガ・焼土（1cm未満）が微量含む
③層：10YR色2/3黒褐色土　締り弱い　粘性強い　ニガ微量・焼土多量に含む
④層：10YR色3/3暗褐色土　締り弱い　粘性やや強い　混入物ほとんどなし
⑤層：10YR2/2黒褐色土　締りやや弱い　粘性強い　混入物ほとんどなし
⑥層：10YR3/4暗褐色土　締り強い　粘性強い　小さいニガ・焼土が多量に含む
⑦層：10YR3/3暗褐色土　締り弱い　粘性強い　大きな焼土のブロック（4～5cm）が大量に含む（燃焼部）
⑧層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性やや強い　大小の焼土が大量に入る　少量の炭化物も含む（燃焼部）
⑨層：10YR2/3黒褐色土　締りやや強い　粘性強い　小さな焼土の粒が微量含む

第 14 図　　ＳＫ61 遺構実測図

ＳＹ５（第１５図）

Ｕ２１、Ｖ２１グリッドに位置し、５層中位で検出した。円礫、角礫ともに含んだもので構成されているが、扁平なものが多いことが特徴として挙げられる。掘り込みは確認できなかった。また、炭化物、焼土は検出されていない。他の集石とは違い、礫の散逸は無く一か所にまとまっている。また、見通し断面図を見ても、平坦な地に石を乗せ集めているようにも見える。

ＳＹ６（第１５図）

Ｔ１６グリッドに位置する。縄文後～晩期の竪穴建物の床面検出中に、集石の一部が検出された。円礫、角礫とともに、轟Ａ式土器の胴部片も含まれて構成されていることに特徴がある。掘り込み、また、炭化物、焼土は検出されていないが、一部の礫において被熱によって表面が変色したものも一部含まれている。散逸を見るのは、加熱の対象となった用礫が遺棄されたためと考えられる。

ＳＹ６で検出した土器は隣接グリッドの５層中から取り上げた遺物と接合している。４３は、胴部上半は内外器面ともに地文も細かく、外面には強い斜行文を施している。下半においては、外器面は粗くナデをおこなうが、内器面は成形の際のものと思われる指頭圧痕が残る。また、調整もおそらく条痕調整と思われるが、凹凸が激しくあたりも少ない。内面の上半と下半だけを見ても調整用の原体（貝殻の大きさ）を変えているなど、箇所によって作り、調整に違いが認められる。

ＳＹ７（第１６図）

Ｔ１４グリッド、調査区東壁面付近に位置する。５層中位で検出した。小ぶりな円礫、角礫で構成されており、調査区内で検出した集石遺構の中で一番多くの礫を有する。少数だが中には被熱した礫も存在する。また、礫の集中部から西側へ散逸した状況が確認できる。集石遺構の範囲は約２ｍを測る。掘り込みは確認できていない。また、炭化物、焼土は検出されていない。

ＳＹ８（第１６図）

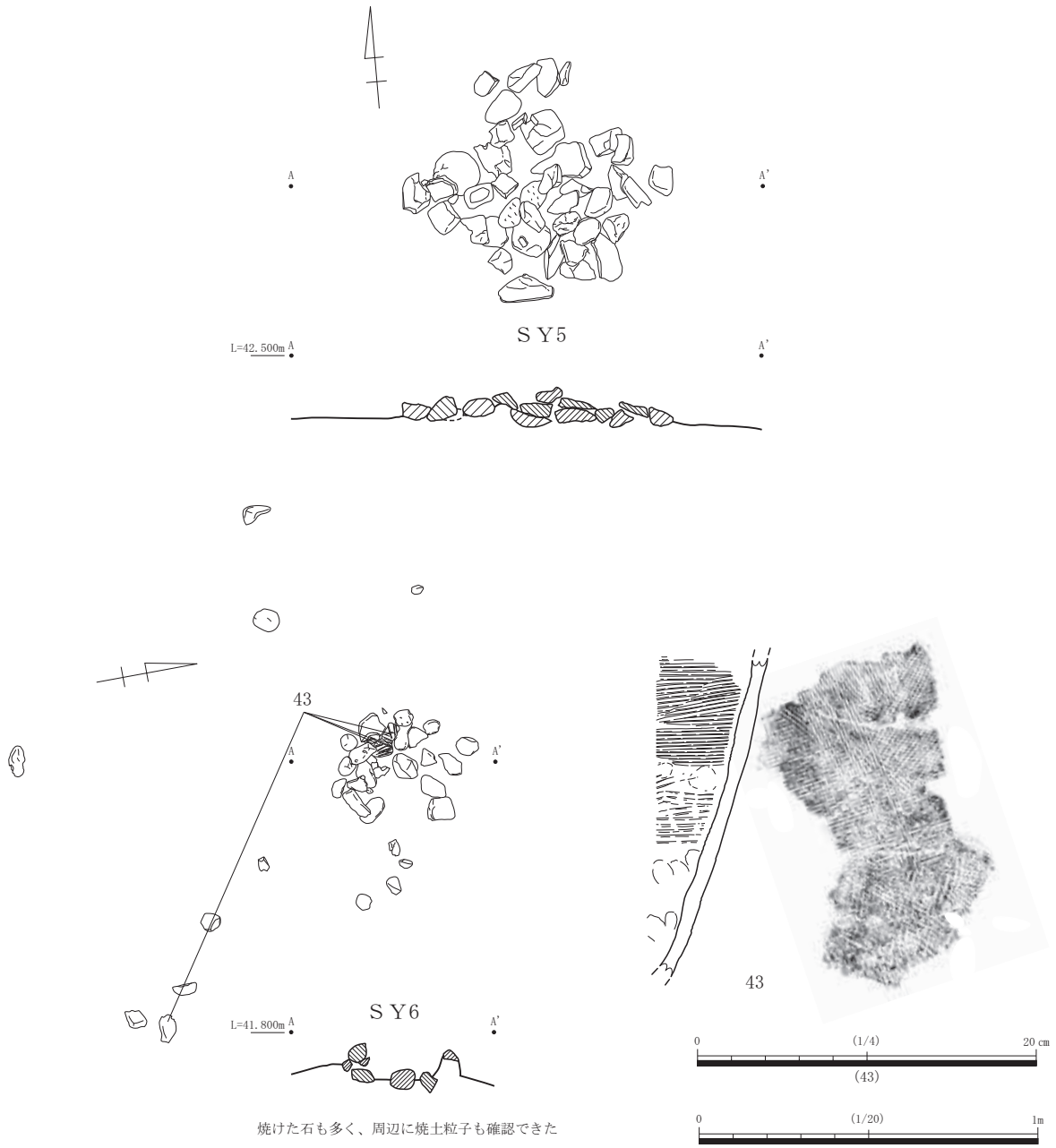
Ｔ１３グリッド、調査区東壁面付近に位置する。５層中位で検出した。大小差のある円礫、角礫で構成されている。数は少ないが、調査区外（東側）へ集石範囲が伸びる可能性があることから集石とした。しかし、何らかの特徴をもつ礫は無く、また掘り込みの確認もできなかったため、詳細は不明である。

これら集石の特徴としては、調査区東側に集中していることである。周辺地形は耕作地造成のために削平されているところが多いが、調査区全体は北西側に緩やかに傾斜している。集石遺構はこうした斜面上に築かれていたと考えられる。４基の集石は、このような配置特徴をもつことから推察して、同時期のものであると考えている。遺棄、移動された可能性が高いという視点で見れば共通するかもしれないが、検出された集石はＳＹ５に見る扁平礫の密形状、ＳＹ６に見る轟Ａ式土器と被熱した礫、ＳＹ７、８に見る散逸形状という、形状の違いや構成物の違いが存在する。周辺に使用施設箇所としての土坑などが検出されるなどすれば、今回の集石遺構と付随させた検討が可能となるのだが、今回の調査では検出されなかったこと、力量また確認不足を否めず残念でならない。

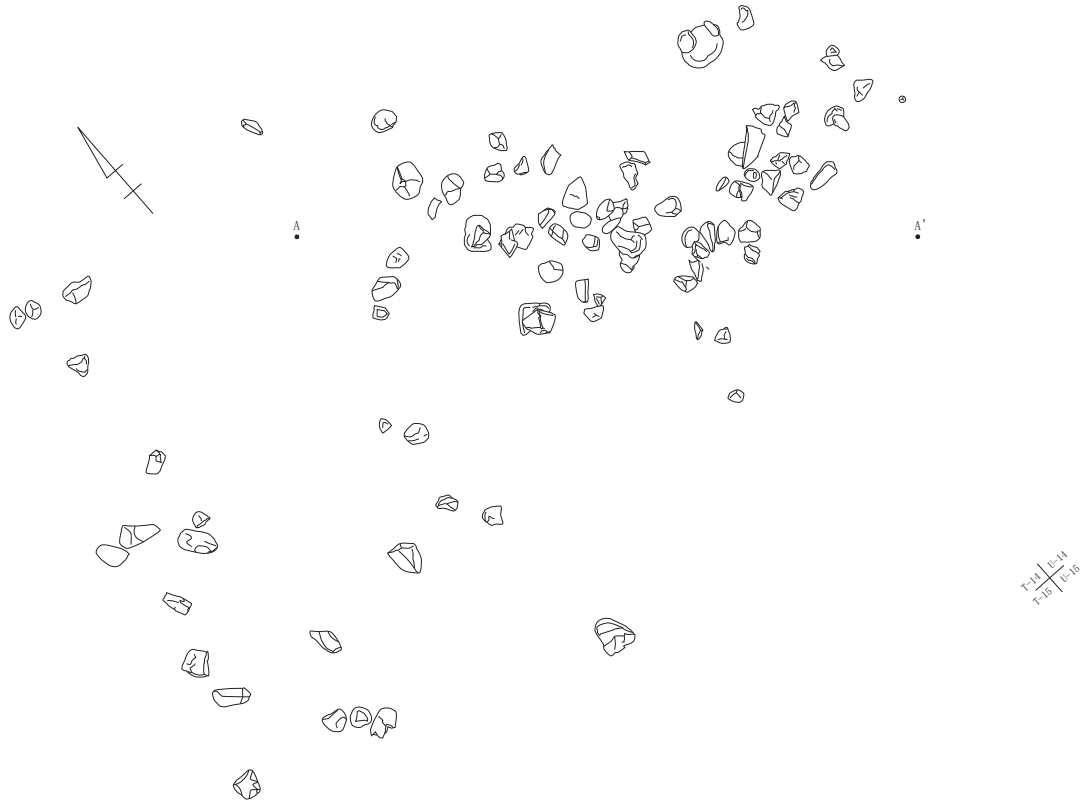
取り留めのないまとめと課題提供という形にはなってしまうが、遺構が検出されたグリッドを含む周辺グリッドからも円筒形条痕文土器、押型文土器、轟式土器が検出されたことは、ここで述べた遺構について今後の検討材料となりうる資料である。これらは図版１０５、１０６に図示している。

炉穴においても、当遺跡より北西部にある櫛島遺跡でも多くの炉穴が検出されていることからも、当時の生活域の広さを推察する根拠の一つになると考える。

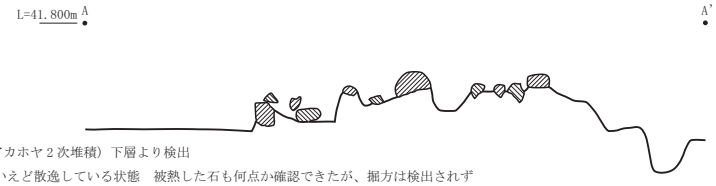
集石遺構に関しては、装飾古墳館参事池田朋生氏より、「石の本遺跡」に見る集石遺構の特徴から御教示いただいた。氏による、掘り込みを伴わない円礫の集石と、轟Ａ式には掘り込みをもつ焼土坑が伴うという検討見解をもとに考察した。



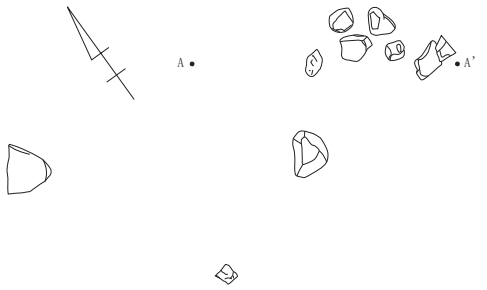
第 15 図　　ＳＹ5・6 遺構・出土遺物実測図



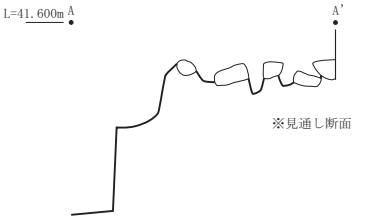
ＳＹ7



５層（アカホヤ２次堆積）下層より検出
集石といえど散逸している状態　被熱した石も何点か確認できたが、掘方は検出されず



ＳＹ8



５層（アカホヤ２次堆積）の下層より検出
掘方は確認できず

第 16 図　　ＳＹ7・8 遺構実測図

（３）縄文時代後～晩期の遺構・遺物

後～晩期の遺構検出は５層上面でおこなった。３、４層の遺物包含層では出土した遺物の量の多さと層の土色から、検出が困難であると判断した。検出できた遺構、特に竪穴建物は３、４層の遺物包含層掘削時に大半を壊してしまった状況ではあったが、その際に包含層内で出土遺物の量が多い箇所を注視し遺構検出時の一助とした結果、その下には概ね遺構の検出ができた箇所が多かった。整理作業では、遺構内出土遺物と遺構検出前の取上げ遺物との接合確認を丹念におこなうこととした。

①竪穴建物跡

ＳＩ９４（第１７図～第１９図）

Ｑ１９、Ｒ１９グリッドに位置する。ＳＩ９９の一部を壊している。平面形は楕円形で、断面は浅い皿状を呈する。長軸約５．５６ｍ、短軸約４．６８ｍ、検出面からの深さは約３９㎝を測る。長軸はＮ－８５°－Ｅである。埋土は単層である。黒褐色で締りは強く、粘性もやや強い。１㎜程度の焼土粒子のほか、炭化物を微量に含んでいる。整地層と考えられる。Ｐ１～Ｐ６を検出し、それぞれが主柱穴と考えられるが、南側のみ検出されていることが気がかりである。平面形はほぼ円形で、径は約３０～３５㎝、検出面からの深さは約２０㎝～４０㎝を測る。下端のレベルはほぼ一定であったが、柱痕を確認できた箇所はない。炉、貯蔵穴等も検出されていないため、構造、用途の詳細は不明である。

土器は内外器面にミガキ調整された浅鉢形土器、ミガキ調整や組織痕が施された深鉢形土器などが出土している。４６は補修孔をもつ。５５は胴部片を打ち欠いた円盤形土製品である。５６の土錘は孔径の大きい左から穿孔したと考えられる。５７は黒曜石製の石鏃で平基のものである。５８は黒曜石、５９は安山岩の石核である。６０は打製石斧で石材は安山岩で、表面に自然面を残す。６１～６３は、砂岩製の磨・敲石である。６３の側面は刃部研ぎのような痕跡を残す。

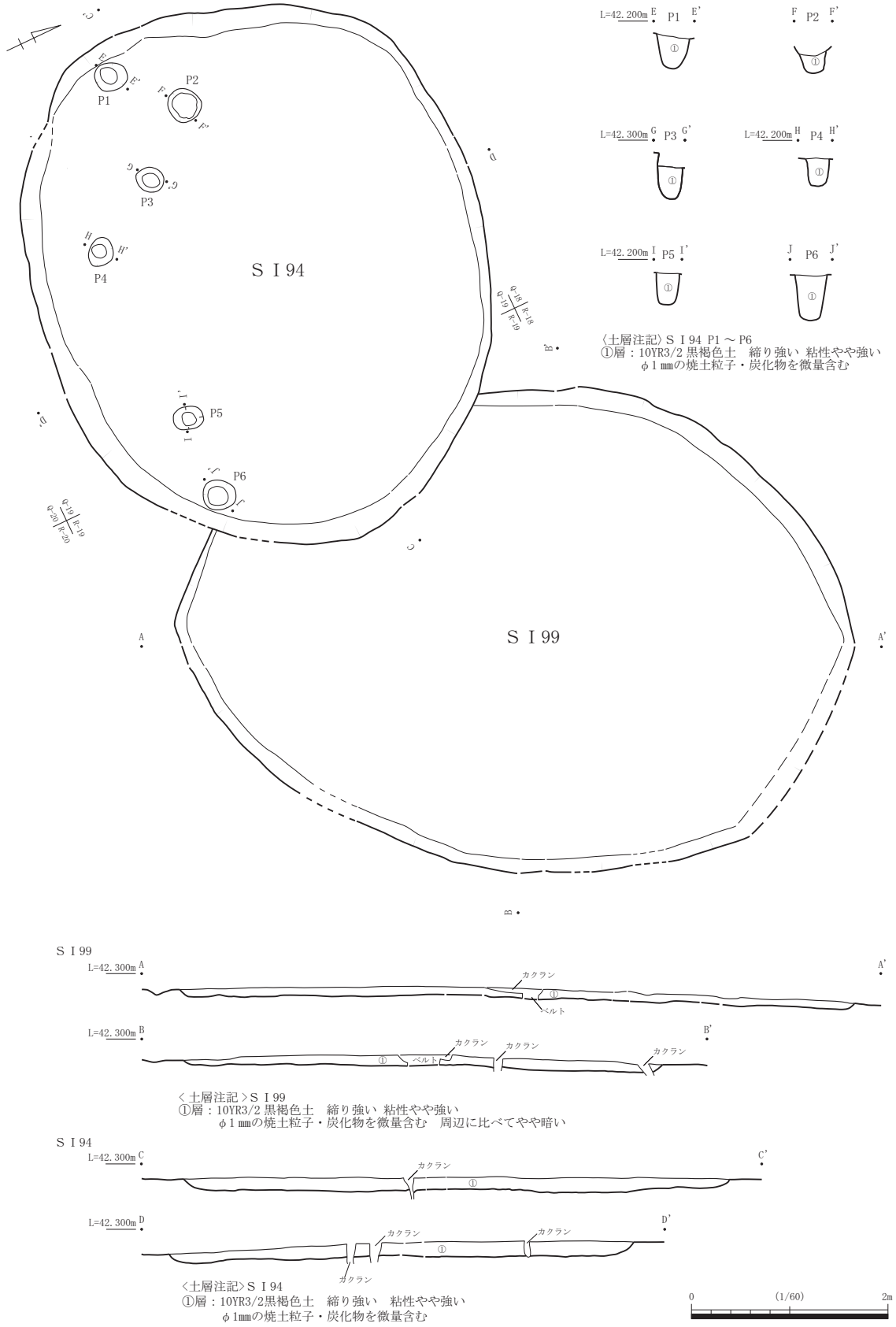
ＳＩ９９（第１７図、第１９図、第２０図）

Ｒ１８・１９グリッドに位置する。ＳＩ９４とＳＸ１に一部壊されている形で検出された。平面形は長楕円形で、断面は浅い皿状を呈する。長軸約６．８ｍ、短軸約４．８８ｍ、検出面からの深さは約１２㎝を測る。長軸はＮ－２５°－Ｅで、埋土は単層である。黒褐色で締りは強く、粘性はやや強い。ＳＩ９４と同じく１㎜程度の焼土粒子のほか、炭化物を微量に含んでいる。整地層と考えられる。ピット、炉、貯蔵穴等が検出されていない為、全くもって不明な竪穴構造物である。しかし、まとまった時期の遺物の出土があったためＳＩとした。

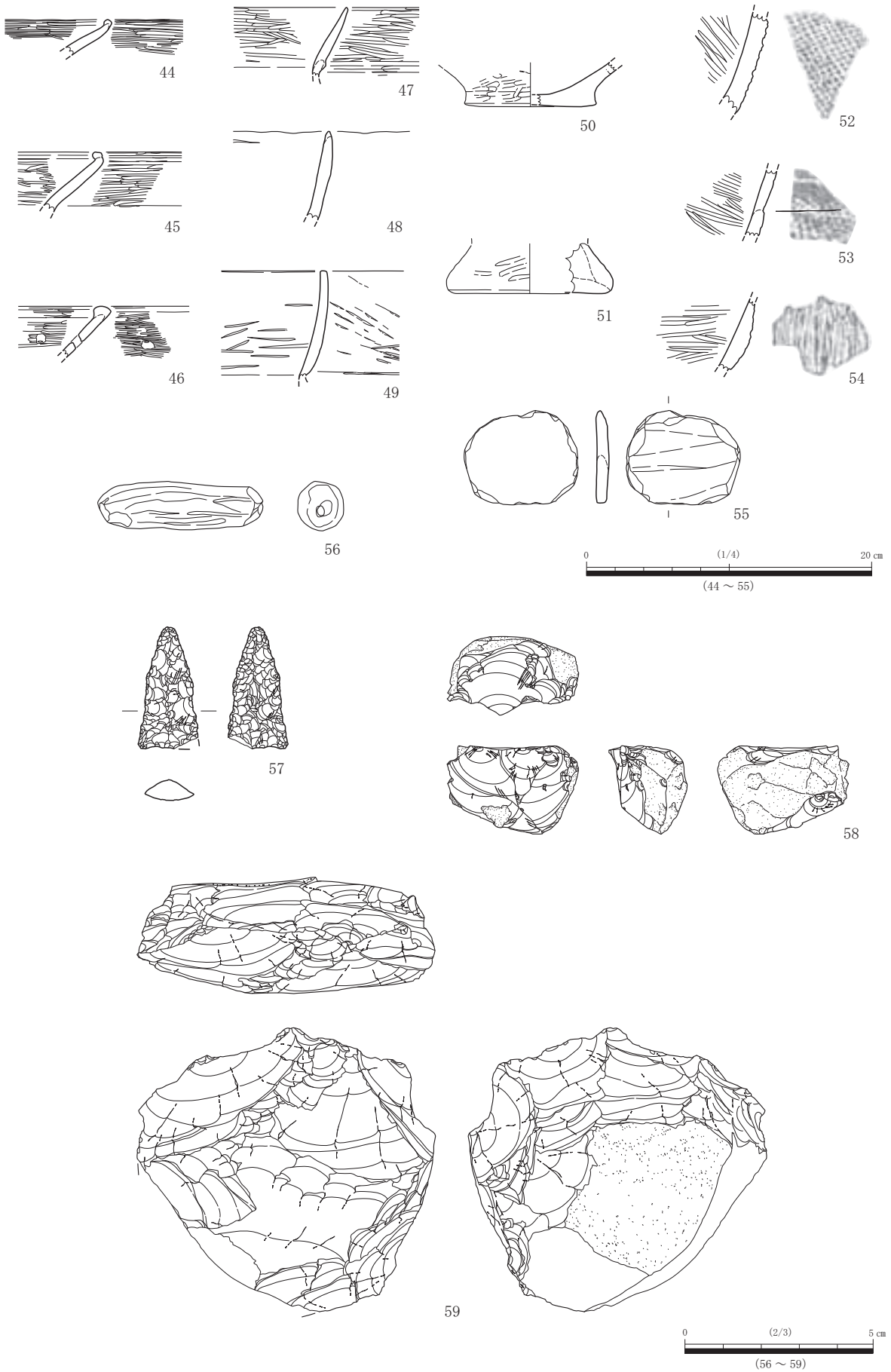
６４は山形の沈線を施し椀形を呈している。６５、６６は、内外器面ともにミガキ調整のある口縁部である。６７、６８はミガキ後に横方向への沈線を施した深鉢形土器である。７２は、深鉢形土器の胴部屈曲部を打ち欠いた円盤形土製品である。７３はチャート、７４は安山岩を石材とした石鏃で、Ｕ字状の抉りのある基部をもつ。それぞれ脚部の一部を欠損している。７５は黒曜石の石核である。７６は打製石斧、７７は頁岩製の磨製石斧で、ともに刃部を欠損する。７９は磨石である。主面に赤色顔料の付着を認める。

ＳＩ１０６（第２１図）

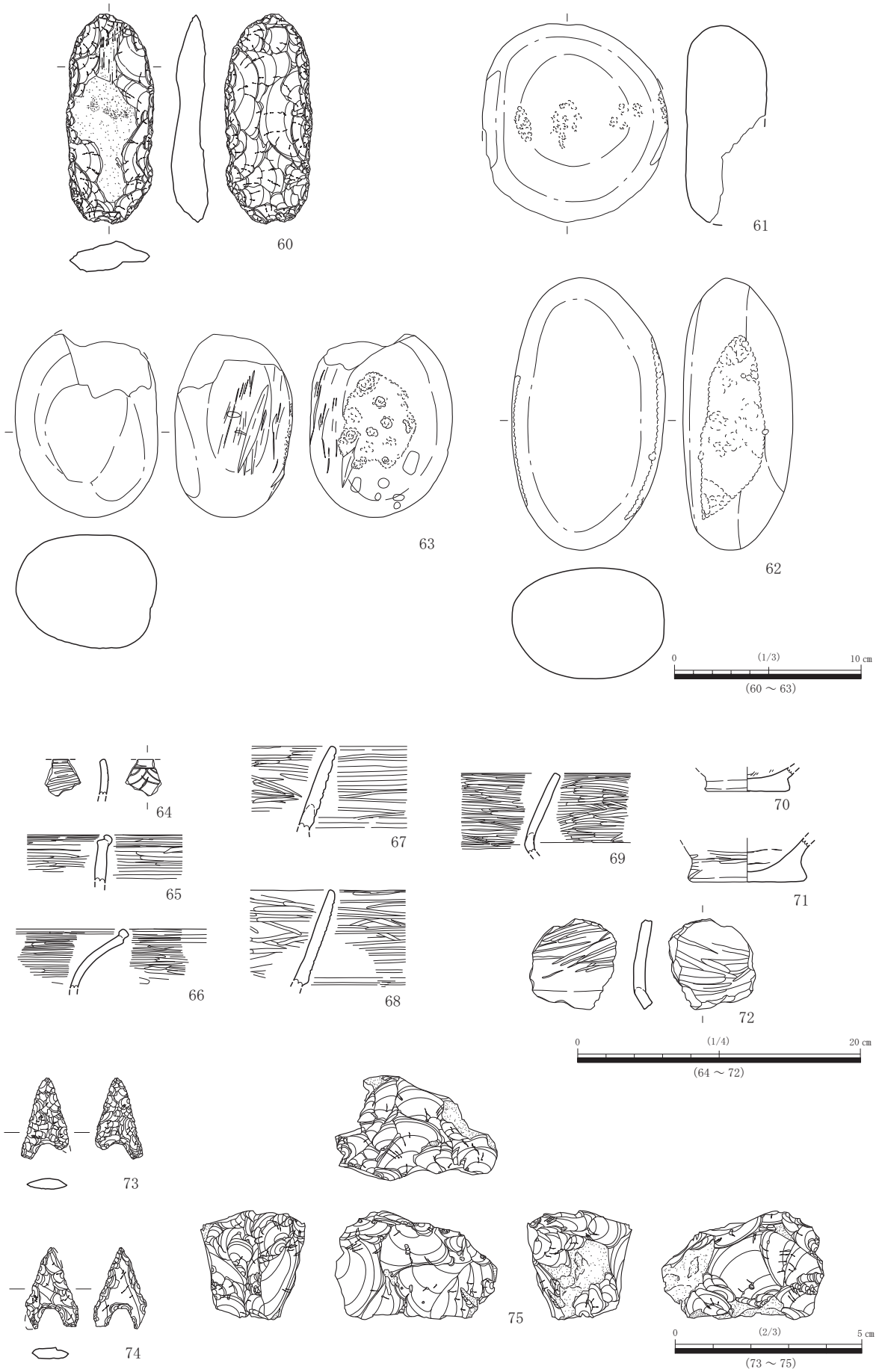
Ｑ１４、Ｒ１４グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、断面は浅い皿状を呈する。長軸約４．７ｍ、短軸約４．４４ｍ、検出面からの深さは約１２㎝を測る。長軸はＮ－３０°－Ｗで、埋土は単層である。暗褐色で締り、粘性ともにやや強い。整地層と考えられる。Ｐ１～Ｐ３を検出し、それぞれ主柱穴と考えられるが、柱痕は認められなかった。平面形はほぼ円形で、径は約３０～４０㎝、検出面からの深さは約２０㎝～



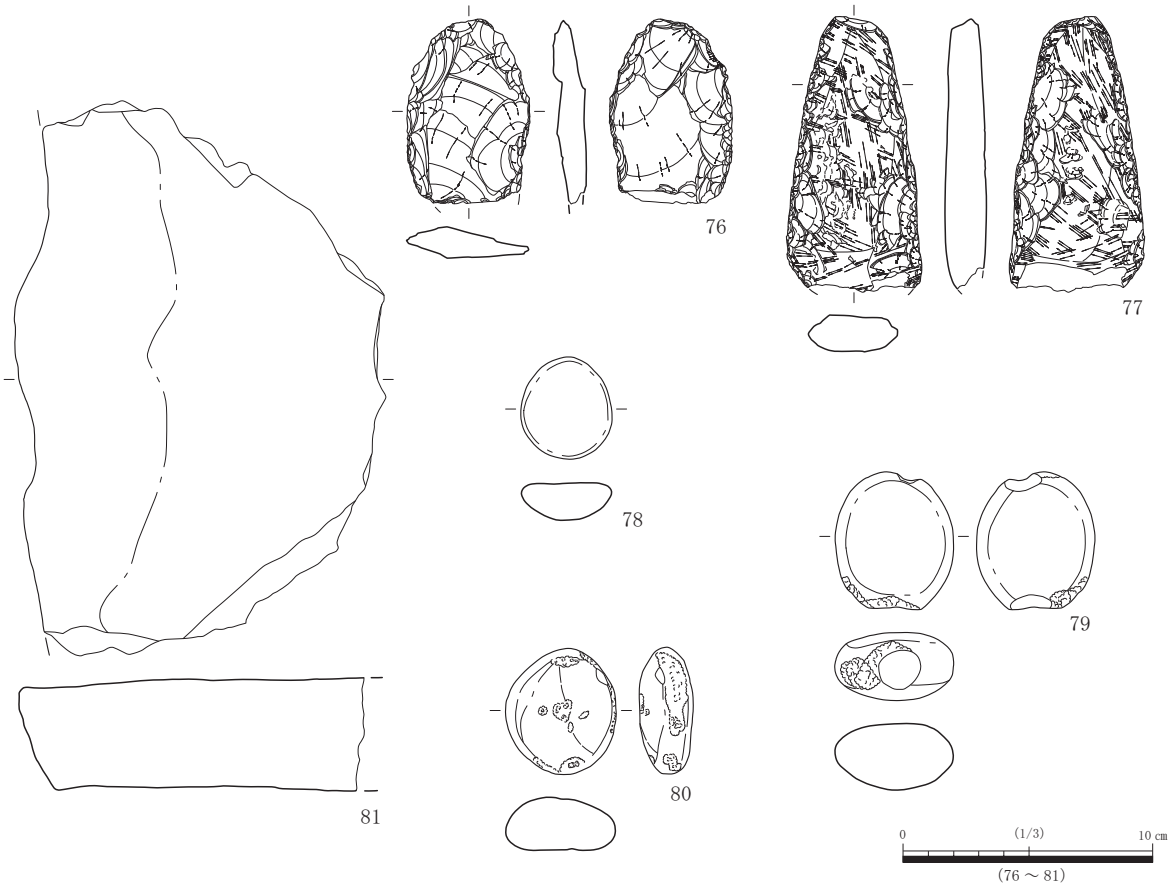
第 17 図　　S I 94・99 遺構実測図



第 18 図　　ＳＩ94 出土遺物実測図



第 19 図　　ＳＩ94・99 出土遺物実測図



第 20 図　　ＳＩ99 出土遺物実測図

４０㎝を測る。この３基以外のピット、炉、貯蔵穴等は検出されていない。

遺物は後～晩期に位置づけできるものが出土している。８２、８３に見るミガキ調整の口縁部の土器片のほか、底部も出土している。８８の磨石は、主面の磨痕から、手持ち砥石として使用した可能性も考えられる。

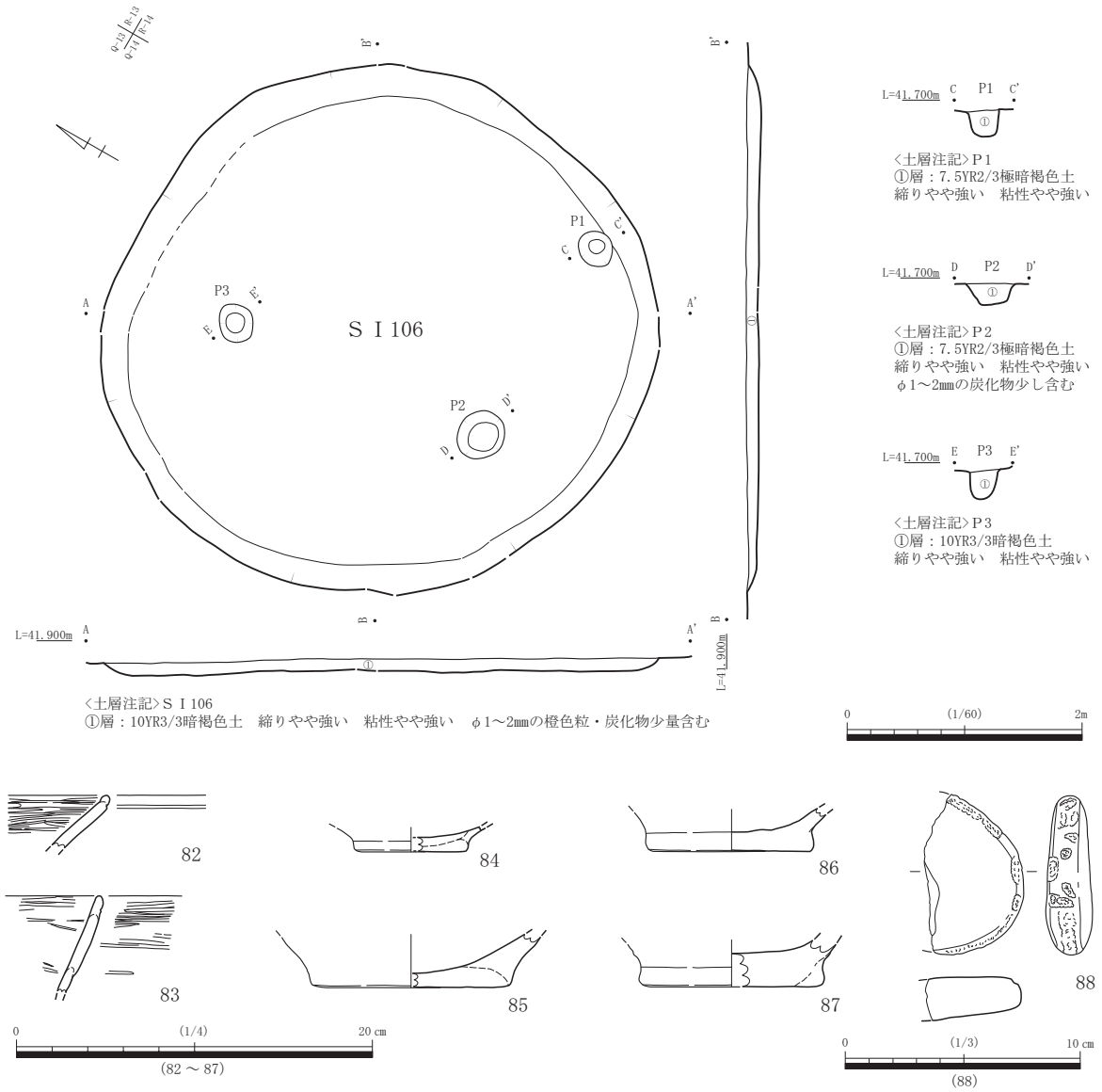
ＳＩ１０７（第２２図）

Ｐ１９グリッドに位置する。一部弥生期の遺構ＳＩ８１に壊されており、遺構南西部は調査区外へと延びる。断面は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは約２６㎝を測る。埋土は暗褐色土の単層で、締り、粘性ともにやや強い。約１～２㎜の焼土粒子と思われる橙色粒を少し含んでいる。整地層と考えられる。主柱穴は検出ができたＰ１～Ｐ４のいずれか、もしくは全ピットと考えられるが、Ｐ１、Ｐ４がそれぞれ壁面側に沿うように配置されていることが特徴的で、近い位置で隣り合うピットは、いずれかが主柱穴の支柱としての機能をもっていた可能性もある。平面形はほぼ円形で、径は約３０～３５㎝、検出面からの深さは約１９㎝～２７㎝を測る。炉はＳＩ８１に壊されているか、調査区外に配置されていると考えられる。

遺物は石器が主である。８９の黒曜石製の石鏃は左側面の一部、先端部を欠損しているがＵ字状の抉りをもっていたと思われる。９１の頁岩製の磨製石斧は、刃部欠損ののち再加工した痕跡を残す。

ＳＩ１１０（第２３図）

Ｐ１４・１５グリッドに位置する遺構である。半分以上を後世の遺構に、上層のほとんどをＳＸ１に壊された状況で検出した。断面は浅い皿状を呈する。現況の長軸は約４．３ｍ、検出面からの深さは約１４㎝



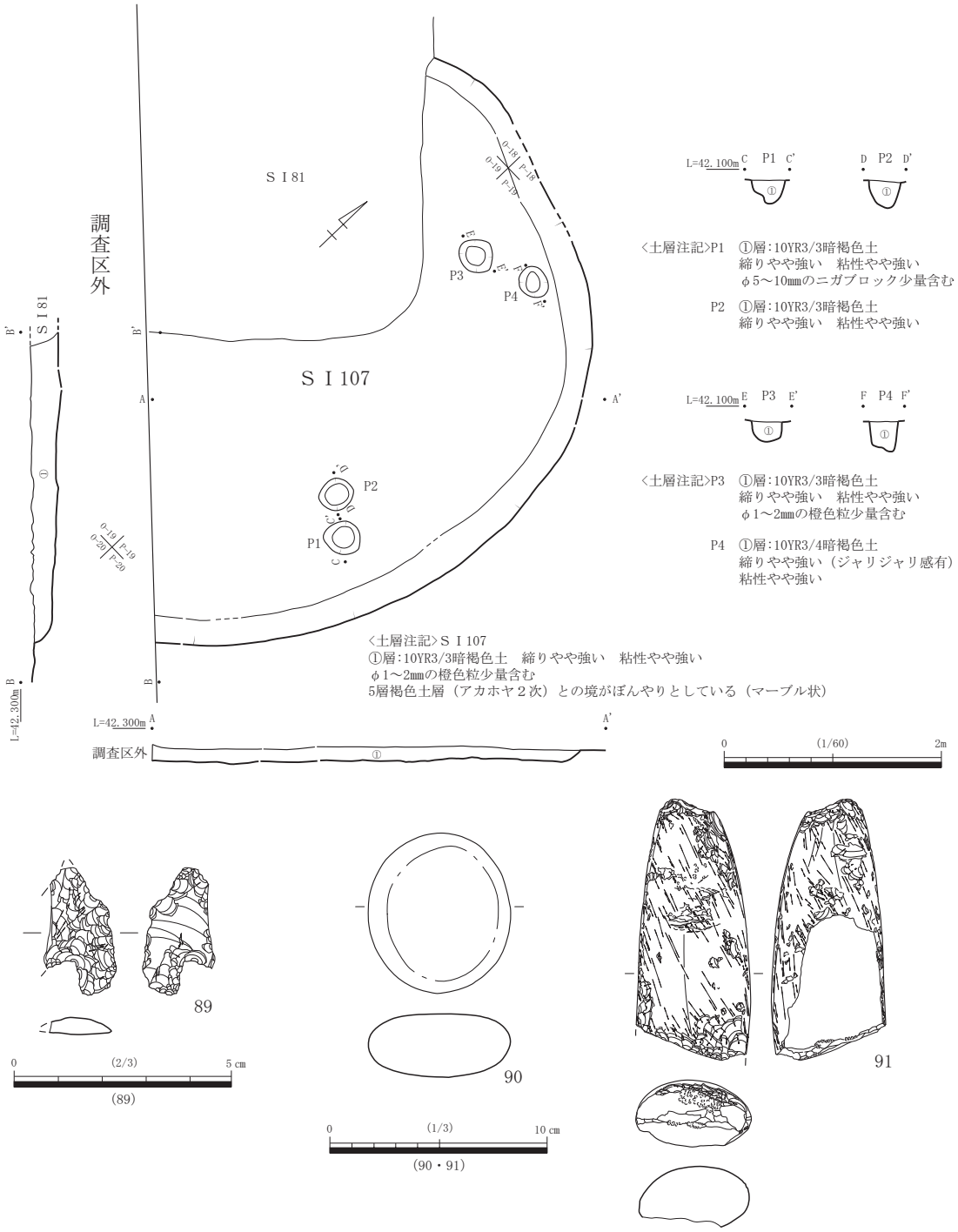
第 21 図　　ＳＩ106 遺構・出土遺物実測図

を測る。埋土は暗褐色土の単層で、締り、粘性ともにやや強い。約１～２㎜の焼土粒子と思われる橙色粒を少し含み、炭化物を多く含んでいる。整地層と考えられる。主柱穴は検出ができたＰ１～Ｐ４と考えられる。柱穴間はＰ１～Ｐ２が約０．９５ｍ、Ｐ２～Ｐ３が約１．０５ｍ、Ｐ３～Ｐ４が約１．１０ｍである。平面形はほぼ円形で、径は約３０～３２㎝、検出面からの深さは約１８㎝～３２㎝を測る。炉はＳＩ８９またはＳＸ１に壊されていると考えられる。

遺物は９２の深鉢形土器の底部が出土している。

ＳＩ１１３（第２４図）

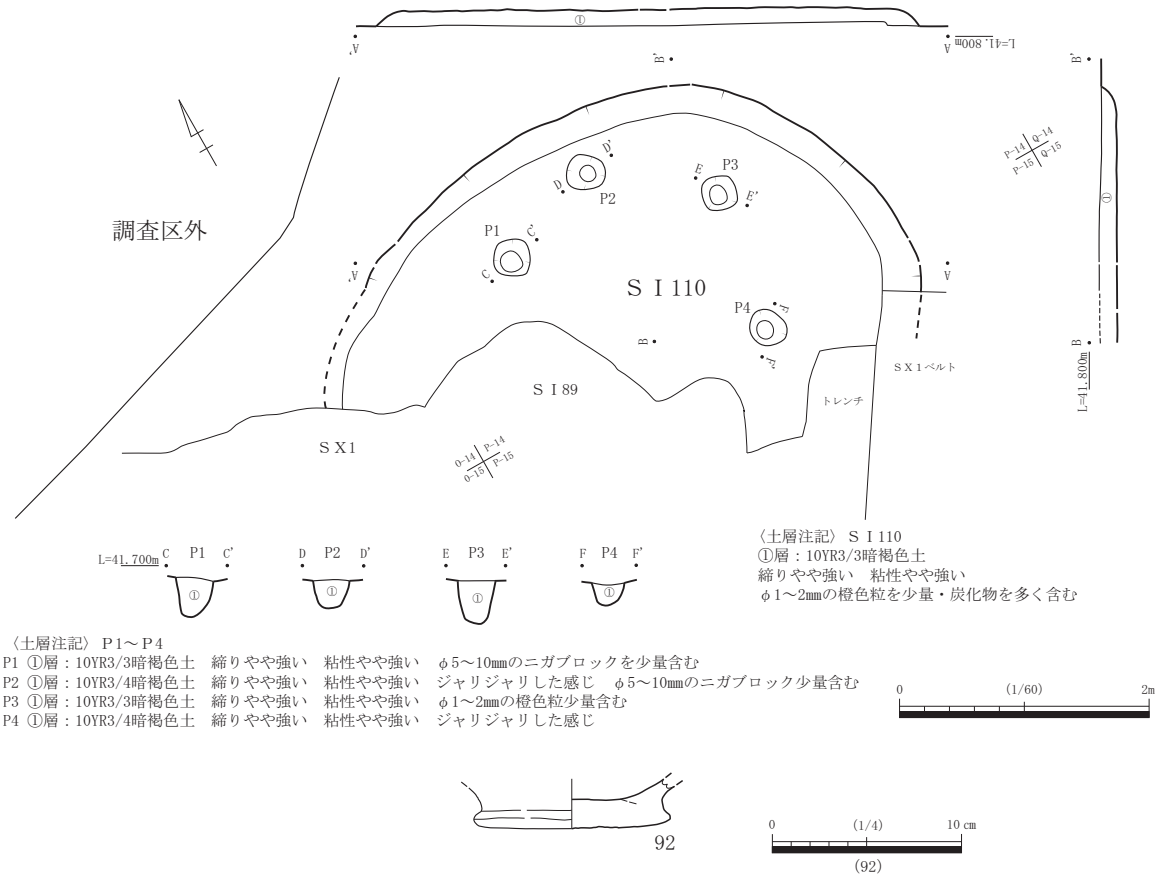
Ｎ１５・１６、Ｏ１６グリッドに位置する。半分以上を弥生期の遺構（ＳＩ８２、８７、８８）に壊された状況で検出した。断面は浅い皿状を呈し、現況の長軸は約５．０ｍ、検出面からの深さは約１２㎝を測る。平面形は楕円形と推定できる。長軸はＮ－３０°－Ｗである。埋土は暗褐色土の単層で、締り、粘性ともにやや強い。約１～２㎜の焼土粒子と思われる橙色粒、炭化物を少し含んでいる。整地層と考えられる。主



第 22 図　　ＳＩ107 遺構・出土遺物実測図

柱穴は、壁面側に沿うように検出したＰ１～Ｐ６であるが、柱痕は確認できていない。柱穴間はＰ１～Ｐ２が約１．１０ｍ、Ｐ２～Ｐ３が約１．１０ｍ、Ｐ３～Ｐ４が約０．８０ｍ、Ｐ４～Ｐ５が約１．０８ｍ、Ｐ５～Ｐ６が約０．７０ｍである。平面形はほぼ円形で、径は約３１～３７㎝、検出面からの深さは約１７㎝～２６㎝を測る。炉はＳＩ８２、８７、８８に壊されていると考えられる。

遺物は９３の黒曜石を石材とした石鏃が出土している。基部は欠損している。先端部に向けて屈曲し、鈍角となる。



第 23 図　　ＳＩ110 遺構・出土遺物実測図

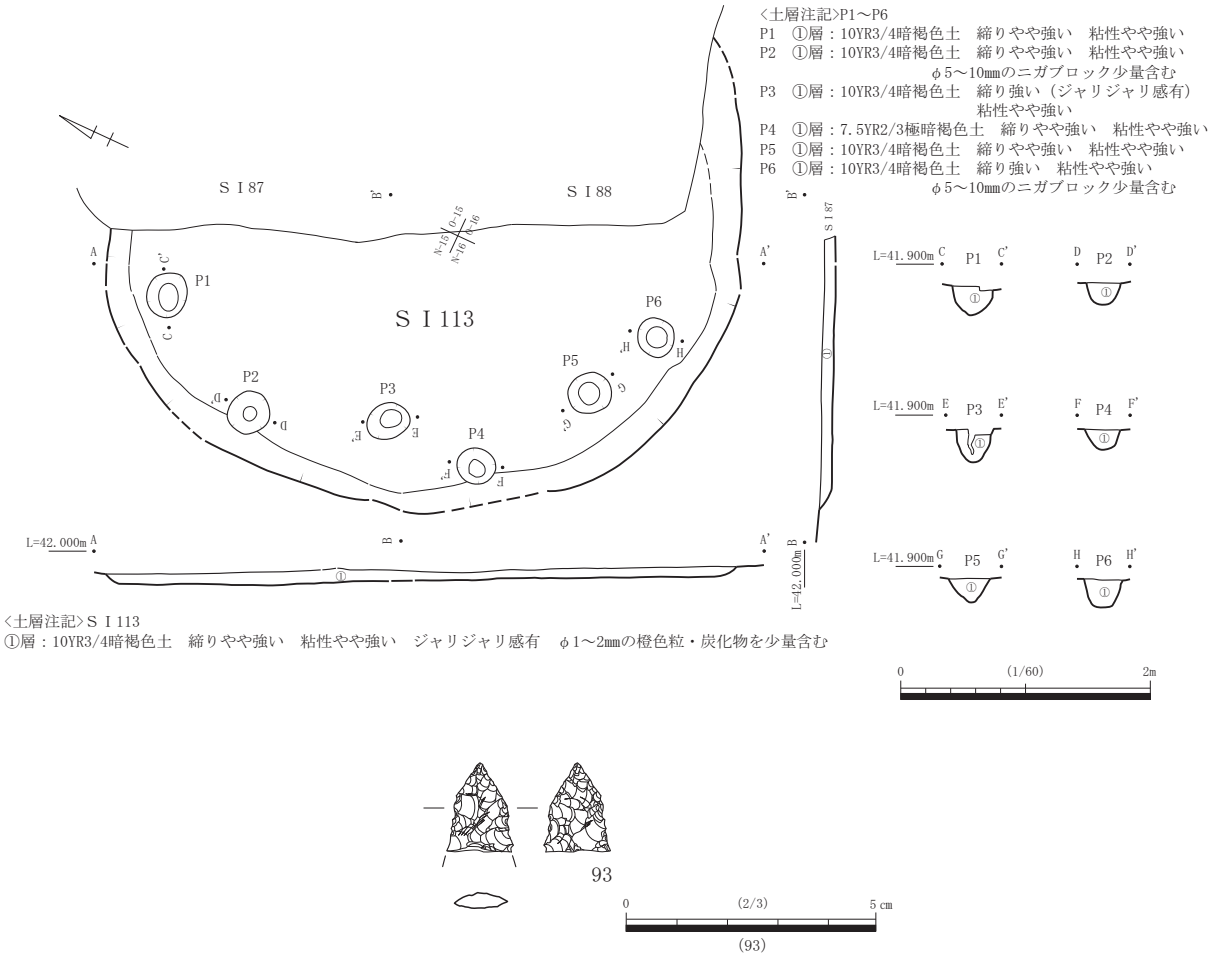
ＳＩ１１５（第２５図）

Ｍ１６、Ｎ１６グリッドに位置する遺構で、ＳＩ１１６の南西部の一部を壊している。平面形はほぼ円形で北側にやや張り出しており、断面は浅い皿状を呈する。長軸は約３．９８ｍ、短軸約３．９４ｍ、検出面からの深さは約１２㎝を測る。長軸はＮ－３０°－Ｗである。埋土は暗褐色土の単層で、締り、粘性ともにやや弱い。焼土、炭化物を少し含んでいる。整地層の一部と考えられる。主柱穴は、壁面側に沿うように検出したＰ１～Ｐ５であるが、柱痕は確認できていない。柱穴間はＰ１～Ｐ２が約０．９０ｍ、Ｐ２～Ｐ３が約１．８７ｍ、Ｐ３～Ｐ４が約１．４３ｍ、Ｐ４～Ｐ５が約０．９０ｍである。平面形はほぼ円形で、径は約２４～３６㎝、検出面からの深さは約１４㎝～１９㎝を測り、下端のレベルはほぼ一定である。炉、貯蔵穴等は検出されていないが、南側の撹乱に壊されている可能性がある。

出土した遺物の９４は深鉢形土器の底部である。外器面に斜め方向の条痕を残している。

ＳＩ１１６（第２５図）

Ｍ１５グリッドに位置し、ＳＩ１１６、撹乱により南側の一部を壊されている。平面形は楕円形で、断面は浅い皿状を呈する。長軸は推定約５．０ｍ、短軸約４．６ｍ、検出面からの深さは約１０㎝を測る。長軸はＮ－２９°－Ｗである。埋土はにぶい黄褐色土で、締り、粘性ともにやや弱い。炭化物を少し含んでいる。整地層と考えられる。主柱穴は、壁面側に沿うように検出したＰ１～Ｐ５であるが、柱痕は確認できていない。柱穴間はＰ１～Ｐ２が約２．６ｍ、Ｐ２～Ｐ３が約１．２ｍ、Ｐ３～Ｐ４が約０．７５ｍ、Ｐ４～Ｐ５が約０．４５ｍである。平面形はほぼ円形で、径は約３２～４０㎝、検出面からの深さは約１１㎝～２３㎝を測り、下端のレベルはほぼ一定である。炉、貯蔵穴等は検出されていない。



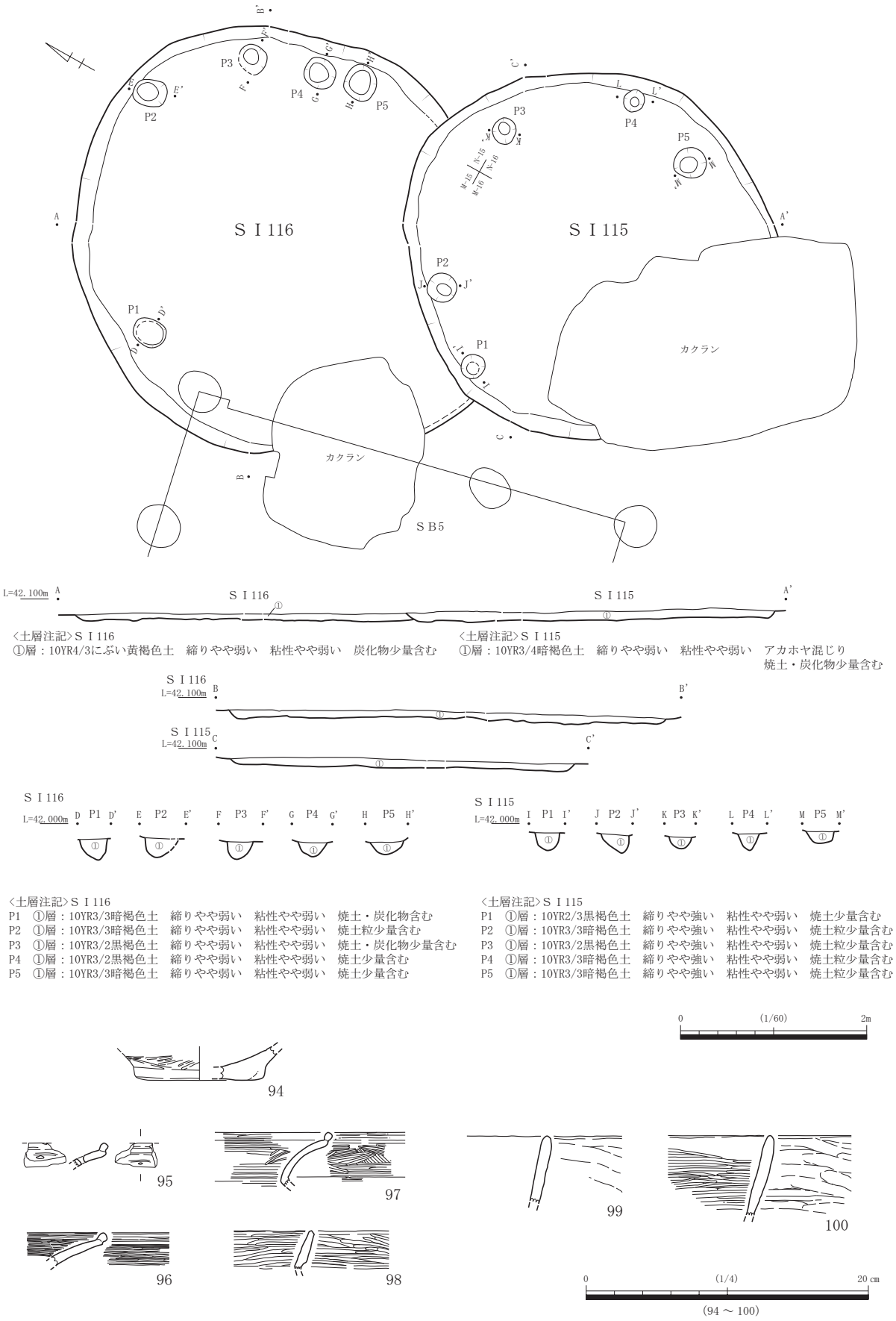
第 24 図　　ＳＩ113 遺構・出土遺物実測図

遺物は後～晩期を位置づける遺物が出土している。９５～９７はミガキ調整、沈線を施した口縁資料だが、９５は補修孔をもつ。１００は外器面に条痕をもつ深鉢形土器の口縁部である。

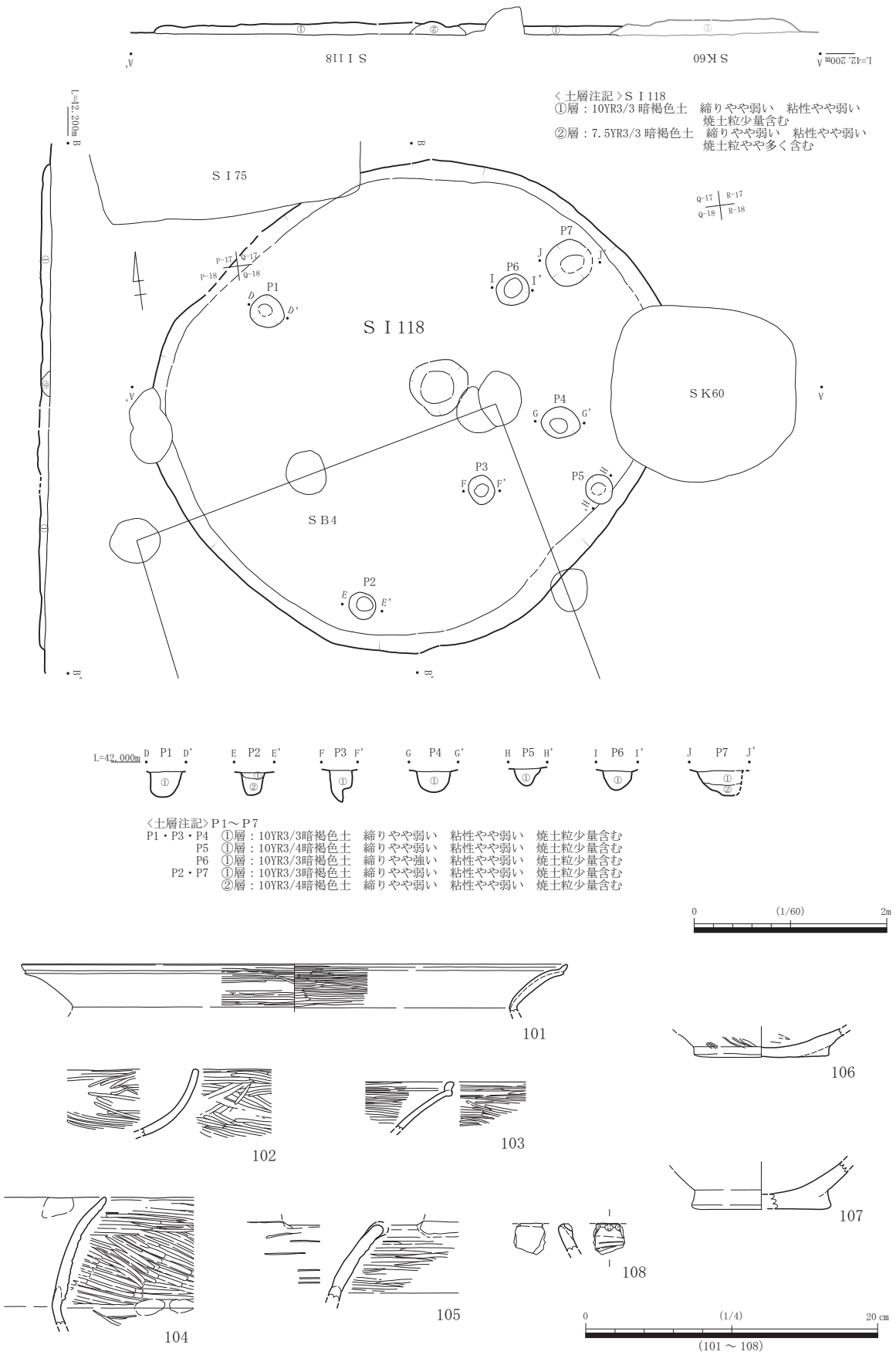
ＳＩ１１８（第２６図、第２７図）

Ｑ１８グリッドに位置し、後世の遺構（ＳＩ７５、ＳＢ４、ＳＫ６０）に一部壊された状況で検出している。平面形はほぼ円形で、断面は浅い皿状を呈する。長軸は約５．１ｍ、短軸約５．０４ｍ、検出面からの深さは約１６㎝を測る。長軸はＮ－６８°－Ｗである。埋土は単層で、締り、粘性ともにやや弱い暗褐色土である。焼土粒を少し含んでいる。検出した主柱穴はＰ１～Ｐ７であるが、柱痕は確認できていない。平面形はほぼ円形で、径は約２９～４０㎝、検出面からの深さは約２０㎝～３３㎝を測り、下端のレベルは一定ではない。ほぼ中央に炉の最下層を考えられる遺構を検出している。焼土粒を多く含んだ埋土である。

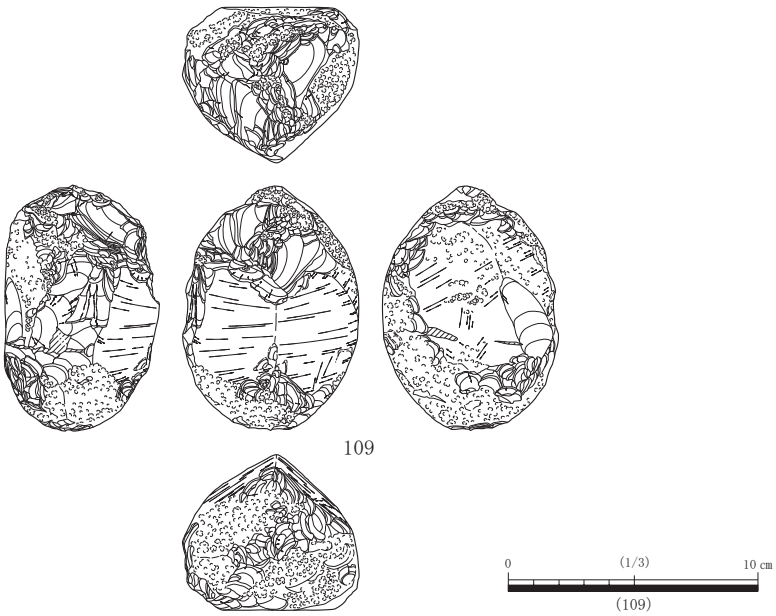
１０１～１０３はミガキ調整を施した浅鉢形土器の口縁であるが、１０１は復元口径が約３７．４㎝を測る。１０４の深鉢形土器の口縁は、口縁上部は横方向、下部は左上がりの条痕を施している。内面上部に指頭痕を残すが、調整、施文時の手持ち痕とも考えられる。１０６の底部は内面に煤の付着がある。１０５は貼り付けられていたリボン状の突起が剥落した跡と考えられる。１０８は刻目突帯を施文した山ノ寺式のものと考えられる口縁部片である。１０９は頁岩製の敲石で、石斧などの加工、調整をする際の敲打具と考えられる。



第 25 図　　S I 115・116 遺構・出土遺物実測図



第 26 図　　Ｓ Ｉ 118 遺構・出土遺物実測図 1



第 27 図　　ＳＩ118 出土遺物実測図２

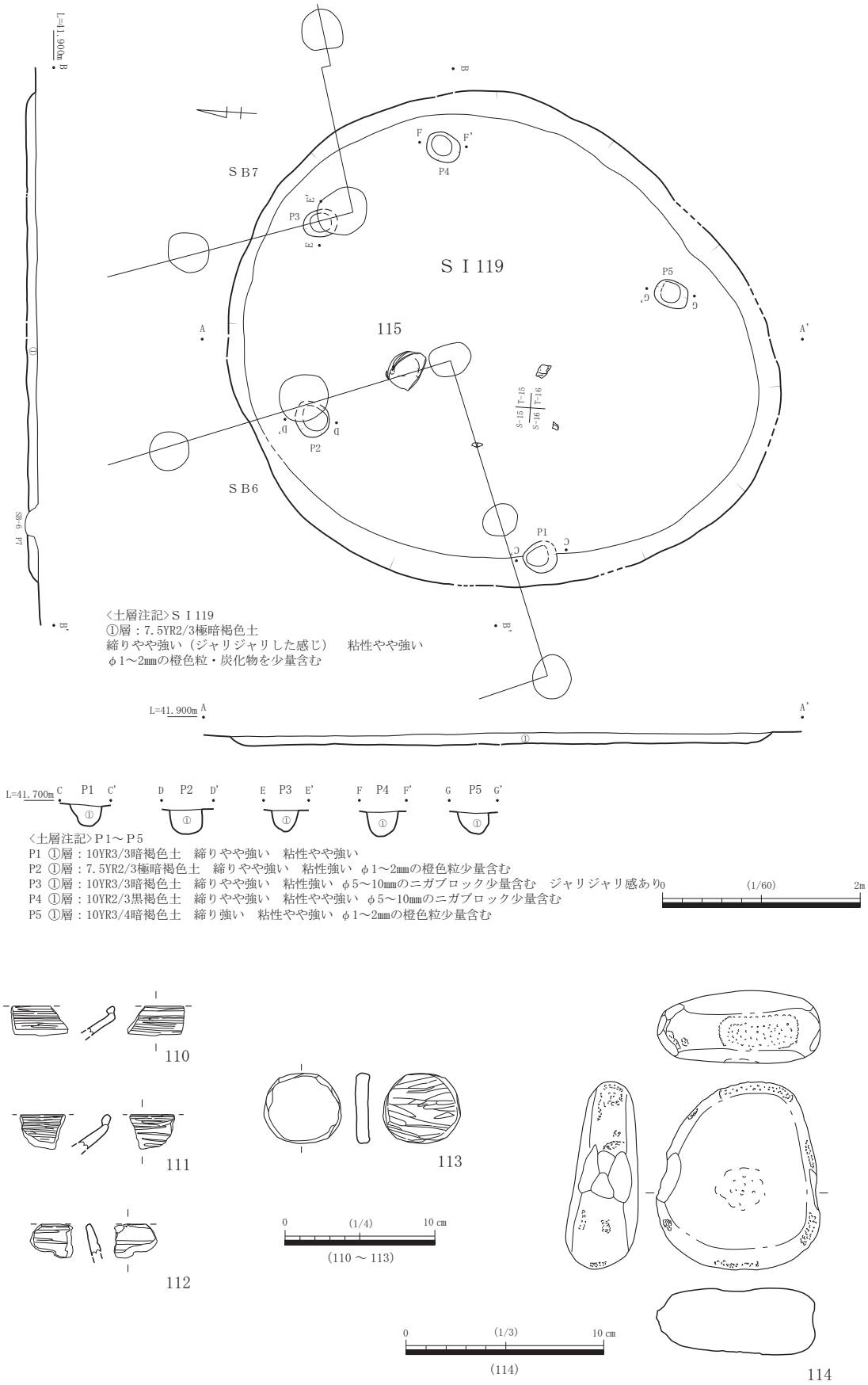
ＳＩ１１９（第２８図、第２９図）

Ｓ１５・１６、Ｔ１５・１６グリッドに位置する遺構である。後世の遺構（ＳＢ６、ＳＢ７、ＳＫ４８）に一部を壊されている。南西側がやや張り出したプランである。断面は浅い皿状を呈する。長軸は約５．４４ｍ、短軸約４．９６ｍ、検出面からの深さは約１２㎝を測る。長軸はＮ－３°－Ｗである。埋土は単層である。極暗褐色で、締り、粘性ともにやや強く、１㎜～２㎜の焼土と考えられる橙色粒、炭化物を少し含んでいる。整地層と考えられる。主柱穴は、壁面側に沿うように検出したＰ１～Ｐ５であるが、柱痕は確認できていない。柱穴間はＰ１～Ｐ２が約２．６３ｍ、Ｐ２～Ｐ３が約２．０ｍ、Ｐ３～Ｐ４が約１．４６ｍ、Ｐ４～Ｐ５が約２．７２ｍ、Ｐ５～Ｐ１が約２．９８ｍである。平面形はほぼ円形で、径は約２７～３４㎝、検出面からの深さは約２２㎝～２５㎝を測り、下端のレベルはほぼ一定である。炉、貯蔵穴等は検出されていない。

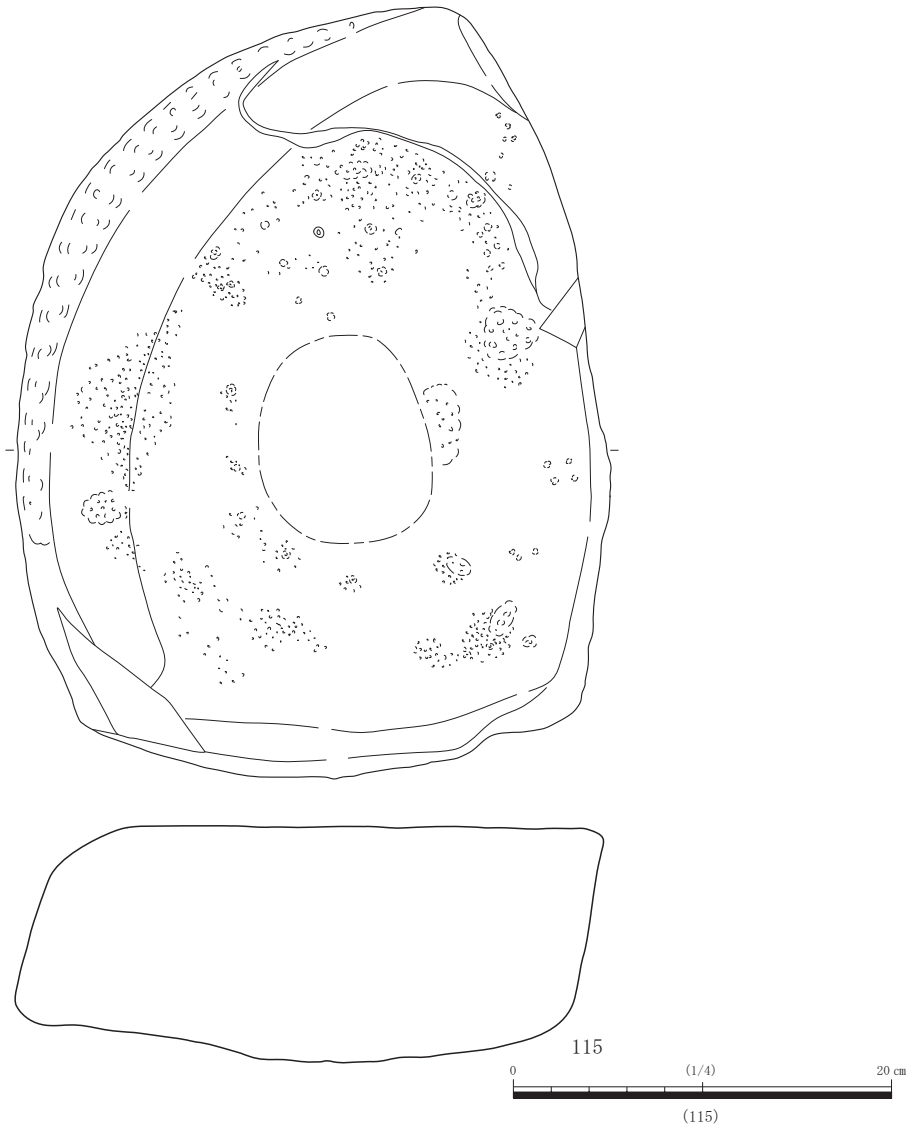
遺物は１１０、１１１の内外器面にミガキ調整を施した浅鉢形土器の口縁部片のほか、１１３の深鉢形土器の胴部を打ち欠き、研磨、面取りを施した円盤形土製品がある。１１４は敲打痕を多く残した磨・敲石であるが全体的に被熱している。１１５は石皿で、表面は細かい敲打痕を多く残し、中央部分のみ擦れている。

ＳＩ１２０（第３０図）

Ｒ１６、Ｓ１６グリッドに位置している。南西側の一部をＳＸ１に壊されている。平面形は楕円形で、断面は浅い皿状を呈する。長軸は約３．４ｍ、短軸約３．０８ｍ、検出面からの深さは約１２㎝を測る。本調査区で検出した縄文期竪穴建物の中で法量の一番小さい遺構である。長軸はＮ－３°－Ｗである。埋土は暗褐色土の単層で、締り、粘性ともにやや強く、１㎜～２㎜の焼土と考えられる橙色粒、炭化物を少し含んでいる。整地層と考えられる。主柱穴は、検出したＰ１～Ｐ５であると考えられるが、柱痕は確認できていない。平面形はほぼ円形で径は約２６～３０㎝、検出面からの深さは約１５㎝～３０㎝を測り、下端のレベルもほぼ一定である。炉、貯蔵穴等は検出されていない。遺構内に遺物の散逸が多いことに特徴をもつがどれも小片であった。遺構のサイズから住居としての機能をもっていたかどうかは不明だが、前述のＳＩ１１９と近接していること、遺物の散逸が確認できていることから、何らかの用途をもった竪穴構造物があったと考え



第 28 図　　S I 119 遺構・出土遺物実測図 1



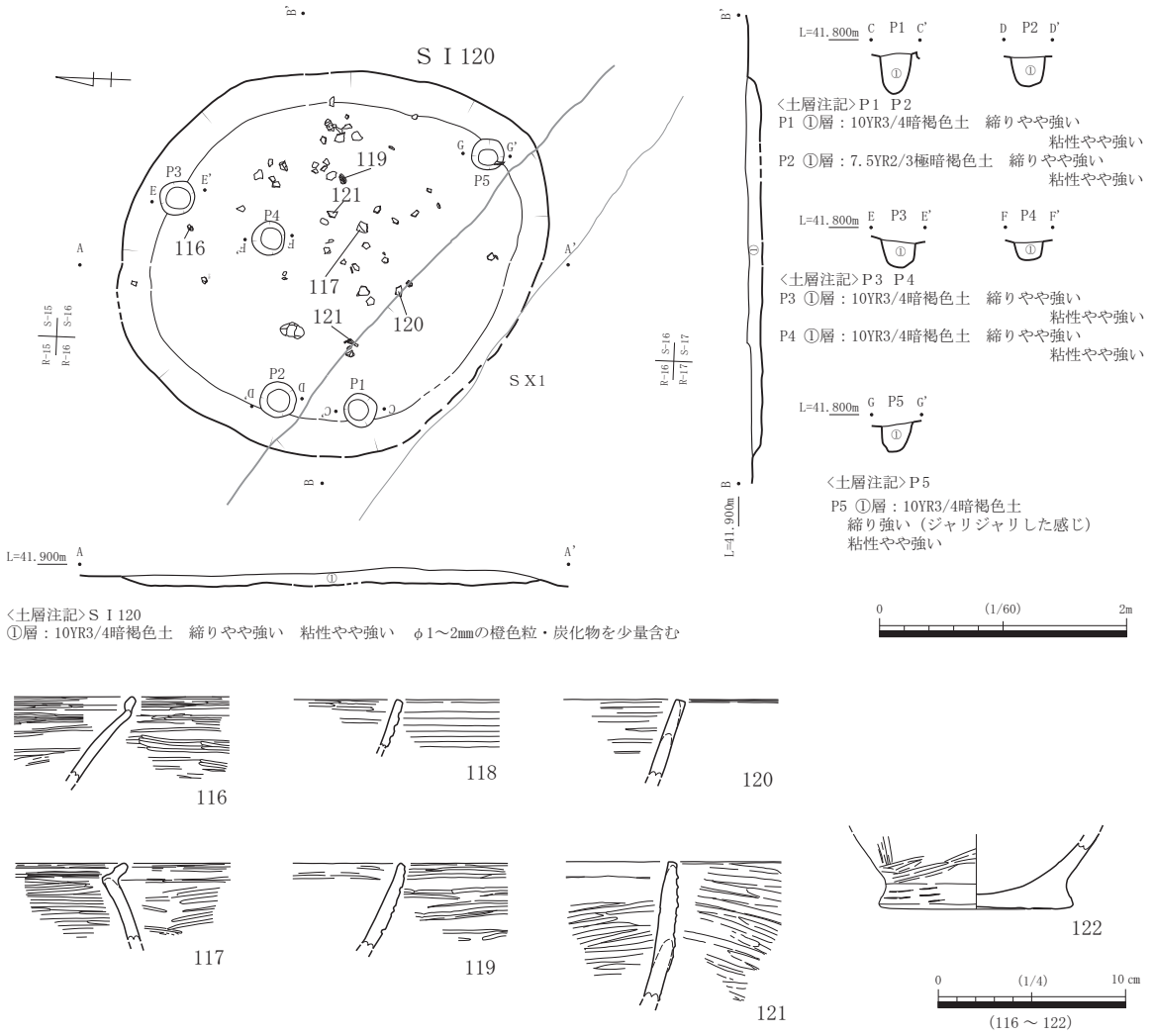
第 29 図　　ＳＩ119 出土遺物実測図２

られる。

遺物は土器が主である。１１６、１１７は浅鉢形土器で、横方向のミガキを施している。１１８～１２２は深鉢形土器で、１１８は４条の沈線が施されている。１１９、１２１、１２２は条痕を施している。１２１の条痕調整時の貝殻は、約２．５㎝程度の大きさと考えられる。

ＳＩ１２１（第３１図）

Ｒ１８・１９、Ｓ１９グリッドに位置する遺構である。同じ後～晩期の遺構（ＳＩ９９）、後世の遺構（ＳＸ１）にほとんどを壊されている。検出したグリッドの５層掘削時に遺物の出土量の多さから注視し、再精査した結果検出した。そのため、西側の埋土のほとんどを掘削してしまったが、ピット、炉を検出したことから遺構と特定した。断面は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは約２８㎝を測る。埋土は２層に分けることができる。埋土１層は暗褐色で、締り、粘性ともにやや強く、１㎜～２㎜の焼土と考えられる橙色粒を少し含んでおり、遺物を多く含んでいる層である。使用後の堆積土と考えられる。埋土２層は黒褐色で上層に部分的ではあるが締りがとても強い箇所があり硬化面と考えられる。粘性はやや強い。整地層と考えられ、



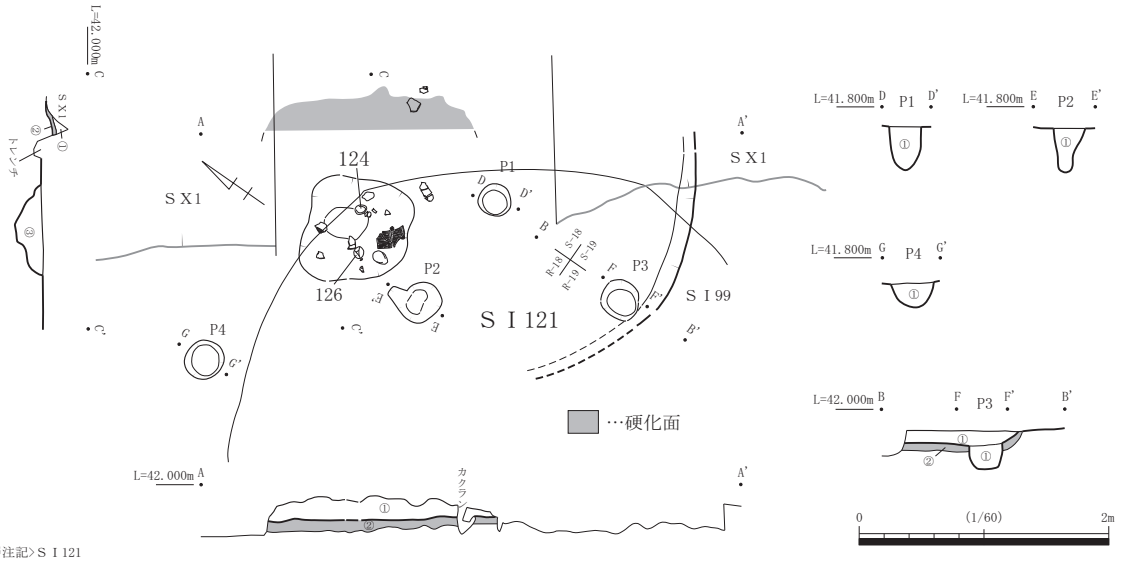
第 30 図　　ＳＩ120 遺構・出土遺物実測図

２層上面で検出が確認されたピットもある。（Ｂ - Ｂ’土層断面図参照）主柱穴は検出したＰ１～Ｐ４である。平面形はほぼ円形で、径は約２６～４４㎝、検出面からの深さは約２１㎝～３６㎝を測り、下端のレベルは一定ではない。推定で中央よりやや西側に位置すると考えられる箇所に炉を検出している。平面形は歪な楕円形で、径は最長部で約１ｍ、検出面からの深さは約２２㎝を測る。埋土は単層で、締り、粘質ともにやや強い暗褐色土である。１㎜～２０㎜の焼土粒を多く含み、シロニガブロックを下層に含む。

１２３の土器は口径約３１．２㎝を測る深鉢形土器で、内外器面ともにナデ調整を施している。内器面口縁部の一部に黒斑がある。良好な焼成で、胎土には０．５㎜～１㎜の長石、角閃石を含んでいる。石器は磨・敲石が主で、炉内からは１２４、１２６の２点が出土している。１２４は被熱している箇所がある。

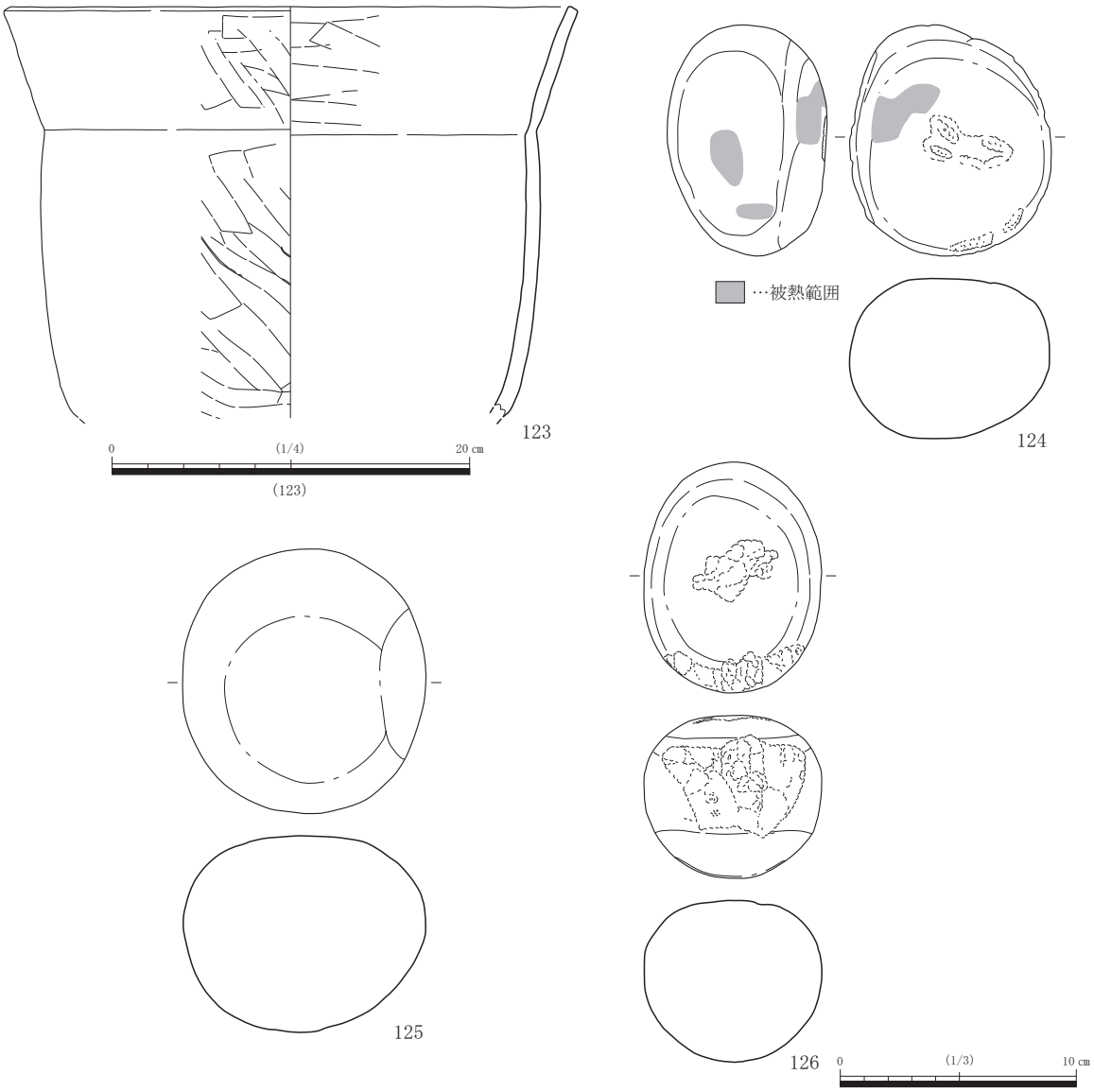
ＳＩ１２２（第３２図）

Ｏ１６、Ｐ１６グリッドに位置している。北側のほとんどを後世の遺構（ＳＩ８８、ＳＸ１）に壊されている。平面形は楕円形と考えられ、断面は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは約１６㎝を測る。埋土は暗褐色土の単層で、締り、粘性ともにやや強く、１㎜～２㎜の焼土と考えられる橙色粒、炭化物を少し含んで

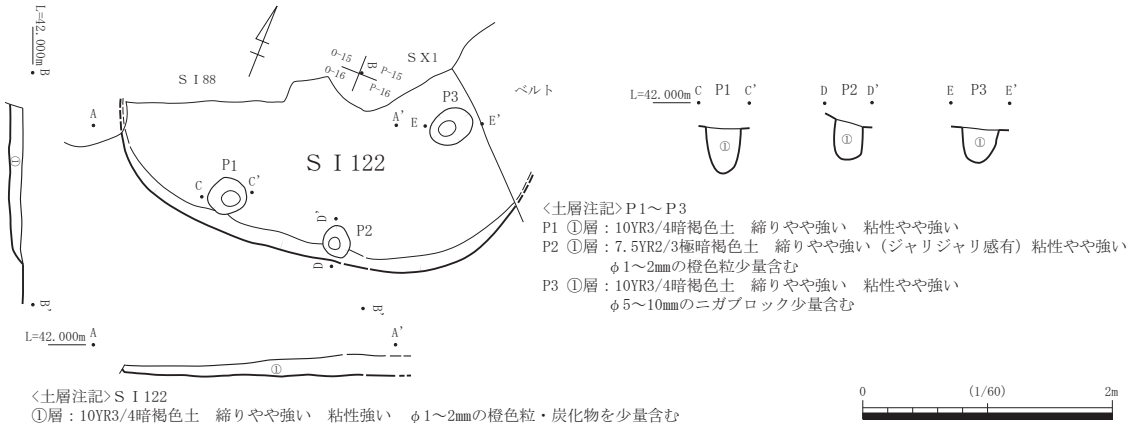


<土層注記>ＳＩ121
①層：10YR3/4暗褐色土　締りやや強い　粘性やや強い　φ1～2㎜の橙色粒少量含む
②層：10YR2/3黒褐色土　締りとても強い　粘性やや強い　φ1～2㎜の橙色粒少量含む　硬化面と思われる　ブロック状に硬化した土が確認されたが縄文の遺構にしては硬すぎる感がある
③層：7.5YR3/4暗褐色土　締りやや強い　粘性やや強い　φ1～20㎜の橙色粒多く含む　φ5～20㎜のシロニガブロックを下部に多く含む　炉と思われる

<土層注記>P1～4
P1　①層：10YR3/3暗褐色土　締りやや強い　粘性やや強い　φ5～10㎜のシロニガブロック少量含む
P2　①層：10YR3/3暗褐色土　締りやや強い　粘性やや強い　φ1～2㎜の橙色粒少量含む　下部は樹痕の影響を受けている
P3　①層：7.5YR2/3極暗褐色土　締りやや強い　粘性強い　φ5～10㎜のシロニガブロック少量含む　硬化面を形成しているブロックを少量含む
P4　①層：10YR3/4暗褐色土　締り強い　粘性やや強い　φ1～2㎜の炭化物少し含む　φ5～10㎜のシロニガブロック少量含む



第 31 図　　ＳＩ121 遺構・出土遺物実測図



第 32 図　　ＳＩ122 遺構実測図

いる。主柱穴は検出したＰ１～Ｐ３であると考えられるが、柱痕は確認できていない。柱穴間はＰ１～Ｐ２が約０．９ｍ、Ｐ２～Ｐ３が約１．３ｍである。平面形はほぼ円形で径は約２６～３５㎝、検出面からの深さは約３３㎝～３７㎝を測り、下端のレベルはほぼ一定である。炉、貯蔵穴等は検出されていない。

遺物は縄文後～晩期の土器片が出土しているが小片である。

②土坑

ＳＫ５２（第３３図）

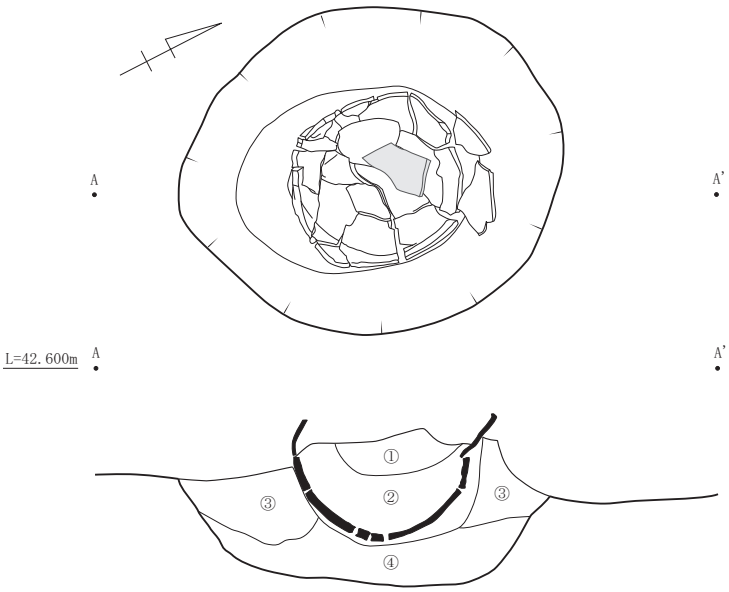
Ｕ２３グリッドに位置する土器埋設遺構である。４層暗褐色土層（漸移層）掘削後、５層褐色土層（アカホヤ２次堆積層）上面に口縁部が出土した。検出をすると掘り込みも確認でき、口縁部は北東側にかけて破折している。掘り込みの平面形は楕円形で、断面は台形状を呈する長軸約５０㎝、短軸約４３㎝、検出面からの深さは約２０㎝を測る。長軸はＮ－２７°－Ｅで、埋土は４層に分けることができる。埋土１層、２層ともに黒褐色で締り、粘性ともに強く、約１㎜の焼土粒、炭化物を少し含んでいる。埋設土器に接合する土器片以外の遺物は出土していない。埋土３層、４層は黒褐色で約１㎜の焼土粒を含んでいるが、炭化物は検出されていない。断面を確認すると土器埋設の際の固定、成形土として入れられた痕跡が認められる。

土器は口縁の一部欠損と底部の欠損はあるがほぼ完形に近い。口径約２３．３㎝、胴部の最大径約１１．７㎝、残存高約２１．７㎝を測るやや小型の深鉢形土器である。胴部やや上位より内屈したのち、条痕が施された口縁はラッパ状に開いている。内外器面とも最終器面調整はナデが施されているが内器面中位に押圧痕を残す。

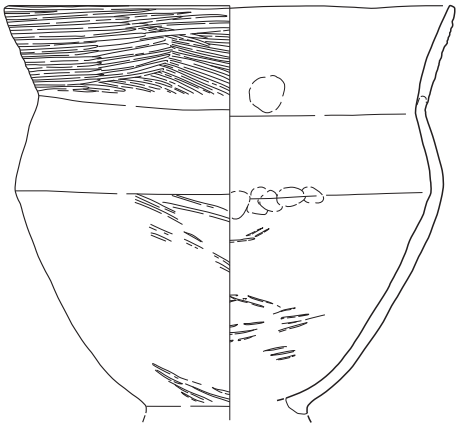
ＳＫ５４（第３４図）

Ｏ１８グリッドに位置する土器埋設遺構である。ＳＫ５２と同様、４層暗褐色土層（漸移層）掘削後、５層褐色土層（アカホヤ２次堆積層）上面にて検出した遺構である。掘り込みの平面形は歪な楕円形で、断面は台形状を呈する。長軸約８６㎝、短軸約６３㎝、検出面からの深さは約３２㎝を測る。長軸はＮ－４２°－Ｅで、埋土は３層に分けることができる。埋土１層は暗褐色で粘性、締りともに強く、微量に約１㎜の焼土粒、炭化物を含み、上層に礫が出土している。埋土２層、３層は黒褐色で約１㎜の焼土粒を含んでいる。土器埋設の際の固定、成形土である。

土器は復元すると口縁帯から胴部の一部を欠損している状態であった。遺構検出グリッドの取り上げ遺物



<土層注記>ＳＫ52
①層:10YR2/3黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒子・炭化物を微量含む　②層に比べてやや明るい
②層:10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒子・炭化物を微量含む
③層:10YR2/3黒褐色土　締りやや強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒子を微量含む
④層:10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒子を微量含む



127

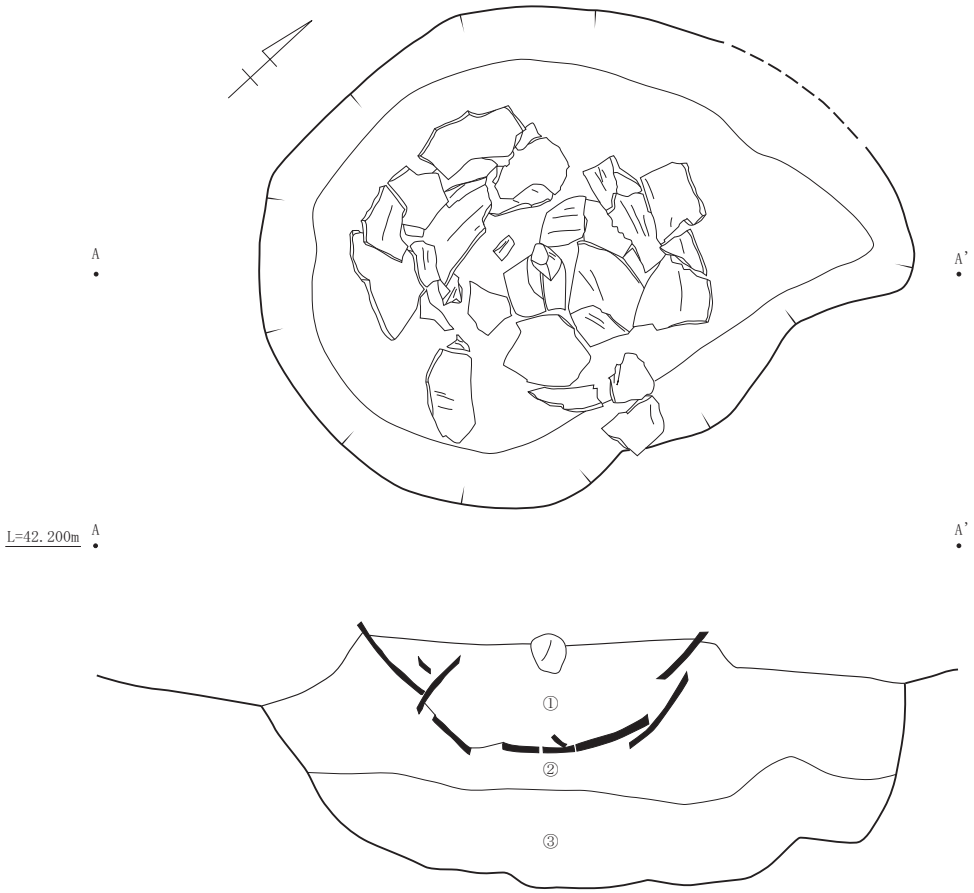
(127)

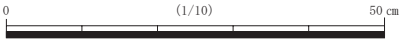
第 33 図　　埋設土器（ＳＫ52）出土状況・遺物実測図

との接合確認をするも口縁部は含まれていなかったことから、意図的に打ち欠いた可能性も考えられる。残存する胴部の最大径約４７．０㎝、残存高約３６．９㎝、底径約９．１㎝を測る深鉢形土器である。胴部中位に条痕を残す以外に最終器面調整はナデが施されている。外器面胴部中位、内器面底部に黒斑を残す。

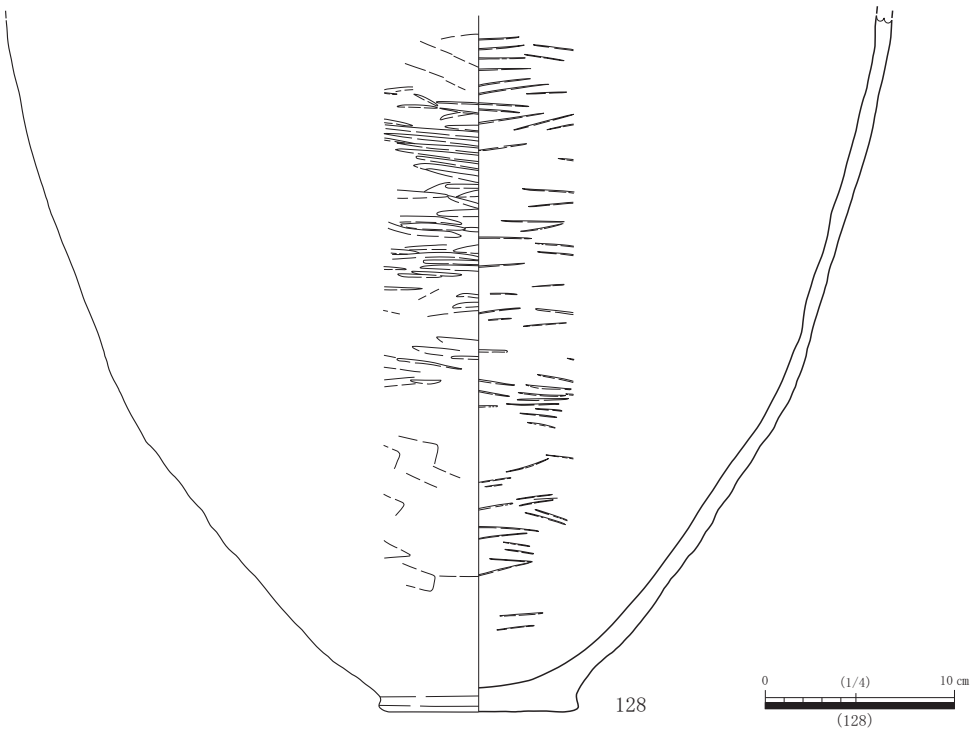
ＳＫ５８（第３５図）

Ｌ１６グリッドに位置する土器埋設遺構である。４層暗褐色土層（漸移層）掘削後、５層褐色土層（アカホヤ２次堆積層）上面にて検出した遺構である。掘り込みの平面形は楕円形で、断面は深い皿状を呈する。長軸約５８㎝、短軸約５４㎝、検出面からの深さは約３０㎝を測る。土器はやや西側に埋設され、後世に東側へ破折した状況が確認できる。埋土は４層に分けることができる。埋土１層、２層は締り、粘性ともに強く、焼土と思われる橙色粒を含んでいる。埋土３、４層は土器埋設の際の固定、成形土である。両層とも焼土と思われる橙色粒を少し含むも、遺物内の埋土と比較すると少量で粒径は小さい。

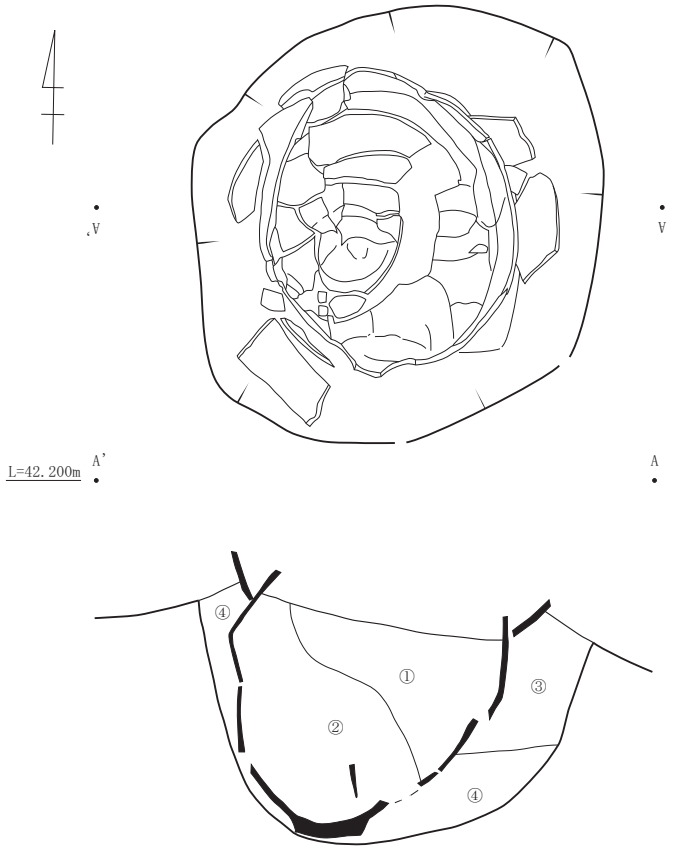




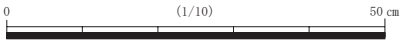
＜土層注記＞ＳＫ54
①層：10YR3/3暗褐色土　締り強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒子・炭化物を微量含む
②層：10YR2/2黒褐色土　締りやや強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒子を少量含む　基本土層5層に比べて暗い
③層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒子を微量含む　基本土層6層に比べて軟らかい

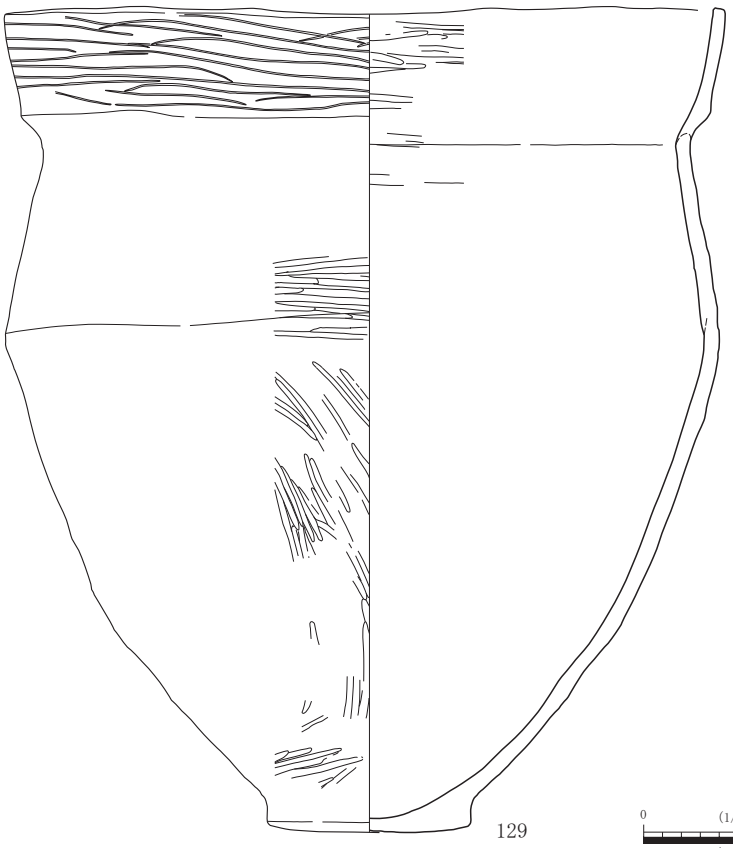


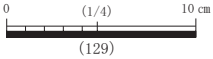
第 34 図　　埋設土器（ＳＫ54）出土状況・遺物実測図



<土層注記>ＳＫ58
①層：7.5YR2/3極暗褐色土　締り強い　粘性強い　φ1～5mmの橙色粒少し含む
②層：10YR3/3暗褐色土　締り強い　粘性強い　φ１～5mmの橙色粒多く含む
③層：7.5YR2/3極暗褐色土　締りやや強い　粘性強い　φ1～2mmの橙色粒少量含む
④層：10YR3/3暗褐色土　締りやや強い　粘性やや強い　φ1～2mmの橙色粒少量含む

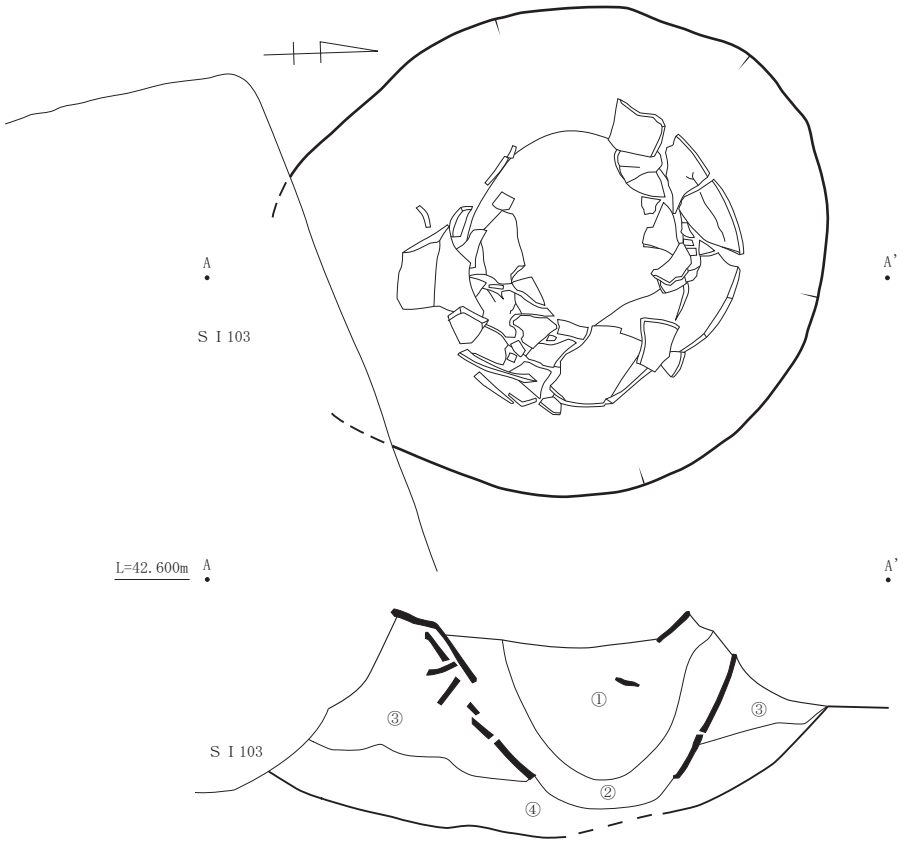






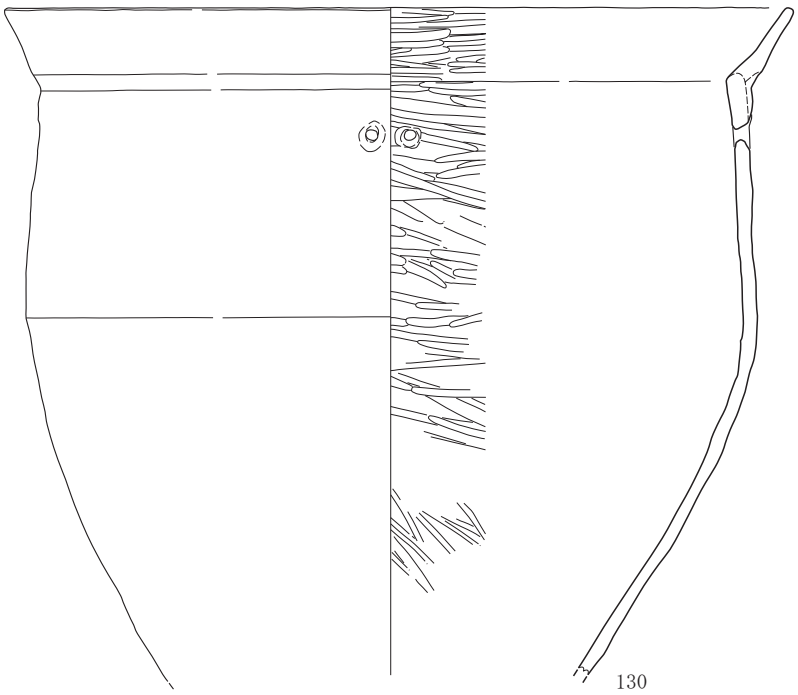
(129)

第 35 図　　埋設土器（ＳＫ58）出土状況・遺物実測図



＜土層注記＞ＳＫ59
①層：10YR3/3暗褐色土　やや明るい　締り強い　粘性やや弱い　φ1mmの焼土粒・炭化物を微量含む
②層：10YR2/3黒褐色土　やや暗い　締りやや強い　粘性やや強い
③層：10YR2/3黒褐色土　締りやや強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒を微量含む
④層：10YR2/2黒褐色土　締りやや強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒を微量含む

0　(1/10)　50 cm



0　(1/4)　10 cm
(130)

第 36 図　　埋設土器（ＳＫ59）出土状況・遺物実測図

土器は口縁の一部、体部下位の一部、底部の一部を欠損するも、完形に近い状態で復元ができた。口径約３７．１㎝、胴部最大径約３７．６㎝、器高約４３．７㎝、底径約１０．５㎝を測る深鉢形土器である。外に開く頸部から立ち上がる口縁帯をもち、外器面はナデ調整後に沈線を施す。胴部やや上位より内側に屈曲し、上位は横、中位以下斜め方向からの粗いミガキ調整を施している。内器面下位に帯状のススが付着している。

ＳＫ５９（第３６図）

Ｖ２３グリッドにあり、ＳＫ５２（土器埋設遺構）の東南東へ約６．３５ｍ離れた箇所に位置する土器埋設遺構である。５層（アカホヤ２次堆積層）上面で検出した。南側の一部を弥生期の遺構（ＳＩ１０３）に壊されている。掘り込みの平面形は楕円形で、断面は皿状を呈する。長軸は残存した位置で約７２㎝、短軸約６３㎝、検出面からの深さは約３２㎝を測る。土器はやや北側に埋設された状況が確認できる。埋土は４層に分けることができ、埋土１層は暗褐色で上層はやや明るく、約１㎜の焼土粒、炭化物を微量に含んでいる。埋土３、４層は締りがやや強く、粘性の強い黒褐色土である。土器埋設の際の固定、成形土であることが確認できる。

土器は欠損箇所が多いため、図上による復元をおこなった。口径約４1.０㎝、胴部最大径約３８.７㎝、残存器高約３５.３㎝を測る深鉢形土器である。底部は欠損しており、意図的に打ち欠かれた可能性もある。内外器面ともに上部は横、下部は縦方向のミガキ調整が施されているが、外器面は粗い。口縁はラッパ状に開き、端部をナデ調整で丸く収める。頸部近くに一カ所のみ補修孔が残存しており、両側より穿孔した痕跡が認められる。

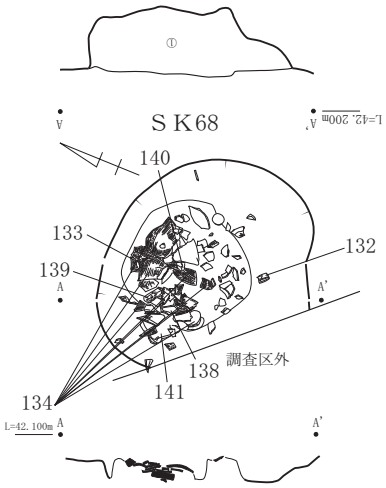
ＳＫ６８（第３７図、第３８図）

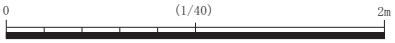
調査区東壁面付近のＰ２０グリッドに位置する遺構である。縄文早期の遺構検出を行うために、５層（アカホヤ２次堆積層）掘削途中で遺物の集中部を確認し、６層上面において検出した遺構である。遺構南西側の一部は調査区外へと続く。掘り込みの平面形は楕円形で、断面は深く、歪な形状をしている。長軸約１１２㎝、短軸約１００㎝、検出面からの深さは約３６㎝を測るが、掘り込み面はより上層にあると考えられる。埋土は粘性の強い黒褐色土で締りは弱い。１㎝程度のロームブロックを少量含んでいる。遺物は土器や石器などが遺構のやや北側に集中して出土していた。配置を意識、意図的な埋置をしたという痕跡は認められず、単に廃棄したと考える。

土器は複数個体分出土している。１３１は外器面に条痕を施した深鉢形土器だが、１３２は口縁に突帯文を貼りつけている。１３３は底部外面に編布圧痕と考えられる組織痕のある浅鉢形土器である。１３４は厚底の底部をもつ深鉢形土器である。図上で復元すると、口径約３７．８㎝、胴部最大径約４０．１㎝、底径約７㎝を測る。胴部上位で屈曲し、口縁はやや外に開く。胴部、底部、口縁部は貝殻による条痕を施し、胴部下位はナデ調整を施す。口縁部の内外器面に沈線をもつ。口縁にリボン状の突起をもつが、残存状態から見ると突起左側は平口縁だが、欠損した右側は平口縁に１条貼りつけた作りをしている。突起右側の反りから推察すると、右側の口縁は１段高かったと考えられる。

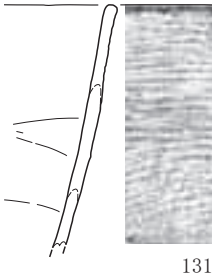
石器も多く出土している。１３５は安山岩製の剥片で、表面に刃部を作り出そうとした調整痕を残す。１３６は黒曜石の縦長剥片を加工したものである。基部を意識した加工と形状から石匙の未成品と考えられる。１３７～１４０は安山岩製の打製石斧である。１３８、１３９は刃部、１４０は基部と刃部が欠損する。１４１は石皿で、中央付近は使用により擦れている。上側面、左側面の多くは欠損する。

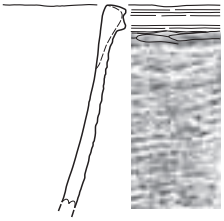
出土した遺物の器種数は一番多いが、欠損、未成品のものがほとんどである。ＳＫ６８は廃棄用土坑として使用された可能性が高いと考える。しかし同時期の竪穴建物跡から出土した遺物の状況から見ても、当時の生活で使用されていた道具類を一見できる遺構である。



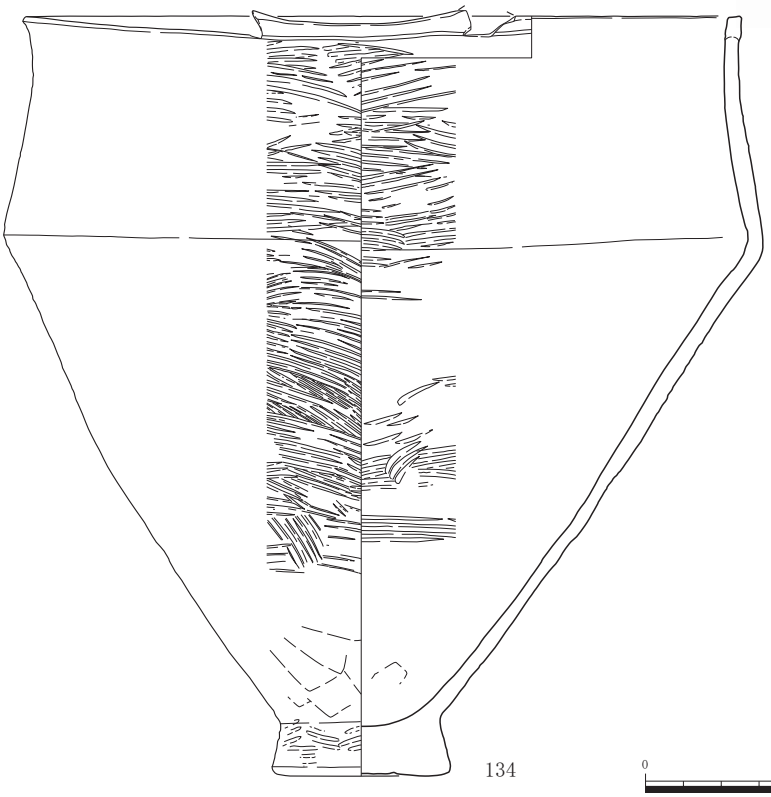


<土層注記>ＳＫ68
①層：10YR2/3黒褐色土　締り弱い　粘性強い　小さなロームのブロック（φ1cm程度）が少量入る


131

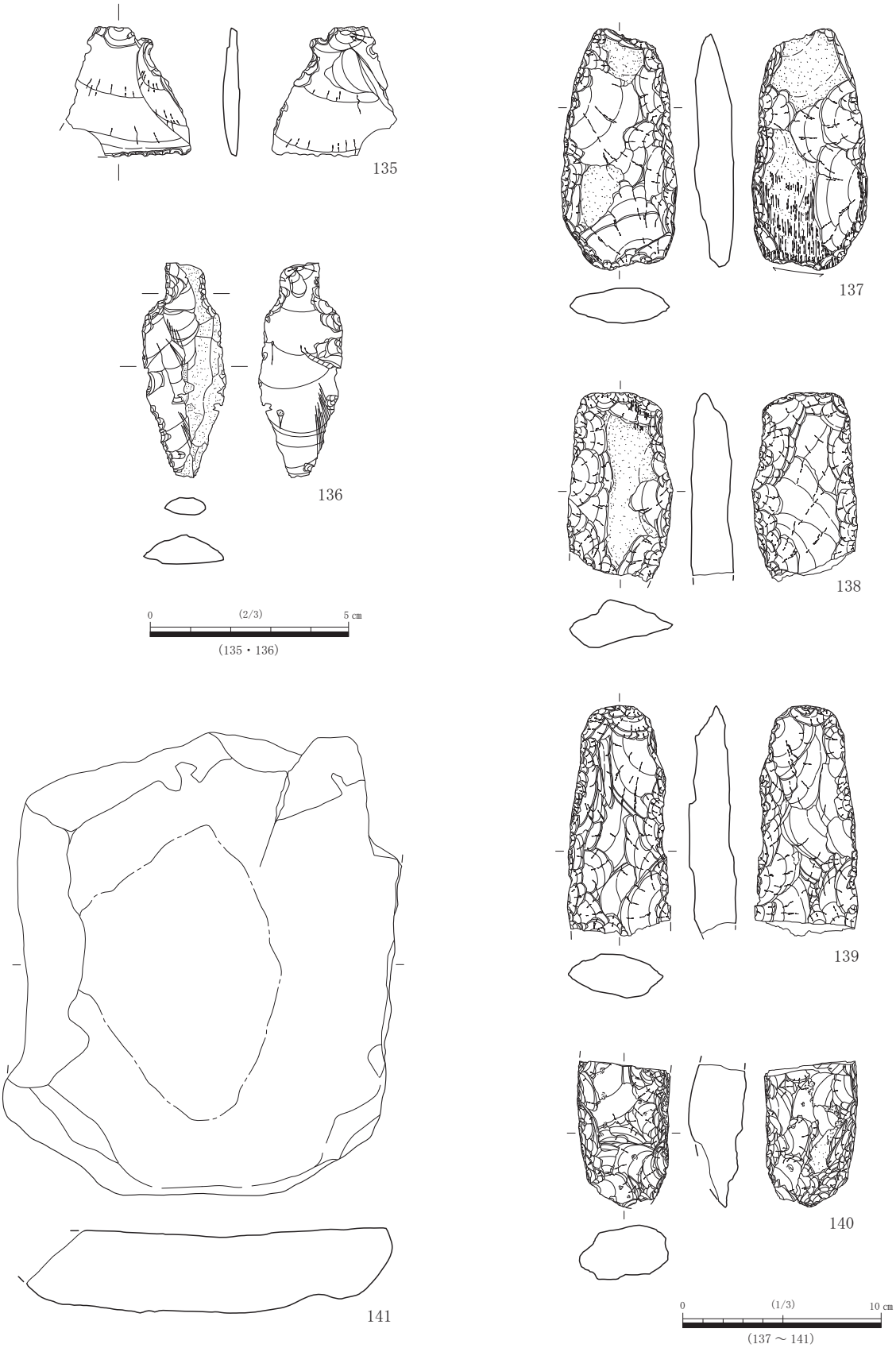

132

133


134

(131 ～ 134)

第 37 図　　ＳＫ68 遺構・出土遺物実測図 1



第 38 図　　ＳＫ68 出土遺物実測図 2

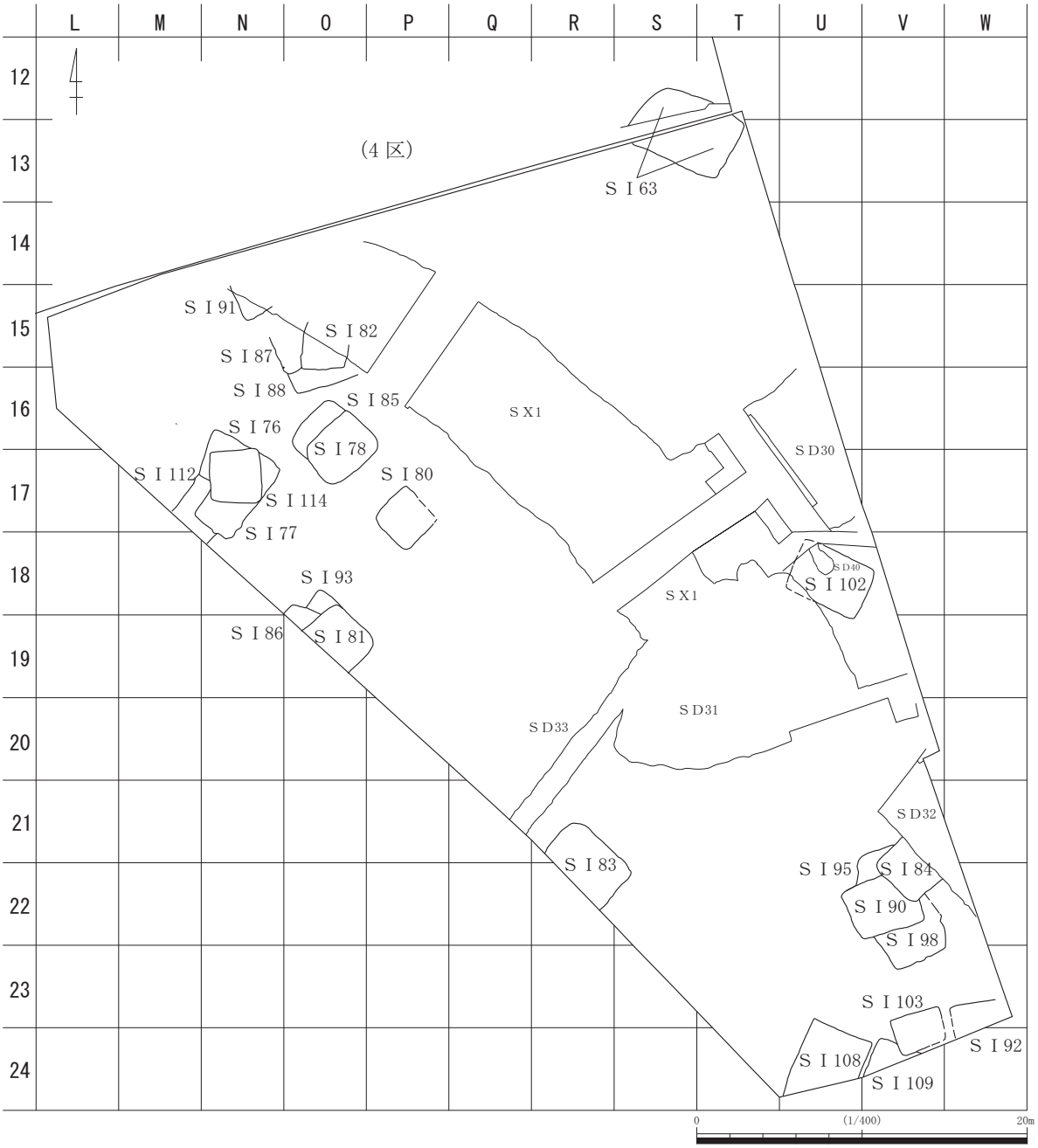
（４）弥生時代後期の遺構・遺物

塔平遺跡の遺跡年代の主がこの時期にあたる。遺構検出は５層上面でおこなった。３、４層の遺物包含層では遺物の出土量は少ないながらも、遺構内においてはかなり多くの遺物が出土している。検出時、５層（褐色土層）と対比して暗褐色、もしくは黒褐色の埋土を手掛かりとした。

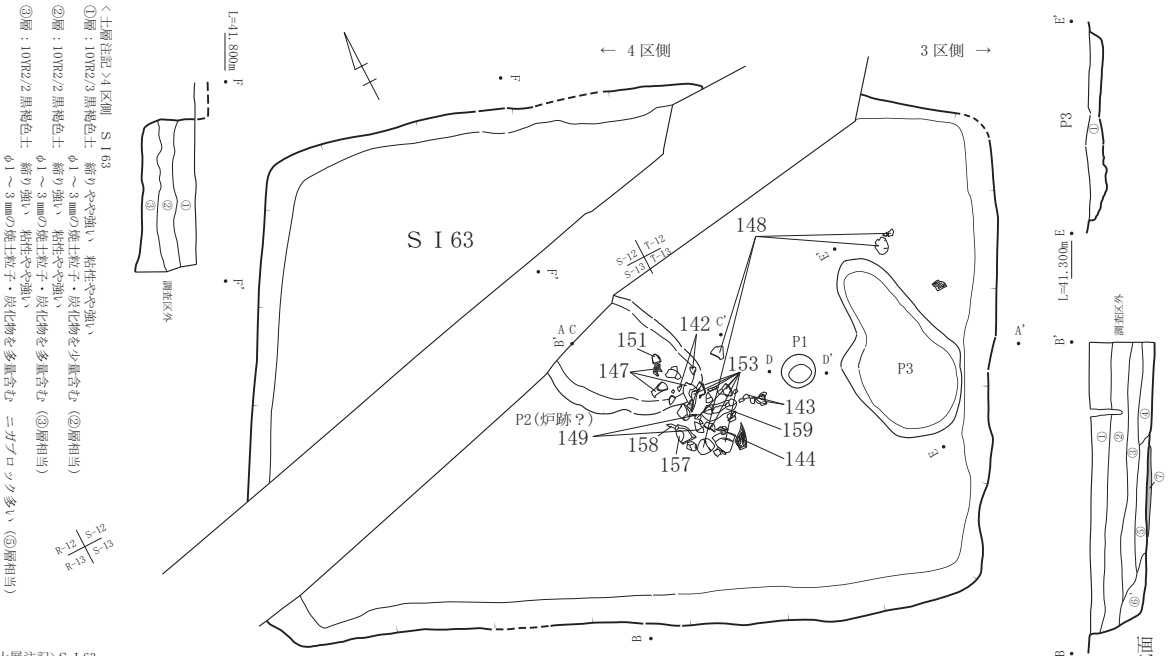
①竪穴建物跡

ＳＩ６３（第４０図～第４２図）

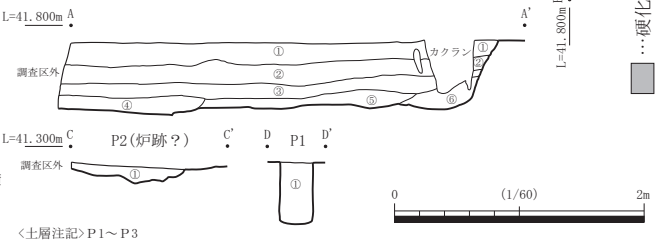
Ｓ１２・１３、Ｔ１３グリッドに位置する。検出面は５層上面である。北側の約半分は調査４区へと伸びるが、一軒の竪穴建物跡として遺構、遺物ともに良好な資料を得ることができたため、遺構図は４区分のものも記載することとした。東西に調査区境の壁で遮られている箇所もあるが、平面形は隅丸の長方形で、断



第 39 図　　遺構配置図（弥生時代）

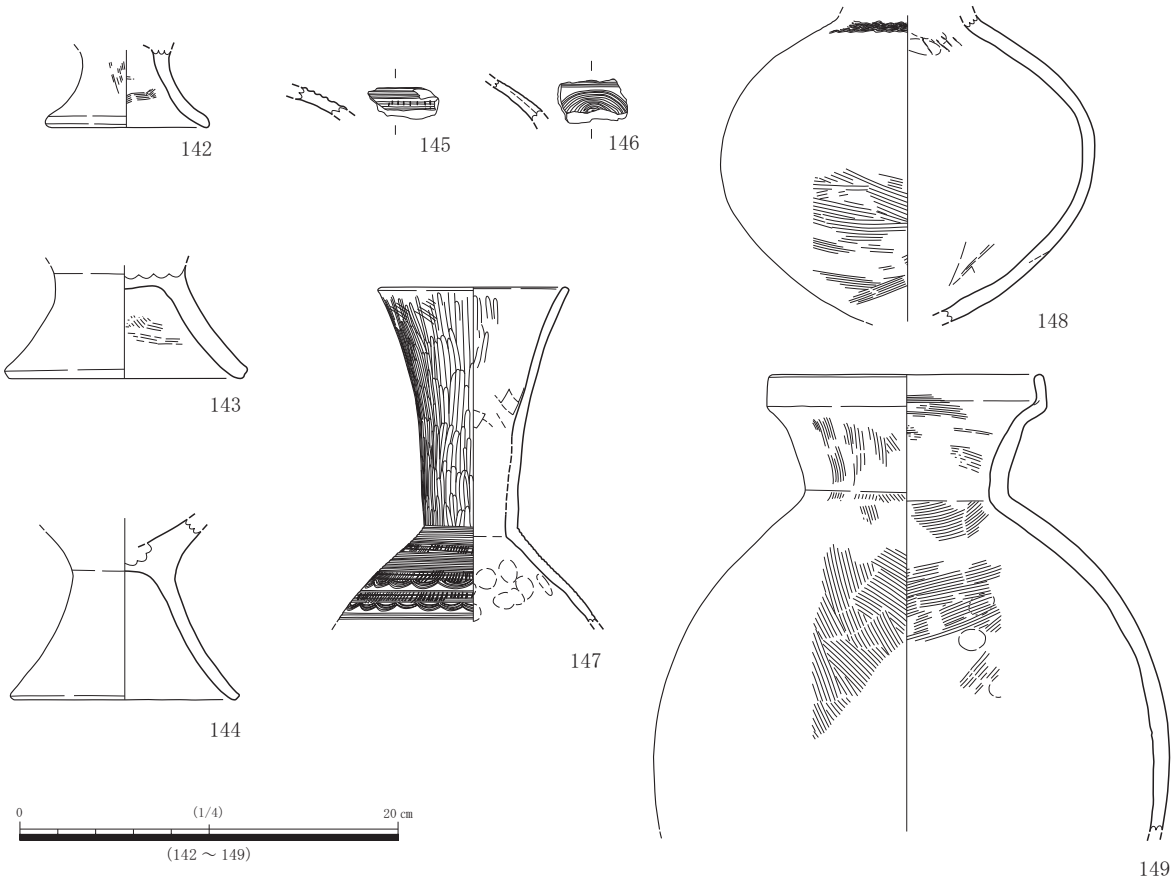


<土層注記>４区側　ＳＩ63
①層：10YR2/3 黒褐色土　締りやや強い　粘性やや強い、φ1～3mmの焼土粒子・炭化物を少量含む（②層相当）
②層：10YR2/2 黒褐色土　締り強い　粘性やや強い　φ1～3mmの焼土粒子・炭化物を多量含む（③層相当）
③層：10YR2/2 黒褐色土　締り強い　粘性やや強い　φ1～3mmの焼土粒子・炭化物を多量含む　ニガブロック多い（⑤層相当）

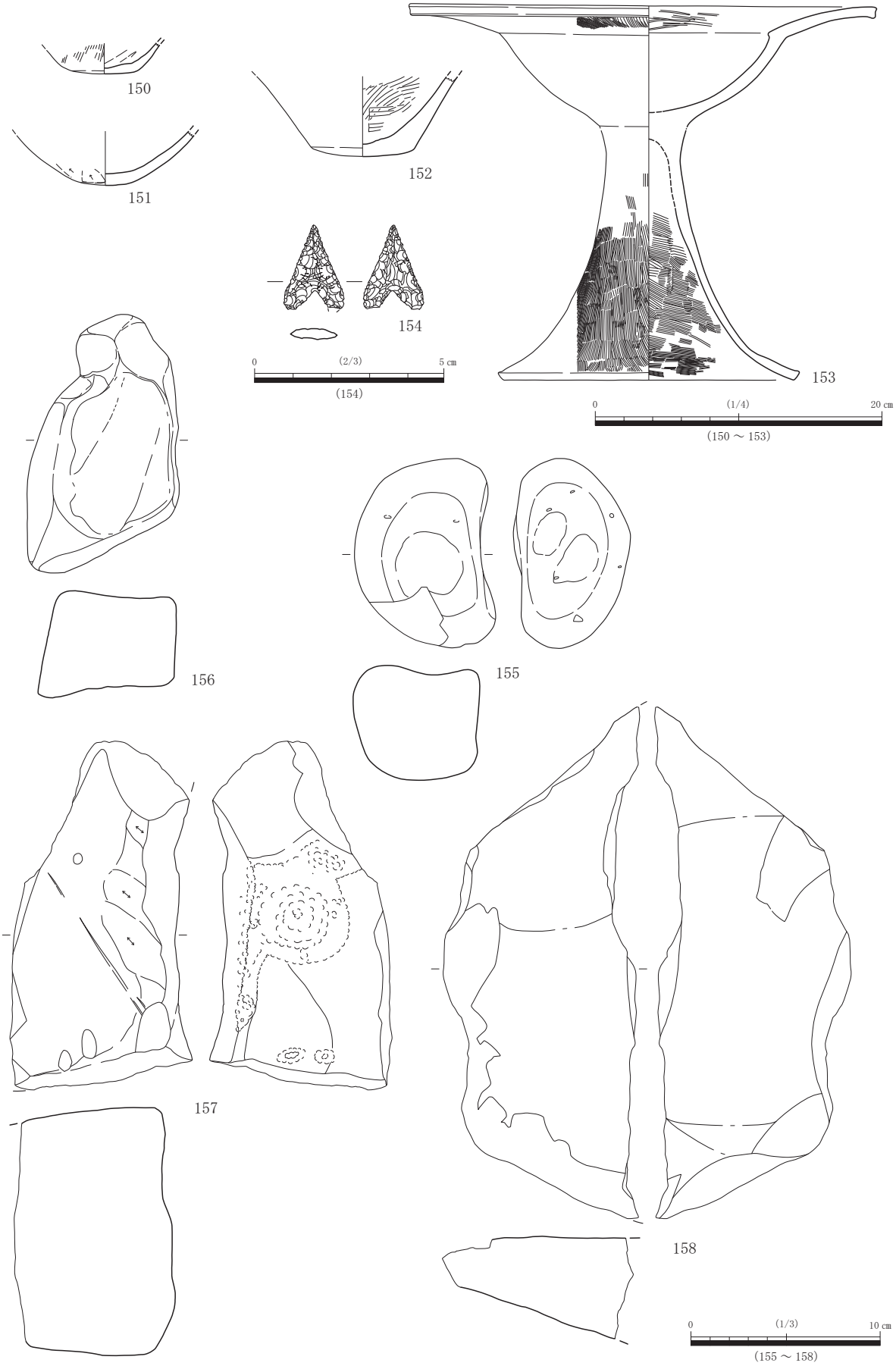


<土層注記>ＳＩ63
①層：10YR2/3黒褐色土　締り強い　粘性強い
φ1mmの焼土粒・炭化物を微量含む　②層に比べてややまだら
②層：10YR2/3黒褐色土　締り強い　粘性強い
φ1mmの焼土粒・炭化物を微量含む　まだらではない
③層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒・炭化物を少量含む
④層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性強い
φ1mmの焼土粒・炭化物を多量に含む　黒味が強い
⑤層：10YR2/3黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒・
炭化物をやや多く含む　若干ニガ（7層）が混じる
⑥層：10YR2/3黒褐色土　締りやや強い　粘性やや強い
φ1mmの焼土粒・炭化物を多量に含む　焼土が多い　三角堆積
⑥’層：10YR2/3黒褐色土　締りやや強い　粘性やや強い
φ1mmの焼土粒子・炭化物を多量に含む
焼土粒は⑥層に比べて少ない　三角堆積
⑦層：10YR2/3黒褐色土　締り強い　粘性やや弱い
φ1mmの焼土粒子・炭化物を多量に含む　ガチガチ

<土層注記>Ｐ1～Ｐ3
P1・P3　①層：10YR2/3黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒子・炭化物をやや多く含む
P2（炉跡?）①層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒子・炭化物を多量に含む



第 40 図　　ＳＩ63 遺構・出土遺物実測図１

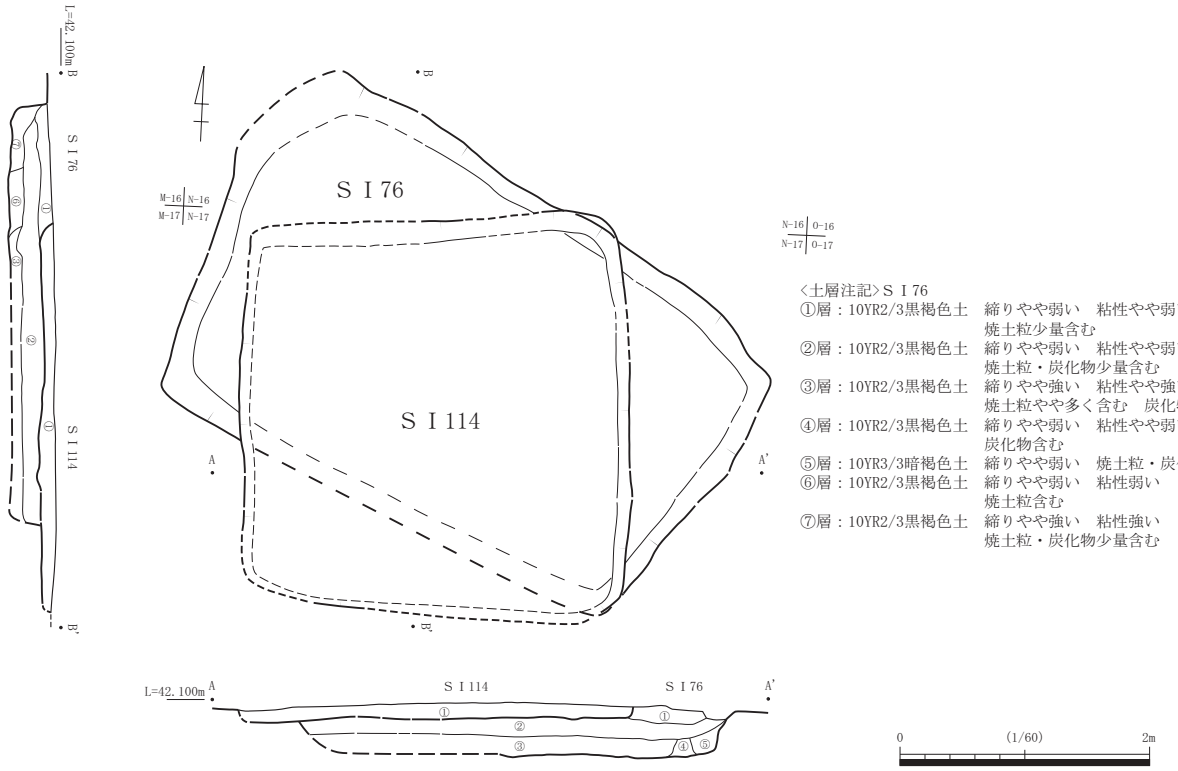


第 41 図　　ＳＩ63 出土遺物実測図 2

第 42 図　　ＳＩ63 出土遺物実測図 3

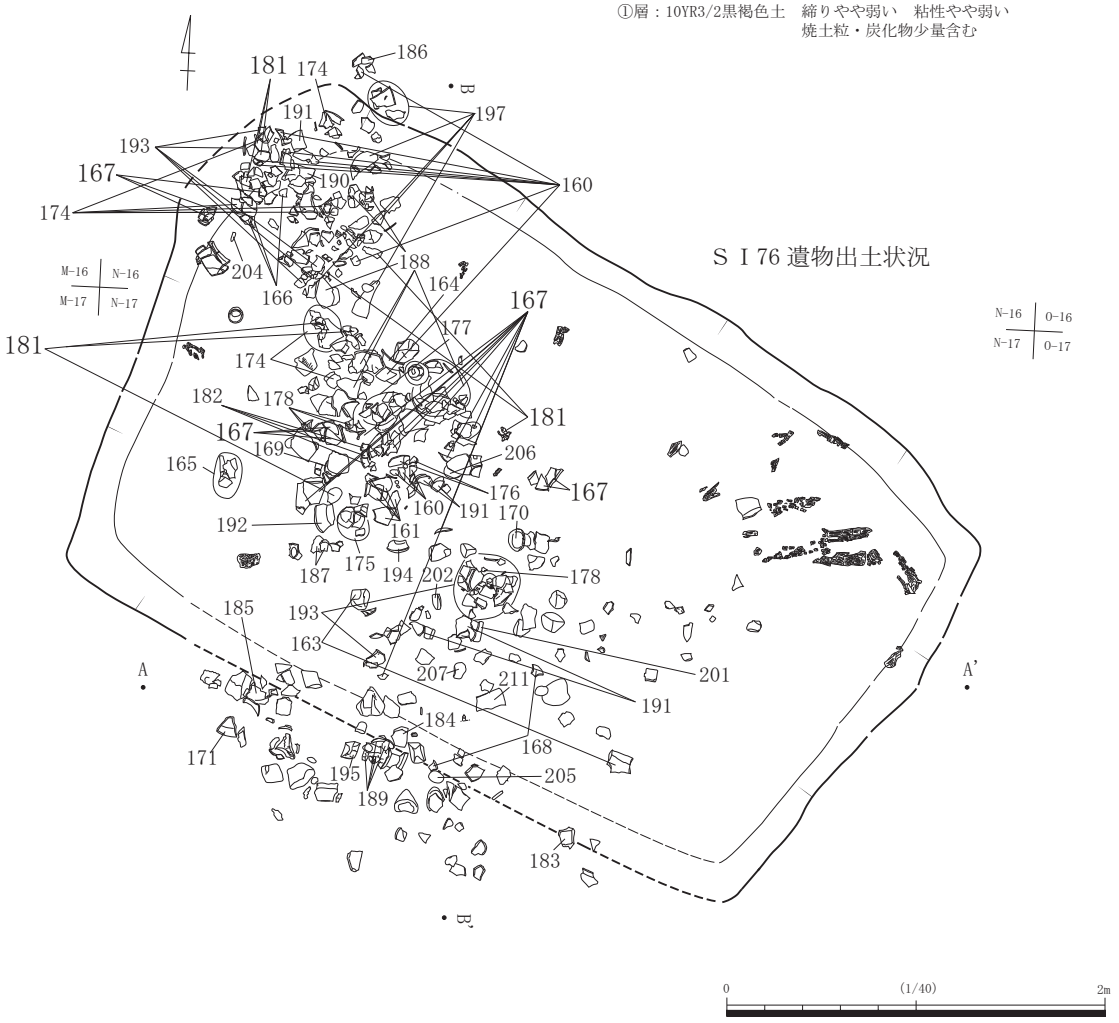
面は台形状を呈する。長軸約５．８６ｍ、短軸約４．０８ｍ、検出面からの深さは約５６㎝を測る。長軸はＮ－３０°－Ｗである。埋土は７層に分けることができ埋土７層は締りの強い黒褐色土で約１㎜の焼土粒子、炭化物を多量に含んでいる点で硬化面と捉えている。床面にてＰ１～Ｐ３を検出し、Ｐ１は南東に位置する主柱穴と考える。北西側のもう一基は調査区境の壁下に位置すると想定されるため、２本柱の構造を成すものと考えられる。Ｐ１の平面形は円形で、径は約２８㎝、検出面からの深さは約５０㎝を測るが柱痕は確認できていない。Ｐ２は北側の一部は壁内に伸びるが楕円形を呈し、検出面からの深さは約１６㎝を測る。遺構中央に位置し、約１㎜の焼土粒子、炭化物を多量に含んでいることからも炉跡と考えられる。Ｐ３は配置的にみて貯蔵穴として考えたいが、判断するまでには至っていない。埋土はＰ１と同じである。

遺物は甕、壷、高坏などが出土している。１４５～１４７は所謂「免田式土器」で、１４６は８条の重弧文がヘラ描きされている。１４７は口径約９．７㎝を測る。胎土は粒子も細かく、全体的に作りが丁寧である。器壁も残存部分においてはとても薄く、頸部は上から下方向にミガキを施し、肩部の文様を施文している。１４８は残存高約１６．２㎝、胴部最大径約１９．７㎝を測る長頸壷である。頸部と体部の境目に櫛描の波状文を施している。体部下半のハケメの原体幅、条数が波状文様のものと一致するため、同じ工具を使用したと考えられる。１４９は複合口縁壷である。内外器面のほとんどにハケメが施されている。口縁部は若干内傾し、肩部の張りは弱い。１５３は口径約３２．６㎝、底径約２０．３㎝、残存高約２６．３㎝を測る高坏である。

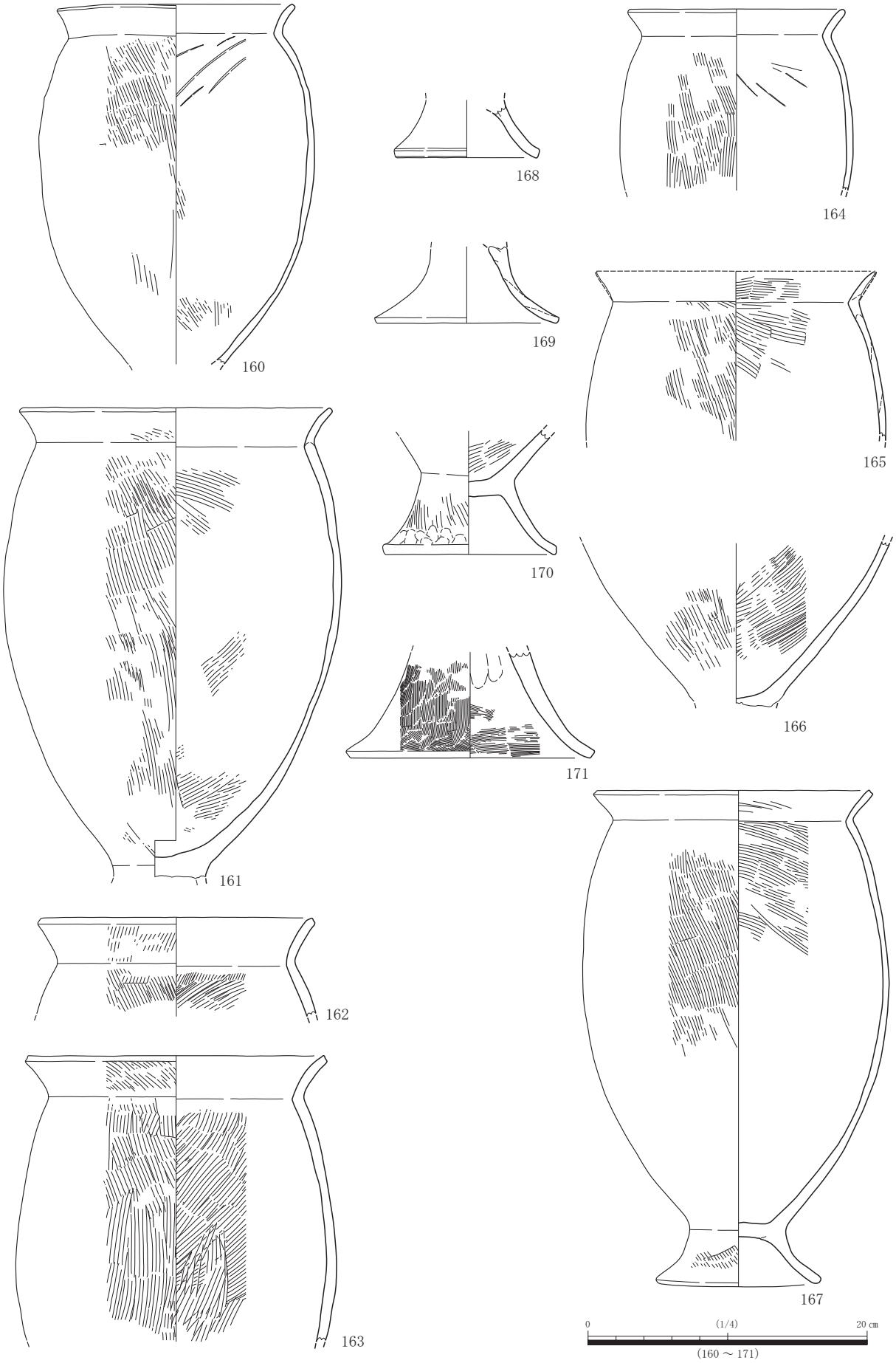


〈土層注記〉S I 76
①層：10YR2/3黒褐色土　締りやや弱い　粘性やや弱い
焼土粒少量含む
②層：10YR2/3黒褐色土　締りやや弱い　粘性やや弱い
焼土粒・炭化物少量含む
③層：10YR2/3黒褐色土　締りやや強い　粘性やや強い
焼土粒やや多く含む　炭化物含む
④層：10YR2/3黒褐色土　締りやや弱い　粘性やや弱い
炭化物含む
⑤層：10YR3/3暗褐色土　締りやや弱い　焼土粒・炭化物少量含む
⑥層：10YR2/3黒褐色土　締りやや弱い　粘性弱い
焼土粒含む
⑦層：10YR2/3黒褐色土　締りやや強い　粘性強い
焼土粒・炭化物少量含む

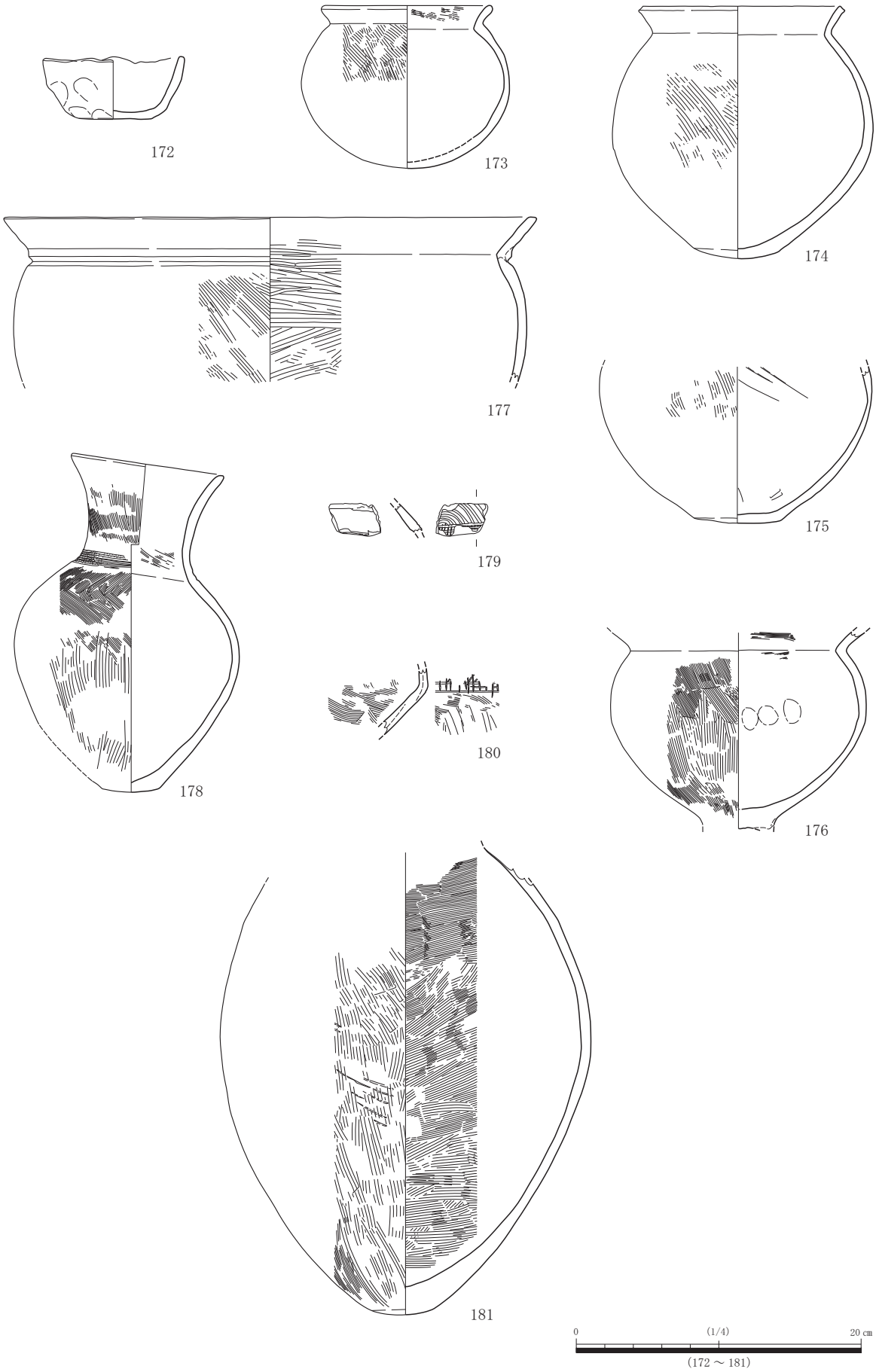
〈土層注記〉S I 114
①層：10YR3/2黒褐色土　締りやや弱い　粘性やや弱い
焼土粒・炭化物少量含む



第 43 図　　S I 76・114 遺構実測図

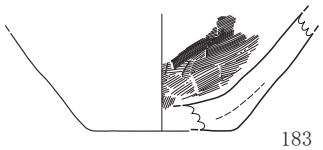


第 44 図　　ＳＩ76 出土遺物実測図 1

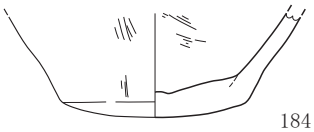


第 45 図　　ＳＩ76 出土遺物実測図２

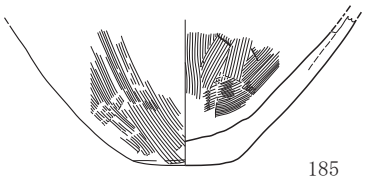
182



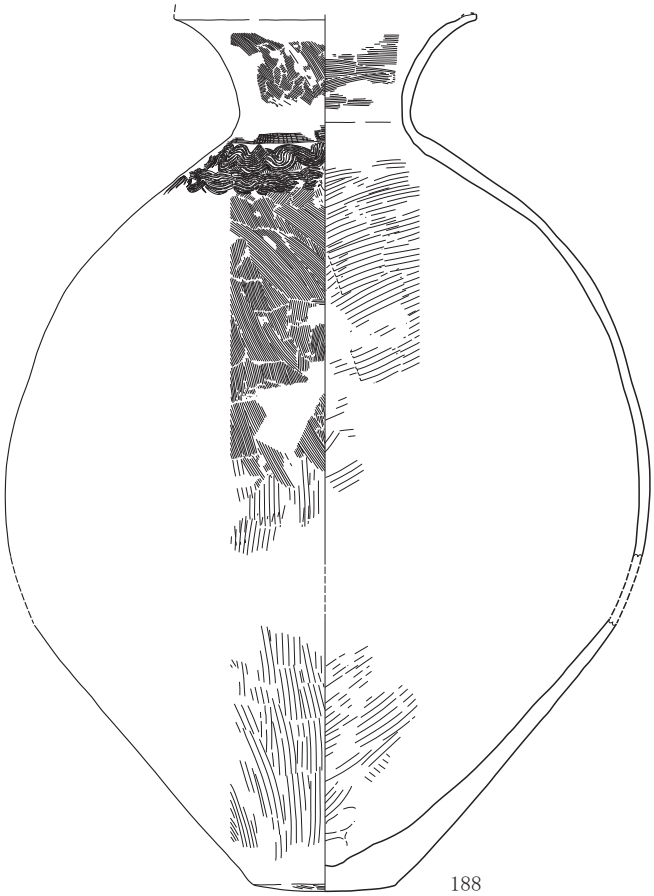
183



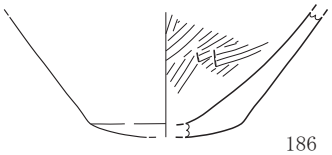
184



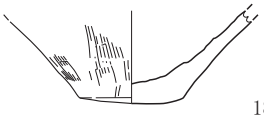
185



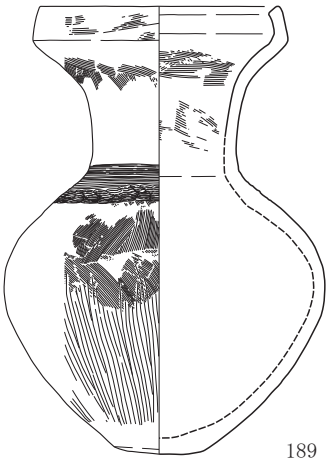
188



186



187

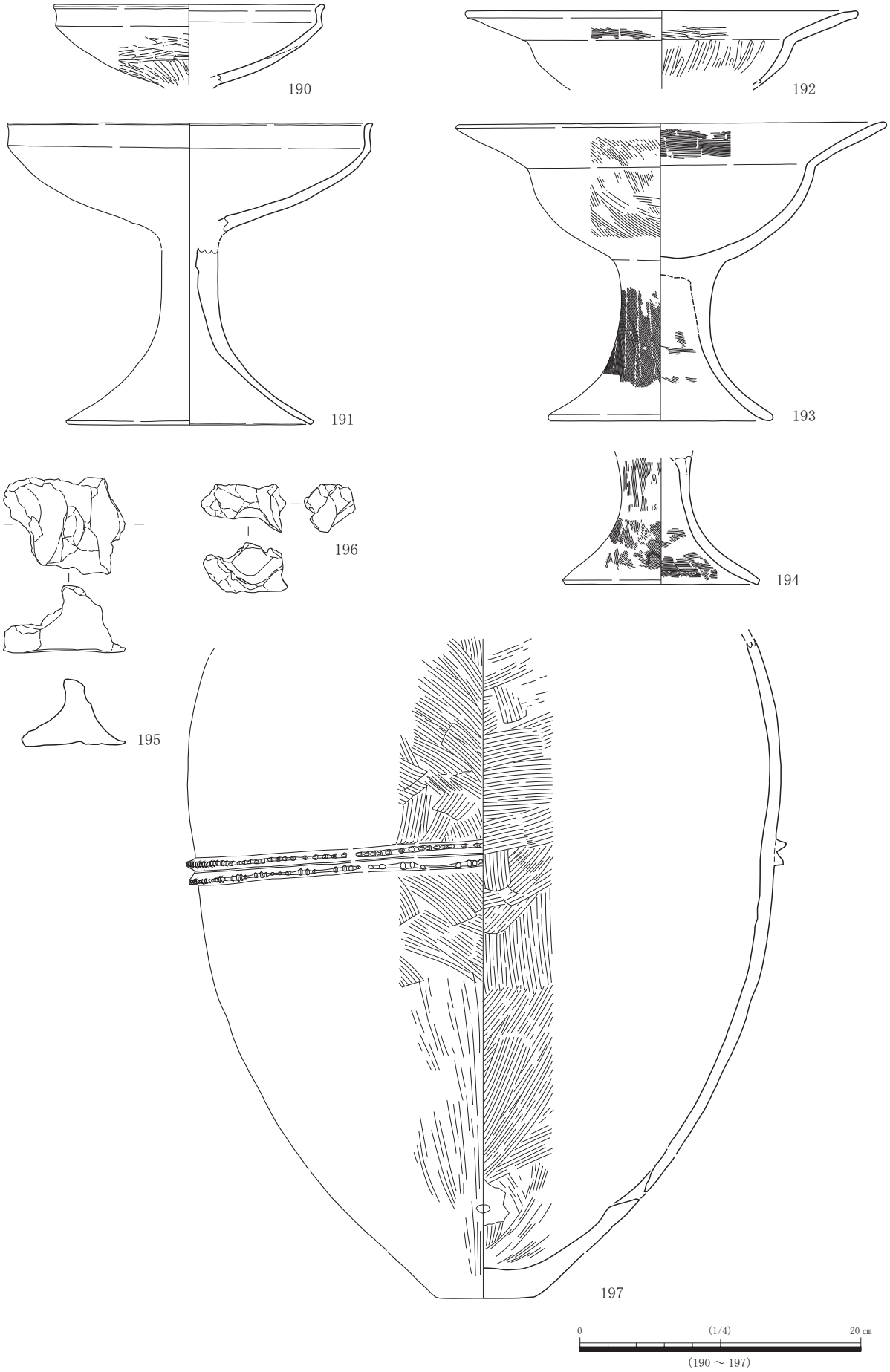


189

0　(1/4)　20 ㎝

(182 ～ 189)

第 46 図　　ＳＩ76 出土遺物実測図 3



第 47 図　　ＳＩ76 出土遺物実測図４

第 48 図　　ＳＩ76 出土遺物実測図５

ＳＩ７６、ＳＩ１１４（第４３図～第４８図）（第５章　自然科学分析）

Ｎ１６・１７グリッドに位置する。両遺構とも５層上面で検出した。ＳＩ７６をＳＩ１１４が切る状況で検出した。後に紹介するＳＩ７７、ＳＩ１１２を含め、４軒の切り合いを確認している。ＳＩ１１２（古）→ＳＩ７７→ＳＩ７６→ＳＩ１１４（新）である。

ＳＩ１１４の平面形は隅丸方形、断面は浅い皿状を呈する。長軸約３．１６ｍ、検出面からの深さは約４４㎝を測る。長軸はＮ－２°－Ｗである。当初ＳＩ７６の出土遺物量の多さにより検出が困難で確認されていなかったが、断面の検証により最上層に位置する遺構であるとの判断に至りＳＩとしている。埋土は単層で焼土粒子、炭化物を少量含み、締り、粘性ともにやや強い黒褐色土である。硬化面、ピット、炉、貯蔵穴、ベッド状遺構等は確認されていない。遺構内で取り上げた遺物は少量小片で、そのほとんどがＳＩ７６内取り上げ遺物との接合を確認している。

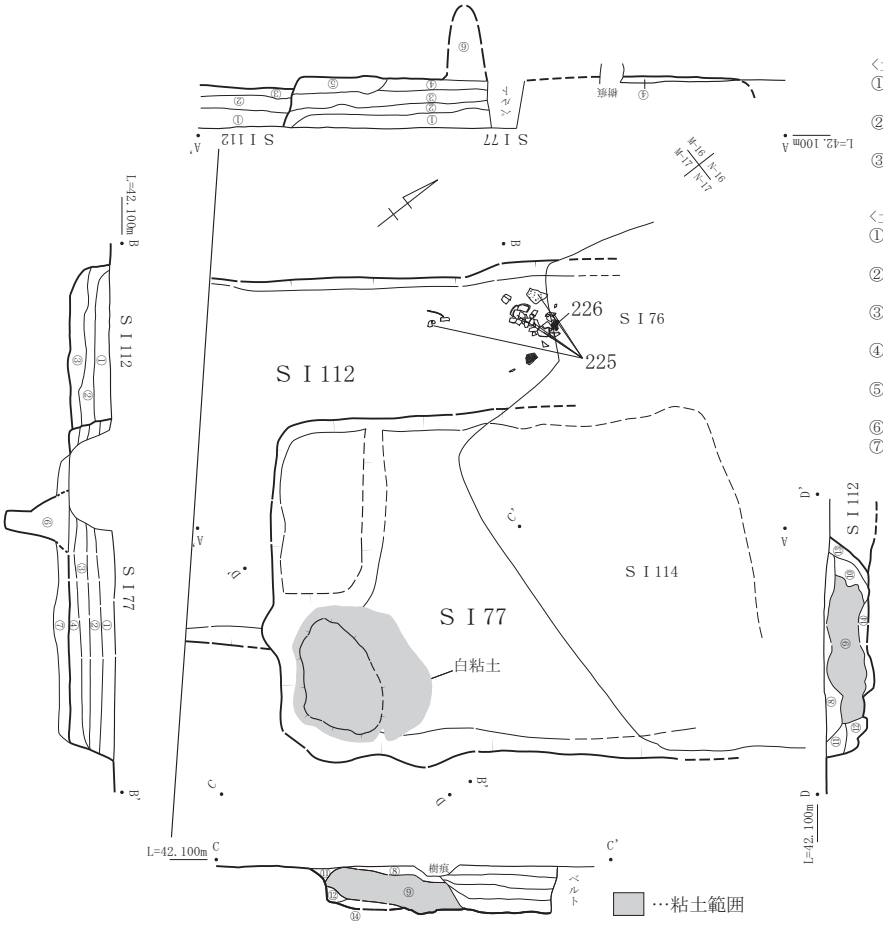
ＳＩ７６は北隅の一部を重機による撹乱、遺構の上層の一部をＳＩ１１４に壊された状況で検出した。平面形は長方形、断面は台形状を呈する。長軸約４．４４ｍ、短軸は約２．８２㎝、検出面からの深さは約４４㎝を測る。長軸はＮ－６０°－Ｗである。埋土は７層に分けることができるが、土色の差異は微細で、埋土５層の暗褐色土層を除いて黒褐色土層となる。全埋土層において焼土粒子を含むが、遺構東隅の埋土１、２層において炭化材を検出した。分析の結果、常緑低木のツツジ科スノキ属のシャシャンボであることが分かった。調査１区のＳＩ２で検出したものとは別の種類であるが、比較的重硬で強度の高い種類の樹木を同じく建築部材として選択、利用したことが推定できる。硬化面、ピット、炉、貯蔵穴、ベッド状遺構等は確認されていない。

検出時は北隅のみにおいて遺物の集中を確認したが、掘削を進めると南側（遺構中心部）にかけて遺物が下層へと流れ込んだような状況であった。接合すると器種、量ともに多種多量であった。

１６０～１７１は甕である。１６９は脚内部に、本体と脚との接合痕が多数残っている。１７２～１７７は鉢である。１７２は指頭痕を残す手捏ね土器である。１７６は台付鉢である。１７７は口径約３７．４㎝を測り、口縁下に１条の突帯を有する。１７８～１８９は壷である。１７８は肩部に平行線を施した長頸壷である。１７９、１８０はヘラ状工具で施文された「免田式土器」である。１８１は張り出し部タタキの痕跡残している。１８８は残存高約４６．４㎝、胴部最大径約３４．０㎝、底径約７．５㎝を測る、複合口縁壷と思われる。頸部と胴部の境に櫛描の平行線と８条を１単位とした波状文を施す。工具については胴部上半や頸部付近のハケメ工具と同一のものと考えられる。調整は内外器面、底部と共にハケメだが、下方は目の粗いものに工具を変えている。１８９も施文、調整は似るが文様は９条を１単位とした複合口縁の長頸壷である。１９０～１９４は高坏である。１９２は坏内面に暗文を残している。１９３は全体的にハケメによる調整であるが、見える部分は目の密なもの、見えない部分はそうでない目の広いものと使い分けている。１９５、１９６は焼成粘土塊である。ナデた後つまみ上げたような形状をしている。砂粒をあまり含んでおらず、白っぽい色をしている。表面はある程度硬く軽い。焼き締ってはいない。１９７は底径約６．７cm、残存高約４６．９cmを測る。胴部最大径は２条の刻目突帯直上にある。突帯の断面形状は三角形をなす。底部直上に外面から内面に向かって抜いたと考えられる孔をもつ。土器の形状からは壷であるが小型甕棺と考えられ、破損した後に廃棄されたものと思われる。１９８は土製丸玉であるが半分程欠損している。貫通している孔と、穿孔途中で止まった孔がある。

１９９は平基、２００は凹基の石鏃で、２点とも黒曜石製のものである。２０１、２０２は頁岩製の磨製石斧で、刃部を欠損する。２０３は石錘である。主面は平滑で、紐が擦れたような痕跡が筋状にうっすらと残る。２０４～２１０は磨・敲石類である。２１１の石皿は中央に敲打痕を残す。

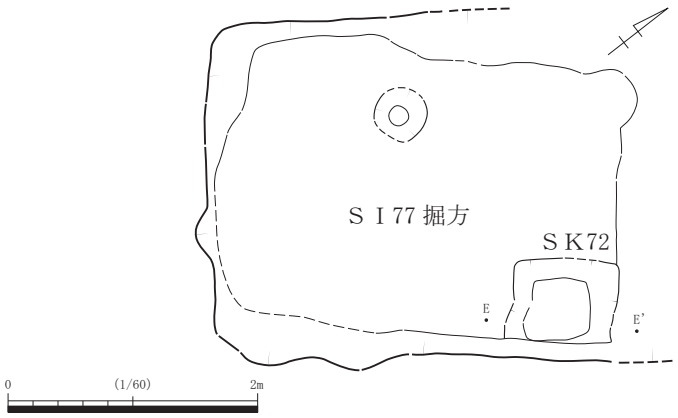
これらの遺物は廃棄後ある程度の時間差をもって遺物を遺棄した可能性を考える。遺物は祭祀によるもの

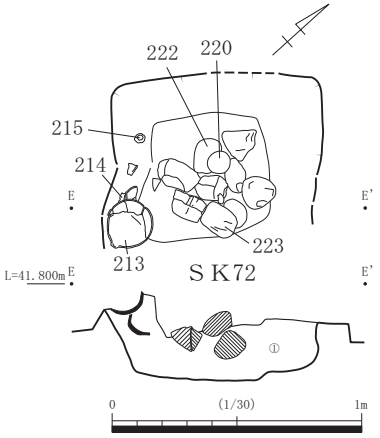


〈土層注記〉S I 112
①層：10YR3/4暗褐色土　締りやや弱い　粘性やや弱い
焼土粒含む
②層：10YR3/2黒褐色土　締りやや弱い　粘性やや強い
焼土粒やや多く含む
③層：10YR2/3黒褐色土　締りやや強い　粘性やや強い
ニガ土・焼土粒少量含む

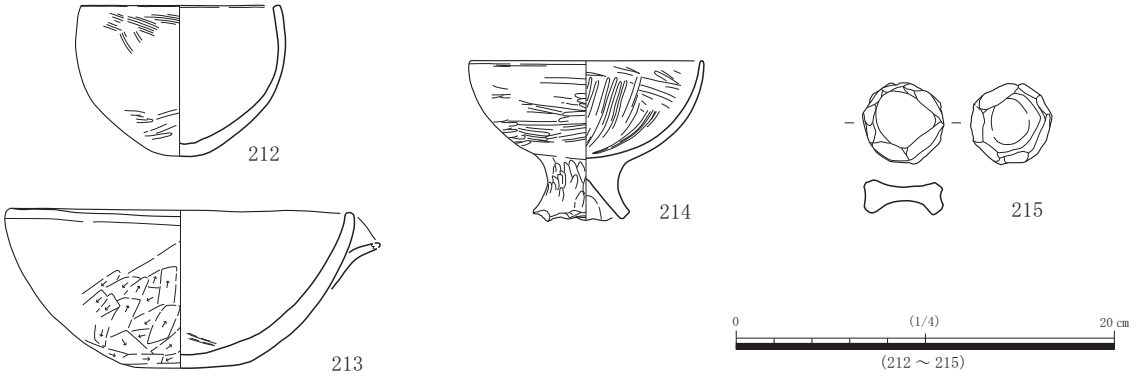
〈土層注記〉S I 77
①層：10YR2/2黒褐色土　締りやや弱い　粘性やや弱い
焼土粒わずかに含む
②層：10YR3/2黒褐色土　締りやや弱い　粘性やや弱い
焼土粒少量含む
③層：10YR3/2黒褐色土　締りやや弱い　粘性やや弱い
焼土粒・炭化物含む
④層：10YR3/3暗褐色土　締りやや弱い　粘性やや弱い
焼土粒やや多く含む
⑤層：10YR3/4暗褐色土　締りやや弱い　粘性やや弱い
焼土粒少量含む
⑥層：土層注記ナシ
⑦層：土層注記ナシ

粘土範囲
⑧層：10YR2/2黒褐色土　締りやや弱い　粘性やや強い
焼土粒・粘土粒・炭化物少量含む
⑨層：2.5YR7/2明赤灰　締り非常に強い
粘性非常に強い　粘土の塊
⑩層：10YR2/3黒褐色土　締りやや弱い　粘性やや強い
粘土粒多く含む　炭化物少量含む
⑪層：10YR2/3黒褐色土　締りやや弱い
粘性やや強い　粘土粒少量含む
⑫層：10YR2/2黒褐色土　締りやや弱い
粘性やや強い　粘土粒少量含む
⑬層：10YR3/2黒褐色土　締りやや弱い
粘性やや強い　粘土粒少量含む
⑭層：10YR2/2黒褐色土　締りやや弱い
粘性やや強い　粘土やや多く含む

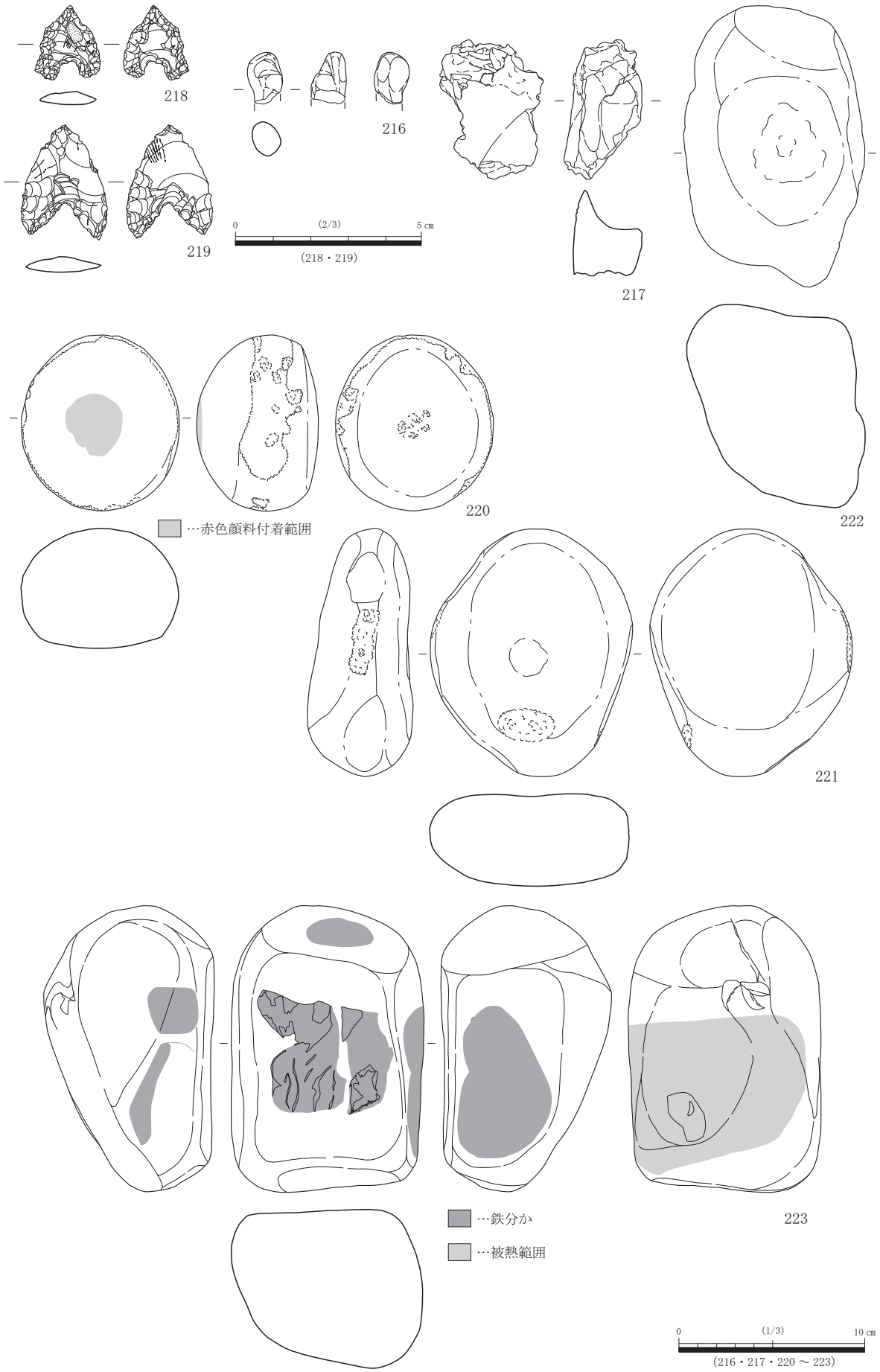




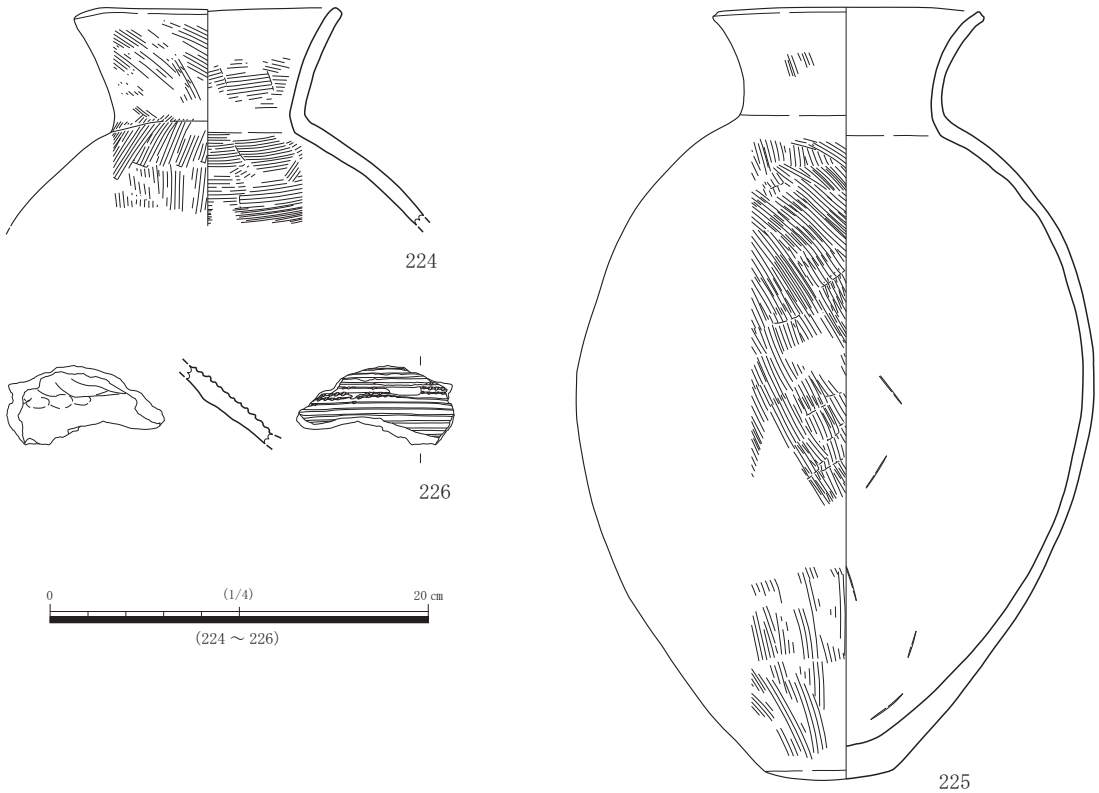
〈土層注記〉S K72（S I 77内）
①層：10YR3/2黒褐色土　締りやや弱い　粘性やや強い
焼土粒・炭化物少量含む



第 49 図　　S I 77（内S K72）・112 遺構・出土遺物実測図 1



第 50 図　　ＳＩ77（内ＳＫ72）・112 出土遺物実測図 2



第 51 図　　ＳＩ77（内ＳＫ72）・112 出土遺物実測図３

か、単なる廃棄であるかは判断ができないが、弥生時代後期における当時の使用道具を一括して見ることのできる良好な資料を残した遺構である。

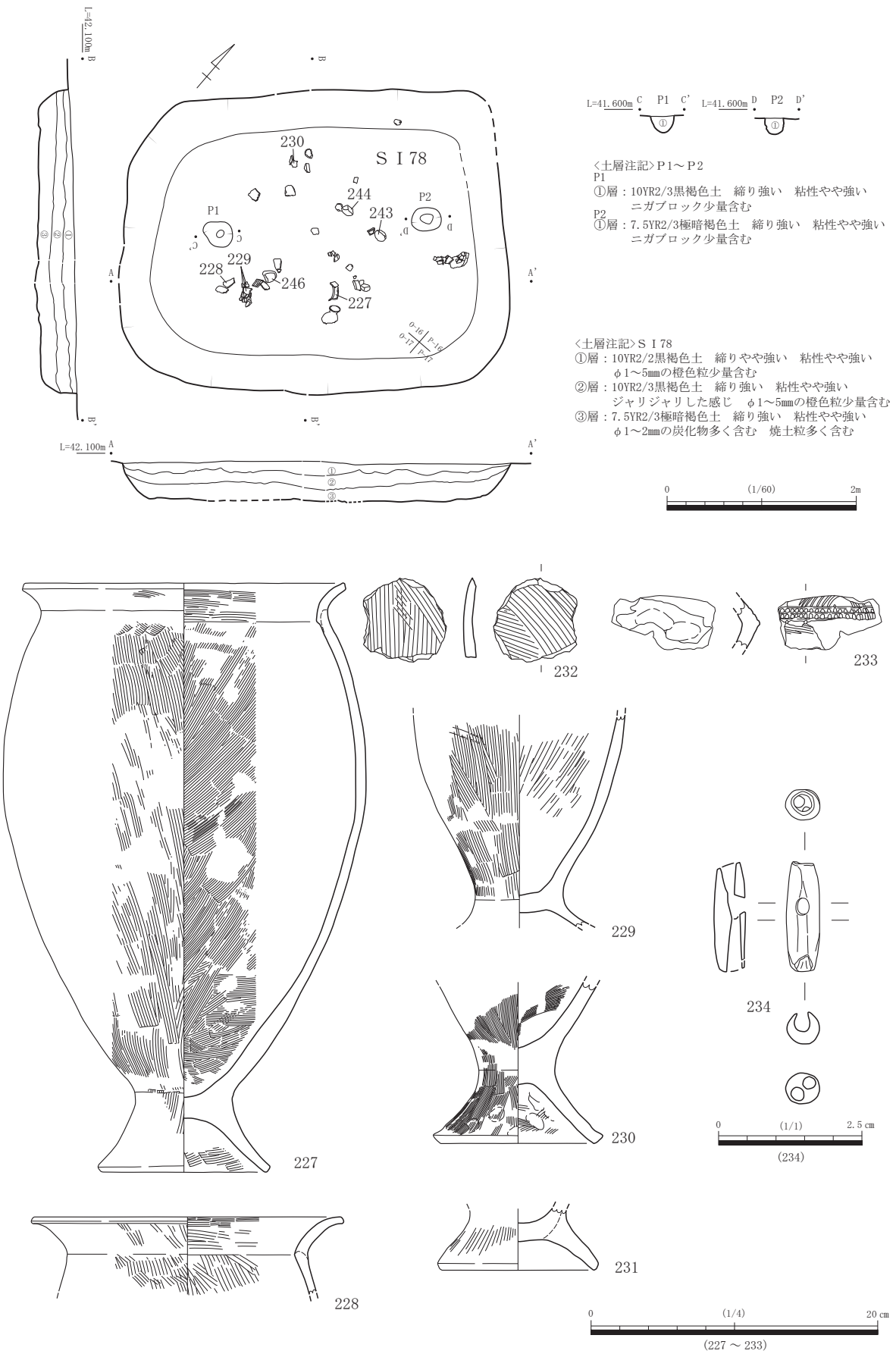
ＳＩ７７、ＳＩ１１２（第４９図～第５１図）

Ｍ、Ｎ１７グリッドに位置する遺構である。両遺構とも先述したＳＩ７６、ＳＩ１１４と切り合う。

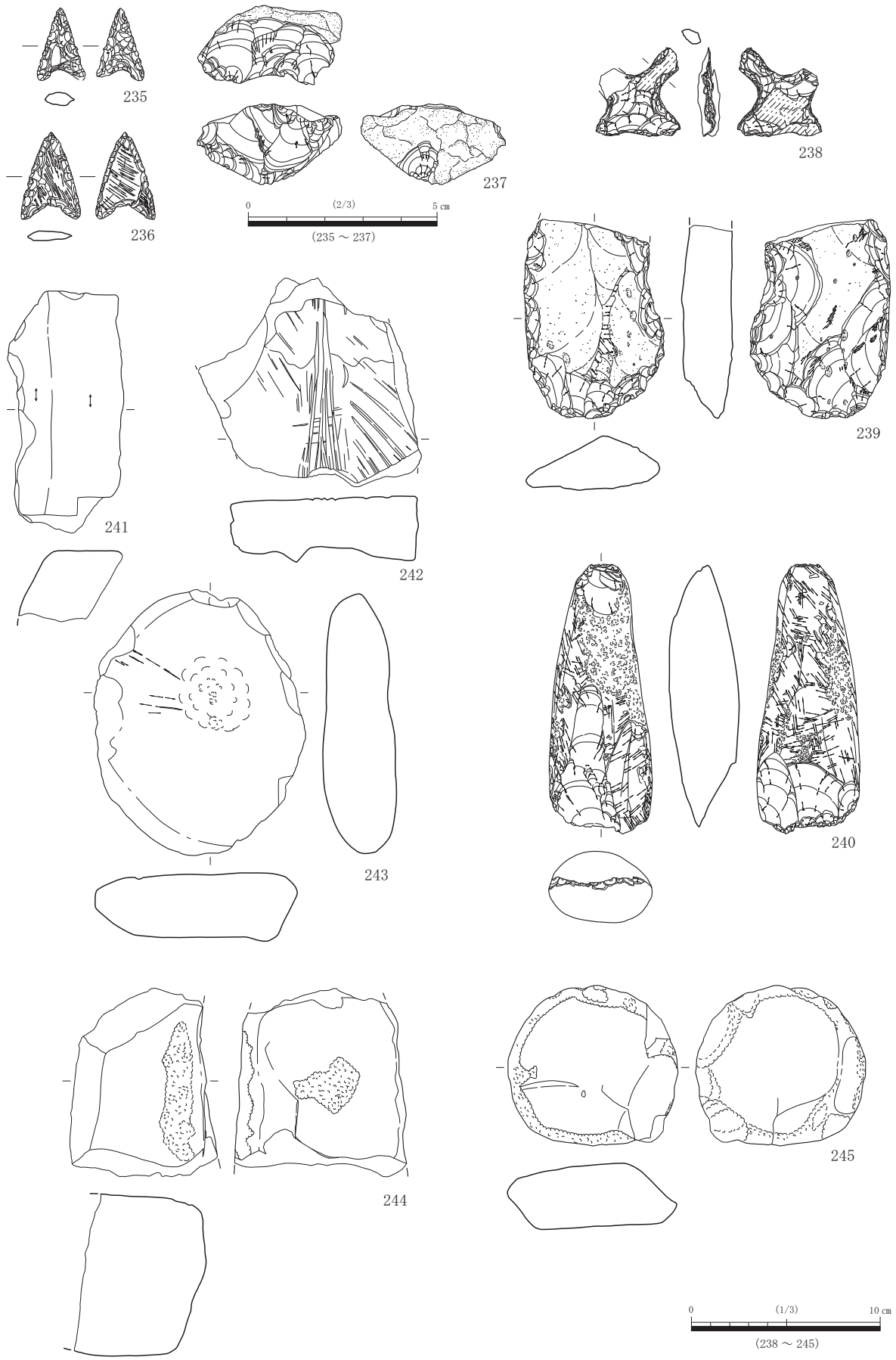
ＳＩ７７は北側の約半分をＳＩ７６とＳＩ１１４に壊されているが、残った痕跡から平面形は長方形を呈すると推定できる。断面は台形状を呈し、検出面からの深さは約４２㎝を測る。埋土７層は貼床と思われるが土層の注記がないため硬化面の有無など詳細は不明である。埋土５層は約１３㎝の高さをもつベッド状遺構と考えられる。床面にて、平面形は円形で径が約４１㎝のピットを１基検出しているが、５０㎝以上の深度をもつことから主柱穴の一つと捉えている。ただし、土層の注記は無いために柱痕の有無などは不明である。炉は確認されていない。

遺構の南隅に白色の粘土層を検出した。遺構検出時から確認できていたが、当初はかまどと想定して調査するも燃焼部などの痕跡はなかった。固形化してはおらず、粘性の非常に強い粘土として残っていた。断面を確認するとＳＩ７７の使用直後に廃棄、もしくは置かれたままの状態とも見ることができる。土器製作用の粘土を貯蔵していたとも考えられるがその判断には至っていない。

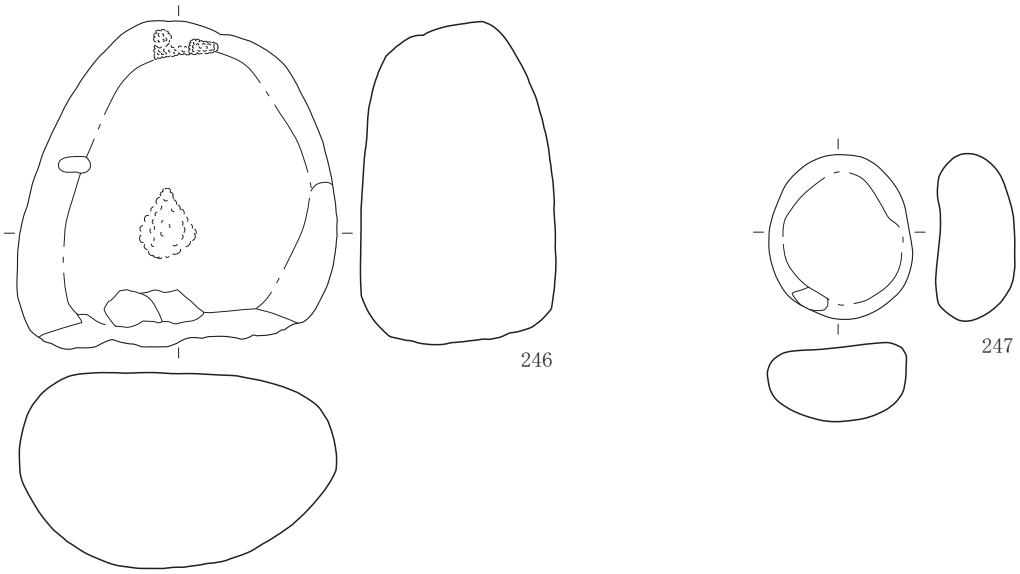
遺物は２１２の小型の鉢が出土している。口径約１０．１㎝、胴部最大径約１１．１㎝、器高約８．０㎝を測る。外器面は丁寧なミガキを施している。２１６は指先で握ったような痕跡を残した土器を作る際の粘土紐のようなものと考えられる。２１６、２１７は焼成粘土塊である。２１７は全体的に見て胎土中の混和材は、出土した土器などと比べると少ないが、一部分のみに砂粒を多く含んだ箇所をもつ。２１８は黒曜石製で基部にＵ字状の抉りをもつもの、２１９は深い抉りをもつ安山岩製の石鏃である。

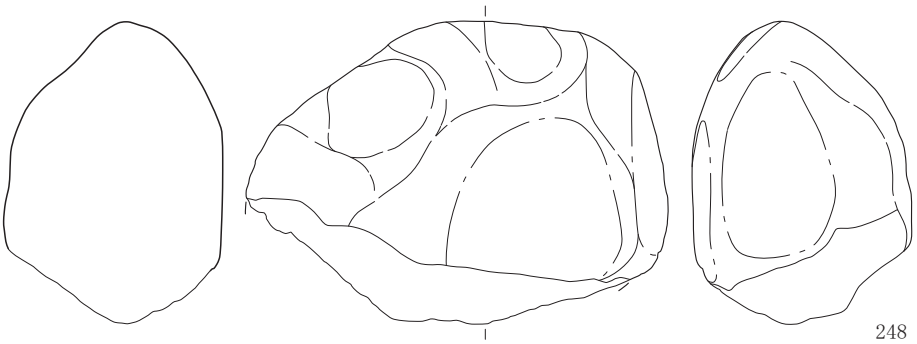


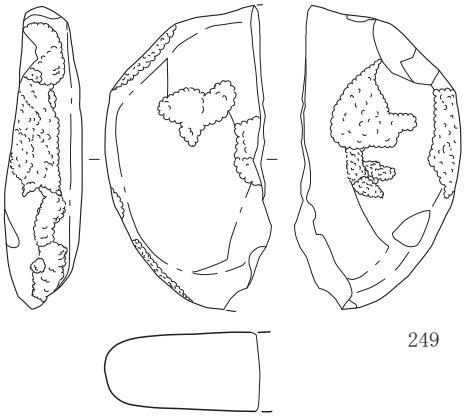
第 52 図　　S I 78 遺構・出土遺物実測図 1

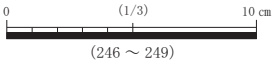


第 53 図　　ＳＩ78 出土遺物実測図 2









第 54 図　　ＳＩ78 出土遺物実測図 3

遺構南西壁側においてＳＫ７２を検出した。掘方の調査で検出をしたものだが、床面からの掘り込みと考えられる。平面形は長方形で、断面は台形状を呈する。長軸約８４㎝、短軸約７０㎝、検出面からの最大深度は約３２㎝を測る。長軸方向はＳＩ７７長軸方向と平行である。埋土はやや締り、粘性ともにやや強めの黒褐色土の単層で、焼土粒、炭化物を少量含んでいる。上層に遺物の集中が確認できている。遺物は南隅に土器、中央部に石器の集中が見られた。２１３は片口の鉢である。口径約１９．８㎝、器高約８．５㎝、底径約６．８㎝を測る。２１４は口径約１２．３㎝、残存高約８．５㎝を測る高坏である。脚部は打ち欠かれており、内器面に放射状のミガキを施している。おそらく暗文と考えられる。２１５は高坏の脚のつけ根部分を再加工した円盤形土製品である。石器は２２０の赤色顔料の付着した磨石のほか、２２３の鉄分の付着、被熱の痕跡を残した台石で鉄床石と考えられるものなどが出土している。判断には至っていないが、ＳＫ７２は用具の貯蔵用穴、あるいは祭祀に伴う埋納穴とも考えられる。

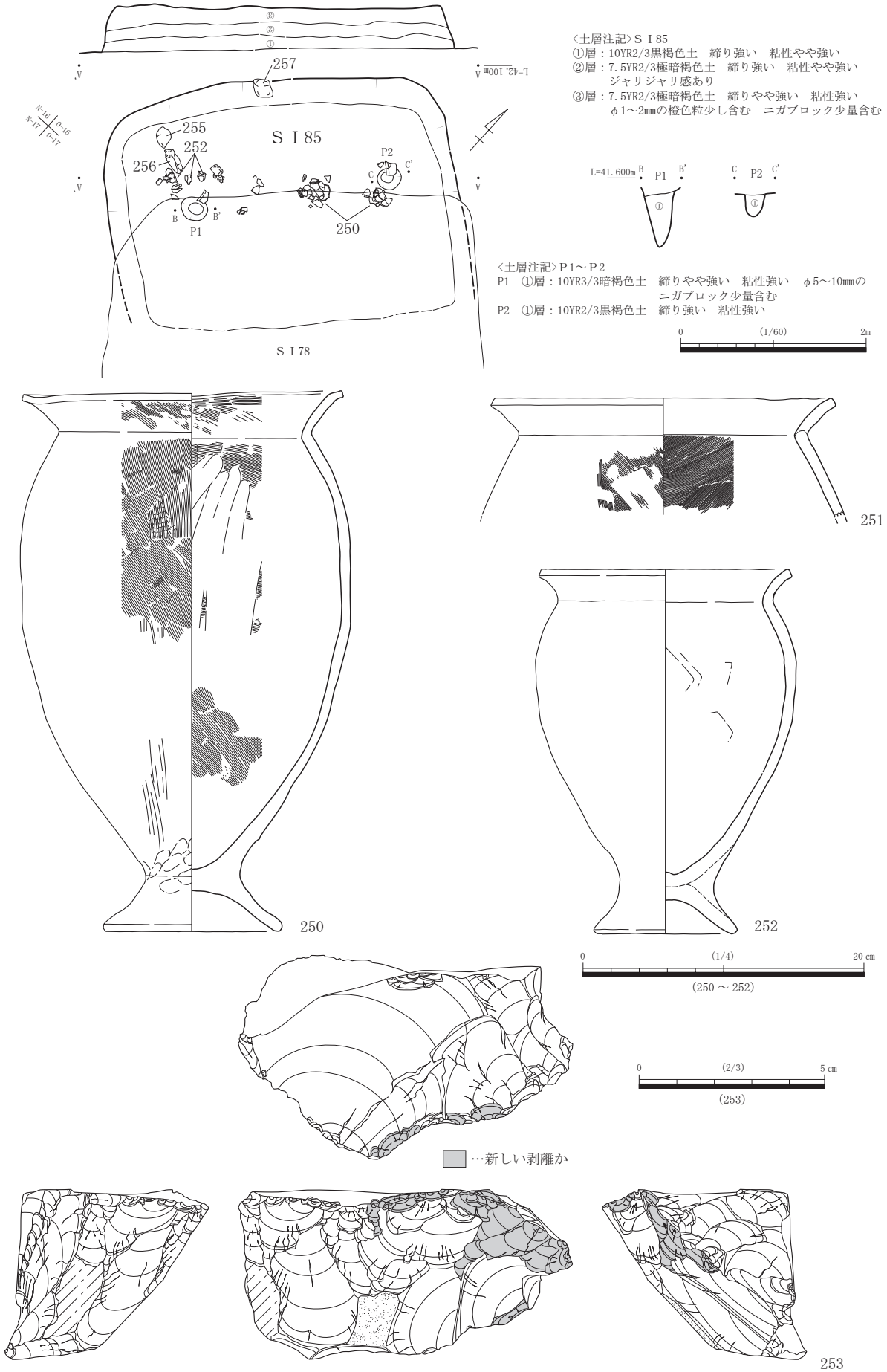
ＳＩ１１２はその遺構の半分以上をＳＩ７７、ＳＩ７６、ＳＩ１１４に壊されている。また遺構南西部は調査区外へと続く。検出のプランから平面形は長方形を呈すると想定できる。断面は台形状を呈し、埋土は３層に分けることができる。残存の状況、ピット、炉、貯蔵穴、硬化面等が確認されていないことから不明な点が多い遺構である。２２４、２２５は口径約１３．６㎝～１３．８㎝の壷である。内外器面のほとんどにハケメ調整が施されている。２２６は平行文、刻みが施文された「免田式土器」と考えられる。内面は強いナデ調整が施され、指頭痕を残す。

ＳＩ７８（第５２図～第５４図）

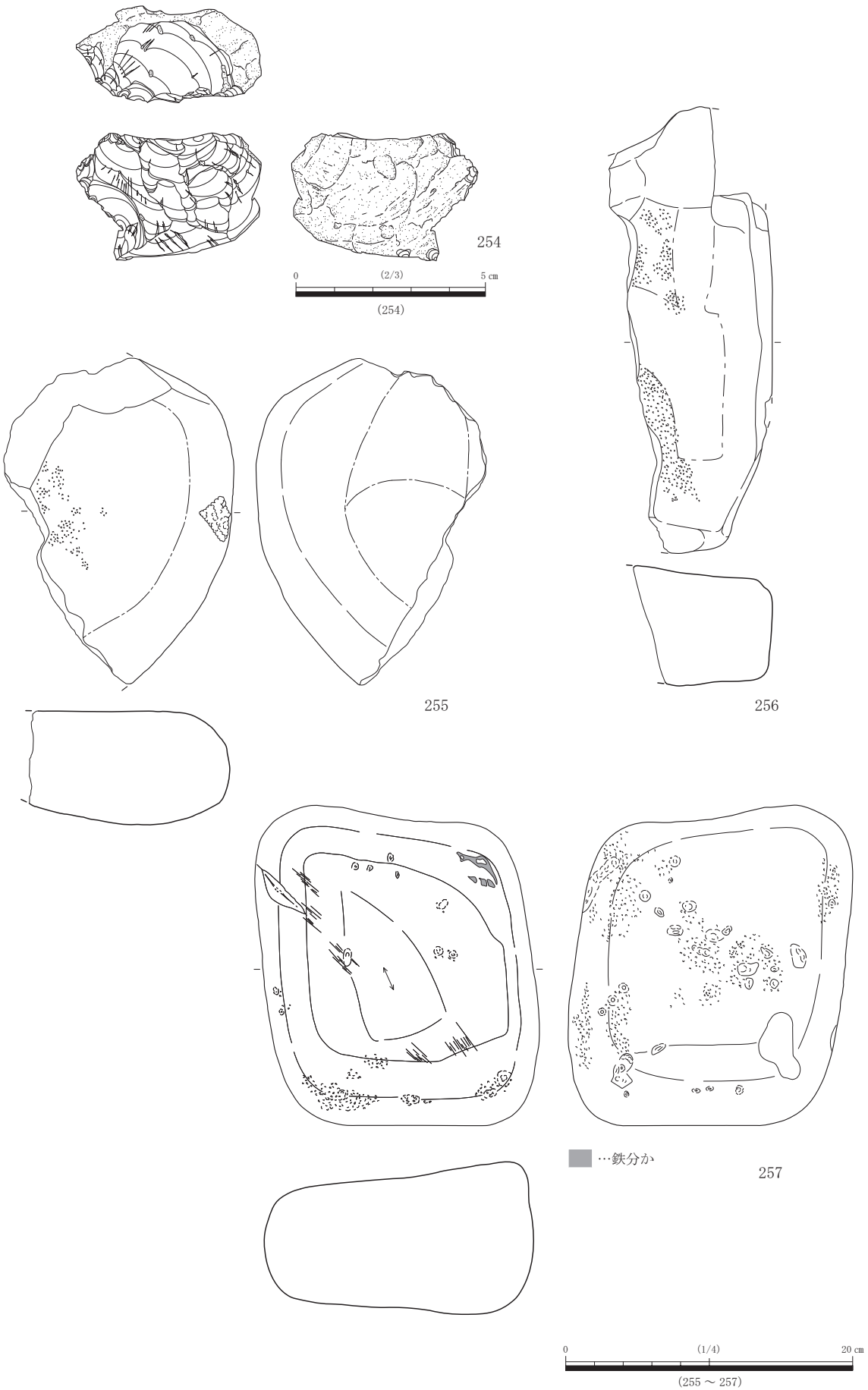
Ｏ１６・１７グリッドに位置する。検出面は５層上面である。ＳＩ８５の半分近くを壊している。平面形は隅丸の長方形で、断面は台形状を呈する。長軸約４．０８ｍ、短軸約３．２ｍ、検出面からの深さは約４２㎝を測る。長軸はＮ－５０°－Ｅである。埋土は３層に分けることができ、埋土１、２層は約１～５㎜の橙色粒を少量含むが、埋土２層の方が締りは強い。埋土３層は約１～２㎜の炭化物を多く含む極暗褐色土である。Ｐ１とＰ２を検出し、それぞれが主柱穴と考えられ、２本柱の構造を成すものと考えられる。平面形はほぼ円形で、径は約３０～３２㎝、検出面からの深さは約１７㎝を測る。下端のレベルは一定であったが、確認できた深度は浅く柱痕は確認できていない。柱穴間は約２．４３ｍである。炉、貯蔵穴等は確認できていない。ＳＩ８５使用後の建て替えの可能性を考えたい。

遺物は遺構内に散逸した状態で出土しながらも、複数個体の土器などが接合、復元できている。２２７～２３１は甕である。２２７は口径約２２．２㎝、胴部最大径約２５．３㎝、器高約４１．１㎝、底径約１１．２㎝を測り、内外器面のほとんどはハケメ調整を施している。内器面に黒斑がある。２３０は外器面に黒斑が確認できる。２３２は甕の胴部を再加工した円盤形土製品である。２３３は重弧文を７条１単位とした「免田式土器」である。

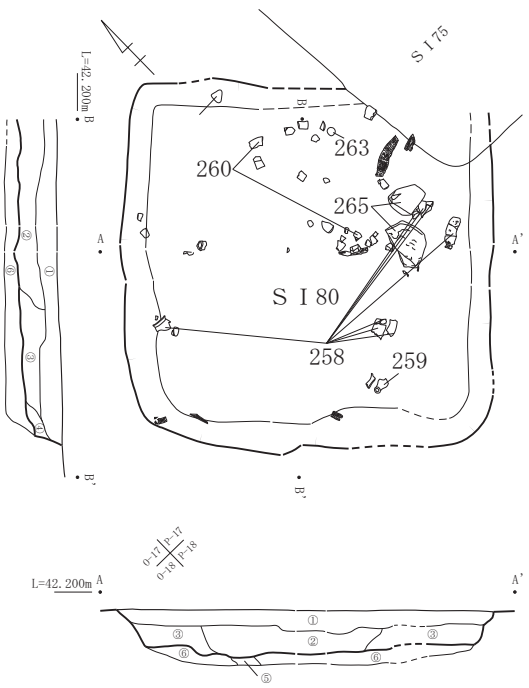
２３４は石製管玉である。最下層である埋土３層から出土している。長さ約２．０㎝、幅約０．６㎝、両側の穿孔径約０．２㎝を測る。両側からの穿孔を施している。細くつながっているが、途中で止まっている孔も確認できる。体部にも径約０．３㎝の穿孔をもつ。２３５は黒曜石製、２３６は安山岩製の石鏃で、ともに凹基の二等辺三角形状を呈する。２３６は表裏において研磨された痕跡を残している。２３７は黒曜石製の石核である。裏面は自然面を残す。２３８は粘板岩製の十字形石器である。左右側面の抉り部に使用痕を残している。２３９は安山岩製の打製石斧、２４０は頁岩製の磨製石斧である。２４１、２４２は砥石である。２４２は有溝のもので、多方より溝状使用痕が走る。溝の断面がシャープに尖るため、鉄器類の刃部を研磨した可能性がある。２４３～２４９は磨・敲石類である。推察する根拠はこれらのみにとどまるが、ＳＩ７８は何かしらの生産用構造物だった可能性もある。

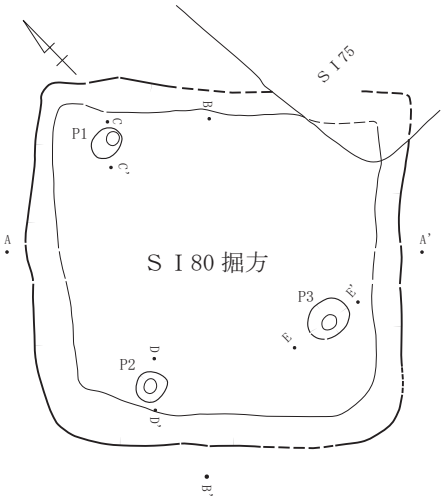


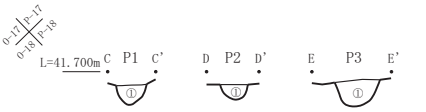
第 55 図　　ＳＩ85 遺構・出土遺物実測図 1



第 56 図　　ＳＩ85 出土遺物実測図 2



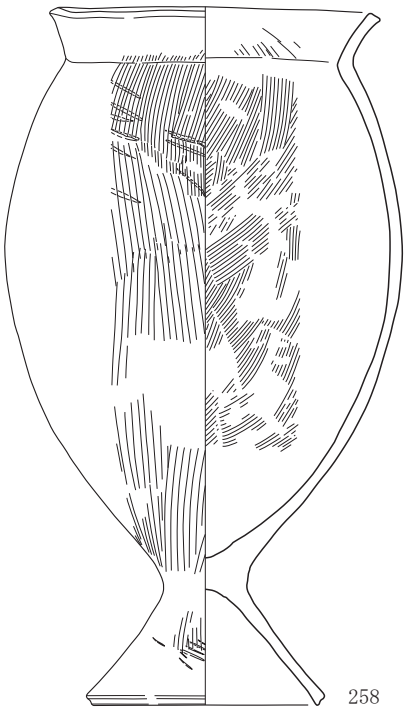


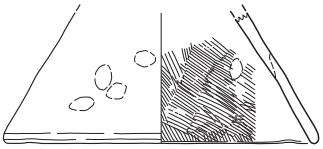


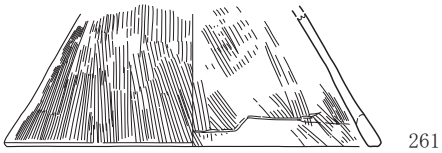
P1
①層：10YR3/4暗褐色土　締りやや弱い　粘性やや弱い
焼土・炭化物を少量含む
P2
①層：10YR3/4暗褐色土　締りやや弱い　粘性やや弱い
焼土・やや多く炭化物を含む
P3
①層：10YR3/4暗褐色土　締りやや弱い　粘性やや弱い
焼土・炭化物を少量含む

0　(1/60)　2m

〈土層注記〉S I 80
①層：10YR3/3暗褐色土　締りやや弱い　粘性やや弱い　焼土粒・炭化物やや多く含む
②層：7.5YR3/3暗褐色土　締りやや弱い　粘性やや弱い　焼土粒・炭化物多く含む
③層：10YR3/2黒褐色土　締りやや強い　粘性やや強い　焼土粒・炭化物少量含む
④層：10YR3/3暗褐色土　締りやや弱い　粘性やや弱い　焼土粒・炭化物少量含む
⑤層：10YR3/3暗褐色土　締りやや弱い　粘性やや弱い　焼土粒・炭化物やや多く含む
⑥層：10YR2/3黒褐色土　締りやや弱い　粘性やや弱い　焼土粒・炭化物少量含む

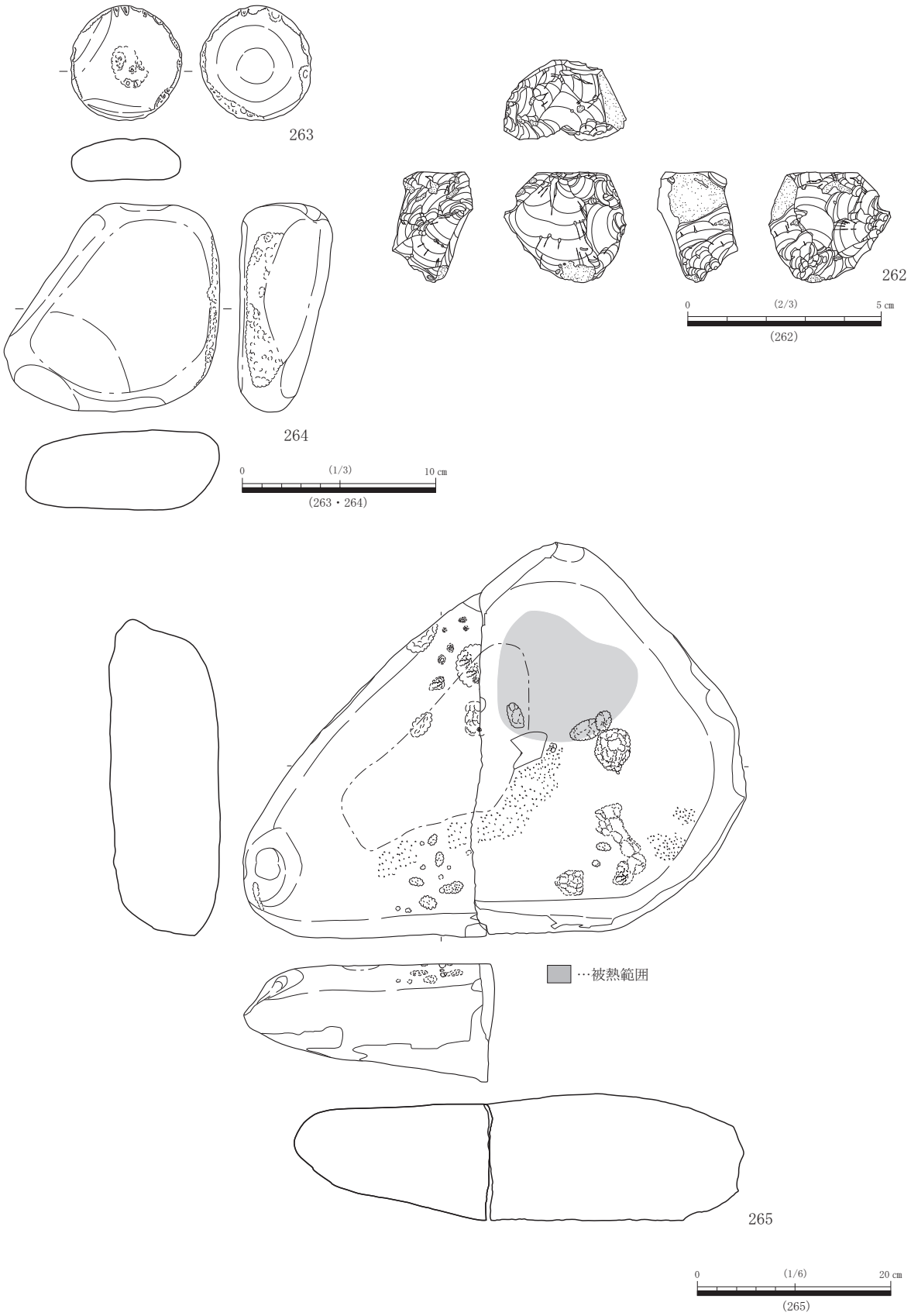






0　(1/4)　20 cm
(258 ～ 261)

第 57 図　　S I 80 遺構・出土遺物実測図 1



第 58 図　　ＳＩ80 出土遺物実測図 2

ＳＩ８５（第５５図、第５６図）

ＳＩ７８と同じくＯ１６・１７グリッドに位置し、ＳＩ７８に半分近くを壊されている遺構である。検出面は５層上面である。平面形は、ピットを主柱穴と捉えると隅丸の長方形であった可能性が高い。断面は台形状を呈する。壁面側の若干の落ち込みは側壁溝であった可能性もある。長軸約３．９０ｍで検出面からの深さは約５０㎝を測る。長軸はＮ－４８°－Ｅである。埋土は３層に分けることができ、埋土１層は黒褐色だが、下の２層は極暗褐色土で、埋土３層には約１～２㎜の橙色粒を少し含む。Ｐ１とＰ２を検出し、それぞれが主柱穴と考えられ、２本柱の構造を成すものと考えられる。柱穴間は約２．３３ｍである。平面形はほぼ円形で、径は約２６～２９㎝、検出面からの深さは約３０㎝～６４㎝を測り、下端のレベルに大きな差がある。柱痕は確認できていない。炉、貯蔵穴等は確認できていない。

２５０～２５２は甕である。２５０は口径約２２．６㎝、胴部最大径約２３．５㎝、器高３８．５㎝、底径約１２．３㎝を測る。外器面は胴部上半分に１０条程の工具を用いたハケメが顕著に残り、貼り出し部に黒斑がある。内器面はハケメ調整の後、上半分にナデ調整を施す。２５１は復元口径約２３．９㎝を測る。外器面に煤が付着している。２５２は口径約１７．４㎝、胴部最大径約１８．５㎝、器高２６．０㎝、底径約９．３㎝を測る。２５３、２５４は石核である。２５４は黒曜石製のもので、主に剥出した面は１面である。２５５は珪質頁岩製のものである。２５５は石皿で主面に若干の敲打痕を残す。２５７はうすい筋状の擦痕をもち、敲打痕も残す。また、黒い鉄分のようなものが付着する。

ＳＩ７８との新旧関係をもつ遺構であるが、同じく何かしらの生産用構造物だった可能性もあるが、推察の域を超えない。

ＳＩ８０（第５７図、第５８図）（第５章　自然科学分析）

Ｐ１７・１８グリッドに位置する遺構である。後世の遺構（ＳＩ７５）に東隅を壊されている。平面形は隅丸方形、断面は皿状を呈する。長軸は約２．９６㎝、検出面からの深さは約４４㎝を測る。長軸はＮ－４６°－Ｗである。埋土５、６層は貼床と考えているが、上層との締りの差、また硬化面を確認できていない。全埋土中から焼土粒、炭化物が検出されている。床面で確認できなかったピットを掘方面にて検出した。Ｐ１～Ｐ３を検出し、それぞれが主柱穴と考えられる。ピットの平面形はほぼ円形で、径は約２６～３６㎝、検出面からの深さは約１２㎝～２２㎝を測り、下端のレベルは一定ではない。炉、貯蔵穴等は確認できていない。遺構東隅の埋土３層において炭化材を検出した。分析の結果、常緑高木のアカガシ亜属の樹種であることが分かった。調査１区のＳＩ２、調査３区のＳＩ７６で検出したものとは別の種類であるが、比較的重硬で強度の高い種類の樹木を同じく建築部材として選択、利用したことが推定できる。

遺物の２５８、２６０、２６１は甕である。２５８はハケメ調整を施しているが、胴部上方と、脚部に右下がりのタタキ痕が残る。２６０は指頭圧痕を部分的に残し、内器面はハケメ調整が施されている。また、成形時の巻き上げのような痕も残す。復元底径は約１６．３㎝を測る。２６１の復元底径は約１９．６㎝を測る。２５９は高坏の脚部である。内外器面に黒斑を残す。

２６３、２６４は磨･敲石で、側面に敲打痕を残す。２６５は据わりのいい石皿である。敲打痕は大小様々である。黒変している箇所もある。

ＳＩ８１、ＳＩ８６（第５９図）

Ｏ１８・１９グリッドに位置する。両遺構とも５層上面で検出した。ＳＩ８６をＳＩ８１が切る状況で検出した。弥生後期と位置付ける遺構としては、後に紹介するＳＩ９３を含めると３軒の切り合いを確認している。ＳＩ９３（古）→ＳＩ８６→ＳＩ８１（新）である。３軒とも南西側は調査区外へと伸びる。

ＳＩ８１の平面形は隅丸方形を推定することができる。断面は深い皿状を呈する。長軸約４．０８ｍ、検出面からの深さは約７４㎝を測る。層位間で差異は無いが、締りの強い埋土４層は貼床と考えられる。埋土４層以外で焼土と考えられる橙色粒を検出している。Ｐ１、Ｐ２を検出し、それぞれが主柱穴と考えられ、２本柱の構造を成すものと考えられる。ピットの平面形は円形で、径は約２３～２４㎝、検出面からの深さは約１３㎝～１８㎝を測り、下端のレベルは一定ではない。柱穴間は約２．７６ｍを測る。炉、貯蔵穴、ベッド状遺構等は確認されていない。

２６６は台付鉢の脚部片と思われる。外器面の一部に黒斑がある。２６７は埋土２層において出土した有茎鉄鏃である。長さ約７．０㎝、最大幅約２．３㎝、厚さ約０．５５㎝を測る。素材は不明だが基部には装着、固定用の紐が巻かれている。

ＳＩ８６はそのほとんどがＳＩ８１に壊され、調査区外と伸びるため不明な点が多い。検出面からの深さは約７１㎝を測る。埋土は４層に分けることができる。埋土４層が貼床なのか判断はできないが、ＳＩ８６との床面の高低差を比較すると１０㎝以上ほど低い位置にあったこととなる。

２６８は甕の脚部で、端部に黒斑がある。２６９の壷の口縁部には刻目を施しており、復元口径は約１８．１㎝を測る。２７０は長さ約４．０㎝、最大幅約１．８㎝、厚さ約０．１５㎝を測る鉄鏃である。基部に凹部を作り出している。

ＳＩ９３（第６０図）

Ｏ１８グリッドに位置する。５層上面で検出した。ＳＩ９３もそのほとんどをＳＩ８１、Ｓ８６に壊されており、北隅の一部のみの検出となった。断面は台形状を呈し、検出面からの深さは約３４㎝を測る。Ｐ１、Ｐ２を検出したが、主柱穴であるかは判断できない。ピットの平面形は円形で、径は約２３～２５㎝、検出面からの深さは約９㎝～１４㎝を測り、下端のレベルはほぼ一定である。残存の状況、炉、貯蔵穴、硬化面等が確認されていないことから不明な点が多い遺構である。

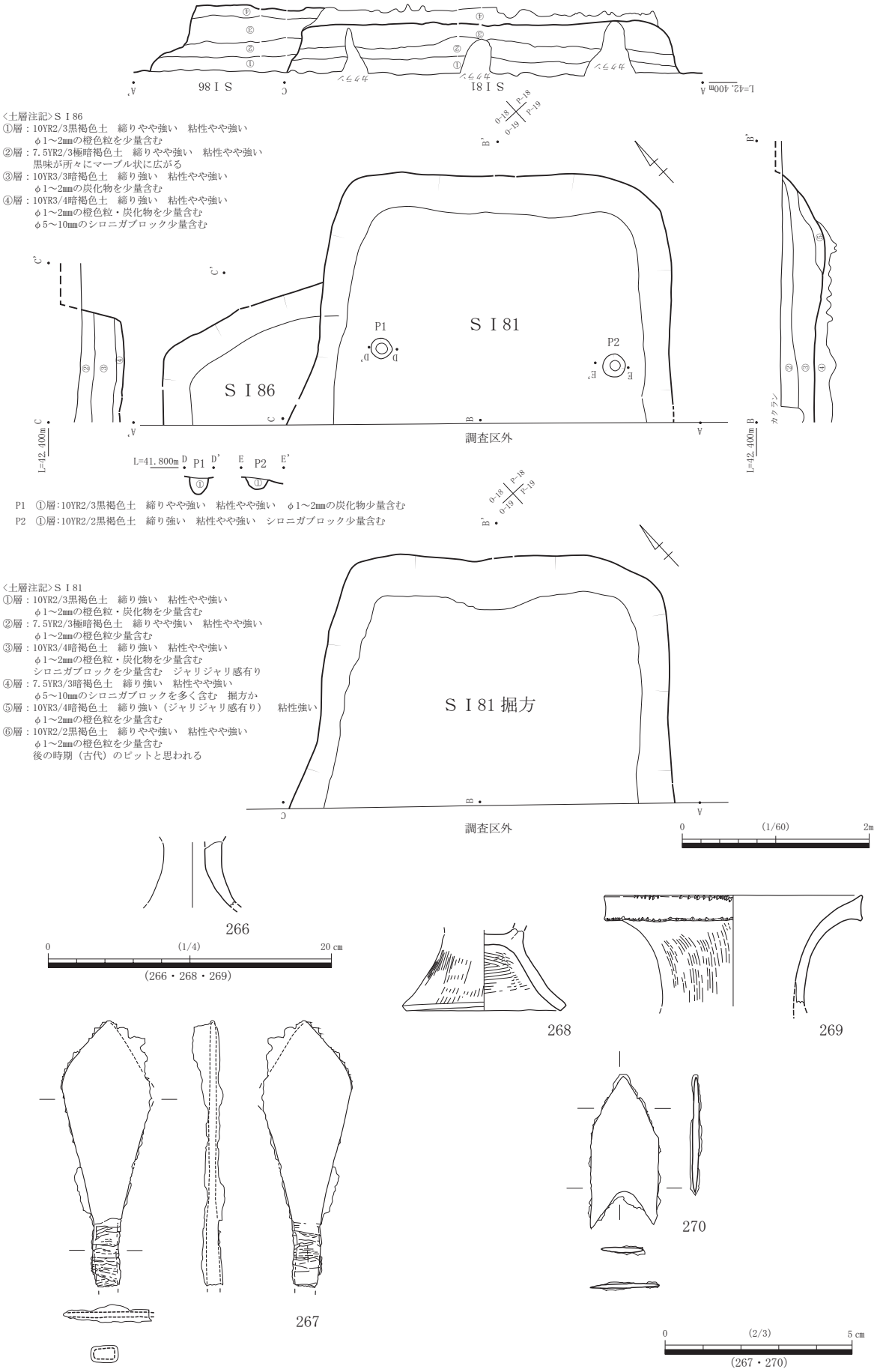
ＳＩ８２、ＳＩ８７、ＳＩ８８（第６１図～第６３図）

Ｎ１５、Ｏ１５・１６グリッドに位置し、５層上面で検出した遺構である。ＳＩ８８（古）→ＳＩ８７→ＳＩ８２（新）である。３軒とも遺構北東部は後世の溝（ＳＸ１）に壊されている。

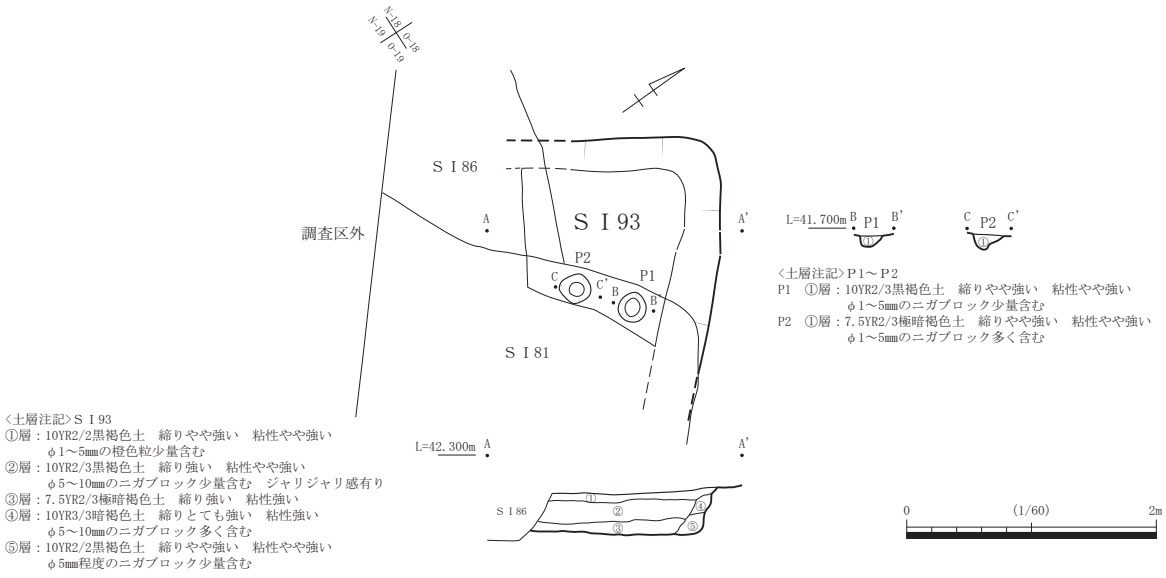
ＳＩ８２の平面形は隅丸の長方形を呈すると想定できる。残存する軸幅は約２．７０ｍ、検出面からの深さは約４４㎝を測り、断面台形状を呈する。埋土は３層に分けることができ、埋土１、２層は暗褐色で、埋土３層は黒褐色土である。全層とも焼土粒子を含んでいる。埋土３層の締りはやや強く貼床の可能性がある。ピット、炉、貯蔵穴、硬化面等は確認されていない。

２７２は石製管玉である。長さ約１．２㎝、幅約０．６㎝、孔径約０．１５㎝を測る。両側からの穿孔を施している。２７３は安山岩製の凹基の石鏃である。２７４は緑色片岩製の有溝砥石である。２７５は側面に敲打痕を残す磨・敲石である。

ＳＩ８７は３遺構の中で一番深く掘り込まれている。平面形は隅丸の方形を想定できる。残存する軸幅は約３．５４ｍ、検出面からの深さは約５０㎝を測り、断面は皿状を呈する。埋土は４層に分けることができる。埋土１～３層は締り、粘性ともにやや弱い暗褐色土である。埋土４層は締りのやや強い、炭化物を多く含ん



第 59 図　　ＳＩ81・86 遺構・出土遺物実測図



第 60 図　　ＳＩ93 遺構実測図

だ黒褐色土で床面の可能性がある。遺構中央より南側付近に焼土が広がっていたが、掘り込み等は確認できず、炉と判断するまでには至らなかった。ピット、炉、貯蔵穴、硬化面等は確認されていない。

２７７の高坏は坏部内面に暗文を施し、外面は筆のようなもので粗雑ではあるが赤彩されている。２７６の磨・敲石は、裏面に人為的に剥いだかのような剥離がある。被熱しているため熱を受けて剥落したとも考えられる。２７９の石皿は端部に被熱した痕跡を残す。

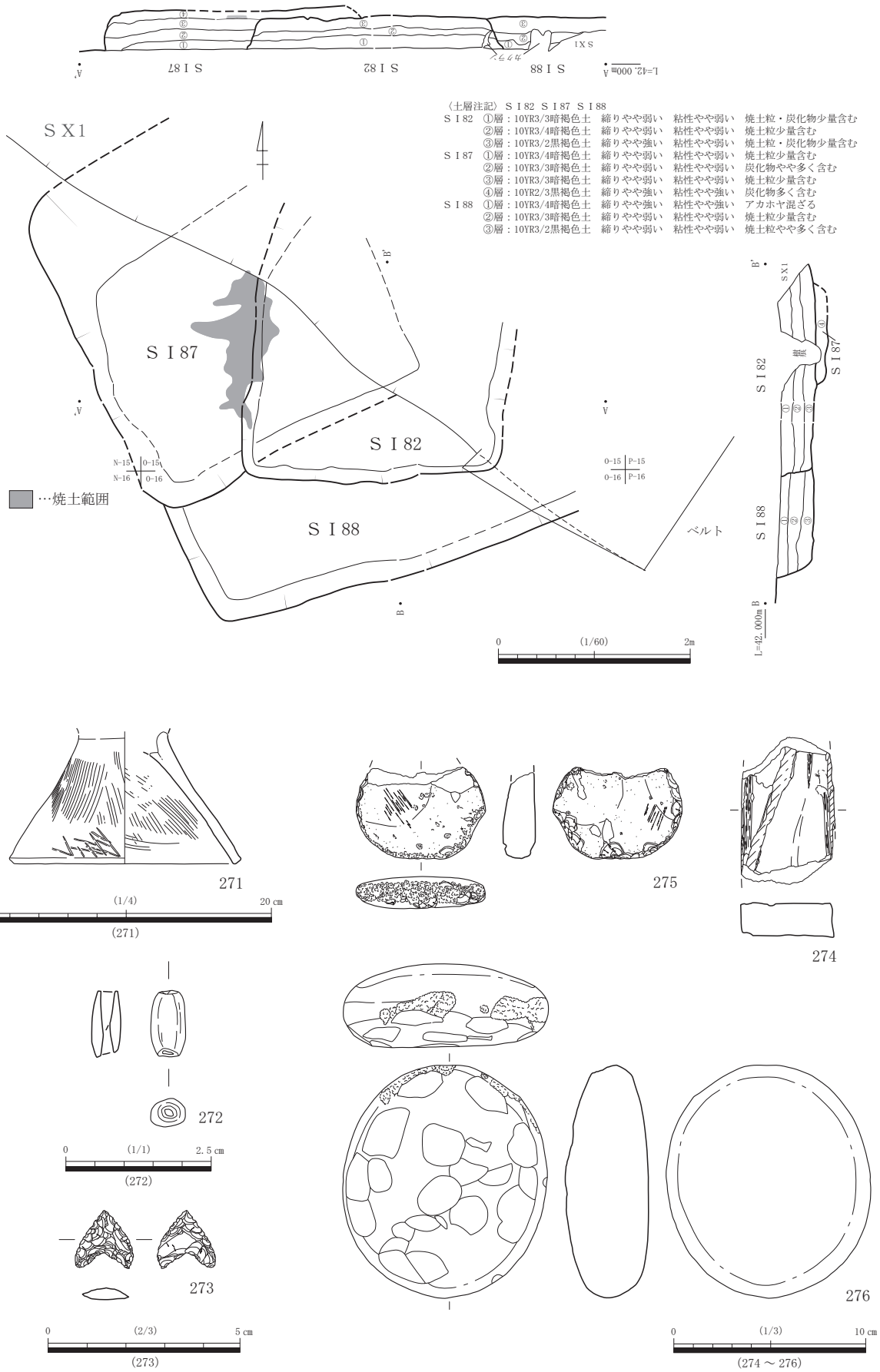
ＳＩ８８は方形あるいは長方形の遺構があったと考えられるが、残存が乏しく詳細はつかめない。埋土は３層に分けることができる。埋土３層は焼土粒をやや多く含んだ黒褐色土である。ピット、炉、貯蔵穴、硬化面等は確認されていない。

２８０の鉢が出土している。とても丁寧な作りをしており、口縁端部はつまみ上げて収めている。内外器面の胴部分に黒斑がある。２８１は土製の管玉である。先端部分が欠損している。残存する長さ約１．１㎝、幅０．８㎝、孔径約０．２５㎝を測る。表面は細かいミガキ調整が施されている。２８２、２８３は黒曜石製の石核である。２８４、２８５は砥石である。

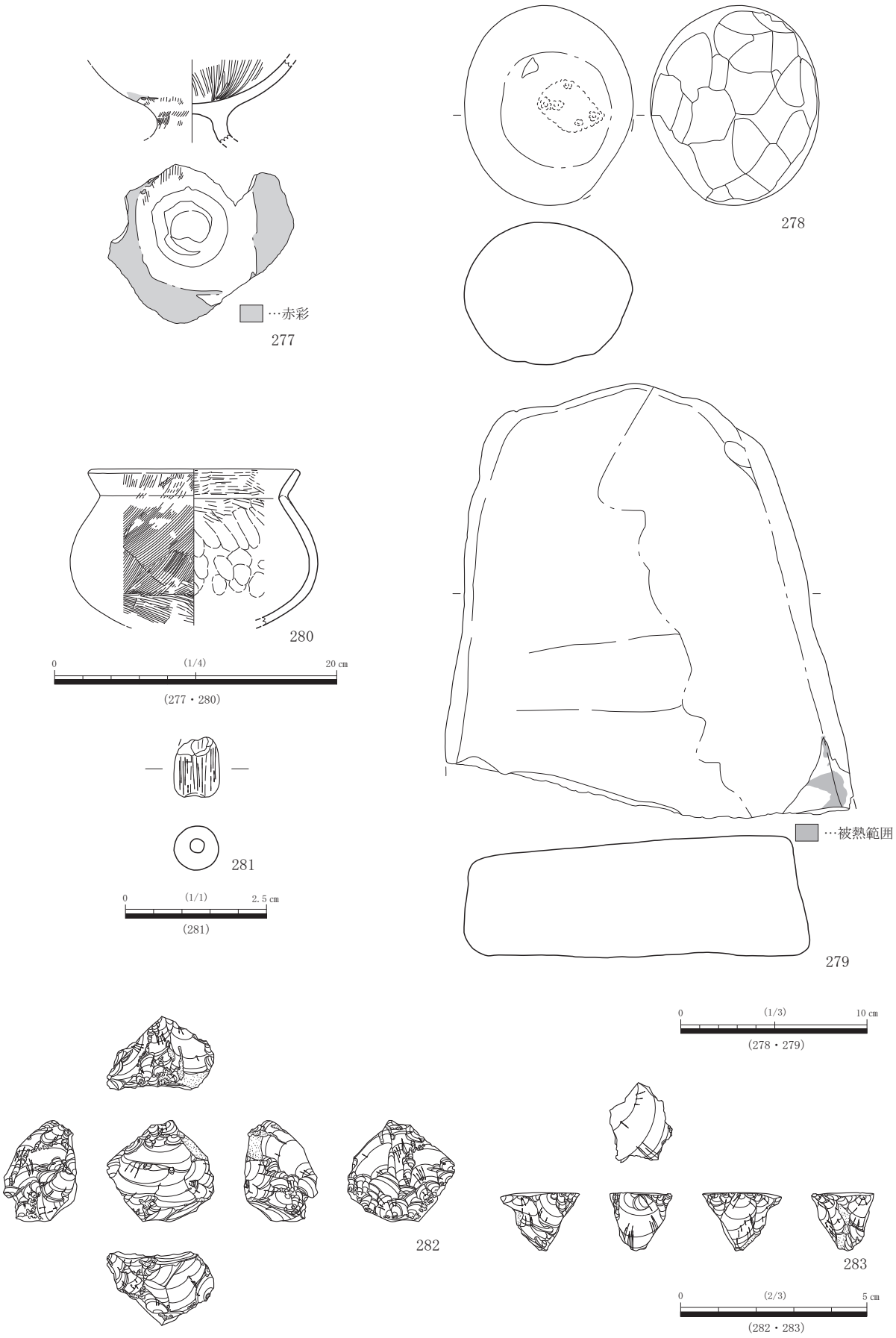
ＳＩ８３（第６４図～６７図）

Ｒ２１・２２、Ｓ２２グリッドに位置する遺構である。検出面は５層上面である。遺構南西部の半分近くは調査区外へと伸びる。南から北へ耕作地が段落ちで区画されていた影響で、上層が削平を受けている。平面形は不明だが、断面は深い皿状を呈する。長軸約４．９０ｍ、検出面からの深さは約６０㎝を測る。長軸はＮ－５０°－Ｗである。埋土は５層に分けることができ、埋土５層は貼床、埋土４層は硬化面である。全層において炭化物、焼土粒を含んでいる。検出したＰ１は主柱穴と考えるが、ほかにピットは確認されていない。Ｐ１の平面形は円形で、径は約３８㎝、検出面からの深さは約４４㎝を測るが柱痕は確認できていない。遺構東隅を中心に炭化材が検出されている。

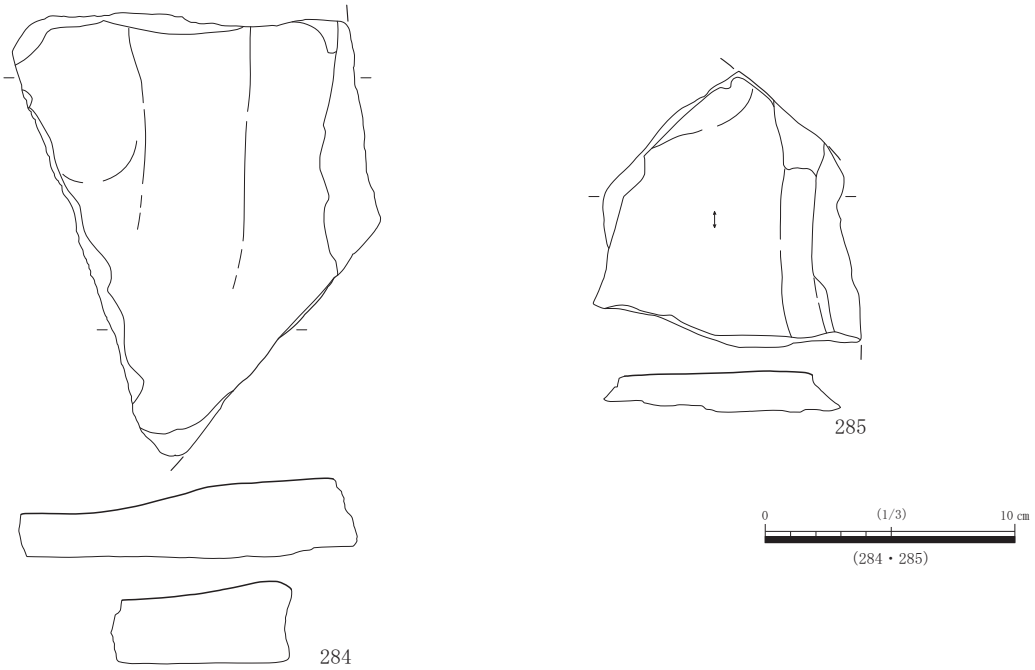
遺物はＰ１東側に集中して出土している。２８６～２９０は脚台の付く甕である。２８８は口縁から胴部上部２／３程度まで、赤変しており、煤も付着している。使用によるものだがかなり火を受けたような痕跡が残る。２９１の鉢は内外器面に煤が付着している。２９６の壷は復元口径約１２．７㎝、底径約６．１㎝、器高約３５．８㎝を測る壷である。内外器面にハケメ調整が施されている。２９８の「免田式土器」は、平



第 61 図　　ＳＩ82・87・88 遺構・出土遺物実測図１



第 62 図　　ＳＩ82・87・88 出土遺物実測図 2



第 63 図　　ＳＩ82・87・88 出土遺物実測図 3

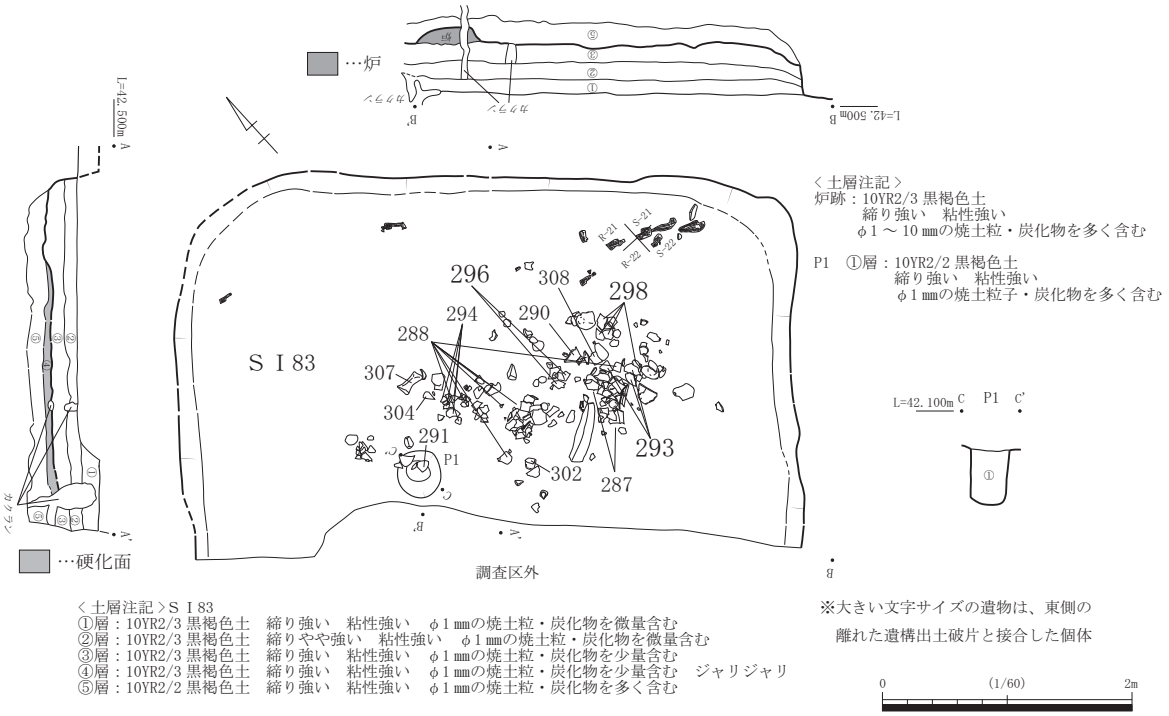
行文上に、胴部から頸部へ引くようにヘラ状工具で施文している。重弧文は１条１条ヘラ描きされている。２９９の高坏は、坏内面に放射状の暗文を施し、口縁には斜め方向のミガキを施している。

３００は安山岩製の凹基の石鏃である。３０１は黒曜石製の石核で、裏面に自然面を残す。３０２の磨・敲石は主面の使用は無く、おそらく確認できる側面と上面のみと考えられる。３０３の台石は中央付近に敲打痕が多く残る。また、右側面の擦れが顕著に認められる。端を中心に使用していたと考えられる。３０４の石皿片は被熱しており、黒変している箇所もある。３０５の砥石は刃部研ぎの際のシャープな溝状の使用痕が残る。

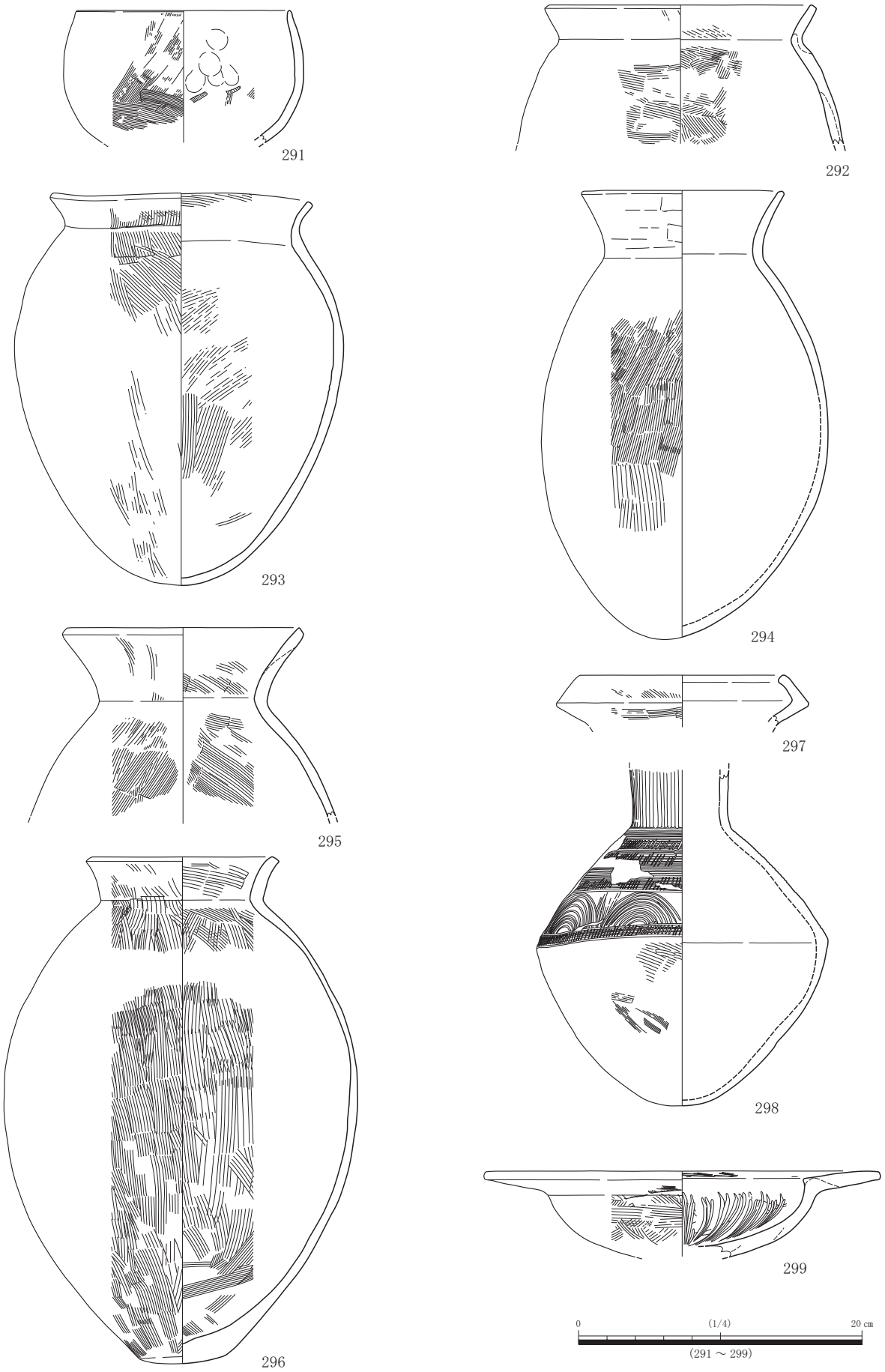
ＳＩ８４（第６８図～第７０図）

Ｖ２１・２２グリッドに位置する遺構である。検出面は５層上面である。後世の溝（ＳＤ３２）に一部壊されているが、後述する同時期の遺構と考えているＳＩ９０、ＳＩ９５、ＳＩ９８を切っている。平面形は方形を呈すると想定される。断面は深い皿状を呈する。残存している軸幅は約３．４０ｍ、検出面からの深さは約４４㎝を測る。埋土は３層に分けることができ、全層が黒褐色土と土色の差異は小さいが、焼土粒、炭化物を含んでいる。また、レンズ状堆積を成していることから下端レベルを床面ととらえた。床面においてＰ１～Ｐ４を検出した。ピットの平面形はほぼ円形で径は約２７㎝～３６㎝、検出面からの深さは約２１㎝～３０㎝を測るが柱痕は確認できていない。また下端レベルも一定ではない。主柱穴の特定までは至らなかったが、遺構壁面の軸とピットの配列からＰ１、Ｐ２が主柱穴となる可能性が高いと考える。炉、硬化面、貯蔵穴、ベッド状遺構等は確認されていない。

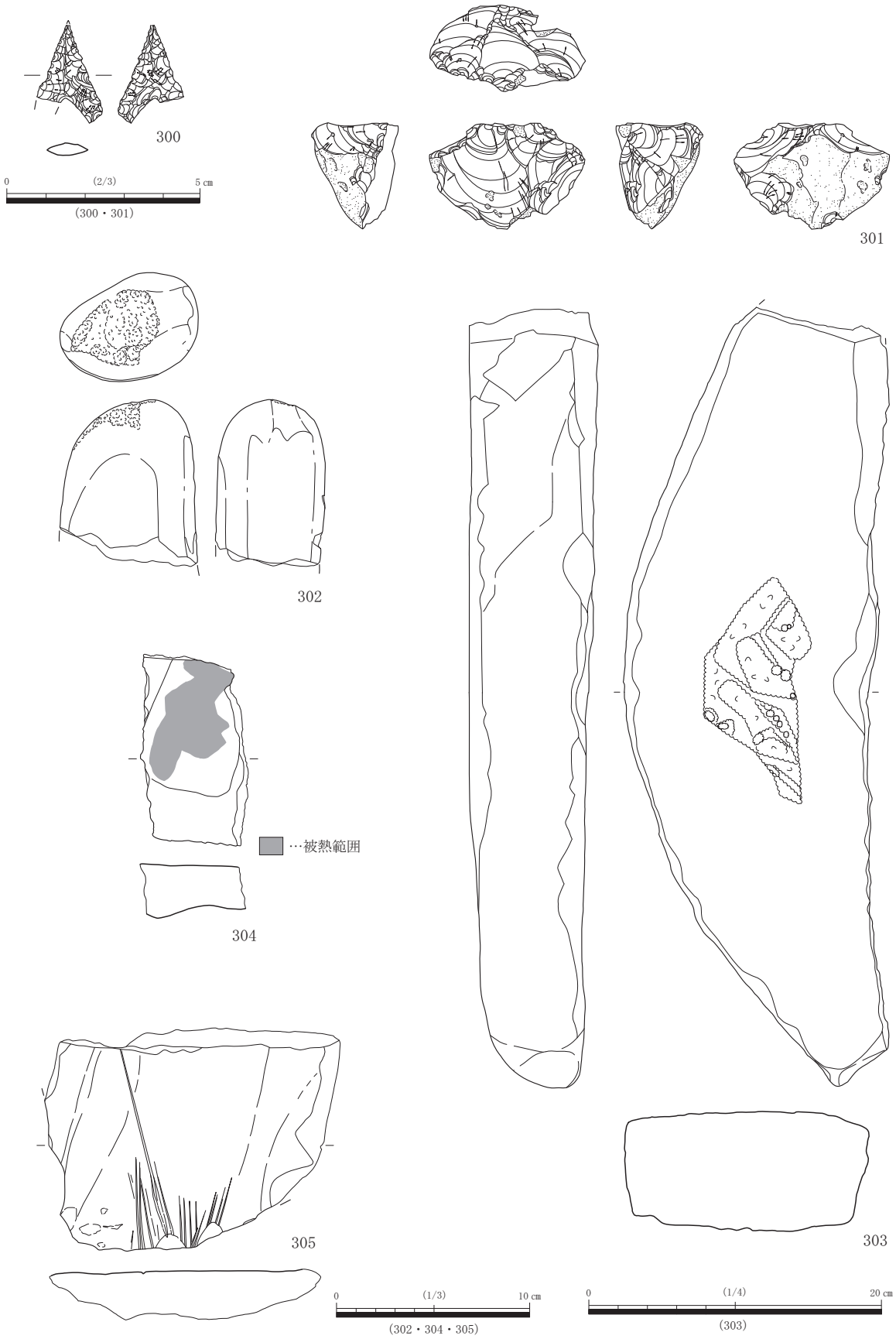
３０９～３１２は甕である。３１０は口径約２０．０㎝、復元した胴部最大径約２２．８㎝、底径約１２．３㎝、復元器高約４０．４㎝を測る。３１３は台付鉢で、外器面胴部下方は縦方向のケズリ調整の跡が残る。内器面は板状工具を用いたナデの後、指によるナデを施している。３１６は残存高約４９．５㎝、胴部最大径約３６．３㎝を測る大型の複合口縁壷である。頸部に突帯を貼りつけている。３１７は見える位置



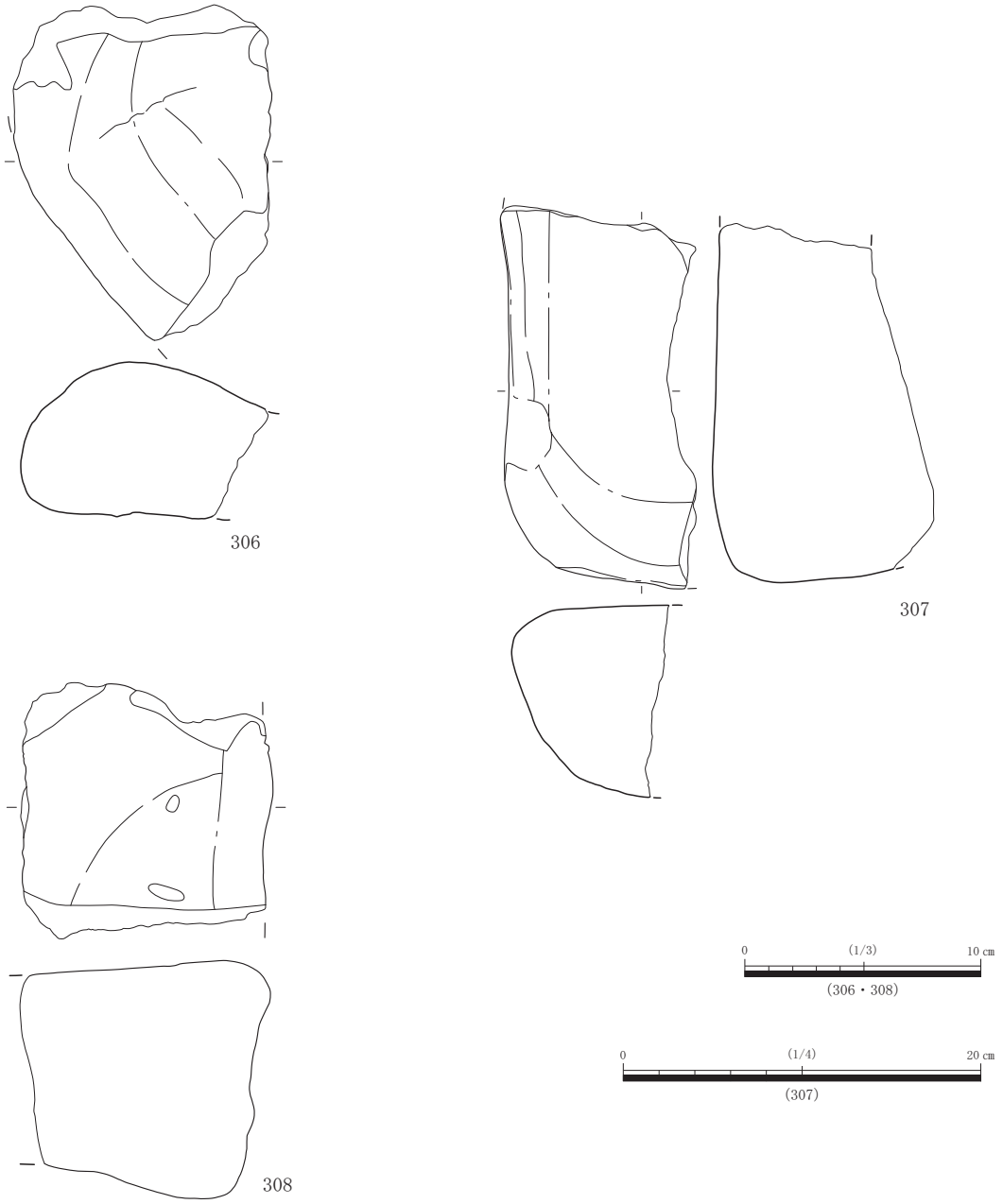
第 64 図　　ＳＩ83 遺構・出土遺物実測図１



第 65 図　　ＳＩ83 出土遺物実測図 2



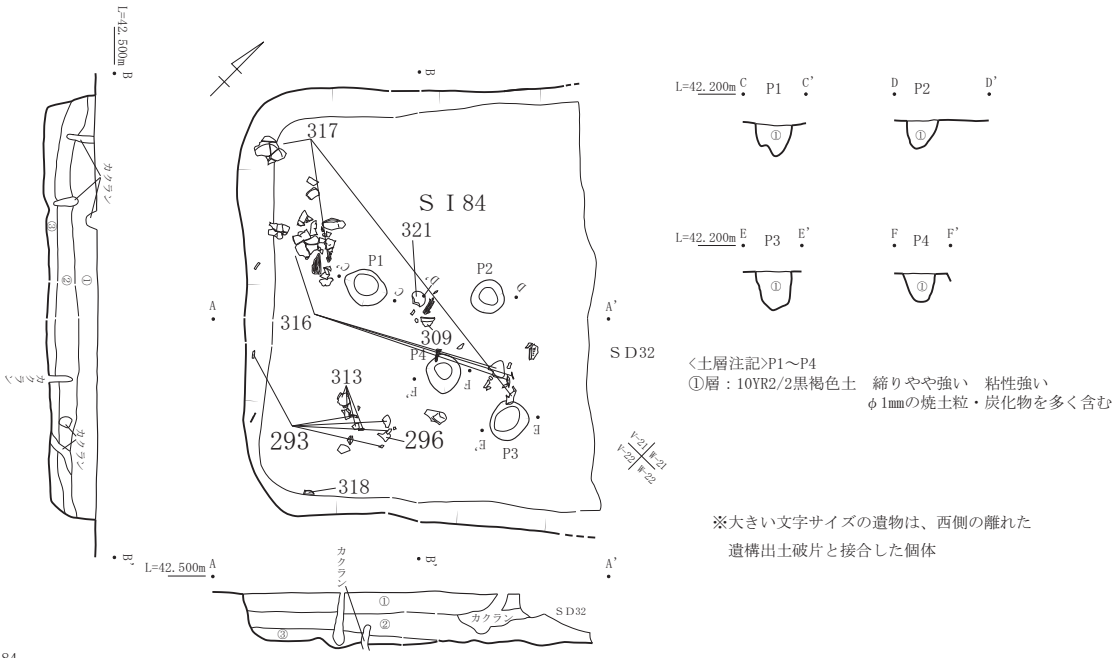
第 66 図　　ＳＩ83 出土遺物実測図 3



第 67 図　　ＳＩ83 出土遺物実測図 4

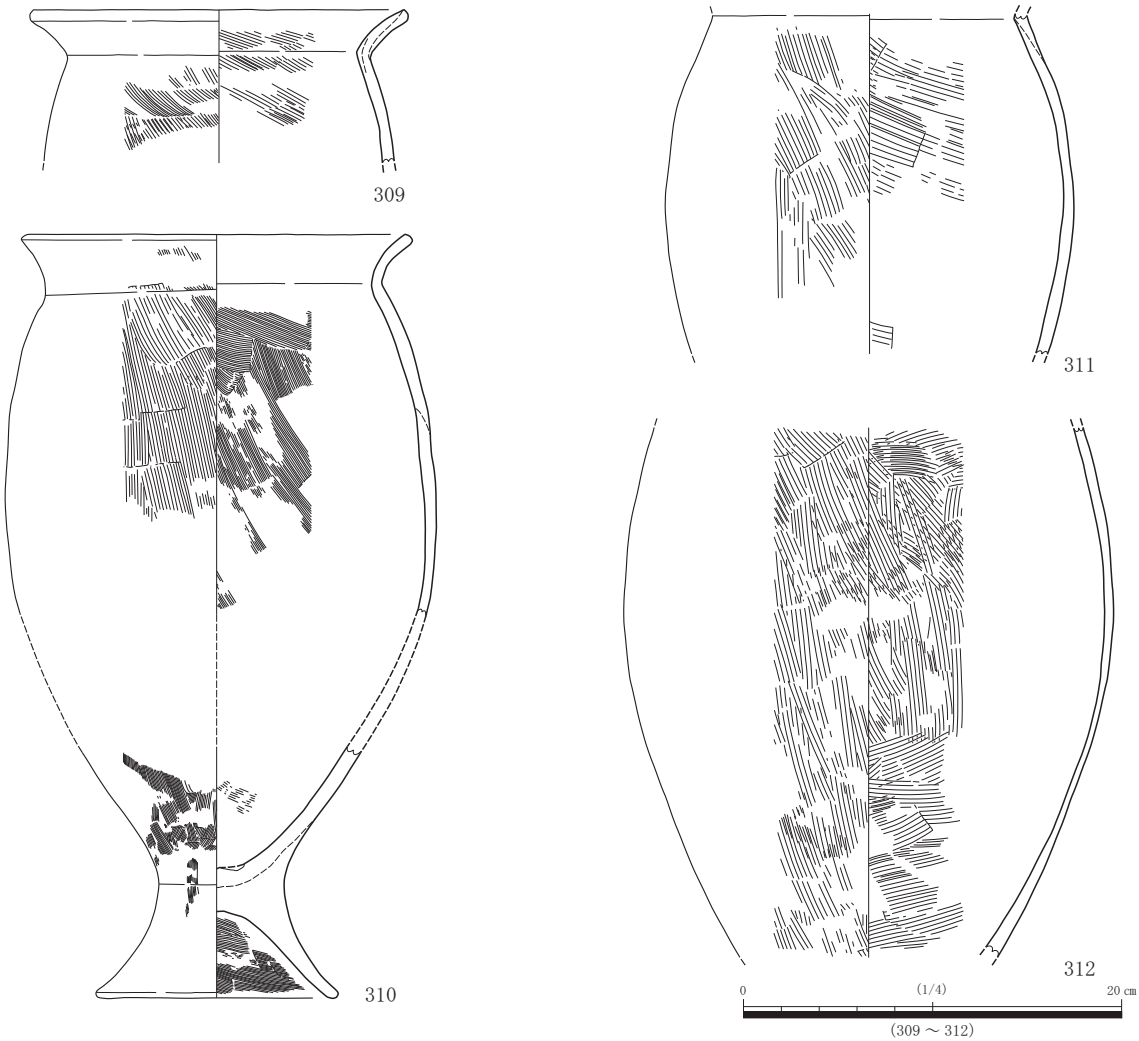
のほとんどにおいてミガキが施されている。脚部に外側から内側に開けられた穿孔を３カ所もつ。口径は約３８．２㎝、残存高約２３．８㎝を測る。

３１９はチャート製の石錐である。３２０の磨・敲石は赤変している。３２２の石皿は、使用面が短幅側のみで側面は自然面であるため、土などで固定して使用したと考えられる。

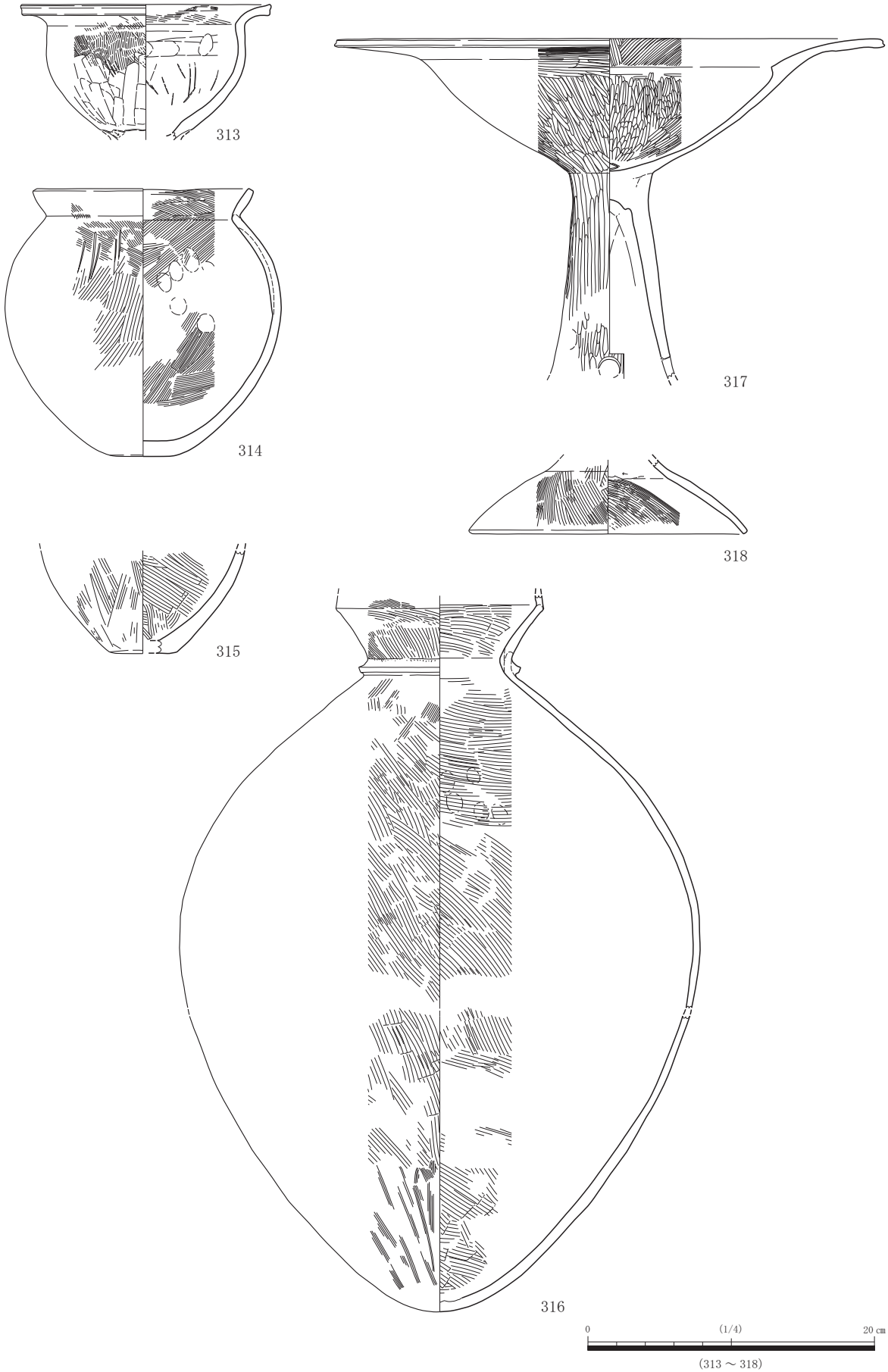


<土層注記>ＳＩ84
①層：10YR2/2黒褐色土　締りやや強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒・炭化物をやや多く含む　ザラザラ・まだら気味
②層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒・炭化物をやや多く含む　①層に比べてサラサラ
③層：10YR2/3黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒・炭化物を多量に含む　やや白みがかる　ニガ（7層）混ざる

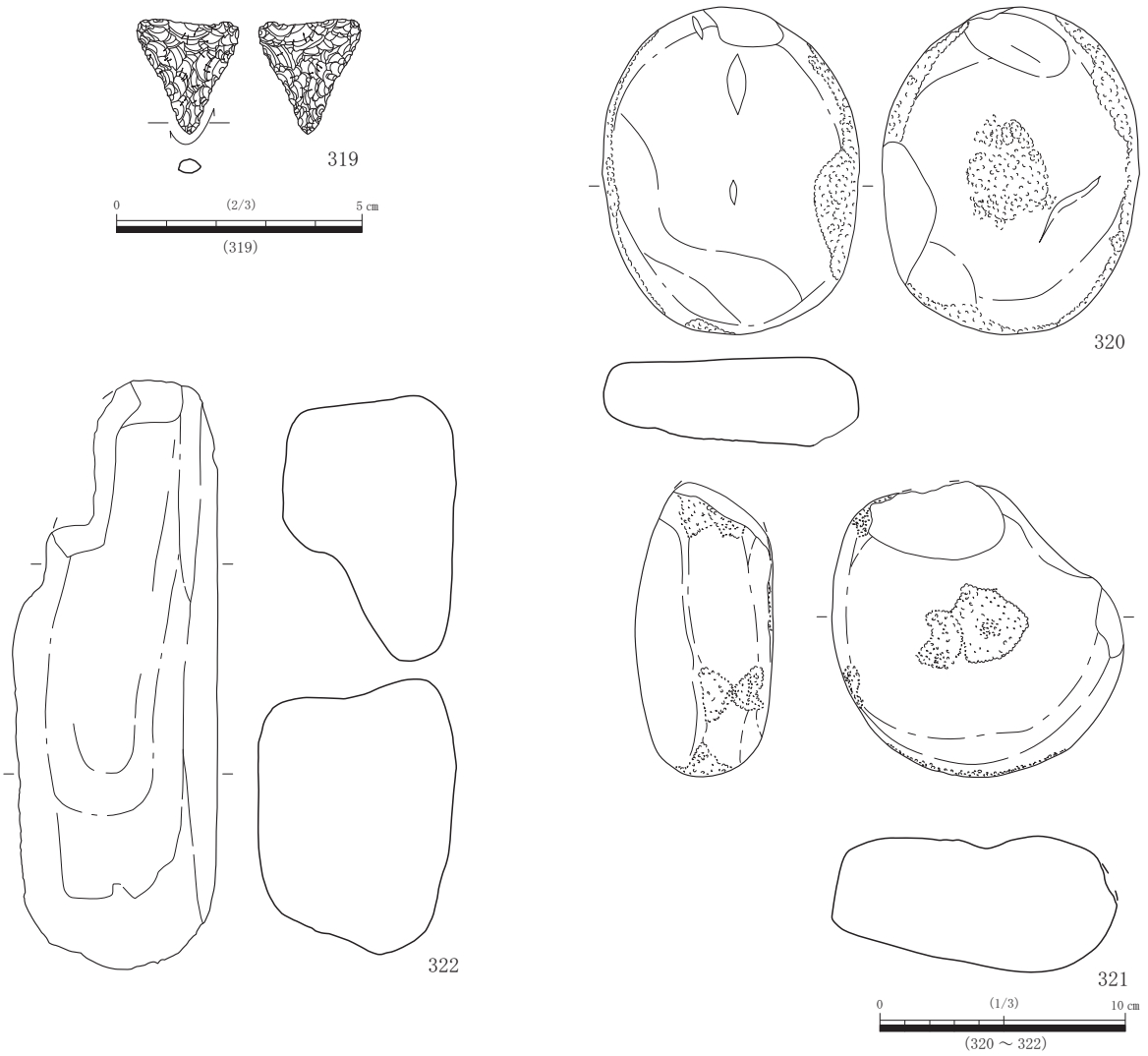
0　(1/60)　2m



第 68 図　　ＳＩ84 遺構・出土遺物実測図 1



第 69 図　　ＳＩ84 出土遺物実測図 2

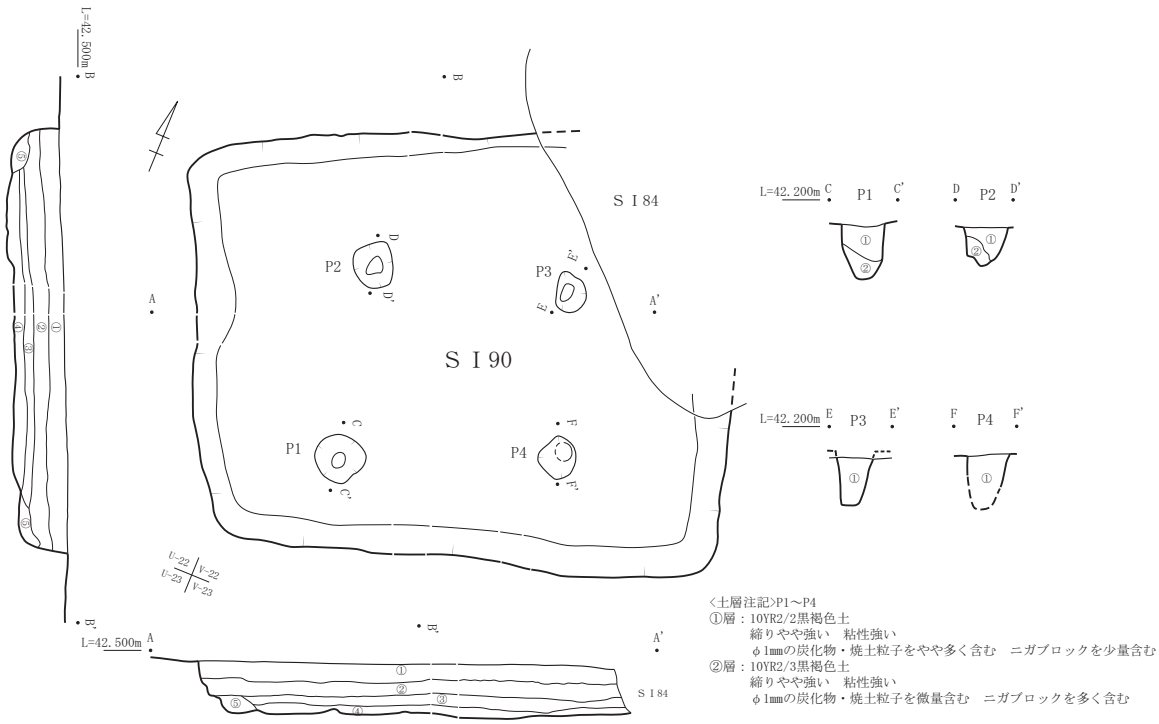


第 70 図　　ＳＩ84 出土遺物実測図 3

ＳＩ９０（第７１図）

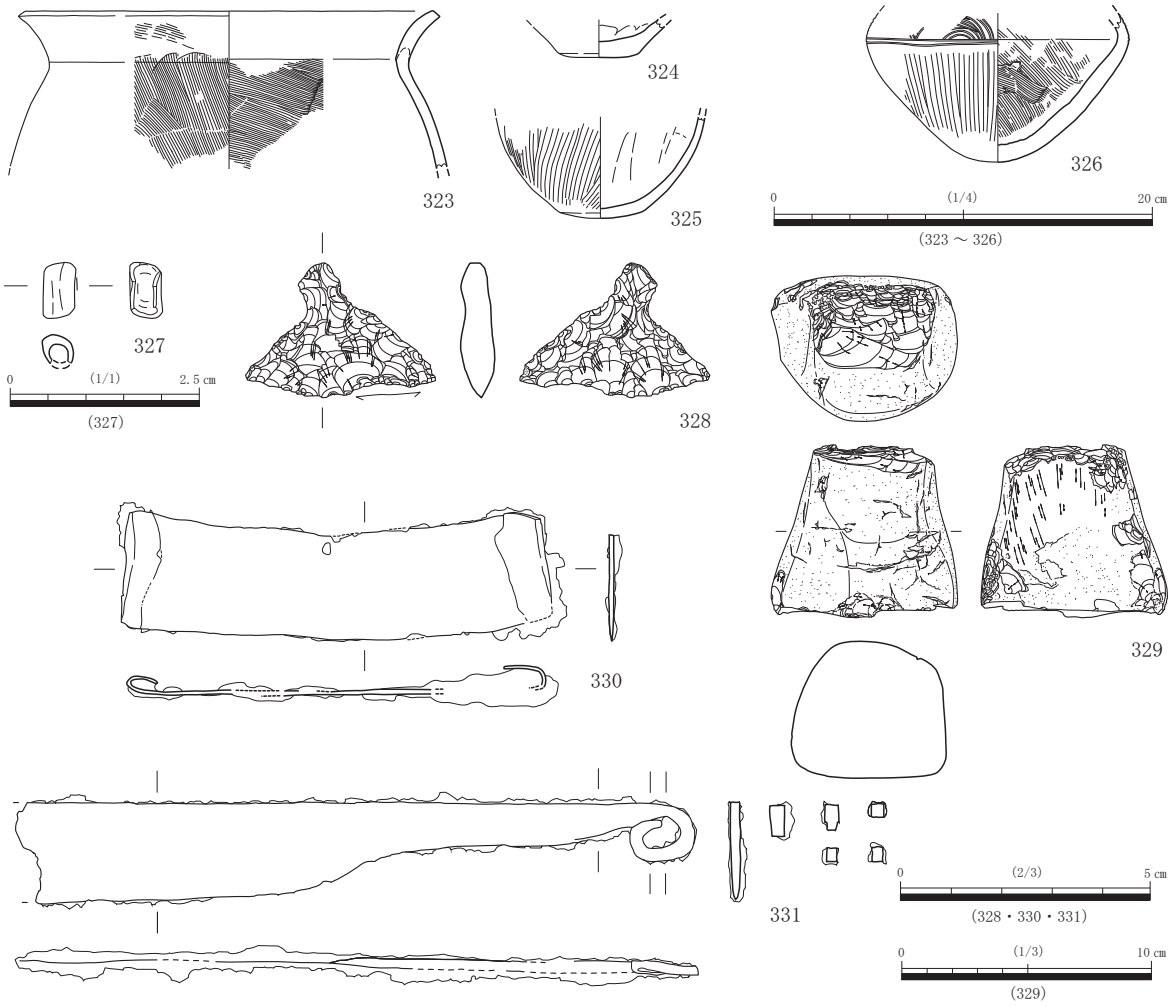
Ｕ２２、Ｖ２２グリッドに位置する５層上面で検出した遺構である。前述のＳＩ８４に北東部の一部を壊されている。平面形は隅丸長方形で、長軸約４．２８ｍ、短軸約３．３０ｍ、検出面からの深さは約４４㎝を測る。長軸はＮ－７０°－Ｅである。埋土は５層に分けることができるが、全層黒褐色土で焼土粒、炭化物を多く含んでいる。Ｐ１～Ｐ４を検出し、それぞれが主柱穴と考えられ、４本柱の構造を成す。下端のレベルはＰ２を除いてほぼ一定である。柱穴間はＰ１～Ｐ２が約１．５７ｍ、Ｐ２～Ｐ３が約１．５３ｍ、Ｐ３～Ｐ４が約１．２４ｍ、Ｐ４～Ｐ１約１．７８ｍである。ピットの平面形は歪な楕円形で、径は約３３～４１㎝、検出面からの深さは約３１㎝～４６㎝を測る。炉、貯蔵穴、硬化面、ベッド状遺構などは確認できていない。

３２６は「免田式土器」で胴部最大径約１３．９㎝を測る。胴部屈曲部分に２条の沈線を施している。３２７は石製管玉である。欠損しているが、残存する長さ約０．９㎝、幅０．５㎝、孔径約０．２５㎝を測る。割れ口から見るに、片側からの穿孔と考えられる。３３０はほぼ完形の鉄製摘鎌である。背は直線的だが、刃部は弧状に反る。３３１は素環頭刀子である。後世（古墳時代以降）の流れ込みと思われる。先端部は欠損している。長さは約１３．１㎝、幅約２．０㎝、厚さ約０．３㎝を測る。素環頭は柄端部を引き延ばして成形されており、柄部から端部の横断面は長方形から正方形に近づいていく。

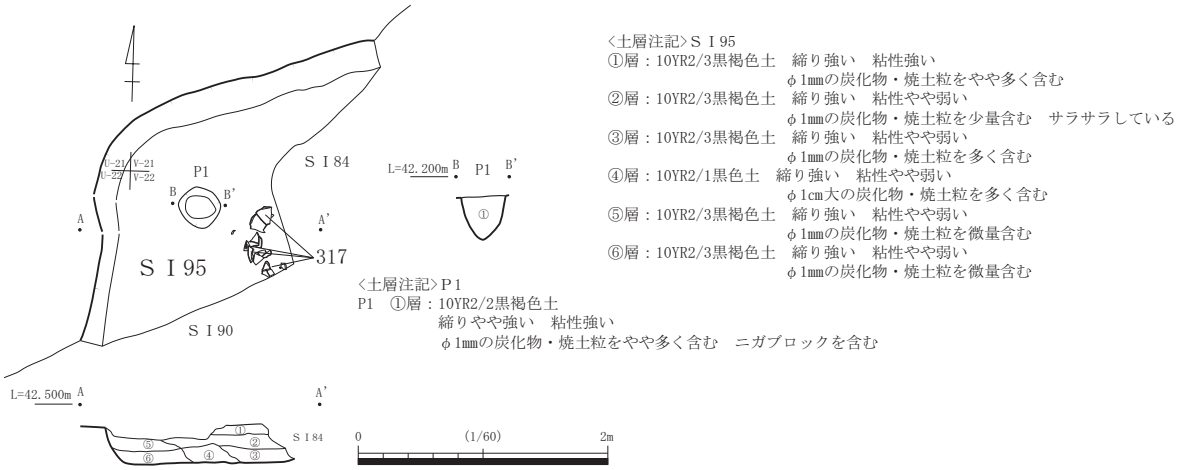


<土層注記>ＳＩ90
①層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒子・炭化物を多く含む　色調が濃い
②層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ1～3mmの焼土粒子・炭化物を多く含む　①層に比べて混入物の粒径が大きい　シャリシャリ
③層：10YR2/3黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒子・炭化物をやや多く含む　シャリシャリ　大きめの炭化材が混じる　赤みがかる
④層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒子・炭化物を多く含む　細かい炭が多い　黒みがかる
⑤層：10YR2/3黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒子・炭化物をやや多く含む　ニガブロックを少量含む　三角堆積

0　(1/60)　2m



第 71 図　　ＳＩ90 遺構・出土遺物実測図



第 72 図　　ＳＩ95 遺構実測図

ＳＩ９５（第７２図）

Ｖ２１・２２グリッドに位置する５層上面で検出した遺構である。前述のＳＩ８４、ＳＩ９０に遺構のほとんどを壊され、北西部の一部プランを残している。平面形は不明である。長軸約４．２８ｍ、短軸約３．３０ｍ、検出面からの深さは最深部で約３０㎝を測る。埋土は６層に分けることができるが、全層黒味が強く焼土粒、炭化物を含む、締りの強い土である。主柱穴と考えられるＰ１を検出した。ピットの平面形はほぼ円形で、径は約３５㎝、検出面からの深さは約３５㎝を測る。炉、貯蔵穴、硬化面、ベッド状遺構などは確認できていない。

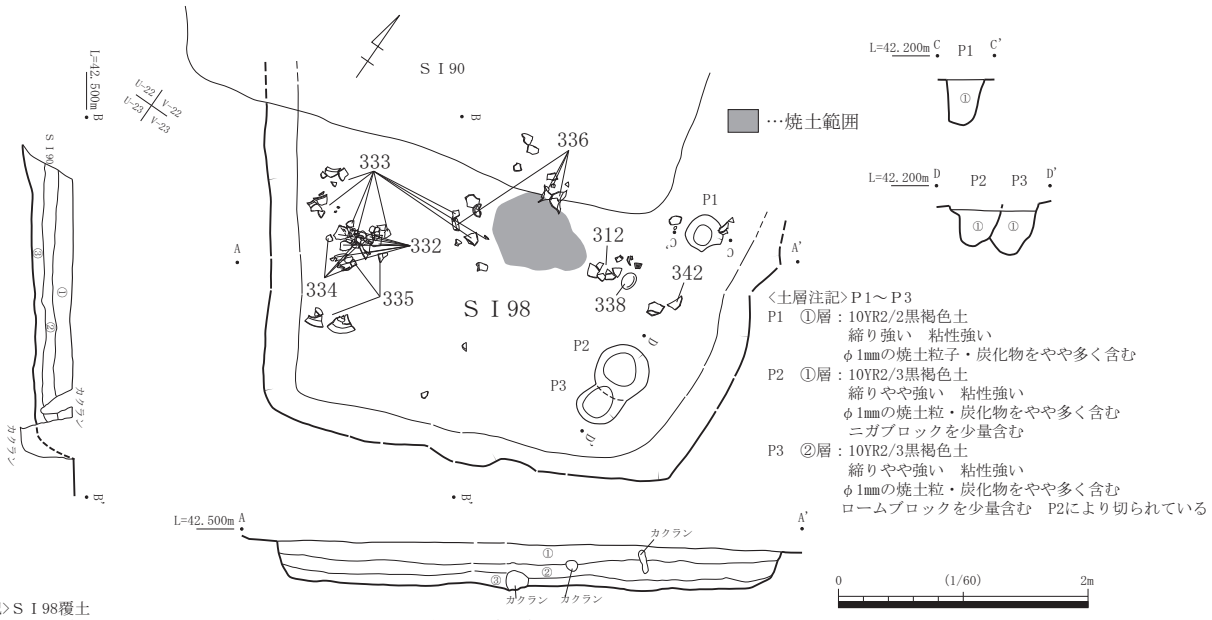
ＳＩ９８（第７３図、第７４図）

Ｖ２２・２３グリッドに位置する。検出は５層上面である。前述のＳＩ９０に北側の半分を壊されている。平面形は不明で、残存最大軸約４．１０ｍ、検出面からの深さは約３６㎝を測る。埋土は３層に分けることができる。全層黒褐色土で焼土粒、炭化物を多く含んでいるが、上層ほど多く含んでいる。Ｐ１～Ｐ３を検出している。Ｐ１、Ｐ３の下端レベルが一定である。Ｐ２とＰ３は南北で接しており、Ｐ３からＰ２への柱の立て替えを行った可能性が考えられる。Ｐ１～Ｐ２の柱穴間は約１．２５ｍである。ピットの平面形はほぼ円形で、径は約３０～４３㎝、検出面からの深さは約２８㎝～３７㎝を測る。貯蔵穴、硬化面、ベッド状遺構などは確認できていないが、遺構のほぼ中央と想定できる位置に焼土粒子がややまとまって検出された。掘り込み等は確認できていないため、炉と判断するには至っていない。

３３２、３３３は甕である。３３２は胴部の張り出した部分全体に煤が付着している。３３３は口径約１７．６㎝、胴部最大径約２０．５㎝、底径約１１．３㎝、器高約３５．０㎝を測る。３３４は胴部最大径約１１．６㎝を測る壷である。胴部上方は縦方向のミガキ調整を施す。３３５、３３６は高坏だが、３３６の脚部の外器面は縦方向にミガキを施している。

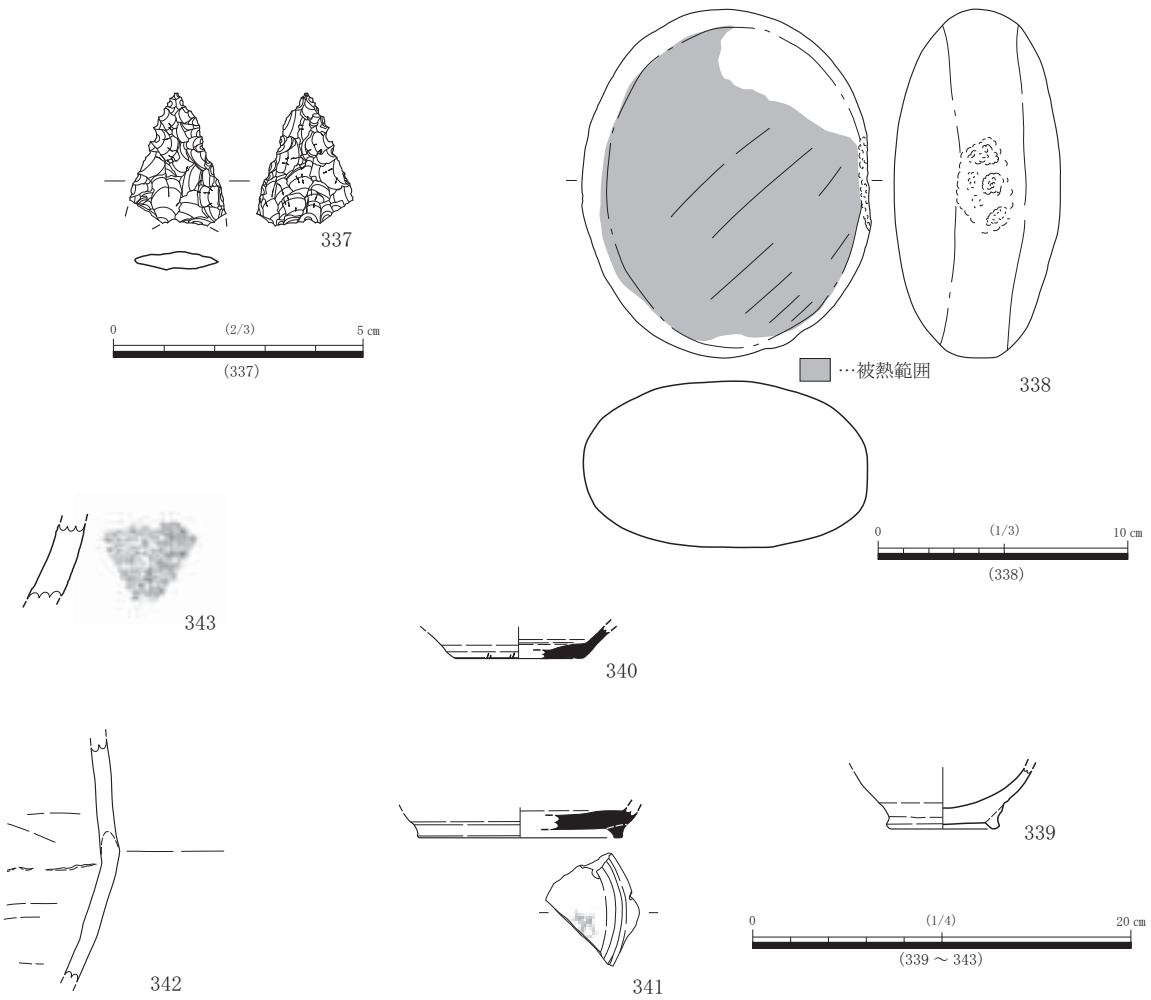
３３７は平基に近い安山岩製の石鏃である。３３８の磨・敲石は全体的に被熱しており、黒変した箇所も残る。

遺構時期外遺物には縄文土器の深鉢形土器の胴部片や古代の土師器、須恵器が混入している。３３９は黒色土器Ａ類椀の底部である。底径約５．３㎝を測る。３４０の須恵器の坏は回転ナデによる調整がなされ、底部に切り離す際に使用した工具痕を残す。３４１の須恵器の椀も回転ナデ調整がなされ、高台も貼り付け後に回転ナデが施されている。高台内に墨書があるが判読はできない。



<土層注記>ＳＩ98覆土
①層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性やや弱い　φ1mmの焼土粒・炭化物を多く含む
②層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒・炭化物をやや多く含む　①層に比べ締まる
③層：10YR2/3黒褐色土　締り強い　粘性やや強い　φ1mmの焼土粒・炭化物を微量含む
※焼土範囲は、焼土粒子がややまとまって散乱していた範囲。焼土面は認められなかった。

第 73 図　　ＳＩ98 遺構・出土遺物実測図 1



第 74 図　　ＳＩ98 出土遺物実測図 2

ＳＩ９１（第７５図）

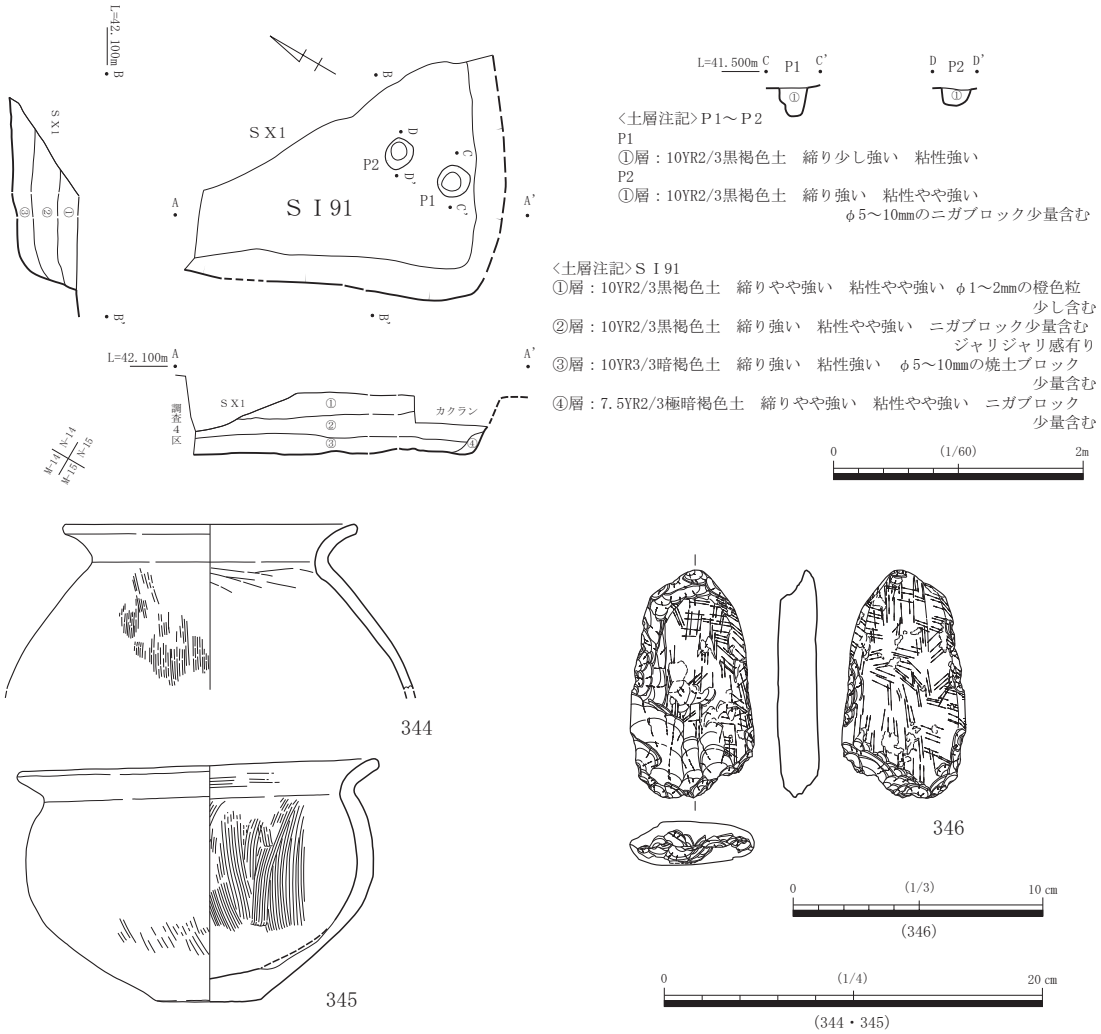
Ｎ１４・１５グリッドに位置する遺構である。検出面は５層上面である。後世の溝（ＳＸ１）にそのほとんどを壊され、南隅のみの検出となった。平面形は不明である、検出面からの深さは約５２㎝を測る。埋土は４層に分けることができ、埋土３層で少量だが約５㎜～１０㎜の焼土ブロックが確認されている。断面の下端がほぼ水平となる。Ｐ１、Ｐ２を検出しているが、主柱穴を成すかどうかは判断できない。ピットの平面形はほぼ円形で、径は約２４㎝～２７㎝、検出面からの深さは約１３㎝～２２㎝を測る。炉、貯蔵穴、硬化面、ベッド状遺構などは確認できていない。

３４４の外器面は縦方向のハケメ、口縁部はナデ調整が施されている壷である。３４５は口径約１８.６㎝、器高約１２.９㎝、底径約５.６㎝を測る鉢である。

石器は３４６の磨製石斧が出土している。蛇紋岩製のもので、刃部は欠損後に再加工して使用している痕を残している。

ＳＩ９２（第７６図）

Ｗ２３グリッドに位置する。検出は５層上面である。遺構の南東部は調査区外へと伸びる。また一部を後世の遺構（ＳＩ７９）に壊されている。平面形は方形を呈すと想定できる。残存状況から推定軸約３.６０ｍ、



第 75 図　　ＳＩ91 遺構・出土遺物実測図

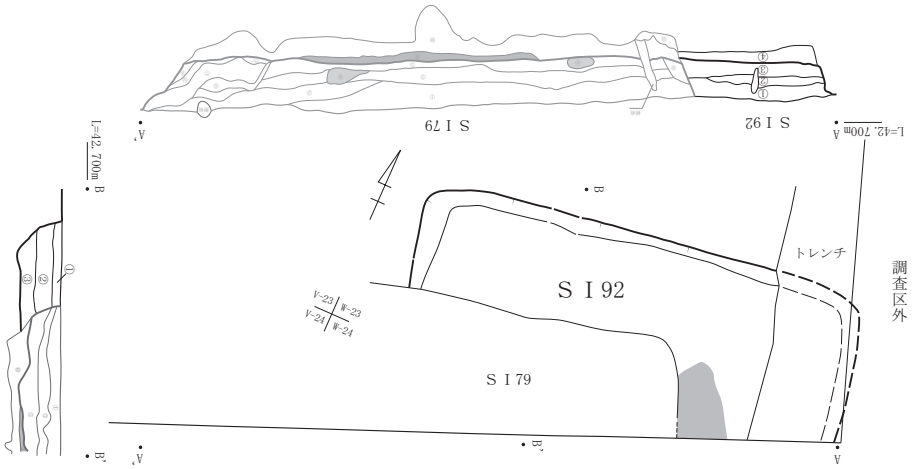
検出面からの深さは約４４㎝を測る。埋土は４層に分けることができ、埋土４層は貼床で、上層には硬化面と考えられる箇所を一部検出している。ピット、炉、貯蔵穴、ベッド状遺構等は確認されていない。遺構時期については判断する資料に乏しいが、調査者の意向により弥生後期と位置付けている。

ＳＩ１０２（第７６図）

Ｕ１８グリッドに位置する。５層上面で検出した遺構である。後世の溝（ＳＤ３５、４０）に一部を壊されている。平面形は長方形を呈すと推定でき、断面は浅く上層のほとんどは包含層掘削時に掘り下げてしまっていると思われる。長軸約４．８０ｍ、短軸約３．２８ｍ、検出面からの深さは約１８㎝を測る。長軸はＮ－６７°－Ｗである。Ｐ１～Ｐ４を検出し、それぞれが主柱穴と考えられ、４本柱の構造を成す。下端のレベルは一定ではない。柱穴間はＰ１～Ｐ２が約２．３４ｍ、Ｐ２～Ｐ４が約２．２８ｍ、Ｐ４～Ｐ３が約２．７１ｍ、Ｐ３～Ｐ１約２．０５ｍである。ピットの平面形は楕円形で、径は約２６～３６㎝、検出面からの深さは約１４㎝～３０㎝を測る。炉、貯蔵穴、硬化面、ベッド状遺構などは確認できていない。

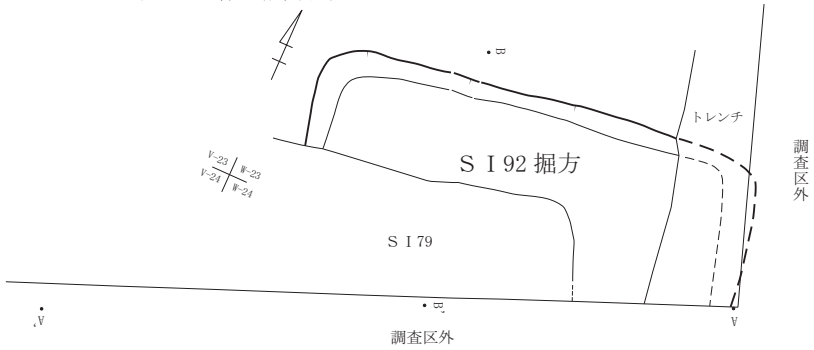
ＳＩ１０３、ＳＩ１０９（第７７図）

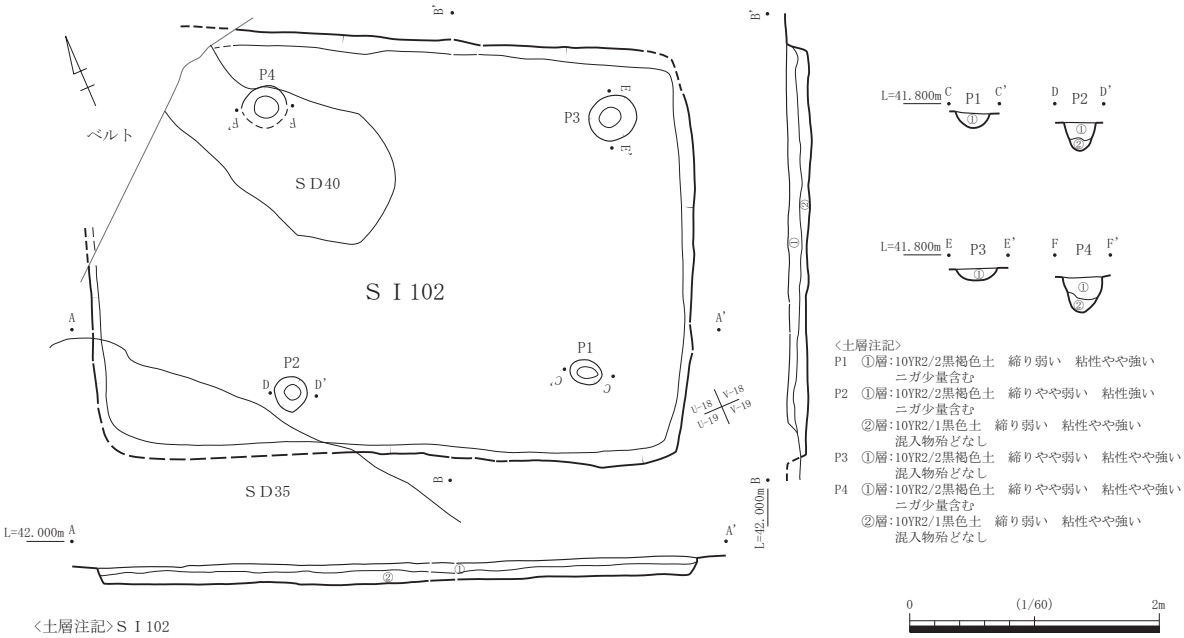
Ｖ２３・２４グリッドに位置し、５層上面で検出した遺構である。ＳＩ１０９（古）→ＳＩ１０３（新）



〈土層注記〉ＳＩ92
①層：10YR2/2黒褐色土　締り弱い　粘性やや強い　混入物殆どなし
②層：10YR2/3黒褐色土　締り弱い　粘性やや弱い　混入物殆どなし
③層：10YR2/2黒褐色土　締り弱い　粘性やや弱い　混入物殆どなし
④層：10YR2/2黒褐色土　締り弱い　粘性やや強い
　　ニガ（φ1～2cm）を少量含む（掘形充填土）
　　ＳＩ79との境付近上部に黒の粘質・締りの強い
　　小さなブロックを少量含む（硬化面か）

…硬化面



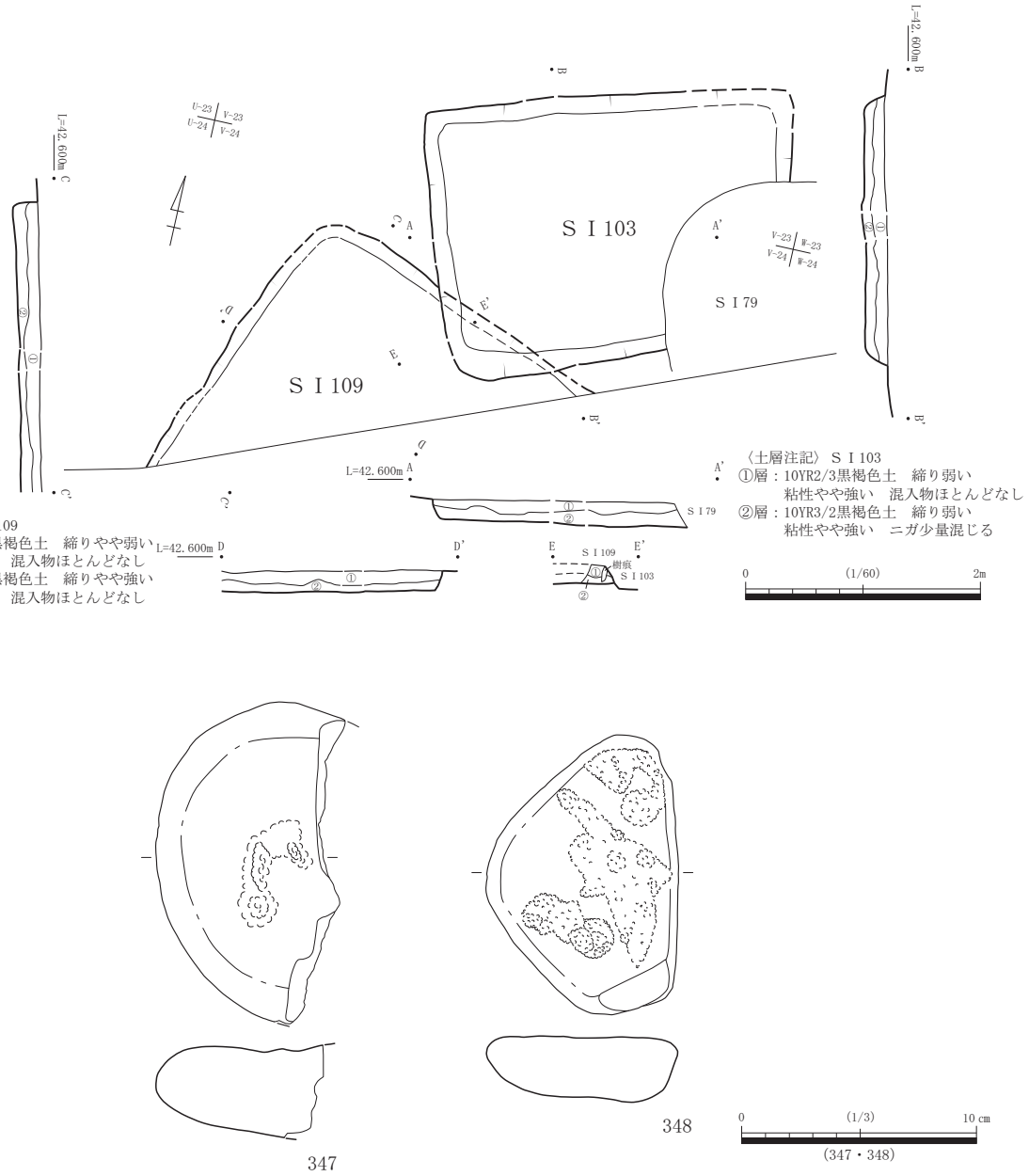


〈土層注記〉
P1　①層：10YR2/2黒褐色土　締り弱い　粘性やや強い
　　ニガ少量含む
P2　①層：10YR2/2黒褐色土　締りやや弱い　粘性強い
　　ニガ少量含む
　　②層：10YR2/1黒色土　締り弱い　粘性やや強い
　　混入物殆どなし
P3　①層：10YR2/2黒褐色土　締りやや弱い　粘性やや強い
　　混入物殆どなし
P4　①層：10YR2/2黒褐色土　締りやや弱い　粘性やや強い
　　ニガ少量含む
　　②層：10YR2/1黒色土　締り弱い　粘性やや強い
　　混入物殆どなし

0　(1/60)　2m

〈土層注記〉ＳＩ102
①層：10YR2/3黒褐色土　締り弱い　粘性やや弱い　混入物殆どなし
②層：10YR2/2黒褐色土　締り弱い　粘性やや強い　混入物殆どなし

第 76 図　　ＳＩ92 ・102 遺構・出土遺物実測図



第 77 図　　ＳＩ103・109 遺構・出土遺物実測図

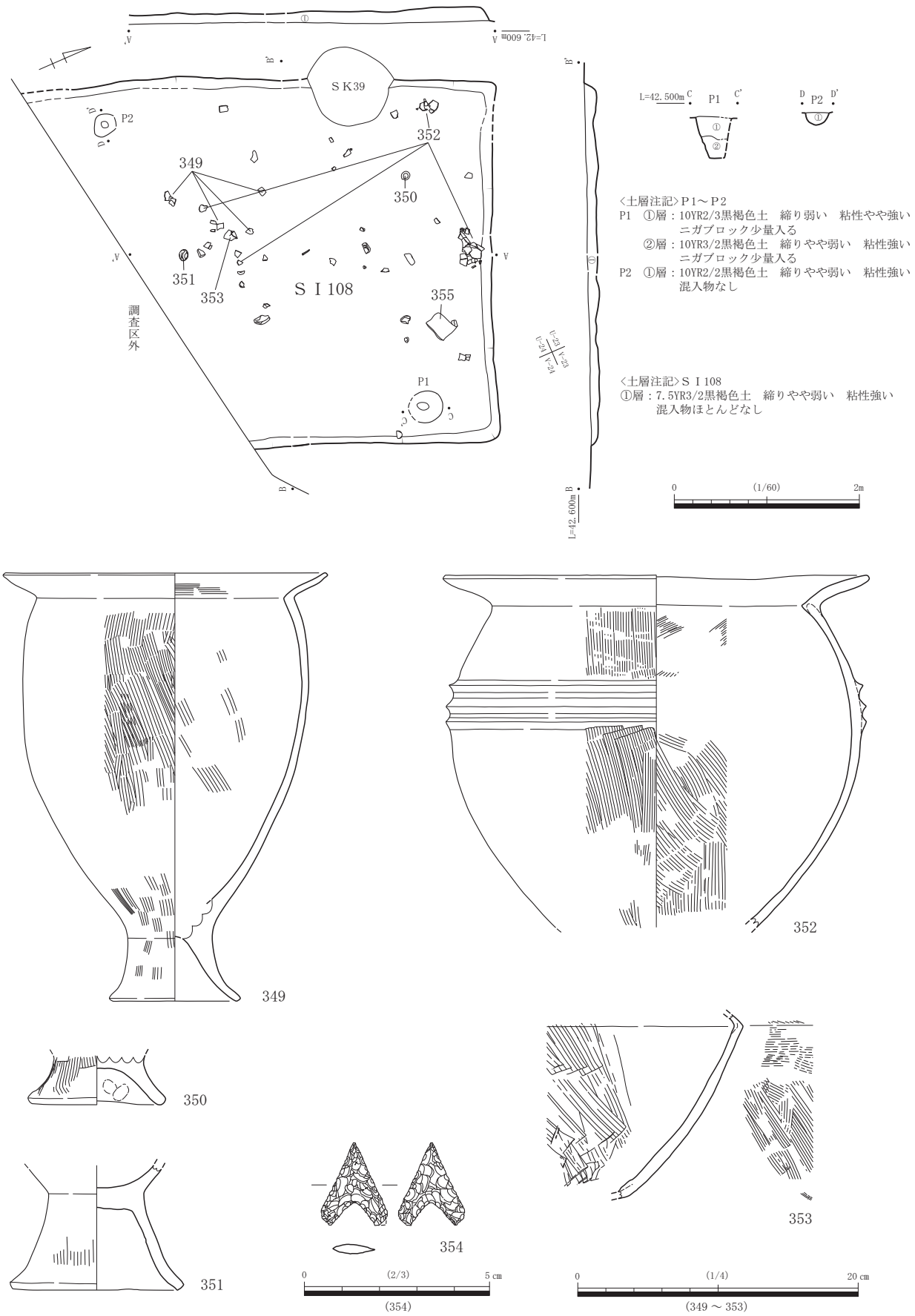
である。

ＳＩ１０３は後世の遺構（ＳＩ７９）に東隅の一部を壊されている状況で検出している。平面形は方形を呈すると想定でき、長軸約３．１０ｍ、短軸約２．２２ｍ、検出面からの深さは約２２㎝を測る。長軸はＮ－７３°－Ｅである。埋土は２層の黒褐色土に分けることができるが、焼土粒、炭化物の混入はない。ピット、炉、貯蔵穴、硬化面、ベッド状遺構などは確認できていない。

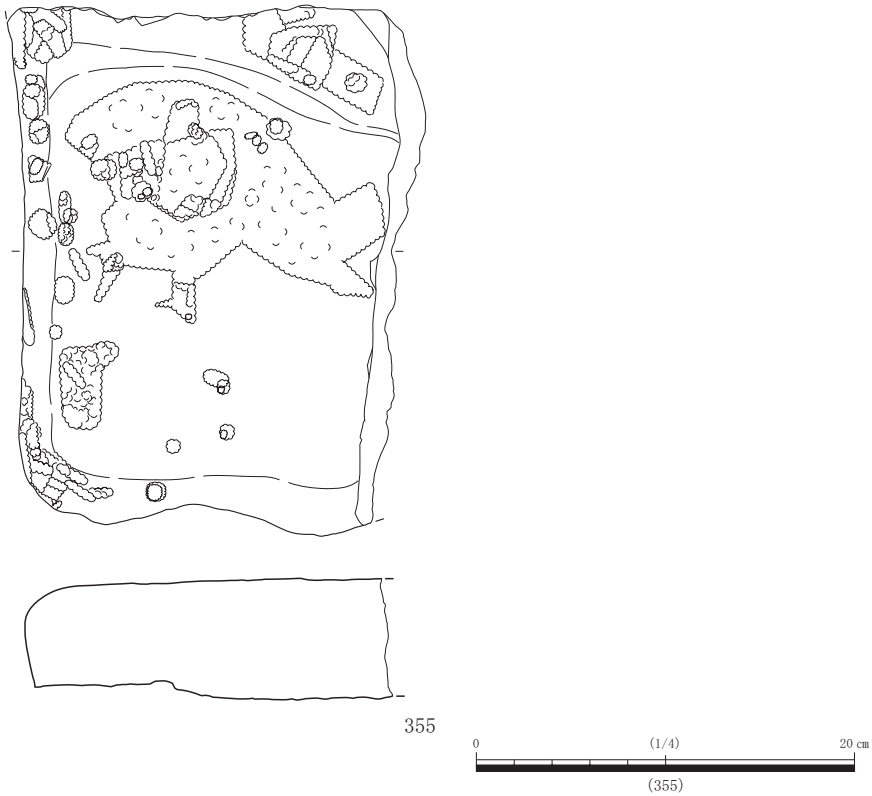
遺物は磨・敲石が出土している。３４７、３４８の２点とも被熱しており、３４８は赤変している。

ＳＩ１０９は遺構南東部の半分以上は調査区外へ伸びる。平面形は不明である。検出面からの深さは約２２㎝を測り、埋土は２層に分けることができる。ＳＩ１０３と同様、２層とも黒褐色土で焼土粒、炭化物の混入はない。また、ピット、炉、貯蔵穴、硬化面、ベッド状遺構などは確認できていない。

両遺構とも竪穴建物跡と判断する、またその遺構時期を判断する資料に乏しいが、調査者の意向によりＳ



第 78 図　　ＳＩ108 遺構・出土遺物実測図１



第 79 図　　ＳＩ108 出土遺物実測図２

Ｉを用い、弥生後期と位置付けている。

ＳＩ１０８（第７８図、第７９図）

Ｕ２４グリッドに位置する遺構である。検出面は５層上面である。遺構の南西部の一部は調査区外へと伸びる。平面形は方形を呈すると想定できる。長軸はＮ－２３°－Ｅである。検出面からの深さは約１６㎝で、埋土は単層である。埋土は黒褐色で焼土粒、炭化物などの混入物はほとんどない。貼床の一部とも考えられるが、上層のほとんどを包含層掘削時に掘り下げてしまっていると考えられ、また硬化面も確認されていないことなど、情報が乏しく判断できない。Ｐ１、Ｐ２を検出しているが、主柱穴であるか否かは判断できない。ピットの平面形は楕円形で、径は約２７～３６㎝、検出面からの深さは約１３㎝～４４㎝を測り、下端のレベル差は大きい。炉、貯蔵穴、ベッド状遺構等は確認されていない。

３４９～３５１は甕である。３４９は復元口径約２２.８㎝、底径約８.８㎝、器高約３０.６㎝を測る。３５２の壷は復元口径約３０.１㎝、残存高約２５.１㎝を測る。全体的にハケメ、口縁部は横ナデを施す。張り出し部上部に３条の突帯を貼り付け、横ナデ調整が施されている。３５３は「免田式土器」の胴部下半の破片である。内外器面ともにハケメ調整が施されているが、内外器面で調整時の工具を変えていることが認められる。

３５４は安山岩製の石鏃で、抉りの深い凹基である。３５５の台石は全体的に敲打痕を残しており、擦れた痕跡はほとんど確認できない。

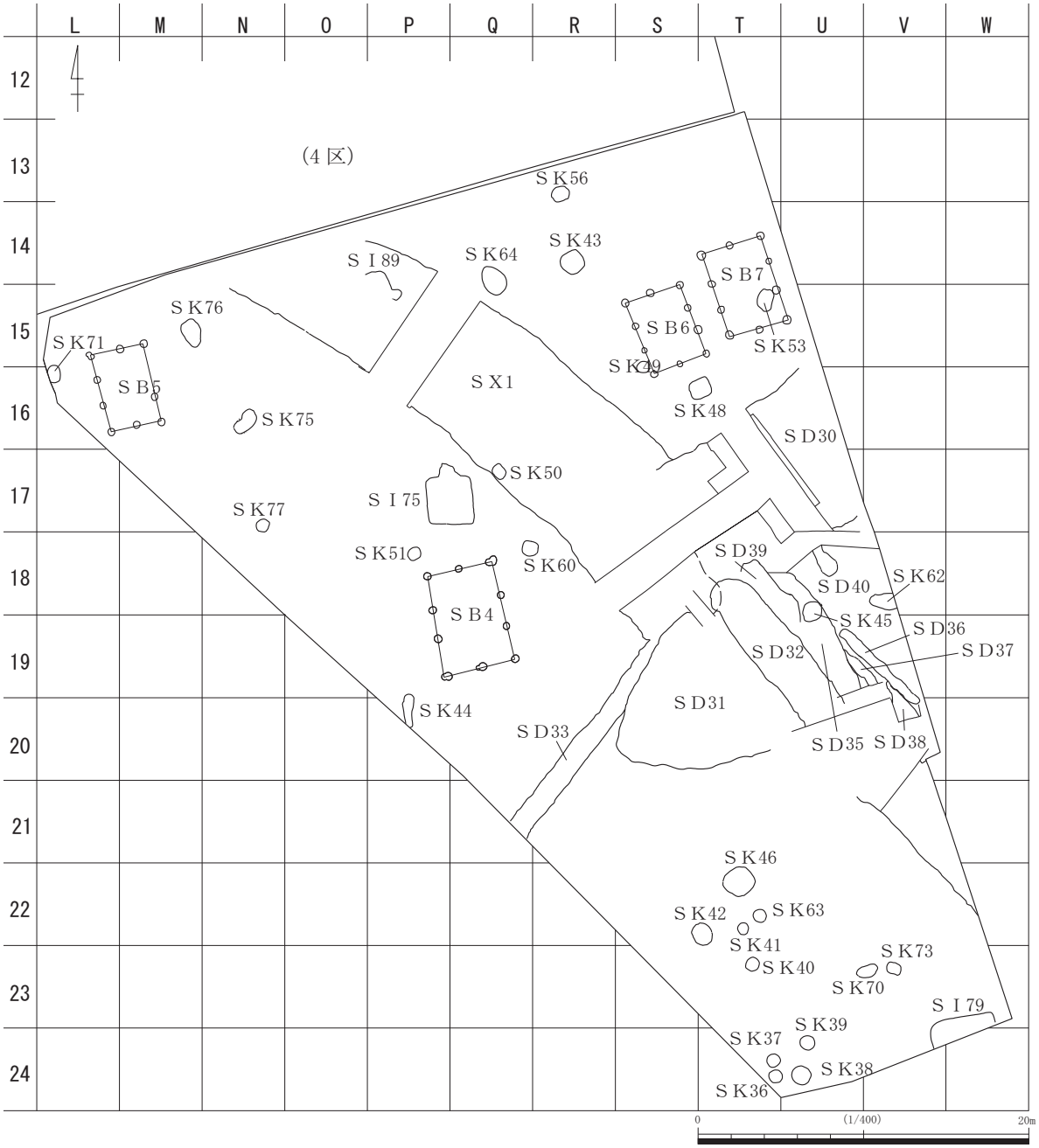
（５）古代の遺構・遺物

遺構検出は５層上面でおこなった。検出できた遺構はかまどを備えた竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑などである。塔平基本土層３、４層の遺物包含層掘削時に出土した遺物は、包含層出土遺物実測図で紹介する。

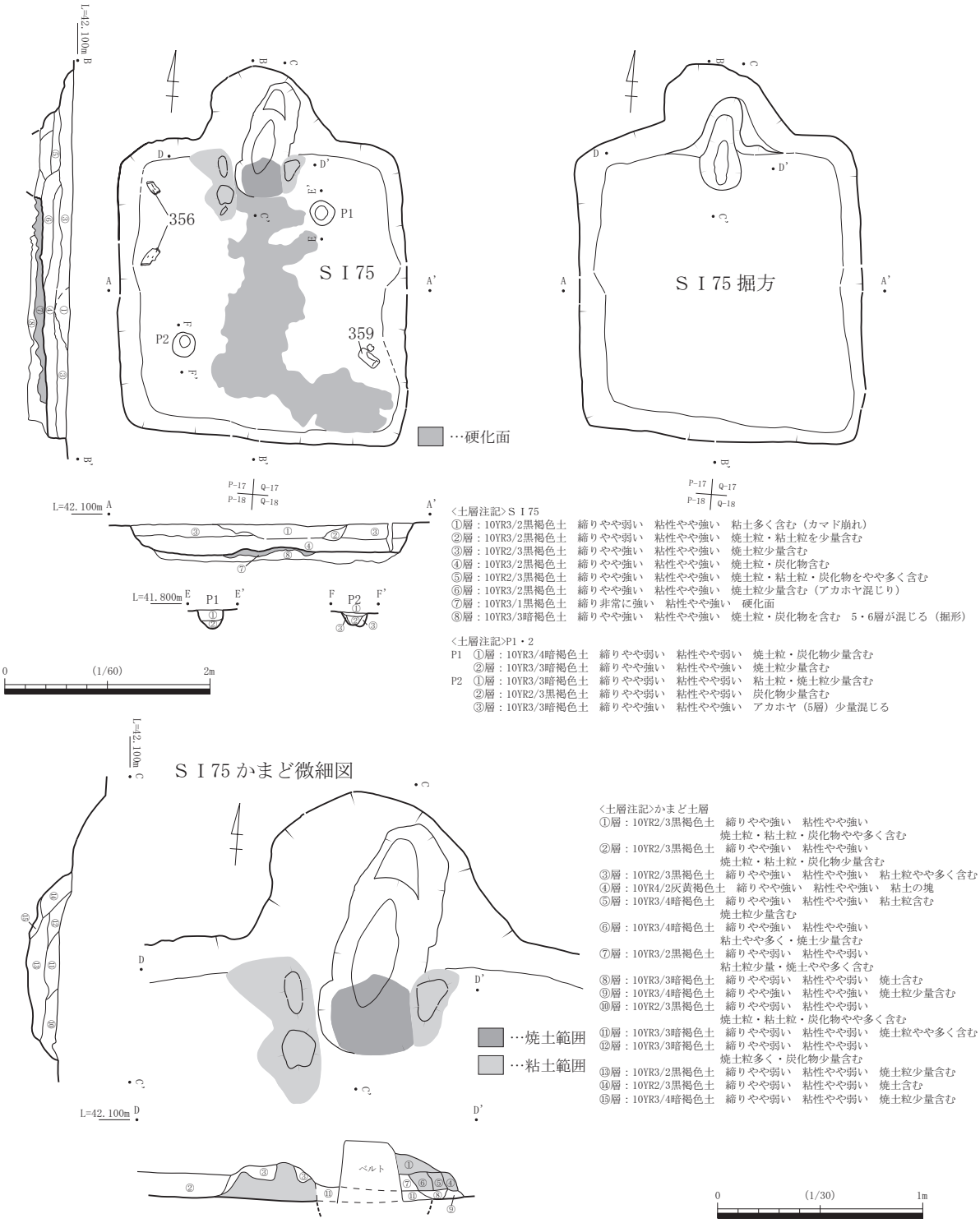
①竪穴建物跡

ＳＩ７５（第８１図、第８２図）

古代期における竪穴建物内で唯一他の遺構などによる損壊もなく、プラン全体を捉えることのできた遺構である。Ｐ１７、Ｑ１７グリッドに位置している。平面形は方形を呈し、かまどを踏まえた長軸は約３．６０ｍ、短軸は２．７８ｍ、検出面からの深さは約４０㎝を測る。主軸はＮ－４°－Ｗで、かまどはほぼ北側に位置す

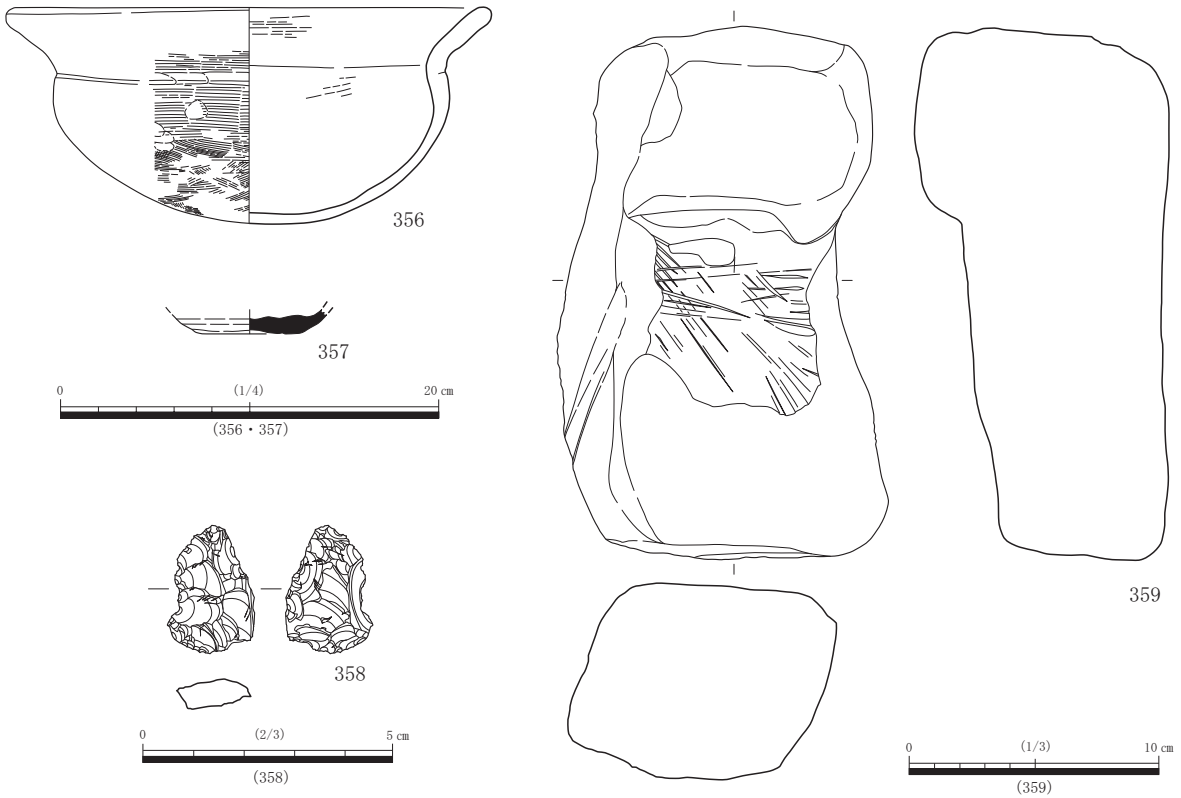


第 80 図　　遺構配置図（古代以降）



第 81 図　　ＳＩ75 遺構実測図

る。埋土は８層に分けることができ、埋土７、８層を貼った貼床である。生活面はこの上層で、硬化面を埋土７層としている。硬化面範囲は遺構南東部からかまどに向けＬ字状に残っていた。北東部と南西部においてＰ１、Ｐ２を検出した。ピットの平面形はほぼ円形で、径は約２４㎝、検出面からの深さは約１４㎝～１８㎝である。下端レベルの差異は小さい。主柱穴と考えられるがピットの検出はこの２基のみであるため、柱の配置構造は不明である。北側中央に残存していたかまどは損壊しているものの、袖に使われたと思われ



第 82 図　　ＳＩ75 出土遺物実測図

る粘土が焼土範囲を挟む形で残っていた。

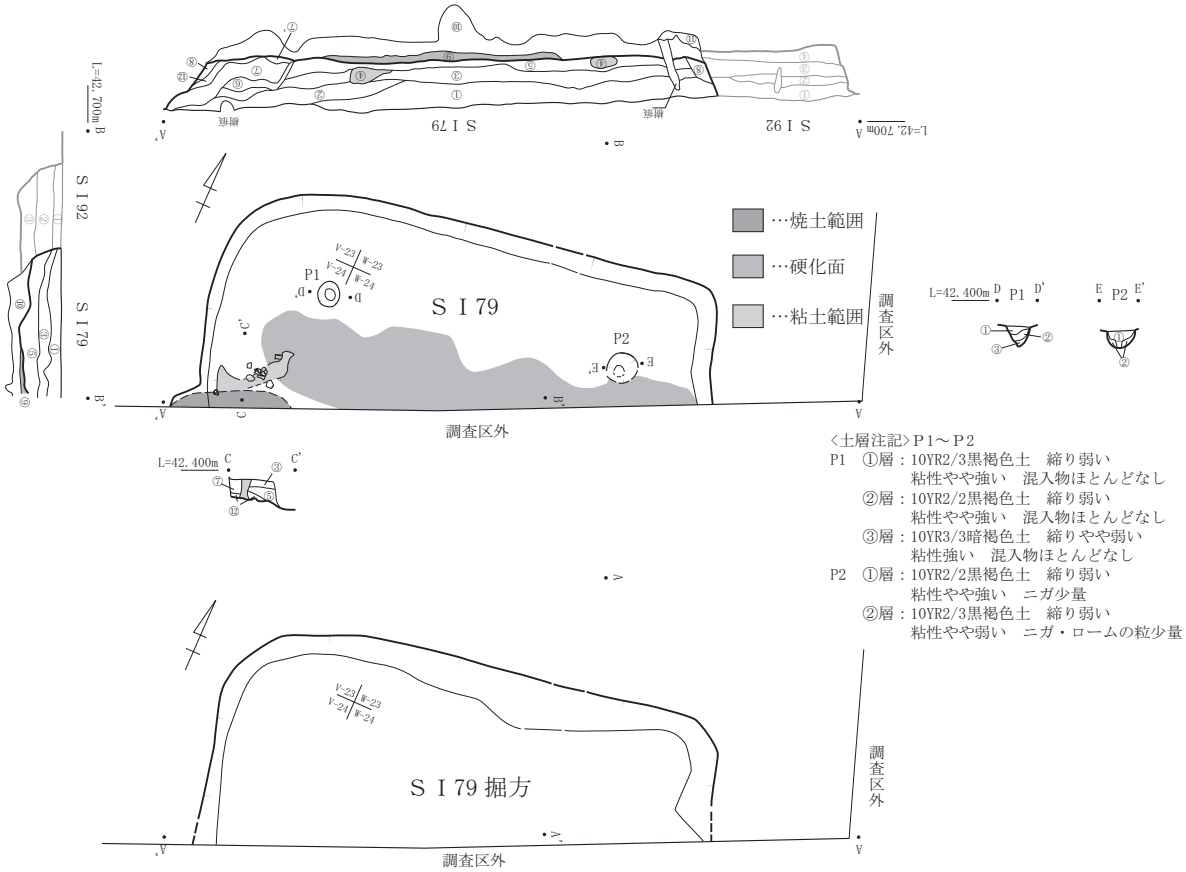
３５６は埋土２層より出土した土師器の鉢である。外器面中位から底部は横方向と斜め方向のハケメを施す。口縁部は横方向のハケメの後、横ナデの調整を施す。３５７は須恵器の坏片である。

３５８は黒曜石製の石鏃で、未成品と思われる。時期は不明である。３５９の砥石は主に主面のみを使用しており、刃部研磨を行った溝状の痕跡を残している。左側面にも溝状の使用痕のようなものが認められるが、なだらかな断面形状の溝である。棒状のものを研磨した痕跡とも考えられる。

ＳＩ７９（第８３図）

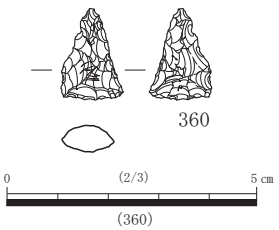
Ｖ２３・２４、Ｗ２３・２４グリッドに位置する。遺構の南側の半分以上は調査区外へと伸びる。調査区南壁面にてかまどと思われた焼土を、検出時の一助とした。周辺遺構としては弥生期のＳＩ９２、ＳＩ１０３を切っている。平面形は方形を呈すると想定でき、検出面からの深さは約８２㎝を測る。主軸はＮ－８０°－Ｅで、かまどはほぼ西側に位置する。埋土は１２層に分けることができ、埋土１０、１１層を貼った貼床である。生活面はこの上層で、硬化面を埋土９層としている。掘方断面は激しい凹凸を確認しているが、生活面はほぼ平坦となる。硬化面範囲は遺構内の東西に帯状で残っていた。生活面にて主柱穴と考えられるＰ１、Ｐ２を検出した。ピットの平面形はほぼ円形で、径は約２０㎝～２４㎝、検出面からの深さは約１５㎝～１６㎝である。下端レベルはほぼ一定である。かまどは埋土７層（燃焼部と考えられる）で東西に広がる焼土範囲を確認しているが、袖に使用されたと思われる粘土の損壊が激しく、遺構中央、及び東側までかまどの粘土の一部が散っている。

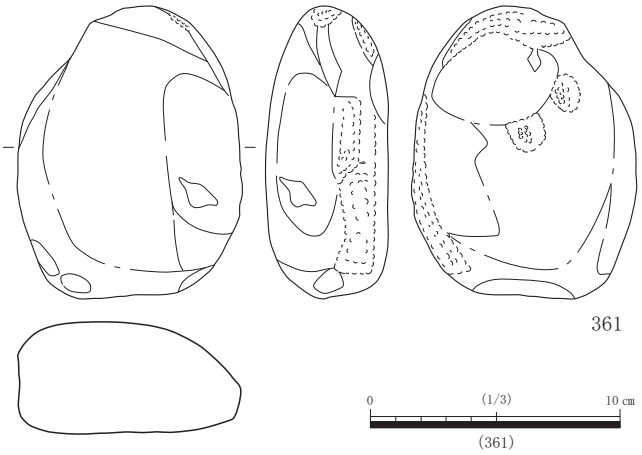
３６０は黒曜石製の石鏃で、簡易な剥離加工が施されているのみである。未成品と思われる。時期は不明である。３６１の磨・敲石は全体的に被熱している。



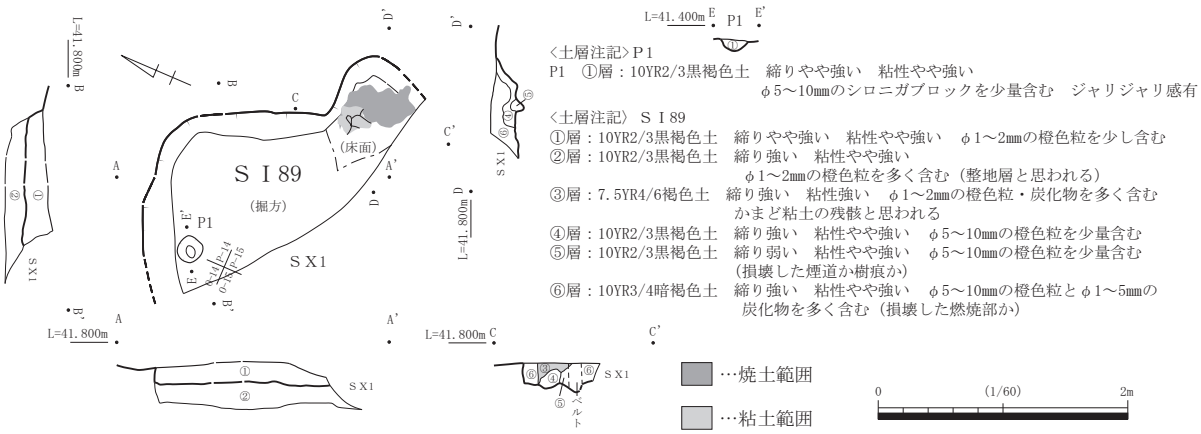
〈土層注記〉ＳＩ79
①層：10YR2/2黒褐色土　締り弱い　粘性やや強い　ニガ（φ1cm程度）が微量入る
②層：10YR2/2黒褐色土　締りやや弱い　粘性強い　混入物ほとんどなし
③層：10YR3/2黒褐色土　締り弱い　粘性強い　混入物ほとんどなし
④層：7.5YR5/8明褐色土　締り強い　粘性やや強い　カマド崩壊時の粘土の塊
⑤層：10YR2/2黒褐色土　締り弱い　粘性強い　混入物ほとんどなし
⑥層：10YR3/2黒褐色土　締りやや弱い　粘性強い　焼土の小さな粒が多量に入る
⑦層：2.5YR5/8明赤褐色土（焼土）・7.5YR5/8明褐色土（カマド袖の粘土）が崩壊し、小さな粒になり混じる（燃焼部か）
⑦’層：⑦層より色調が淡い
⑧層：10YR3/2黒褐色土　締り弱い　粘性強い　混入物ほとんどなし
⑨層：10YR2/3黒褐色土　締り強い　粘性強い　硬いブロックが多く入る（硬化面）
⑩層：10YR2/2黒褐色土　締りやや弱い　粘性強い　ニガ（φ1～3cm）が少量入る
⑪層：10YR2/3黒褐色土　締り強い　粘性強い　大きなニガブロック（φ4～5cm）が多量に入る
⑫層：10YR2/2黒褐色土　締り弱い　粘性強い　混入物ほとんどなし（⑤層と同じ）

0　(1/60)　2m





第 83 図　　ＳＩ79 遺構・出土遺物実測図



第 84 図　　ＳＩ89 遺構実測図

ＳＩ８９（第８４図）

Ｐ１４・１５グリッドに位置する。遺構の南西部のほとんどは後世の溝（ＳＸ１）により壊され、かまどと北隅を残す形で検出された。検出面からの深さは約３８㎝を測る。主軸はＮ－６０°－Ｅで、かまどはほぼ東側に位置する。埋土２層は貼床で、その上面が生活面と考えられるが、硬化面などは確認できていない。壁面に近い箇所でＰ１を検出しているが、掘方面での検出である。ピットの平面形はほぼ円形で、径は約２２㎝、検出面からの深さは約８㎝である。掘り込みは上層からのものであったと考えられる。主柱穴であるかどうかは判断できない。かまどは損壊が激しく、崩落したと思われる粘土を埋土３層で確認し、埋土６層は焼土を多く含み、燃焼部と考えられる。遺物は出土していない。

②掘立柱建物跡

ＳＢ４（第８５図）

Ｐ１８・１９、Ｑ１８・１９グリッドに位置する。桁行は３間で、東側柱列（Ｐ３－Ｐ４－Ｐ５－Ｐ６）約５．９５ｍ、西側柱列（Ｐ１－Ｐ１０－Ｐ９－Ｐ８）約６．１７ｍ。梁行は２間で北側柱列（Ｐ１－Ｐ２－Ｐ３）約４．１０ｍ、南側柱列（Ｐ６－Ｐ７－Ｐ８）約４．１４ｍを測る側柱建物である。桁行方向はＮ－１０°－Ｗである。

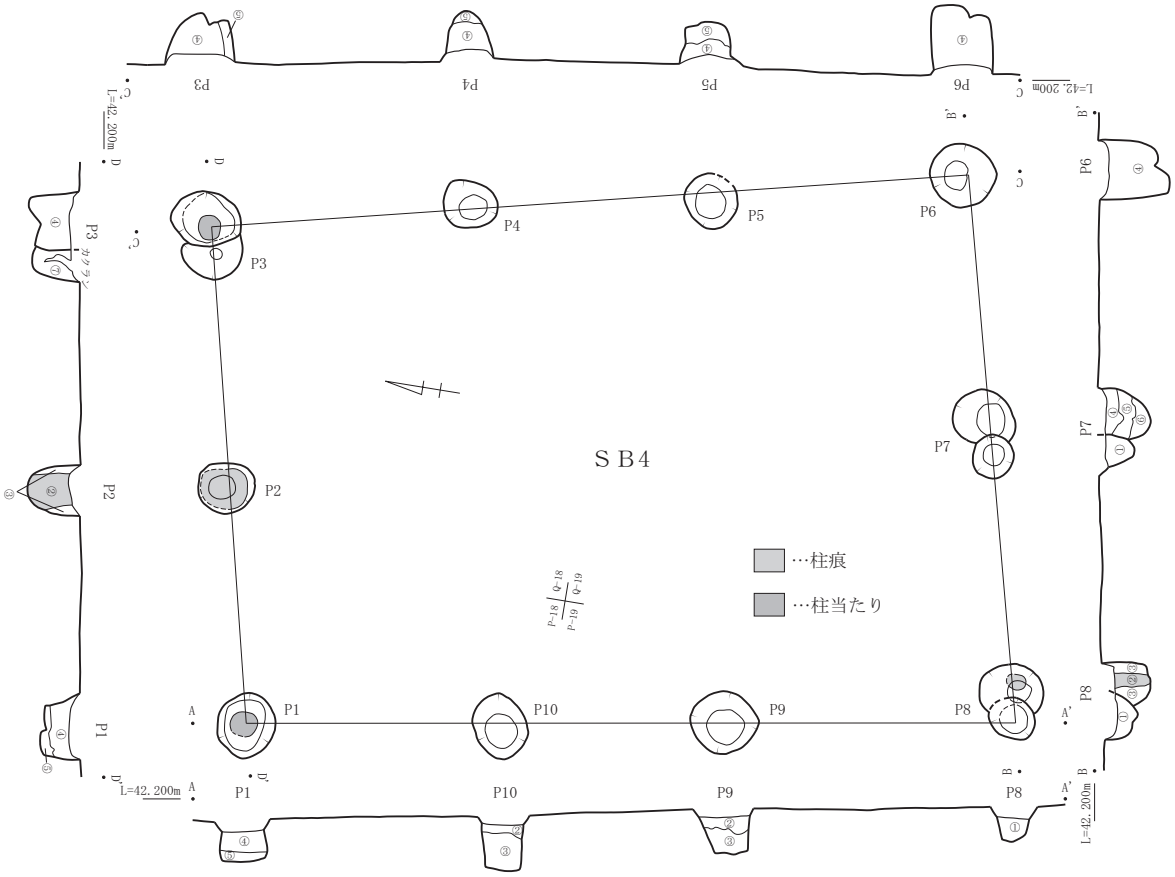
柱間は、桁行約１．８１～２．３４ｍ、梁行約１．９３～２．１５ｍを測る。柱掘方は平面円形であり、径は約４０～５０㎝、深さは検出面より３３～５８㎝を測る。柱穴の下端レベルは不均一である。

Ｐ１、Ｐ３の下端において柱当たり、Ｐ２、Ｐ８の断面において柱痕を確認している。

遺物はＰ５埋土中においてのみ出土している。３６２は須恵器の蓋の口縁部片である。復元口径は約１５．４㎝、器高は約１．７㎝を測る。外面はほぼ全体的に自然釉がかかる。

ＳＢ５（第８６図）

Ｌ１５・１６、Ｍ１５・１６グリッドに位置する。東側桁行を成すピット１基撹乱により壊されている。桁行は３間で、東側柱列（Ｐ６－Ｐ７－Ｐ８）約４．９４ｍ、西側柱列（Ｐ１－Ｐ２－Ｐ３－Ｐ４）約４．７４ｍ。梁行は２間で北側柱列（Ｐ１－Ｐ９－Ｐ８）約３．４０ｍ、南側柱列（Ｐ４－Ｐ５－Ｐ６）約３．０５ｍを測る側柱建物である。桁行方向はＮ－１６°－Ｗである。柱間は、桁行約１．４２～１．６５ｍ、梁行約１．６２



<土層注記ＳＢ４　P1～10覆土
①層:10YR2/3黒褐色土　締り強い　粘性やや強い　φ1mmの焼土粒子・炭化物を微量含む
②層:10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性やや強い　φ1mmの焼土粒子・炭化物を微量含む　柱痕か？
③層:10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性やや強い　φ1mmの焼土粒子・炭化物を少量含む
５層褐色土を含む　ややまだら
④層:10YR2/2黒褐色土　締りやや強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒子・炭化物を微量含む
⑤層:10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒子・炭化物を微量含む　④層に比べて締まる
⑥層:10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒子・炭化物を微量含む
⑦層:10YR2/3黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒子・炭化物を微量含む

0　(1/60)　2m

0　(1/4)　20 cm
(362)

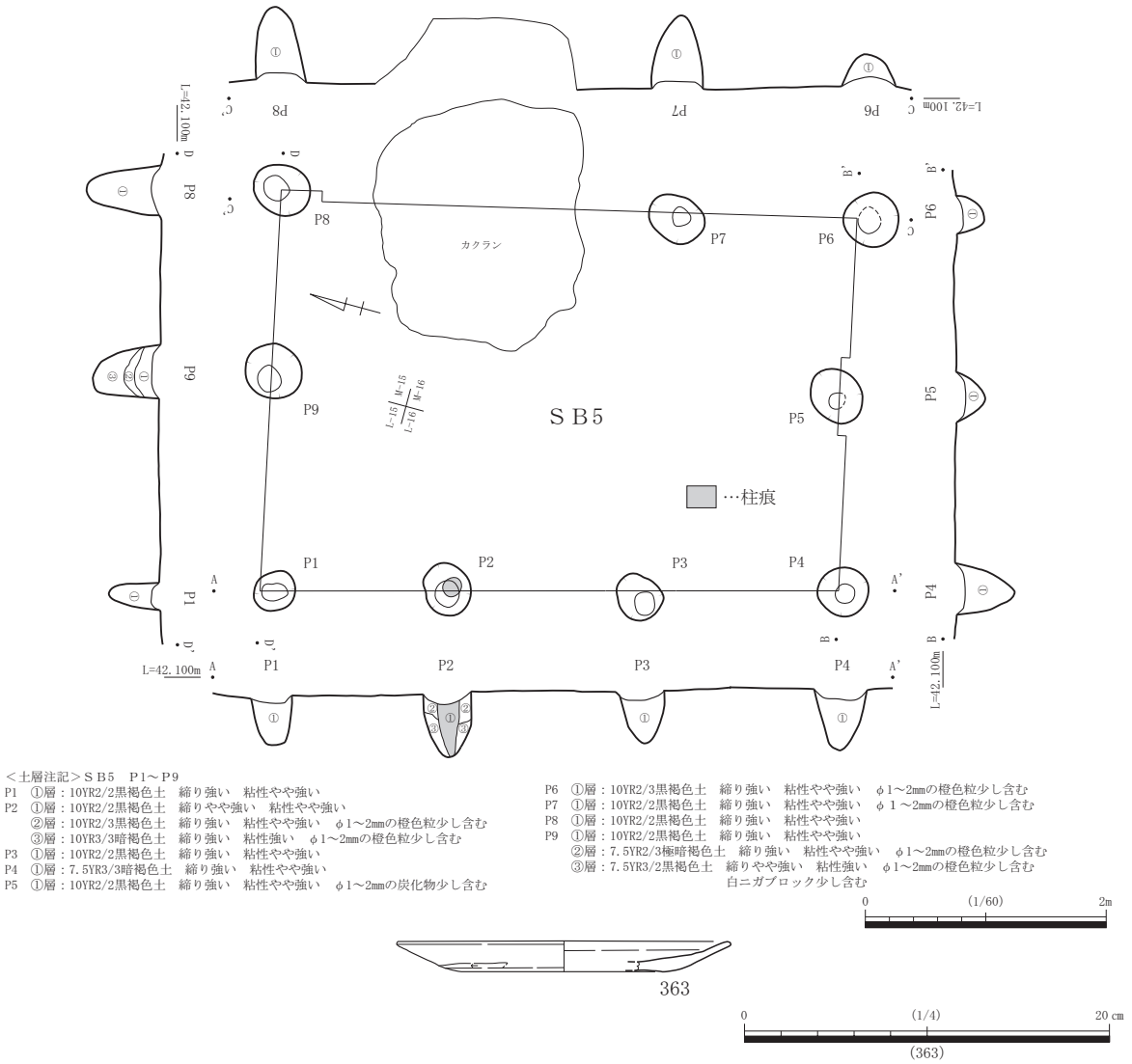
第 85 図　　ＳＢ4 遺構・出土遺物実測図

～１．７７ｍを測る。柱掘方は平面円形であり、径は約３５～４５㎝、深さは検出面より２３～５５㎝を測る。柱穴の下端レベルは一定ではない。断面において柱痕を確認しているのはＰ２のみである。

遺物はＰ８内において土師器の坏片と考えられるものが出土している。復元口径は約１８．２㎝、底径約１０．１㎝を測る。

ＳＢ６（第８７図）

Ｓ１５・１６、Ｔ１５グリッドに位置する。桁行は３間で、東側柱列（Ｐ３－Ｐ４－Ｐ５－Ｐ６）約４．４６ｍ、西側柱列（Ｐ１－Ｐ１０－Ｐ９－Ｐ８）約４．６５ｍ。梁行は２間で北側柱列（Ｐ１－Ｐ２－Ｐ３）約３．５０ｍ、南側柱列（Ｐ６－Ｐ７－Ｐ８）約３．３９ｍを測る側柱建物である。桁行方向はＮ－２３°－Ｗである。柱間は、桁行約１．３７～１．６０ｍ、梁行約１．６４～１．８７ｍを測る。柱掘方は平面円形であり、径は約３０～５０㎝、深さは検出面より２５～６３㎝を測る。柱穴の下端レベルは一定ではない。
Ｐ４、Ｐ９、Ｐ１０を除くピットにおいて柱痕を確認している。



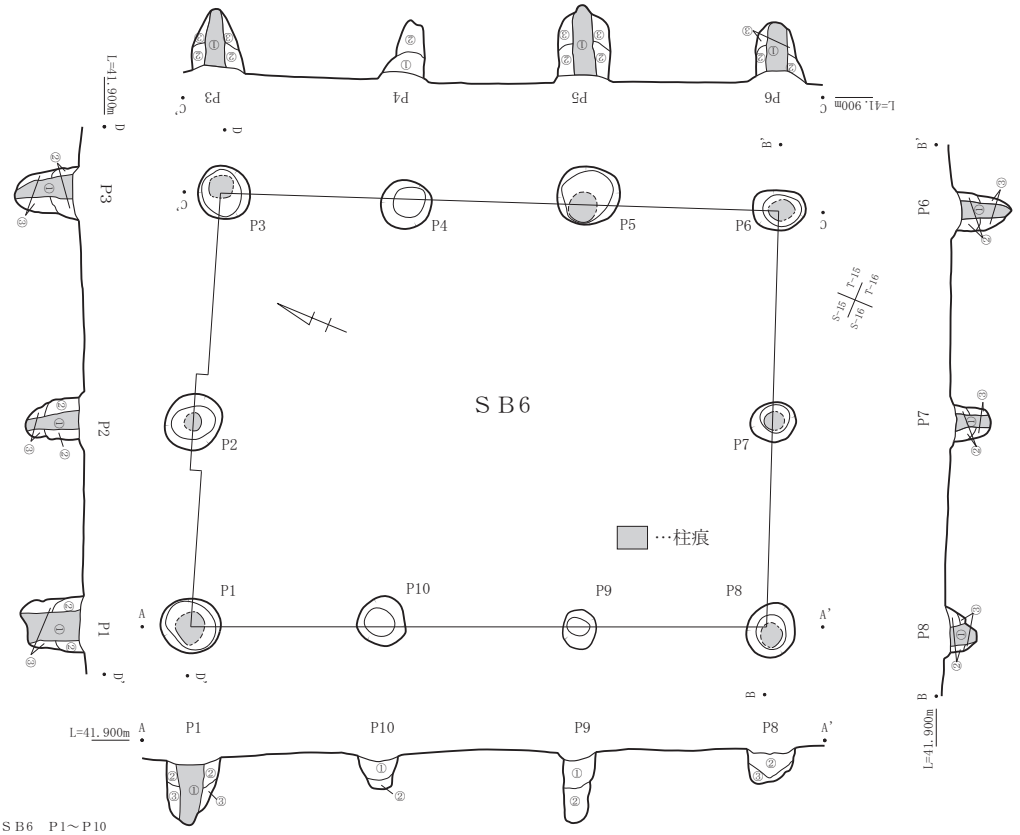
＜土層注記＞ＳＢ５　Ｐ１～Ｐ９
P1　①層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性やや強い
P2　①層：10YR2/2黒褐色土　締りやや強い　粘性やや強い
　　②層：10YR2/3黒褐色土　締り強い　粘性やや強い　φ1～2mmの橙色粒少し含む
　　③層：10YR3/3暗褐色土　締り強い　粘性強い　φ1～2mmの橙色粒少し含む
P3　①層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性やや強い
P4　①層：7.5YR3/3暗褐色土　締り強い　粘性やや強い
P5　①層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性やや強い　φ1～2mmの炭化物少し含む
P6　①層：10YR2/3黒褐色土　締り強い　粘性やや強い　φ1～2mmの橙色粒少し含む
P7　①層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性やや強い　φ１～2mmの橙色粒少し含む
P8　①層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性やや強い
P9　①層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性やや強い
　　②層：7.5YR2/3極暗褐色土　締り強い　粘性やや強い　φ1～2mmの橙色粒少し含む
　　③層：7.5YR3/2黒褐色土　締りやや強い　粘性強い　φ1～2mmの橙色粒少し含む
　　白ニガブロック少し含む

第 86 図　　ＳＢ5 遺構・出土遺物実測図

遺物は縄文期の遺物と考えられる黒曜石製の石鏃、石核が出土している。３６５の石核は、上面、左側面に自然面を残している。

ＳＢ７（第８８図）

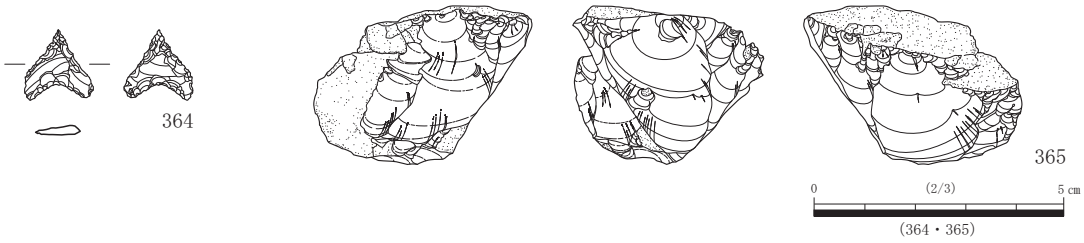
Ｔ１４・１５グリッドに位置する。ＳＢ６の北東に約２m離れている箇所に位置している。桁行は３間で、東側柱列（Ｐ３－Ｐ４－Ｐ５－Ｐ６）約５．３２m、西側柱列（Ｐ１－Ｐ１０－Ｐ９－Ｐ８）約５．１１m。梁行は２間で北側柱列（Ｐ１－Ｐ２－Ｐ３）約３．７６m、南側柱列（Ｐ６－Ｐ７－Ｐ８）約３．５７mを測る側柱建物である。桁行方向はＮ－１８°－Ｗである。柱間は、桁行約１．６８～１．９３m、梁行約１．７６～１．９５mを測る。柱掘方は平面円形であり、径は約３５～５５㎝、深さは検出面より３４～４８㎝を測る。柱穴の下端レベルは一定ではないが、他の掘立柱建物跡と比較して差異が一番小さい。Ｐ２、Ｐ４、Ｐ５、Ｐ７、Ｐ９を除くピットにおいて柱痕を確認している。また、全ピットにおける埋土中に約１㎜の焼土粒子、微量の炭化物が確認されている。



＜土層注記＞ＳＢ６　Ｐ１～Ｐ10

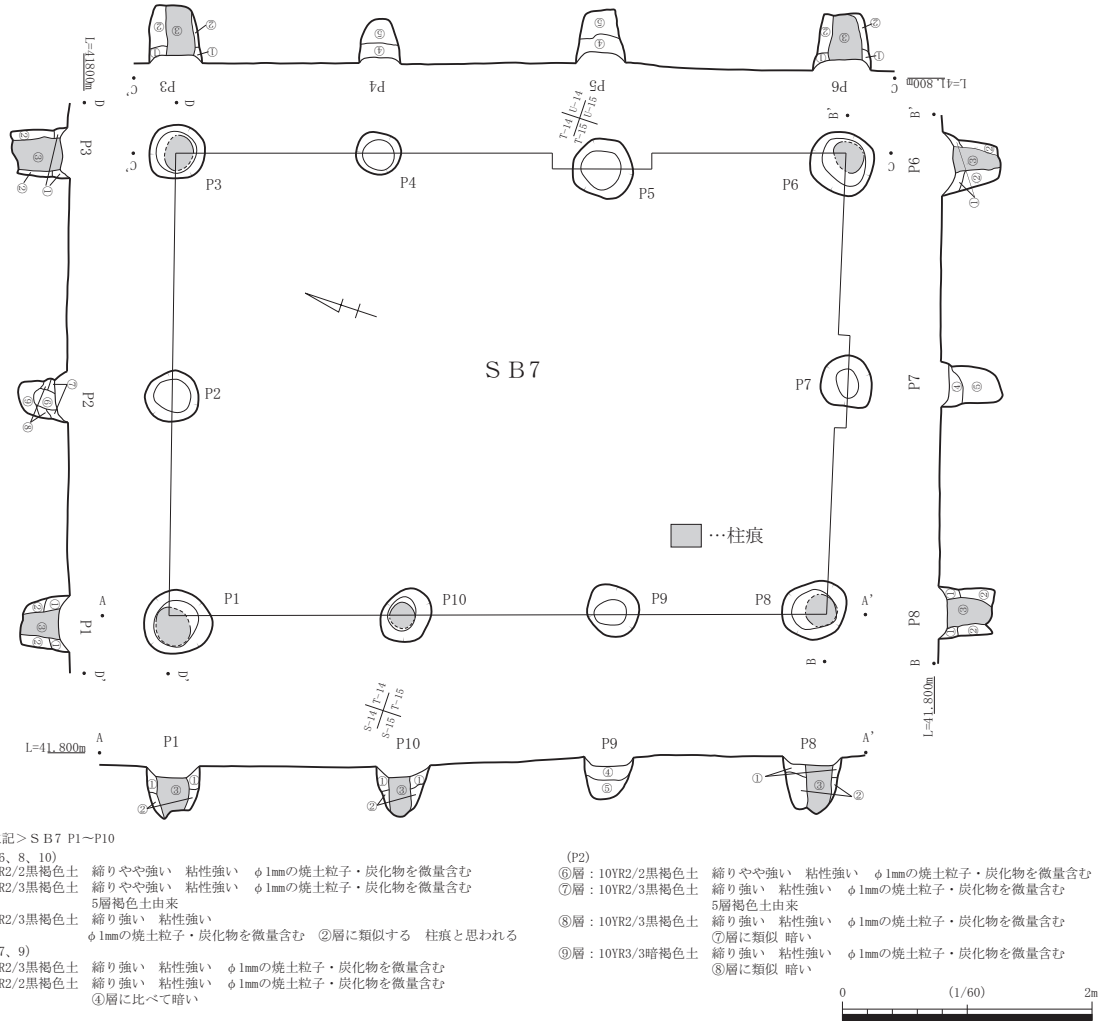
P1　①層：10YR2/2黒褐色土　締り やや強い　粘性強い　φ１～5mmの橙色粒少し含む
　　②層：10YR2/3黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ5～10mmのニガブロック少し含む
　　③層：7.5YR2/3極暗褐色土　締り強い　粘性やや強い　φ5～10mmのニガブロック少し含む
P2　①層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性やや強い
　　②層：10YR2/3黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ5～10mmのニガブロック少し含む
　　③層：10YR2/2黒褐色土　締りやや強い　粘性やや強い　φ5～10mmのニガブロック多く含む
P3　①層：10YR2/3黒褐色土　締りやや強い　粘性やや強い　φ１～5mmの橙色粒少し含む
　　②層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性やや強い　φ5～10mmのニガブロック少し含む
　　ジャリジャリした感じ
　　③層：7.5YR2/3極暗褐色土　締り強い　粘性やや強い
P4　①層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性やや強い　φ１～5mmの橙色粒少し含む
　　②層：10YR2/3黒褐色土　締りやや強い　粘性やや強い　ジャリジャリした感じ
　　φ１～5mmの橙色粒少し含む
P5　①層：10YR2/2黒褐色土　締りやや強い　粘性やや強い　ニガブロック少し含む
　　②層：10YR2/3黒褐色土　締り強い　粘性やや強い　φ１～5mmの橙色粒少し含む
　　③層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性やや強い　ジャリジャリした感じ
P6　①層：10YR2/3黒褐色土　締り強い　粘性やや強い　φ１～5mmの橙色粒少し含む
　　②層：10YR2/2黒褐色土　締りやや強い　粘性やや強い　φ１～5mmの橙色粒少し含む
　　③層：10YR2/3黒褐色土　締りやや強い　粘性強い
P7　①層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性やや強い　φ１～5mmの橙色粒・炭化物少し含む
　　②層：10YR2/3黒褐色土　締りやや強い　粘性やや強い　φ１～5mmのニガブロック少し含む
　　③層：10YR2/2黒褐色土　締りやや強い　粘性やや強い
P8　①層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性やや強い　φ１～5mmの橙色粒少し含む
　　②層：10YR2/3黒褐色土　締り強い　粘性やや強い　ジャリジャリした感じ
　　③層：7.5YR2/3極暗褐色土　締り強い　粘性やや強い
P9　①層：10YR2/3黒褐色土　締りやや強い　粘性強い
　　②層：7.5YR2/3極暗褐色土　締り強い　粘性強い　引っかかる感じ
P10　①層：10YR2/2黒褐色土　締りやや強い　粘性強い
　　②層：7.5YR2/3極暗褐色土　締り強い　粘性強い　引っかかる感じ

0　(1/60)　2m



第 87 図　　ＳＢ6 遺構・出土遺物実測図

調査３区において検出された４棟の掘立柱建物は、若干の大小差はあるものの、桁、梁の規格が一致しており、桁行方向が北からやや西にふれる点でも同じである。桁行方向の最大差はわずかに１３°である。また、調査１区で検出した２棟も桁、梁の規格が一致しており、ＳＢ２においては桁行方向はＮ－１６°－Ｗと調査３区のものとやや西にふれるという点でも酷似する。これらのことから、塔平遺跡において検出された掘立柱建物跡は、同一時期に並立していた可能性が高いと考えられる。



第 88 図　　ＳＢ7 遺構実測図

③土坑

ＳＫ４０（第８９図）

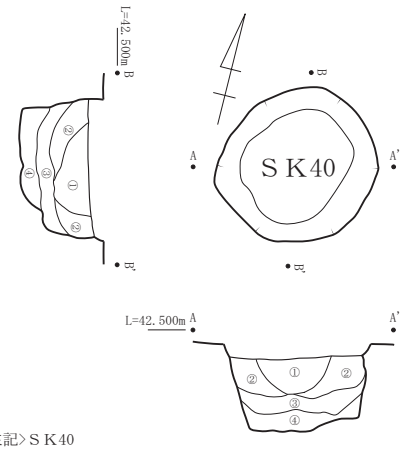
Ｔ２３グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、断面は南西側に段を持つ、歪な台形状を呈する。長軸約８６㎝、短軸約８２㎝、検出面からの深さは約３８㎝を測る。埋土は４層に分けられる。埋土１、２層に焼土と思われる粒子を含んでいる。また、遺物もこの２層より出土している。貯蔵等の用途が考えられるが不明である。

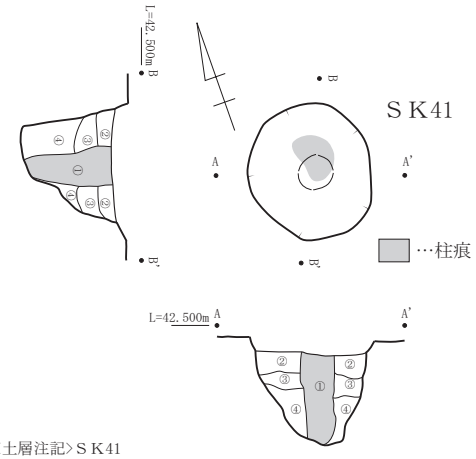
遺物は３６６の土師器の鉢のほか、３６７、３６８の土師器の甕が出土している。いずれも口縁部から胴部にかけての一部が残存する形での出土である。

ＳＫ４１（第８９図）

Ｔ２２グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸約７２㎝、短軸約６６㎝、検出面からの深さは約４８㎝を測る。柱痕を確認した土坑である。周辺土坑及びピットにおいて柱痕、配列から掘立柱建物や柵列を想定できるものは確認されていない。

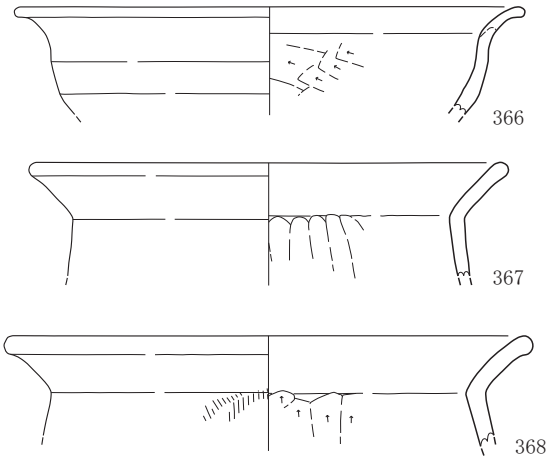
遺物は３６９の黒色土器Ａ類の椀、３７０の須恵器の椀である。３６９は復元口径約１６．８㎝、器高７．３㎝、底径約７．９㎝を測る。

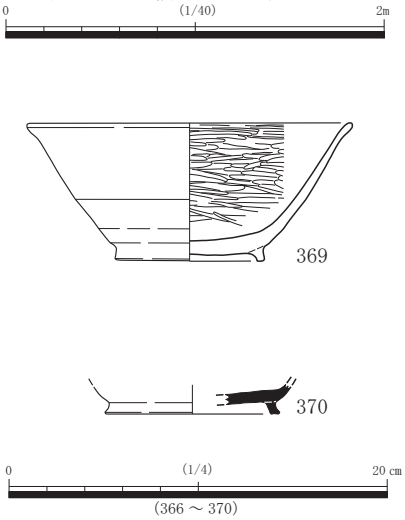


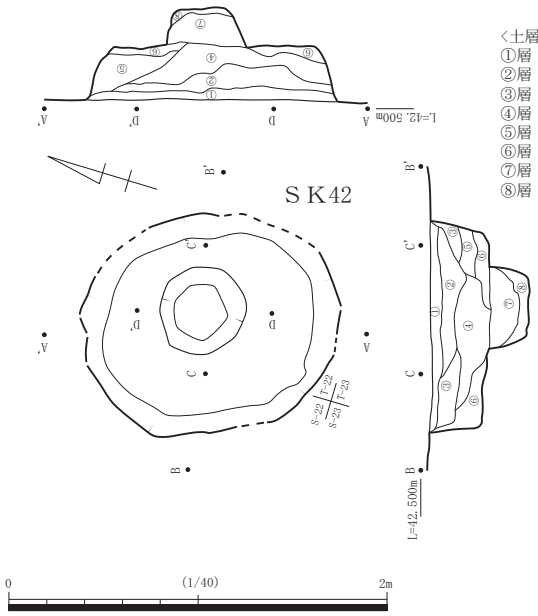


〈土層注記〉S K40
①層：10YR3/2黒褐色土　締り弱い　粘性やや強い　赤い焼土のような粒が少量入る
②層：10YR3/2黒褐色土　締りやや弱い　粘性やや強い　赤い焼土のような粒が微量入る
③層：10YR2/2黒褐色土　締りやや強い　粘性強い　混入物ほとんどなし
④層：10YR2/2黒褐色土　締りやや強い　粘性強い　ニガ多めに入る

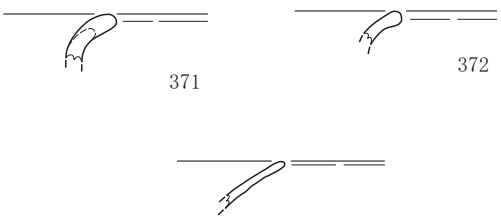
〈土層注記〉S K41
①層：10YR2/3黒褐色土　締り弱い　粘性やや弱い　混入物ほとんどなし
②層：10YR2/3黒褐色土　締りやや弱い　粘性やや強い　混入物ほとんどなし
③層：10YR3/2黒褐色土　締りやや弱い　粘性強い　混入物ほとんどなし
④層：10YR2/2黒褐色土　締りやや弱い　粘性強い　混入物ほとんどなし

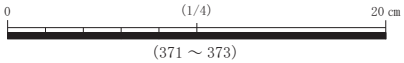






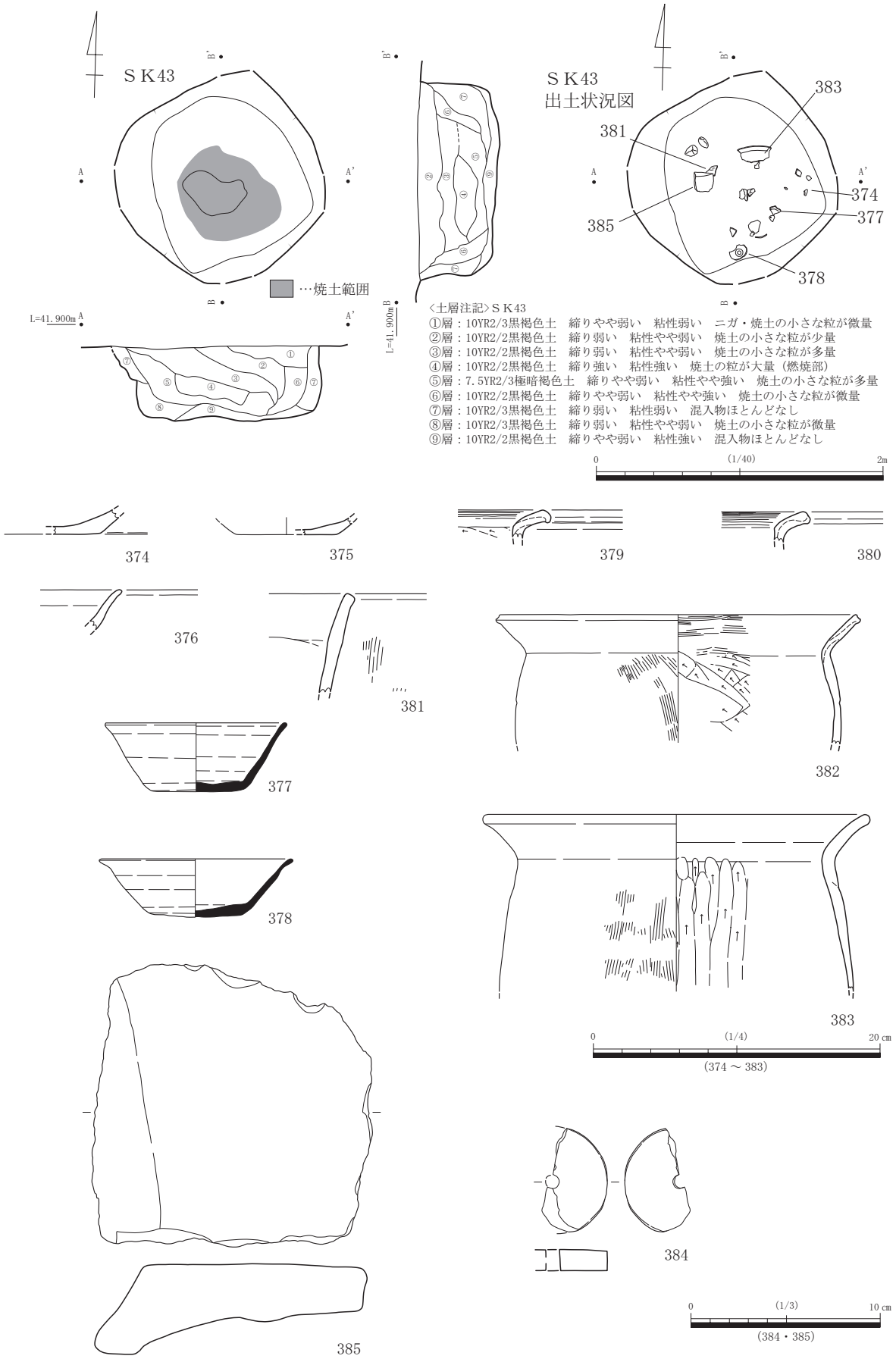
〈土層注記〉S K42
①層：10YR2/3黒褐色土　締りやや弱い　粘性やや強い　砂つぶ少量
②層：10YR2/3黒褐色土　締り弱い　粘性やや弱い　混入物ほとんどなし
③層：10YR3/1黒褐色土　締りやや弱い　粘性やや強い　砂つぶやや多めに入る。
④層：10YR2/2黒褐色土　締りやや弱い　粘性強い　混入物ほとんどなし
⑤層：10YR2/3黒褐色土　締りやや強い　粘性やや弱い　大きめの赤いつぶが少量入る
⑥層：10YR3/3暗褐色土　締りやや強い　粘性弱い　ニガ・砂つぶが多めに入る
⑦層：10YR2/3黒褐色土　締り弱い　粘性弱い　ニガ少量
⑧層：10YR2/3黒褐色土　締り弱い　粘性弱い　ニガかなり多い



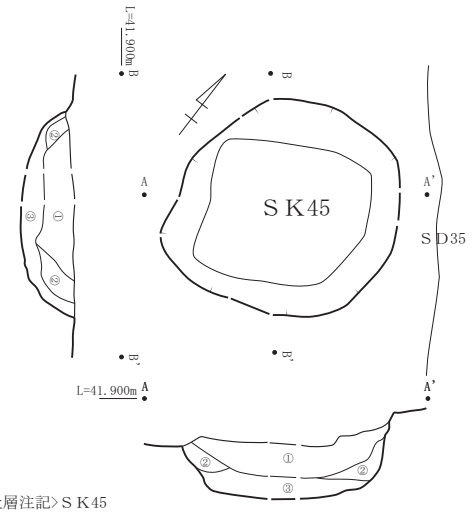


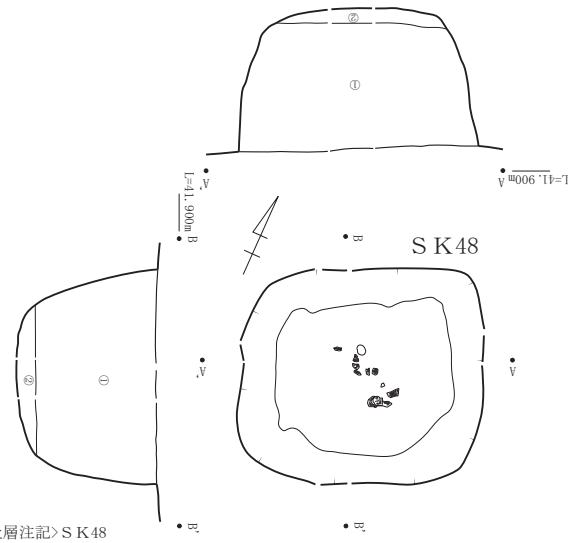
(371 ～ 373)

第 89 図　　S K40・41・42 遺構・出土遺物実測図



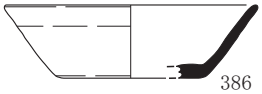
第 90 図　　ＳＫ43 遺構・出土遺物実測図

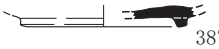




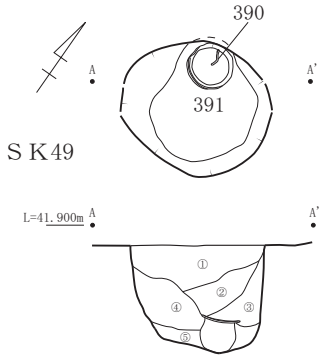
<土層注記>ＳＫ45
①層：10YR3/3暗褐色土　締り強い　粘性弱い　焼土のような赤色粒を大量に含む
②層：10YR3/4暗褐色土　締りやや弱い　粘性やや弱い 焼土のような赤色粒を大量に含む
③層：10YR2/3黒褐色土　締り弱い　粘性やや弱い　ニガ少量含む

<土層注記>ＳＫ48
①層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性少し強い　φ5～30㎜のニガブロックとφ1～3㎜の橙色粒多く含む　φ10㎝大のニガブロック少し含む
②層：10YR2/2黒褐色土　締りやや強い　粘性少し強い　φ5～10㎜のニガブロックとφ1～3㎜の橙色粒少し含む　φ5～10㎜の炭化物（材）多く含む

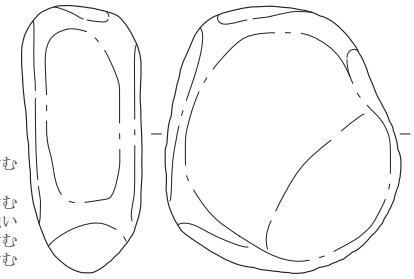

386

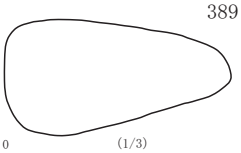

387

388

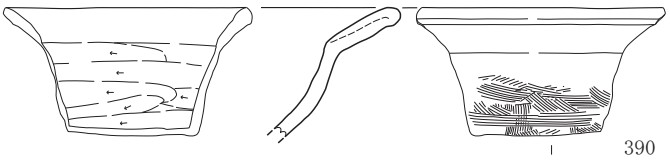


<土層注記>ＳＫ49
①層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性やや強い　φ1～2㎜の橙色粒多く含む
②層：10YR2/2黒褐色土　締り弱い　粘性やや強い　φ1～2㎜の橙色粒少し含む
③層：7.5YR2/3極暗褐色土　締り少し強い　粘性強い　φ1～2㎜の橙色粒少し含む　アカホヤブロック少し含む
④層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性やや強い　φ5～20㎜のニガブロック多く含む　φ1～2㎜の橙色粒少し含む
⑤層：7.5YR2/3極暗褐色土　締り弱い　粘性強い　φ5～20㎜のニガブロック少し含む　φ1～2㎜の橙色粒少し含む
※⑤層は、かめを据える為にしかれ　④層　③層　②層　①層の順で、人為的に埋めたものと推測できる。

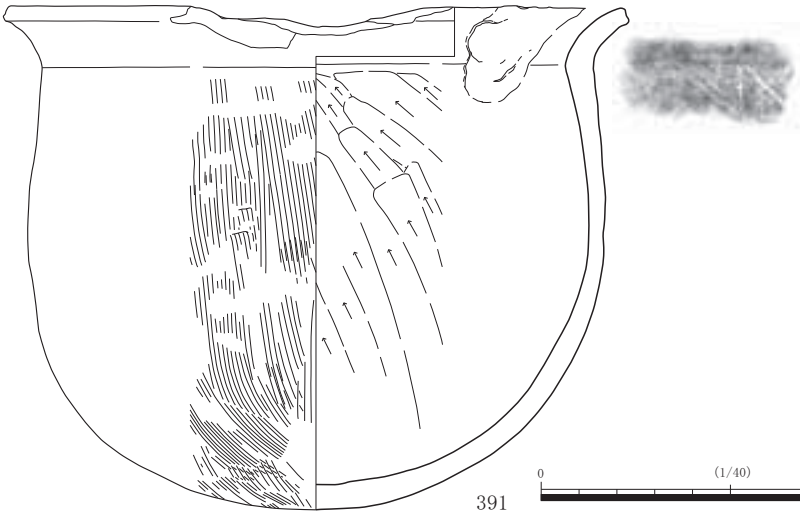

389



0　(1/3)　10 cm
(389)

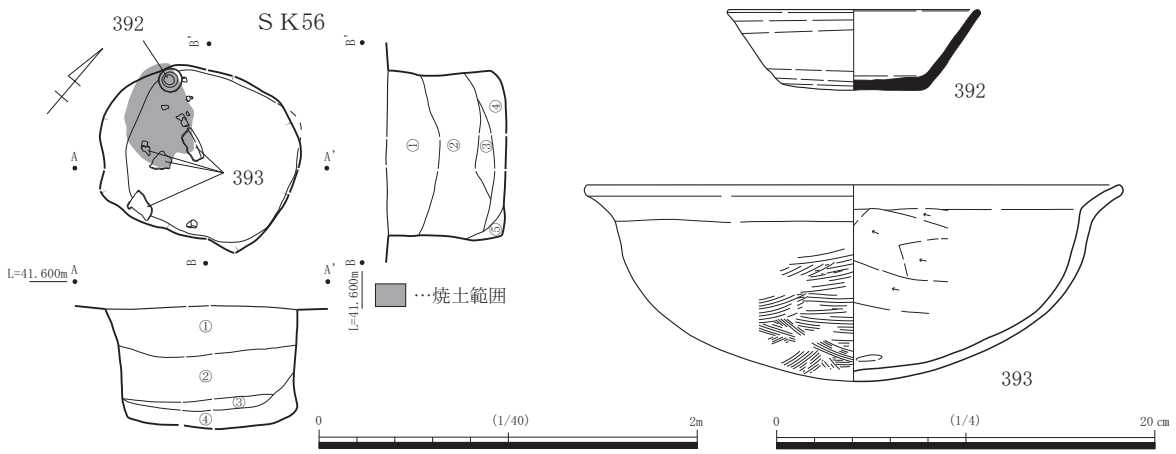

390

0　(1/4)　20 cm
(386 ～ 388・390・391)


391

0　(1/40)　2m

第 91 図　　ＳＫ45・48・49 遺構・出土遺物実測図



＜土層注記＞ＳＫ56
①層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ5～10mmニガブロック少し含む　φ1～2mmの橙色粒少し含む
②層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ5～20mmニガブロック多く含む　φ1～2mmの橙色粒少し含む
③層：7.5YR2/3極暗褐色土　締り強い　粘性少し強い　φ5～10mmのニガブロック少し含む　φ1～2mmの橙色粒少し含む　φ1～5mmの炭化物多く含む
④層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ1～5mmの炭化物少し含む
⑤層：10YR2/3黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ5～10mmのニガブロック少し含む

第 92 図　　ＳＫ56 遺構・出土遺物実測図

ＳＫ４２（第８９図）

Ｓ２２、Ｔ２２グリッドに位置する。平面形は楕円形で、中央部やや東にピット状の凹部をもつ。長軸約１３０㎝、短軸約１１６㎝、検出面からの深さは最深部で約３２㎝を測る。黒褐色の埋土で５層において焼土と考えられる赤い粒が少量混入している。凹部は埋土の状況からＳＫ４２よりも古い時期に掘り込まれたピットの可能性もあり、埋土７層上面の形状が平坦であることから墓等の可能性もある。

遺物は小片であるが土師器片が出土している。３７１、３７２は甕である。３７３は托と考えられるが、残りが悪く、全形の把握ができないため判断はできない。

ＳＫ４３（第９０図）

Ｒ１４グリッドに位置する。平面形は不整な円形、断面は台形状を呈する。径はおよそ約１４５㎝、検出面からの深さは最深部で約５８㎝を測る。埋土は９層に分けることができ、埋土１層～５層は西から東にかけて流入し堆積している。うち埋土４層は焼土粒を大量に含んでいる。火を用いた祭祀、あるいは底面の形状が平坦であることから墓等の可能性が考えられる。

遺物は完形のものはないが個体数は多い。３７４～３７６は土師器の坏で、３７４は黒色土器Ａ類である。３７７、３７８は須恵器の坏、３７９～３８３は甕である。３７９、３８０は同一個体の可能性もある。３８４は土師質の土製紡錘車である。復元穿孔径約０．８㎝を測り、面、稜ともにシャープな作りである。

ＳＫ４５（第９１図）

Ｕ１８・１９グリッドに位置する。後世の溝の完掘後に検出が可能となった。上層のほとんどは壊されている状況である。平面形は不整な楕円形で、長軸約１２６㎝、短軸約１１４㎝、検出面からの深さは約３０㎝を測る。埋土は３層に分けられ、埋土１、２層において焼土と思われる赤色粒を大量に含んでいる。ＳＫ４３と同様、火を用いた祭祀、あるいは底面の形状がほぼ平坦であることから墓等の可能性もある。

３８６は須恵器の坏である。内面は回転ナデ、底部はヘラ切り離し後ナデ調整を施し、口縁端部は重ね焼きによる変色が生じている。３８７は須恵器の椀で、高台内はヘラ切り離し後未調整で、高台は貼り付け後

に回転ナデ調整を施している。

ＳＫ４８（第９１図）

Ｓ１６、Ｔ１６グリッドに位置する遺構である。平面形は方形で、断面は深い台形状を呈する。長軸約１２６㎝、短軸約７４㎝、検出面からの深さは約１１２㎝を測る。埋土は２層に分けられるが、埋土１層がその９割近くを占める。両層とも焼土と考えられる橙色粒を含んでいるが、埋土２層は炭化物を多く含んでおり、炭化材も検出している。炭化材は遺構のほぼ中央に位置している。断面形状から墓と考えられ、埋土１層は埋戻し土と思われる。

３８８の須恵器の蓋の小片が出土している。内面に墨のようなものの付着があり、硯として転用した可能性もあるが判断はできない。３８９は磨石で使用面を２面もつ。

ＳＫ４９（第９１図）

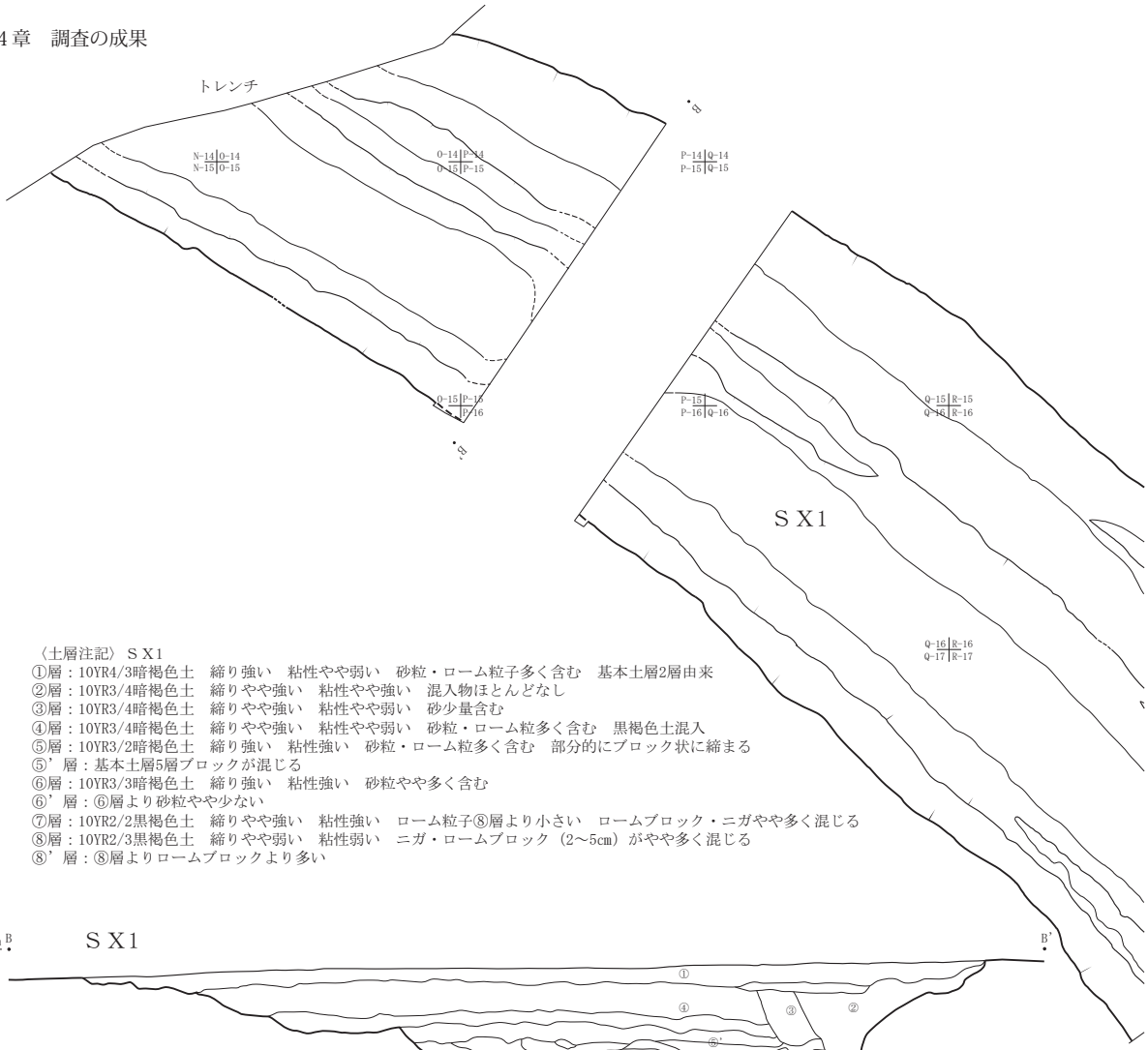
Ｓ１５・１６グリッドに位置する。平面形は楕円形で、検出面からの深さは約５４㎝を測る。埋土最下層の５層を固定土とした鉢が北端に据えられている。埋土１層～４層は断面の状況から埋戻し土の可能性が高い。

３９１の鉢の口縁は上向きでやや北に傾いている状態で検出した。完形で口径約２４．３㎝、器高約２０．０㎝を測る。外器面は縦方向のハケメ調整を施し、斑状のススの付着を残す。内器面は縦方向のケズリ調整を施す。頸部内面の一部に布目痕、他部に粘土を足したような痕跡も残る。口縁部は横ナデ調整で欠損のある部は意図的に打ち欠いたものと考えられる。検出時に鉢内の埋土に、３９０の鉢の口縁部片が刺さったような状態で検出された。蓋として用いたものが土圧で押し込まれたとも考えたが、他の土器片を確認することができなかった。偶然に刺さったとも、意図的に差し込んだものかは判断には至らなかった。蔵骨器と考えられるが、鉢内部の土に骨片等は確認されなかった。

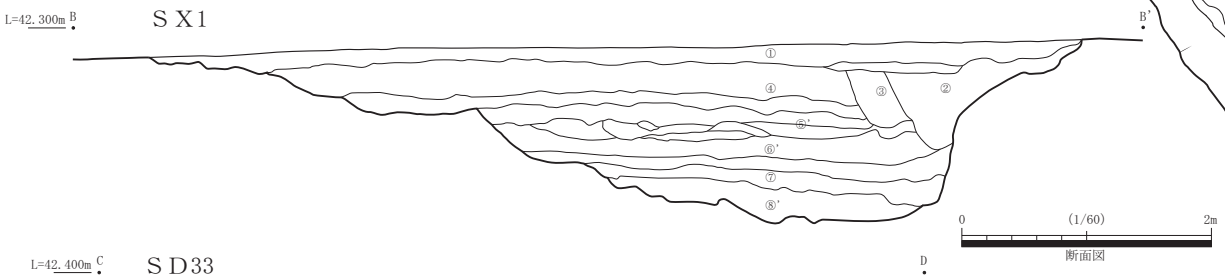
ＳＫ５６（第９２図）

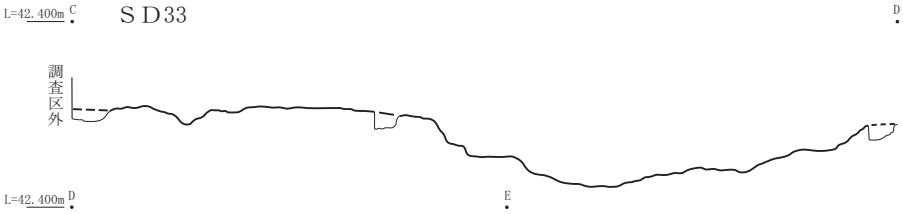
Ｒ１３グリッドに位置する。平面形は不整な楕円形、断面は台形状を呈し、底面の形状は平坦だが僅かにフラスコ状に外へ膨らむ。長軸約１０８㎝、短軸約９２㎝、検出面からの深さは約６６㎝を測る。埋土は５層に分けられ、埋土３層は焼土と思われる橙色粒を少量含み、炭化物を多く含んでいる。遺物は焼土範囲のある遺構西側に集中し、多くが焼土の広がる埋土４層中によるものであった。底面の形状などからも、墓と考えられる。

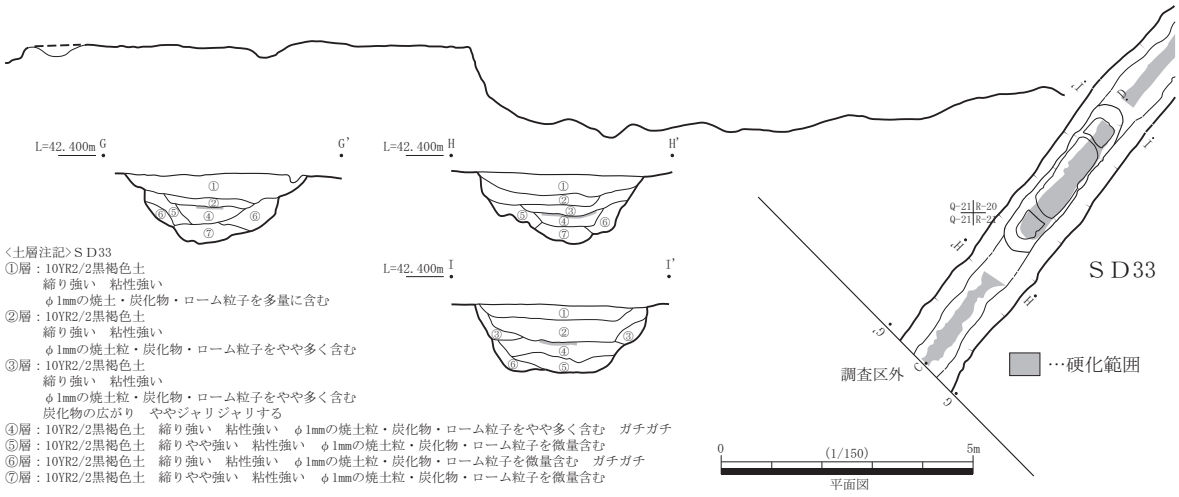
遺物の３９２は須恵器の坏で、口径約１３．２㎝、底径約７．６㎝、器高約４．３㎝を測るほぼ完形である。回転ナデ、ナデ調整を施すが摩耗が激しい。３９３は土師器の鉢で、復元口径約２８．１㎝、器高１０．４㎝を測る。内面はケズリ、底部はナデ調整を施し、一部指頭痕が残る。



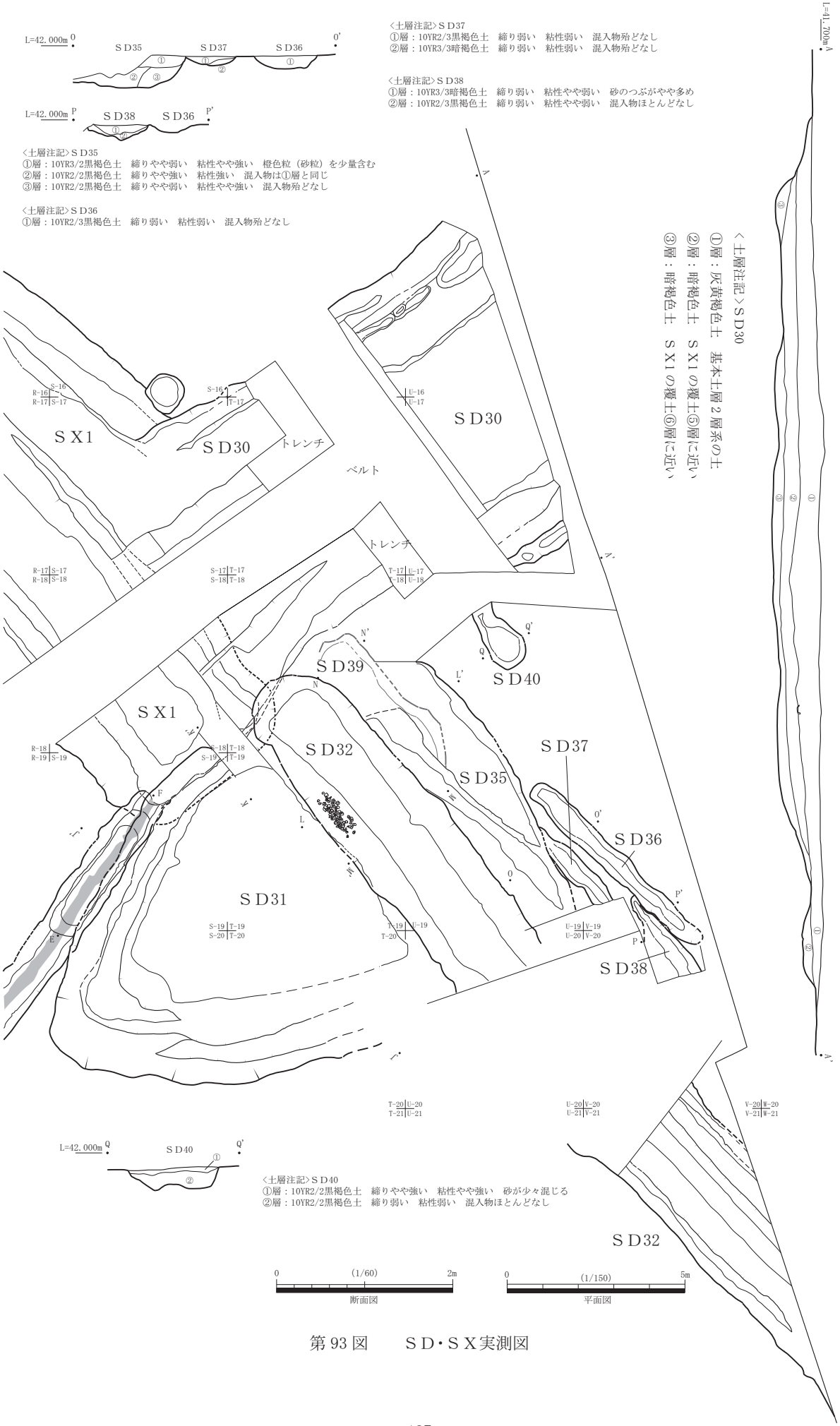
〈土層注記〉ＳＸ1
①層：10YR4/3暗褐色土　締り強い　粘性やや弱い　砂粒・ローム粒子多く含む　基本土層2層由来
②層：10YR3/4暗褐色土　締りやや強い　粘性やや強い　混入物ほとんどなし
③層：10YR3/4暗褐色土　締りやや強い　粘性やや弱い　砂少量含む
④層：10YR3/4暗褐色土　締りやや強い　粘性やや弱い　砂粒・ローム粒多く含む　黒褐色土混入
⑤層：10YR3/2暗褐色土　締り強い　粘性強い　砂粒・ローム粒多く含む　部分的にブロック状に締まる
⑤’層：基本土層5層ブロックが混じる
⑥層：10YR3/3暗褐色土　締り強い　粘性強い　砂粒やや多く含む
⑥’層：⑥層より砂粒やや少ない
⑦層：10YR2/2黒褐色土　締りやや強い　粘性強い　ローム粒子⑧層より小さい　ロームブロック・ニガやや多く混じる
⑧層：10YR2/3黒褐色土　締りやや弱い　粘性弱い　ニガ・ロームブロック（2～5cm）がやや多く混じる
⑧’層：⑧層よりロームブロックより多い



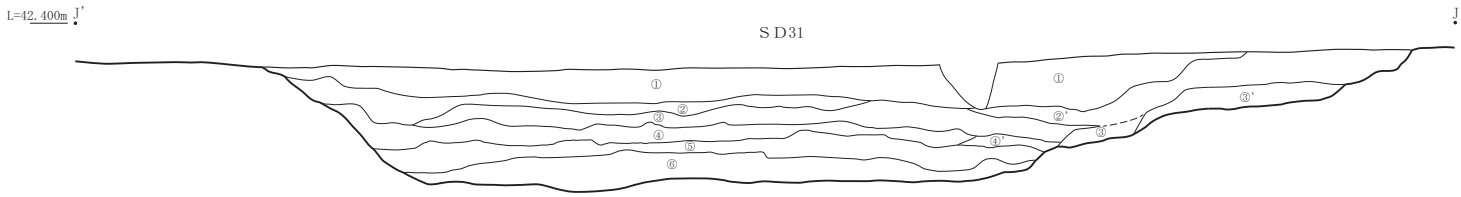


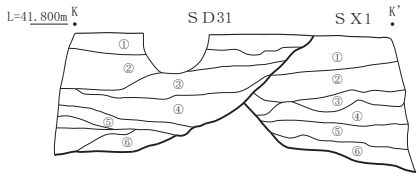


<土層注記>ＳＤ33
①層：10YR2/2黒褐色土
　締り強い　粘性強い
　φ1mmの焼土・炭化物・ローム粒子を多量に含む
②層：10YR2/2黒褐色土
　締り強い　粘性強い
　φ1mmの焼土粒・炭化物・ローム粒子をやや多く含む
③層：10YR2/2黒褐色土
　締り強い　粘性強い
　φ1mmの焼土粒・炭化物・ローム粒子をやや多く含む
　炭化物の広がり　ややジャリジャリする
④層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒・炭化物・ローム粒子をやや多く含む　ガチガチ
⑤層：10YR2/2黒褐色土　締りやや強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒・炭化物・ローム粒子を微量含む
⑥層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒・炭化物・ローム粒子を微量含む　ガチガチ
⑦層：10YR2/2黒褐色土　締りやや強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒・炭化物・ローム粒子を微量含む

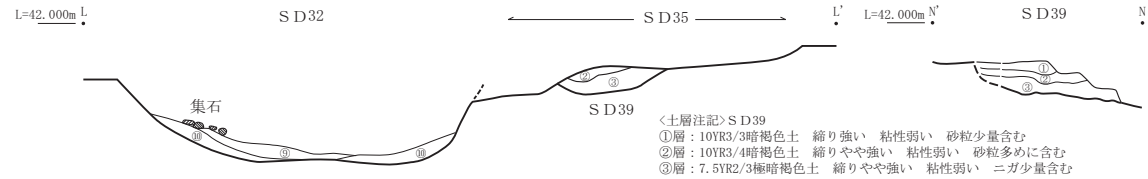


第 93 図　　ＳＤ・ＳＸ実測図

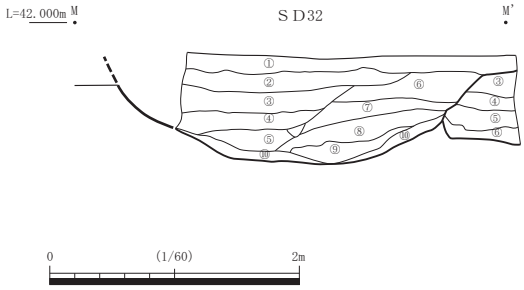




＜土層注記＞ＳＤ31
①層：10YR3/3暗褐色土　締り強い　粘性やや弱い　砂少量
②層：10YR3/4暗褐色土　締りやや弱い　粘性弱い　砂少量
③層：10YR2/3黒褐色土　締りやや弱い　粘性やや弱い　砂少量
③'層：③層よりやや暗い
④層：10YR3/2黒褐色土　締り弱い　粘性やや強い　小さなロームの粒少量
④'層：④層よりやや暗い　ニガ・ブロック混じり
⑤層：10YR2/2黒褐色土　締り弱い　粘性やや強い　ローム・ニガ含む
⑥層：10YR3/4暗褐色土　粘性強い　ローム・ニガ大量に含む



<土層注記>ＳＤ39
①層：10YR3/3暗褐色土　締り強い　粘性弱い　砂粒少量含む
②層：10YR3/4暗褐色土　締りやや強い　粘性弱い　砂粒多めに含む
③層：7.5YR2/3極暗褐色土　締りやや強い　粘性弱い　ニガ少量含む



＜土層注記＞ＳＤ32
①層：10YR4/3にぶい黄褐色土　締り強い　粘性やや弱い
焼土粒・炭化物・ローム粒・砂粒を多く含む
②層：10YR3/3暗褐色土　締りやや強い　粘性やや弱い
焼土粒・炭化物・ローム粒・砂粒を多く含む　表面ボサボサ
③層：10YR3/3暗褐色土　締りやや弱い　粘性やや強い
焼土粒を多く含む　炭化物・ローム粒・砂粒を少量含む
④層：10YR3/2黒褐色土　締りやや弱い　粘性やや強い
焼土粒・炭化物・ローム粒・砂粒を少量含む
⑤層：10YR3/3暗褐色土　締りやや弱い　粘性やや強い
焼土粒・炭化物・ローム粒・砂粒を少量含む　ニガ含む
⑥層：10YR4/3にぶい黄褐色土　締り強い　粘性やや強い
焼土粒・炭化物・ローム粒・砂粒を多く含む
⑦層：10YR3/3暗褐色土　締り強い　粘性やや強い
焼土粒・炭化物をやや多く含む　ローム粒・砂粒を多く含む
⑧層：10YR3/3暗褐色土　締りやや強い　粘性強い
焼土粒・炭化物・ローム粒・砂粒を多く含む
⑨層：10YR2/3黒褐色土　締り強い　粘性やや強い
焼土粒・炭化物・ローム粒を少量含む
⑩層：10YR2/3黒褐色土　締りやや強い　粘性強い
ローム粒やや多く含む

第 94 図　　ＳＤ・ＳＸ断面図

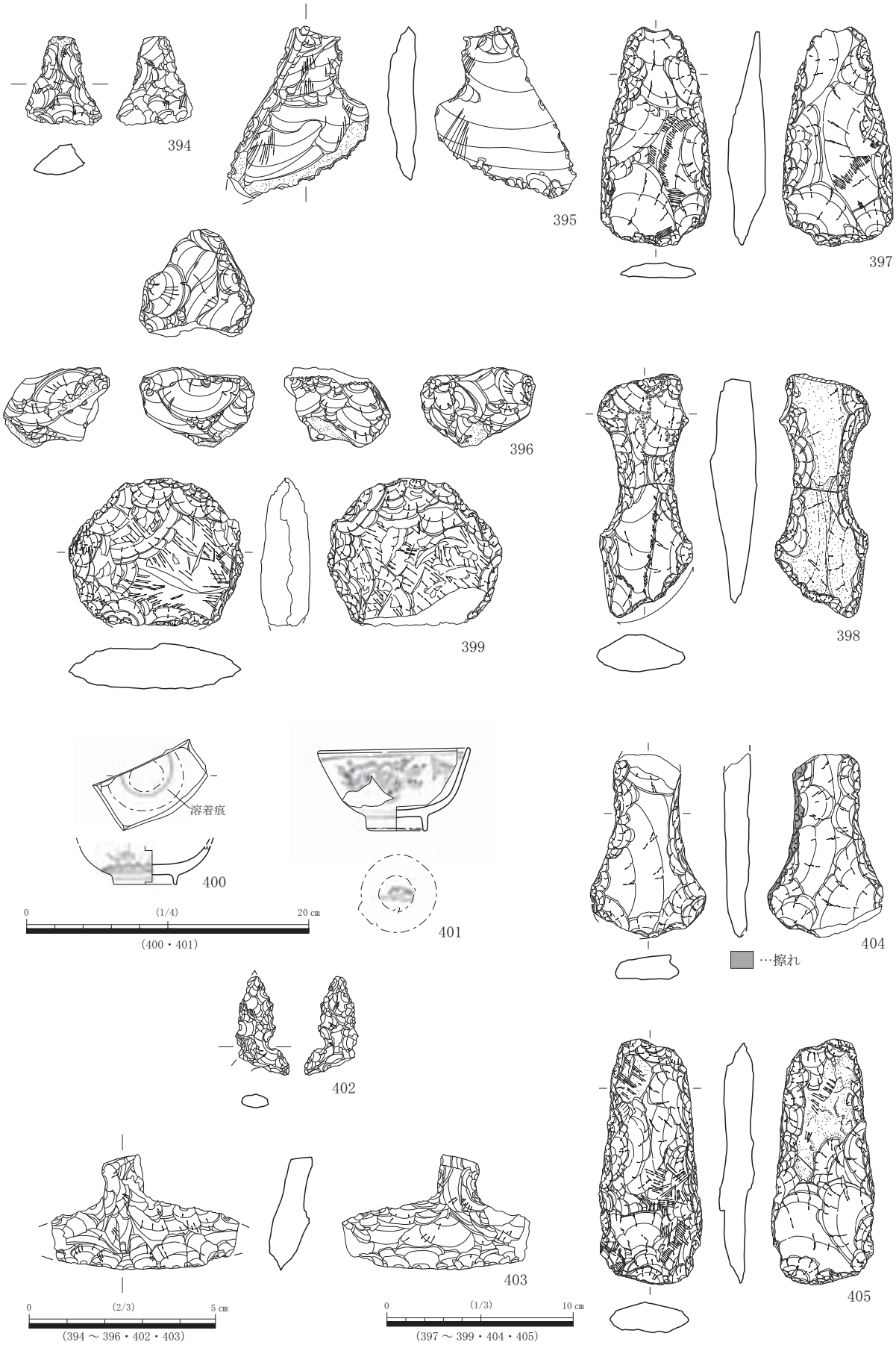
（６）近現代の遺構・遺物

基本土層２層～３層中にて確認された溝である。ほとんどの溝検出時において、プランを囲むように耕作地時代の撹乱（いも穴）を確認している。溝内において取り上げた遺物にも良好な資料を包含していた。ここでは主要なＳＤ、ＳＸの紹介、及びＳＤ、ＳＸで特徴的な出土遺物のみを特記する。

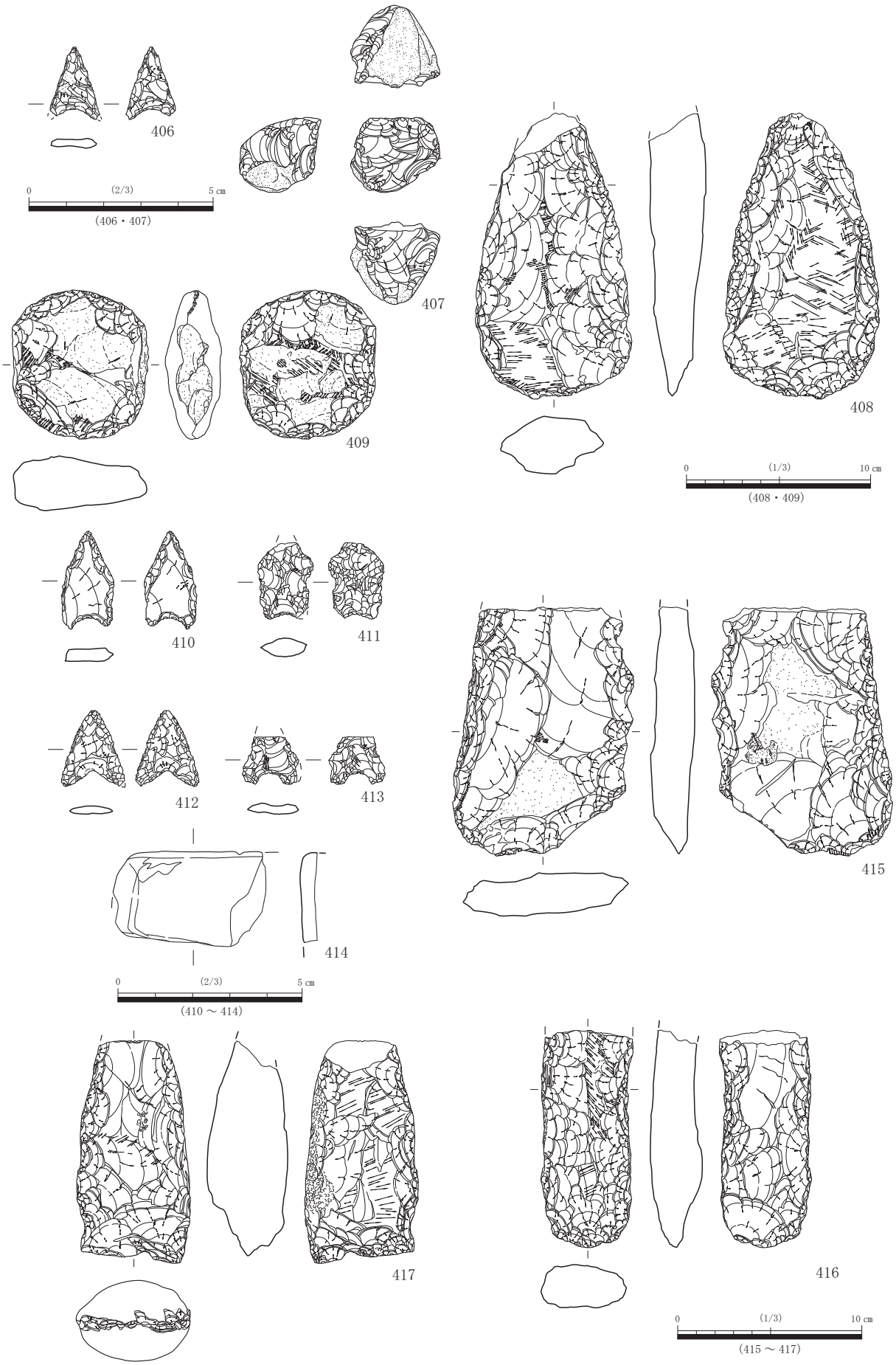
ＳＤ３０（第９３図、第９５図）

ＳＸ１よりも新しい溝である。調査区北東から南西方向へ伸び、ＳＸ１の始点付近にほぼ直行するが貫通はしない。北東側は調査区外へ伸びる。最大幅は約１０ｍで、長さは約１２ｍ、最大深度は１．０５ｍを測る。

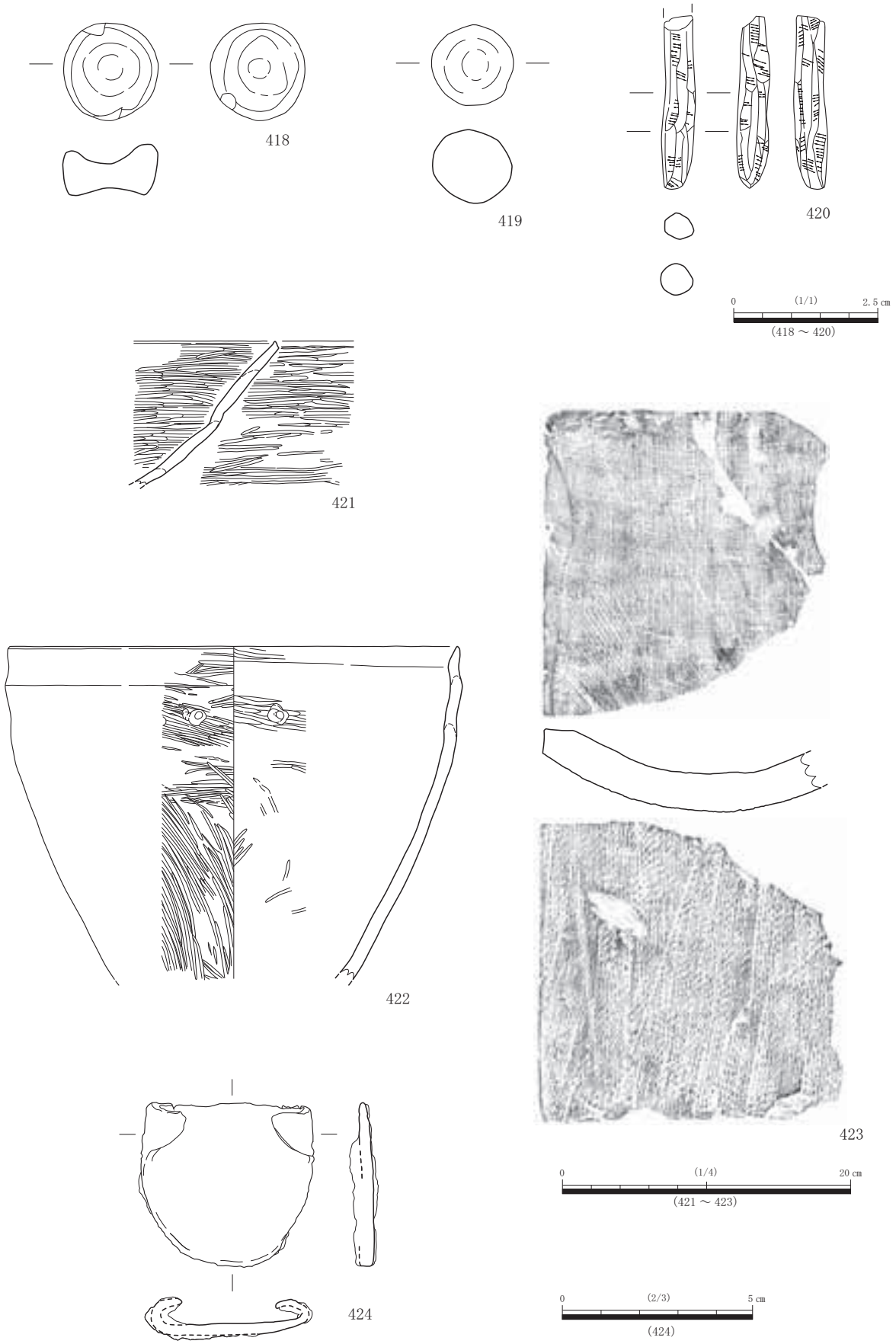
遺物は出土した主な石器を記す。３９４は二次加工を施しており、石鏃の未成品と思われる。３９５も同じく二次加工痕が認められ、石匙の未成品と考えられる。３９６は石核で、３９４、３９５を含め３点とも黒曜石製である。３９９は円盤形石斧である。



第 95 図　　ＳＤ出土遺物実測図 1



第 96 図　　ＳＤ・ＳＸ出土遺物実測図２



第 97 図　　ＳＤ・ＳＸ出土遺物実測図 3

ＳＤ３１（第９３図～第９５図）

ＳＸ１、ＳＤ３３を切る。周辺の溝の集合部付近において１辺が９ｍを超える三角形を呈する平面形状である。検出面から確認できた最大深度は約０．９５ｍでローム層まで掘り込まれている。貯水用として使用されていたのではないかと推測しているが判断には至っていない。

遺物には磁器の染付碗がある。４００、４０１は１８世紀後半の肥前のものと考えられる。４００は外面には草花文、高台にかけて３条、高台内に１条の圏線を巡らせている。内面は蛇ノ目釉剥ぎ、溶着を防ぐためのものと思われる砂の痕が残る。４０２は黒曜石製で抉りをもつ鏃である。４０３は安山岩製の石匙で刃部両端は欠損している。４０４は緑色片岩製、４０５は安山岩製の打製石斧である。

ＳＤ３２（第９３図、第９４図、第９６図）

検出された中で一番新しいものと推測している溝である。調査区南東から北西方向へ伸び、ＳＸ１の始点東側付近に到達する。最大幅は約３ｍで、長さは約２１ｍ、検出面からの最大深度は０．８５ｍを測る。ＳＤ３１と切り合う箇所の一角に集石を検出している。埋土９、１０層上面、西側に溝とほぼ平行して集められていた。道として使用されていた中で、不要な礫を捨てたのではないかと推測している。

遺物は石鏃、石核、石斧が出土している。４０８は基部の一部欠損があるが、長さ約１５.３㎝、幅約８.４㎝、厚さ約３.３㎝、重さ４５５.３ｇを測る安山岩製の打製石斧である。４０９は円盤形石斧である。

ＳＤ３３（第９３図）

調査区南西から北東方向へ伸び、ＳＸ１の始点付近にほぼ直行して接する。南西側は調査区外へと伸びる。最大幅は約３．３５ｍ、長さは約１４．６ｍを測り、検出面からの最深部では約０．９０ｍを超える。落ち込み部を２箇所において確認している。また、埋土４、６層は硬化しており範囲を印している。現地表面において南から北へ耕作地が段落ちで区画されていた箇所に近く、ＳＤ３３も区画溝として形成されたものと推定することができるが、硬化した面も確認されていることから、道としても使用されていたのではないかと考える。

ＳＸ１（第９３図、第９６図、第９７図）

塔平遺跡の最初に調査を行った西日本高速道路管轄区である調査４区において検出されており、その際に不明遺構（ＳＸ１）とされていたが、４区との隣接区である３区においてもＳＸ１の延長が確認されたため、遺構番号はそのままで表記することとした。３区におけるＳＸ１は南東から北西へと、調査区ほぼ中央に伸びる。最大幅約８ｍ、長さ約４２．５ｍ、最大深度は約１．８ｍを測る。断面は北東から緩やかに落ち込み、段を成すごとに急傾斜し、南西側に最深部をもつ。ローム層まで掘り込まれている。平面図で見ると直線的ではなく緩やかに西にカーブしていることが確認できる。区画溝ではなく水流路と捉えているが用途の詳細は不明である。

出土遺物は時期、器種様々である。鏃、石斧などの石器のほか、縄文、弥生、古代の土器、瓦などである。４１４は欠損部が多いが石庖丁片と思われる。石斧では４１６がホルンフェルス製の打製石斧で、４１７は安山岩製の磨製石斧である。４１８は円盤形土製品である。脊椎骨のような形を呈する。４１９は球体の土製品である。穿孔は確認できない。４２０は棒状の石を細かい面取り、研磨した痕跡を残す不明石製品である。先端はヘラ状になっている。４２２は内外器面においてミガキを施した深鉢形土器で、復元口径は約３１．０㎝を測る。補修孔をもち、内外器面両面より穿孔した痕を残す。４２３は平瓦で、凹面に布目、凸面に縄目を残している。４２４は手斧で、刃部は錆膨れを起こしており形状は不明である。

（７）時期不明遺構・遺物

基本土層５層上面、層中にて検出したものだが、遺構の残存状況、形状、出土遺物の有無、遺物の残存状況、時期のばらつきなど、時期特定に至らなかった遺構である。しかし縄文期から古代期間の遺構であると考えられる。

ＳＫ３６、３７、３８、３９（第９８図）

Ｔ２４、Ｕ２４グリッドに位置し、４基とも３m四方内に納まる。平面形は円形、楕円形を呈している。埋土は黒褐色で、焼土粒、炭化物の混入は確認できていない。ＳＫ３６、ＳＫ３９の底面は凹凸のある不整な形状をもつ。ＳＫ３８は４基中最大の平面形をもち、最大径約１．１６mを測る。

ＳＫ３７においては４２５、４２６の縄文時代後～晩期の深鉢形土器の底部が出土している。４２６は上げ底を呈する。ＳＫ３９においては４２７の須恵器の椀の口縁部片、４２８の磨石、４２９の砥石が出土している。４２７は回転ナデ調整が施されている。４２９は裏面の両端に棒状のものを研磨したような使用痕を残している。

ＳＫ４４（第９９図）

Ｐ２０グリッドに位置する。南側の一部は調査区外へと伸びる。平面形は長楕円形で、長軸約２００㎝、短軸約５２㎝、検出面からの深さは約１８㎝を測る。溝状遺構ともいえる。長軸はＮ－２°－Ｅと、ほぼ北を向いている。埋土の下層は炭化物を少量含んでいる。埋土３、４層は長軸がやや西にふれている古い段階の埋土で、後にほぼ南北に伸びる溝を再度掘り込み、埋土２層が堆積している。

ＳＫ４６（第９９図）

Ｔ２２グリッドに位置する。平面形は不整な楕円形で、最大径は約１９６㎝、検出面からの深さは約５２㎝を測る。埋土は黒褐色土で３層に分けられ、埋土１層において焼土と思われるオレンジの粒子が少量混じる。貯蔵穴等の用途が考えられるが、判断には至っていない。轟系の遺物が確認されているが、流れ込みによるものと思われる。

４３０、４３１は同一個体と考えられる轟式の土器で、４３０は粘土貼付による隆起線文を口縁部と垂直方向と平行方向に、４３１は口縁と垂直方向のみに施している。４３２は刺突文を施している胴部片である。４３３は安山岩製の打製石斧である。

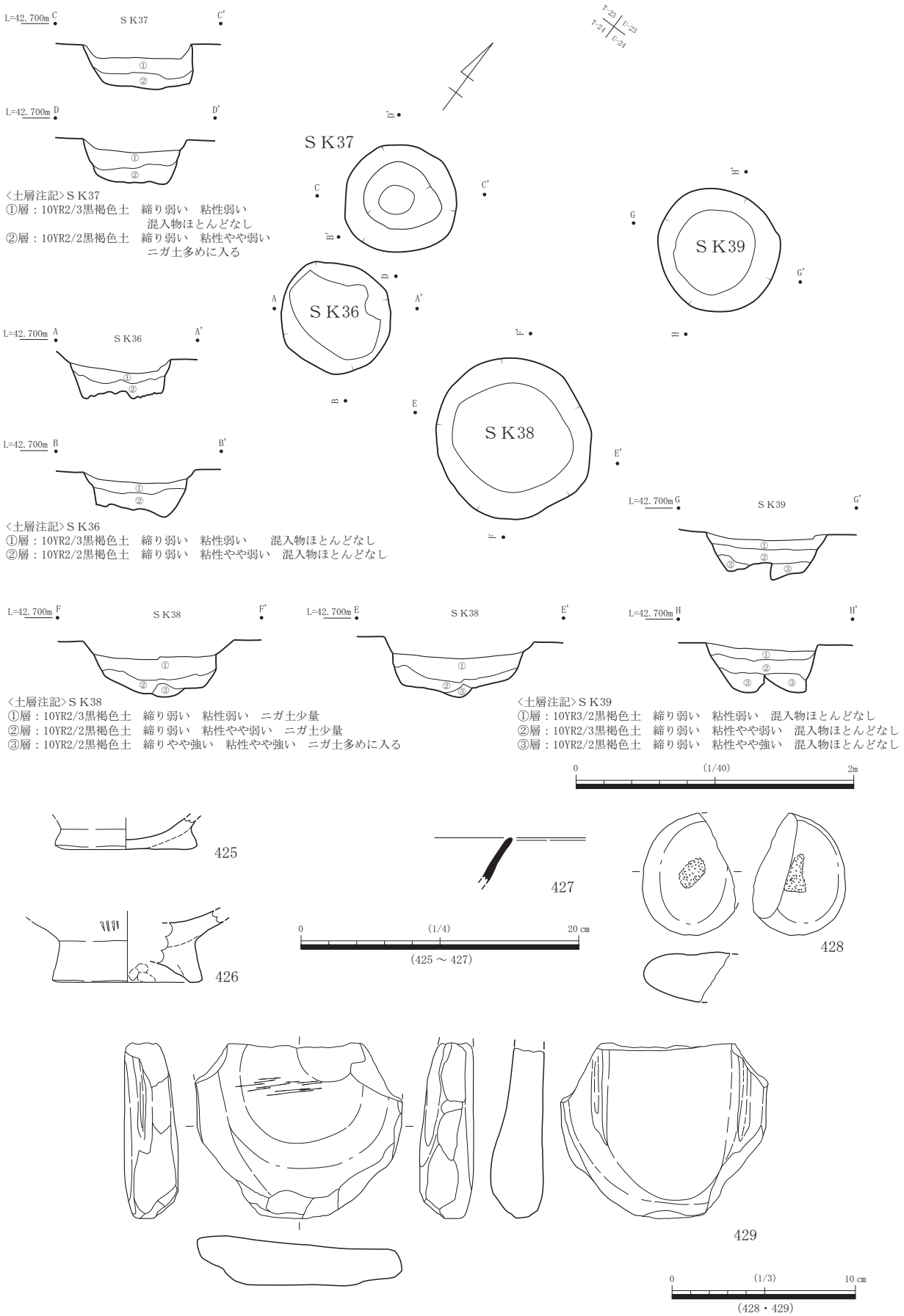
ＳＫ５０（第１００図）

Ｑ１７グリッドに位置する遺構である。遺構の上層の一部は後世の溝（ＳＸ１）により壊されている。平面形は不整な楕円形で、最大径約８６㎝、検出面からの深さは約３６㎝を測る。埋土１層において少量の炭化物が確認されている。

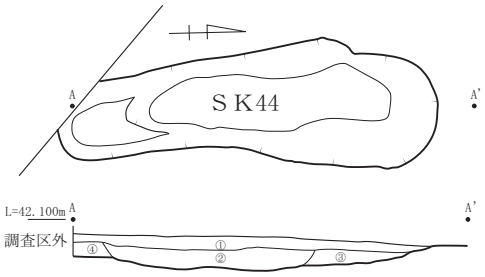
ＳＫ５１（第９９図）

Ｐ１８グリッドに位置する遺構である。北側の一部を弥生期の遺構（ＳＩ８０）に壊されている。平面形は楕円形を呈すると想定でき、最大径は約８０㎝、検出面からの深さは約３４㎝を測る。埋土は暗褐色土で２層に分けることができ、遺物は埋土１層においてのみ、検出面に近いレベルで確認されている。

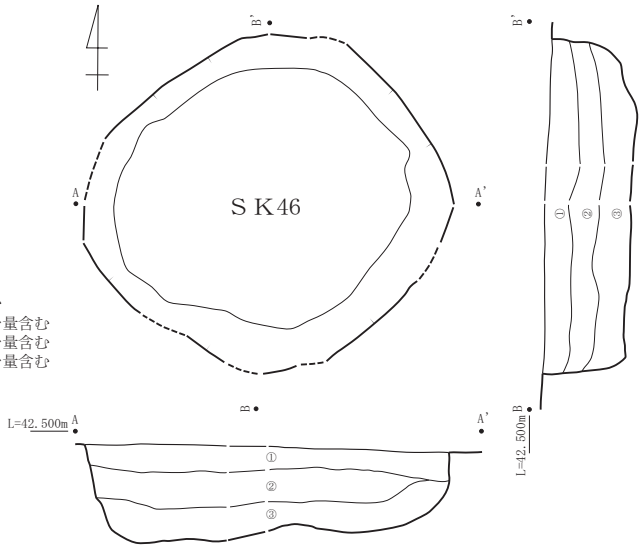
４３５は縄文晩期の浅鉢形土器で、全体の約1／3の残存であった。体部内面はミガキ、外面は横方向の条痕後、ミガキを施している。復元口径は約３２．２㎝を測る。４３６は主面側に被熱が認められる磨・敲石である。



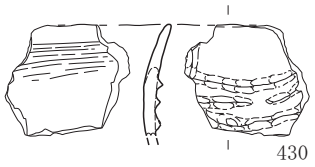
第 98 図　　ＳＫ36・37・38・39 遺構・出土遺物実測図



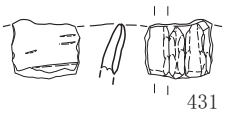
〈土層注記〉ＳＫ44
①層：10YR3/2黒褐色　締りやや弱い　粘性やや弱い　焼土少量含む
②層：10YR2/3黒褐色　締りやや強い　粘性やや強い　ニガ炭化物少量含む
③層：10YR3/2黒褐色　締りやや弱い　粘性やや弱い　ニガ炭化物少量含む
④層：10YR3/2黒褐色　締りやや弱い　粘性やや弱い　ニガ炭化物少量含む



〈土層注記〉ＳＫ46
①層：10YR2/3黒褐色土　締り弱い　粘性やや弱い　オレンジの砂つぶが少量混じる
②層：10YR2/2黒褐色土　締り弱い　粘性やや弱い　混入物ほとんどなし
③層：10YR2/2黒褐色土　締り弱い　粘性やや強い　ニガ少量混じる

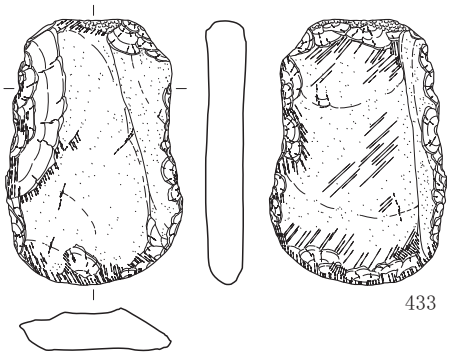


430

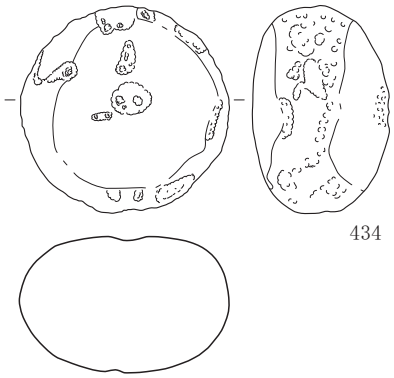


431

432

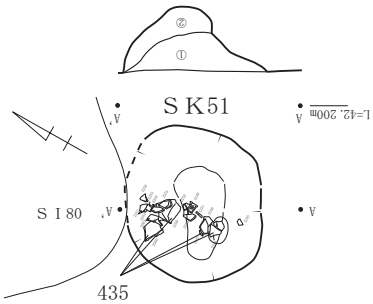


433



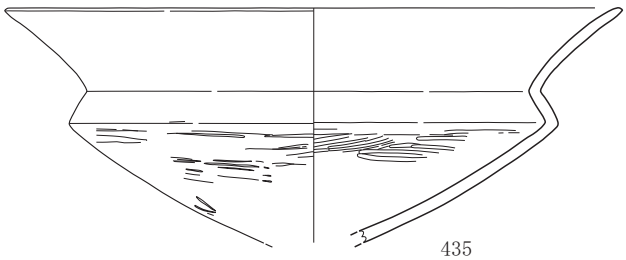
434

0　(1/3)　10 cm
(433・434・436)

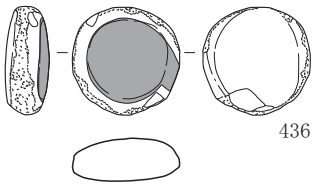


435

〈土層注記〉ＳＫ51
①層：10YR3/3暗褐色土　締り弱い　粘性弱い　焼土粒・炭化物少量混じる
②層：10YR3/4暗褐色土　締りやや強い　粘性やや弱い　焼土粒・少量混じる



435



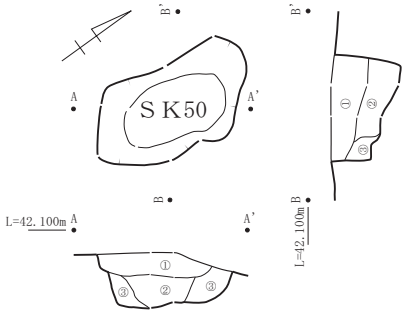
436

…被熱範囲

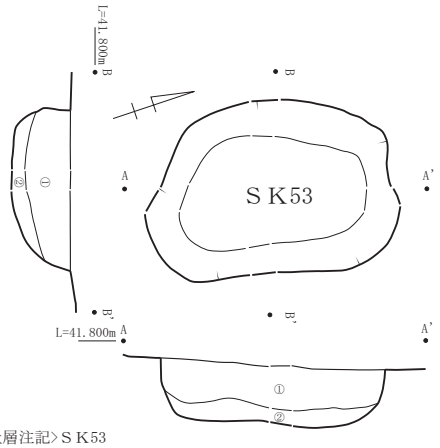
0　(1/40)　2m

0　(1/4)　20 cm
(430 ～ 432・435)

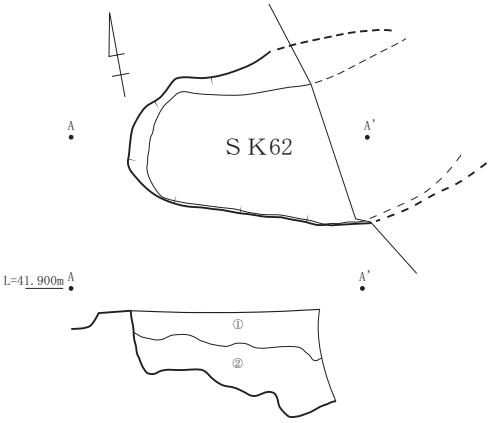
第 99 図　　ＳＫ44・46・51 遺構・出土遺物実測図



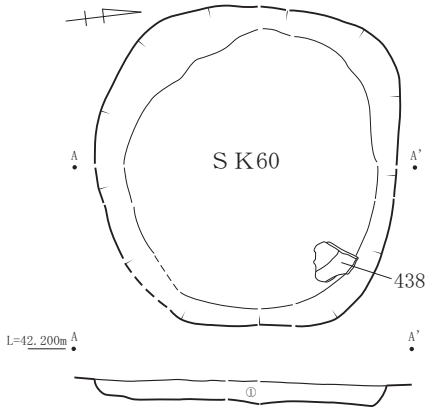
〈土層注記〉ＳＫ50
①層：10YR3/3暗褐色土　締りやや弱い　粘性やや弱い　炭化物少量含む
②層：10YR3/4暗褐色土　締りやや弱い　粘性やや弱い
③層：10YR2/3黒褐色土　締りやや弱い　粘性やや弱い



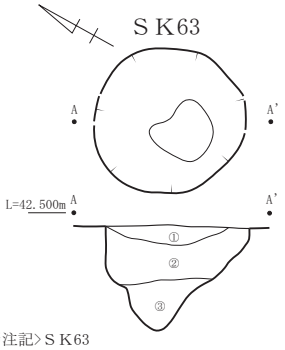
〈土層注記〉ＳＫ53
①層：10YR2/3黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ1～2mmの橙色粒少し含む
②層：10YR2/2黒褐色土　締り強い　粘性強い　φ1～2mmの橙色粒少し含む
φ1～5mmの炭化物少し含む



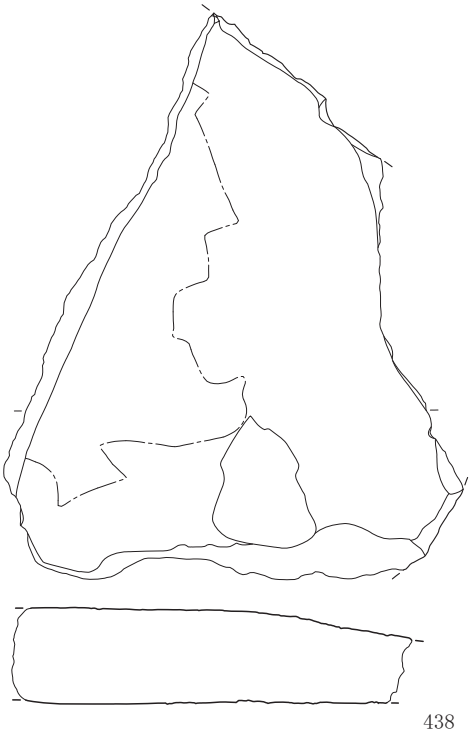
〈土層注記〉ＳＫ62
①層：10YR3/4暗褐色土　締り強い　粘性強い　φ1mmの焼土粒子を微量含む
アカホヤ集中　5層由来か　オレンジがかる
②層：10YR2/3黒褐色土　締り強い　粘性強い　ニガブロックが混じる　6層由来か



〈土層注記〉ＳＫ60
①層：10YR3/2暗褐色土　締りやや弱い　粘性やや弱い
炭化物少量含む



〈土層注記〉ＳＫ63
①層：10YR3/3暗褐色土　締りやや強い　粘性強い　混入物ほとんど無し
②層：7.5YR3/4暗褐色土　締り弱い　粘性やや弱い　混入物ほとんど無し
③層：10YR2/3暗褐色土　締りやや弱い　粘性やや強い　混入物ほとんど無し



0　(1/4)　20 cm
(437・438)

0　(1/40)　2m

第 100 図　　ＳＫ50・53・60・62・63 遺構・出土遺物実測図

ＳＫ５３（第１００図）

Ｔ１５グリッドに位置する。平面形は不整な楕円形で、最大径は約１２６㎝、検出面からの深さは約３２㎝を測る。断面は皿状を呈し、埋土は２層に分けることができる。両層とも焼土と思われる橙色粒を少し含み、下層においては炭化物も含んでいる。古代期の掘立柱建物跡（ＳＢ７）の柱列内に納まることから炉跡、貯蔵穴等の可能性もあるが判断には至らなかった。

ＳＫ６０（第１００図）

Ｑ１８、Ｒ１８グリッドに位置する遺構で、縄文後～晩期の竪穴建物跡（ＳＩ１１８）の東側一部を切っている。平面形は楕円形で、最大径は約１９０㎝、検出面からの深さは約１４㎝である。埋土は炭化物を少量含んだ暗褐色土の単層であり、底面の形状はほぼ平坦である。

遺構北西部において４３８の石皿が１点出土している。中央部分に非常に顕著な使用痕が認められる。

ＳＫ６２（第１００図）

Ｖ１８グリッドに位置する遺構である。調査区東側の壁面トレンチで一部確認できない箇所もあるが、壁面の土層確認の結果、平面形は長楕円形を呈し、調査区外へと伸びることが分かった。断面は凹凸のある不整な形状であり、東側にかけて落ち込んでいる。

ＳＫ６３（第１００図）

Ｔ２２グリッドに位置する遺構である。平面形はほぼ円形で、最大径は約７８㎝、検出面からの深さは約５６㎝を測る。断面は最下層が窪む不整な形状をしている。埋土は暗褐色土で３層に分けることができ、埋土１層内において４３７の轟式の土器片が出土している。隆起線文を施している点でもＳＫ４６のものと似ている。同じく流れ込みと考えられるが、同じグリッドに位置していることから周辺に同時期の遺構が存在していた可能性がある。

ＳＫ６４（第１０１図）

Ｑ１４・１５グリッドに位置する。平面形は卵形を呈し、最大径は約１８０㎝、検出面からの深さは１８㎝を測る。埋土は褐色土の単層で、約１㎜～２㎜程度の焼土と思われる橙色粒、炭化物をともに少量含んでいる。

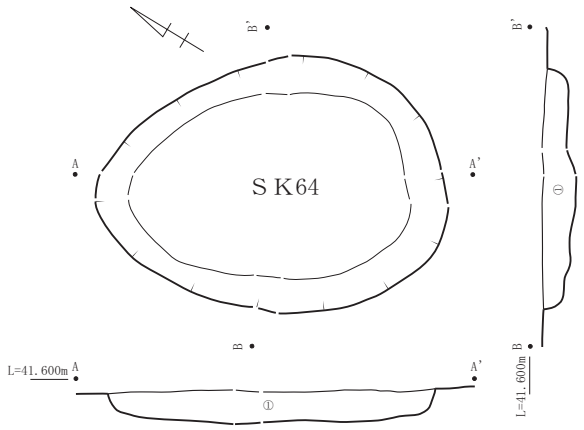
ＳＫ７０（第１０１図）

Ｕ２３、Ｖ２３グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、最大径は約１３０㎝、検出面からの深さは約２２㎝を測る。中央部やや窪んだ形状をしており、埋土は暗褐色土の単層である。約１㎜の焼土粒子をやや多く含み、炭化物を微量に含んでいる。

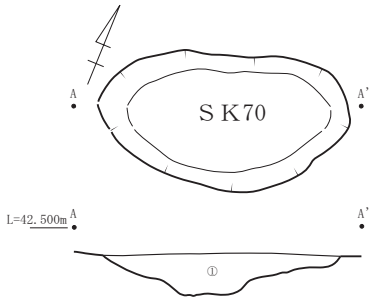
ＳＫ７１（第１０１図）

Ｌ１６グリッドに位置し、縄文晩期埋甕（ＳＫ５８）に西側の一部を壊され、東側は調査区外へと伸びる。平面形は楕円形で、最大径は約１０４㎝、検出面からの深さは約３２㎝を測る。埋土は２層に分けることができ、両層において焼土と思われる橙色粒を多く含んでいる。

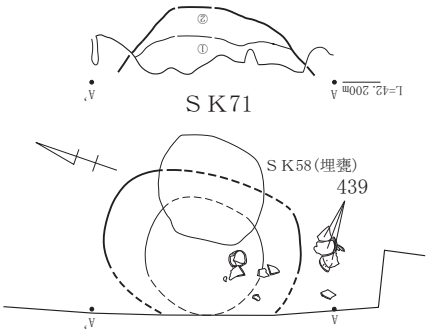
ＳＫ５８と同じ晩期の深鉢形土器が出土している。４３９は検出当初から散逸した状態で出土しており、埋土に包含されていたものではない。遺構そのものは縄文晩期以前のもので、ＳＫ５８との関連性は無いと



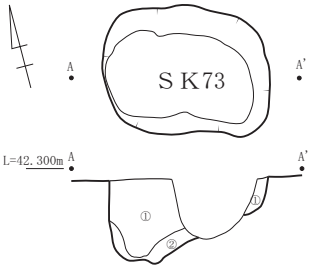
<土層注記>ＳＫ64
①層：10YR4/4褐色土　締り強い　粘性やや強い　φ1～2mm橙色粒少し含む
φ1～2mm炭化物少し含む



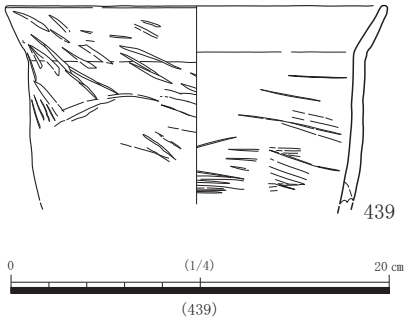
<土層注記>ＳＫ70
①層：10YR3/4暗褐色土　締り強い　粘性強い
φ1mmの焼土粒子をやや多く含む　炭化物を微量含む

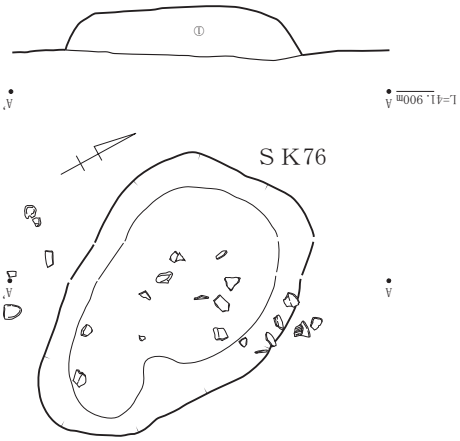


＜土層注記＞ＳＫ71
①層：7.5YR3/3暗褐色土　締り強い　粘性やや強い　φ1～2mmの硬化した橙色粒
多く含む ジャリジャリ感有
②層：10YR3/4暗褐色土　締り強い　粘性やや強い　φ1～2mmの橙色粒多く含む

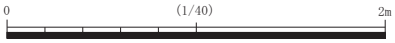


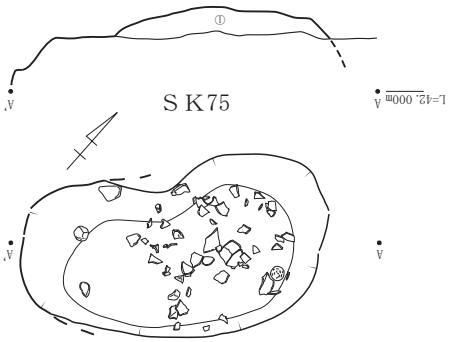
<土層注記>ＳＫ73
①層：10YR2/2黒褐色土　締り弱い　粘性やや強い　混入物ほとんどなし
②層：10YR3/3暗褐色土　締りやや弱い　粘性強い　小さなニガ・ローム
ブロック(1cm程度)が少量入る





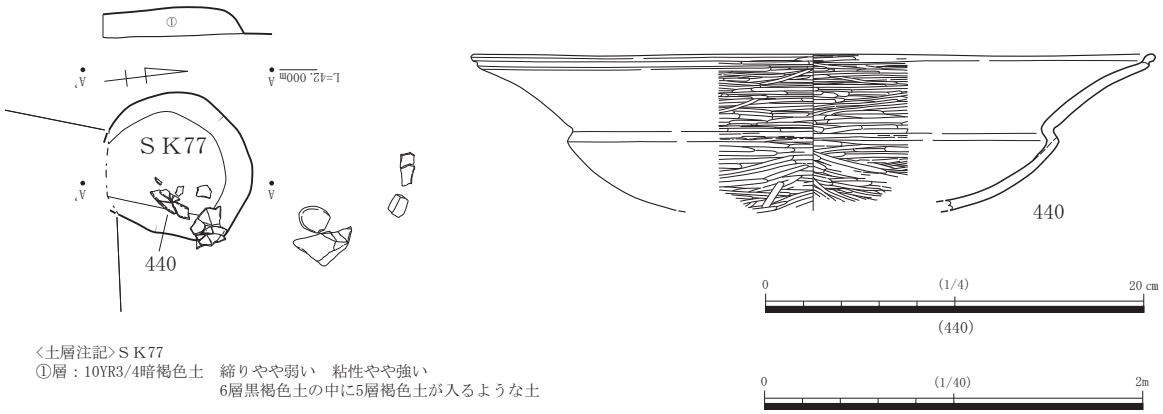
<土層注記>ＳＫ76
①層：10YR3/4暗褐色土　締りやや弱い　粘性やや強い　焼土・炭化物少量含む





<土層注記>ＳＫ75
①層：10YR3/4～4/4暗褐色土～褐色土　締りやや弱い　粘性やや強い　焼土・炭化物をやや多く含む
5層(アカホヤ)に似た土が埋土として入る

第 101 図　　ＳＫ64・70・71・73・75・76 遺構・出土遺物実測図



第 102 図　　ＳＫ77 遺構・出土遺物実測図

考えられる。遺物は口縁部から胴部にかけて１／３弱の残存で、復元口径は約２０．０㎝と小型の深鉢である。外面の上部に煤の付着が認められる。

ＳＫ７３（第１０１図）

Ｖ２３グリッド、弥生後期の遺構（ＳＩ１０９）内北隅に位置する。平面形は楕円形で最大径は約８８㎝、検出面からの深さは約４４㎝を測る。一部後世のピットに壊されおり、断面は西側にかけて落ち込む形状をしている。ＳＩ１０９床面下より検出されているが、関連性は無いとされているため、上層は削られていると思われる。弥生後期以前の遺構と考えられる。

ＳＫ７５（第１０１図）

Ｎ１６グリッドに位置する。 基本土層である５層掘削途中で遺物の出土の多さから検出された遺構で、上層のほとんどを掘り下げてしまっている。 平面形は楕円形で最大径は現況で約１５８㎝、検出面からの深さは約１４㎝を測る。 遺物は遺構中央やや北寄りに集中している。 埋土は単層で焼土、炭化物を多く含んでいる。

ＳＫ７６（第１０１図）

Ｍ１５グリッド、縄文後～晩期の遺構（ＳＩ１１６）内北西側に位置する。平面形は不整な楕円形で最大径は約１７０㎝、検出面からの深さは約２６㎝を測る。埋土は焼土、炭化物を少量含んだ暗褐色土である。ＳＩ１１６床面より検出されており、炉跡や貯蔵穴の可能性もあるが判断には至っていない。縄文後～晩期以前の遺構と考えられる。

ＳＫ７７（第１０２図）

Ｎ１７グリッドに位置する。ＳＫ７５と同様、基本土層である５層掘削途中で遺物の出土が確認されたことにより検出された遺構で上層は掘り下げてしまっている。平面形は不整な円形で最大径は約８８㎝、検出面からの深さは約１４㎝を測る。遺物は遺構東側に集中しているが、遺構範囲外において検出した遺物とも接合もできている。流れ込んでいく過程の遺物としてとらえるならば、遺構の形成時期との大きな差異は無いとも考えられる。遺物は縄文晩期の浅鉢形土器が出土している。

４４０は内外器面ともに横方向の丁寧なミガキを施している精製土器である。口縁部に１条の沈線をもつ。

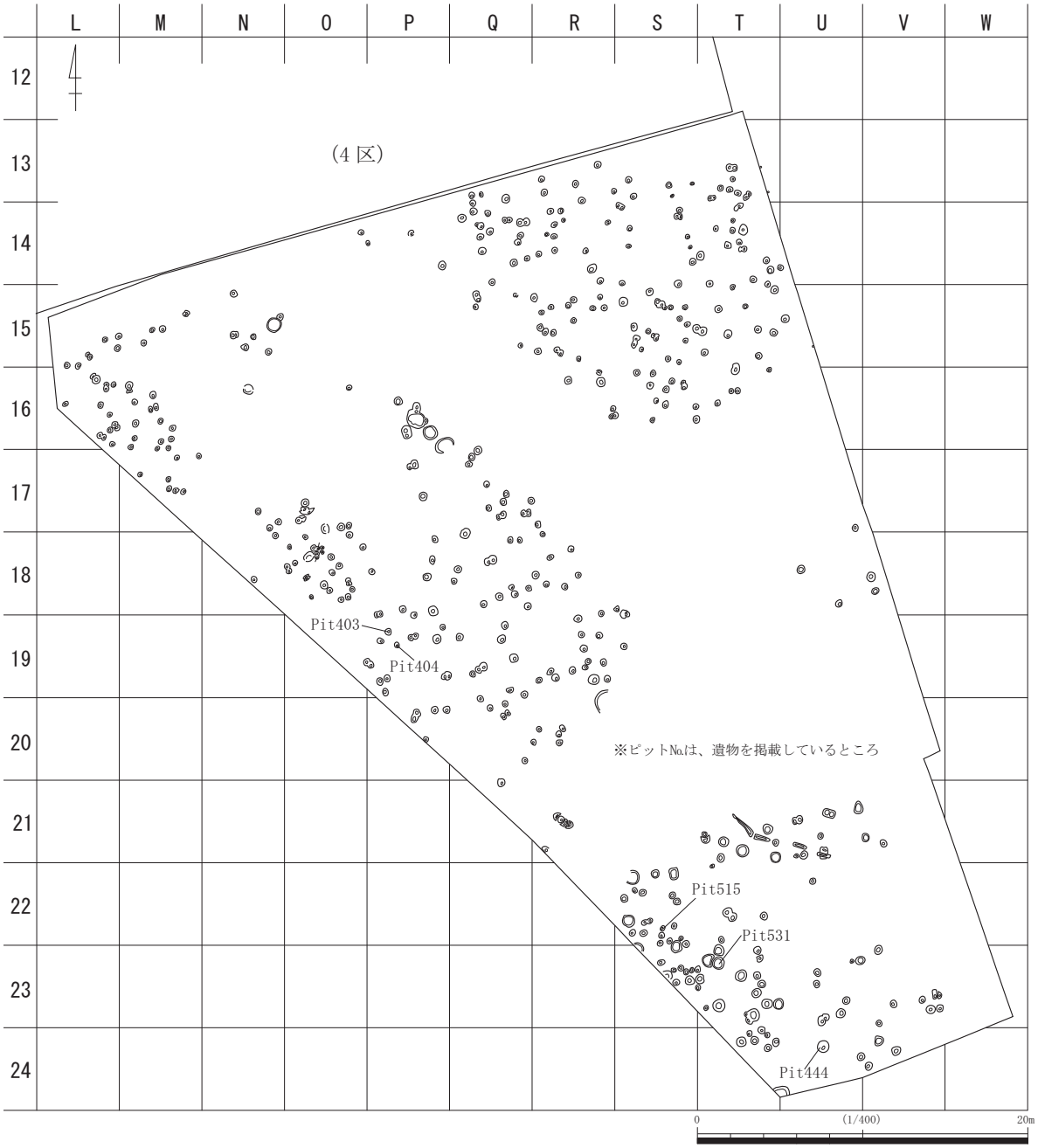
復元口径は約３５．５㎝を測る。

（８）ピット（小穴）の遺物（第１０４図）

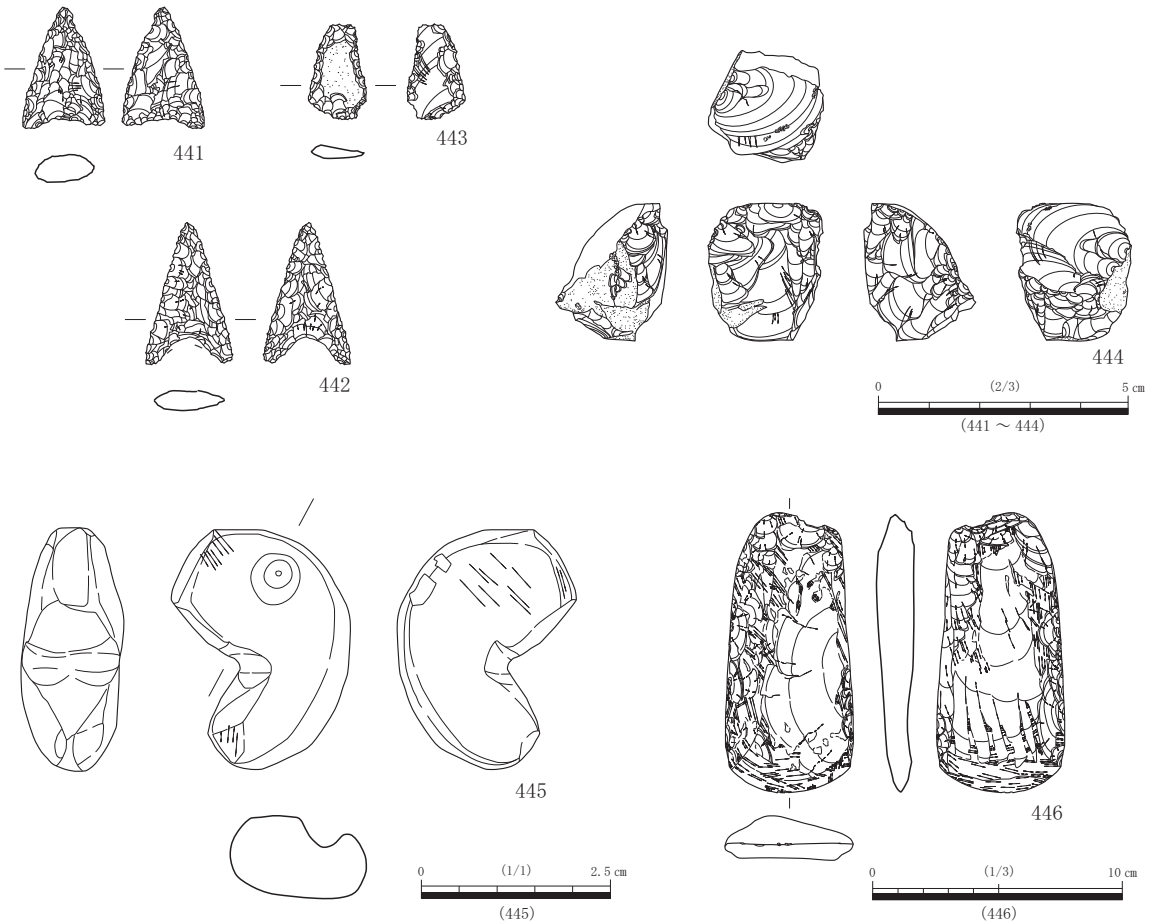
遺構時期詳細は不明だが、ピット内において出土した遺物である。ここでは石器のみ６点を図示している。土器は小片が多く、磨滅しており実測は不可のものばかりであった。

４４１は黒曜石製の石鏃である。調査区南端、Ｕ２４グリッド内に位置するＰｉｔ４４４において出土した。基部の抉りは浅い。長さ約２．４㎝、厚さ約０．５㎝を測る。

４４２はＴ２３グリッド内に位置するＰｉｔ５３１において出土したチャート製の石鏃である。基部の抉りは若干の欠損があるが、４４１と比較して深く、また長二等辺三角形の形状を呈する。長さ約２．８㎝、厚さ約０．４㎝を測る。



第 103 図　　Ｐｉｔ配置図



第 104 図　　Ｐｉｔ出土遺物実測図

４４３はＳ２２グリッドに位置するＰｉｔ５１５において出土した。石材は黒曜石で、表面には自然面を残し、縁辺部において調整痕を残している。裏面は表面と比較して調整は少ない。形状、その大きさからみて石鏃の未成品と考えられる。長さは約１．９㎝、厚さ約０．３㎝を測る。

４４４は黒曜石の石核である。Ｐ１９グリッドに位置するＰｉｔ４０３から出土した。径は約２．２㎝～２．７㎝、重量１３．３ｇを測る。一部に自然礫面を残す。

４４５は本報告書記載調査区において出土した唯一の勾玉である。記録が無いので詳細は不明だが、Ｓ２２・２３、Ｔ２３グリッドに位置していたと考えられるＰｉｔ２７１より出土した。形状加工、研磨が施されているが、穿孔が片面側のみで貫通せず途中で止まっているため未成品である。

４４６はＰ１９グリッドに位置する、Ｐｉｔ４０４より出土した頁岩製の磨製石斧である。刃部を顕著に磨いている。

（９）遺構外出土遺物（土器）（第１０５図～第１１２図）

第１０５図の４４７～４５５は縄文時代早期の土器である。４４７は押型による条痕を内外器面に施した深鉢形土器の口縁である。４４８、４４９は基本層５層から出土した塞ノ神式の深鉢形土器口縁部である。外器面に刺突文、４４９は口唇部に刻みを施している。４５０～４５４は外器面に貝殻による条痕文を施文している。４５４は口縁下に二枚貝の腹縁文（貝殻条痕）を施した円筒形の土器である。４５５は条痕文を残す平底の底部である。

第１０５図の４５６～第１０６図の４６６は轟式の土器である。４５６～４６０はＳＹ６、７、８の位置するグリッド、及びその周辺グリッドの基本層４層、５層からの出土が多い。４５６はＳＹ６で出土した轟Ａ式と似ており、胴部は斜行した条痕を施す。口縁部は横方向への条痕、口唇部に刻みを施している。４５９、４６０は内外器面ともに貝殻による調整のある尖底部である。４６１～４６４はＳＫ４６、６３から出土したものと似ており、またそれらの遺構が位置するグリッド、及び周辺グリッドの基本層４層、５層から出土している。貝殻による条痕、もしくはナデ調整ののち、何条かの粘土貼付による隆起線文を施したものである。４６４は縦方向への粘土貼付による隆起線文を施したものである。

４６６は内外器面ともに貝殻条痕が施され、胴部は刻目突帯を巡らせている。刻目の原体は貝の腹縁である。胴部上半は、連続する刺突文で、幾何学的に区画している。また、４６５のように縦に刻目突帯を巡らせているものも出土している。この２点も上記と同様ＳＫ４６、６３が検出されたグリッド、及びその周辺の基本層４層、５層から出土している。

第１０６図の４６７～４６９は縄文時代中期、船元式土器である。調査区北西のＮ１４・１５グリッドの基本層３層～５層において出土した。外器面と内器面の一部に縄文を施し、粘土を貼付け区画し、その上と口唇部に刺突文を施している。上部の粘土の貼付は波状文を呈し、刺突を施したのちにナデつけて下地の縄文を消している。全体に赤彩があったと考えられるが、残りが悪いため鮮明ではない。縄文時代中期に位置付けられる遺構は検出されていない。

第１０６図４７０は縄文時代後期の北久根山式の深鉢形土器の口縁である。調査区南隅Ｕ２４グリッド、基本層５層より出土した。口唇部に三角状の突起が貼付され、その上部にヘラ工具による刻み目が縦に施文されている。

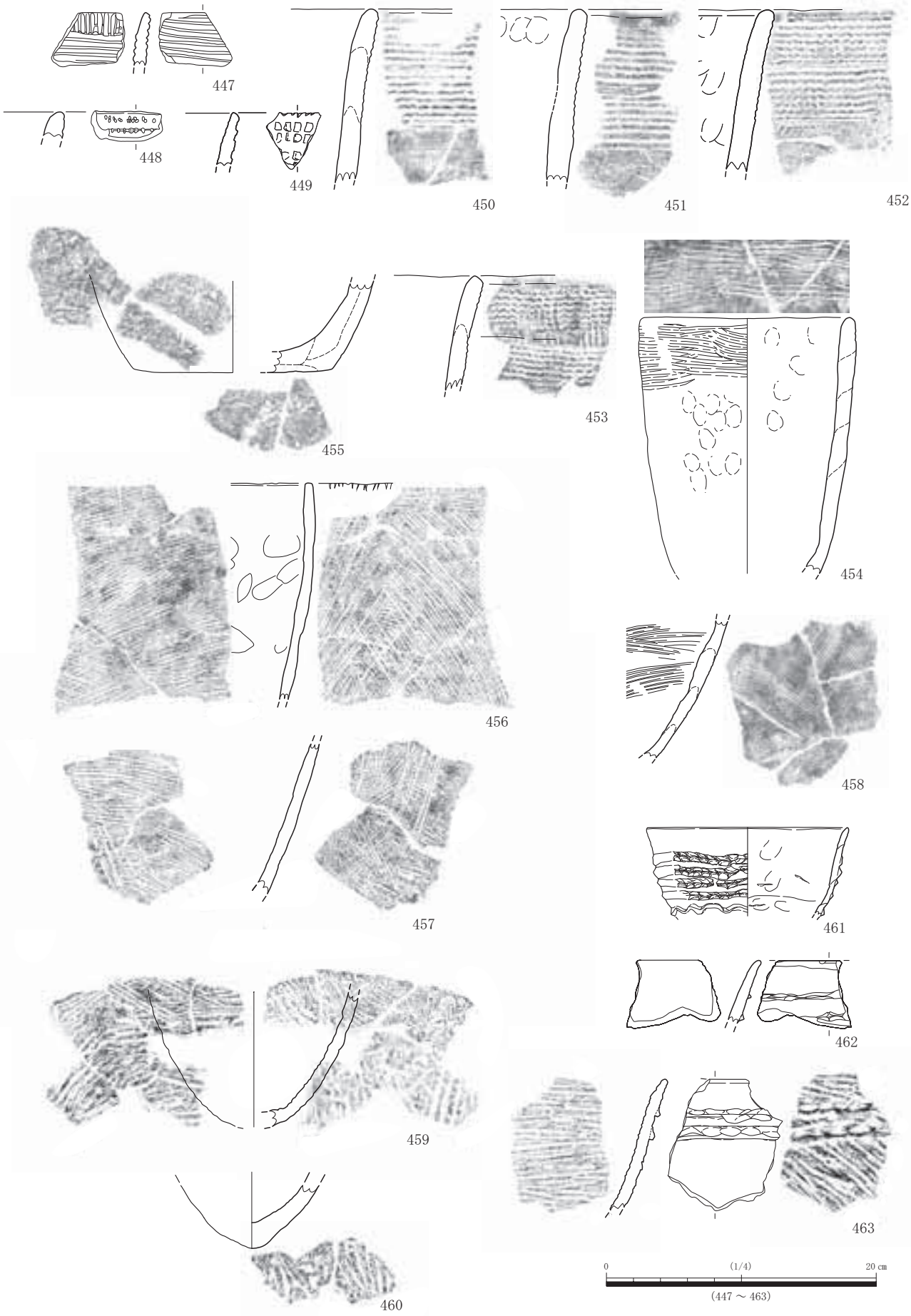
第１０６図の４７１も北久根山式併行期のものと考えられ、当初は土器口縁部の装飾とも考えたが、猪などの鼻を模した土製品で、他地区からの搬入品ではないかとの教示をうけている。

第１０６図の４７２～第１１０図の５１９は縄文晩期の深鉢形、浅鉢形土器である。そのほとんどが基本層４層、５層からの出土である。４７２は復元口径約４１．４㎝を測る大型のもので、口縁部に深厚の沈線が４条施されている。４７２、４７３は天城式の系統を踏む形式のものであると考えられる。

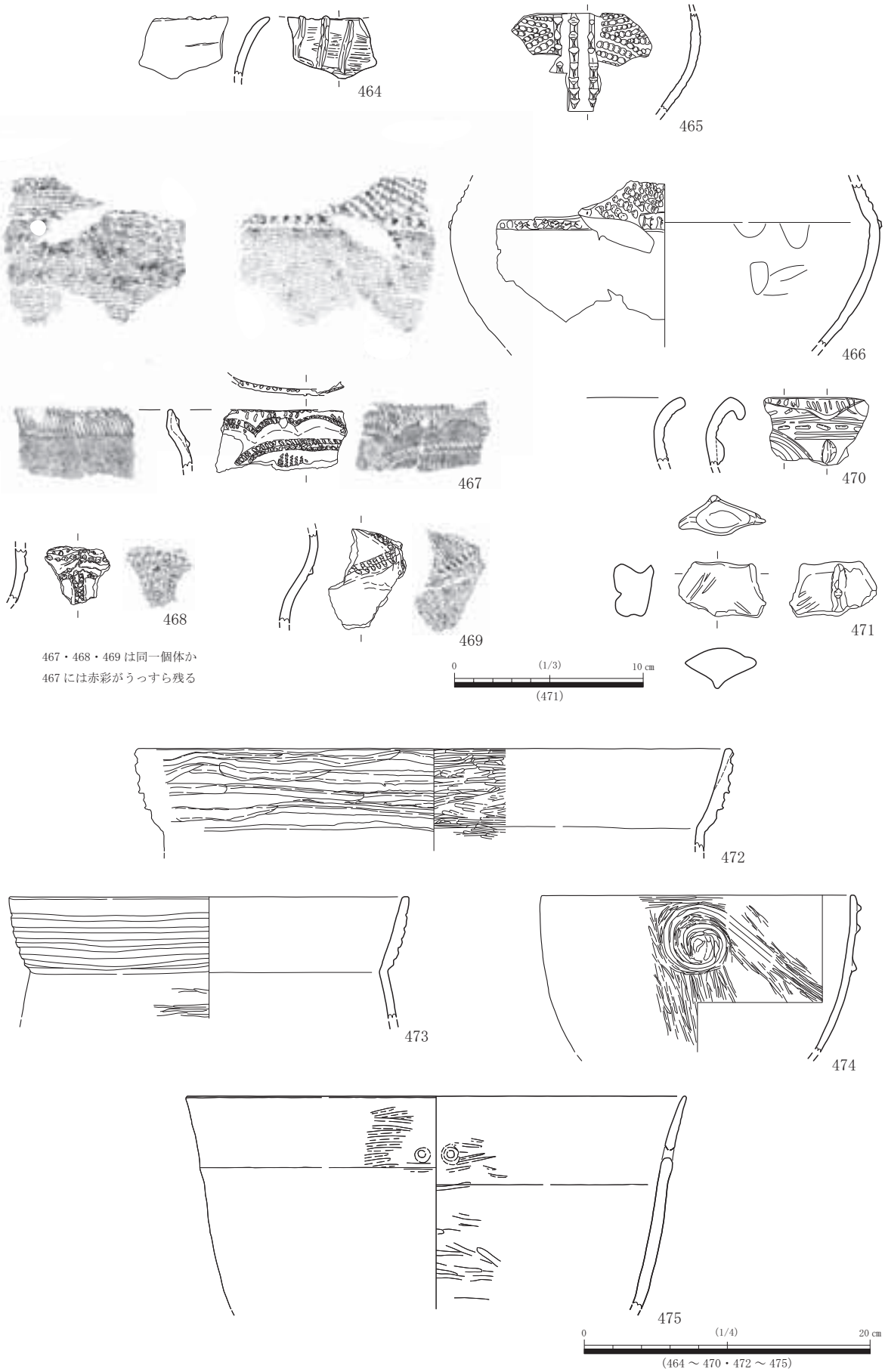
４７４以降は古閑式以降の系譜をもつ形式と考えられる。４７４は内外器面ともに精緻なミガキを施されており、粘土貼付による渦巻文（蕨手文）が施文されている。４７５は両側より穿孔痕を残している。４７６は外面からの穿孔痕が残るが貫通はしていない口縁片である。

４８６は広い口縁帯をもつ。４８７はさらに広い口縁帯をもち、復元口径は約４９．８㎝を測る。内器面の胴部に若干のミガキ痕が残る。４８８は耳状把手をもつ。また把手には穿孔も施されている。口縁はナデ調整後、ヘラ描き文が施され、口縁頭頂部周辺は山型に施文されている。波状口縁頭頂部は凹点文も施されている。４８９も復元口径約３８．３㎝、胴部最大径４５．８㎝を測る大きい深鉢形土器である。全体的に条痕後のナデ調整だが、口縁外面は凹凸の残る強いナデ調整が施されている。４８６～４８９の大型の土器は、調査区北西端のＬ１６、Ｍ１５・１６、Ｎ１６グリッドという狭い範囲において出土している。

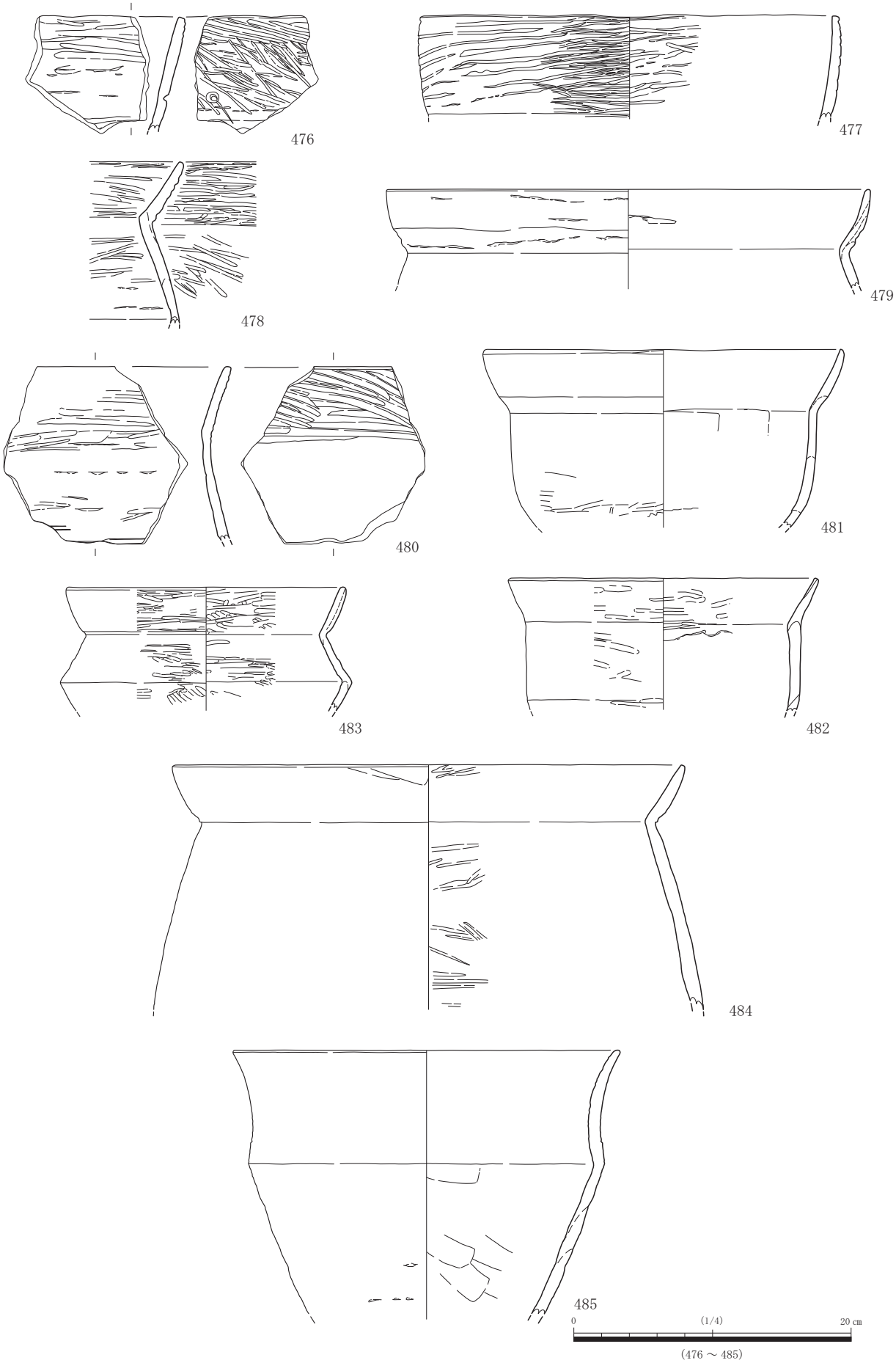
４９０は沈線を施した口縁下に突起を貼付している。４９１は口唇部にリボン状の突起をもつ。



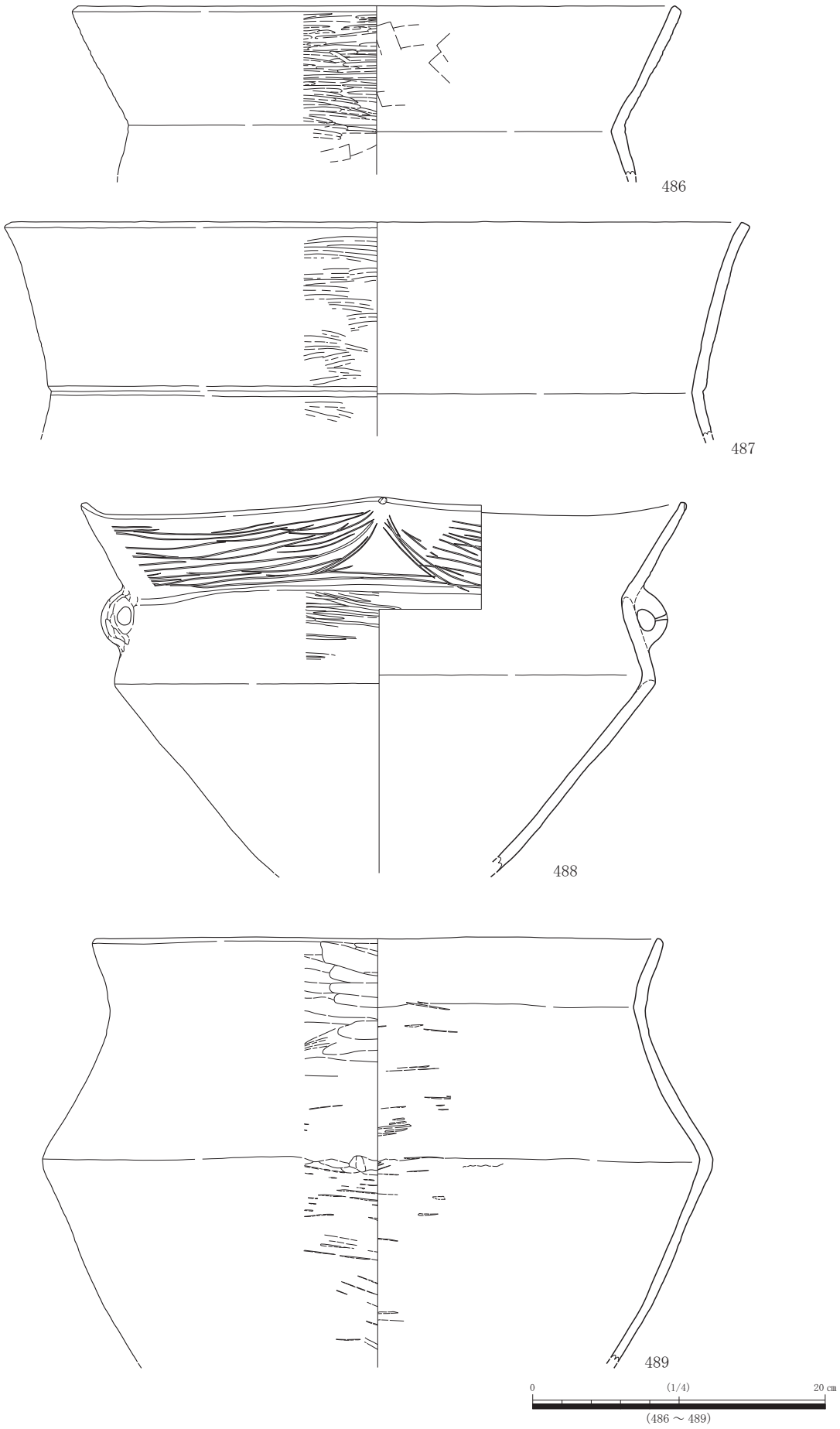
第 105 図　　遺構外出土遺物実測図 1



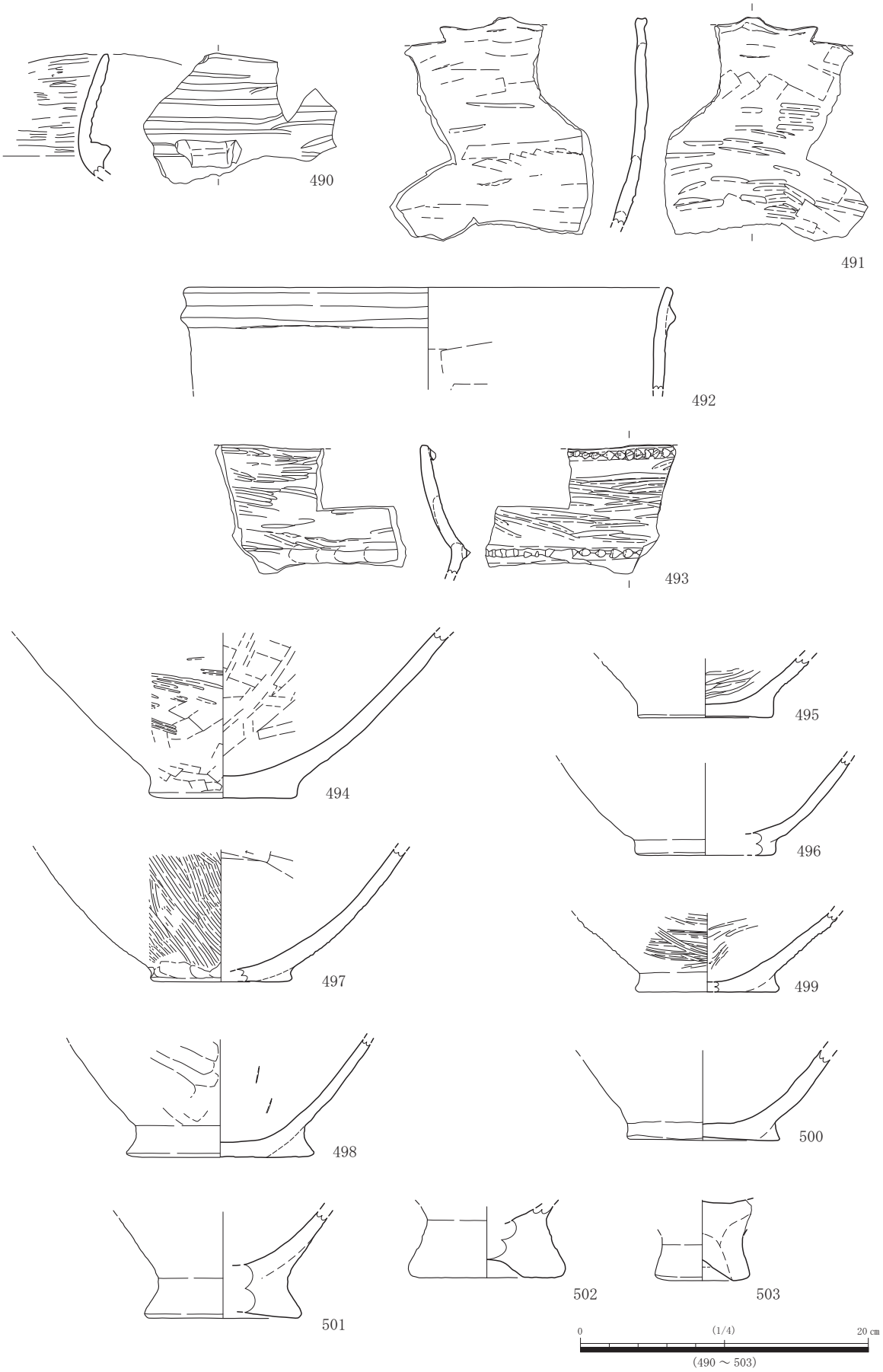
第 106 図　　遺構外出土遺物実測図 2



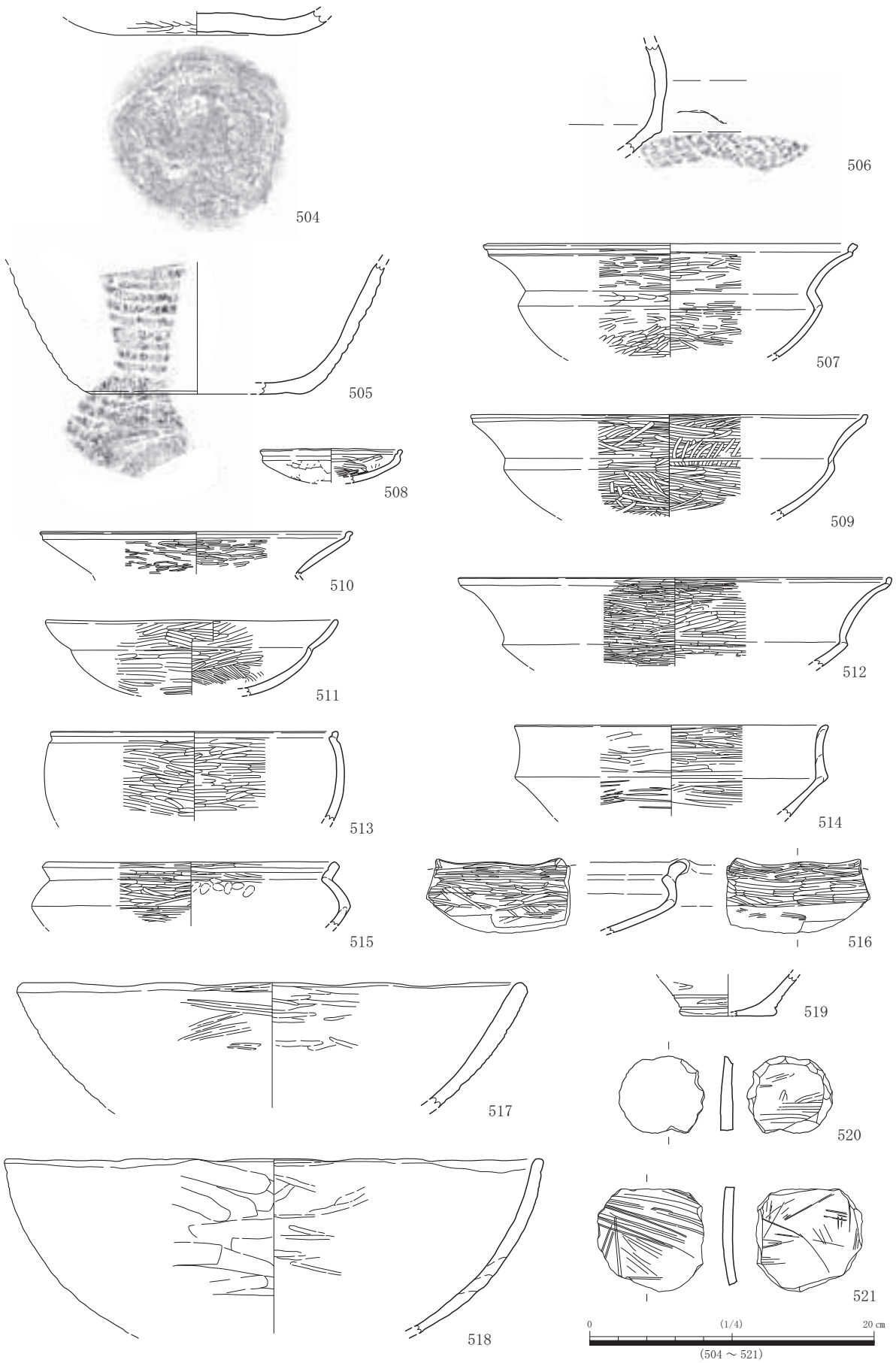
第 107 図　　遺構外出土遺物実測図 3



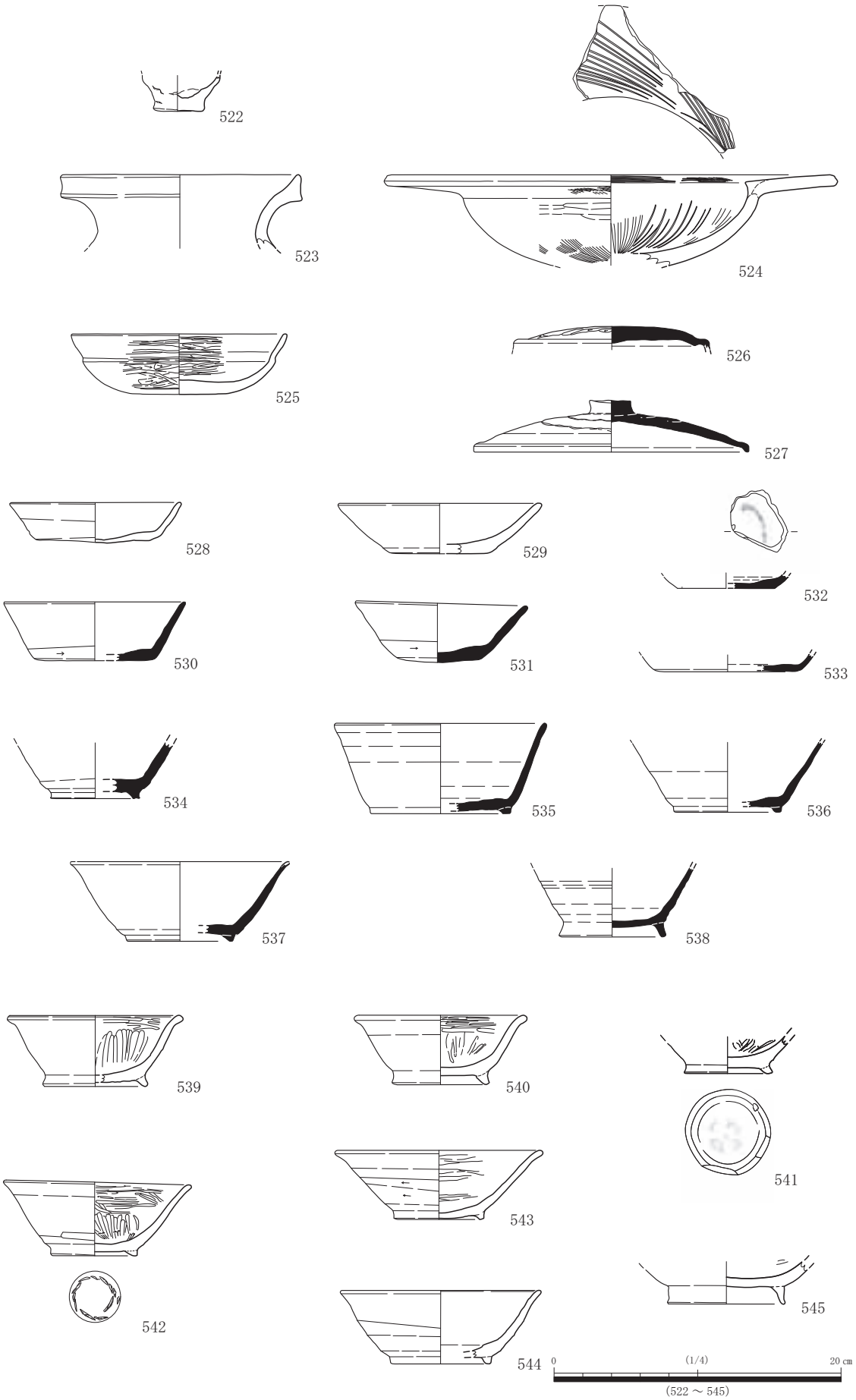
第 108 図　　遺構外出土遺物実測図 4



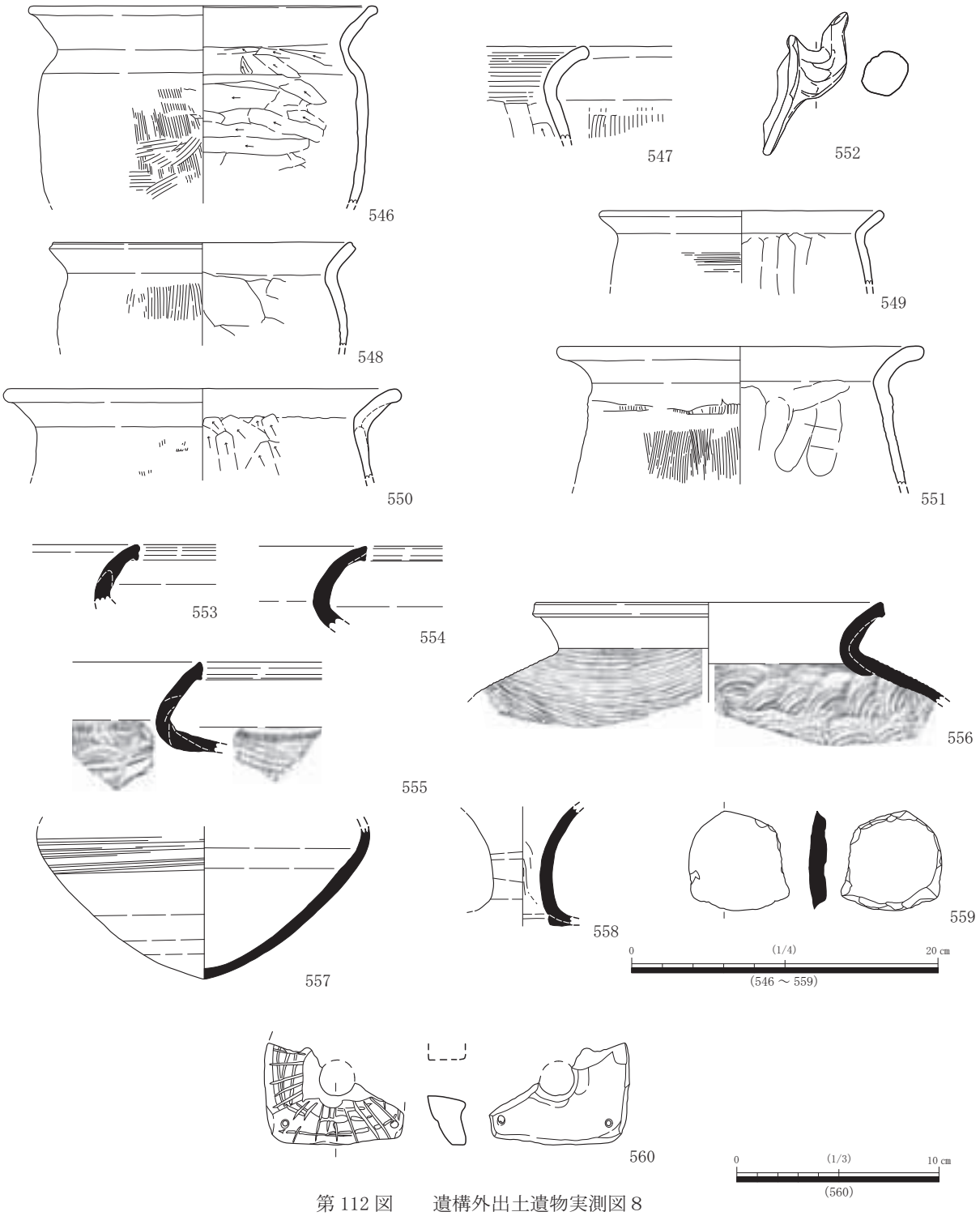
第 109 図　　遺構外出土遺物実測図 5



第 110 図　　遺構外出土遺物実測図 6



第 111 図　　遺構外出土遺物実測図 7



第 112 図　　遺構外出土遺物実測図８

４９２は粘土貼付による突帯を口縁にもつ。４９３は外器面に条痕、内器面にミガキ調整を施した口縁部片で、口縁部と屈曲部に刻目突帯をもつ。

４９４～５０５は底部である。４９４は外器面に二枚貝の腹縁文が残る。４９７は貝殻条痕が施されている。５０１～５０３は非常に分厚く、５０２、５０３に関しては上げ底を呈する。５０４は外底面の中心寄りに籠の中心のような組織痕跡を残す。５０５は底部から胴部にかけて組織痕跡が強くなっている。

５０６～５１９は浅鉢形土器である。５０６は残存状況から推察して、底部付近に組織痕が施されている

浅鉢形土器と考えられる。他の胴部から口縁にかけて屈曲部をもつもののほとんどが内外器面にミガキ調整が施されている。５０８は塔平遺跡において出土した縄文期浅鉢形土器で最少のものである。復元口径は約９．８㎝、残存高約２．４㎝を測る。５１４は口縁外面において赤色顔料のようなものの痕跡が残る。赤彩かどうかは不明だが、内器面との黒色と意図的に対比させた可能性がある。５１６はリボン状の突起を貼付している。

これらの浅鉢形土器のほとんどは調査区北西部のＬ～Ｒの１４～１９グリッド内に納まる。これは本調査区において検出した縄文後～晩期の竪穴建物跡の７割以上の位置と重なる。これらは検出された竪穴建物跡と関連する遺物、または検出されたもの以外にも遺構があった可能性を示す資料といえる。第１１０図の５２０、５２１に示す打ち欠き土器も同様である。

第１１１図の５２２は深鉢形のミニチュア土器である。底部の作りは円盤状で丁寧だが、底部から上部にかけては粘土紐を巻きつけて伸ばしただけの粗雑な作りである。外面は接合面が螺旋状に確認できる。底径は約３．６㎝を測る。第１１１図の５２３、５２４は弥生時代後期の土器である。５２３の口縁部は強いナデ調整を施している。第１１１図の５２４は高坏の坏部片である。体部内面には放射状のヘラミガキが施されており、暗文と思われる。口縁部にも斜めのヘラミガキが施されており、同様に暗文と考えられる。出土したＯ１６グリッドには弥生後期に位置付ける竪穴建物跡が３軒検出されたグリッドであることから、それらの遺構に関連した遺物とも考えられる。弥生期における遺物は、遺構内によるものがほとんどであった。

第１１１図の５２５～第１１２図の５５９は古代期における遺物である。５２５は口縁を回転ナデののちミガキ調整、体部はヘラケズリののちミガキ調整を施している坏で、６～７世紀のものと思われる。

５２６、５２７は須恵器の蓋である。５２６のつまみは付かず、天井部は手持ちのヘラケズリを施す。５２７の天井部外面には作った際の粘土の積み上げ痕を残している。外器面は口縁周辺とつまみ貼付部のみ回転ナデを施している。

５２８、５２９は土師器の坏、５３０～５３３は須恵器の坏である。５３２の底部内面に墨書のような痕を残す。５３４～５３８は須恵器の椀である。回転ナデを施し、高台内は回転ヘラ切り離しのちナデ、高台は貼付のちにナデ調整を施している。５３４の体部外面は灰かぶりの状態で、焼成時は伏せて焼かれたものと思われる。高台内や畳付になどには付着していない。

５３９～５４５は黒色土器Ａ類の椀である。５４１の高台内中央には４弁花を模したような５つの円が墨書されている。５４２の高台内には高台を貼り付ける際に付いたと考えられる爪形状圧痕が残っているが、一周するあたりで高台側へと逸れている。

５４６～５５１は土師器の甕である。５５２は持ち手が扁平で華奢な土師器の把手である。

５５３～５５６は須恵器の甕の口縁部である。５５５は内面に当て具、外面に格子目のタタキ痕を残す。５５６は内面に同心円状の当て具痕、外面に平行タタキ痕を残す。 口縁側から胴部へ向けてタタキを行っている。

５５７は鉄鉢形の鉢の下半部分である。下半部分はヘラケズリを施している。５５８は長頸壷の頸部である。内外器面に降灰の痕跡が残るため、焼成時は正位置にて焼かれたものと思われる。荒尾所産と思われる。５５９は須恵器の甕を打ち欠き、再加工した円盤形土製品である。

古代期の遺物は、検出された同時期の遺構のほとんどが位置する調査区北側、南側において分かれるように出土している。また、北側で検出した竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑周辺の基本層３層、４層からの出土遺物がその７割近くを占めている。

第１１２図の５６０は建物の屋根を模した近世玩具の一部と考えられる。中央に位置する大きな穿孔部は棒状のものを用いて別具とつなぐためのものと考えられる。隅部の小孔は別具との固定、あるいは吊り下げ式の装飾のためのものと思われる。

（１０）遺構外出土遺物（石器）（第１１３図～第１２３図）

石器の大半は遺構外取り上げによるものが多く時期別に区分することが困難であったため、ここでは特徴のあるものを器種ごとに一括掲載している。

第１１３、１１４図の５６１～６３２は石鏃である。 全体的に二等辺三角形状を呈するものが多い。 基部の形状は、５６１～５７２に見る平基からやや凹基のもの、５９８～６２８に見るＵ字状のもの、 その中間にあるものと様々まである。 また、基部から先端部にかけての形状が鋭角から鈍角に、 またはその逆になるもの（６１０、６１２、６２５～６３２）など、大きさや形状にバリエーションがある。６０８は大まかな調整加工のみで、左右対称形をなさず、未完成品と考えられる。 ここに記した石鏃７２点の石材は、黒曜石製２９点（約４０％）、安山岩製２７点（約３８％）、チャート製１５点（約２１％）、頁岩製１点（約１％）である。

第１１５図の６３３、６３４は旧石器ととらえている石器である。６３３は安山岩を石材とした三稜尖頭器である。Ｒ１６グリッドの６層（暗褐色土層）中から出土している。長さ４．８４㎝、幅１．５５㎝、厚さ１．３㎝、重さ５．７ｇを測る。縦長の肉厚な剥片を素材とする。稜上からの調整痕が認められ、石器全体の断面がほぼ三角形を呈する。基部は細く加工されている。６３４も安山岩を石材とした石器である。Ｎ１５グリッドの５層（アカホヤ２次堆積層）中で出土している。長さ２．６４㎝、幅１．５５㎝、厚さ０．５４㎝、重さ１．９ｇを測る。横長の剥片を素材とし、剥片端部を刃部としている。腹面側から両側縁にブランティング調整が及んでいることが認められることから、ナイフ形石器として抽出した。先端部は欠損している。

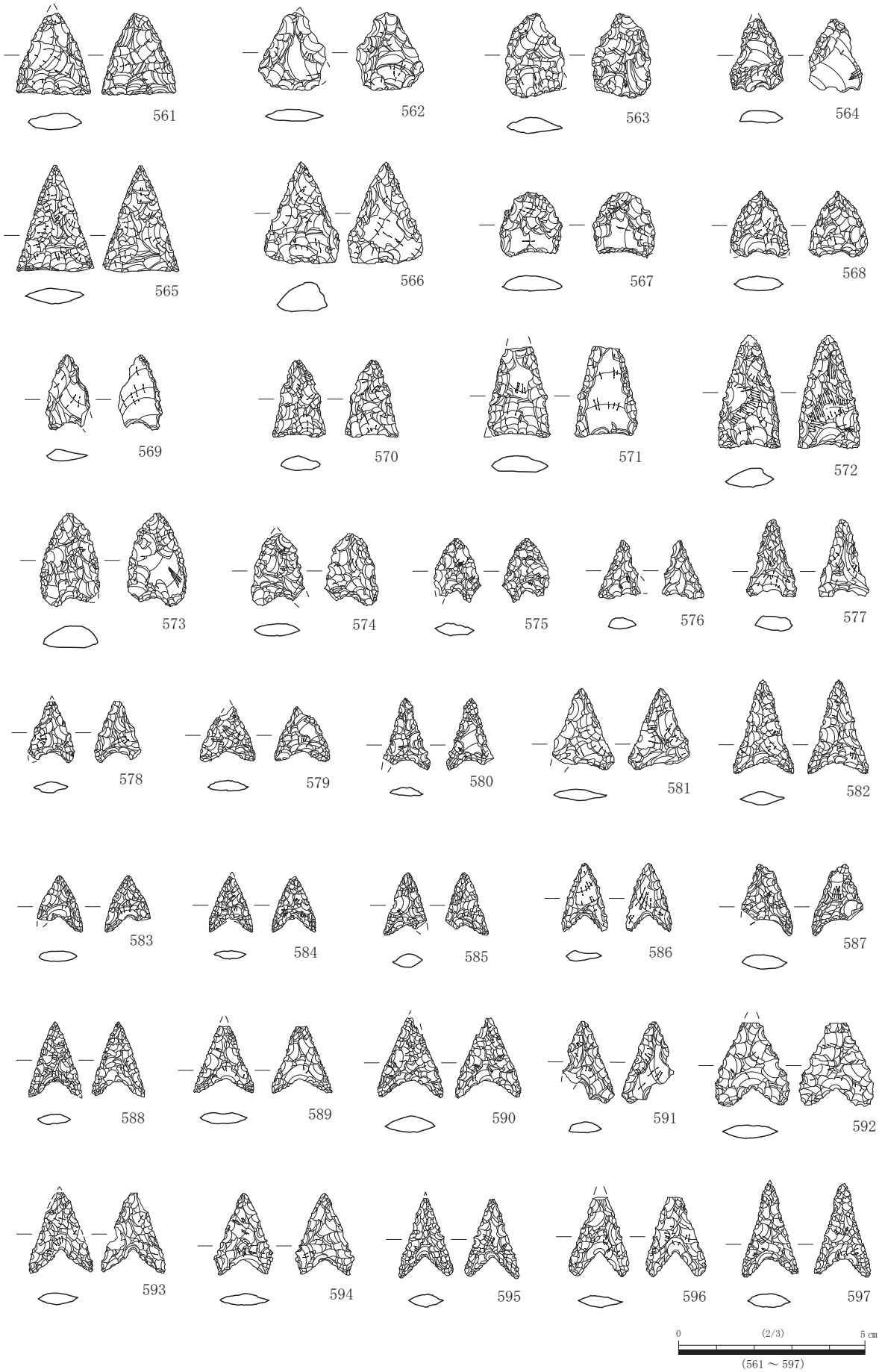
６３５～６４３は石錐と考えられる石器である。６３６、６３７、６３９、６４３は黒曜石製のもので、６３６は先端部を欠損している。６３５、６４２は安山岩製のもので、６４２は両端とも先端部を作り出していた可能性がある。６３８、６４０、６４１はチャート製のものである。６４４は石銛と考えられる。石材は珪質頁岩と考えられる。長さ約５．３㎝、幅約１．０㎝、厚さ約０．６㎝、重さ約３．１ｇを測る。６４５～６４７は異形石器である。全て黒曜石製である。６４５は欠損を認め、錐の可能性もある。６４６と６４７は先端部と考えられる部分が山型に調整されているが、６４７は返しに似る部分も作り出されている。６４８は磨・敲石である。Ｎ１５グリッド、基本層４層より出土している。他の磨・敲石と違い、石全面において擦痕を残し、左側面を除いて被熱した痕跡を多く残している。特に右側面の敲打痕周辺は著しく、黒く変色している。

第１１６図の６４９～６５４は石匙である。６４９は基部のみ調整加工を施しており、未製品と考えられる。６５１～６５４は横長の石匙であり、６５３は表面に自然面を残す。記した６点のうち黒曜石製は６４９のみで、残り５点は安山岩製である。

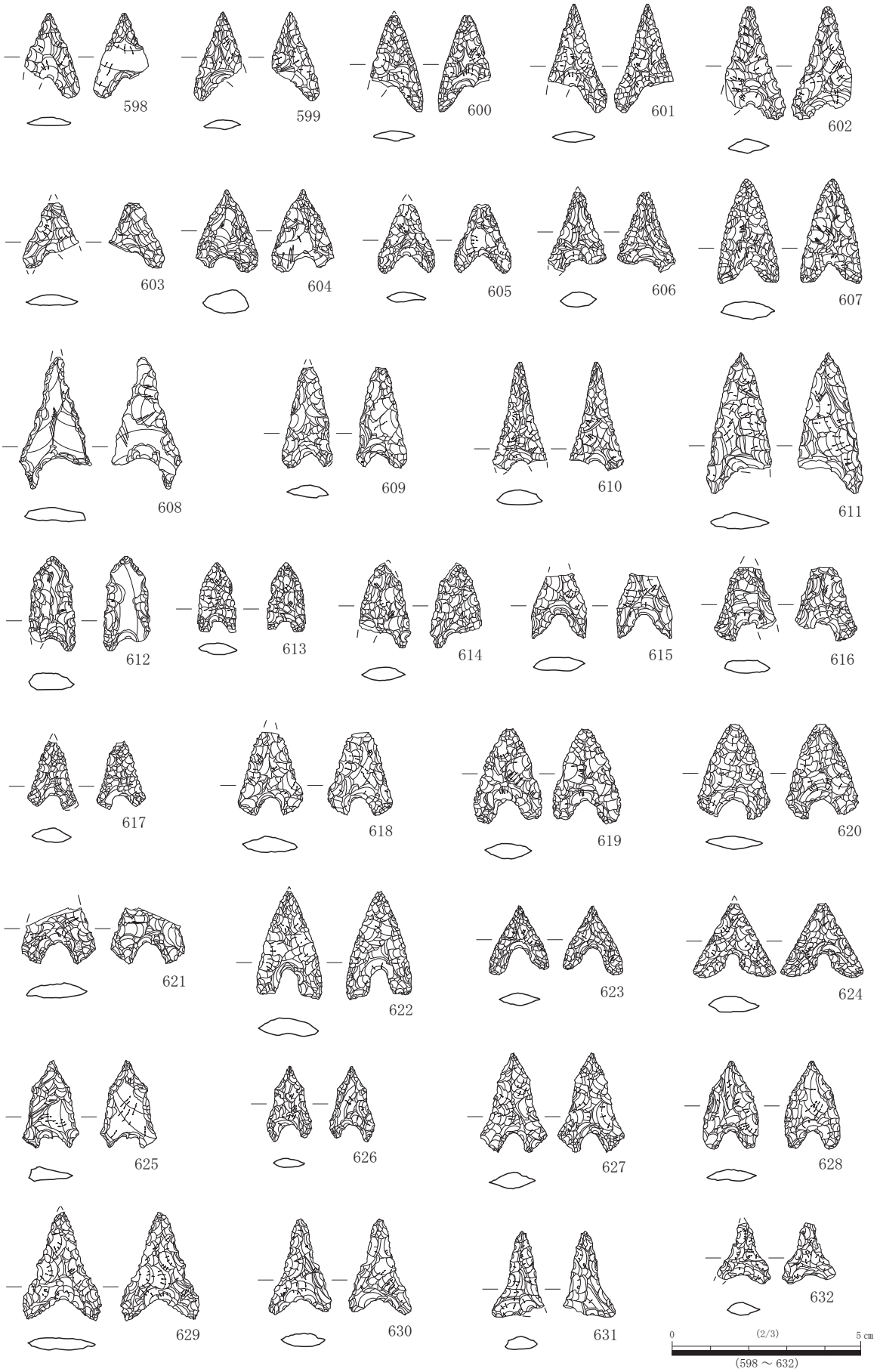
第１１７、１１８図の６５５～６７１は打製石斧である。６５９は、出土した打製石斧で最大のもので、長さ約２４．０㎝、幅約１１．４㎝、厚さ約３．６㎝、重さ約９６３．０ｇを測る。記した１７点の出土層位は基本層３層が４点、４層が７点、５層が６点である。石材は安山岩が８割を超える１４点で、６６４、６６８の２点が頁岩製、６６７の１点が黒雲母片岩である。出土数の多いＳ１５・１６、Ｔ１５・１６グリッドには縄文後～晩期の竪穴建物跡ＳＩ１１９を検出し、Ｒ１８グリッドは同時期のＳＩ１２１の想定プランが収まる箇所である。

第１１９図の６７２～６７７は円盤形石斧である。安山岩製が多いが、６７２は頁岩製と思われ、６７４は結晶片岩である。基本層４～６層の出土である。

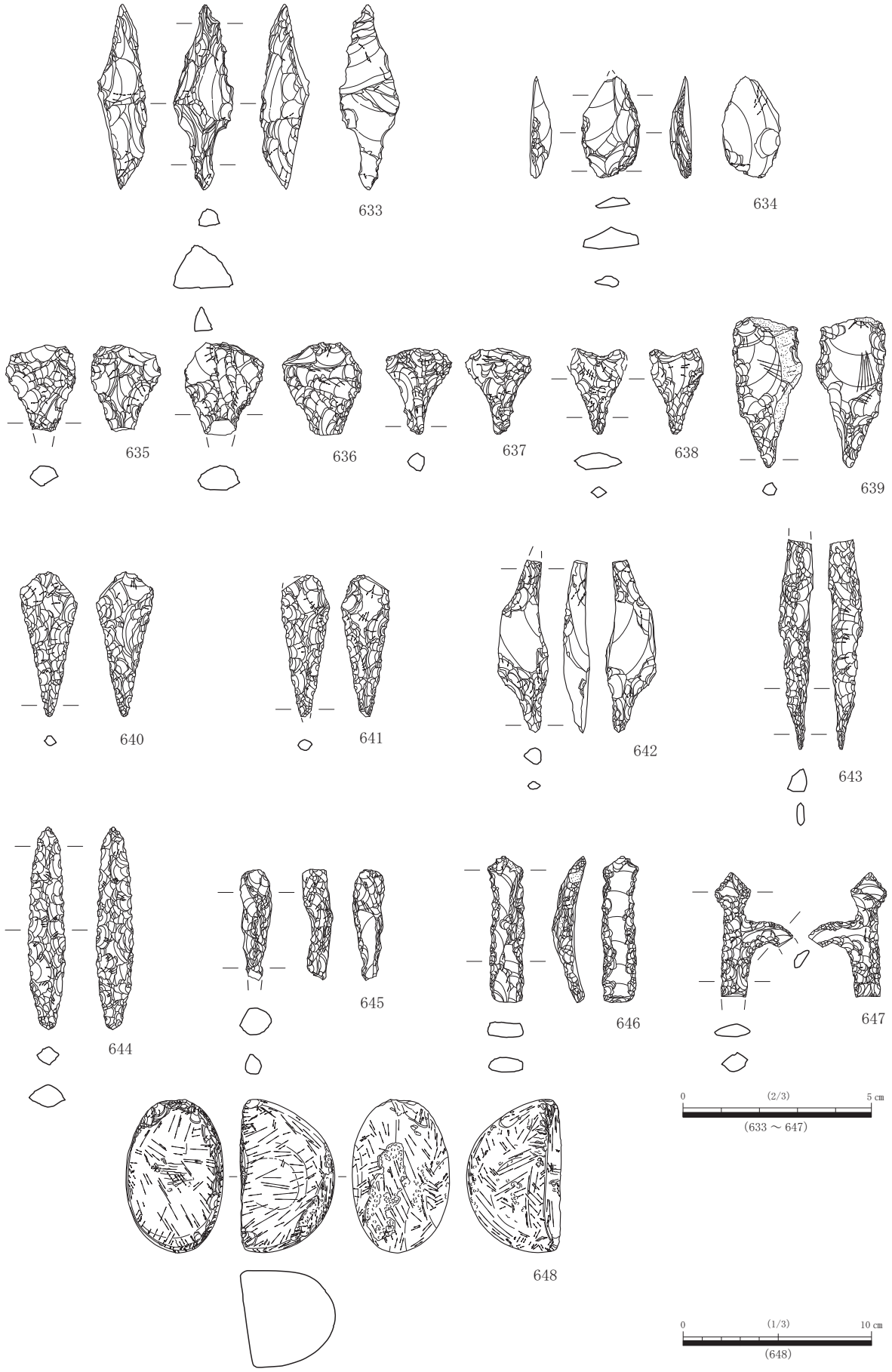
第１２０図の６７８～６８１は片側のみに調整、加工痕が認められるため、横刃の石製品、未製品と考えられる。６８２は緑色片岩の分銅形石器、６８３は側面抉部に使用痕を残す頁岩製の十字形石器である。６８４～６８７の４点は有溝砥石である。６８４は両面、６８５は３面において有溝を認める。６８７は敲打痕も残す。６８６を除いた３点はＰ１７、１８グリッドの４層からの出土である。



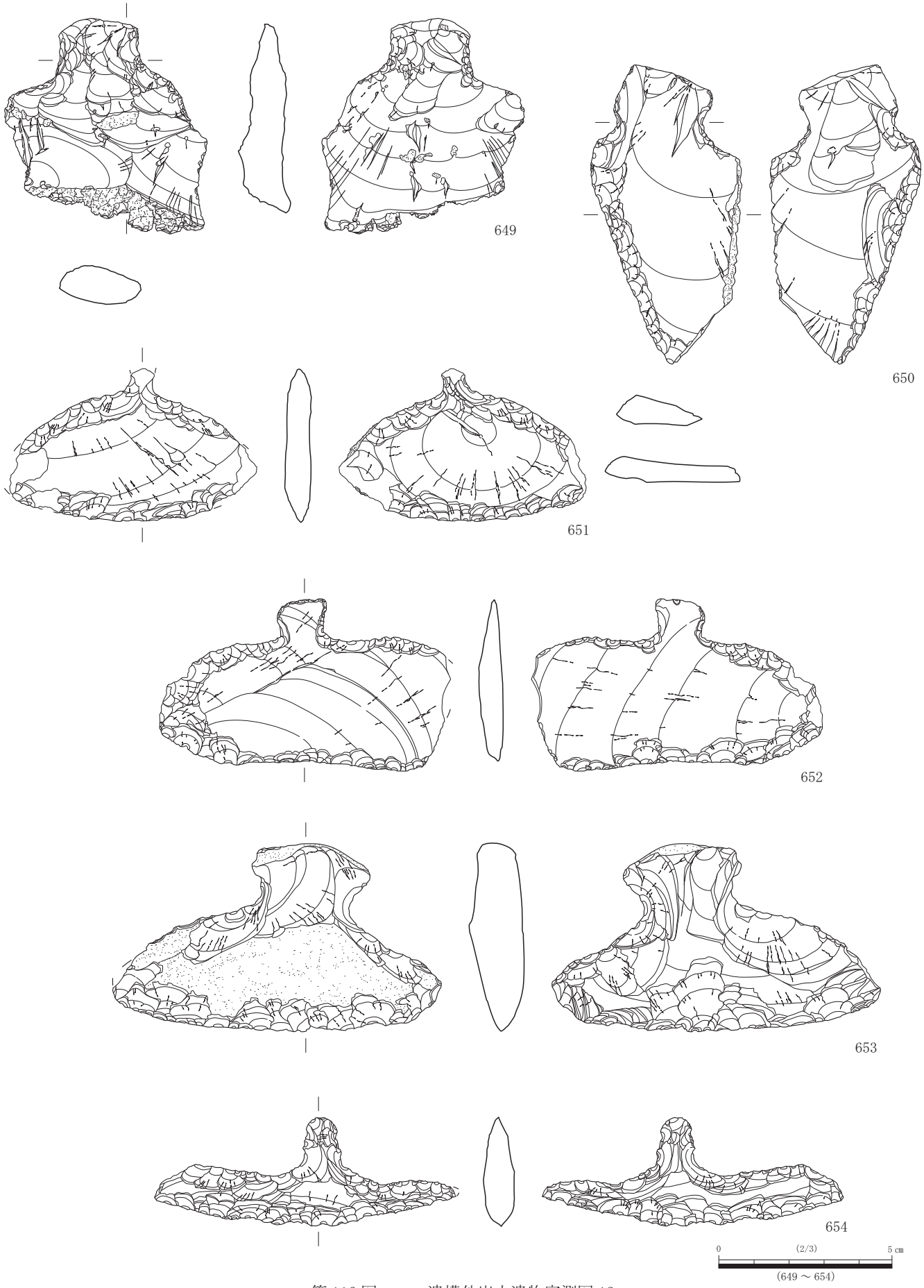
第 113 図　　遺構外出土遺物実測図 9



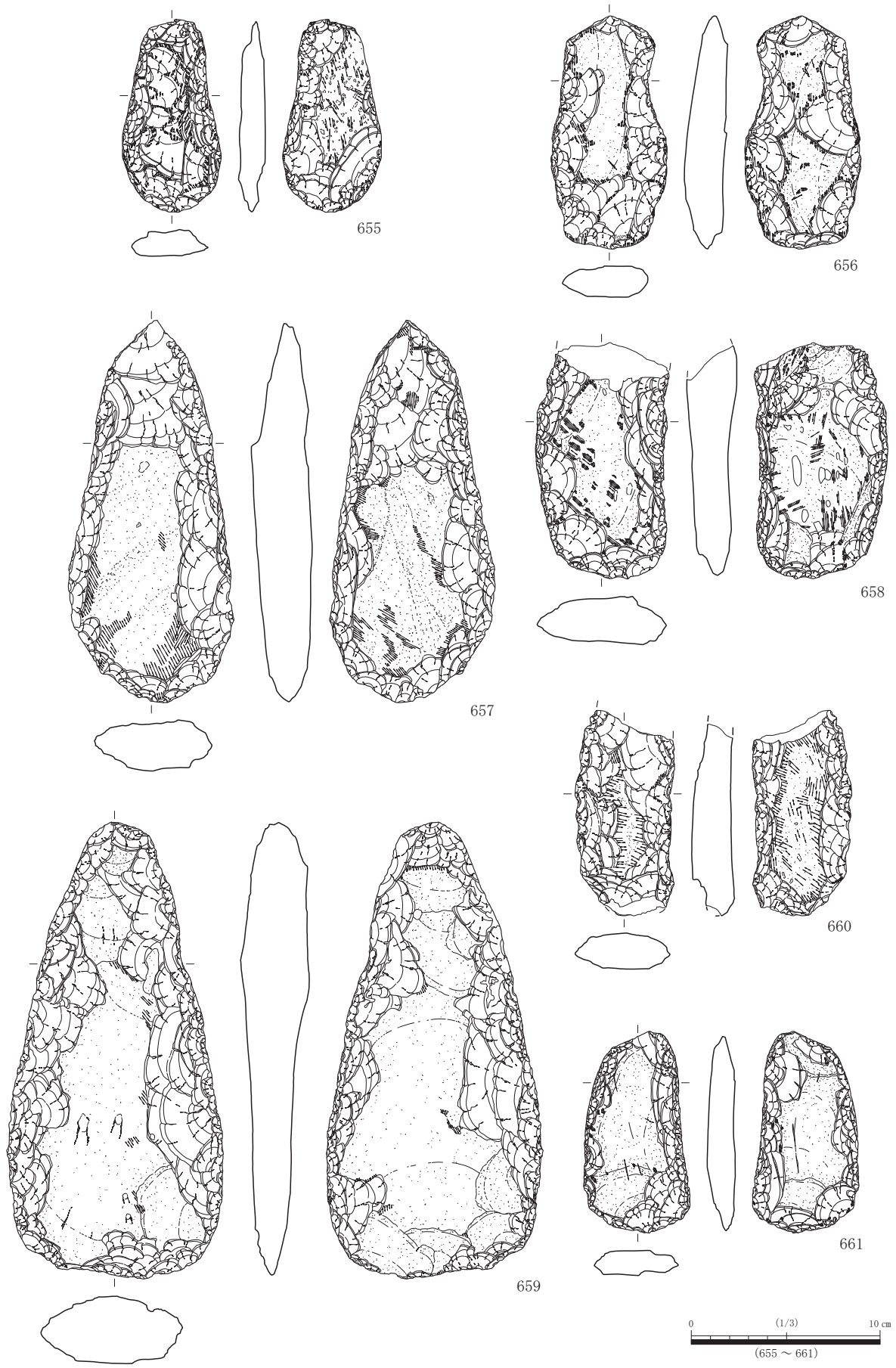
第 114 図　　遺構外出土遺物実測図 10



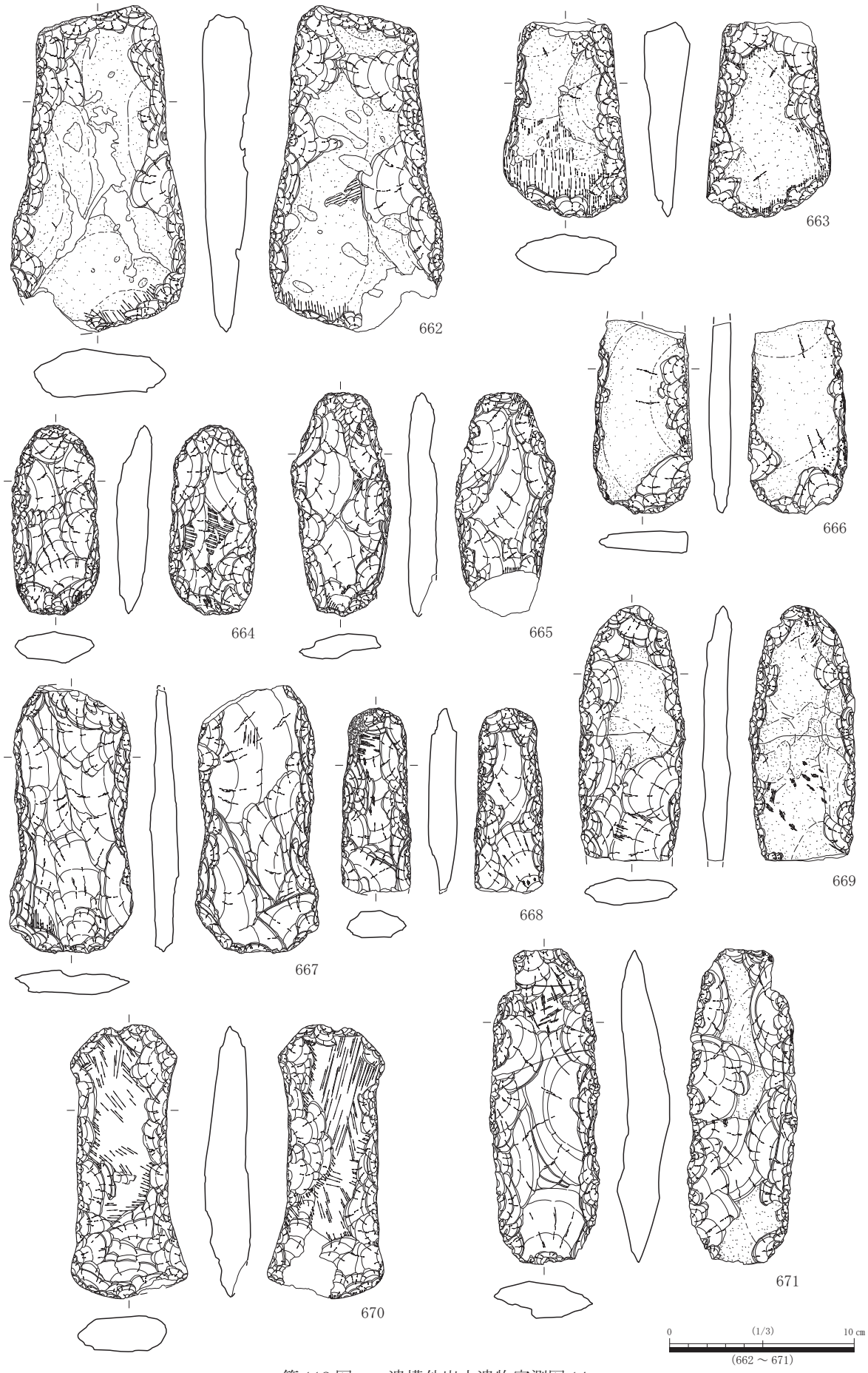
第 115 図　　遺構外出土遺物実測図 11



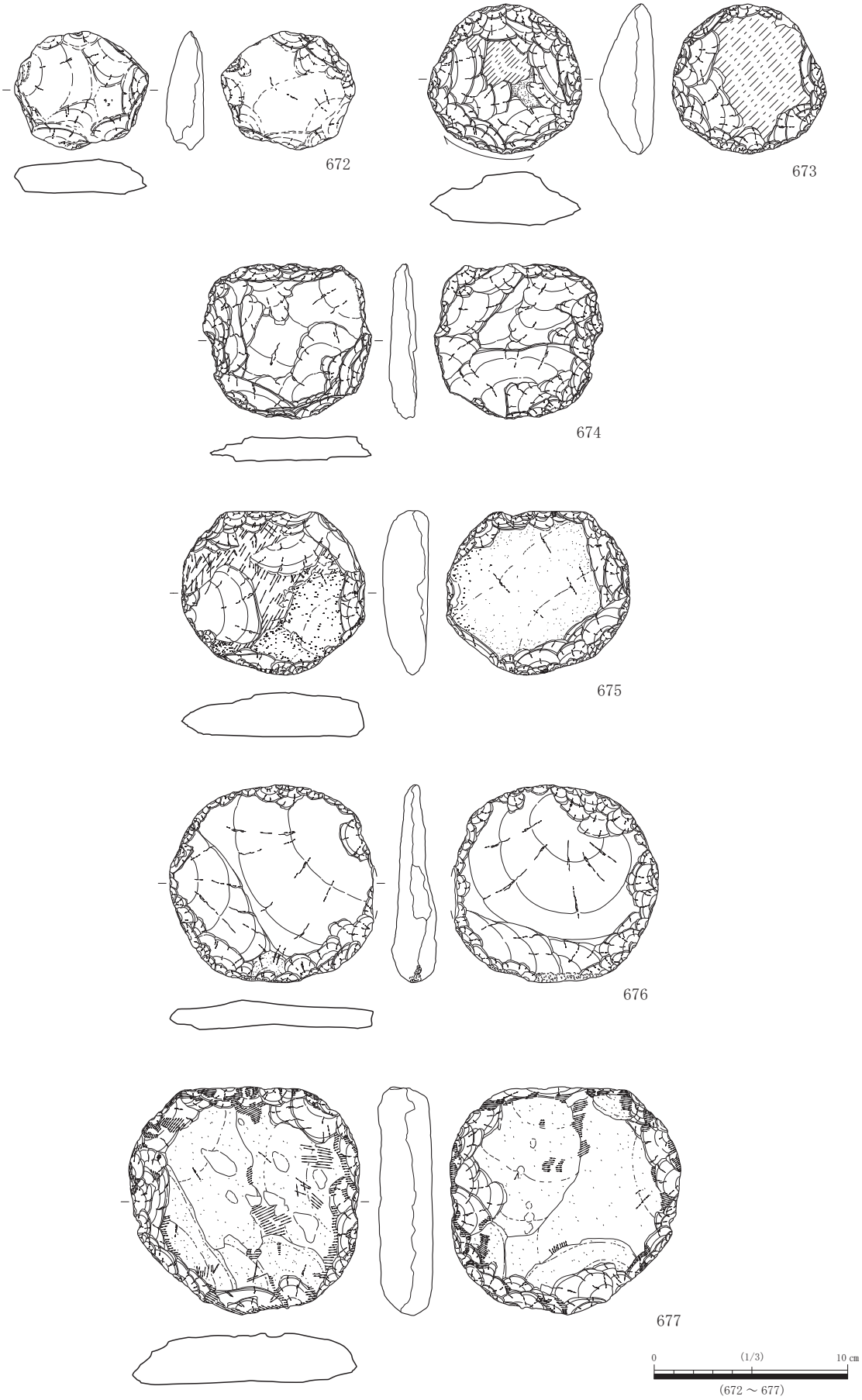
第 116 図　　遺構外出土遺物実測図 12



第 117 図　　遺構外出土遺物実測図 13



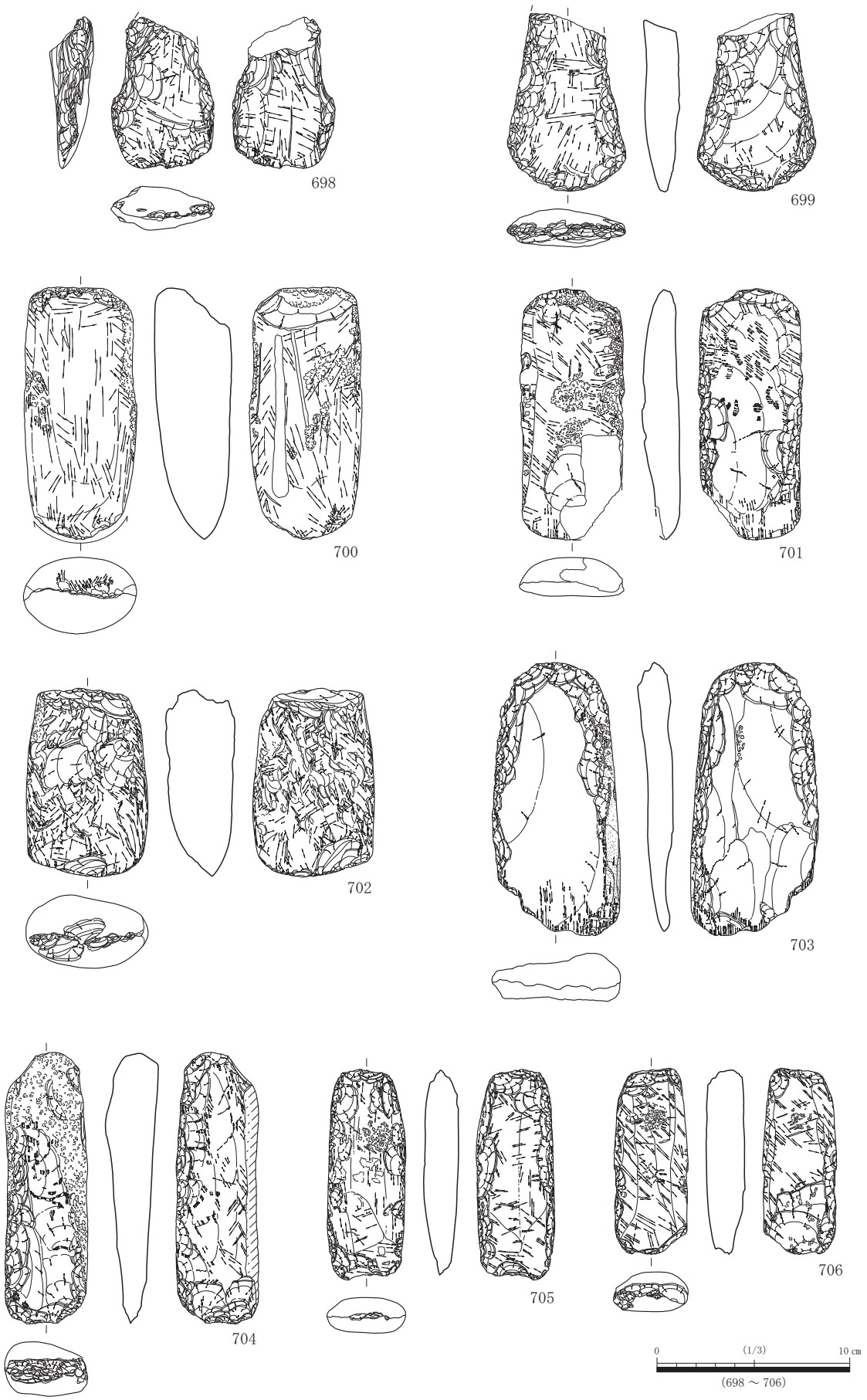
第 118 図　　遺構外出土遺物実測図 14



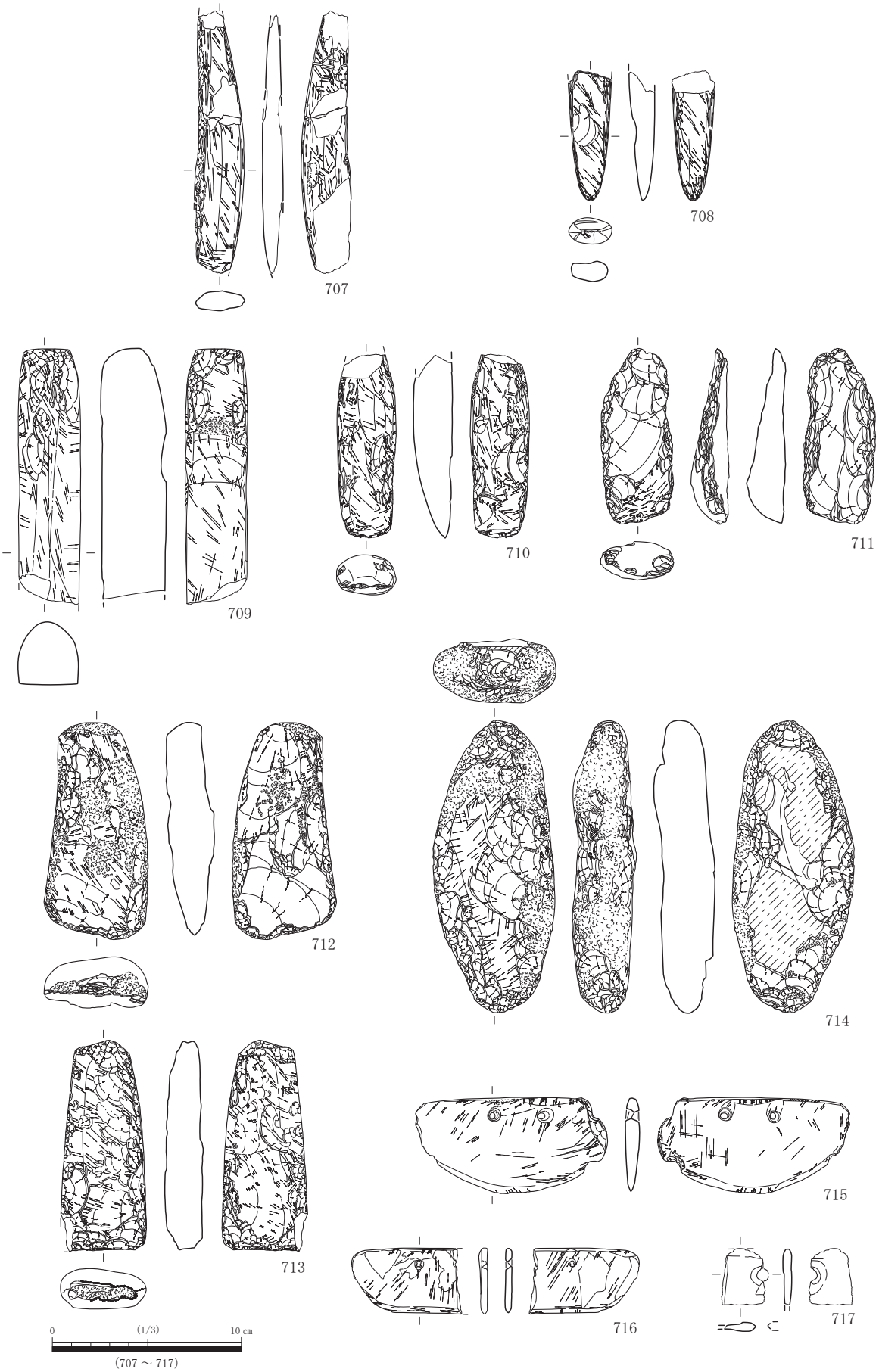
第 119 図　　遺構外出土遺物実測図 15

第 120 図　　遺構外出土遺物実測図 16

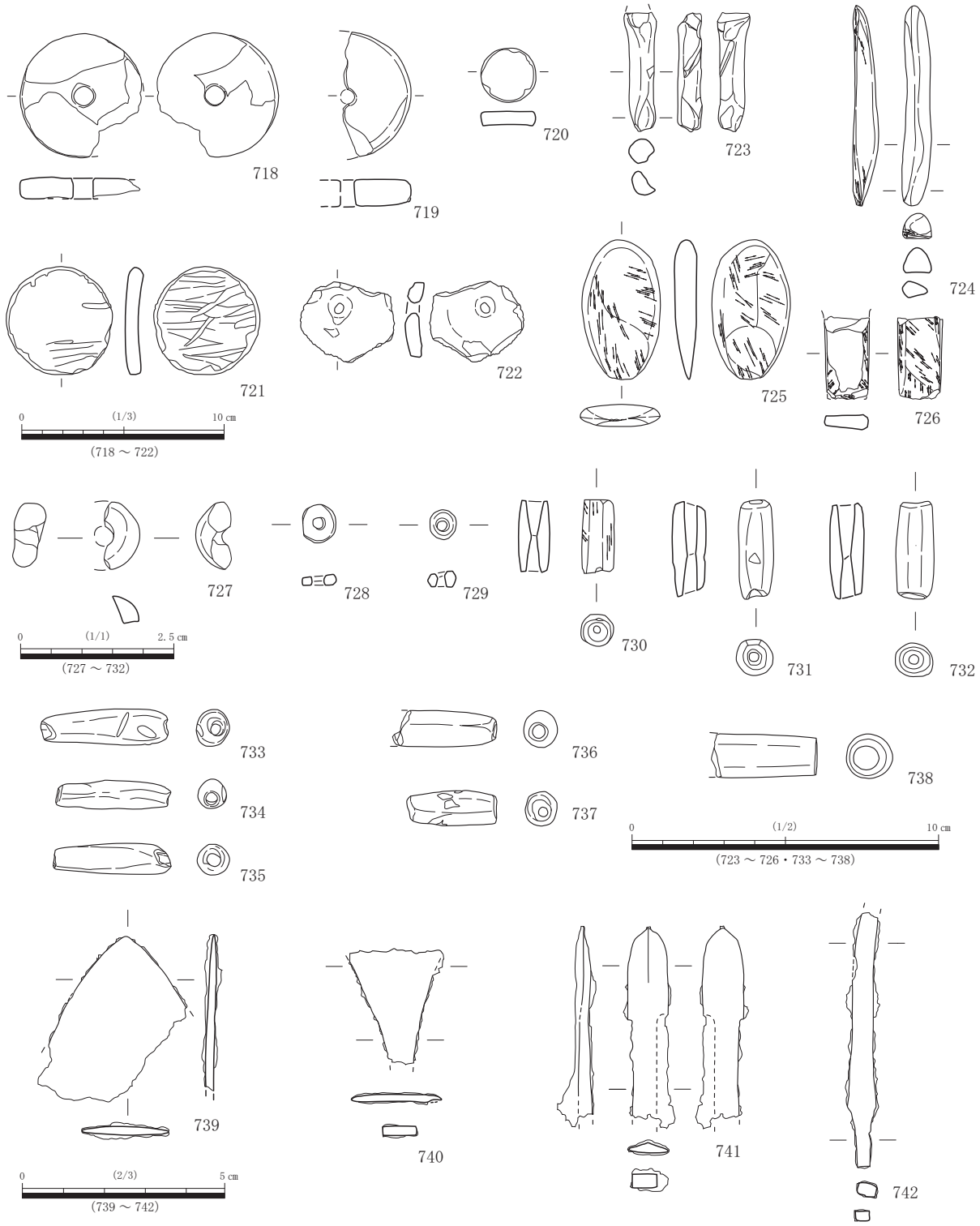
第 121 図　　遺構外出土遺物実測図 17



第 122 図　　遺構外出土遺物実測図 18



第 123 図　　遺構外出土遺物実測図 19



第 124 図　　遺構外出土遺物実測図 20

第１２１～１２３図の６８８～７０６は磨製石斧である。６８８～６９１、６９５、７００、７０２は太型蛤刃のもので、これらを含む他の磨製石斧においても欠損後に再加工を施したものが多いことに特徴がある。７１２、７１３は敲打痕をもつことから敲石として転用したと考えられる。７０７は隣接しないグリッド間で接合した石刀、７０８は同じく石刀あるいは石鑿と考えられる。７０９は刃部が欠損するも基部の抉りを残しているもの、７１１は欠損後に再加工した柱状片刃石斧と考えられる。７１０は扁平片刃石斧である。

７１５～７１７は石庖丁である。３点とも竪穴建物跡を検出した調査区南端、Ｕ２３･２４、Ｖ２４グリッドの基本層４層からの出土である。７１５は刃部中央付近に、使用による刃こぼれが見られる。

（１１）遺構外出土遺物（土製品、石製品、鉄器）（第１２４図）

７１８、７１９は紡錘車である。両遺物とも基本層４層中から出土しており、土製のものである。７１８は直径約６㎝、厚さ約１㎝、穿孔径約１㎝を測る。下から主面に向かって穿孔している。７１９は厚さ約１．４㎝、復元穿孔径約０．８㎝を測る。７２０、７２１は縄文期の円盤形土製品である。７２０は径約２．７㎝、厚さ約０．７㎝を測る。打ち欠きではなく、もともとこの形状を作り出したと考えられる。

７２１は深鉢形土器の胴部片を打ち欠き、研磨、面取りを施している。７２２は縄文期の深鉢形土器の再加工土製品で紡錘車と考えられる。基本層４層からの出土である。補修孔のある破片を打ち欠き、転用したものと考えられる。７２３は基本層５層から出土したものである。焼成粘土塊、もしくはつまんだような圧痕を残しているため粘土紐が焼けたものと考えられる。

７２４は棒上の石を端部と下面のみ研磨を施している不明石製品である。基本層３層から出土した。

７２５は全体的に丁寧な研磨を施している石製品である。両面からの研磨で刃部のように作り出している箇所がある。７２６は頁岩製の磨製製品の一部で、両面から研磨を施している。石剣の茎部と思われる。幅約１．５㎝、厚さ約０．５㎝を測る。基本層３層からの出土である。

７２７～７２９は石製の小玉である。３点とも基本層４層からの出土である。７２８は両面からの穿孔である。厚さは一定ではなく、側面は面取りを施している。７２９も両面からの穿孔が認められ、丁寧に磨かれている。

７３０～７３２は石製管玉である。３点とも両側からの穿孔が確認できる。７３０は長さ約１．２㎝、幅約０．６㎝、孔径約０．１㎝を測り、７３１、７３２は長さ約１．６㎝、幅約０．６㎝を測る。

７３３～７３７は土錘である。全て基本層３層からの出土である。棒に粘土を巻きつけて成形したものと思われる。７３７は器面があれてはいるが、孔の周辺は擦れたような痕がある。

７３８は基本層３層から出土した土製品である。色調も上記の土錘とは違い、孔径も倍近く広く、灰白色で胎土も精緻である。形状、器種は錘のようだが欠損しているため不明である。

７３９～７４２は鉄鏃である。７３９は鏃身部で、残存する長さ約４．１㎝、最大幅３．６㎝を測る。欠損しているために不明だが、圭頭鏃の先端部、または大きさを見るに三角形鏃の先端部と考えられる。厚さは約０．２㎝を測る。７４０は圭頭鏃の鏃身部で、先端部と茎部を欠損している。基本層３層の出土である。残存する長さ約２．８㎝、最大幅約２．２㎝、厚さ約０．２㎝を測る。７４１も基本層３層の出土である。鏃身部の中央に稜をもつことから片縞造で、鏃身関部は斜関と思われる。古墳時代の柳葉鏃、もしくは長頸鏃の鏃身部と考えられる。残存する長さ約５．０㎝、鏃身部最大幅約１．０㎝を測る。７４２は基本層４層から出土したものである。下部の膨らみは茎部と頸部の境界部と考えられる。頸部上位はやや湾曲する。断面は方形を呈すが、茎部に比べ頸部がやや大きい。残存する長さ約６．３㎝を測る。古墳時代から古代期の長頸鏃と考えられる。

【引用・参考文献】

縄文研究会編　１９８４　「九州の押型文土器　－地名表・拓影編－」

谷口康浩　１９８６　東京考古４「縄文時代「集石遺跡」に関する試論－関東・中部地方における早・前・中期の事例を中心として－」『東京考古談話会』

池田朋生　１９９８　肥後考古第１１号「縄文時代前期末～中期初頭における土器の展開－中九州を中心として」 肥後考古学会

帆足俊文　２００３　「熊本県の集石遺構と炉穴」『第１３回九州縄文研究会　九州縄文時代の集石遺構と炉穴』 九州縄文研究会　宮崎考古学会

小林達夫　小川忠博　１９８９　「縄文土器大観　１　草創期　早期　前期」

小林達夫　小川忠博　１９８９　「縄文土器大観　２　中期Ⅰ」

小林達夫　小川忠博　１９８９　「縄文土器大観　３　中期Ⅱ」

小林達夫　小川忠博　１９８９　「縄文土器大観　４　後期　晩期　続縄文」

渡辺誠　１９９１　「組織痕土器研究の諸問題」『交流の考古学』 三島格会長古稀記念号

佐原真　１９９４　「考古学選書６　斧の文化史」 東京大学出版会

熊本県教育委員会編　１９９２　『二子塚』

熊本県教育委員会編　１９９６　『蒲生・上の原遺跡』

熊本県教育委員会編　２００１　『石の本遺跡群Ⅱ』

熊本県教育委員会編　２００１　『石の本遺跡群Ⅲ』

熊本県教育委員会編　２００２　『石の本遺跡群Ⅴ』

熊本県教育委員会編　１９９９　『太郎迫遺跡・妙見遺跡』

熊本県教育委員会編　１９８９　『六地蔵遺跡Ⅰ』

熊本県教育委員会編　２０００　『長野遺跡』

熊本県教育委員会編　１９８０　『古保山・古閑・天城』

橿原考古学研究所編　１９８８　「橿原考古学研究所論集　第八　創立５０周年記念」 吉川弘文館

網田龍生　１９９４　「肥後における回転台土師器の成立とその背景」『中近世土器の基礎研究』Ｘ　日本中世土器研究会

出合宏光　２０００　「九州南部における平安時代の土器・陶磁器」『中近世土器の基礎研究』ＸＶ　日本中世土器研究会

大宰府市教育委員会　２０００　『大宰府条坊跡ＸＶ　－陶磁器分類編－』

大阪大学考古学研究室篠窯調査団　２０１２　『篠窯跡群大谷３号窯の研究　－大阪大学文学研究科考古学研究報告　第５冊』

第 2 表　塔平遺跡遺物観察表

1 区遺構　　法量（　　）は復元値。焼成は良 , やや不良 , 不良の 3 段階に分ける。

挿図番号	番号	種　別	器　　種	出土地点		法量（cm）				焼成（石材）	調　　整		色　　調		備　　考
				種別	番号	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	重さ（g）		外器面	内器面	外面	内面	
第 6 図	1	縄文土器	深鉢	SK	34	―	―	(17.4)		良	横ナデ , 組織痕	押圧 , ミガキ	にぶい黄橙	黄灰	苧麻
第 7 図	2	縄文土器	深鉢	SK	20	―	9.6	(6.0)		良	貝殻条痕 , ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	
第 7 図	3	石器	磨石類	SK	20	6.4	5.8	2.6	154.9	安山岩					
第 7 図	4	石器	磨石類	SK	21	10.1	9.3	5.7	720.0	安山岩					
第 7 図	5	縄文土器	浅鉢	SK	22	―	―	(1.6)		良	横ミガキ	横ミガキ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
第 7 図	6	縄文土器	深鉢	SK	22	―	―	(6.7)		良	横ナデ	横ナデ	にぶい褐	灰黄褐	
第 7 図	7	縄文土器	浅鉢	SK	29	―	―	―		良	ミガキ	横ミガキ	黒褐 , にぶい黄橙	黒褐	
第 7 図	8	縄文土器	深鉢	SK	33	―	―	(7.0)		良	器面摩滅	貝殻条痕後ナデ	にぶい黄橙	橙	
第 7 図	9	縄文土器	深鉢	SK	36	―	―	(5.0)		良	貝殻条痕	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
第 7 図	10	縄文土器	深鉢	SK	36	―	―	(5.5)		良	貝殻条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第 7 図	11	縄文土器	深鉢	SK	37	―	―	(4.8)		良	貝殻条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第 7 図	12	縄文土器	深鉢	SK	37	―	―	―		良	器面摩滅	押圧ナデ	橙	橙	
第 7 図	13	石器	二次加工剥片	SP	336	5.1	2.4	1.0	12.3	チャート					
第 7 図	14	石器	石鏃	SP	349	2.2	1.4	0.4	0.9	安山岩					
第 8 図	15	弥生土器	甕か	SI SX	1 2	―	―	―		良	ハケメ , ケズリ	ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第 8 図	16	石器	磨石類	SI	1	8.5	7.4	4.5	406.6	安山岩					
第 8 図	17	弥生土器	甕	SI	2	―	―	―		良	ハケメ , ヘラケズリ	ナデ , ハケメ	橙	明褐	
第 11 図	18	石器	三稜尖頭器か	SK	16	3.7	1.6	1.4	6.6	黒曜石					
第 11 図	19	縄文土器	深鉢	SD SX	2 1	―	―	(5.8)		良	横ナデ	横ナデ	灰褐	にぶい橙	刻目突帯
第 11 図	20	縄文土器	深鉢	SX	1	―	―	(5.2)		良	突帯貼付後横ナデ 貝殻条痕後ナデ	貝殻条痕後横ナデ	にぶい黄橙	橙	
第 11 図	21	土師器	円盤形土製品か	SX	1	―	―	(2.1)		良	ヘラ切り後ナデ , 高台貼付後ナデ	ナデ	浅黄橙	黒褐	
第 11 図	22	石器	石匙	SP	31	6.7	5.5	1.1	36.0	安山岩					
第 11 図	23	石器	砥石	SP	59	18.6	5.6	3.6	666.0	砂岩					
第 11 図	24	石器	石鏃	SP	270	1.4	1.6	0.3	0.4	安山岩					
第 11 図	25	縄文土器	深鉢	SP	291	―	―	(4.2)		良	横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい褐	刻目突帯
第 11 図	26	土師器	甕	SP	262	―	―	(3.5)		良	横ナデ	横ナデ , 縦ケズリ	浅黄橙	浅黄橙	
第 11 図	27	土師器	鉢	SP	331	―	―	(4.7)		良	横ナデ , 斜めハケメ	横ナデ , ナデ , 横ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	

1 区遺構外　　法量（　　）は復元値。焼成は良 , やや不良 , 不良の 3 段階に分ける。

挿図番号	番号	種　別	器　種	出土地点		法量（cm）				焼成（石材）	調　整		色　調		備　考
				種別	番号	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	重さ（g）		外器面	内器面	外面	内面	
第 12 図	28	縄文土器	深鉢	撹乱		―	―	(6.8)		良	貝殻条痕 , ナデ	ナデ	にぶい黄橙 , 褐灰	にぶい黄橙	
第 12 図	29	弥生土器	長頸壷	トレンチ	3	―	―	―		良	文様 , ナデ	ナデ	橙色	黒褐	重弧文 , 平行文 , 刻目
第 12 図	30	須恵器	蓋	撹乱		―	―	(1.7)		良	回転ナデ , 回転ヘラケズリ	ナデ	灰	灰	つまみ径 3.2cm
第 12 図	31	瓦	軒丸瓦	撹乱		―	―	1.6		良	横ナデ	―	灰	―	九曜紋 , 復元瓦当径 16.0cm
第 12 図	32	土製品	土人形	客土		2.3	3.7	1.1		良	穿孔	穿孔	浅黄橙	浅黄橙	七福神の人形の一部か
第 12 図	33	石器	石鏃	トレンチ	6	2.2	1.3	0.3	0.9	安山岩					
第 12 図	34	石器	石鏃	客土		2.7	1.2	0.3	0.8	黒曜石					
第 12 図	35	石器	石鏃	客土		2.9	2.0	0.4	2.2	黒曜石					
第 12 図	36	石器	石鏃	撹乱		1.7	1.3	0.3	0.4	安山岩					
第 12 図	37	石器	石鏃	掃除一括		1.7	1.3	0.4	0.5	黒曜石					
第 12 図	38	石器	石鏃	樹痕		2.1	1.7	0.5	0.2	黒曜石					
第 12 図	39	石器	石鏃	客土掘削		1.8	0.9	0.2	0.3	黒曜石					
第 12 図	40	石器	石鏃	客土掘削		1.9	1.3	0.3	0.5	安山岩か					
第 12 図	41	石器	石錐	掃除一括		2.5	1.2	0.6	1.5	黒曜石					
第 12 図	42	石器	使用痕剥片か	客土掘削		2.0	1.4	0.5	1.5	黒曜石					

3 区遺構　　法量（　　）は復元値。焼成は良 , やや不良 , 不良の 3 段階に分ける。

挿図番号	番号	種　別	器　種	出土地点		法量（cm）				焼成（石材）	調　整		色　調		備　考
				種別	番号	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	重さ（g）		外器面	内器面	外面	内面	
第 15 図	43	縄文土器	深鉢	SY T	6 16	―	―	―		良	貝殻条痕	貝殻条痕 , ナデ	明赤褐 （5YR　5/6）	明赤褐	LAB 値（胴部） 外 L=46.0　A=12.7　B=17.7 内 L=31.9　A=3.1　B=4.9
第 18 図	44	縄文土器	浅鉢	SI	94	―	―	(2.5)		良	横ナデ , ミガキ	横ナデ , ミガキ	褐灰	黒褐	
第 18 図	45	縄文土器	浅鉢	SI	94	―	―	(4.2)		良	横ナデ , ミガキ , 沈線	横ナデ , ミガキ	にぶい黄橙 , 灰黄褐	黒褐	
第 18 図	46	縄文土器	浅鉢	SI	94	―	―	(3.6)		良	横ナデ , ミガキ	横ナデ , ミガキ	黒褐	暗オリーブ褐	補修孔
第 18 図	47	縄文土器	深鉢	SI	94	―	―	(4.9)		良	横ナデ , ミガキ	横ナデ , ミガキ	灰褐	灰褐	
第 18 図	48	縄文土器	深鉢	SI	94	―	―	(6.2)		良	横ナデ , ナデ	横ナデ , ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第 18 図	49	縄文土器	深鉢	SI	94	―	―	(7.6)		良	貝殻条痕 , ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第 18 図	50	縄文土器	深鉢	SI	94	―	(9.2)	(3.1)		良	ナデ , ミガキ	ナデ	橙 , にぶい横褐	にぶい黄橙	
第 18 図	51	縄文土器	深鉢	SI	94	―	(11.0)	(3.5)		良	貝殻条痕 , ナデ	―	橙	―	
第 18 図	52	縄文土器	深鉢	SI	94	―	―	―		良	組織痕	ミガキ	橙	橙	網代圧痕
第 18 図	53	縄文土器	深鉢	SI	94	―	―	―		良	組織痕	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第 18 図	54	縄文土器	深鉢	SI	94	―	―	―		良	組織痕	ミガキ	にぶい橙色	にぶい橙	苧麻

挿図番号	番号	種　別	器　　種	出土地点		法量（cm）				焼成（石材）	調　　整		色　　調		備　　考
				種別	番号	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	重さ（g）		外器面	内器面	外面	内面	
第18図	55	縄文土器	円盤形土製品	SI	94	6.6	8.0	0.8		良	工具ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	胴部屈曲部直上部分か
第18図	56	土製品	土錘	SI	94	1.3	4.4	1.2		良					
第18図	57	石器	石鏃	SI	94	3.2	1.6	0.5	2.2	黒曜石					
第18図	58	石器	石核	SI	94	2.3	3.5	2.1	15.9	黒曜石					
第18図	59	石器	石核	SI	94	7.4	7.8	3.0	182.1	安山岩					
第19図	60	石器	打製石斧	SI	94	11.1	4.7	2.0	110.5	安山岩					
第19図	61	石器	磨石類	SI	94	10.5	9.9	4.3	485.2						
第19図	62	石器	磨石類	SI	94	14.5	8.2	5.9	1026.0						
第19図	63	石器	磨石類、砥石（有溝）	SI	94	9.7	7.5	6.2	636.0	砂岩					
第19図	64	縄文土器	浅鉢	SI	99	―	―	(2.5)		良	沈線，ミガキ	ミガキ	黒褐	黒褐	
第19図	65	縄文土器	浅鉢	SI	99	―	―	(3.4)		良	横ナデ，ミガキ	横ナデ，ミガキ	灰黄褐	にぶい黄橙	
第19図	66	縄文土器	浅鉢	SI	99	―	―	(4.2)		良	沈線，横ナデ，ミガキ	横ナデ，ミガキ	褐灰	黒褐	
第19図	67	縄文土器	深鉢	SI	99	―	―	(6.0)		良	沈線，横ナデ，ミガキ	工具ナデ，ミガキ	黄灰	黄灰	
第19図	68	縄文土器	深鉢	SI	99	―	―	(6.8)		良	沈線，横ナデ，ミガキ	ミガキ	黒	にぶい橙	
第19図	69	縄文土器	深鉢	SI	99	―	―	(5.7)		良	ミガキ	ミガキ	黒褐	黒褐色	
第19図	70	縄文土器	鉢か	SI	99	―	5.5	(1.7)		良	ナデ，工具ナデ，ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	浅黄	
第19図	71	縄文土器	深鉢	SI	99	―	7.9	(3.1)		良	横ナデ，工具ナデ，ミガキ	ナデ	にぶい黄橙	暗灰黄	
第19図	72	縄文土器	円盤形土製品	SI	99	6.3	6.1	0.8		良	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	深鉢胴部屈曲部分
第19図	73	石器	石鏃	SI	99	2.1	1.2	0.3	0.5	チャート					
第19図	74	石器	石鏃	SI	99	2.1	1.4	0.3	0.6	安山岩					
第19図	75	石器	石核	SI	99	2.9	4.3	2.8	27.0	黒曜石					
第20図	76	石器	打製石斧	SI	99	7.3	4.9	1.2	50.7						
第20図	77	石器	磨製石斧	SI	99	10.9	5.4	1.7	145.8	頁岩					再加工か
第20図	78	石器	磨石類	SI	99	4.1	3.7	1.5	31.4						
第20図	79	石器	磨石類	SI	99	5.5	4.8	2.7	97.4						
第20図	80	石器	磨石類	SI	99	5.0	4.4	2.1	63.1	砂岩					
第20図	81	石器	石皿（砥石か）	SI	99	22.1	14.7	4.5	2384.0						
第21図	82	縄文土器	浅鉢	SI	106	―	―	(3.0)		良	沈線，横ナデ，ミガキ	横ナデ，ミガキ	にぶい黄橙	橙	
第21図	83	縄文土器	深鉢	SI	106	―	―	(5.4)		良	沈線，横ナデ，ミガキ	横ナデ，ミガキ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	
第21図	84	縄文土器	浅鉢	SI	106	―	(6.2)	(1.4)		良	ナデ，ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	灰黄褐	
第21図	85	縄文土器	深鉢	SI	106	―	(11.1)	(3.0)		良	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第21図	86	縄文土器	深鉢	SI	106	―	9.0	(2.4)		良	ナデ，押圧	工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	何らかの圧痕
第21図	87	縄文土器	深鉢	SI	106	―	(9.2)	(2.6)		良	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	

挿図番号	番号	種　別	器　　種	出土地点		法量（cm）				焼成（石材）	調　　整		色　　調		備　　考
				種別	番号	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	重さ（g）		外器面	内器面	外面	内面	
第 21 図	88	石器	磨石類	SI	106	6.8	4.2	2.0	67.3						
第 22 図	89	石器	石鏃 (未製品)	SI	107	2.9	1.6	0.4	1.5	黒曜石					
第 22 図	90	石器	磨石類	SI	107	7.4	6.5	2.9	188.0	砂岩					
第 22 図	91	石器	磨製石斧	SI	107	11.9	5.1	3.0	269.9	頁岩					再加工
第 23 図	92	縄文土器	深鉢	SI	110	―	10.2	(2.6)		良	ナデ	ナデ	橙	浅黄橙	
第 24 図	93	石器	石鏃	SI	113	1.8	1.3	0.3	0.6	黒曜石					
第 25 図	94	縄文土器	深鉢	SI	115	―	(9.0)	(2.4)		良	貝殻条痕 , ナデ , 押圧	ナデ	明黄褐 , にぶい黄橙	灰黄褐	
第 25 図	95	縄文土器	浅鉢	SI	116	―	―	(1.7)		良	沈線 , ミガキ	ミガキ	浅黄	浅黄	補修孔
第 25 図	96	縄文土器	浅鉢	SI	116	―	―	(2.4)		良	沈線 , ミガキ	ミガキ	灰黄褐	黄灰	
第 25 図	97	縄文土器	浅鉢	SI	116	―	―	(3.9)		良	沈線 , 横ナデ , ミガキ	横ナデ , ミガキ	黄灰	黄灰	
第 25 図	98	縄文土器	浅鉢	SI	116	―	―	(2.8)		良	ナデ , ミガキ	ミガキ	褐灰	黄灰	
第 25 図	99	縄文土器	深鉢	SI	116	―	―	(3.9)		良	貝殻条痕 , 横ナデ , ナデ	横ナデ , ミガキ	暗灰黄	黄灰	
第 25 図	100	縄文土器	深鉢	SI	116	―	―	(5.7)		良	貝殻条痕 , ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黄灰	
第 26 図	101	縄文土器	浅鉢	SI	118	(37.4)	―	(3.3)		良	沈線 , ミガキ	ミガキ	黒褐	黒褐	
第 26 図	102	縄文土器	浅鉢	SI	118	―	―	(4.6)		良	ナデ , ミガキ	ミガキ	灰黄褐	暗灰黄	
第 26 図	103	縄文土器	浅鉢	SI	118	―	―	(3.3)		良	沈線 , 横ナデ , ミガキ	横ナデ , ミガキ	黒褐	黒褐	
第 26 図	104	縄文土器	深鉢	SI	118	―	―	(8.8)		良	貝殻条痕 , 横ナデ , ナデ , 工具痕	横ナデ , ミガキ , 押圧 (手持ち痕)	橙	明黄褐	
第 26 図	105	縄文土器	深鉢	SI	118	―	―	(5.4)		良	貝殻条痕 , ナデ , ミガキ	ナデ , ミガキ	にぶい黄橙	浅黄	口縁部貼り付け部分が剥落（リボン状突起？）
第 26 図	106	縄文土器	深鉢	SI	118	―	(9.2)	(2.0)		良	貝殻条痕 , 工具ナデ , ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙	黒褐	
第 26 図	107	縄文土器	深鉢	SI	118	―	(9.5)	(3.3)		良	ナデ	ナデ	にぶい橙	黒褐	
第 26 図	108	縄文土器	深鉢か	SI	118	―	―	(1.9)		良	貝殻条痕	横ナデ	明褐	橙	刻目突帯
第 27 図	109	石器	敲石か	SI	118	9.6	7.0	6.1	522.5	頁岩					
第 28 図	110	縄文土器	浅鉢	SI	119	―	―	(2.0)		良	沈線 , 横ナデ , ミガキ	横ナデ , ミガキ	暗灰黄	暗灰黄	
第 28 図	111	縄文土器	浅鉢	SI	119	―	―	(2.3)		良	沈線 , 横ナデ , ミガキ	横ナデ , ミガキ	にぶい黄橙	黒褐	
第 28 図	112	縄文土器	鉢か	SI	119	―	―	(2.1)		良	沈線 , 横ナデ	横ナデ , ミガキ	にぶい褐	にぶい黄褐	
第 28 図	113	土製品	円盤形土製品	SI	119	4.7	5.2	1.0		良	ナデ	横ミガキ	にぶい褐	にぶい褐	深鉢再加工
第 28 図	114	石器	磨石類	SI	119	9.4	8.2	3.6	371.6						
第 29 図	115	石器	石皿	SI	119	41.3	31.8	12.7	26200.0						
第 30 図	116	縄文土器	浅鉢	SI	120	―	―	(4.6)		良	横ナデ , ミガキ	横ナデ , ミガキ	橙	にぶい橙	
第 30 図	117	縄文土器	浅鉢	SI	120	―	―	(4.2)		良	横ナデ , ミガキ	沈線 , 横ナデ , ミガキ	黒褐	黒褐	
第 30 図	118	縄文土器	深鉢	SI	120	―	―	(3.6)		良	沈線 , ミガキ	ミガキ	橙	橙	
第 30 図	119	縄文土器	深鉢	SI	120	―	―	(4.6)		良	貝殻条痕 , ナデ	ミガキ	橙	黒褐	

挿図番号	番号	種　別	器　種	出土地点		法量（cm）				焼成（石材）	調　整		色　調		備　考
				種別	番号	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	重さ（g）		外器面	内器面	外面	内面	
第30図	120	縄文土器	深鉢	SI	120	―	―	(4.2)		良	横ナデ，ナデ，ミガキ	ミガキ	暗灰黄	にぶい黄橙	
第30図	121	縄文土器	深鉢	SI	120	―	―	(7.5)		良	貝殻条痕	沈線，横ナデ，ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄	
第30図	122	縄文土器	深鉢	SI	120	―	(10.2)	(4.0)		良	貝殻条痕，ナデ，押圧	ナデ	にぶい黄橙	浅黄	小石？の圧痕
第31図	123	縄文土器	深鉢	SI	121	(31.2)	―	(23.0)		良	横ナデ，工具ナデ，ナデ	横ナデ，工具ナデ，ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	
第31図	124	石器	磨石類	SI	121	9.7	8.4	6.7	777.0						
第31図	125	石器	磨石類	SI	121	11.1	10.3	8.3	1359.3						
第31図	126	石器	磨石類	SI	121	9.7	7.5	6.8	714.0						
第33図	127	縄文土器	鉢	SK	52	23.3	―	(21.7)		良	貝殻条痕，横ナデ，ナデ	貝殻条痕，工具ナデ，横ナデ，ナデ，押圧	浅黄橙	にぶい橙	埋設土器
第34図	128	縄文土器	深鉢	SK SI	54 116 18	―	9.1	(36.9)		良	貝殻条痕，工具ナデ，ナデ	貝殻条痕，ナデ	にぶい黄橙，褐	にぶい黄橙	埋設土器
第35図	129	縄文土器	深鉢	SK	58	37.1	(10.5)	43.7		良	沈線，工具ナデ，ナデ，ミガキ	ナデ，ミガキ	にぶい黄橙，黒	褐灰，灰黄褐	埋設土器
第36図	130	縄文土器	深鉢	SK	59	(41.0)	―	(35.3)		良	貝殻条痕，横ナデ，ミガキ	ミガキ	にぶい橙，黒褐	にぶい橙，黒褐	埋設土器補修孔
第37図	131	縄文土器	深鉢	SK	68	―	―	(12.8)		良	貝殻条痕，横ナデ	工具ナデ	浅黄，にぶい黄橙	浅黄，黒褐	
第37図	132	縄文土器	深鉢	SK	68	―	―	(10.8)		良	貝殻条痕，横ナデ，ミガキ	横ナデ，ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄	口縁に貼付突帯
第37図	133	縄文土器	浅鉢	SK	68	―	(20.1)	―		良	貝殻条痕，組織痕，ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	編布圧痕
第37図	134	縄文土器	深鉢	SK	68,58	37.8	7.0	(40.5)		良	貝殻条痕，沈線，横ナデ，工具ナデ	貝殻条痕，沈線，横ナデ，工具ナデ，ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	リボン状突起
第38図	135	石器	使用痕剥片	SK	68	3.2	3.1	0.4	3.9	安山岩					
第38図	136	石器	石匙（未製品）	SK	68	5.3	2.1	0.7	6.5	黒曜石					
第38図	137	石器	打製石斧	SK	68	12.0	5.8	2.0	159.0	安山岩					
第38図	138	石器	打製石斧	SK	68	9.5	5.3	2.4	134.3	安山岩					
第38図	139	石器	打製石斧	SK	68	11.5	5.2	2.4	164.2	安山岩					
第38図	140	石器	打製石斧	SK	68	7.2	4.6	2.6	101.6	安山岩					
第38図	141	石器	石皿	SK	68	23.1	19.8	4.3	3298.0						
第40図	142	弥生土器	甕	SI	63	―	8.4	(4.2)		良	横ナデ，ナデ，ハケメ	―	橙	にぶい橙	
第40図	143	弥生土器	甕	SI	63	―	12.2	(6.0)		良	横ナデ，ナデ，ハケメ	―	明黄褐	橙	
第40図	144	弥生土器	甕	SI	63	―	11.7	(9.6)		良	横ナデ，ナデ，ハケメ	―	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第40図	145	弥生土器	壷	SI	63	―	―	―		良	文様	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	平行文、刻み目
第40図	146	弥生土器	壷	SI	63	―	―	―		良	文様，ミガキ	ナデ	にぶい橙，褐灰	にぶい橙	平行文、重孤文
第40図	147	弥生土器	長頸壷	SI	63	9.7	―	(17.7)		良	文様，横ナデ，ミガキ，ハケメ	横ナデ，工具ナデ，ナデ，ミガキ，押圧	橙	橙	平行文上に刻み目、重弧文
第40図	148	弥生土器	長頸壷	SI	63	―	―	―		良	文様，ナデ，ハケメ	工具ナデ，ナデ，しぼり痕，押圧	橙	にぶい黄橙	波状文
第40図	149	弥生土器	壷	SI	63	14.0	―	(24.2)		良	ハケメ	ナデ，ハケメ，押圧	にぶい黄橙	にぶい黄橙	複合口縁

挿図番号	番号	種　別	器　　種	出土地点		法量（cm）				焼成（石材）	調　　整		色　　調		備　　考
				種別	番号	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	重さ（g）		外器面	内器面	外面	内面	
第 41 図	150	弥生土器	壷	SI	63	―	4.6	(2.2)		良	ナデ，ハケメ	工具ナデ	にぶい黄橙，褐灰	にぶい黄橙，褐灰	
第 41 図	151	弥生土器	壷か	SI	63	―	―	(3.8)		良	ナデ，ケズリ	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	
第 41 図	152	弥生土器	壷か 鉢か	SI	63	―	7.2	(5.6)		良	ナデ	ナデ，ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第 41 図	153	弥生土器	高坏	SI	63	32.6	20.3	(26.3)		良	横ナデ，ナデ，ハケメ	横ナデ，ナデ，ミガキ	明赤褐，赤褐，にぶい黄橙	赤褐，橙	
第 41 図	154	石器	石鏃	SI	63	2.2	1.6	0.3	0.8	チャート					
第 41 図	155	石器	磨石類（くぼみ石）	SI	63	9.9	7.4	6.1	443.4						
第 41 図	156	石器	磨石類（砥石か）	SI	63	13.6	8.0	5.6	854.0						
第 41 図	157	石器	砥石か	SI	63	18.3	9.6	12.9	3389.0						
第 41 図	158	石器	石皿	SI	63	26.8	10.3	5.3	1645.0						
第 42 図	159	石器	台石・砥石か	SI	63	37.0	25.5	14.5	20700.0						
第 44 図	160	弥生土器	甕	SI	76,114	16.7	―	(25.8)		良	横ナデ，ナデ，ハケメ	横ナデ，工具ナデ，ナデ，ハケメ	にぶい橙	橙	
第 44 図	161	弥生土器	甕	SI	76	22.0	―	(33.7)		良	横ナデ，ハケメ	横ナデ，ナデ，ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第 44 図	162	弥生土器	甕	SI	76,114	(19.4)	―	(7.1)		良	ナデ，ハケメ	ナデ，ハケメ	橙	橙	
第 44 図	163	弥生土器	甕	SI	76	(21.1)	―	(20.5)		良	横ナデ，ハケメ	横ナデ，ハケメ	橙	にぶい黄橙	
第 44 図	164	弥生土器	甕	SI	76	(15.2)	―	(13.0)		良	横ナデ，ハケメ	横ナデ，ナデ，工具ナデ	灰黄，黒	淡黄	
第 44 図	165	弥生土器	甕	SI	76	―	―	(12.1)		良	横ナデ，ハケメ	ハケメ	にぶい橙，灰褐	橙，灰黄褐	
第 44 図	166	弥生土器	甕	SI	76	―	―	(11.7)		良	ナデ，ハケメ	ナデ，ハケメ	にぶい橙	暗灰黄	
第 44 図	167	弥生土器	甕	SI	76,114	19.6	11.1	35.6		良	横ナデ，ナデ，ハケメ	横ナデ，ナデ，ハケメ	明黄褐	明黄褐	
第 44 図	168	弥生土器	甕	SI	76	―	10.0	(4.2)		良	横ナデ	―	橙	橙	
第 44 図	169	弥生土器	甕	SI	76	―	12.8	(5.5)		良	ナデ，ハケメ，押圧	―	橙	橙	
第 44 図	170	弥生土器	甕	SI	76	―	12.2	(8.9)		良	横ナデ，ナデ，ハケメ，押圧	ナデ，ハケメ	にぶい黄橙	にぶい橙，褐灰	
第 44 図	171	弥生土器	甕	SI	76	―	(17.2)	(7.6)		良	ナデ，ハケメ，押圧	―	にぶい黄橙，暗灰黄	暗灰黄	
第 45 図	172	弥生土器	鉢	SI	76	10.0	5.2	4.4		良	横ナデ，ナデ，押圧	工具ナデ，ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	手捏ね土器
第 45 図	173	弥生土器	鉢	SI	76	(11.6)	―	11.4		良	横ナデ，ナデ，ハケメ	横ナデ，ナデ，ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第 45 図	174	弥生土器	鉢	SI	76	13.9	5.9	17.8		良	横ナデ，ナデ，ハケメ	横ナデ，ナデ	橙	橙	
第 45 図	175	弥生土器	鉢	SI	76	―	6.1	(11.0)		良	ナデ，ミガキ，ハケメ	工具ナデ	浅黄	浅黄	
第 45 図	176	弥生土器	台付鉢	SI	76	―	―	(13.8)		良	横ナデ，ハケメ，ケズリ	ナデ，ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第 45 図	177	弥生土器	鉢	SI	76	(37.4)	―	(11.5)		良	横ナデ，ハケメ	ミガキ，ハケメ	にぶい橙	橙	
第 45 図	178	弥生土器	長頸壷	SI	76,114	10.6	4.0	23.8		良	文様，横ナデ，ナデ，ハケメ	横ナデ，ナデ，ハケメ	にぶい黄褐，黒	黄褐	平行文
第 45 図	179	弥生土器	壷	SI	76	―	―	―		良	文様	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	重弧文，平行文
第 45 図	180	弥生土器	壷	SI	76,77,112	―	―	―		良	文様，ハケメ	ナデ，ハケメ	橙	橙	平行文，刻み

挿図番号	番号	種　別	器　　種	出土地点		法量（cm）				焼成（石材）	調　　整		色　　調		備　　考
				種別	番号	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	重さ（g）		外器面	内器面	外面	内面	
第45図	181	弥生土器	壷	SI	76,114	―	4.4	(32.5)		良	ナデ，ハケメ，タタキ	ハケメ	にぶい黄橙，暗灰	にぶい黄橙	
第46図	182	弥生土器	壷	SI	76	(14.2)	―	(33.9)		良	横ナデ，ナデ，ハケメ	横ナデ，ナデ，ハケメ，押圧	橙	にぶい黄橙	
第46図	183	弥生土器	壷	SI	76	―	(7.3)	(6.2)		良	ナデ	ナデ，ハケメ	浅黄，黄灰	にぶい黄橙	
第46図	184	弥生土器	壷	SI	76	―	9.6	(5.5)		良	ナデ，ハケメ	ナデ，ハケメ	にぶい黄橙	灰黄褐	
第46図	185	弥生土器	壷	SI	76	―	5.4	(7.7)		良	ハケメ	ハケメ	橙，褐灰	橙，暗灰	
第46図	186	弥生土器	壷か	SI	76	―	(8.0)	(6.6)		良	ナデ	ナデ，ハケメ	にぶい橙	にぶい黄橙	
第46図	187	弥生土器	壷	SI	76	―	5.4	(4.9)		良	ナデ，ハケメ	ハケメ	にぶい橙	浅黄橙	
第46図	188	弥生土器	壷	SI	76,114	―	7.5	(46.4)		良	文様，横ナデ，ナデ，ハケメ，押圧	横ナデ，ナデ，ハケメ，押圧	にぶい黄褐，褐灰	灰	複合口縁，櫛描平行文，波状文
第46図	189	弥生土器	長頸壷	SI	76	12.6	4.7	23.7		良	文様，横ナデ，ハケメ	横ナデ，ナデ，ハケメ	橙	橙	複合口縁，櫛描平行文，波状文
第47図	190	弥生土器	高坏	SI	76	(19.0)	―	(5.7)		良	横ナデ，ミガキ	横ナデ，ナデ，ミガキ	にぶい橙	にぶい黄橙	
第47図	191	弥生土器	高坏	SI	76	25.8	(17.2)	(21.5)		良	横ナデ，しぼり痕	横ナデ，ミガキ	橙，灰黄	灰黄，橙	
第47図	192	弥生土器	高坏	SI	76	(27.8)	―	(5.4)		良	ハケメ	文様，横ナデ，ミガキ	明赤褐	褐	内器面に暗文
第47図	193	弥生土器	高坏	SI	76,114	(30.2)	(15.6)	21.3		良	横ナデ，ナデ，ハケメ	横ナデ，工具ナデ，ハケメ	橙色	橙	
第47図	194	弥生土器	高坏	SI	76,77	―	13.6	(9.1)		良	横ナデ，工具ナデ，ナデ，ハケメ	―	にぶい黄橙	にぶい黄褐	
第47図	195	土製品	焼成粘土塊	SI	76	5.2	6.5	3.6		やや不良	ナデ	―	浅黄橙		
第47図	196	土製品	焼成粘土塊	SI	76	2.6	4.5	2.7		やや不良	ナデ	―	灰白，淡黄		
第47図	197	弥生土器	壷（甕棺か）	SI	76	―	6.7	(46.9)		良	ハケメ	ハケメ	にぶい橙	にぶい黄橙	小型甕棺か，穿孔有
第48図	198	土製品	丸玉	SI	76	2.0	2.5	1.3		良			にぶい橙	にぶい橙	孔径 0.25cm × 0.25cm
第48図	199	石器	石鏃	SI	76	2.5	1.5	0.4	0.9	黒曜石					
第48図	200	石器	石鏃	SI	76	2.2	1.3	0.3	0.8	黒曜石					
第48図	201	石器	磨製石斧	SI	76	14.1	5.3	3.3	342.7	頁岩					
第48図	202	石器	磨製石斧	SI	76	9.5	5.7	4.7	424.6	頁岩					
第48図	203	石器	石錘	SI	76	4.9	3.5	2.0	49.5						
第48図	204	石器	敲石か	SI	76	5.9	2.7	1.9	41.1						
第48図	205	石器	磨石類	SI	76	8.0	6.5	3.1	224.0	砂岩					
第48図	206	石器	磨石類	SI	76	10.7	9.8	7.5	1095.0						
第48図	207	石器	磨石類	SI	76	10.1	8.3	5.4	698.0						
第48図	208	石器	磨石類	SI	76	5.5	4.9	3.6	122.0						
第48図	209	石器	磨石類	SI	76	6.8	5.5	4.0	182.8	砂岩					
第48図	210	石器	磨石類	SI	76	7.4	7.2	3.7	321.3	砂岩					
第48図	211	石器	石皿・台石	SI	76	13.3	15.8	4.1	1158.0						
第49図	212	弥生土器	鉢	SI	77	(10.1)	―	8.0		良	横ナデ，ミガキ，ハケメ	横ナデ，ミガキ	灰	暗灰黄	

挿図番号	番号	種　別	器　　種	出土地点		法量（cm）				焼成（石材）	調　　整		色　　調		備　　考
				種別	番号	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	重さ（g）		外器面	内器面	外面	内面	
第 49 図	213	弥生土器	鉢	SI	77	19.8	6.8	8.5		良	横ナデ , ナデ , ケズリ	横ナデ , 工具ナデ , ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
第 49 図	214	弥生土器	高坏	SI	77	12.3	―	(8.5)		良	ナデ , ミガキ	文様 , ミガキ	にぶい橙	橙	暗文 , 脚部打ち欠き
第 49 図	215	弥生土器	円盤形土製品	SI	77	4.3	4.3	1.8		良	横ナデ , ナデ	―	橙	橙	高坏の脚付け根を打ち欠き
第 50 図	216	土製品	焼成粘土塊	SI	77	(2.8)	1.9	1.9		良	押圧	―	褐灰 , にぶい黄橙	―	粘土紐の一部か
第 50 図	217	土製品	焼成粘土塊	SI	77	7.4	4.2	3.7		良	ナデ , 接合痕	―	にぶい黄橙 , 灰 , 黄 , 淡黄 , 明赤褐		
第 50 図	218	石器	石鏃	SI	77	2.0	1.7	0.4	1.0	黒曜石					
第 50 図	219	石器	石鏃	SI	77	3.0	2.3	0.4	2.1	安山岩					
第 50 図	220	石器	磨石類	SI	77	9.4	8.4	6.5	757.0						
第 50 図	221	石器	磨石類	SI	77	13.2	10.8	5.6	1080.0						
第 50 図	222	石器	台石か (藁打ち石か)	SI	77	15.1	9.6	10.8	2208.0						
第 50 図	223	石器	鉄床石	SI	77	15.3	10.3	9.1	2041.0						
第 51 図	224	弥生土器	壷	SI	112,77, 117	13.6	―	(11.6)		良	横ナデ , ハケメ	横ナデ , ナデ , ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第 51 図	225	弥生土器	壷	SI	112,76, 77,117	13.8	6.8	40.9		良	横ナデ , ナデ , ハケメ	横ナデ , 工具ナデ , ナデ , ハケメ	にぶい橙	にぶい橙	
第 51 図	226	弥生土器	壷	SI	112	―	―	―		良	文様	ナデ , 押圧	橙	にぶい黄橙	平行文 , 刻み
第 52 図	227	弥生土器	甕	SI	78	22.2	11.2	41.1		良	横ナデ , ナデ , ハケメ	ナデ , ハケメ	明黄橙 , 黒	にぶい黄橙 , 黒褐	
第 52 図	228	弥生土器	甕	SI	78	(21.3)	―	(5.4)		良	横ナデ , ハケメ	ハケメ	橙	橙	
第 52 図	229	弥生土器	甕	SI	78	―	―	(15.0)		良	横ナデ , ナデ , ハケメ , タタキ	ナデ , ハケメ	にぶい橙	にぶい橙	
第 52 図	230	弥生土器	甕	SI	78	―	(10.5)	(11.2)		良	横ナデ , ナデ , ハケメ , 押圧	ハケメ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
第 52 図	231	弥生土器	甕	SI	78	―	(10.6)	(4.3)		良	横ナデ , ハケメ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい褐	
第 52 図	232	弥生土器	円盤形土製品	SI	78	5.8	5.4	0.6		良	ハケメ	ハケメ	にぶい黄褐	灰黄褐	甕胴部 (底部付近) 再加工
第 52 図	233	弥生土器	壷	SI	78	―	―	―		良	文様 , ミガキ , ハケメ	ナデ , 押圧	橙	明黄褐	重弧文 , 平行文 , 刻み
第 52 図	234	土製品	管玉	SI	78	2.0	0.6	0.6	0.9	良					孔径 0.2㎝× 0.2㎝
第 53 図	235	石器	石鏃	SI	78	1.9	1.2	0.3	2.5	黒曜石					
第 53 図	236	石器	石鏃	SI	78	2.3	1.6	0.2	0.8	安山岩					
第 53 図	237	石器	石核	SI	78	2.1	3.8	2.1	14.1	黒曜石					
第 53 図	238	石器	打製石斧 (十字形石器)	SI	78	5.8	5.0	1.2	18.7	粘板岩					
第 53 図	239	石器	打製石斧	SI	78	10.4	7.3	2.7	239.6	安山岩					
第 53 図	240	石器	磨製石斧	SI	78	14.1	5.4	3.8	356.6	頁岩					
第 53 図	241	石器	砥石	SI	78	12.7	6.1	3.7	403.6						
第 53 図	242	石器	砥石 (有溝)	SI	78	11.0	11.6	3.5	507.7	砂岩					
第 53 図	243	石器	磨石類	SI	78	13.9	11.1	3.8	747.0						

挿図番号	番号	種　別	器　　種	出土地点		法量（cm）				焼成（石材）	調　　整		色　　調		備　　考
				種別	番号	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	重さ（g）		外器面	内器面	外面	内面	
第 53 図	244	石器	石皿（砥石か） 磨石類か	SI	78	9.9	7.8	8.5	993.0						
第 53 図	245	石器	磨石類	SI	78	8.4	8.9	3.9	389.6						
第 54 図	246	石器	磨石類	SI	78	12.9	12.6	7.9	2004.0						
第 54 図	247	石器	磨石類	SI	78	6.6	5.8	3.1	154.2						
第 54 図	248	石器	石皿	SI	78	12.0	16.7	8.7	2152.0						
第 54 図	249	石器	磨石類	SI	78	12.2	6.7	3.2	377.6						
第 55 図	250	弥生土器	甕	SI	85,82	22.6	12.3	38.5		良	横ナデ , 工具ナデ , ナデ , ハケメ	横ナデ , ナデ , ハケメ	橙 , 黒褐	明赤褐 , 黒	
第 55 図	251	弥生土器	甕	SI	85	(23.9)	―	(8.3)		良	横ナデ , ナデ , ハケメ	横ナデ , ハケメ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	
第 55 図	252	弥生土器	甕	SI	85	17.4	9.3	26.0		良	横ナデ , 工具ナデ , ナデ , 押圧	横ナデ , 工具ナデ , ナデ	にぶい黄橙 , 灰黄褐	にぶい黄橙	
第 55 図	253	石器	石核	SI	85	4.5	9.0	5.5	194.1	珪質頁岩					
第 56 図	254	石器	石核	SI	85	3.3	4.9	2.5	39.1	黒曜石					
第 56 図	255	石器	石皿	SI	85	22.7	16.2	7.9	3817.0						使用面 2 面
第 56 図	256	石器	石皿類か	SI	85	31.5	11.5	8.5	3729.0						
第 56 図	257	石器	砥石（有溝）	SI	85	22.6	20.1	10.7	7700.0						
第 57 図	258	弥生土器	甕	SI	80	16.5	(11.8)	37.0		良	横ナデ , ナデ , ハケメ , タタキ	横ナデ , ナデ , ハケメ	橙 , 黒	にぶい黄橙	
第 57 図	259	弥生土器	高坏	SI	80	―	―	(13.4)		良	工具ナデ , ナデ , ハケメ , しぼり痕	―	橙	橙	
第 57 図	260	弥生土器	甕	SI	80	―	(16.3)	(6.9)		良	横ナデ , ナデ , 押圧	―	にぶい黄橙	にぶい黄橙 , 橙	
第 57 図	261	弥生土器	甕	SI	80	―	(19.6)	(8.0)		良	横ナデ , ナデ , ハケメ	―	明赤褐	橙	
第 58 図	262	石器	石核	SI	80	2.8	3.1	2.1	15.8	黒曜石					
第 58 図	263	石器	磨石類	SI	80	5.9	5.6	2.2	99.0	砂岩					
第 58 図	264	石器	磨石類	SI	80	10.7	11.0	4.8	785.0						
第 58 図	265	石器	石皿・台石	SI	80	40.5	54.4	13.0	36600.0						
第 59 図	266	弥生土器	高坏か 台付鉢か	SI	81	―	―	―		良	横ナデ , ナデ	―	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第 59 図	267	鉄器	鉄鏃	SI	81	7.0	2.3	0.5	9.0						基部欠損
第 59 図	268	弥生土器	甕	SI	86	―	(11.6)	(5.8)		良	横ナデ , ナデ , ハケメ , 押圧	ナデ	橙	橙	
第 59 図	269	弥生土器	壷	SI	86	(18.1)	―	(7.9)		良	文様 , 横ナデ , ナデ , ハケメ	横ナデ , ナデ	にぶい橙	にぶい橙	口縁に刻目
第 59 図	270	鉄器	鉄鏃	SI	86	4.0	1.8	0.15	2.4						
第 61 図	271	弥生土器	甕	SI	82,87	―	15.2	(9.1)		良	横ナデ , ナデ , ハケメ , タタキ	―	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第 61 図	272	石製品	管玉	SI	82	1.2	0.6	0.5	0.6						孔径 0.15cm × 0.1cm
第 61 図	273	石器	石鏃	SI	82	1.5	1.5	0.3	0.4	安山岩					
第 61 図	274	石器	砥石	SI	82	7.5	4.8	1.7	105.6	絶色片岩					

挿図番号	番号	種　別	器　　種	出土地点		法量（cm）				焼成（石材）	調　　整		色　　調		備　　考
				種別	番号	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	重さ（g）		外器面	内器面	外面	内面	
第 61 図	275	石器	磨石類	SI	82	4.7	6.6	1.6	65.8	安山岩					
第 61 図	276	石器	磨石類	SI	82	12.0	10.6	4.4	827.4						
第 62 図	277	弥生土器	高坏	SI	87,82	―	―	(5.9)		良	横ナデ , ナデ , ミガキ , ハケメ	文様 , ナデ	にぶい橙 , 赤（丹）	橙	外器面に丹塗り・内器面に暗文
第 62 図	278	石器	磨石類	SI	87	10.6	9.0	7.5	894.0						被熱あり
第 62 図	279	石器	石皿・砥石	SI	87	23.2	21.6	6.7	5289.0						使用面 1 面　被熱あり
第 62 図	280	弥生土器	鉢	SI	88,82	(14.4)	―	(11.1)		良	横ナデ , ナデ , ハケメ	横ナデ , ナデ , ハケメ , 押圧	にぶい橙	にぶい黄橙	外器面に赤色顔料か
第 62 図	281	土製品	丸玉	SI	88	1.1	0.8	0.8		良			黒		孔径 0.25cm × 0.25cm
第 62 図	282	石器	石核	SI	88	2.7	2.9	2.0	12.4	黒曜石					
第 62 図	283	石器	石核	SI	88	1.5	1.7	2.1	3.5	黒曜石					
第 63 図	284	石器	砥石	SI	88	17.5	14.6	3.2	967.0						使用面 1 面
第 63 図	285	石器	砥石	SI	88	11.0	10.6	1.6	252.4	砂岩					使用面 1 面
第 64 図	286	弥生土器	甕	SI	83	(15.1)	―	(11.0)		良	横ナデ , ハケメ , タタキ	横ナデ , ハケメ	浅黄橙 , 黒褐	浅黄橙 , 褐灰	
第 64 図	287	弥生土器	甕	SI	83	19.9	―	(36.4)		良	横ナデ , ナデ , ハケメ	横ナデ , ナデ , ハケメ	にぶい黄橙 , 黒	にぶい黄橙 , 黒褐	
第 64 図	288	弥生土器	甕	SI	83	20.2	―	(41.5)		良	横ナデ , ナデ , ハケメ , タタキ	横ナデ , ハケメ	にぶい黄橙 , 黒褐	にぶい黄橙	口縁～胴部上位 2/3 まで全体的に赤変
第 64 図	289	弥生土器	甕	SI	83	―	(12.4)	(6.0)		良	横ナデ , ハケメ	―	橙	橙	
第 64 図	290	弥生土器	甕	SI	83	―	13.3	(11.4)		良	横ナデ , ナデ , ハケメ	ナデ , ハケメ	黄橙	にぶい黄橙	
第 65 図	291	弥生土器	鉢	SI	83	(15.0)	―	(9.3)		良	横ナデ , ナデ , ハケメ	ナデ , 工具ナデ (ハケメ), 押圧	にぶい黄橙 , 暗灰	にぶい黄橙 , 黒褐	
第 65 図	292	弥生土器	甕	SI	83	(18.4)	―	(9.8)		良	横ナデ , ハケメ	横ナデ , ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第 65 図	293	弥生土器	壷	SI	83,84,90,98	17.9	―	27.7		良	横ナデ , ナデ , ハケメ	ナデ , ハケメ	橙	橙	
第 65 図	294	弥生土器	壷	SI	83	(14.3)	―	31.7		良	横ナデ , 工具ナデ , ナデ , ハケメ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	
第 65 図	295	弥生土器	壷	SI	83	(16.4)	―	(13.9)		良	横ナデ , ハケメ	横ナデ , ナデ , ハケメ	浅黄橙	浅黄橙	
第 65 図	296	弥生土器	壷	SI	83,84,90	(12.7)	6.1	35.8		良	横ナデ , ナデ , ハケメ	ナデ , ハケメ	にぶい黄	にぶい黄褐	
第 65 図	297	弥生土器	壷	SI	83	(14.5)	―	(3.6)		良	横ナデ , ハケメ	横ナデ	にぶい橙色	にぶい黄褐	複合口縁
第 65 図	298	弥生土器	長頸壷	SI	83,90	―	―	(23.7)		良	文様 , 横ナデ , ナデ , ミガキ , ハケメ , ケズリ	ナデ , ハケメ	橙 , 黒	にぶい黄橙 , 黒	平行文 , 刻み , 重弧文
第 65 図	299	弥生土器	高坏	SI	83	(27.8)	―	(6.1)		良	横ナデ , ナデ , ハケメ	横ナデ , ミガキ , ハケメ (暗文)	灰褐 , にぶい橙	褐灰 , 灰褐	暗文
第 66 図	300	石器	石鏃	SI	83	2.5	1.7	0.3	0.7	安山岩					
第 66 図	301	石器	石核	SI	83	2.7	4.0	2.2	17.3	黒曜石					
第 66 図	302	石器	磨石類	SI	83	8.6	7.1	5.6	360.4						
第 66 図	303	石器	台石	SI	83	53.4	18.3	8.9	12000.0						
第 66 図	304	石器	石皿	SI	83	9.9	5.5	2.8	226.5						被熱有
第 66 図	305	石器	砥石 (有溝)	SI	83	11.4	15.2	2.6	699.8	砂岩					使用面 1 面

挿図番号	番号	種　別	器　　種	出土地点		法量（cm）				焼成（石材）	調　　整		色　　調		備　　考
				種別	番号	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	重さ（g）		外器面	内器面	外面	内面	
第 67 図	306	石器	石皿か	SI	83	14.1	10.9	6.4	1270.0						
第 67 図	307	石器	石皿	SI	83	21.5	11.0	12.1	3916.0						使用面 3 面
第 67 図	308	石器	石皿	SI	83	10.7	10.6	10.0	1798.0						使用面 1 面
第 68 図	309	弥生土器	甕	SI	84,90	(19.6)	―	(8.1)		良	横ナデ , ハケメ	横ナデ , ハケメ	橙 , 灰褐	橙	
第 68 図	310	弥生土器	甕	SI	84,90	20.0	12.3	(40.4)		良	横ナデ , ハケメ	横ナデ , ナデ , ハケメ	にぶい橙	橙	
第 68 図	311	弥生土器	甕	SI	84,90	―	―	―		良	横ナデ , 工具ナデ , ハケメ	横ナデ , ナデ , ハケメ	にぶい橙	にぶい褐	
第 68 図	312	弥生土器	甕	SI	84,90,98	―	―	―		良	ハケメ	ハケメ	橙	橙	
第 69 図	313	弥生土器	台付鉢	SI	84	(17.3)	―	(9.5)		良	横ナデ , 工具ナデ , ミガキ , ハケメ , ケズリ	横ナデ , 工具ナデ , ナデ , ハケメ	橙	橙	
第 69 図	314	弥生土器	鉢	SI	84	(14.8)	4.7	18.7		良	横ナデ , ナデ , ミガキ , ハケメ	ナデ , ハケメ	明黄褐	にぶい黄橙	
第 69 図	315	弥生土器	壷	SI	84	―	(4.7)	(7.2)		良	ナデ , ハケメ	ハケメ	にぶい黄橙	橙	
第 69 図	316	弥生土器	壷	SI	84,90,80	―	―	(49.5)		良	横ナデ , ナデ , ハケメ	横ナデ , ナデ , ハケメ	橙 , 赤灰	にぶい橙 , 褐灰	複合口縁
第 69 図	317	弥生土器	高坏	SI	84,95	38.2	―	(23.8)		良	横ナデ , 工具ナデ , ミガキ	ミガキ	橙 , 明赤褐	橙色	脚部に穿孔の痕跡 3 箇所
第 69 図	318	弥生土器	高坏	SI	84	―	(19.0)	(5.2)		良	横ナデ , ナデ , ハケメ , ケズリ	―	灰白 , 浅黄橙	浅黄橙	
第 70 図	319	石器	石錐	SI	84	2.3	2.0	0.8	2.5	チャート					
第 70 図	320	石器	磨石類	SI	84	13.2	10.4	3.8	781.0						被熱
第 70 図	321	石器	磨石類	SI	84	12.0	11.9	5.6	1044.0						
第 70 図	322	石器	石皿	SI	84	23.8	8.3	11.2	2284.0						使用面 1 面
第 71 図	323	弥生土器	甕	SI	90	(21.6)	―	(8.4)		良	横ナデ , ハケメ	横ナデ , ハケメ	にぶい橙	にぶい橙	
第 71 図	324	弥生土器	壷	SI	90	―	4.2	(2.0)		良	ナデ , ヘラ状工具痕	ナデ , 押圧	にぶい黄橙	浅黄橙	板目痕
第 71 図	325	弥生土器	壷	SI	90	―	4.3	(5.4)		良	ハケメ	工具ナデ , ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第 71 図	326	弥生土器	壷	SI	90,98	―	―	(7.9)		良	文様 , ナデ , ハケメ	ナデ , ハケメ	にぶい黄橙 , にぶい黄褐	にぶい黄橙 , 暗灰黄	平行文 , 重弧文
第 71 図	327	石製品	管玉	SI	90	0.9	0.5	0.4	0.1						孔径 0.25cm × 0.25cm
第 71 図	328	石器	石匙	SI	90	2.7	3.8	0.7	4.2	黒曜石					
第 71 図	329	石器	敲石か	SI	90	6.8	7.4	5.7	416.9	頁岩					
第 71 図	330	鉄器	摘鎌	SI	90	2.5	8.5	0.6	15.8						
第 71 図	331	鉄器	素環頭刀子	SI	90	13.1	2.0	0.3	15.5						
第 73 図	332	弥生土器	甕	SI	98,90	(23.3)	―	(35.9)		良	横ナデ , ナデ , ハケメ , 面取り	横ナデ , ナデ , ハケメ , 押圧	にぶい黄橙 , にぶい橙	にぶい黄橙 , にぶい黄褐	
第 73 図	333	弥生土器	甕	SI	98,90	17.6	11.3	35.0		良	横ナデ , 工具ナデ , ナデ , ハケメ	横ナデ , ナデ , ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第 73 図	334	弥生土器	壷	SI	98	―	―	(12.3)		良	ミガキ , ハケメ	ナデ , ハケメ	にぶい黄橙 , 褐灰	にぶい黄橙 , 黒褐	
第 73 図	335	弥生土器	高坏	SI	98	27.0	―	(16.5)		良	横ナデ , ナデ , ハケメ , 押圧	横ナデ , ハケメ , 工具ナデ	橙	橙	
第 73 図	336	弥生土器	高坏	SI	98,90	20.2	13.8	18.6		良	横ナデ , ナデ , ミガキ , ハケメ , 押圧	工具ナデ , ナデ , ハケメ	橙	橙	
第 74 図	337	石器	石鏃	SI	98	2.6	1.9	0.3	1.4	安山岩					

挿図番号	番号	種　別	器　　種	出土地点		法量（cm）				焼成（石材）	調　　整		色　　調		備　　考
				種別	番号	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	重さ（g）		外器面	内器面	外面	内面	
第 74 図	338	石器	磨石類	SI	98	13.8	11.5	6.6	1541.0						全体的に被熱
第 74 図	339	黒色土器	椀	SI	98	―	5.3	(3.3)		良	回転ナデ , ヘラ切り後ナデ	ミガキ	橙	黒褐	黒色土器 A 類
第 74 図	340	須恵器	坏	SI	98	―	(7.0)	(1.7)		良	回転ナデ , ヘラ切り後ナデ , ヘラ状工具痕	回転ナデ , 静止ナデ	灰白	灰白	
第 74 図	341	須恵器	椀	SI	98	―	(10.8)	(1.6)		良	回転ナデ , ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	灰黄	浅黄	高台内に墨書「寿」か
第 74 図	342	縄文土器	深鉢	SI	98	―	―	―		良	ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙 , 褐灰	にぶい黄橙	
第 74 図	343	縄文土器	深鉢	SI	98	―	―	―		良	文様	ナデ	黒褐	にぶい黄褐	撚糸文か
第 75 図	344	弥生土器	壷	SI	91	(15.3)	―	(8.7)		やや不良	横ナデ , ハケメ	横ナデ , ナデ , ハケメ	浅黄	灰黄	
第 75 図	345	弥生土器	鉢	SI	91	(18.6)	5.6	12.9		良	横ナデ , ナデ , ハケメ	横ナデ , ナデ , ハケメ	橙	橙 , 褐灰	
第 75 図	346	石器	磨製石斧	SI	91	9.1	5.0	1.8	107.0	蛇紋岩					再加工か
第 77 図	347	石器	磨石類	SI	103	13.5	8.0	3.9	544.3	砂岩					砂岩
第 77 図	348	石器	磨石類	SI	103	11.8	8.2	2.8	329.8						砂岩
第 78 図	349	弥生土器	甕	SI SK	108 38	(22.8)	(8.8)	30.6		良	横ナデ , ナデ , ハケメ	ナデ , ハケメ	橙 , にぶい黄褐	明赤褐 , にぶい黄褐	
第 78 図	350	弥生土器	甕	SI	108	―	9.2	(3.5)		良	横ナデ , ナデ , ハケメ , 押圧	―	橙	橙	
第 78 図	351	弥生土器	甕	SI	108	―	11.8	(8.9)		良	横ナデ , ナデ , ハケメ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第 78 図	352	弥生土器	壷	SI	108	(30.1)	―	(25.1)		良	横ナデ , ハケメ	横ナデ , ナデ , ハケメ	橙	橙	
第 78 図	353	弥生土器	長頸壷	SI	108	―	―	―		良	ハケメ	ハケメ	にぶい黄橙 , 黒褐	橙	
第 78 図	354	石器	石鏃	SI	108	2.2	1.8	0.2	0.6	安山岩					
第 79 図	355	石器	台石	SI	108	28.0	22.2	6.3	6600.0						
第 82 図	356	土師器	鉢	SI	75	24.6	―	11.5		良	横ナデ , ハケメ , 押圧	ハケメ , ナデ , ヘラケズリ	にぶい黄橙	浅黄橙	
第 82 図	357	須恵器	坏	SI	75	―	5.8	(1.3)		良	回転ナデ , ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	灰	灰	
第 82 図	358	石器	石鏃 (未製品)	SI	75	2.5	1.7	0.6	2.5	黒曜石					
第 82 図	359	石器	砥石 (有溝)	SI	75	21.2	13.1	10.1	3295.0	砂岩					使用面 1 面
第 83 図	360	石器	石鏃 (未製品)	SI	79	1.8	1.3	0.5	0.9	黒曜石					
第 83 図	361	石器	磨石類	SI	79	11.6	8.9	4.9	727.6						全体的に被熱
第 85 図	362	須恵器	蓋	SB	4	(15.4)	―	1.7		良	回転ナデ , ヘラ切り後ナデ , 面取り	回転ナデ , ナデ	灰	灰	外面に降灰
第 86 図	363	土師器	坏か	SB	5	(18.2)	(10.1)	(1.7)		良	回転ナデ , 回転ヘラケズリ	回転ナデ , ナデ	橙	橙	
第 87 図	364	石器	石鏃	SB	6	1.4	1.4	0.2	0.3	黒曜石					
第 87 図	365	石器	石核	SB	6	3.1	3.8	4.3	43.3	黒曜石					
第 89 図	366	土師器	鉢	SK	40	(26.4)	―	(5.7)		良	横ナデ	横ナデ , ケズリ	橙	橙	
第 89 図	367	土師器	甕	SK	40	(24.5)	―	(6.0)		良	横ナデ	横ナデ , ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第 89 図	368	土師器	甕	SK	40	(27.0)	―	(5.9)		良	横ナデ , ハケメ	横ナデ , ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	

挿図番号	番号	種　別	器　　種	出土地点		法量（cm）				焼成（石材）	調　　整		色　　調		備　　考
				種別	番号	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	重さ（g）		外器面	内器面	外面	内面	
第 89 図	369	黒色土器	椀	SK	41	(16.8)	7.9	7.3		良	回転ナデ , 回転ヘラケズリ	ミガキ	にぶい橙	暗灰	黒色土器 A 類
第 89 図	370	須恵器	椀	SK	41	―	(9.1)	(1.6)		良	回転ナデ , ヘラ切り後ナデ	回転ナデ , ナデ	灰黄	暗灰黄	高台内側に吹出し
第 89 図	371	土師器	甕	SK	42	―	―	(2.6)		良	横ナデ	横ナデ	にぶい褐	にぶい橙色	
第 89 図	372	土師器	甕	SK	42	―	―	(1.8)		良	横ナデ	横ナデ	橙	にぶい橙	
第 89 図	373	土師器	托か	SK	42	―	―	(2.5)		良	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	
第 90 図	374	黒色土器	坏	SK	43	―	―	(1.7)		良	調整不明瞭	ミガキ	浅黄橙	黒褐	黒色土器 A 類
第 90 図	375	土師器	坏	SK	43	―	(7.0)	(1.2)		良	回転ナデ , ヘラ切り	回転ナデ	浅黄橙	黄橙	
第 90 図	376	土師器	坏	SK	43	―	―	(2.8)		良	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	
第 90 図	377	須恵器	坏	SK	43	(12.7)	6.5	4.8		良	回転ナデ , ヘラ挿入痕	回転ナデ	灰白 , 灰	灰白	口縁部外面に重ね焼きの痕跡
第 90 図	378	須恵器	坏	SK	43	13.2	6.5	4.1		良	回転ナデ , ヘラ切り後ナデ , 圧痕	回転ナデ , ナデ	灰黄 , 黄灰	灰黄	底部に板目痕
第 90 図	379	土師器	甕	SK	43	―	―	(2.0)		良	横ナデ	ハケメ , ケズリ	橙	橙	
第 90 図	380	土師器	甕	SK	43	―	―	(2.1)		良	横ナデ	ハケメ , ケズリ	橙	橙	
第 90 図	381	土師器	甕	SK	43	―	―	(6.9)		良	ナデ , ハケメ	横ナデ , ヘラケズリ	橙	橙	
第 90 図	382	土師器	甕	SK	43	(24.8)	―	(9.0)		良	横ナデ , ハケメ	横ナデ , ハケメ , ケズリ	浅黄橙 , 橙	橙	
第 90 図	383	土師器	甕	SK	43	(26.3)	―	(12.4)		良	横ナデ , 回転ナデ , ハケメ	横ナデ , 回転ナデ , ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第 90 図	384	土製品	紡錘車	SK	43	5.4	3.4	1.1		良	ナデ		にぶい橙		孔径 0.8cm × (0.7)cm
第 90 図	385	石器	石皿か	SK	43	14.8	14.8	4.7	1184.0						
第 91 図	386	須恵器	坏	SK	45	(13.3)	(8.0)	(3.9)		良	回転ナデ , ヘラ切り後ナデ	回転ナデ , ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	重ね焼きの痕跡か
第 91 図	387	須恵器	椀	SK	45	―	(8.0)	(1.1)		良	回転ナデ , ヘラ切り後未調整	回転ナデ	黄灰	灰黄	
第 91 図	388	須恵器	蓋	SK	48	―	―	―		良	回転ナデ , ナデ	回転ナデ , ナデ	灰	灰	硯に転用か
第 91 図	389	石器	磨石類	SK	48	10.6	9.4	4.8	656.7						使用面 2 面
第 91 図	390	土師器	鉢	SK	49	―	―	(6.8)		良	横ナデ , ハケメ	横ナデ , ケズリ	にぶい黄橙	橙	
第 91 図	391	土師器	鉢	SK	49	24.3	―	20.0		良	横ナデ , ハケメ	横ナデ , ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	口縁打ち欠き , 内器面頸部に布目痕か
第 92 図	392	須恵器	坏	SK	56	13.2	7.6	4.3		良	回転ナデ , ヘラ切り	回転ナデ , ナデ	浅黄	灰黄	
第 92 図	393	土師器	鉢	SK	56	(28.1)	―	10.4		良	回転ナデ , ハケメ	ナデ , 押圧 , ケズリ	にぶい黄橙 , 黒褐	浅黄橙	
第 95 図	394	石器	石鏃 (未製品)	SD	30	2.3	2.0	0.8	2.4	黒曜石					
第 95 図	395	石器	二次加工剥片（石匙未製品か）	SD	30	4.5	3.8	0.7	9.4	黒曜石					
第 95 図	396	石器	石核	SD	30	2.1	3.0	2.8	14.7	黒曜石					
第 95 図	397	石器	打製石斧	SD	30	11.7	5.9	2.0	150.6	安山岩					
第 95 図	398	石器	打製石斧	SD	30	12.9	5.1	2.5	154.5	頁岩					
第 95 図	399	石器	打製石斧	SD	30	7.9	9.3	2.6	243.0	安山岩					
第 95 図	400	磁器染付	碗	SD	31	―	(4.4)	(2.7)		良	施釉（染付）	施釉（染付）	灰白	灰白	草花文 , 釉剥ぎ箇所に溶着痕

挿図番号	番号	種　別	器　　種	出土地点		法量（cm）				焼成（石材）	調　　整		色　　調		備　　考
				種別	番号	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	重さ（g）		外器面	内器面	外面	内面	
第 95 図	401	磁器染付	碗	SD	31,32	10.5	4.3	5.9		良	施釉 (染付)	施釉 (染付)	灰白	灰白	草花文 , 見込みは岩波文
第 95 図	402	石器	石鏃	SD	31	2.6	1.4	0.3	1.0	黒曜石					
第 95 図	403	石器	石匙	SD	31	3.0	5.0	1.1	10.0	安山岩					
第 95 図	404	石器	打製石斧	SD	31	9.7	6.1	1.4	101.1	緑色片岩					
第 95 図	405	石器	打製石斧	SD	31	13.0	5.5	1.9	156.1	安山岩					
第 96 図	406	石器	石鏃	SD	32	1.9	1.3	0.2	0.6	安山岩					
第 96 図	407	石器	石核	SD	32	2.0	2.4	2.2	10.7	黒曜石					
第 96 図	408	石器	打製石斧	SD	32	15.3	8.4	3.3	455.3	安山岩					
第 96 図	409	石器	打製石斧	SD	32	8.0	7.4	3.0	219.0	安山岩					
第 96 図	410	石器	石鏃	SD	36	2.6	1.4	0.3	1.4	安山岩					
第 96 図	411	石器	石鏃 (未製品)	SD	39	2.0	1.5	0.5	1.4	黒曜石					
第 96 図	412	石器	石鏃	SX	1	2.0	1.7	0.2	0.7	安山岩					
第 96 図	413	石器	石鏃 (未製品)	SX	1	1.3	1.5	0.3	0.5	黒曜石					
第 96 図	414	石器	石庖丁片	SX	1	4.2	2.6	0.5	7.9						
第 96 図	415	石器	打製石斧	SX	1	13.3	9.8	2.4	410.6	安山岩					
第 96 図	416	石器	打製石斧	SX	1	11.7	4.9	2.8	229.3	ホルンフェルス					
第 96 図	417	石器	磨製石斧	SX	1	12.0	6.1	4.4	424.1	安山岩					
第 97 図	418	土製品	円盤形土製品	SX	1	1.7	1.7	0.9		良	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
第 97 図	419	土製品	丸玉	SX	1	1.4	1.4	1.3		良	ナデ	ナデ	橙	橙	
第 97 図	420	石製品	不明石製品	SX	1	3.0	0.6	0.6	1.3						
第 97 図	421	縄文土器	浅鉢	SX	1	―	―	(10.0)		良	工具ナデ , ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙 , にぶい黄褐	にぶい褐	
第 97 図	422	縄文土器	深鉢	SX	1	(31.0)	―	(23.1)		良	横ナデ , ミガキ	横ナデ , ミガキ	黒褐 , にぶい黄橙	にぶい黄橙	補修孔
第 97 図	423	瓦	平瓦	SX	1	21.7	20.1	2.7		良	凹面：布目痕 凸面：縄目痕	―	凹面：にぶい黄橙	凸面：にぶい黄橙	
第 97 図	424	鉄器	手斧	SX	1	4.2	4.5	0.9	24.4						
第 98 図	425	縄文土器	深鉢	SK	37	―	(10.2)	(2.3)		良	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第 98 図	426	縄文土器	深鉢	SK	37	―	(10.8)	(5.2)		良	貝殻条痕 , ナデ , 押圧	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙 , 黒褐	
第 98 図	427	須恵器	椀か	SK	39	―	―	(3.3)		良	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白	重ね焼きの痕跡
第 98 図	428	石器	磨石類	SK	39	6.6	5.1	2.7	111.5						
第 98 図	429	石器	砥石 (有溝)	SK	39	9.5	11.2	2.9	328.4	砂岩					
第 99 図	430	縄文土器	深鉢	SK	46	―	―	(5.9)		良	文様 , 横ナデ , ナデ	貝殻条痕 , 横ナデ , ナデ	黒褐	にぶい黄褐	隆起線文
第 99 図	431	縄文土器	深鉢	SK	46	―	―	(2.8)		良	文様 , ナデ	貝殻条痕 , ナデ	黒褐	にぶい黄褐	隆起線文
第 99 図	432	縄文土器	鉢	SK	46	―	―	―		良	文様	貝殻条痕 , ナデ	灰黄	黄灰	刺突文

挿図番号	番号	種　別	器　　種	出土地点		法量（cm）				焼成（石材）	調　　整		色　　調		備　　考
				種別	番号	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	重さ（g）		外器面	内器面	外面	内面	
第 99 図	433	石器	打製石斧	SK	46	10.6	7.1	1.7	175.0	安山岩					
第 99 図	434	石器	磨石類	SK	46	8.2	8.3	5.4	512.9	安山岩か					
第 99 図	435	縄文土器	浅鉢	SK	50,51	(32.2)	―	(12.4)		良	貝殻条痕 , 横ナデ , ナデ , ミガキ	ナデ , ミガキ	黒褐	にぶい褐	
第 99 図	436	石器	磨石類	SK	51	4.3	4.3	1.8	44.1						
第 100 図	437	縄文土器	深鉢	SK	63	―	―	(3.0)		良	文様 , 貝殻条痕 , ナデ , 押圧	貝殻条痕 , ナデ	橙	橙	隆起線文
第 100 図	438	石器	石皿	SK	60	30.0	24.4	5.5	4185.0						
第 101 図	439	縄文土器	深鉢	SK	58	(20.0)	―	(10.5)		良	貝殻条痕 , 横ナデ , ナデ	貝殻条痕 , ナデ	褐灰	にぶい黄橙	
第 102 図	440	縄文土器	浅鉢	SK	77	(35.5)	―	(8.3)		良	沈線 , ミガキ	ミガキ	浅黄橙 , 灰黄褐	灰黄褐 , 浅黄橙	
第 104 図	441	石器	石鏃	Pit	444	2.4	1.6	0.5	1.7	黒曜石					
第 104 図	442	石器	石鏃	Pit	531	2.8	1.7	0.4	1.3	チャート					
第 104 図	443	石器	石鏃 (未製品)	Pit	515	1.9	1.2	0.3	0.7	黒曜石					
第 104 図	444	石器	石核	Pit	403	2.7	2.3	2.2	13.3	黒曜石					
第 104 図	445	石製品	勾玉	Pit	271	3.2	2.4	1.3	12.1	黒曜石					孔未貫通
第 104 図	446	石器	磨製石斧	Pit	404	11.1	5.1	1.8	129.5	頁岩					

3 区遺構外　　法量（　　）は復元値。焼成は良 , やや不良 , 不良の 3 段階に分ける。

挿図番号	番号	種　別	器　　種	出土地点		法量（cm）				焼成（石材）	調　　整		色　　調		備　　考
				種別	番号	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	重さ（g）		外器面	内器面	外面	内面	
第 105 図	447	縄文土器	深鉢	表土		―	―	(4.0)		良	押型	押型	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第 105 図	448	縄文土器	深鉢	T	24	―	―	(2.3)		良	刺突文	ナデ	橙	橙	
第 105 図	449	縄文土器	深鉢	R	21	―	―	(4.3)		良	刻み , 刺突文	貝殻条痕	橙	橙	
第 105 図	450	縄文土器	深鉢	U	24	―	―	(12.9)		良	貝殻条痕 , 横ナデ	横ナデ , ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	
第 105 図	451	縄文土器	深鉢	W	23	―	―	(12.8)		良	貝殻条痕 , 工具ナデ , ナデ	ナデ , 押圧	にぶい黄褐	灰黄褐	
第 105 図	452	縄文土器	深鉢	V	24	―	―	(12.0)		良	貝殻条痕 , ナデ	ナデ , 押圧	にぶい褐 , にぶい橙	灰黄褐 , 橙	
第 105 図	453	縄文土器	深鉢	V	22	―	―	(8.5)		良	文様 , 貝殻条痕 , 横ナデ	横ナデ , ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
第 105 図	454	縄文土器	深鉢	M	17	(15.2)	―	(19.1)		良	貝殻条痕 , ナデ , 押圧	横ナデ , ナデ , 押圧	灰黄褐 , にぶい黄橙	灰黄褐	
第 105 図	455	縄文土器	深鉢	V	24	―	(14.7)	(6.8)		良	調整不明瞭	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	
第 105 図	456	縄文土器	深鉢	T	14	―	―	(16.0)		良	貝殻条痕 , ナデ	貝殻条痕 , 押圧	灰褐（7.5YR　4/2）	にぶい褐	LAB 値（口縁） 外 L=33.1　A=2.6　B=4.2 内 L=37.7　A=4.8　B=7.4
第 105 図	457	縄文土器	深鉢	T	14	―	―	―		良	貝殻条痕	貝殻条痕	橙	にぶい褐	
第 105 図	458	縄文土器	深鉢	P	19	―	―	―		良	貝殻条痕	貝殻条痕 , ナデ	橙	にぶい黄褐	
第 105 図	459	縄文土器	深鉢	T	13,14	―	―	―		良	貝殻条痕 , 一部分ナデ , ナデ	貝殻条痕	にぶい橙	にぶい黄橙 , 橙	

挿図番号	番号	種　別	器　　種	出土地点		法量（cm）				焼成（石材）	調　　整		色　　調		備　　考
				種別	番号	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	重さ（g）		外器面	内器面	外面	内面	
第 105 図	460	縄文土器	深鉢	T	13,14	―	―	―		良	貝殻条痕，一部分ナデ，ナデ	貝殻条痕	にぶい橙（7.5YR　6/4）	にぶい黄橙，橙	LAB 値（底部） 外 L=51.5　A=5.0　B=12.3 内 L=42.6　A=9.2　B=12.9
第 105 図	461	縄文土器	鉢	T	21	(14.8)	―	(6.6)		良	文様，貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい橙	明赤褐	隆起線文
第 105 図	462	縄文土器	深鉢	T	21	―	―	(4.7)		良	貝殻条痕	貝殻条痕	橙，にぶい赤褐	橙	隆起線文
第 105 図	463	縄文土器	深鉢	T	23	―	―	(9.8)		良	貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい赤褐	明赤褐	隆起線文
第 106 図	464	縄文土器	深鉢	T	21	―	―	(4.4)		良	貝殻条痕，ナデ	貝殻条痕	褐灰	灰褐	突帯
第 106 図	465	縄文土器	鉢	T	23	―	―	―		良	文様	貝殻条痕，押圧	橙	にぶい橙	刺突文，刻目突帯（縦位）
第 106 図	466	縄文土器	深鉢	T	22	―	―	―		良	文様，貝殻条痕	貝殻条痕，押圧	にぶい橙	にぶい褐	刺突文，刻目突帯
第 106 図	467	縄文土器	深鉢	N	15,16	―	―	(4.1)		良	文様，横ナデ，ナデ	文様，ナデ	にぶい黄橙色，赤（赤彩）	橙	外器面に赤彩，縄目，刺突文
第 106 図	468	縄文土器	浅鉢	N	16	―	―	―		良	文様，ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	外器面に赤彩，縄目，刺突文
第 106 図	469	縄文土器	深鉢	N	16	―	―	―		良	文様，横ナデ	ナデ	灰黄褐，赤彩：暗赤	橙	外器面に赤彩，縄目，刺突文
第 106 図	470	縄文土器	深鉢	U	24	―	―	(4.8)		良		ナデ	にぶい橙	にぶい褐	
第 106 図	471	土製品	不明土製品	S	22	2.9	4.7	2.1		良			にぶい橙	にぶい褐	
第 106 図	472	縄文土器	深鉢	O	18	(41.4)	―	(7.2)		良	沈線，ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐，黒褐	にぶい黄橙，黒褐	
第 106 図	473	縄文土器	深鉢	N	16	(30.0)	―	(8.5)		良	沈線，横ナデ，横ミガキ	横ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	
第 106 図	474	縄文土器	浅鉢	P	16	(22.6)	―	(11.0)		良	文様，横ミガキ，ミガキ	横ミガキ，ミガキ	灰褐	黒褐	貼付の渦巻文（蕨手文）
第 106 図	475	縄文土器	深鉢	N	16	(34.8)	―	(14.9)		良	貝殻条痕，工具ナデ	貝殻条痕，ミガキ	灰黄褐	灰黄	補修孔
第 107 図	476	縄文土器	深鉢	O	16	―	―	(8.5)		良	貝殻条痕，ミガキ	横ミガキ，ナデ	黒褐	にぶい褐	補修孔
第 107 図	477	縄文土器	深鉢	N	15	(29.2)	―	(7.4)		良	沈線，横・斜めミガキ	横ミガキ	黒褐	褐灰	
第 107 図	478	縄文土器	深鉢	R S	18 19	―	―	(11.7)		良	貝殻条痕後ミガキ，横・斜めミガキ	横ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第 107 図	479	縄文土器	深鉢	P	14	(34.5)	―	(7.2)		良	工具ナデ，ナデ	工具ナデ	にぶい褐	にぶい橙	
第 107 図	480	縄文土器	深鉢	L	16	―	―	(12.8)		良	貝殻条痕，横ミガキ	貝殻条痕後ナデ，工具ナデ後粗いミガキ	にぶい橙	にぶい橙	
第 107 図	481	縄文土器	深鉢	O	17	(25.5)	―	(12.9)		良	貝殻条痕，横ナデ，ナデ	横ナデ，ナデ，工具ナデ	黒褐	明黄褐，灰黄褐	
第 107 図	482	縄文土器	深鉢	P O	17 17	(22.0)	―	(9.6)		良	横ナデ，工具ナデ，ミガキ	横ナデ，工具ナデ，ミガキ	にぶい黄橙，黒	にぶい黄橙，黒	
第 107 図	483	縄文土器	深鉢	O	18	(20.0)	―	(8.9)		良	工具ナデ，ミガキ	工具ナデ，ミガキ	にぶい黄橙，褐灰	にぶい黄橙，黒褐	
第 107 図	484	縄文土器	深鉢	N	15	(36.4)	―	(17.6)		良	工具ナデ後横ナデ	貝殻条痕，工具ナデ，ミガキ	灰黄褐	にぶい黄橙	
第 107 図	485	縄文土器	深鉢	R	18	(28.0)	―	(19.0)		良	貝殻条痕後ナデ	貝殻条痕，工具ナデ	橙	にぶい黄橙	
第 108 図	486	縄文土器	深鉢	L	16	(40.7)	―	(11.6)		良	貝殻条痕，横ナデ，工具ナデ	工具ナデ，ナデ	赤褐	明褐，にぶい橙	
第 108 図	487	縄文土器	深鉢	M	15,16	(49.8)	―	(14.7)		良	貝殻条痕，横ナデ	横ナデ，ミガキ	にぶい黄橙，褐灰	にぶい黄橙	
第 108 図	488	縄文土器	深鉢	N	16	(41.0)	―	(25.7)		良	文様，工具ナデ，ナデ，ミガキ	工具ナデ	にぶい黄橙，黒褐	にぶい黄橙	波状口縁頭頂部に凹点，把手あり（穿孔）
第 108 図	489	縄文土器	深鉢	L	16	(38.3)	―	(29.1)		良	貝殻条痕，ナデ，押圧	貝殻条痕，ナデ	橙，明赤褐	橙，明褐	

挿図番号	番号	種　別	器　　種	出土地点		法量（cm）				焼成（石材）	調　　整		色　　調		備　　考
				種別	番号	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	重さ（g）		外器面	内器面	外面	内面	
第 109 図	490	縄文土器	深鉢	R	14	―	―	(9.0)		良	沈線	ナデ後ミガキ	灰黄褐	にぶい黄橙	貼付文
第 109 図	491	縄文土器	深鉢	R	18,19	―	―	(14.4)		良	貝殻条痕，横ナデ，工具ナデ，ナデ	横ナデ，工具ナデ	にぶい黄橙	褐灰，にぶい黄橙	リボン状突起
第 109 図	492	縄文土器	深鉢	N	16	(33.2)	―	(7.1)		良	横ナデ，ナデ	横ナデ，工具ナデ	にぶい褐	灰黄褐	突帯
第 109 図	493	縄文土器	深鉢	P	16	―	―	(9.0)		良	貝殻条痕，横ナデ	ミガキ，押圧	にぶい黄橙	にぶい黄橙	刻目突帯
第 109 図	494	縄文土器	深鉢	N	15	―	10.3	(11.5)		良	貝殻条痕，工具ナデ	工具ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	
第 109 図	495	縄文土器	深鉢	N	15	―	9.5	(4.1)		良	工具縦ナデ，横ナデ	斜めミガキ，ナデ	にぶい褐	橙	
第 109 図	496	縄文土器	深鉢	N	15	―	(9.8)	(6.9)		良	ナデ後粗いミガキ，強い横ナデ	貝殻条痕後粗いミガキ	にぶい橙	にぶい橙	
第 109 図	497	縄文土器	深鉢	P	16	―	(9.3)	(9.2)		良	貝殻条痕，ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙	
第 109 図	498	縄文土器	深鉢	P	17	―	(12.2)	(8.2)		良	工具ナデ，ナデ	工具ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
第 109 図	499	縄文土器	深鉢	M	15	―	(10.0)	(5.4)		良	貝殻条痕後斜めナデ，横ナデ	ナデ後不定方向ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第 109 図	500	縄文土器	深鉢	N	15,16	―	10.5	(6.3)		良	貝殻条痕後ナデ	ナデ	灰黄褐	灰白	
第 109 図	501	縄文土器	深鉢	L	15	―	(11.0)	(7.5)		良	貝殻条痕，ナデ	工具による縦調整	にぶい黄橙	褐灰	
第 109 図	502	縄文土器	深鉢	N	18	―	(10.6)	(5.0)		良	工具横ナデ	ナデ	明黄褐	にぶい黄褐	
第 109 図	503	縄文土器	深鉢	O	16	―	6.6	(5.6)		良	ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐，にぶい黄橙	
第 110 図	504	縄文土器	深鉢	P	18	―	11.5	(1.7)		良	組織痕，ナデ，ミガキ，押圧	ミガキ	にぶい黄橙，灰黄褐	にぶい橙	外底面中心近くに籠の中心部のような組織痕
第 110 図	505	縄文土器	浅鉢	T	23	―	(15.0)	(9.2)		良	組織痕，ナデ	貝殻条痕	にぶい橙	にぶい黄橙	
第 110 図	506	縄文土器	浅鉢	S	21	―	―	―		良	組織痕，横ナデ	横ナデ	にぶい褐	灰黄褐	
第 110 図	507	縄文土器	浅鉢	N	16	(25.7)	―	(8.0)		良	沈線，横ナデ，ミガキ	横ナデ，ミガキ	黒褐	黒褐	
第 110 図	508	縄文土器	浅鉢	N	15	(9.8)	―	(2.4)		良	横ナデ，工具ナデ後ナデ	沈線，横ナデ，ミガキ	にぶい黄褐	にぶい褐色，にぶい橙	
第 110 図	509	縄文土器	浅鉢	R	17	(27.4)	―	(7.2)		良	沈線，ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙，黒褐	灰黄褐，にぶい黄橙	
第 110 図	510	縄文土器	浅鉢	L	16	(21.5)	―	(3.0)		良	沈線，横ナデ，ミガキ	横ナデ，ミガキ	褐灰	黒	
第 110 図	511	縄文土器	浅鉢	O	16,18	(20.4)	―	(5.3)		良	ミガキ	ミガキ	褐灰	褐灰	波状口縁か
第 110 図	512	縄文土器	浅鉢	O	16	(30.0)	―	(6.3)		良	ミガキ	ミガキ	黒褐，にぶい黄橙	褐灰，にぶい黄橙	
第 110 図	513	縄文土器	浅鉢	M	17	(20.0)	―	(6.3)		良	沈線，横ナデ，ミガキ	横ナデ，ミガキ	にぶい黄橙，黒	黒褐	
第 110 図	514	縄文土器	浅鉢	P	18	(21.8)	―	(6.5)		良	貝殻条痕，ミガキ	ミガキ	灰黄褐	黒褐	口縁部分に赤色顔料のような痕跡あり
第 110 図	515	縄文土器	浅鉢	R	17	(20.2)	―	(4.5)		良	貝殻条痕，ミガキ	沈線，ナデ，ミガキ，押圧	橙	灰黄褐，にぶい黄橙	
第 110 図	516	縄文土器	浅鉢	O P	17 17	―	―	(5.2)		良	横ナデ，ナデ，ミガキ	横ナデ，ミガキ	にぶい黄橙，灰黄褐	にぶい黄橙，灰黄褐	リボン状突起
第 110 図	517	縄文土器	浅鉢	R	19	(34.5)	―	(8.8)		良	貝殻条痕，ミガキ	貝殻条痕後ミガキ	にぶい橙，褐灰	褐灰	
第 110 図	518	縄文土器	浅鉢	M P	15,16 14	(37.0)	―	(12.3)		良	工具ナデ，ナデ	工具ナデ後ミガキ	黒褐	黒褐，にぶい黄橙	
第 110 図	519	縄文土器	浅鉢	M	15	―	(6.8)	(3.0)		良	沈線，ナデ，横ミガキ	横ミガキ	褐灰	にぶい黄橙	
第 110 図	520	縄文土器	円盤形土製品	O	17	5.4	6.0	0.9		良	ナデ	横ミガキ	にぶい黄橙	褐灰	深鉢再加工品

挿図番号	番号	種　別	器　種	出土地点		法量（cm）				焼成（石材）	調　整		色　調		備　考
				種別	番号	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	重さ（g）		外器面	内器面	外面	内面	
第 110 図	521	縄文土器	円盤形土製品	M	15	7.3	8.1	0.8		良	横ミガキ	横ミガキ	にぶい橙，灰褐	黒褐	浅鉢再加工品
第 111 図	522	ミニチュア土器	鉢	N	16	―	3.6	(2.5)		良	ナデ，押圧	押圧後工具ナデ	にぶい黄橙	褐灰	
第 111 図	523	弥生土器	壷	N	17	16.7	―	(5.2)		良	横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
第 111 図	524	弥生土器	高坏	O	16	(31.2)	―	(6.4)		良	横ナデ，ナデ，ハケメ，ヘラミガキ	文様，横ナデ	暗褐	暗褐	暗文
第 111 図	525	土師器	坏	S	13	15.0	―	4.2		良	回転ナデ後ミガキ，手持ちヘラケズリ後ミガキ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	
第 111 図	526	須恵器	蓋	R	14	―	―	(1.6)		良	手持ちヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	暗灰黄	暗灰黄	
第 111 図	527	須恵器	蓋	R	14	19.2	―	3.7		良	つまみ貼付後回転ナデ，ナデ	回転ナデ，静止ナデ	灰	灰	
第 111 図	528	土師器	坏	P	17	11.9	8.8	2.8		良	回転ナデ，ヘラ切り後ナデ	回転ナデ，ナデ	橙	明赤褐	
第 111 図	529	土師器	坏	T	14	(14.2)	(7.0)	3.5		良	回転ナデ，ヘラ切り離し後ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
第 111 図	530	須恵器	坏	R	13	(12.6)	(8.4)	3.7		良	回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ，回転ナデ後静止ナデ	灰黄，灰白	灰黄	外面黒い付着物，墨書か
第 111 図	531	須恵器	坏	S	14	(11.9)	―	4.3		良	回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ，回転ナデ後静止ナデ	灰黄	灰黄	
第 111 図	532	須恵器	坏	W	23	―	(6.8)	(1.1)		良	回転ナデ，回転ヘラ切り離し後ナデ	回転ナデ	灰黄	灰黄	墨書か
第 111 図	533	須恵器	坏	SI	95	―	(13.1)	(1.6)		良	回転ナデ，ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	灰	暗灰黄	
第 111 図	534	須恵器	椀	S	13	―	(6.3)	(3.9)		良	回転ナデ，高台貼付後ナデ	回転ナデ	灰黄，にぶい黄橙	灰黄褐	
第 111 図	535	須恵器	椀	O	15	(14.5)	(9.8)	6.3		良	回転ナデ，回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ，ナデ	灰	灰	
第 111 図	536	須恵器	椀	R	14	―	(7.5)	(4.9)		良	回転ナデ，ヘラ切り離し後ナデ	回転ナデ，回転ナデ後静止ナデ	灰白	灰黄	
第 111 図	537	須恵器	椀	R	14	(15.0)	(7.4)	(5.6)		良	回転ナデ，ヘラ切り離し後ナデ	回転ナデ	灰	灰	
第 111 図	538	須恵器	椀	M	15,17	―	7.0	(4.8)		良	回転ナデ，ヘラ切り後ナデ	回転ナデ，ナデ	灰	灰白	
第 111 図	539	黒色土器	椀	S	22	(12.4)	(7.4)	4.9		良	回転ナデ	ミガキ	橙	黒褐	
第 111 図	540	黒色土器	椀	V	23	(11.4)	(6.8)	4.9		良	回転ナデ，高台貼付後ナデ	横ミガキ，放射状ミガキ	橙	黒	
第 111 図	541	黒色土器	椀	V	23	―	6.1	(2.6)		良	回転ナデ，高台貼付後ナデ	放射状ミガキ	にぶい橙	黒	墨書
第 111 図	542	黒色土器	椀	T	22	(12.9)	6.0	5.4		良	回転ナデ，回転ヘラケズリ，高台貼付後ナデ	横ミガキ，放射状ミガキ	にぶい橙	暗灰	
第 111 図	543	黒色土器	椀	Q	14	(14.4)	6.3	4.8		良	回転ナデ，回転ヘラケズリ，高台貼付後ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐	
第 111 図	544	黒色土器	椀	T	23	(14.0)	(7.0)	5.2		良	回転ナデ，回転ヘラケズリ，高台貼付後ナデ	ミガキ	にぶい橙	黒褐	
第 111 図	545	黒色土器	椀	V	23	―	(8.2)	(2.5)		良	回転ナデ，回転ヘラケズリ，高台貼付後ナデ	放射状ミガキ	にぶい橙	黒	
第 112 図	546	土師器	甕	R	13	(22.6)	―	(12.9)		良	横ナデ，縦ハケメ後横ハケメ	横ナデ，斜めヘラケズリ	にぶい橙	にぶい黄橙	
第 112 図	547	土師器	甕	T	14	―	―	(6.0)		良	横ナデ，縦ハケメ	横ハケメ，縦ヘラケズリ	浅黄橙	浅黄橙	
第 112 図	548	土師器	甕	S	22	(20.0)	―	(6.7)		良	横ナデ，縦ハケメ	横ナデ，斜めヘラケズリ	にぶい橙	にぶい橙，にぶい褐	
第 112 図	549	土師器	甕	V	22	(18.6)	―	(4.8)		良	横ナデ，横ハケメ	横ナデ	にぶい褐，にぶい橙	にぶい褐	

挿図番号	番号	種　別	器　種	出土地点		法量（cm）				焼成（石材）	調　整		色　調		備　考
				種別	番号	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	重さ（g）		外器面	内器面	外面	内面	
第112図	550	土師器	甕	N	15	(25.0)	―	(5.9)		良	横ナデ，ハケメ	横ナデ，ケズリ	褐灰	にぶい黄橙	
第112図	551	土師器	甕	T	21	(24.0)	―	(9.0)		良	横ナデ，縦ハケメ	横ナデ，ヘラケズリ	橙，灰褐	橙，にぶい橙	
第112図	552	土師器	把手		13	―	―	(9.4)		良	ナデ	ヘラケズリ	橙	橙	
第112図	553	須恵器	甕	O	17	―	―	(3.7)		良	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄	灰黄	
第112図	554	須恵器	甕	O	17	―	―	(5.3)		良	回転ナデ	回転ナデ，ナデ	褐灰	灰黄	
第112図	555	須恵器	甕	N	16	―	―	(5.9)		良	横ナデ，タタキ	横ナデ，ヘラケズリ，当具痕	灰オリーブ	にぶい黄橙，にぶい赤褐	
第112図	556	須恵器	甕	P	16	(22.5)	―	(6.6)		良	回転ナデ，タタキ	回転ナデ，ナデ，当具痕	灰	灰	
第112図	557	須恵器	鉢	S T	13,14 14	―	―	(9.9)		良	回転ナデ，回転ヘラケズリ，カキメ	回転ナデ，静止ナデ	灰	灰	
第112図	558	須恵器	長頸壷	O	17	―	―	―		良	回転ナデ	回転ナデ，ナデ，しぼり痕	灰，にぶい赤褐	にぶい黄褐，褐	内外面に降灰
第112図	559	須恵器	円盤形土製品	U	24	6.5	6.6	1.1		良	タタキ	ナデ，当具痕	灰黄	灰黄	甕の再加工品
第112図	560	土製品	玩具	T	13	5.0	6.9	1.9		良		押圧	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第113図	561	石器	石鏃	S	13	2.1	2.0	0.4	1.6	チャート					
第113図	562	石器	石鏃（未製品）	U	22	2.0	1.8	0.3	1.3	安山岩					
第113図	563	石器	石鏃（未製品）	U	23	2.2	1.5	0.4	1.1	黒曜石					
第113図	564	石器	石鏃（未製品）	U	22	1.9	1.4	0.3	0.9	黒曜石					
第113図	565	石器	石鏃	N	15	2.8	2.0	0.4	1.5	チャート					
第113図	566	石器	石鏃	S	14	2.7	2.0	0.8	3.0	チャート					
第113図	567	石器	石鏃	U	23	1.7	1.7	0.4	1.0	頁岩					
第113図	568	石器	石鏃	T	23	1.7	1.6	0.4	0.9	安山岩					
第113図	569	石器	石鏃	Q	17 17	2.0	1.2	0.3	0.7	安山岩					
第113図	570	石器	石鏃	U	21	2.1	1.4	0.4	1.0	チャート					
第113図	571	石器	石鏃	T	24	2.4	1.7	0.4	1.8	チャート					
第113図	572	石器	石鏃	V	23	3.0	1.7	0.5	2.1	安山岩					
第113図	573	石器	石鏃	M	16	2.5	1.6	0.6	2.0	黒曜石					
第113図	574	石器	石鏃	撹乱		1.9	1.4	0.3	0.9	黒曜石					
第113図	575	石器	石鏃	R	13	1.7	1.2	0.3	0.5	黒曜石					
第113図	576	石器	石鏃	T	15	1.5	1.1	0.3	0.3	黒曜石					
第113図	577	石器	石鏃	S	15	2.1	1.3	0.4	0.7	安山岩					
第113図	578	石器	石鏃	T	23	1.6	1.2	0.3	0.4	安山岩					
第113図	579	石器	石鏃	P	14	1.5	1.5	0.3	0.5	黒曜石					
第113図	580	石器	石鏃	R	14	1.9	1.3	0.2	0.4	黒曜石					
第113図	581	石器	石鏃	P	18	2.1	1.6	0.3	0.7	安山岩					

挿図番号	番号	種　別	器　　種	出土地点		法量（cm）				焼成（石材）	調　　整		色　　調		備　　考
				種別	番号	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	重さ（g）		外器面	内器面	外面	内面	
第 113 図	582	石器	石鏃	T	14	2.5	1.6	0.4	0.8	チャート					
第 113 図	583	石器	石鏃	T	23	1.5	1.2	0.3	0.3	黒曜石					
第 113 図	584	石器	石鏃	M	16	1.5	1.2	0.2	0.3	黒曜石					
第 113 図	585	石器	石鏃	P	23	1.6	1.1	0.3	0.4	黒曜石					
第 113 図	586	石器	石鏃	S	16	1.8	1.2	0.2	0.4	安山岩					
第 113 図	587	石器	石鏃	S	14	1.9	1.4	0.4	0.6	黒曜石					
第 113 図	588	石器	石鏃	R	16	2.0	1.4	0.3	0.5	黒曜石					
第 113 図	589	石器	石鏃	T	13	1.7	1.6	0.3	0.5	黒曜石					
第 113 図	590	石器	石鏃	V	21	2.1	1.7	0.4	0.8	黒曜石					
第 113 図	591	石器	石鏃	S	16	2.2	1.4	0.3	0.6	安山岩					
第 113 図	592	石器	石鏃	T	13	2.2	2.0	0.3	1.1	黒曜石					
第 113 図	593	石器	石鏃	P	16	2.1	1.7	0.3	0.7	安山岩					
第 113 図	594	石器	石鏃	S	14	2.1	1.5	0.3	0.6	黒曜石					
第 113 図	595	石器	石鏃	R	18	2.1	1.4	0.3	0.6	黒曜石					
第 113 図	596	石器	石鏃	T	16	2.1	1.6	0.3	0.7	安山岩					
第 113 図	597	石器	石鏃	S	14	2.5	1.5	0.4	0.8	黒曜石					
第 114 図	598	石器	石鏃	V	21	2.2	1.4	0.2	0.6	安山岩					
第 114 図	599	石器	石鏃	T	23	2.3	1.2	0.2	0.5	安山岩					
第 114 図	600	石器	石鏃	N	15	2.5	1.4	0.3	0.7	チャート					
第 114 図	601	石器	石鏃	T	22	2.9	1.5	0.3	0.7	チャート					
第 114 図	602	石器	石鏃	T	23	3.0	1.6	0.4	1.1	安山岩					
第 114 図	603	石器	石鏃	V	23	1.7	1.5	0.3	0.5	安山岩					
第 114 図	604	石器	石鏃	N	16	2.1	1.6	0.6	1.7	黒曜石					
第 114 図	605	石器	石鏃	S	23	1.8	1.5	0.3	0.6	安山岩					
第 114 図	606	石器	石鏃	表土		2.1	1.5	0.4	0.9	チャート					
第 114 図	607	石器	石鏃	M	15	2.7	1.6	0.5	1.3	黒曜石					
第 114 図	608	石器	石鏃	U	23	3.4	1.9	0.4	1.8	黒曜石					
第 114 図	609	石器	石鏃	T	22	2.6	1.3	0.4	0.9	安山岩					
第 114 図	610	石器	石鏃	S	15	2.8	1.4	0.4	1.0	安山岩					
第 114 図	611	石器	石鏃	U	22	3.7	1.7	0.4	1.7	安山岩					
第 114 図	612	石器	石鏃	M	16	2.5	1.2	0.4	1.1	黒曜石					
第 114 図	613	石器	石鏃	O	15	1.8	1.0	0.3	0.5	黒曜石					
第 114 図	614	石器	石鏃			2.2	1.3	0.4	0.9	黒曜石					

挿図番号	番号	種　別	器　　種	出土地点		法量（cm）				焼成（石材）	調　　整		色　　調		備　　考
				種別	番号	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	重さ（g）		外器面	内器面	外面	内面	
第114図	615	石器	石鏃	P	14	1.7	1.4	0.3	0.8	安山岩					
第114図	616	石器	石鏃	W	22	1.9	1.6	0.3	0.9	黒曜石					
第114図	617	石器	石鏃	N	16	1.7	1.3	0.4	0.5	黒曜石					
第114図	618	石器	石鏃	R	13	2.1	1.7	0.4	1.2	安山岩					
第114図	619	石器	石鏃	L	17	2.4	1.8	0.4	1.2	黒曜石					
第114図	620	石器	石鏃	L	15	2.5	1.9	0.3	1.4	チャート					
第114図	621	石器	石鏃	N	16	1.5	2.0	0.4	0.8	黒曜石					
第114図	622	石器	石鏃	Q	15	2.8	1.7	0.5	1.7	チャート					
第114図	623	石器	石鏃	V	21	1.8	1.6	0.3	0.5	チャート					
第114図	624	石器	石鏃	U	21	1.9	2.2	0.4	1.0	チャート					
第114図	625	石器	石鏃	Q	14	2.3	1.5	0.3	0.9	安山岩					
第114図	626	石器	石鏃	M	15	1.9	1.2	0.2	0.5	チャート					
第114図	627	石器	石鏃	S	15	2.6	1.7	0.4	1.1	チャート					
第114図	628	石器	石鏃	P	17	2.3	1.4	0.3	0.8	安山岩					
第114図	629	石器	石鏃	T	14	2.8	2.1	0.3	1.2	安山岩					
第114図	630	石器	石鏃	表土		2.5	1.6	0.3	0.9	安山岩					
第114図	631	石器	石鏃	V	23	2.2	1.4	0.3	0.7	安山岩					
第114図	632	石器	石鏃	T	22	1.6	1.4	0.3	0.4	安山岩					
第115図	633	石器	三稜尖頭器	R	16	4.8	1.5	1.3	5.7	安山岩					
第115図	634	石器	ナイフ形石器か	N	15	2.6	1.5	0.5	1.9	安山岩					
第115図	635	石器	石錐	U	22	2.2	1.8	0.6	3.4	安山岩					
第115図	636	石器	石錐	S	15	2.4	2.0	0.7	4.0	黒曜石					
第115図	637	石器	石錐	U	22	2.2	1.7	0.5	1.9	黒曜石					
第115図	638	石器	石錐	V	22	2.2	1.4	0.3	1.2	チャート					
第115図	639	石器	石錐	SI	92	3.9	1.8	0.4	5.0	黒曜石					
第115図	640	石器	石錐	T	21	3.8	1.5	0.3	3.1	チャート					
第115図	641	石器	石錐			3.7	1.3	0.3	2.6	チャート					
第115図	642	石器	石錐	S	22	4.5	1.3	0.5	3.8	安山岩					
第115図	643	石器	石錐か	O	15	5.5	0.9	0.6	3.2	黒曜石					
第115図	644	石器	石銛	R	13	5.3	1.0	0.6	3.1	珪質頁岩					
第115図	645	石器	異形石器	イモ穴		2.9	0.8	0.8	1.7	黒曜石					
第115図	646	石器	異形石器	S	22	3.8	1.0	0.9	2.2	黒曜石					
第115図	647	石器	異形石器	U	21	3.2	2.0	0.5	1.8	黒曜石					

挿図番号	番号	種　別	器　　種	出土地点		法量（cm）				焼成（石材）	調　　整		色　　調		備　　考
				種別	番号	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	重さ（g）		外器面	内器面	外面	内面	
第 115 図	648	石器	磨石か	N	15	8.0	4.9	5.1	262.2						
第 116 図	649	石器	二次加工剥片（石匙未製品か）	T	22	6.1	5.8	1.5	33.8	黒曜石					
第 116 図	650	石器	石匙	T	22	8.5	4.3	0.9	28.0	安山岩					
第 116 図	651	石器	石匙	L	16	4.4	7.1	0.7	25.9	安山岩					
第 116 図	652	石器	石匙	撹乱		4.9	8.3	0.7	30.7	安山岩					
第 116 図	653	石器	石匙	S	22	5.4	9.4	1.6	60.7	安山岩					
第 116 図	654	石器	石匙	T	15	3.1	8.6	0.9	12.6	安山岩					
第 117 図	655	石器	打製石斧	N	16	10.1	5.2	1.6	89.0	安山岩					
第 117 図	656	石器	打製石斧	R	15	12.2	6.1	2.3	215.1	安山岩					
第 117 図	657	石器	打製石斧	L	15	20.1	8.7	3.2	604.0	安山岩					
第 117 図	658	石器	打製石斧	T	16	12.4	7.1	2.7	298.1	安山岩					
第 117 図	659	石器	打製石斧	P	15	24.0	11.4	3.6	963.0	安山岩					
第 117 図	660	石器	打製石斧	R	19	10.8	5.2	2.2	151.1	安山岩					
第 117 図	661	石器	打製石斧	T	15	10.6	5.6	1.5	106.8	安山岩					
第 118 図	662	石器	打製石斧	P	20	17.5	9.5	2.7	529.8	安山岩					
第 118 図	663	石器	打製石斧	R	18	10.5	6.7	2.5	199.1	安山岩					
第 118 図	664	石器	打製石斧	S	16	10.2	4.7	1.9	109.5	頁岩					
第 118 図	665	石器	打製石斧	R	18	12.0	5.4	1.6	116.5	安山岩					
第 118 図	666	石器	打製石斧	S	21	10.4	5.4	1.3	97.3	安山岩					
第 118 図	667	石器	打製石斧	R	18	14.3	6.6	1.7	213.8	黒雲母片岩					
第 118 図	668	石器	打製石斧	T	22	9.9	3.8	1.5	82.6	頁岩					
第 118 図	669	石器	打製石斧	T	15	13.7	5.8	1.6	164.3	安山岩					
第 118 図	670	石器	打製石斧	S	22	14.7	6.3	2.5	265.9	安山岩					
第 118 図	671	石器	打製石斧	T	15,16	17.0	6.0	2.8	78.0	安山岩					
第 119 図	672	石器	打製石斧	T	24	6.0	6.9	2.0	88.8	頁岩？					
第 119 図	673	石器	打製石斧	O	18	7.7	7.9	2.8	176.6	安山岩					
第 119 図	674	石器	打製石斧	Q	18	7.9	8.7	1.4	114.3	結晶片岩					
第 119 図	675	石器	打製石斧	S	22	8.4	9.4	2.4	234.8	安山岩					
第 119 図	676	石器	打製石斧	Q	17	10.1	10.5	2.3	231.9	安山岩					
第 119 図	677	石器	打製石斧	U	23	11.7	11.9	2.9	524.9	安山岩					
第 120 図	678	石器	石鎌か	T	24	11.8	5.7	1.9	161.5	安山岩					
第 120 図	679	石器	石鎌か	P	19	9.8	4.4	1.8	97.7	珪質頁岩					

挿図番号	番号	種　別	器　　種	出土地点		法量（cm）				焼成（石材）	調　　整		色　　調		備　　考
				種別	番号	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	重さ（g）		外器面	内器面	外面	内面	
第 120 図	680	石器	石鎌か	N	16	10.9	4.4	1.6	99.8	緑色片岩					
第 120 図	681	石器	石鎌か	L	15	17.4	5.9	3.4	283.0	安山岩？					
第 120 図	682	石器	分銅形石器	O	17	6.9	4.8	0.9	31.0	緑色片岩					
第 120 図	683	石器	十字形石器	U	22	8.6	6.4	0.8	55.2	頁岩					
第 120 図	684	石器	砥石（有溝）	P	18	5.9	2.5	2.0	50.2						
第 120 図	685	石器	砥石（有溝）	P	17	8.2	7.5	6.6	423.0	砂岩					
第 120 図	686	石器	砥石（有溝）	L	16	5.6	5.8	2.6	112.9	砂岩					
第 120 図	687	石器	磨石類砥石（有溝）	P	17	12.0	10.8	6.6	1200.0						
第 121 図	688	石器	磨製石斧	N	18	17.8	7.6	4.6	925.0	安山岩					太型蛤刃
第 121 図	689	石器	磨製石斧	N	15	13.9	5.1	3.6	373.7	頁岩					太型蛤刃　再加工
第 121 図	690	石器	磨製石斧	L	16	11.6	5.5	3.1	272.6	頁岩					太型蛤刃　再加工
第 121 図	691	石器	磨製石斧	L	15	12.9	6.3	3.3	375.6	粘板岩					
第 121 図	692	石器	磨製石斧か	U	21	9.0	4.6	1.9	111.0	頁岩					
第 121 図	693	石器	磨製石斧	V	19	8.3	4.5	1.5	78.4	頁岩					
第 121 図	694	石器	磨製石斧	N	15	7.4	4.0	1.5	70.2	蛇文岩					
第 121 図	695	石器	磨製石斧	P	18	11.2	6.0	2.7	266.1	頁岩					太型蛤刃　再加工か
第 121 図	696	石器	磨製石斧	T	21	9.5	4.7	2.2	107.9	頁岩					再加工
第 121 図	697	石器	磨製石斧	M	15	9.2	3.9	1.3	70.3	緑色片岩					再加工
第 122 図	698	石器	磨製石斧			7.7	5.2	2.2	89.9						再加工　抉り有
第 122 図	699	石器	磨製石斧	Q	18	9.1	6.0	1.9	132.1						再加工
第 122 図	700	石器	磨製石斧	M	17	13.0	5.8	4.0	436.3	砂岩					太型蛤刃
第 122 図	701	石器	磨製石斧	S	21	12.9	5.4	2.0	190.8	頁岩					再加工
第 122 図	702	石器	磨製石斧	M	17	9.7	6.2	3.7	436.3	蛇文岩					太型蛤刃
第 122 図	703	石器	磨製石斧	P	16	14.0	6.6	2.5	260.0	頁岩					再加工か
第 122 図	704	石器	磨製石斧未製品か	M	15	14.0	4.3	2.8	246.4	頁岩					
第 122 図	705	石器	磨製石斧	S	14	10.8	4.1	1.8	123.2	頁岩					
第 122 図	706	石器	磨製石斧	T	21	9.6	3.8	2.1	121.0	頁岩					再加工
第 123 図	707	石器	石刀か	U V	21 23	13.8	2.6	1.1	52.8	粘板岩					接合
第 123 図	708	石器	磨製石斧か	L	16	6.7	2.2	1.3	23.8						石刀？石鑿？
第 123 図	709	石器	柱状片刃石斧			13.4	3.3	3.4	249.6	頁岩					
第 123 図	710	石器	扁平片刃石斧	L	15	9.6	3.1	2.0	93.6	頁岩					
第 123 図	711	石器	柱状片刃石斧	U	24	9.2	3.8	2.0	66.4						片刃石斧の再加工か

挿図番号	番号	種　別	器　　種	出土地点		法量（cm）				焼成（石材）	調　　整		色　　調		備　　考
				種別	番号	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	重さ（g）		外器面	内器面	外面	内面	
第 123 図	712	石器	敲石か	P	18	11.4	5.5	2.7	232.2	頁岩					磨製石斧転用品か
第 123 図	713	石器	敲石か	U	23	11.1	4.5	2.1	163.5	頁岩					磨製石斧転用品か
第 123 図	714	石器	磨製石斧未製品か	N	15	15.3	6.4	3.4	451.7	頁岩					
第 123 図	715	石器	石庖丁	V	24	10.1	5.1	0.8	52.6	頁岩					持ち手を作り出している
第 123 図	716	石器	石庖丁	U	24	5.8	3.5	0.5	11.7	頁岩					
第 123 図	717	石器	石庖丁	U	23	2.3	3.0	0.5	4.2						穿孔有
第 124 図	718	土製品	紡錘車	V	23	6.1	6.0	1.0		良			にぶい橙, 黒褐		
第 124 図	719	土製品	紡錘車	D	16	6.1	3.4	1.4		良			にぶい橙		
第 124 図	720	土製品	円盤形土製品	P	16	2.7	2.8	0.7		良			にぶい褐		
第 124 図	721	土製品	円盤形土製品	Q	18	5.3	5.2	0.9		良			にぶい黄橙	にぶい黄褐	
第 124 図	722	土製品	紡錘車	W	23	3.9	4.6	0.8		良			明赤褐	明赤褐	補修孔部分を転用か
第 124 図	723	土製品	不明土製品	S	14	4.0	1.1	0.8		良			橙		
第 124 図	724	石製品	不明石製品	S	14	6.6	1.0	0.8	6.5						
第 124 図	725	石製品	玉未製品か	T	16	4.6	2.6	0.7	11.5						
第 124 図	726	石製品	磨製石剣（茎のみ）	M	16	2.7	1.5	0.5	3.1	頁岩					
第 124 図	727	石製品	小玉	T	23	1.1	0.6	0.5	0.4						
第 124 図	728	石製品	小玉	O	16	0.7	0.6	0.2	0.1						孔径 0.2cm × 0.15cm
第 124 図	729	石製品	小玉	S	16	0.5	0.4	0.3	0.06						孔径 0.15cm × 0.15cm
第 124 図	730	石製品	管玉	P	16	1.2	0.6	0.5	0.5						孔径 0.1cm × 0.1cm
第 124 図	731	石製品	管玉	P	17	1.6	0.6	0.6	0.8						
第 124 図	732	石製品	管玉	Q	19	1.6	0.6	0.6	0.8						
第 124 図	733	土製品	土錘	Q	18	4.2	1.2	1.1	ー	良	ナデ		にぶい橙		孔径 0.3cm × 0.3cm
第 124 図	734	土製品	土錘	O	15	3.8	1.0	1.0	ー	良	ナデ		にぶい橙		孔径 0.4cm × 0.4cm
第 124 図	735	土製品	土錘	R	15	3.9	1.0	1.1	ー	良	ナデ		にぶい橙		孔径 0.45cm × 0.4cm
第 124 図	736	土製品	土錘			3.4	1.2	1.1	ー	良	ナデ		にぶい橙		孔径 0.45cm × 0.4cm
第 124 図	737	土製品	土錘	トレンチ		3.0	1.1	1.1	ー	良	ナデ		にぶい橙		孔径 0.3cm × 0.3cm
第 124 図	738	土製品	土錘	O	17	3.5	1.5	1.5	ー	良	不明		灰白		孔径 0.85cm × 0.75cm
第 124 図	739	鉄器	鉄鏃	SI	105	4.1	3.6	0.2	8.0						
第 124 図	740	鉄器	鉄鏃	O	16	2.8	2.2	0.2	3.0						
第 124 図	741	鉄器	鉄鏃	S	14	5.0	1.0	0.2 ～ 0.4	3.8						
第 124 図	742	鉄器	鉄鏃	S	22	6.3	0.7	0.4	3.7						

第５章　自然科学分析

塔平遺跡１区・３区から出土した炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

塔平遺跡１区および３区の発掘調査では、弥生時代後期の住居跡が検出されており、住居内からは建築部材と考えられる炭化材が出土している。

本報告では、当時の木材利用に関する情報を得ることを目的として、炭化材の樹種同定を実施する。

1. 試料

試料は、弥生時代後期の住居跡 (SI2、SI76、SI80) から出土した、建築部材と考えられる炭化材３点である。

2. 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口 (横断面)・柾目 (放射断面)・板目 (接線断面) の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東 (1982) や Wheeler 他 (1998) を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林 (1991) や伊東 (1995,1996,1997,1998,1999) を参考にする。

3. 結果

樹種同定結果を表１に示す。炭化材は、広葉樹３分類群 (コナラ属アカガシ亜属・アワブキ属・シャシャンボ) に同定された。各分類群の主な解剖学的特徴等を記す。

表1.　樹種同定結果

区	遺構	時期	層位	整理№	樹種
1区	SI2	弥生後期	埋土1層	6	アワブキ属
3区	SI76	弥生後期	埋土1層	2422	シャシャンボ
3区	SI80	弥生後期	埋土3層	1864	コナラ属アカガシ亜属

・コナラ属アカガシ亜属（Quercus subgen. Cyclobalanopsis）　ブナ科

放射孔材で、道管壁の厚さは中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・アワブキ属（Meliosma）　アワブキ科

散孔材で、道管は単独または 2-4 個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は大型の異性、1-3 細胞幅、1-60 細胞高。

・シャシャンボ（Vaccinium bracteatum Thunb.）　ツツジ科スノキ属

散孔材で、道管はほぼ単独で年輪界一様に分布し、その分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、単列で８細胞高前後のものと 5-7 細胞幅、30-60 細胞高のものがある。放射組織には鞘細胞が認められる。

4. 考察

弥生時代後期の住居跡から出土した建築部材と考えられる炭化材は、SI2 がアワブキ属、SI76 がシャシャンボ、SI80 がアカガシ亜属に同定され、遺構によって樹種が異なる結果となった。アカガシ亜属は、常緑高木で、暖温帯性常緑広葉樹林の主要な構成種となる種を含む。シャシャンボは、暖温帯のやや乾燥した二次林に生育する常緑低木である。アワブキ属には、常緑性の種類 (ヤマビワ・フシノハアワブキ・ナンバン

アワブキ) と落葉性の種類 (アワブキ・ミヤマハハソ) とがあり、山地・丘陵地の林内に生育する。常緑性の種類は、基本的に中高木であるが、落葉性の種類はアワブキが中高木、ミヤマハハソが低木である。

木材の材質をみると、アカガシ亜属やシャシャンボは比較的重硬で強度が高い。アワブキ属は、材質に関する資料があまり無いが、常緑のヤマビワは比較的強度が高いとされる。これらの結果から、各住居では、建築部材に比較的強度の高い木材を選択・利用したことが推定される。高木となるアカガシ亜属と、低木となるシャシャンボでは、利用部位が異なる可能性がある。

本遺跡では、４区・５区の弥生時代後期とされる住居跡から出土した建築部材と考えられる炭化材にアカガシ亜属、モッコク、ツブラジイが確認されている。アカガシ亜属の利用は本地区と共通する結果であるが、４区・５区の結果を合わせると、合計で５分類群が確認されており、多様な木材が利用されていたことが推定される。また、こうした多様な木材の利用を可能とする植生環境が遺跡周辺にみられたことが推定される。

引用文献

林　昭三 ,1991, 日本産木材　顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .

伊東隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ . 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.

伊東隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ . 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 .66-176.

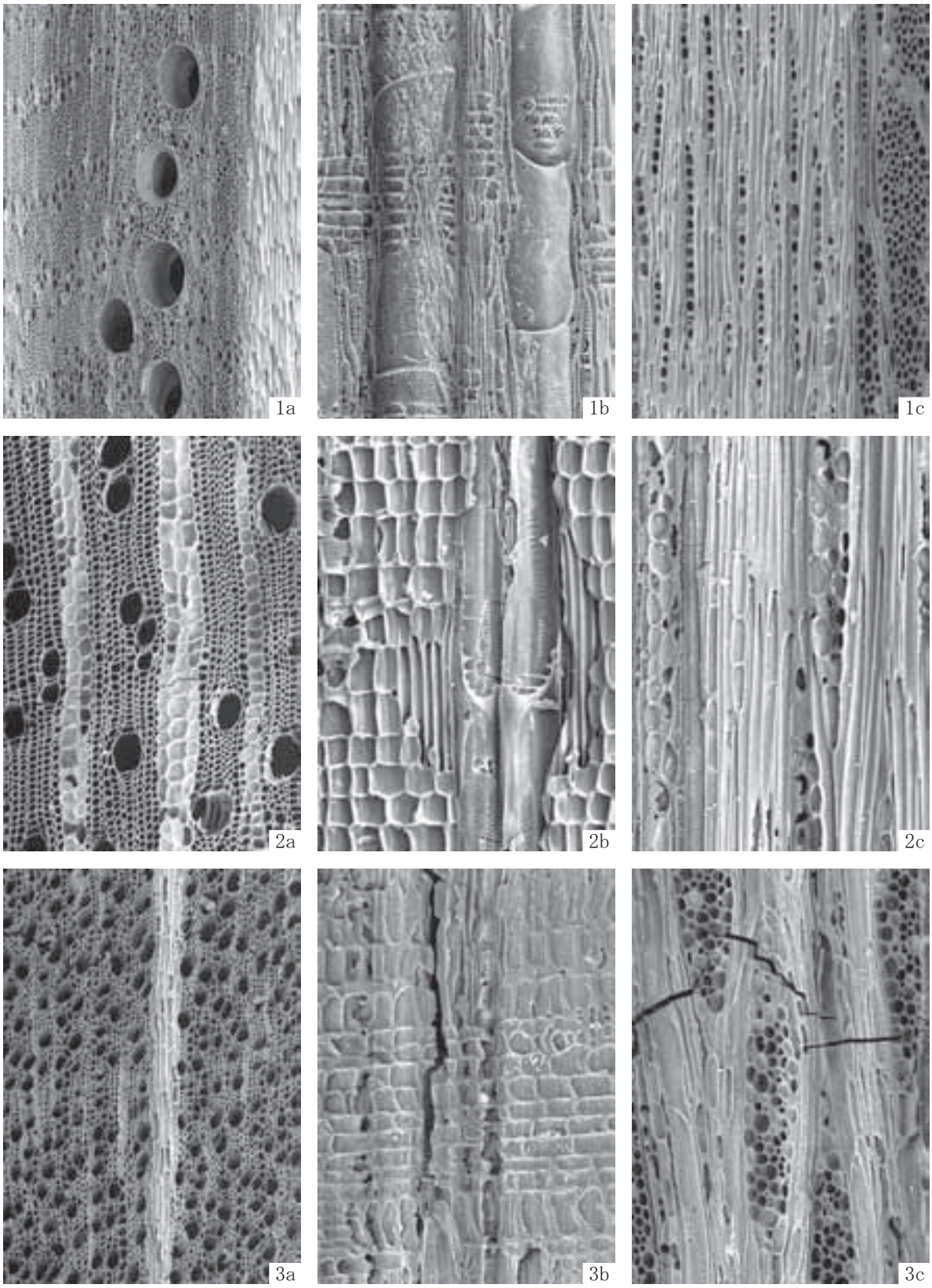
伊東隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ . 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.

伊東隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ . 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.

伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ . 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.

島地　謙・伊東隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998, 広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.



1. コナラ属アカガシ亜属(SI80;№1864)
2. アワブキ属(SI2;№6)
3. シャシャンボ(SI76;№2422)
　a:木口,b:柾目,c:板目

200μm:a
200μm:b,c

第６章　総括

塔平遺跡は九州横断自動車道延岡線建設工事に伴って調査を行い、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古代の遺構、遺物を確認した。各時代の調査についてまとめる。

旧石器時代

旧石器時代のものと推定される石器が３点出土した。三稜尖頭器２点とナイフ形石器１点であるが、土層の細分とそれを基準とした調査などができなかったことから、旧石器文化層の特定、全容を捉えることはできなかった。しかし、塔平遺跡における旧石器時代の活動域を知る手掛かりとなった。

縄文時代

縄文時代早期においては炉穴１基、集石４基、土器を検出した。特徴としては、調査区東側に集中していることである。調査区全体は北西側に緩やかに傾斜している。集石遺構はこうした斜面上に築かれていたもので、配置特徴から推察して、同時期のものであると考えている。検出された集石は扁平礫の密形状、轟Ａ式土器と被熱した礫、散逸形状という、形状の違いや構成物の違いが存在しており、周辺に使用施設箇所としての土坑などが検出されるなどすれば、今回の集石遺構と付随させた検討が可能となるのだが、今回の調査では検出されず、検討を試みることができなかったことは残念であった。塔平遺跡における縄文時代早期の全容を推察することは難しいものの、確実に生活域として利用していたことは伺うことができる。また、当遺跡より北西部にある櫛島遺跡でも多くの炉穴が検出されていることからも、関連性を含め、当時の活動域の広さを推察する根拠の一つになると考える。

縄文時代中期は船元式土器と考えられる遺物が出土しているが、資料に乏しく、また遺構が検出されていないため論証は難しい。

縄文時代後～晩期は塔平遺跡において集落の形成が成された時期と捉える。本報告書における調査１区、３区では１３軒の竪穴建物跡や４基の埋設土器、多数の土坑、ピットが検出されている。また、後世の遺構内や包含層内においても遺物が多数見つかっている。土器のみならず、出土した石鏃や石斧など石器の多さも目立つ。隣接区（西日本高速道路管轄区）においても同時期の遺構、遺物が検出されており、調査区周辺の地形から推察するに、塔平遺跡に形成された縄文後～晩期の集落規模はかなり大きいものであったと考えられる。今回はその一端を垣間見ることのできたものであろう。

弥生時代

弥生時代後期の集落が形成されたことは明白である。本報告書における調査１区、３区では２７軒の竪穴建物跡のほか、土坑、ピットが検出されている。特に竪穴建物跡は同時期遺構の切り合う確率が高いことが特徴として挙げられる。建て替えを行いながらこの地に住み続けた形跡として捉えることができるものである。遺構だけでなく、ＳＩ６３、７６、８３、８４のように遺物がまとまって検出されたことから、当時の生活の様子を考察する資料を得ることができたことも大きい成果となった。また、周辺遺跡で出土した遺物の共伴関係を調べる一助となると考える。縄文時代後～晩期同様、隣接区（西日本高速道路管轄区）においても同時期の遺構、遺物が検出されており、調査区周辺の地形からも推察するに、形成された集落規模はかなり大きいものであったと考えられる。

写 真 図 版

図版 1

１区ＳＫ３４遺物出土状況

１区ＳＩ１完掘状況

１区ＳＩ２完掘状況

１区ＳＢ１完掘状況

１区ＳＢ２完掘状況

１区完掘状況

３区ＳＫ６１燃焼部検出状況

３区ＳＫ６１完掘状況

３区ＳＹ５検出状況

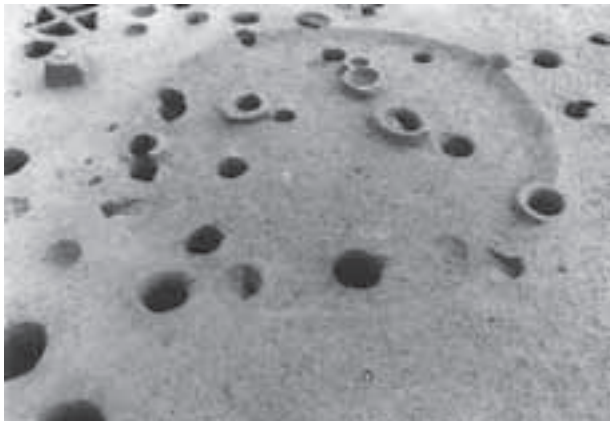
３区ＳＹ６検出状況

３区ＳＹ７検出状況

３区ＳＹ８検出状況

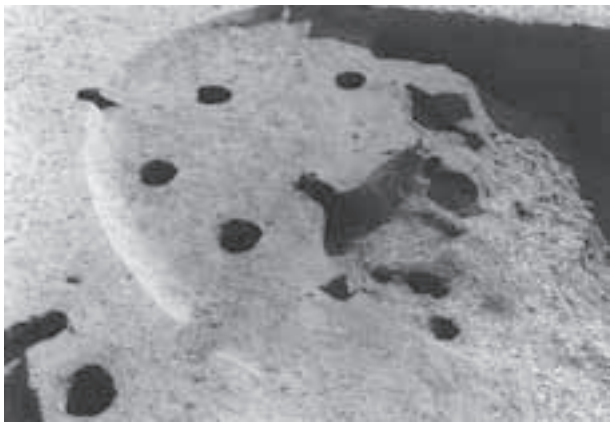
３区ＳＩ９４完掘状況

３区ＳＩ９９完掘状況


３区ＳＩ１０６完掘状況

３区ＳＩ１０７完掘状況

図版３

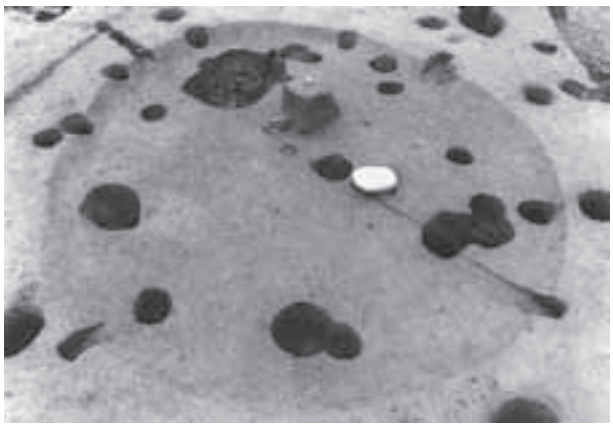

３区ＳＩ１１０完掘状況

３区ＳＩ１１３完掘状況

３区ＳＩ１１５完掘状況

３区ＳＩ１１６完掘状況

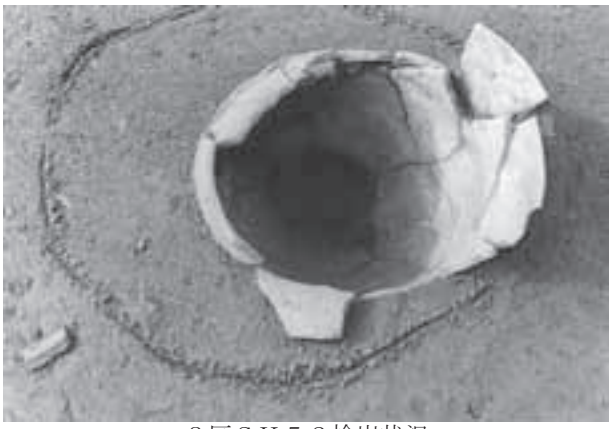
３区ＳＩ１１８完掘状況

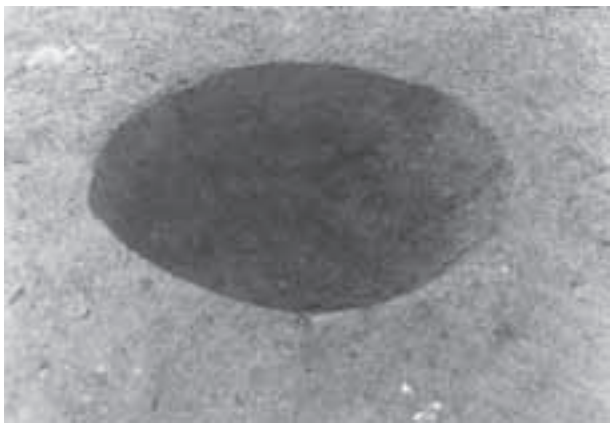

３区ＳＩ１１９完掘状況

３区ＳＩ１２０完掘状況

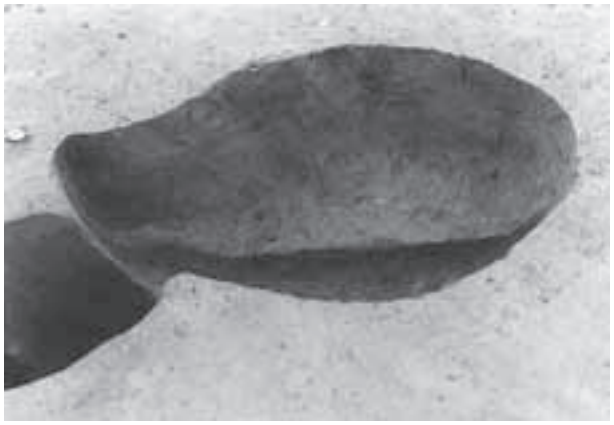
３区ＳＩ１２１完掘状況

３区ＳＩ１２２完掘状況


３区ＳＫ５２検出状況

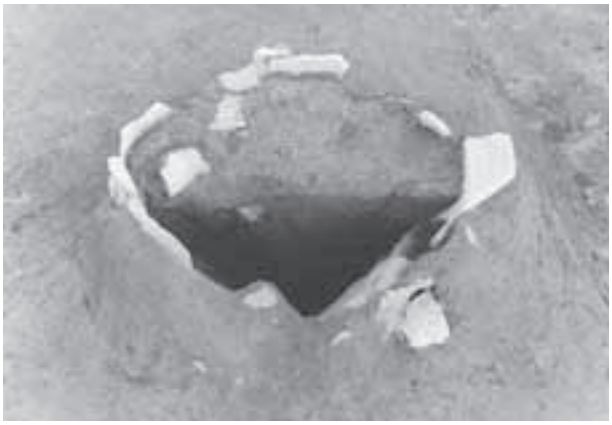

３区ＳＫ５２完掘状況

３区ＳＫ５４検出状況

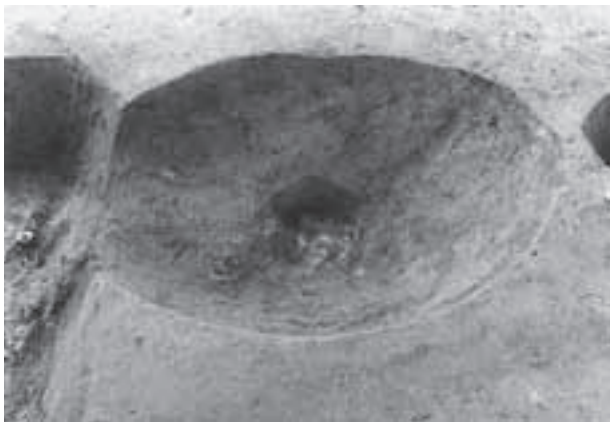

３区ＳＫ５４完掘状況

３区ＳＫ５８検出状況

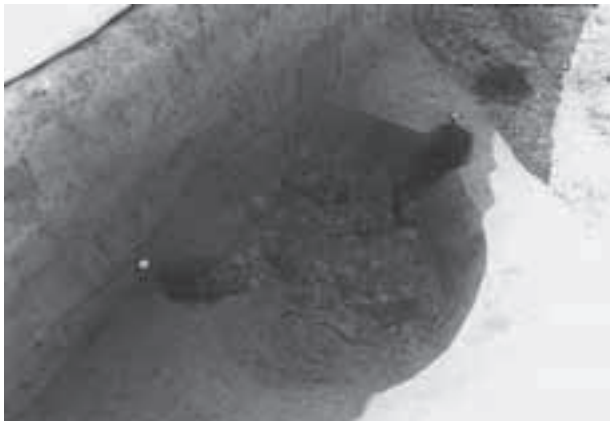
３区ＳＫ５８完掘状況

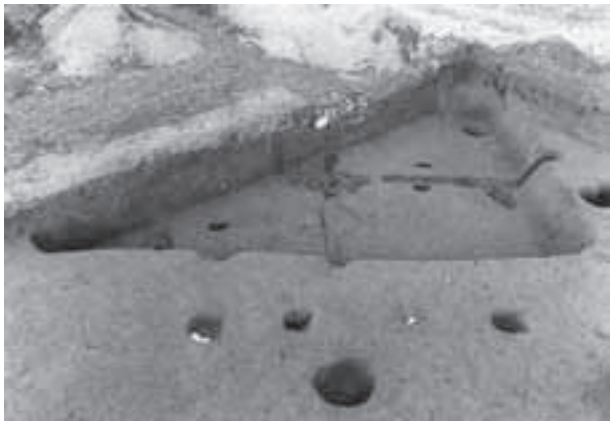

３区ＳＫ５９埋設土器内埋土半裁状況

図版５


３区ＳＫ５９完掘状況

３区ＳＫ６８遺物出土状況


３区ＳＫ６８完掘状況


３区ＳＩ６３完掘状況

３区ＳＩ７６遺物出土状況

３区ＳＩ７７白色粘土検出状況

３区ＳＩ７７完掘状況

３区ＳＩ７７掘方完掘状況

３区ＳＩ７７内ＳＫ７２遺物出土状況

３区ＳＩ７７内ＳＫ７２完掘状況

３区ＳＩ７８完掘状況

３区ＳＩ８０完掘状況

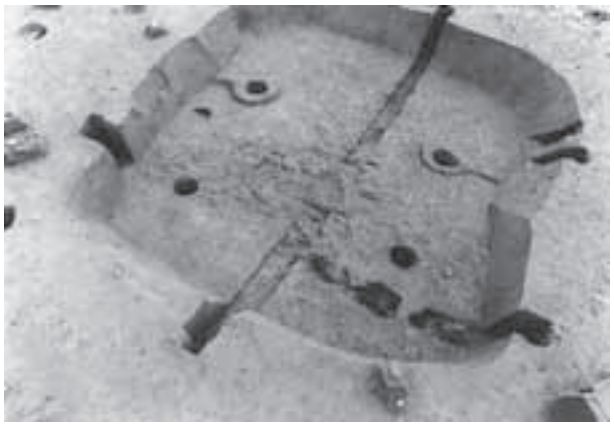
３区ＳＩ８１完掘状況

３区ＳＩ８２遺物出土状況

３区ＳＩ８３完掘状況

３区ＳＩ８４完掘状況

図版７


３区ＳＩ８５完掘状況

３区ＳＩ８６完掘状況

３区ＳＩ８７完掘状況

３区ＳＩ８８完掘状況

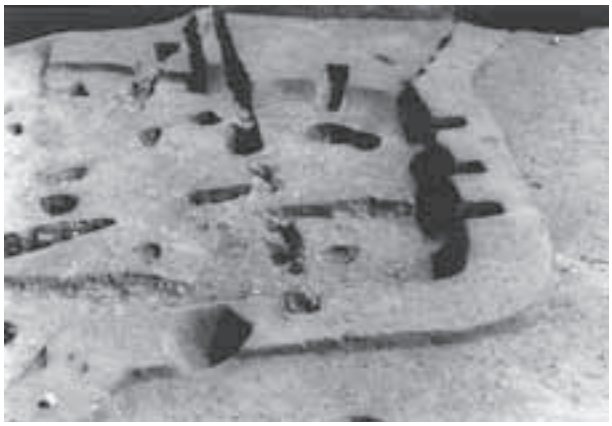
３区ＳＩ９０完掘状況

３区ＳＩ９１完掘状況

３区ＳＩ９２完掘状況

３区ＳＩ９３完掘状況

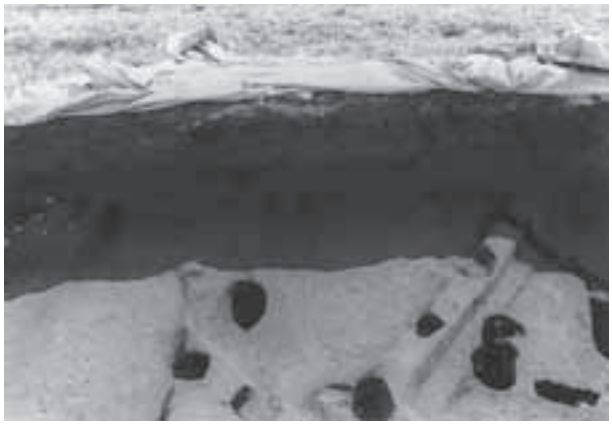
３区ＳＩ９５遺物出土状況


３区ＳＩ９８完掘状況

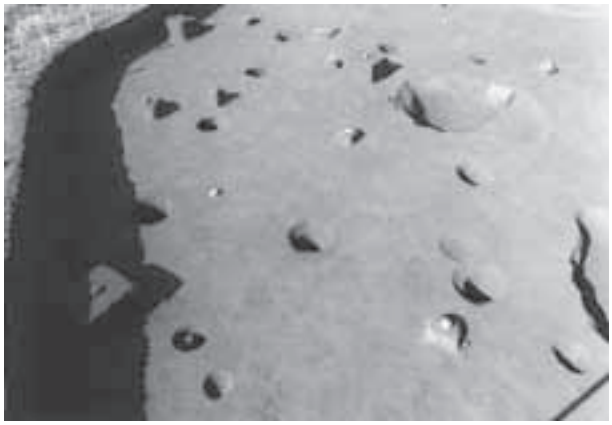
３区ＳＩ１０２完掘状況

３区ＳＩ１０３完掘状況

３区ＳＩ１０８完掘状況


３区ＳＩ１０９完掘状況

３区ＳＢ４完掘状況


３区ＳＢ５完掘状況

図版９

３区ＳＢ６完掘状況

３区ＳＢ７完掘状況

３区ＳＩ７５床面検出状況

３区ＳＩ７５完掘状況

３区ＳＩ７９完掘状況

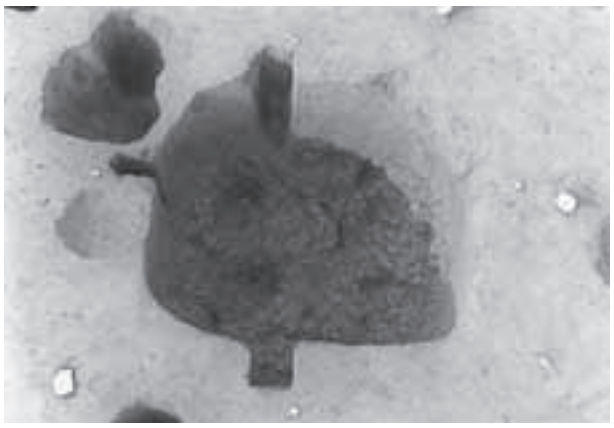
３区ＳＩ８９かまど粘土検出状況

３区ＳＩ８９完掘状況

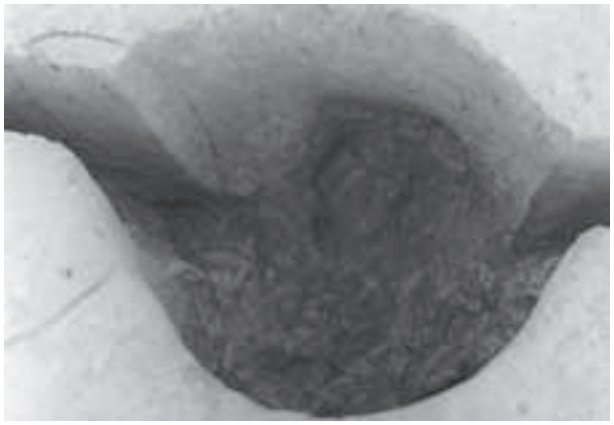
３区ＳＫ４３遺物出土状況

３区ＳＫ４３完掘状況

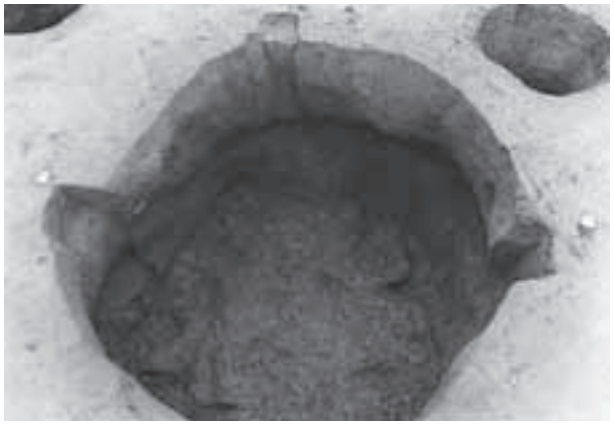
３区ＳＫ４５完掘状況


３区ＳＫ４８完掘状況

３区ＳＫ４９遺物出土状況


３区ＳＫ４９完掘状況

３区ＳＫ５６遺物出土状況


３区ＳＫ５６完掘状況

３区ＳＤ３１完掘状況

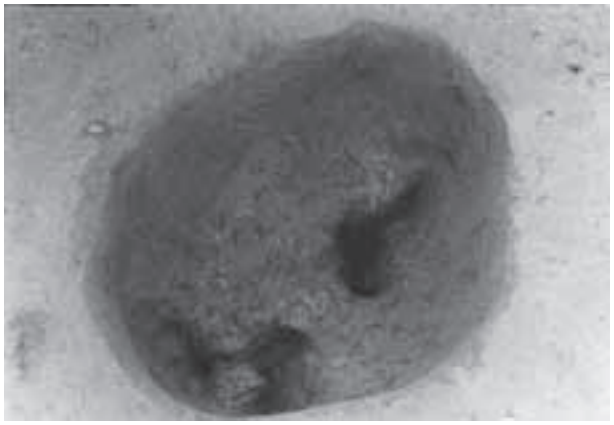
図版 11

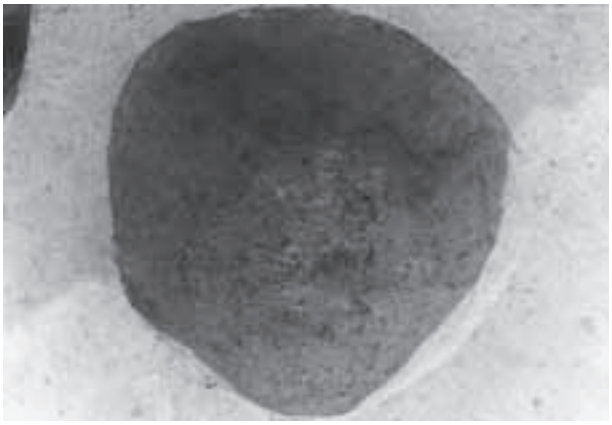
３区ＳＤ３２完掘状況

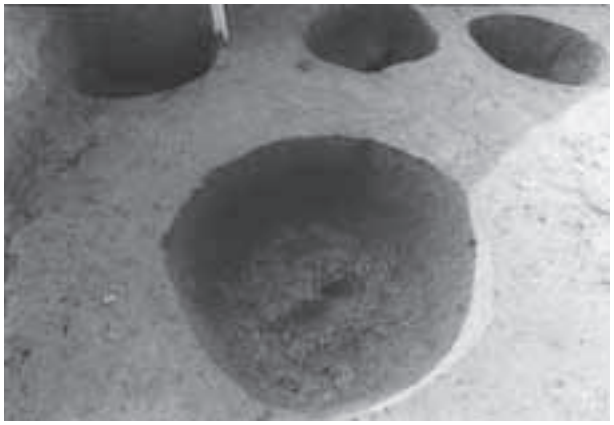
３区ＳＤ３３完掘状況

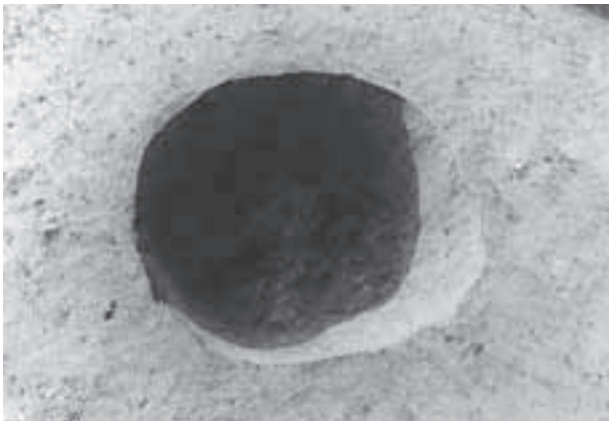
３区ＳＤ４０完掘状況

３区ＳＸ１完掘状況

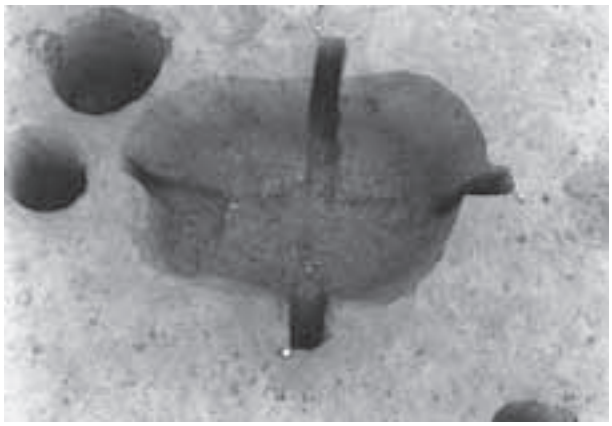

３区ＳＫ３６完掘状況


３区ＳＫ３７完掘状況


３区ＳＫ３８完掘状況


３区ＳＫ３９完掘状況

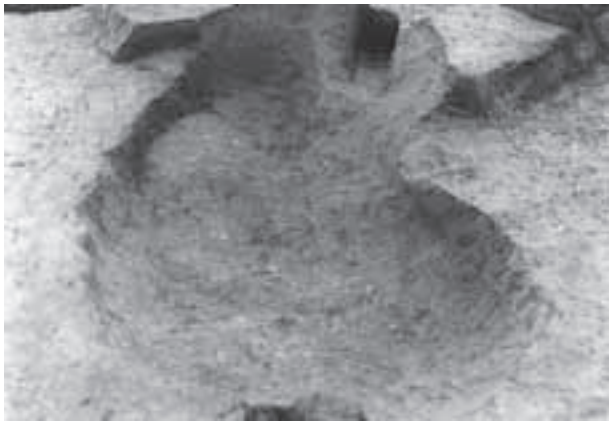
３区ＳＫ５０完掘状況

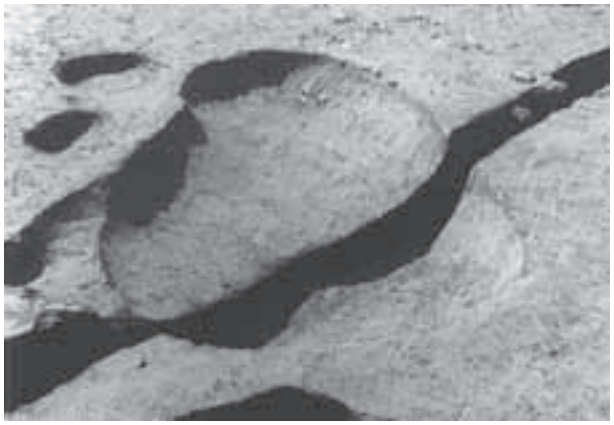

３区ＳＫ５３完掘状況

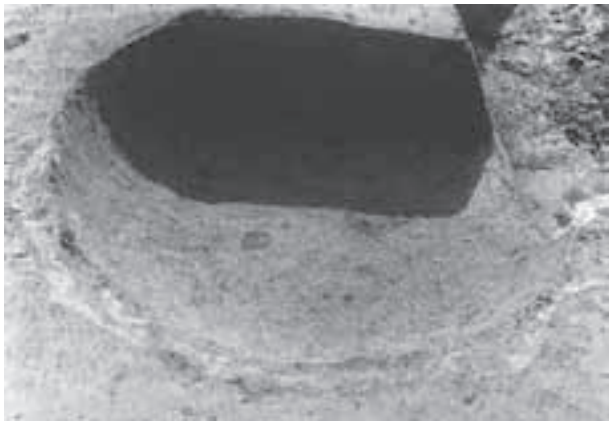
３区ＳＫ６２完掘状況

３区ＳＫ６４完掘状況

３区ＳＫ７０完掘状況


３区ＳＫ７５完掘状況


３区ＳＫ７６完掘状況


３区ＳＫ７７完掘状況

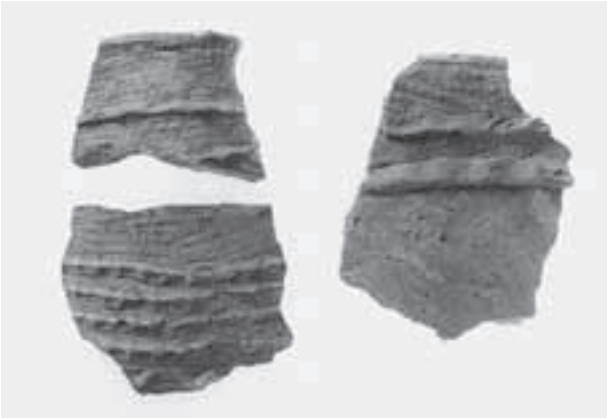
図版 13

縄文土器（早期） 1

縄文土器（早期） 2

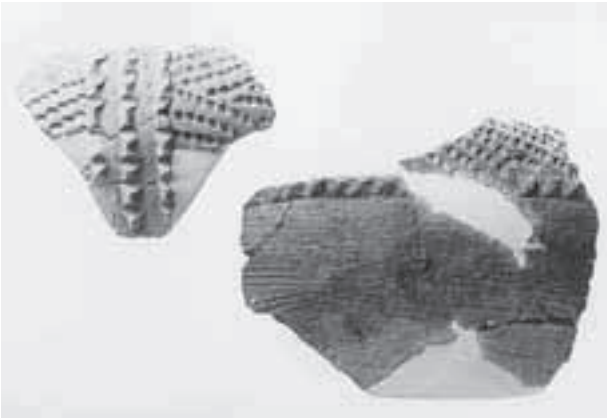
縄文土器（轟式） 1

縄文土器（轟式） 2



縄文土器（轟式） 3

縄文土器（轟式） 4



縄文土器（轟式） 5

図版 15

縄文土器（船元式）

縄文土器（北久根山式）

縄文土器（晩期）

ＳＫ５２　埋設土器

ＳＫ５４　埋設土器

ＳＫ５８　埋設土器

ＳＫ５９　埋設土器

ＳＫ６８出土遺物

縄文土器（晩期）

縄文土器（組織痕）１

縄文土器（組織痕）２

縄文土器（組織痕）３

打ち欠き土器・円盤形土製品

ＳＩ７６出土　壷

ＳＩ７７出土遺物

ＳＩ７６・７７出土　焼成粘土塊

ＳＩ７７内ＳＫ７２出土　高坏

ＳＩ７７内ＳＫ７２出土遺物

ＳＩ７８出土遺物

ＳＩ８５出土遺物

ＳＩ８２・８７・８８出土遺物

ＳＩ８２・８７出土　高坏

ＳＩ８３出土遺物

ＳＩ８４出土遺物１

ＳＩ８４出土遺物２

ＳＩ８４出土遺物３

ＳＩ８５出土遺物

ＳＩ８６出土遺物

ＳＩ９０出土遺物

ＳＩ９１出土遺物

ＳＩ９８出土遺物

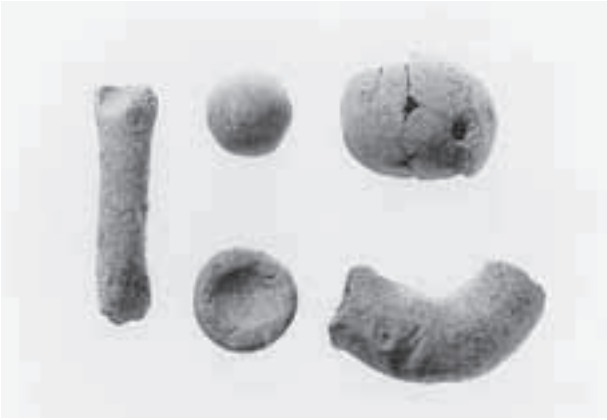
ＳＩ１０８出土遺物

ＳＩ１１２出土遺物

免田式土器

紡錘車（土製）

土錘



土製品

ＳＩ７５出土遺物

ＳＫ４１出土遺物

ＳＫ４３出土遺物

ＳＫ４５出土遺物

ＳＫ４９出土遺物

ＳＫ５６出土遺物

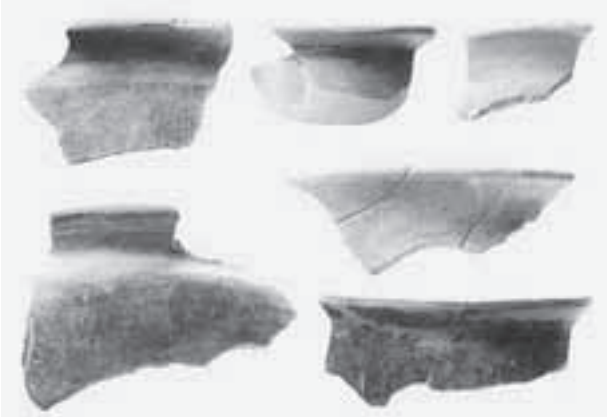
須恵器（坏・椀）

土師器（坏・椀）

黒色土器（坏・椀）

図版 23

須恵器（蓋）



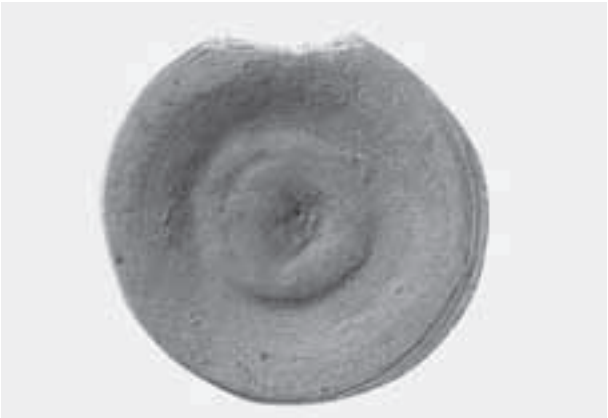
土師器（甕）

墨書土器（須恵器坏高台内）

墨書土器（黒色土器坏高台内）

須恵器（鉢）

須恵器（甕）



円盤形土製品（打ち欠き土器）

瓦（九曜紋）

布目瓦凸面（縄目）

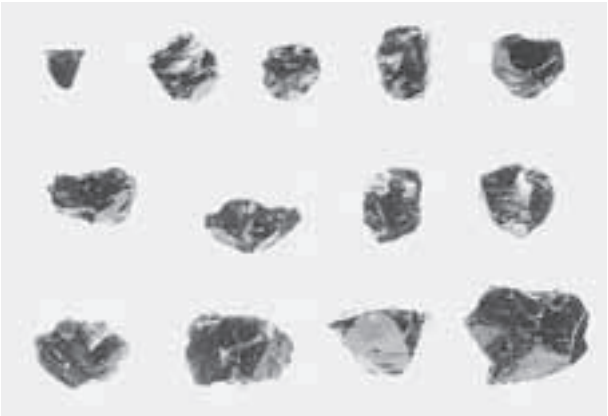
布目瓦凹面（布目）

旧石器（ナイフ形石器・三稜尖頭器）

石錐

石鋸

二次加工剥片



石核１

石核２

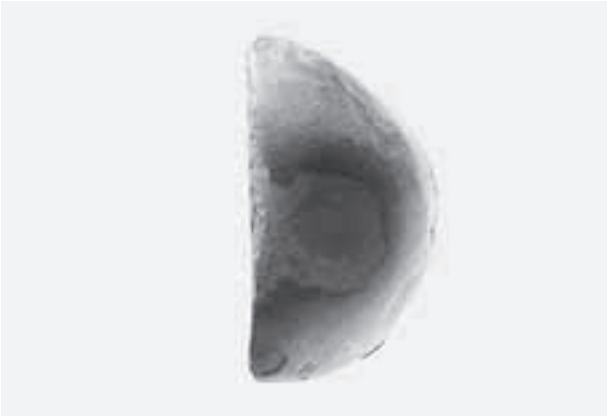
図版 25

石核３

石核４

磨石（表）

磨石（右側面）



磨石（裏）

磨石（左側面）

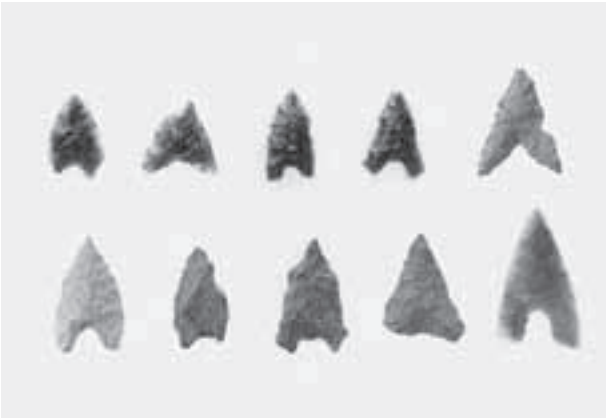
石製品

勾玉

玉類

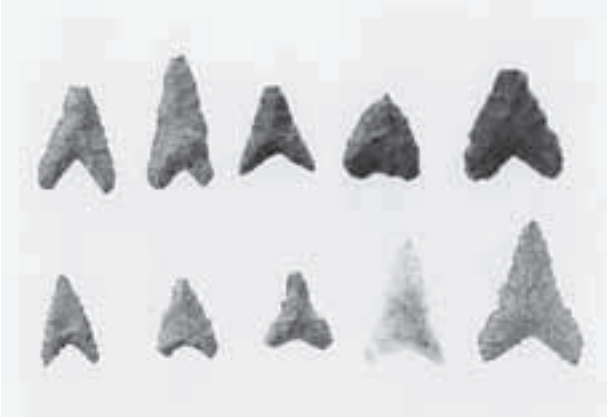
石鏃 1

石鏃 2

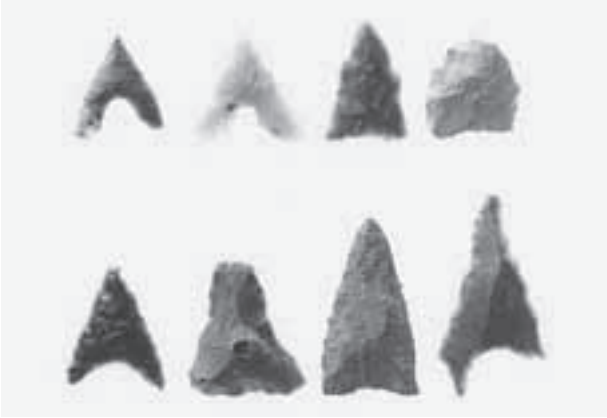


石鏃 3

石鏃 4



石鏃５

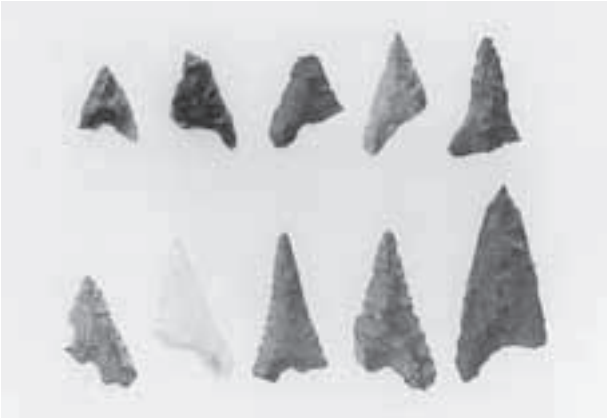


石鏃６

石鏃７

石鏃８

石鏃９



石鏃１０

石鏃１１

異形石器

石庖丁

打製石斧（横刃）

片刃石斧

磨製石斧（遺構内出土）

打製石斧（遺構内出土）

ＳＫ６８出土　打製石斧

円盤形石斧

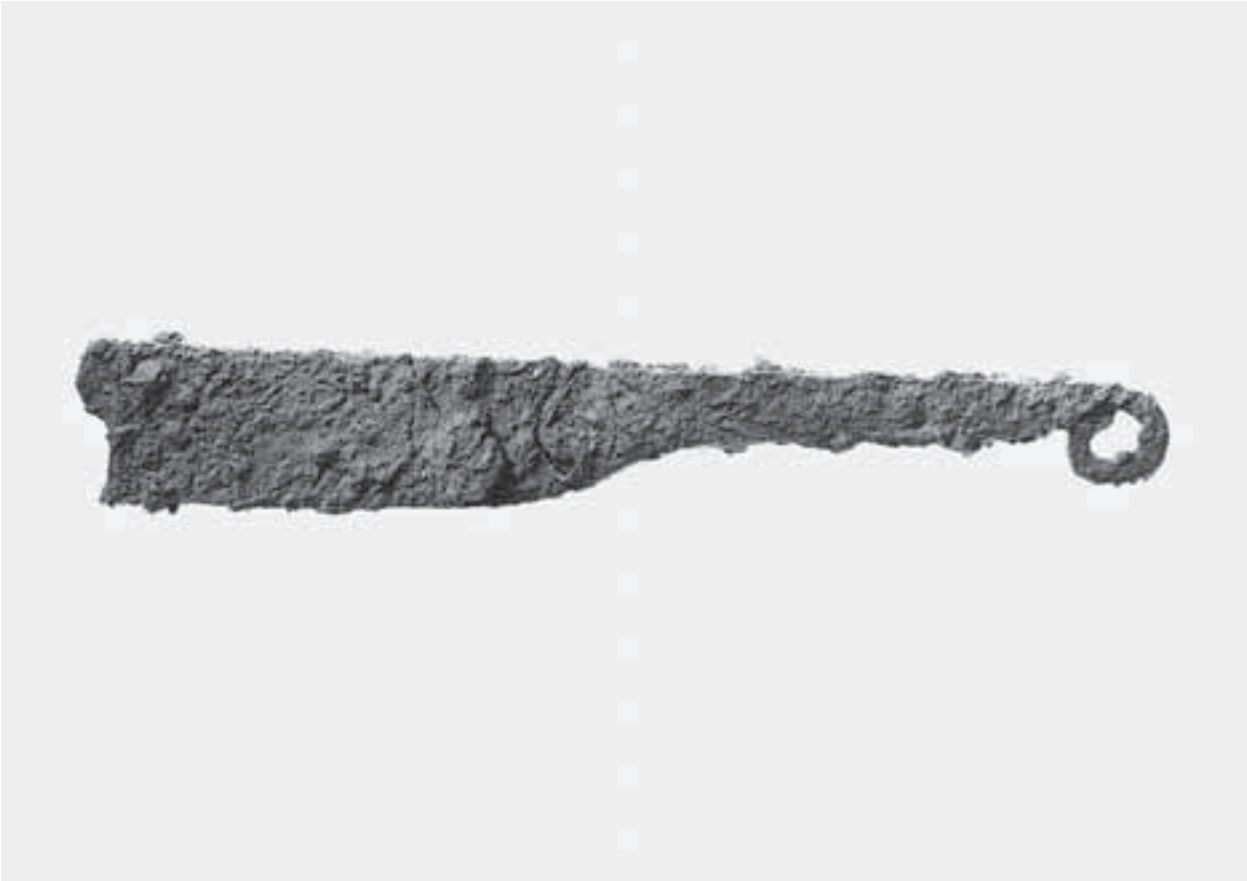
十字形石器・分銅形石器

ＳＩ８６・８１出土　鉄鏃

鉄鏃

手斧

ＳＩ９０出土　摘鎌



ＳＩ９０出土　素環頭刀子

古代

古代期においては、かまどをもつ竪穴建物跡を３軒、掘立柱建物跡６軒のほか、土坑、ピットを検出した。竪穴建物跡のかまどは北、東、西向きとそれぞれで、確認した中では同時期の切り合いは見られなかった。掘立柱建物跡は軸方向や規格の統一が図られていることに特徴がある。土坑には墓と考えられる遺構もあり、それらの位置は約１５m四方に納まり、当時の墓域として存在していたことを窺わせる結果であった。塔平遺跡は、居住用構造物を竪穴建物から掘立柱建物への移行した時期とも捉えることができ、遺物などからも概ね９世紀後半から１０世紀中頃の小規模集落、あるいは集落密集地から外れた地の建物跡群と考えられる。

近現代に関しては特に調査３区において調査区の南北、東西に走る溝が掘り込まれており、流路、区画割として使われていたと考えられ、当時は耕作地となっていたことが分かる。しかし溝内、撹乱内において検出した遺物の中に多くの瓦片が含まれていたことは、土山瓦の歴史を検証できる資料の１つとなった。中でも九曜紋の瓦片は、御用瓦を造った時代を物語る遺物である。

今回の報告は、塔平遺跡の一部の状況報告に過ぎないものである。今後の周辺での調査事例の増加を待ち、改めて検討したい。

【引用・参考文献】

益城町　１９９０『益城町史　通史編』
熊本県教育委員会編　１９９９『古閑北遺跡』
熊本県教育委員会編　１９９９『古閑北・梨木遺跡』
益城町教育委員会編　２０１０『小柳遺跡』
小林達夫　小川忠博　１９８９「縄文土器大観　１　草創期　早期　前期」
小林達夫　小川忠博　１９８９「縄文土器大観　２　中期Ⅰ」
小林達夫　小川忠博　１９８９「縄文土器大観　３　中期Ⅱ」
小林達夫　小川忠博　１９８９「縄文土器大観　４　後期　晩期　続縄文」
渡辺誠　１９９１「組織痕土器研究の諸問題」『交流の考古学』三島格会長古稀記念号
熊本県教育委員会編　１９８０『古保山・古閑・天城』
縄文研究会編　１９８４「九州の押型文土器　－地名表・拓影編－」
谷口康浩　１９８６　東京考古４「縄文時代「集石遺跡」に関する試論－関東・中部地方における早・前・中期の事例を中心として－」『東京考古談話会』
池田朋生　１９９８　肥後考古第１１号「縄文時代前期末～中期初頭における土器の展開－中九州を中心として」 肥後考古学会
帆足俊文　２００３「熊本県の集石遺構と炉穴」『第１３回九州縄文研究会　九州縄文時代の集石遺構と炉穴』 九州縄文研究会　宮崎考古学会
佐原真　１９９４「考古学選書６　斧の文化史」 東京大学出版会
熊本県教育委員会編　１９９２『二子塚』
熊本県教育委員会編　１９９６『蒲生・上の原遺跡』

熊本県教育委員会編　２００１　『石の本遺跡群Ⅱ』
熊本県教育委員会編　２００１　『石の本遺跡群Ⅲ』
熊本県教育委員会編　２００２　『石の本遺跡群Ⅴ』
熊本県教育委員会編　１９９９　『太郎迫遺跡・妙見遺跡』
熊本県教育委員会編　１９８９　『六地蔵遺跡Ⅰ』
熊本県教育委員会編　２０００　『長野遺跡』
橿原考古学研究所編　１９８８　「橿原考古学研究所論集　第八　創立５０周年記念」　吉川弘文館
網田龍生　１９９４　「肥後における回転台土師器の成立とその背景」『中近世土器の基礎研究』Ｘ　日本中世土器研究会
出合宏光　２０００　「九州南部における平安時代の土器・陶磁器」『中近世土器の基礎研究』ＸＶ　日本中世土器研究会
大宰府市教育委員会　２０００　『大宰府条坊跡ＸＶ　－陶磁器分類編－』
熊本県教育委員会編　１９７５　『久保遺跡－観音堂・櫛島遺跡－』
益城町　１９９０　『益城町史　資料・民俗編』
益城町教育委員会編　２００４　『杉の久保遺跡』
文化庁編　２０１０　『発掘調査のてびき』
大阪大学考古学研究室篠窯調査団　２０１２　『篠窯跡群大谷３号窯の研究　－大阪大学文学研究科考古学研究報告　第５冊』

あとがき

塔平遺跡１の発掘調査報告書が完成しました。

発掘調査から整理報告書作成にあたっては、多くの方々にお手伝いいただきました。

発掘調査では遺構、遺物の多さに圧倒され、当時の集落の大きさを垣間見ることができました。またこのような素晴らしい遺跡を調査させていただいたことを本当に光栄に思いました。

整理報告書作成時にも同じことが言えますが、これらの素晴らしい遺跡、成果にも関わらず、報告者の力不足でまとめが不十分に終わってしまったことを申し訳なく思うばかりです。ですが、何とか調査から整理報告書の作成まで行うことができましたのも皆様のおかげです。本当にありがとうございました。

最後に本文中で触れることができなかった実際の作業に携われた方々の名前を記して、感謝の意を表したいと思います。

発掘調査

石永光恵　井手春代　上村久子　大越貞子　緒方範子　長船信一　押方富江　桂　末子
桂　利之　神谷　守　川上　薫　河北ツユ子　川元恵子　古林喜久江　椎葉仁美　庄司修三
田島弘子　津崎次博　鶴本雄司　寺本眞富　永井健一　中村　保　中村　勝　中村怜子
西坂宗一郎　西本あけみ　橋本大樹　橋本恭代　長谷川亜紀　平井直美　樋脇逸子　福永美鈴
藤原英敏　堀部和憲　本田チヅ子　本田睦男　前田日出男　増村富貴子　松井昭子　松岡　洋
松下まち子　松本加代子　松本鐵郎　峯　元幸　宮本美樹　村上シナ子　村上親敏　守永美紀子
山崎知津子　山下民生　山下ルミ　吉川進一郎　吉住妙子　吉住徹明　和田洋一　渡邉あずさ
渡邊由佳利

整理報告書作成

浦田和恵　大川好美　小原有子　金川　希　河津洋伶　木村美和子　中島ひろみ　仲原加代子
中村公光子　西坂和美　山内洋子　山下千枝子

（以上、敬称略・五十音順）

<table>
<tr><th colspan="9">報告書抄録</th></tr>
<tr><td>ふりがな</td><td colspan="8">とうのひらいせき</td></tr>
<tr><td>書名</td><td colspan="8">塔平遺跡１</td></tr>
<tr><td>副書名</td><td colspan="8">国土交通省九州横断自動車道延岡線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査</td></tr>
<tr><td>シリーズ名</td><td colspan="8">熊本県文化財調査報告</td></tr>
<tr><td>シリーズ番号</td><td colspan="8">第２８５集</td></tr>
<tr><td>編著者名</td><td colspan="8">水上公誠、佐藤哲朗、坂井田亜耶</td></tr>
<tr><td>編集機関</td><td colspan="8">熊本県教育委員会</td></tr>
<tr><td>所在地</td><td colspan="8">〒８６２－８６０９　熊本県熊本市水前寺６丁目１８番１号
ＴＥＬ０９６－３８３－１１１１（代）</td></tr>
<tr><td>発行年月日</td><td colspan="8">２０１３年3月３１日</td></tr>
<tr><td rowspan="2">ふりがな
所収遺跡名</td><td rowspan="2">ふりがな
所在地</td><td colspan="2">コード</td><td rowspan="2">北緯</td><td rowspan="2">東経</td><td rowspan="2">発掘
期間</td><td rowspan="2">調査面積
㎡</td><td rowspan="2">発掘
原因</td></tr>
<tr><td>市町村</td><td>遺跡
番号</td></tr>
<tr><td>とうのひらいせき
塔 平遺跡</td><td>くまもとけん
熊本県
かみましきぐん
上益城郡
ましきまちおおあざ
益城町大字
おいけあざとうのひら
小池字塔平</td><td>４４３</td><td>０４５</td><td>32°
75′
10″</td><td>130°
79′
77″</td><td>20090512
～
20090827
20090715
～
20100320</td><td>１区
約 1,762 ㎡
３区
約 1,963 ㎡</td><td>記録
保存
調査</td></tr>
<tr><td>所収遺跡名</td><td>種別</td><td colspan="2">主な時代</td><td colspan="2">主な遺構</td><td colspan="2">主な遺物</td><td>特記
事項</td></tr>
<tr><td>塔平遺跡</td><td>集落</td><td colspan="2">旧石器時代
縄文時代
弥生時代
奈良時代
平安時代</td><td colspan="2">竪穴建物跡
掘立柱建物跡
土坑
墓
炉穴
小穴
溝状遺構</td><td colspan="2">旧石器
縄文土器　弥生土器
土師器　須恵器
陶磁器　瓦
鉄器　石器</td><td></td></tr>
<tr><td>要約</td><td colspan="8">塔平遺跡は九州横断自動車道延岡線建設工事に伴い記録保存を目的として発掘調査された遺跡である。
旧石器時代のものと推定される石器のほか、縄文時代早期の炉穴、集石を検出した。後～晩期は竪穴建物跡１４軒や埋設土器などを検出し、集落が形成されていたことが分かった。また、弥生時代後期の竪穴建物跡を２７軒、古代の竪穴建物跡３軒、掘立柱建物跡６軒のほか、墓と考えられる土坑なども検出しており、これらの時期にも集落が形成されていたことが分かった。古代は遺物などから概ね９～１０世紀ととらえ、この地には小規模集落、あるいは集落密集地から外れた建物跡群が存在していたと考えられる。</td></tr>
</table>

2013年３月31日　印刷
2013年３月31日　発行

熊本県文化財調査報告第２８５集
塔平遺跡１
－国土交通省九州横断自動車道延岡線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－

著作権所有　熊本市中央区水前寺６丁目18番１号
発　行　者　熊本県教育委員会
印　刷　者　熊本市中央区九品寺五丁目９番35号
白木メディア株式会社

発 行 者　：　熊本県教育委員会
所　　属　：　教育総務局文化課
発行年度　：　平成２４年度

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 285 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 塔平遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日